

---

# 仮面ライダーカブト 狂気宿す蜂

黒服

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーカブト 狂気宿す蜂

### 【Nコード】

N0300L

### 【作者名】

黒服

### 【あらすじ】

天の道を往く男がカブトの資格者として選ばれた。その日の夜、月下で狂気を心の底に宿した女性がザビーの資格者として選ばれた時、物語は始まる。

この小説を読むにあたって以下の事に注意してください。

- 1、地獄兄弟は出ません。矢車さんやホッパーライダーは登場しますが矢車さんがやさぐれる事はありませんのでご注意ください。
- 2、影山がヘタレません。この作品では影山にも頑張ってもらおうので、「ヘタレない影山は影山じゃない！」という方にはお勧めでき

ません。

## プロローグ（前書き）

どうも皆さん初めまして、黒服と申します。

以前から他の作者さん達の作品に感想を書いたりしていたのですが、この度思いきって自分でも小説を書いてみることにしました。正直に言って完全な素人ですので、いろいろと拙い部分もあるかもしれませんが、温かい目で最後まで見てくれたら幸いです。

## プロローグ

1999年、渋谷に落下した隕石により、その周辺地域は壊滅した。さらにそれと同時に、人間に擬態する地球外生命体？ワーム？が出現するようになった。

それから7年後???

「選ばれし者は、俺だ。」

天の道を往く男が太陽の力を手に入れたのとほぼ同じ時???

某所

「・・・ツ!!」

ソファで仮眠をとっていたのであろう女性が、息を荒くして跳ね起きた。

「ハアツ、ハアツ???クソツ！何時もの事ながら、なんて嫌な目覚めだ。」

女性はそう言っただけで汗で額に張り付いた髪を強引に掻き揚げ、ゆっくりと息を整えていく。その時、彼女のポケットから携帯の着信音が鳴り響く。彼女は若干億劫そうにしながらも携帯を手を取った。

「はい？」

「ワームが現れた。大した数ではないが場所が少々厄介だ。すぐに動けるのは君の部隊しかない、すぐに向かってくれ。場所は???

「了解、すぐに向かいます。」

そう言っただけで電話を切るとすぐさま別の番号に掛けた。

「戸高か？出動命令が入った。部隊の連中に出動準備をさせる。」

『了解です、隊長。』

そう言つて電話を切ると彼女      久我達      時雨      は部下達と合流  
するべく歩き出した。

この日、天の道を往く？太陽の神？が生まれると同時に、狂気を心に宿した？蜂？が生まれようとしていた。

## プロローグ（後書き）

自分は大学生なので、更新ははつきり言って不定期かつ遅いかもしれませんが、最後まで頑張っていくつもりですので応援してください。とうれしいです。次回は早速登場人物紹介などです。

## 登場人物紹介・その他（前書き）

オリキャラの紹介やその他の設定の紹介です。



## 登場人物紹介・その他

登場人物紹介：原作のカブトにさらに追加される人物や原作と少々設定を弄ったキャラ達です。

？久賀達くがたち 時雨しぐれ／仮面ライダーザビー：21歳？女

ZECT本部直轄部隊「シャドウ」第2番隊の隊長、女性でありながら高い戦闘力を有しており徒手空拳の腕前はZECT内部でも1、2を争うほど。男勝りな性格であり非常に荒々しい言動をとるが、部下や仲間に対しては荒々しさの中にも相手を思いやる気持ちは見られる。その性格から部下や仲間たちからは強く信頼されている。

過去にZECTにスカウトされて入隊した過去を持つが、それ以前のことについては謎が多く本人も口を閉ざしている。

また頻繁にモノを食べているところを見かけられるが、それに対して彼女が一向に太る気配を見せないのはZECT七不思議の一つと言われている。さらに極度の悪食であり口にできるものであれば大抵のものは食べてしまう。

外見は茶髪のセミロングにスレンダーな体型。

？戸高とだか 健吾けんご：28歳？男

久賀達の副官に当たる存在であり、臨時の際には彼が部隊の指揮を執る。物静かで表情が動かない寡黙な人物であるが、久賀達に対する信頼感は隊の中の誰よりもある。

？神田かんだ 亜紀あき：24歳？女

久賀達の部隊に所属する隊員で、彼女に勝るとも劣らない男勝りな性格。腕力に関しては並みの男性よりもあり、暇なときは懸垂をしていることもある。

? 播磨 はりま 勇次 ゆうじ : 25歳? 男

久賀達の部隊に所属する隊員で、隊の中でも比較的軽い性格。その性格が災いしてよく久賀達本人や戸高に扱かれている。

? 葛西 かさい 剛輝 こうき : 26歳? 男

久賀達の部隊に所属する隊員で、神田とともに部隊の砲手として新装備の?ガトリングガン?を装備して戦う。

? 檜和田 ひわだ 裕介 ゆうすけ : 22歳? 男

久我達の舞台に所属する隊員で、隊の中でも比較的大人しく礼儀も正しい。

? 矢車 やぐるま 想 そう / 仮面ライダーキックホッパー : 27歳? 男

久賀達と同じく「シャドウ」の隊長を務める人物であり、所属は第1番隊。「パーフェクトハーモニー(完全調和)」の精神を掲げており、部下達の事を第一に考えて行動している。久賀達との仲は非常に良好であるが本人達曰く「戦友」とのこと、しかしはたから見ていると二人のやりとりは「友人以上恋人未満」に見えるのとこと。

? 影山 かげやま 瞬 しゅん / 仮面ライダーパンチホッパー : 20歳? 男

「シャドウ」の第3番隊隊長。久賀達や矢車の後輩にあたり、基本的に二人のどちらかと行動を共にしていることが多い。若干押しが弱い性格であるため矢車などに言いくるめられたり、彼女の強引なやり方に振り回されたりしていることがよくあるが、二人の事を心から尊敬している。

その他の設定

? マスクドライバーシステム : この物語の中ではマスクドライバー

システムはそれぞれ世代ごとに区分けされています。

？第1世代？カブト、ガタツク、ダークカブト：最初に作られたライダーシステム。ライダーベルトにゼクターを収めて変身し、キャストオフによる2段変身を行える。

？第2世代？ザビー、ドレイク、サソード：ライダーブレスなどそれぞれのライダー固有のツールにゼクターを収めて変身する。それ以外に特に第1世代との変化はない。

？第3世代？キックホッパー、パンチホッパー：ゼクトバツクルにゼクターを収めて変身し、マスクドフォームなしでいきなりライダーフォームになる。防御力は落ちるが成虫ワーム相手に即座に対応できるのが特徴。

？第4世代？コーカサス、ヘラクレス、ケタロス：ザビーと同じくライダーブレスにゼクターを収めることで変身し、第3世代と同じく変身してそのままライダーフォームになれる。全ての基本的な必殺技が腕力を増大させる「ライダービート」に統一されているのも大きな特徴。

本作オリジナルの装備

？ガトリングガン：マシンガンブレード以上の連射力と威力を持っているが、取り回しが悪いため主に部隊の支援要員が持つことが多い。

？マシンガングレネード：マシンガンブレードのブレード部分がグレネードに換装されている、接近戦ができなくなったが代わりに遠距離での火力が上がった。グレネードの弾丸には煙幕弾や火炎弾など様々な弾丸を込めることが可能。

？アクティブセンサー：潜水艦のソナーを改良したようなもので、動く物体に反応する。動くものには何でも反応してしまうためワーム以外のものにも反応してしまうという欠点がある。ちなみに味方は特殊な信号を発しているため反応しない。

## 登場人物紹介・その他（後書き）

ガトリングガンは玩具「キャストオフライダー」のゼクトルーパーに付属してくるのを思い浮かべてくだされば分かりやすいかと思えます。

次回は早速ザビーが登場予定です。

## 第1話 月下の出会い（前書き）

どうも皆さん！というわけで早速第1話です。今回から早くもザビ  
ーが登場しますのでどうかお楽しみに。

## 第1話 月下の出会い

渋谷

月の光が照らす夜の渋谷を走る数台の車両があった。それらは一切列を乱すことなく黙々と目的地に向かっていく。

「ねえ、隊長？」

そんな車の一台に乗っている人物の一人――播磨 勇次――は車内の助手席に座っている女性――久賀達 時雨――に声をかけた。

「何だ？播磨。」

「今回の作戦、なんで俺らだけなんですか？此処に来れるチームなんてシャドウだけじゃなくても色々ある筈なのに……。」

「渋谷ってだけなら別にほかのチームでも良かったんだろうけどな、場所がエリアZに近い。連中が何を考えてるのか知らないがこんなところに来るってことは何か考えがあるんだろう、そんなとき不測の事態にも対応できるあたしらシャドウの方が確実なのさ。」

そこで会話を区切ると、運転席にいた男性――戸高 健吾――が口を開いた。

「そういえば、ワームのクロックアップに対抗するための新兵器、あれってどうなってるんです？」

「ああ、【マスクドライバーシステム】な。あれなら確か【カブト】がもう完成して、今は資格者になる人物を探してるはずだ。確か2号ライダーの【ザビー】も完成してるはずだと思うけどな。」

「やっぱり隊長がなるんですか？」

「どうかな？マスクドライバーシステムはシステムの方が資格者を選ぶみたいだから、あたしがなれるかどうかはまだわからないな。」  
そう言いつつ久賀達は資料で見たマスクドライバーシステムを頭に思い浮かべる。

（ま、あんなのが有ろうが無かるうが、あたしのすることは変わらないんだけど。）

そんな会話をしていると部隊を乗せた車両は目的地に到着した。場所は廃墟の街中、近くには地下鉄の入り口も見える。そんな街中の道のと真ん中に車両は止まっていった。車両からは次々と黒いボディーアーマーを纏った兵士・ゼクトルパー・シャドゥーが降りてきて、小隊ごとに整列していく。全員が整列した時を見計らって久賀達が降りて全員の前に立つ。

「よし、全員装備の点検もできてるな。今回の任務だが、エリアZ近くに出現したと思われるワームの討伐だ。場所が場所だけに成虫ワームの存在も考えられる、全員警戒しつつ行動しろ。」

「ハッ！」「ハッ！」

「先発隊はB小隊だ。神田、先頭を行け。あたしらA小隊がその後に続く。C小隊、少し離れた位置から付いてこい、後方に警戒しつつな。」

そう隊員達に指示を出すと隊員達は次々とそれぞれの持ち場についていった。先頭に立つゼクトルパー・神田 亜紀ーは最新装備のガトリングガンを構えつつ前に進んでいく。そのすぐ後ろにB小隊、A小隊と続いていき、最後尾にC小隊がついていく。そしてそのまま月夜の廃墟を進んでいった。

「そろそろだな、播磨、アクティブセンサーを起動させる。」  
「了解です隊長。」

そう言つて播磨は腰から下げていた少し大きめの箱のようなもの―アクティブセンサー―を起動させる。しばらくは特に何の反応もなかったのだが……。

「お！隊長、反応有りです。ここから約30m位離れたところに反応が二つ、恐らくワームでしょう。」

「よし、ここからさらに警戒しつつ進むぞ。」

突然センサーから電子音が鳴り響き、それと同時にセンサー上に光点が浮かび上がる。久賀達の部隊はさらに警戒しつつ進むと反応がさらに一つ追加された。

「反応が増えました！新たに一つです。」

「場所は？」

「さっきの連中とほとんど同じところですが、距離は大体25mといったところです。このまま行けば…お？また反応が増え…あれ？」

「どうした播磨？」

「は、反応がどんどん増えていきます！おいおい、冗談だろう…。」

そう言う播磨のセンサーには動いているものを示す光点がどんどん増えていった。

「播磨！場所はどくなってる？」

「そこいら中にいます！？」

「数は？」



「シグナルが重なり合ってるから詳しい数は分かりませんが、少なくとも10匹以上はいるものと思われます！」

「C小隊！何か見えるか!？」

『いえ、こちらからは何も。』

そうしている間にも反応は徐々に近づいてくる。

「一番近いのが正面にいる奴、距離はあと15m！」

「B小隊、正面に警戒しろ！A小隊は正面に警戒しつつ全方位を、

C小隊はA小隊と合流！」

即座にB小隊は前方に銃口を向け、C小隊がA小隊の後方についた。

「正面の連中、距離約10m・・・9m・・・8m。」

播磨がフォームとの距離をカウントすることに全員の緊張が増していく。

「7m・・・6m・・・5m。」

「ちよつと待て、5mといったらもう目の前の筈だぞ？」

「でも確かにセンサーにはそう出てる!？」

「おまえのが壊れてるんじゃないのか？檜和田、お前のセンサーで確認しろ。」

「了解です!・・・自分のセンサーにも同じように出てます!？」

「じゃあ一体どうい・・・。」

彼らの5m先には月に照らされた道があるだけである、いくらなんでもこれはおかしいと神田が抗議の声をあげるが播磨のセンサーには依然としてシグナルが点滅している。戸高がもう一人のセンサーを持っていく隊員――檜和田 裕介――に確認させるが、結果は同

じ。此処は特に屋根になる様なものもない、空を飛ぶタイプの成虫でもない限りは気付かれずに近付くなど出来ない筈だ。チラリと上を見れば相変わらず場違いにも美しい月の輝く夜空が見える。一瞬姿を消せるタイプかとも思ったがこれもおかしい、蛹ワームには特にこれといった特徴はない。成虫にならそう言った能力を持った奴もいるかもしれないがこれだけの数の成虫が行動を共にしているというのもどこかおかしい。とすると一体どこに……。

そこまで考えて久賀達はふと気付いた、自分達は今どこにいる？ここは渋谷、今でこそ廃墟となっているが7年以上前は多くの道行く人で賑わっていただろう。特に休日などは多くの人が車や地下鉄などで来て……。

「ッ！下だ！」

彼女がそう言った瞬間、辺りの地面から無数のワームが出現した。どうやら地下鉄を通ってきたらしい。彼女は即座に応戦しつつ部下達に指示を出す。

「総員撤退する！C小隊は後方の敵にありつたけの弾をブチ込め！A小隊は援護、B小隊はあたと殿で追ってくる連中の足止めだ！」

「ぶっ殺せえ！」

彼女の指示を受けた途端、神田が勇ましく声を上げながら周囲のワームにガトリングガンを叩き込んでいく。それに続くように他の者たちも攻撃しつつ後退していくが、如何せん多勢に無勢、次々とワームの接近を許してしまう。

「うわぁー！」

「チクシヨー、来るな！来るなー！？」

「た、隊長ー！？」

部下達が次々とワームの攻撃で倒されていくのを見つつ、久賀達はワームの包囲が薄いところを見つけ、そこに重点的に攻撃を加えていく。そして遂に包囲に穴をあけると部下達をそこに向かわせた。

「軽傷の者は動けない者を連れてあそこから撤退、戦える奴は敵の足止めをするんだ！」

「了解！」

「まさか待ち伏せされるとはな、本部！本部応答してくれ！こちらシャドウ第2番隊長の久賀達、ワームからの奇襲に遭った。至急応援を！！！」

そう言いつつ彼女は部下達とワームを攻撃していく。如何にワームが相手と言えど彼女達も訓練を積んだエリート部隊、半分近くのワームを倒していった。それでもワームはまだ5匹以上、シャドウは戦えるものが彼女を含めて8人ほどしかいなかった。

「クソツ、これならどうだ！」

近くに落ちていた、恐らく他の隊員が落としたのであろうマシンガンブレードを手に取ると片手に一丁ずつ持ったマシンガンブレードで一体のワームに集中攻撃を加えていく。それでもワームを倒すことはできずおまけに銃弾が底をついてしまう。それでも彼女は諦めることなくブレードを展開するとワームに対して怒涛の連続攻撃を繰り出した。これには流石のワームも堪えたのか、それとも先程の銃撃ですでに限界だったのか一体のワームが爆散する。すかさず他のワームにも攻撃するが、ブレードを振り落ろした瞬間当たった部分から刃が折れてしまう。

「チイツ、うわぁッ！！・・・ええい、クソツ！」

ブレードが折れた一瞬の隙を突いてワームに弾き飛ばされる久賀達さらに悪いことにそれが部下達の動揺を誘い、おまけに攻撃の要であった神田のガトリングガンの弾も尽きた。その瞬間ワーム達は彼女の部下達に殺到していく。

「う、うわぁー!? 隊長ー!」

「畜生!」

部下達の悲鳴を聞いて即座に起き上がると無手でワームに殴りかかる、その気迫に流石のワームも一瞬怯んだ。しかし所詮人間の素手による攻撃、大した効果もあるはずなくあっけなく振り払われてしまふ。

「ぐ、くそぉ (こんな、こんなところであたしは……。こいつらも守れずに!)」

部下達が一人、また一人倒れていくのを見て久賀達が絶望しかけたその時……

目の前に何かが落ちてきた。

「こ、これは……。?」

目の前に落ちてきたそれーライダーブレスーを手に取った瞬間、何かの気配を感じて上を見る。するとそこには……。

数分前 エリアZ内・マスクドライバーシステム開発施設

「どうだ？ザビーの様子は。」

「はい、問題ありません。システムとしては既に完成しており、あとは資格者を探し出すだけです。」

「そうか、カブトがどこの馬の骨とも知れん者に持って行かれた以上、このザビーは何としてでもZECTの者に資格者となってもらわなければ。」

「でもマスクドライダーシステムはゼクターが自分で資格者を探し出すんですよ？もし相手がZECT以外の者だった場合……。」

「その時はその者をZECTにスカウトするらしい。従えばそれによし、従わない場合は抹殺して次の資格者を探すとのことだ。」

白衣を着た男達がそんな会話をしていると、机の上の装置に置いてあった大きな機械的な蜂——ザビーゼクター——の目が光った。

「な、何だ？」

一人がそう言った瞬間、ザビーゼクターは飛び立ち、近くに置いてあったライダーブレスを持ってどこかへと飛んでいってしまった。

「おい！？一体どこへ行ったんだ！？」

「すぐに追いかけるんだ！」

そう言うつと男達は施設にいるゼクトルーパー達を伴ってザビーゼクターを追いかけ始めた。

## 渋谷内・戦闘区域

久賀達は混乱していた、何故これがここにいるのか。

(あれは、確か・・・ザビーゼクター。でも、なんで・・・?)

シャドウの隊長はライダーになる可能性が高いからと、開発途中のモノも含めて全てのライダーシステムの資料には目を通してある。ザビーゼクターに関しても資料があったので存在は知っていたし、既に完成していることも知っていた。だが、何故それが今、目の前にいるのかは理解できなかった。自分とザビーゼクターは完全な初対面である。ライダーブレスだって今初めて手に取った、それなのになぜ・・・。

・・・ッ!・・・ッ!!

「ッ!!」

その時、ザビーゼクターが何かを急かすように上下に動いた。当然のことながら彼女にはゼクターが何を言ってるのかは理解できなかった、だが何を言いたいのかは理解できた。“戦え”と・・・そう言っているのだ。

「分かったよ、そこまで言うならやってやろうじゃねえか!」

そう言うとライダーブレスを左手に装着して、ゼクターに向けて手をかざす。するとザビーゼクターは待ってましたと言わんばかりにその手に収まった。

「変身!」

H e n s h i n

掛け声をかけてゼクターをブレスに収めると、ゼクターから電子音声と共に彼女の全身を銀色に輝く装甲ーマスクドアーマーーが覆っていく。

「た、隊長！」

『――!?!?!?』

その際に放たれた光に、シャドウもワームも戦闘を中断して久賀達の方を見る。するとそこには全身を【ヒビイロカネ】で出来た装甲に身を包んだ戦士【仮面ライダーザビー】がいた。

「ハッ！」

ワーム達の注意が自分に向いたのを見た瞬間、ザビーは手近に居たワームに殴りかかる。体重を乗せたパンチにワームはいとも簡単に弾き飛ばされる。

「ハアツ、セイツ、デヤア！」

その後も連続でパンチやキックを繰り返していき、あっという間に一体に蛹ワームを葬ってしまう。それを見た他のワーム達も、ザビーが脅威だと気付いたのかザビーに群がっていくが彼女はワームからの攻撃をモノともせず果敢に反撃していく。パワーにものを言わせてワームを攻撃していき次々とワームを倒していく、そしてとうとう残りは1体だけになってしまった。

「さあ、攻守交代だ。さっきはよくもやってくれたな、今度はこっちの番だ！」

『――!?!?!』

ザビーがワームを挑発するが、ワームとて黙ってやられたりはしない。突然ワームの体から煙が上がり、皮膚の色が赤茶けていくと剥がれ落ちていった。そこには成虫となったワームーアラクネワーム

ムーがいた。アラクネワームは完全に脱皮し終わると一瞬で姿を消した。

「ッー！」

それを見た瞬間ザビーは即座に防御態勢を取った、その瞬間何かに弾かれるようにザビーの体が宙を舞う。

「隊長！」

「グッ！」

ザビーが飛ばされるのを見た戸高が声を上げるが、ザビーは受け身を取ってダメージを軽減する。すると目の前にアラクネワームが再び姿を現した。

これこそが【クロックアップ】、成虫ワームのみが持つこの超高速移動術にZECTは散々悩まされてきた。目の前に現れたワームは倒れているザビーを見下ろした、その姿はザビーを嘲っているようにも見える。

「馬鹿にすんなよ、こっちにゃお前達に対抗する手段があるんだ。」

そういうとザビーはゼクターの羽根を180°起こした、すると全身のアーマーが浮き上がっていく。

「キャストオフ！」

Cast off

そしてザビーが掛け声を上げながらゼクターを180°回転させて前後を入れ替えると、マスクドアーマーが弾け飛びザビーの真の姿が表れる。



## Change Wasp

これこそがザビーの真の姿、【仮面ライダーザビー・ライダーフォーム】である。アラクネワームはその姿を見た瞬間即座に再びクロックアップするが、ザビーは慌てずに腰のバツクルの脇についているスイッチに手を伸ばす。

「クロックアップ！」

Clock up

そう言つてザビーがバツクル脇のスイッチートレーススイッチーをスライドさせると、ザビーもアラクネワームと同じ超高速空間に入る。ワームはザビーに殴りかかるが、ザビーは先ほどとは違つしなやかな動きでアラクネワームの攻撃をかわし、捌くとパンチャキックを叩き込んでいく。

「フツ、セイツ、ハツ！」

ザビーの攻撃に弾き飛ばされたアラクネワームは、一気に勝負をかけるためにザビーに突撃していく。ザビーはそれに対してやや背中を向けるように立つと、ゼクター上部のスイッチに手を伸ばした。

「ライダーステイング。」

Rider Stinging

スイッチを押すとゼクターから電子音声と共に、タキオン粒子がゼクター先端のゼクターニードルにチャージアップされていく。十分にチャージアップされた頃にアラクネワームの方も攻撃の射程に入ったのか腕を振り上げると、ザビーも同時に腰を落として体を捻り

つつ必殺の一撃をアラクネワームに叩き込む。

「ハアツ！」

『- -!!???』

Clock over

アラクネワームの攻撃がザビーの頭上を通り過ぎると同時に炸裂したライダーステイングを受けて、アラクネワームは苦しげな叫び声を上げて爆散する。それと同時にクロックアップも解け、後に残ったのは攻撃の姿勢で止まったザビーだけだった。

「ふう……。。」

「隊長、だいじょうぶですか！」

「ん？ああ、大丈夫だ。お前たちこそ、大丈夫か？」

「はい、損害は重症3名、軽傷10名。死亡……。2名です。」

「そうか……。。」

ようやく構えを解いて立ち上がると部下達がお互いに肩を貸し合いながらザビーに近づいていく、ザビーは部下達に無事を知らせると即座に損害の報告を受ける。結果は二人が死んだというもので、彼女を含めて無傷の者はいないというものだった。

「そ、それにしてもそれがマスクドライバーシステムですか？凄いですね、それ。」

「ああ、あたしもこれほどとは思わなかったよ。大したもんだ。」

重たくなつた空気を変えるためか播磨が話題を変えた、久賀達はそれに気付きながらも素直に自分の感想を口にする。実際ここまで凄い力だとは思わなかったのである。

その時、彼女達に近づく気配があった。

「い、いたぞ！」

「ザビーが！？い、一体誰が？」

「あん？」

そこには数名のゼクトルーパーと白衣を着た男が居た。どうやらまだ夜は終わりそうもない。

某所

「総帥、ザビーゼクターが資格者の下へ行き、ザビーが誕生したそうです。」

「そうか、ついに……。」

とあるビルの最上階、そこに椅子に座った壮年の男性と眼鏡をかけた男性がいた。眼鏡をかけた方の男性は先程受けた報告を目の前の男性に報告した。

「しかし、一体どういうことでしょうか？ザビーゼクターはあったこともない人物の下へと自分で、しかもライダーブレスを持って向かったとのことですが……。」

「君は、運命を信じるかね？」

「は？」

「運命は常に必然で、しかも残酷だ。時に人に地獄のような試練を与え、将来の糧とさせる。今と言う栄光の結果を持たせるために、過去と言う凄惨な試練を……。」

「それは……一体……。」

眼鏡をかけた男性はそう尋ねるが、壮年の男性は窓の外……月が

照らす夜の街を見たまま何も答えなかった。

## 第1話 月下の出会い（後書き）

というわけで第1話でした。今回の話とはある映画を意識して作ってみたんですがわかりましたでしょうか？分かった人は感想の方で書いてくださるとうれしいです。  
次回もお楽しみに。それでは。

## 第2話 相棒（前書き）

どうも、黒服です。早くも第2話を投稿することができました。今回は原作にも出たあのキャラが登場します。

## 第2話 相棒

ZECT本部

あの後久賀達は白衣を着た男達からの質問攻めに遭った、ゼクターが勝手に動いて資格者として選んだのが彼女だったのであるから当然と言えば当然である。対する久賀達の方は、へとへとになりながらもそれに答えていった。正直な話戦闘終了後で良かったであり、部下たち共々ボロボロだったのですぐさま帰ってしまいたかったのだがシャドウの隊長としての立場と、ZECTの最高機密の一つであるマスクドライダーシステムを状況が状況だったとはいえ無断で使用してしまったことへの負い目もあったため、問答無用で帰るという選択肢を選ぶわけにもいかず質問に答えていった。彼女の下に部下から連絡があつたのはそんな時である。

「本部に？」

「はい、隊長はすぐに本部に来るようにとのことです。」

本部への出頭命令となればそれには従わねばならない。彼女は着いた先で何を言われるのかを半ば予想してすでにうんざりしている、大方先程と同じようなことを聞かれるのだろうと。幸いなのは部下達には帰る許可が下りたことだ。部下達は若干すまなそうにしていたが自分達もボロボロであり、また久賀達からも命令という形で帰るように言われたのでそれに従うことにした。

それがつい数分前、そして今彼女の目の前には総帥の側近である眼鏡をかけた男性ー三島 正人ーがいる。その彼の口から出たのは予想の斜め上をいくことだった。

「私が・・・ザビーに？」

「そうだ、君にはこのままザビーの資格者を務めてもらう。」

こう言われた時は素直に驚いたものである。此処に来た時は、ザビーゼクターを手に入れた経緯について根掘り葉掘り聞かれるだろうと思っていた。もしかしたらライダーブレスだけ取り上げられて帰らされるだろうとも思っていただけに、このままザビーの資格者になれなどと言われるとは予想外だった。

「しかし・・・よろしいんですか？このまま私がザビーになっても。」

「構わん、どの道シャドウの隊長にはライダーになってもらうつもりだった。むしろこの方がちょうどいい。君には今後ザビーとしてますますワーム討伐に力を入れてもらう、期待しているぞ。」

「ハッ！」

そういうと三島はもう用はないとばかりに久賀達に背を向け、久賀達もそれを見ると一礼をして即座にその場から立ち去って行った。

「やれやれ、一体何がどうなってるんだか・・・。」

ZECT本部内の廊下を歩きながら、久賀達はそうぼやく。実際今日は彼女にとって訳が分からないことが多すぎた。しかし同時に、このままザビーとして戦っていきけると聞いてホッとしている自分があることに気付く。あの時、自分や仲間達の危機に現れて戦うための力を与えてくれたザビーゼクターを、彼女は気に入っていた。もし許されるならこのままザビーとして戦いたい、とも考えていただけにザビーとして戦い続けることができるようになったというのは素直に嬉しいものがある。

「さて、とりあえずは「久賀達さん！」って？」



とりあえずどこか適当なところで食事でもしてーちなみに今の時刻は深夜2時ー自宅に帰ってシャワーでも浴びてさっさと寝てしまおうかと考えていた久賀達の下に二人の男性が近付いてくる。

「影山?・・・と矢車、お前らこんな所で何してんだ?」

「何してんだじゃない、お前の部隊がワームの群れに襲われたって聞いて、大急ぎで部隊の準備をしてたんだぞ。」

「そうですね!それなのにいきなり『もう事は終わったから出勤する必要はない。』とか言われたんですからビックリしましたよ。」

「あゝ、いやその、悪かった。」

そう言つて久賀達は二人の男性ー矢車 想と影山 瞬ーに頭を下げた。この二人は久賀達と同じくシャドウの隊長を務める人物であり、久賀達を合わせた三人でZECT内部で『3隊長』と呼ばれていた。

「で、一体何があつたんだ?お前がこうしてここにいるってことはワームは倒したんだろ?お前が応援を要請するほどの相手だったのに何で増援が行く前に終わったんだ?」

「あゝっと、それについて説明するのは良いんだけど、とりあえず明日でいいか?正直もうくたくたのボロボロでさあ。」

「そう言えば、結構危なかつたんでしたね。」

「ま、良いだろう。明日キツチリ説明してもらつぞ?」

そついうと二人はもと来た道に戻つていった。

「さて、あたしも帰るかなつと。」

そつして久賀達も再び足を進めていった、向かう先はとにかく・・・

今なお自己主張を続けている腹の虫を収めるために24時間営業のファミレスかどこかである。

翌日・東京タワー近く

私服を着た久賀達は昨夜矢車達とした約束を守るために、予め決めておいた集合場所に来ていた。そこに矢車と影山の二人が私服姿でやってきた。

「よお。」

「すみません、お待たせしたようで。」

「いや、大して待つぢゃいない。それじゃ場所を移すか？」

そういうと三人は歩き出す。向かった場所は・・・定食屋だった。

「何でここなんだ？」

「ここ、最近見つけたんだけど安くて美味くて、おまけに腹にも溜まるしお代わり自由だから結構いい店なんだよ。所謂隠れた名店って奴だな。」

「そんな事を聞いてるんじゃない、曲がりなりにも組織の機密情報を口にするのに何でこんな公共の場所なのかと聞いているんだが・・・」

「その点なら心配ないよ。周り見てみる、今言った通りここには知ってる奴しか来ないから人なんてほとんどいない。おまけに今いる客もテレビの方見てるから、ちょっと声をひそめれば聞こえやしない。」

「店の人はどうなるんです？」

「何度か話したけどなかなか口の堅い人でな、特に何も言わなくても早々口外したりはしないよ。へたに組織の事を知ってる人間

が耳にするよりは、こっちの方が安全なのさ。何せ話の内容が理解できないんだから。」

そこまで言うとは議論はこれでお終いだとも言うようにメニューに目を通し始める。矢車達も一理ある彼女の言い分と、案外頑固な彼女の性格を考えて素直にメニューから何にするか選んだ。

「俺、このトンカツ定食で。」

「俺はシヨウガ焼き定食。」

「あたしサンマ定食、大盛りでね。」

「ハイよ、何時もありがとね!」

そう言うとは如何にも定食屋のおばちゃんと言った感じの女性が厨房の方へ引っ込んでいった。

「何時もって、そんなに頻繁に来てるんですか?」

「言っただろ?結構美味いって。最近はよくここに来てるんだよ。」

「お前らしいな・・・。」

そう言うって苦笑しつつ水を飲むと、矢車がいよいよ本題を切り出した。

「昨日一体何があった?どうして増援が来る前にワームを討伐することができたんだ?」

「・・・ザビーゼクターって知ってるだろ?」

「マスクライダーシステムの一つですよ、それがどうしたんです?」

「昨日戦闘中に、それがあたしを資格者として選んだ。」

その言葉に矢車と影山が若干目を見開く、この二人もシャドウの隊

長と言うことで当然のことながら全てのライダーシステムの資料に目を通していたのである。

「まさか、そんな!」

「以前ザビーゼクターと会ったことでもあるのか?」

「いや、それは無い。あの時確かにあたしとザビーゼクターは初対面だった、しかもあの時あいつは自分からライダーブレスを持ってきてあたしに戦うよう言ったんだ。」

その言葉に影山はさらに驚き、矢車は腕を組んで考え込む。確かにゼクターは自らの意思で資格者を選ぶ、しかしそれが初対面、しかも自分から変身ツールまで持っていくとは……。そこまで考えた時に厨房の方から女性が顔を出した。

「ハイよ、トンカツ定食にショウガ焼き定食、サンマ定食大盛りね。」

「さて、とりあえず話はここで中断して食べるか。」

「……そうだな。」

そう言つて矢車と影山の二人は割りばしを取り出して各々の注文した物を食べ始める、するとあまりのおいしさに思わず目を見開いた。

「う、美味しい!」

「確かに美味しい、お前が頻繁に来るのも頷ける。」

「だろう。」

そう満足そうに言つと久賀達もサンマに箸を伸ばし……

頭から骨ごとかぶりついた。

「相変わらず凄まじい食べ方だな。」

「いつも思いますが、骨とか刺さんないんですかね？」

「おばちゃん、お代り大盛りで。」

「早ッ！」

「しかもまた大盛りか。」

矢車はやれやれとため息をつきつつ、シヨウガ焼き定食に箸を伸ばす。彼自身も料理を嗜んでいるため、この味の秘密を知ろうと少し必死だったりする。影山も久賀達の何時ものごとくの食べっぷりに圧倒されつつも食事を再開した。

「いや、食った食った。」

「食いすぎだ、全く。」

結局あの後久賀達はさらにもう一度お代りをして、合計三杯分大盛りのサンマ定食を食べたことになる。近くでそれを見た二人はそれだけでも腹が膨れる思いだった。

「それで、そのマスクドライダーシステムだが・・・大丈夫なのか？」

「ああ、特に問題はないよ。むしろしっくりくる感じだし。」

「しっくりくる？」

「なんて言うか・・・もともとこうなるのが自然だったみたいない感じ。」

「いい着心地だったことか？」

「そう言うのとは少し違うけど・・・、何だったらいいのかわかんない。」

実際初めてザビーになった時は戦闘中ということもあり極度の興奮状態だったのでイマイチはつきりしないところもあるのだが、あの

時は驚くほどしつくりきていた筈である。戦っている最中は随分いい着心地だ程度に考えていたものだが、今になって考えてみるとそう言うのとは少し違う気もする。一体あれはどういうことだったのか……。

一先ず何時までもここにいるのも店側の迷惑になるだろうと考えて、店を後にする三人。とりあえず特に当てもなく雑談などをしながら街を歩いていくと……。

「ん？」

「こ、これが!？」

「ザビーゼクター……。」

突如三人の目の前にザビーゼクターが表れた、矢車と影山の二人は突然の事態に驚いているが久賀達だけはザビーゼクターが何を言いたいのか気付いた。

「どうやら仕事みたいだな……、行くぞ!」

そういうと久賀達はザビーゼクターが導くままに走りだし、残った二人も慌ててあとを追う。その先にいたのは……ちょうど成虫のワームが一人の男性を殺そうとしているところだった。

「させるか!」

そう言いつつ久賀達がワームに飛び蹴りを食らわし、その隙をついて矢車と影山が襲われていた男性を立ちあがらせて逃がした。後に残ったのは久賀達ら三人と成虫ワームーアラクネワーム・ルポアラーだった。

「さて、早速お前らにもザビーを見せることができそうだ。」

そう言うと久賀達は左手を顔の横まであげた、すると露わになったライダーブレスにザビーゼクターが自ら収まった。ゼクターがブレスに収まったのを確認すると手首を捻りゼクターがついてる方を前に向け、手をかけた。

「変身！」

H e n s h i n

掛け声をかけると同時にゼクターの向きを腕と水平の方向にずらす、するとゼクターから電子音が響き全身をマスクドアーマーが覆っていき、仮面ライダーザビー・マスクドフォームへと変身する。

「ほう……。」

「これが……ザビー……。」

銀色に輝く装甲に覆われたザビーを見て、二人は感嘆の声を漏らす。それを特に気にもせず、ザビーはワームへと殴りかかって言った。ワームの方も反撃するが、相手はヒビロカネで出来たアーマーに身を包んだマスクドフォーム。ちよつとやそつとの攻撃ではビクともしない。

「どうした、もう終わりか？」

ワームを弾き飛ばしたところでザビーがワームに対して挑発じみた言葉を投げかける、対するワームは何とか立ち上がるとクロックアップでその場からの退避を行おうとする。

「逃がすかよ、キャストオフ！」

C a s t   o f f   C h a n g e   W a s p

「クロックアップ！」

C l o c k u p

ワームがクロックアップするのを見たザビーは即座にライダーフォームになり、クロックアップで追いかけ始めた。

ワームとザビーは全てが止まって見えるほどのスローモーションな空間を駆け抜けた、時に壁を三角飛びで翻弄し、時に走行中の車の上で殴り合った。しかし先程の攻防ですでにワームの方がボロボロになっており、どちらが勝つかは明白だった。ワームの方はなおも逃げようとするが、それよりも早くザビーがゼクター上部のスイッチに手を伸ばす方が早かった。

「ライダーステイング！」

R i d e r S t i n g

ゼクターから電子音声が鳴り響くと同時にザビーはワームに向かって飛びかかり、逃げるワームが一瞬ザビーの方に振り向いた瞬間ワームに対してライダーステイングが炸裂した。全てを刺し貫く一撃に、ワームは断末魔の叫びを上げながら爆散していった。

C l o c k o v e r

「ま、こんなもんか。」

そう言うと同時にゼクターがブレスから外れて変身が解ける、そこにいるのは特に疲れた様子も見せない久賀達の姿とその周りを飛び回るザビーゼクターだけだった。

「ちょっとは慣れてきたってところかな、まだまだ訓練が必要かもだけど。」



そう言いながらザビーゼクターに手をかざして手に留まらせると、ザビーゼクターを軽く撫でた。ザビーゼクターはそれに嬉しそうに目を光らせた。

「フフツ、うん？」

そんなザビーゼクターの仕草に思わず微笑んでいると不意に彼女の携帯が鳴り響く、ディスプレイには矢車とでている。

「なんだ？ 矢車……。」

『お前今どこにいる？ いきなりクロックアップで姿を消すもんだから少し焦ったぞ。』

「ああ、悪い悪い。今大体倉庫街だな、合流するか？」

『いや、いい。とりあえずマススクドライダーシステムがどんなものかは分かったしな、ワームは倒したのか？』

「誰に向かって言ってるんだ、勿論倒したにきまつてるだろう。」

『それを聞いて安心したよ、とりあえず今日はこちらでお開きにしよう。またな。』

「ああ、それじゃあ。」

そう言って電話を切った。

「さて、これから忙しくなりそうだ。まあ、やれるところまでやってみるか、相棒。」

——！！

自らに気合を入れるかのように言うと、ザビーゼクターにもそう告げる。するとザビーゼクターもそれに答えるように電子音声を上げながら宙を舞った。

## 夜・住宅街

その日の夜、住宅街を進んでいく一人の女性がいた。歳は10代後半かそこら、茶髪にボーイッシュな髪形の女性だった。長袖のコートの左手側からは女性特有の細く滑らかな手がのぞいているが、右手側からは有る筈の手が見えず女性が歩くのに合わせて揺れるだけだった。

「姉ちゃん……。」

女性のそんな呟きは、夜の闇に包まれて誰にも聞こえることはなかった。

## 第2話 相棒（後書き）

というわけで第2話でした。久賀達は大食いです。しかもかなりの悪食で龍騎に登場した浅倉並みに何でも口に入れます。ストーリーのどこかで浅倉を彷彿とさせるシーンを入れることもあるかもしれませんが。

今回は久賀達の過去に関わるストーリーです。お楽しみに。

### 第3話 過去と妹（前書き）

どうも皆さん、今回第3話を投稿します。今回は前回予告した通り久賀達の過去に関わるストーリーです。原作カブトの第4話話もとにして作っています。

### 第3話 過去と妹

ZECT本部内・訓練施設

矢車達にザビーの力を見せてから1週間後、久賀達は部下達と共に訓練に励んでいた、先日の出勤で2名の隊員を失ったがそれを悔やんでばかりではいけないとの判断と、純粹にザビーの力を完全にモノにするためである。久賀達を含めた全員が何時もの黒いボディアーマーに身を包み、射撃や徒手空拳の訓練を行っている。

「よし、来い！」

「いきますよ、隊長！」

そう言つて久賀達は播磨と徒手空拳による模擬戦を行っていた。播磨は次々と拳を久賀達に叩き込んでいくが、久賀達はそれをいとも簡単にかわしていく。そして播磨が体重を乗せて殴りかかると、久賀達は播磨の手を取りそのまま一本背負いを決めた。投げられた播磨は壁際まで飛んでいき、派手に背中を叩きつけられた。

「いゝつててて・・・。」

「まだまだ攻撃のモーションに無駄があるな、モーションの大きい攻撃をする時はせめてフェイントが目くらましをして相手の動きを止めるようにすると確実さが増すぞ。」

「そうはいつでも、隊長そういうの引つかかってくれないじゃないですか。フェイントしたってそれごと叩き潰されるし、目くらまし使ったって背中とか他のところにも目があるんじゃないかってくらい正確にこつちの場所見つけてくるし・・・。」

「そりゃそう簡単にやられてたまるかっての。」

そう言つて彼女は訓練所の端にあるベンチに置いてある自分の荷物から、タオルとドリンクを取り出した。

「それにしても隊長、最近特に訓練に身が入ってますよね。」

「まあな、早くこいつをモノにしたいし。」

最近の気合の入り具合を見て声をかけた檜和田に、そう言つて左手首のライダーブレスを見せる。

「どうですか、最近の調子の方は？」

「ああ、悪くない。ザビーも大分馴染んできた感じだし、ザビーゼクターもあたしを認めてくれた感じだしな。」

数日前から彼女の体にはある変化が起きていた、それは胸元に浮かび上がったザビーの紋章である。2回目の変身後しばらくすると体に違和感を感じ、ふと胸元を確認するとザビーの紋章があった。最初は驚いたものだが今となっては自分とザビーゼクターとの間に絆ができた様な気がして決して悪い気はしなかったし、紋章は任意で浮かび上がらせたり消したりできるようなのでそんなに困る様なものでもなかった。

「よし、訓練はそこまでだ。全員休憩するぞ。」

時間的にもそろそろ昼食時、流石にそろそろ休憩を入れるべきだろうと指示を出す。それを聞いて次々と訓練を止めていく隊員達、しかしそんな中まだ訓練を続けている者が2名・・・B小隊の砲手を務める神田とC小隊の砲手を務める大柄な男―葛西 剛輝―である。二人は未だに鉄棒にぶら下がって懸垂をしていた。

「~~~~っだあ！駄目だあ、やっぱりお前には敵わねえや神田。」

「そう言うお前だって、少しは出来るようになったじゃないのさ。」  
「おらお前ら、何時までやってんだ。休憩だ休憩、さっさとしろ！」

どうやらこの二人は何時ものごとくどちらがより多く懸垂できるかを競っていたようだが、結果は神田が依然勝ち越している状況らしい。

訓練所を出て更衣室に向かい、制服に着替えた久賀達が真っ先に向かったのは食堂であった。他の隊員はまだ訓練の疲れが抜けきっていないのかベンチに座って休んだりしているが、彼女はそそくさと食堂に向かっていった。そこで彼女は次々と並んだ料理を手にしたプレートに乗せていく、席に着いた時には山ほどの料理が乗っていた。

「何時もの事とはいえ、あれだけの訓練後によくそれだけ入りますね。」

「戸高か、他の連中はどうした？」

「まだ更衣室とかで休んでるんでしょう、流石にあれだけ訓練したら早々すぐには動けませんよ。」

彼女が次々と料理を口に運んでいる時に、彼女の副官を務める戸高がやってきた。彼によれば他の隊員はまだへばっているらしい。彼と会話をしている間も久賀達は食事を止めず、プレートに乗った料理をその体に胃に収めていった。

「いつも不思議だったんですが、何で隊長はそんなに食べれるんですか？確か訓練前にも何か食べてましたよね？」

そう、実は久賀達は訓練前にもすでにモノを食べていたのだ。ちなみにその時彼女が食べていたものは本部に来る途中で買ってきたホットドッグである。

「腹が減らないようにするために食べる・・・、それじゃ理由として不足か？」

「少なくともそれにしては些か量が多すぎるかと。」

戸高は思い切って前々から疑問に思っていたことを口にする。実際彼は彼女の副官として隊の中でも特に彼女と共にいる時間が長いのだが、とにかく頻繁にモノを食べる。ヘタをすると少し離れた次の瞬間には既に何かを口に行っていることだって珍しくないのである。

「・・・特に理由はないよ。」

「そうですね・・・。」

彼女の雰囲気、これ以上は話しても無駄だと悟った戸高は、それ以上この件を追求するのをやめた。

その後は体力もある程度回復した部下達と共に昼食をとり、少し休んだ後再びハードな訓練に取りかかった。ちなみにその訓練の前にも、久賀達は軽くつまむ程度とはいえ適当なモノを食べていた。

久賀達宅

その日の夜、久賀達は自宅のマンションのベッドに横になっていた。

「ふう・・・。」

この日も特に出勤もなく、訓練と簡単な事務仕事を終えて帰ってきた久賀達。すでに外で夕飯は済ませているため今は特に何も食べる気がしない。そんな時久賀達の脳裏に戸高からの質問が思い出される。



「なんでそんなに食べるのか・・・か。」

実際彼女自身も食べ過ぎだということを分かつてはいる、分かつてはいるのだがどうしても食べないと落ち着かないのだ。数年前の自分だったら考えられないことだったろうが、今ではこれが普通になっているのだから何とも言えない。太ることに關しては特に心配してはいない、この習慣はすでに数年前からの付き合いである。彼女はカロリーの消費がいいのか、食べてもそれと同じくらい動きまわればきれいに消費されてしまう体質らしい。もっとも休日など特に何もすることが無いような時は消費することも無いはずなのだが・・・。

彼女はそこでベッドの上で寝返りをうつと、今の自分になる切っ掛けになった時の事を思い出していた。

(「こんなこと、言えるわけがないよな・・・空腹が怖いなんて。でも腹が減ると、嫌でもあの時の事を思い出しちまうからな・・・。そんなことを考えていると徐々にうつらうつらとしてきて、そのまま眠りについてしまった。

周囲には赤い炎が燃え盛り、辺りに人の死体が散乱している。もはや動くものなど何一つ見えないところに、一人の10代後半と思われる女性の姿があった。

「父さん・・・母さん・・・みぞれ 雲 皆・・・どこにいるの・・・?。」

彼女はそう言うと必死に足を動かして周囲を探る。しかし周囲に動くものは見えずあまつさえ炎はどんどん激しさを増していった・・・。女性は炎の熱さに止めどなく汗を流し、フラフラになりながらも

必死に家族を探して回った。

「囊……？囊え！？」

その時彼女は、自身の妹が何時も付けているブレスレットをつけた腕を残骸の影に見つけた。それを見て即座に妹の安否を確認するべく残骸の影を覗き込んだ。そこには……。

「ッ！！ハッ！……ハア……ハア……」

久賀達はベットから飛び起きると、荒く息をついた。先程まで見ていた夢の光景が未だにはつきりと脳裏に焼き付いて、なかなか心が落ち着かない。何とか深呼吸を繰り返してふと窓の外を見てみると、既に夜明けだった。

「ハア……、よりによってあの時の夢を見るなんて……。昨日あんなことを考えてたからだな、ったく。」

そう言うとりあえず先程みた悪夢のせいでかいた冷や汗を洗い流すべく、浴室へと向かった。その際の彼女の瞳は、普段からは考えられないほど悲しげで弱々しかった。

その後シャワーを浴びて汗を洗い流した後、適当に朝食を済ませた久賀達は街をぶらついていた。ちなみにこの日は彼女の部隊は非番である。シャドウはZECT内の他のチームとは違い実働部隊、そのため有事の際以外は三つの部隊の内二つが本部に詰めて一つが休むというのを交代で繰り返しているのである。

「……ッ！？あ、あれは！！！」

そんなわけで街中を歩いている時、人ごみの中に見知った人物の姿を見た。本来ならここにはいない筈の人物・・・数年前のあの日に死んだとばかり思っていた人物・・・自身の妹を。その人物は人ごみの中を進んでいくとおもむろに角を曲がっていった。久賀達はその人物を見失わないように急いで追いかけていった、角を曲つた先では妹がさらに角を曲って行くところだった。すぐさまその角を曲ろうと走っていくと角の奥から女性の悲鳴が響いてきた。

「ッ！震！？」

急いで角を曲ると彼女の妹――久賀達　震――が蛹ワームに襲われようとしている姿だった。

「させるかよつ、こんのお！」

「ね、姉ちゃん！？」

蛹ワームに飛び蹴りを喰らわせて転倒させると、震の手を取りそのまま路地裏を進んでいきワームを撒くことに成功した。しばらく走つたところで走るのをやめると震の事を改めてみた、その姿は4年前からほとんど変わっていなかった。

「お前、本当に震なんだな？」

「何言つてんの姉ちゃん？当然じゃん！」

そう言つて人懐っこい笑みを浮かべる震、その笑みは4年前から変わっていなかった。それを見てとりあえず警戒を解く時雨、ワームが擬態したものかとも思ったが今は確認する手段が無い、何時までも警戒していても仕方がないだろうと考えるのをやめた。もつとも心の中では“もしかしたらワームでは？”という疑念と、“自分の考えが杞憂であってくれ”という願望がお互いに干渉し合つて落ち

着かないままだったのだが……。

その後時雨はとりあえず人の多い所に戻ることにした、先程のワームも流石に此処まで大勢の人がいる所で堂々と襲ってくることはないだろうという判断である。時雨と雲の二人は適当な喫茶店にでも入ることにした、お互いの今までの話をするために。

「それにしてもビックリしたぞ、まさかまた会えるなんて……。」  
「こっちは大変だったんだから、何とか家に帰っても姉ちゃんいなかったし。姉ちゃんを探してそれこそ日本中を探すほどだったんだから。」

「はは、悪い悪い。あの時みんな……死んじゃったと思ってたから……。」

思い出されるのは4年前、残骸に押しつぶされて既に息をしていなかった両親。そして同じく大きな残骸に肘から上を押しつぶされている妹の右腕だった。

「実はあの時、あたし残骸の奥の空洞にいてさあ。気がついた時には救助隊が助けてくれたのか病院のベッドの上だったんだよねえ。」

「腕は……ダメだったのか？」

「うん……押しつぶされてたおかげで出血が少なかったのが幸いだったんだけどね……。」

どうやら時雨が雲を死んだと思ったのは単なる早とちりだったらしい、妹の腕は押しつぶされたせいで体から引き離されただけで雲自身は生きていたということだ。おまけに残骸の中にいたおかげで炎から身を守ることができていたらしい。

「そう言う姉ちゃんは？どうしてたの？」

「あ、ああ・・・あたしはみんな死んじまったと思ったのと、あのままあそこにいたら熱さでやられちゃうって思ったから、急いであの場から離れていったんだよ。それから別の救助隊に助けられて・・・」

「ふくん、そうだったんだ。」

そんな会話をした後、二人は喫茶店を後にして歩き出した。勿論喫茶店を後にする前にトイレでこっそりワーム出現の報告は済ませておいた、とりあえずワーム搜索はこのエリアを担当するチームに任せておいても大丈夫だろう。ワームが出たらザビーである自分も向かわねばならないだろうが・・・。

そんなことを考えつつ雲と雑談しながら歩いていると、複数の気配を感じた。先程のワームが仲間を呼んだのだろうか？とにかくここで下手な行動に出られるのはマズイ、せめて大事にならないように人気の少ない所に移動して誘い出すか・・・、最悪雲にならザビーを見られても黙ってもらうこともできる。そんなことを考えていると、突然雲が走り出した。

「姉ちゃん、こっちこっち！」

「あ！おいこら、雲！」

慌てて雲を追いかけていくと、人気のない公園に入った。雲はそこで周囲を懐かしそうに見ている。

「ねえ姉ちゃん、覚えてる？あたし達子供の頃よくこんな公園に遊びにきたよねえ。」

「ああ、お前が危ないことばかりやって、よく母さんに怒られてたっけ・・・。」

「近所の悪ガキとケンカしたり。」

「あつたなあ、そんなことも・・・。」

「でもそんな時は決まって姉ちゃんがあたしを助けてくれた。」

「当たり前だろ・・・お前はあたしの大事な妹なんだから。」

そう言つて時雨は雲の頭を撫でた。雲は特に嫌がるでもなく、むしろ懐かしむように目を細めた。

「ねえ、姉ちゃん。今でも・・・あたしの事守ってくれる？」

「何言つてんだ、そんなの当たり前だ・・・ッ!!」

雲からの問いに何をいまさらと答えようとした時、公園の中に複数の気配が入ってきた。ワームが行動を起こしたかとそちらを見ると・・・このエリアを担当しているのであるうチームのゼクトルーパー達がいた。そして彼らの銃口は自分達に向いている。

「な、何だお前ら・・・？」

「我々はワームを討伐しに来ただけだ。」

「どこにワームなんている!？」

そうゼクトルーパーに返しながら、彼女は答えを半ば予想していた。出来れば外れて欲しいと思いつつ・・・。

「そこにいる女だ、そいつはワームだ!」

「何を証拠にそんな・・・なっ!？」

そうゼクトルーパーに食つてかかりながら雲を守るように前に出ると、不意に雲の気配に違和感を感じた。慌ててそちらを見ると・・・雲がいた場所にワームーベルクリケタスワームーだった。ベルクリタスワームはその身に生えた羽根で飛び上がると、ゼクトルーパー達に襲いかかった。ゼクトルーパーは応戦するも、成虫ワーム

相手だとどうしても分が悪い。なお悪いことに蛹ワームまでやってきてゼクトルーパー達は完全に劣勢だった、モノの数分もしないうちに全滅するゼクトルーパー達。時雨はただその光景に呆然とするしかなかった。

「姉ちゃん、あたしと一緒にしろ？」

ゼクトルーパー達が倒れた後、ベルクリケタスワームは雲の姿になり、時雨にそう告げた。

「あたしの仲間が姉ちゃんに擬態したいって、それで、永遠にあたしを守ってよ。」

「……………」

「姉ちゃんはあたしの目標で誇りなんだよ、あたしの仲間には擬態させれば、姉ちゃんは死んでも永遠にワームの中で生き続けることができる。それで、永遠にあたしを守ってよ……………」

雲の口から聞かされるそれは、まるで悪魔の囁きかのように心地よかった。だが時雨はそれには答えずに、どうしても気になっていたことを口にする。

「何時からだ？」

「え？」

「お前……………何時から雲に擬態してたんだ？」

「そんなの……………別にどうだっていいじゃない。」

「そうか……………」

時雨はそう言って俯くと、袖を捲ってライダーブレスを露わにし、ザビーゼクターを呼び出した。

「なら・・・力尽くでも聞かせてもらおうよ！変身！」

Henshin

時雨が変身したのを見た霧は、すぐさまベルクリケタスワームの姿に戻り、それと同時に蛹ワーム達がザビーに襲いかかる。

「ダアアア！」

対するザビーは雄たけびを上げながら蛹ワーム達を薙ぎ払っていく、その姿は普段以上に荒々しく、まるで獣のようだった。瞬間にザビーに倒されていく蛹ワーム、そして公園に残ったのはザビーとベルクリケタスワームだけだった。

『姉ちゃん、まさかあたしを消す気？』

「・・・」

Cast off Change Wasp

ザビーはそれに答えずライダーフォームとなる。それに対してベルクリケタスワームはクロックアップするが、ザビーも同時にクロックアップした。ベルクリケタスワームは空を飛びながら攻撃してザビーを翻弄しようとするが、ザビーはそれには乗らず一瞬の隙をついて相手の羽根をもぎ取って地面に叩きつけた。さらにザビーはベルクリケタスワームに馬乗りになり抵抗がなくなるまで殴り続け、最後には蹴飛ばして完全に戦闘力を奪ってしまった。

「さあ、質問に答える時間だ。お前は何時から霧と入れ替わってた？」

『ヒイツ！？姉ちゃんやめて！あたし、霧なんだよ！？あたしの中にある霧の記憶は本物なんだよ！？あたしを消したりしたら、霧の記憶だって「黙れ！！」ッ！?!?!?』



「それ以上震の声で喋るな・・・あたしが聞いていることは一つ、それに答える！」

そう言うとザビーはベルクリケタスワームの首をつかんで持ち上げ、左手で何時でも殴れる体制にした。

『い、一週間前！一週間前の夜だよ！？』

「何？」

『一週間前の夜に人気のない住宅街を歩いてたところを後ろから・・・』

「そうか・・・。」

そしてザビーはベルクリケタスワームから手を離すと背中を向けて歩き出した。

『ね、姉ちゃん？』

「消え失せる、二度とあたしの前に現れるな・・・。」

そのまま歩き続けるザビーに、ベルクリケタスワームは立ち去るふりをして後ろから飛びかかった。

『甘いよ、姉ちゃん！！』

「・・・馬鹿が・・・。」

R i d e r   S t i n g

『!?!?!?!?!』

だがザビーはそれを読んでいたかのように、予めスタンバイしておいたライダーステイキングを叩き込んだ。それを受けたベルクリケタスワームは膝をつく。

『ね、姉ちゃん……。』

ベルクリケタスワームから雲の影が浮き出し、時雨に縋るかのよう  
な視線を向ける。だがザビーはその視線を受けて……。

「その声であたしを……呼ぶんじゃないねえ!!」

R i d e r   S t i n g

もう一度ライダーステイングを叩き込んで今度こそトドメを刺した。  
ワームが爆散したのを確認するとザビーは変身を解き、久賀達の姿  
に戻った。その瞳は空虚で、何も映していないかのようにだった。

「そうだ、あの日みんな死んだ……。あたしにとってはみんな……  
とつくに死んでんだよ。フツッ、アハ、アハハッアッハハハハハハ  
ハハハッ!？」

そうして狂ったかのように高笑いしていると、ザビーゼクターが擦  
り寄ってきた。

「ん？なんだよ……。」

- - ! - - ?

「何だつてんだ……。え？」

そんなザビーゼクターに適当に答えていると、ふと自分の瞳から涙  
が流れていることに気付いた……。

「なんであたし……。泣いて……。なんか……。うつ。」

そこまで言って心の底で押さえていたモノが溢れるように大粒の涙  
がこぼれおちていった、拭っても拭っても後から後から溢れて止ま

らない。そんな彼女にザビーゼクターが気遣うように擦り寄って  
くと、彼女はザビーゼクターを胸に抱いて静かに嗚咽を漏らし始  
めた。

「うつ・・・グスツ、震・・・震え・・・。」

気付けば既に夜となつてゐる公園、そこに久賀達のすすり泣く声  
何時までも響いていた・・・。

東京・某所

「ライダーステイング！」

R i d e r   S t i n g

あれから数日後、そこには何時もの調子を取り戻した久賀達がい  
あの後しばらくは久賀達からどこか何時もの覇気が感じられず、部  
下達も矢車達も少し心配していたのだが、彼女の性格から聞いても  
何も答えないだろうと考え、しかもしばらく経つと何時もの調子を  
取り戻したのでとりあえずしばらくは様子を見ることにした。その  
間にも訓練を繰り返し、ウォーム討伐をこなす彼女を見てまわりはと  
りあえずは大丈夫かと判断した。実際彼女自身ももう大丈夫だと思  
つていた。

だが彼女自身気付いていない、その心の底に、どうしようもなくど  
す黒いモノが蔓延っていたことに。

### 第3話 過去と妹（後書き）

というわけで第3話でした。久賀達の過去と彼女の心の底にある狂気の一部を垣間見せた感じですが、正直上手く表現できたか不安です（汗）。ちなみに前回のラストにチラリと出ていた人物が震ですが、あの時点ではまだ人間です。大体あの直後にワームに擬態された感じですね。次回はいよいよ久賀達と天道が対面、果たしてどんな展開になるのかお楽しみに。

## 第4話 出会い(前書き)

どうも、第4話を更新しました。今回ついにザビーとカブトが出会います。お楽しみに。

## 第4話 出会い

ZECT本部

その日、久賀達は再び三島の下へ来ていた。なんでもザビーである彼女にしか任せることができない非常に重要な要件らしい。三島の下へ向かう途中、彼女は話の内容について色々と予想していた。可能性としては様々なモノが考えられるが、一番確率が高そうなのはやはり『アレ』であろう。もしそうだとするなら寧ろ漸くきたかという感じである。

「久賀達 時雨、ただ今参りました。」

「ああ、待つていたよ。」

久賀達の姿を確認した三島は、早速話題を切り出した。

「今日君を呼んだのは他でもない、君に重要な任務を与える。それは……。」

そして三島の口から彼女に伝えられた任務とは……。

数日後 東京内・某所

その日ワーム出現の報を受けて出勤命令が出た久賀達の部隊は、現場に急行していた。事前に聞かされていた報告では数体のワームが出現し、現在田所チームが応戦しているとのことだった。自分達が到着するまでに持ち堪えてくれと思いつながら、彼女は新しく支給されたバイクーマシンのゼクトロニーを飛ばした。彼女の後ろから

は部下達が乗った数台の車両がついてきており、中では既に彼女の部下達が何時でも出られるように準備を整えていた。

現場に近づくとそこは既に戦闘は終了している状況だった、勿論ワームの勝利という形で。そんな中、ワームに対して必死に抵抗している者がいた。身を守るために申し訳程度にボディアーマーをつけた青年・・・加賀美 新だった。彼は近くに落ちていたマシンガンブレードを手に取るとワームに銃撃を加えていく、はつきり言っただけそれは無駄な抵抗というものであったが、彼女はそれを見た瞬間ほくそ笑んだ。なかなかガッツのある奴だ・・・と。だが無駄な抵抗であることに変わりはないので、彼女は彼を助けるためにバイクのスピードを上げる。すでに変身は済ませているので準備は万端だ。彼女はワームの群れに突っ込んでいくとバイクでワームを次々と跳ね飛ばしていった。そして最後のワームを跳ね飛ばすとそこでバイクを停止させ、彼に向って一言。

「下がってる。」

そう言うのとバイクから降りて辺りを見渡す。いるのは蛹ワームのみで成虫は無し、これなら態々ライダーフォームになる必要はない。そう判断してザビーはワームの群れに突っ込んでいった。

「ハアツ、セイツ、デヤツ！」

加賀美が初めて見るライダー・ザビーの姿に呆然としてみると、新たに何かか近付いてくる気配を感じた。そちらに視線を向けると、複数のゼクトルーパー達がやってくるのが見えた。だがその姿は彼が知っているモノと若干異なっていた。通常は黒一色の姿の筈だが、彼らには金色のラインが引かれている。そのゼクトルーパー達が次々とザビーの周囲に集まっていく。

「あいつらは一体・・・？」

「本部直轄の精鋭部隊、シャドウ。そしてあれは新たなライダー、ザビーだ。」

加賀美が無意識の内にそう呟くと、いつの間にか近くに来ていたチームリーダーの田所がそう答えた。田所の言葉に加賀美は呆然としつつもザビーの名を口にする。

「A小隊は正面から、B、C小隊は左右から退路を断て。」

ザビーの指示を聞いたシャドウ隊員達は即座に行動に移す。ザビーの正面に立ち銃撃を加える者と左右に展開して射撃する者、その動きは一切乱れることなく正に統率のとれたものだった。一方のワームの方もやられてばかりではなく、脱皮して一気に形勢逆転を狙う。

「脱皮します！」

「戸高、閃光弾だ！」

「ハッ！」

脱皮される前に倒そうとザビーは自身の目の前にいた戸高に指示を出し、指示を受けた戸高は通常のマシンガンブレードと違いブレードの部分がグレネードランチャーになっている武器ーマシンガングレネードーから閃光弾を発射した。それはワームの群れの中に落ちると眩い光を放ち、流石のワームもそれに怯んで脱皮が中断される。その隙を見逃さず、ザビーが一気に攻撃をたたみ掛ける。

「フッ！ハッ！セヤッ！」

あるモノには体重を乗せたパンチを、あるモノには回転を利用したキックを、次々と技を叩き込んでいき閃光が止んだ時には全てのワ



ームが倒されていた。その光景に加賀美はただ圧倒されていた。ワームを倒し終わり周囲に脅威がなくなったことを確認すると、ザビーは部下達と共に加賀美達の方に近づいてきた。そして加賀美の目の前で立ち止まったザビーは、ライダーブレスからザビーゼクターを外し、久賀達 時雨としての姿に戻った。

（お、女！？）

ザビーの正体が女性であったことに内心で驚く加賀美、部隊を率いてかつライダーとして戦う人物が、まさか女性だったとは思わなかったのである。

「久賀達、お前だったか。」

加賀美がザビーの正体に驚いている時に、田所が久賀達に声をかけた。

「お久しぶりです、田所さん。」

声をかけられた久賀達の方はそう田所に返し、お互いに握手をする。田所 修一、加賀美の上司でZECTのチームの一つを任されている人物であり、世界に何人いるであろう久賀達が心の底から敬語を使う数少ない人物である（ちなみに三島に対しては表面上は敬語を使うなど礼儀良くしていても、心の中では中指を立ていたりする）。

「お前達3隊長の内の誰かがザビーの資格者に選ばれるだろうと思っ  
つてはいたが、まさかお前だったとはな。」

「偶々です、運が良かっただけですよ。」

田所からの称賛にそう謙遜する久賀達、そして彼女はおもむろに加

賀美の方を向いて口を開いた。

「お前、何でさっき一人でワームと戦おうとした？一人で倒せるとでも思ってたのか？」

「いえ……でも、あの時は……。」

「誰も無茶をするなどは言わない、あたしだって時にはこれでもかっつてくらい無茶をすることがあるし、必要と思った時は存分に無茶をしる。ただ、時と場合を考える。」

「時と……場合……。」

久賀達からの言葉を聞き、思わずそれを繰り返す加賀美。

「あの時はすでに味方は誰一人立ってはいなかった、そんな中でお前一人がワーム一匹を仮に倒したとしても次の瞬間にはお前がワームの餌食になるだろう。はっきり言ってしまうそれは犬死だ。」

「い、犬死!？」

「もしお前が本当にワームを倒したいと考えてるなら、あそこで取るべき行動は戦うことじゃない、逃げることだ。逃げて今回の経験を生かして次に繋げる、そうすることで本当の意味での勝利が手に入るんだ。」

「本当の意味での、勝利……。」

久賀達からの言葉を噛み締めるように呟いた加賀美を見て、田所に会釈をしてその場を去ろうとする久賀達。それを加賀美は引き留めた。

「待ってください！俺、もっとワームを倒したいんです。どうすればいいですか……。」

「お前一人で何ができるってんだ「播磨あ!」す、すみません……。」

久賀達から感じる、引き寄せられるかのような何かに、思わずその口にする加賀美。それを聞いて播磨が小馬鹿にしたような言葉をかけようとするが、久賀達からの叱責にすぐに口を噤んだ。恐らく彼には帰還後何かしらのペナルティーが与えられるだろう。

「ワームには獣と違いある程度優れた知能がある、だがそれが逆に弱点となり、連中の行動に一定のパターンの様なものが生まれる筈だ。それを突き止めることができれば、あるいは連中の行動を先読みすることもできるかもしれない。」

「な、なるほど！ありがとうございます！」

そう言っただけで頭を下げた加賀美に軽く頷くと、久賀達の部隊はその場を去っていった。

## ZECT本部

田所は三島と面会していた、先日出会ったザビーに関して聞きたいことがあったからである。

「ザビーが完成していたとは聞いておりましたが、何時頃投入されていたのですか？」

「もう彼これ一カ月近くは前になる。」

「そんなに早期に・・・、マスクライダー計画に何か変更でも？」

「変更などはない、ただ少々予想外の事態が起こってな。」

「予想外？」

「一か月ほど前と言えばちょうどカプトが資格者の手に渡った頃である、田所としてもまさかそんな早期にザビーが投入されているとは

思ってもみなかった。三島が口にした予想外という言葉に怪訝な顔をするが、三島は答える気がないらしいことを見てとり、もう一つ気になっていることを口にする。

「ではもう一つだけ・・・ザビーの目的とは？」

「君も知つての通り、質問は受け付けない。ただザビーには・・・ある重要な任務がある。」

## 東京・商店街

久賀達は矢車と共に商店街にある豆腐屋へ向かっていた、というのも久賀達が矢車に豆腐料理を作るよう強請ったからである。彼女達3隊長の間で矢車の料理の腕がいいのは周知の事実であり、時にはそんな彼の絶品料理が食べたいと思ったのである。

二人が豆腐屋に近付いていくと、正面から近付いてくる男の姿が見えた。歳は20代前半だろう、無駄なく鍛え上げられた肉体に整った自信に満ちた顔立ち。道行く女性10人が10人振り返るだろう人物である、もっとも専ら色気より食い気な久賀達にしてみれば興味の無いことではあるうが・・・。目的の豆腐屋の前でとまると、その男も止まった。そして矢車とその男が同時に豆腐屋の方を向くとこれまた同時に、

「「絹ごし。」」

同じ豆腐を注文した。世の中どんな縁があるか分からないもんだと久賀達が思っていると、大笑いした店長から絹ごしは残り一つだとの言葉が聞かされる。

「俺の大事な同僚に食べさせてやりたいんだが。」

「俺の可愛い妹も楽しみにしている。」

久賀達としては別に絹ごしである必要はなかったのだが、料理にかける愛情やプライドがあるからか矢車は一向に譲らない。対する男もその妹がよほど可愛いのか、譲る気はないらしい。お互いに同じモノが欲しいのだから此処は公平に半分に分けようと矢車が提案するが、男の方は『二兎追う者は二兎共獲る』という格言をアレンジしたものを口にして一人で一丁を持っていく気満々の言葉を口にした。

(こいつ・・・一体何なんだ?)

気に入らない・・・それが久賀達とその男に感じた感情だった。出会ってすぐの頃はそうでもなかったが、男と矢車の会話を聞いているうちにそんな感情が芽生えだしたのである。矢車の方も唯我独尊と言った感じの男の物言いに若干苛立ちながら声をかける。

「何なんだ君は？」

「俺は天の道を往き、総てを司る男。」

その言葉に久賀達のイライラはさらに募る、その世界が自分を中心に廻っているとも言いたげなモノ言いに。

「君に天を語る程の器があるのか？」

「器ならある、お前のよりは・・・デカイ。」

そう言っただけで矢車が出てきた豆腐を入れるための器よりも大きい自分の器を見せる。

「でも大きすぎる器は邪魔でしかないんじゃないのか？」

流石に我慢できなくなった久賀達がその男に声をかける。

「どういう意味だ？」

「無駄にデカイ器は邪魔になるし、周りから煙たがられるんじゃないのかって話だよ。」

実際彼女はその男の器のでかさは感じ取っていたが、それを周りに誇示しているこの男が気に入らなかった。久賀達は男を睨み、男は久賀達に涼しげな視線を向ける。

「そこまで言うなら勝負だ。」

久賀達と男がお互いに見つめ合っていると、矢車がそういった。

## B i s t r o   l a   S a l l e

最初は何の勝負をするつもりなのかと思っただが、洋食店に入ってしまったところを見るに料理対決をするらしい。もはや自分にできることはないとしばらく店の中で待っていると、どうやらできたらしい。そちらに目を向けてみると、天道一店の店員との会話でわかった。一が中華風冷奴、矢車が麻婆豆腐らしい。それを見て彼女の食欲がそそられる。どうやら天道という男は人間としては気に入らない奴だが料理人としては矢車に匹敵するらしい、あんな性格でなければ御近づきになっておきたかったところだ。審判は店員の少女が行い、結果は矢車の勝利。正直な話天道と親しい間柄だろう少女の事だからってつきり身内の鼻屑目の様なもので天道に軍配が上がると思っていただけに若干驚いた。そうこうしていると、矢車が天道に自分の主張通りに半分に分けようと言う。こんなやつに情けをかける

必要はないと口を開こうとすると、天道の方がそれを断った。先ほどの格言のアレンジは妥協をするなという意味だと、その潔さに天道への評価を若干（あくまでも若干）見直す久賀達。

「おはようございます！」

そんな時、店に加賀美が入ってきた。最初はどうしたのかと思っただが、すぐに表の顔はこの店でのバイトかなんかかと考える。一方加賀美の方は久賀達の存在に驚く、なぜ彼女がここにいるのか、と。加賀美が久賀達の方を向いて呆然としていると、久賀達と矢車が席を立ち店を後にする。

「ま、待つてください！」

店を出て行った二人を見て加賀美は急いで二人を追いかける、男の方は見たことがないが恐らく彼女の部下か誰かだろうと考えた。

「今、久賀達さんからの助言を受けて、ワームの行動パターン調べてます。」

「ほう、結果が楽しみだな。」

「われわれ実働部隊の活躍は、君たちの地道な捜査にかかっている。頑張ってくれ。」

「はい！・・・あの、ところでこちらの方は？」

久賀達に今の活動の状況を知らせる加賀美に、二人は満足そうな声を上げる。それに嬉しそうな声を上げた後で、加賀美は気になっていたことを尋ねる。

「ああ、こいつは同僚の矢車だ。」

「矢車 想だ、シャドウ第1番隊の隊長を務めている。よろしく。」

「あ！よ、よろしく願いします！」

そう言っただけで加賀美は矢車と握手を交わした。

「ちなみにあたしは第2番隊だ、あともう一人第3番隊隊長の影山って奴がいる。今度紹介してやるよ。」

「はい！ありがとうございます！」

加賀美が頭を下げたのを見て、その場を後にする二人。その時、加賀美の携帯に着信が入った。相手は同じチームの先輩である岬 祐月で、内容はワームの行動パターンがわかったとのことだった。加賀美はそれに了解の旨を伝え電話を切ると、自分たちには心強い味方がいることを再認識する。

「そっだ、俺たちには久賀達さんがついてるんだ。」

「ワームか？」

その時、不意に後ろから声が掛かってきた。そちらを見るといつの間にか天道が立っていた。天道は加賀美の先ほどの対応から、またワームが出たのかと考えた。

「・・・天道、お前に話がある。」

そう言うと、加賀美は天道にワームと戦うのは止めるように説得する。

「2号ライダー・・・ザビー？」

「ああ、遂にZECTの正統なライダーが派遣されたんだ。」

「ほう・・・そいつは楽しみだ。」

「天道、お前はもうワームから手を引け・・・ザビーがいればもう



大丈夫だ。樹花ちゃんだっているし、一般人であるお前が危険を冒す必要はない。」

「そのザビーとやらに選ばれたのはどんな奴だ？」

「・・・それはZECTの機密事項だ。」

「中和だか調和だかが好きな奴なんじゃないのか。それが、やたらと気の強い女とか。」

「いい加減にしろ！今度の資格者は俺もすごいと、尊敬できると思える人なんだ。とにかくもう関わるな、いいな。」

そう言うと加賀美はその場を去って行った。

#### エリアB4・結婚式場

式場へと続く道を、タキシード姿の加賀美とウェディングドレスを着た岬が歩いていた。というのも今回のワームの狙いがエリアB4の新郎・新婦であるということが判明したためである。すでにゼクトルーパーが配置されている会場内を進んでいくと、不意に手を叩く音が周囲に響き渡った。突然の事態に潜んでいたゼクトルーパー達も慌てて周囲を見渡している、すると加賀美たちの目の前に白い服を着た天道が現れた。驚く加賀美達に天道は、ワームの狙いにしてはピンポイント過ぎるといふ言葉と、あとは任せておけという言葉を残して去って行った。訳がわからない加賀美たちは首を傾げるが、そこに久賀達からの通信が入ってきた。

「久賀達だ、ワームが現れた！今現場に向かっている。」

その言葉に慌てて久賀達と合流する加賀美、そこには服に緑色の液体を付着させている女性と、その女性をなだめて液体が付着した上着を脱がせている久賀達の姿があった。

「まさか、ワームが花嫁や花婿だけを狙ってるというのは……。」  
「70点つてところだな、連中の狙いはそんな凝ったものじゃない。もつと単純な理由だ。」

「単純な理由？」

「襲われた人たちとあの女性の共通点を探してみる、深く考えずに見てみればすぐにわかるはずだ。」

そう言われて今まで襲われてきた人達と今襲われた女性の姿を比べてみる、そして加賀美はあることに気付いた。

「ま、まさか……ワームが狙っていたのは!？」

「ああ、白い服を着た人物だろう。今まで襲われた人が全員教会にいて、拳銃に同じ区分けができる人だったからそう錯覚したんだ。」

合流した田所達も状況を理解し、即座に会場周辺の白い服を着た人物に敬語をつけるように指示をする。

「逃走したワームを捜します。」

「いや、すでにシャドウが動いている。戸高！」

『現在成虫ワーム一体と交戦中です!』

加賀美がすぐにも逃げたワームを追おうとするが、久賀達はすでに会場周辺に部隊を展開させていたのか冷静に対処した。一方展開していた久賀達の部隊は会場から逃走したワームーベルバールワーム・ロターーと交戦していた。

彼らがしばらく持ち堪えていると、マシンゼクトロンに乗って久賀達がやってきた。久賀達は現場に到着するとザビーゼクターを呼び出し、即座にザビーへと変身する。

「変身！」

Henshin

ザビー・マスクドフォームへと変身した久賀達は、そのままベルバ  
ーワーム・ロタと取っ組み合いを始める。そこへ周囲へ散開してい  
たB・C小隊が合流し、ザビーとワームの戦いを見守っていると突  
然後方から複数の蛹ワームからの攻撃を受ける。

「ッ！B・C小隊は距離をとって射撃で対応、A小隊は援護しろ！」

その言葉を受けて第2番隊の隊員たちは即座に行動に移した。ガト  
リングガンを有するB・C小隊が周囲から銃撃を加えつつ、A小隊  
がそれを援護する。しかしワームも一筋縄ではいかず、銃撃を振り  
払ってゼクトルーパー達に突っ込んでいった。たちまち周囲はシャ  
ドウとワームが入り乱れる乱戦状態となった。久賀達は内心で舌打  
ちをしつつ、ベルバーワーム・ロタと蛹ワームを相手取る。

(ん？あれは、カブト・・・ともう一匹？)

「チツ、キャストオフ！」

Cast off Change wasp

そんな時、乱戦の場にカブトがもう一匹のベルバーワームと共にや  
つて来た。出し惜しみをしている状況ではなくなったことを悟り、  
キャストオフしてライダーフォームとなる。ライダーフォームへと  
なったザビーはマスクドフォーム時とは異なる軽快なフットワーク  
で、ベルバーワーム・ロタからの攻撃をかわしていく。

「カブト！クロックアップで蛹どもを一掃する！」

「・・・いいだろう。」

「クロックアップ。」

## Clock up

クロックアップしたカブトとザビーはあっという間に蛹ワームを一掃してしまい、残ったのはベルバーワーム・ロタだけになってしまった。ワームはクロックアップで逃走を図るが、カブトとザビーにすぐに追いつかれてしまう。追い詰められたワームはカブトに攻撃するが軽くかわされ、逆にザビーからの攻撃を受ける。ザビーは素早い身のこなしでワームの攻撃をかわしつつ、ワームにダメージを与えていく。その戦い方は正しく蝶のように舞い蜂のように刺すものであった。

「ライダーステイング！」

Rider Stinging

ある程度ダメージを与えたと判断したザビーはワームを蹴り飛ばし、トドメを指すべくゼクター上部のスイッチに手を伸ばす。一方ワームもそうはさせまいとザビーに飛びかかるが、ザビーの攻撃の準備が整う方が若干速い。

「ハア！」

飛びかかってくるワームにカウンターの要領で必殺の一撃を叩き込み、ワームは爆散する。ワームを倒したザビーは攻撃の構えを解き、カブトに向き直る。

「我々は人類の平和を守るためにワームと戦っている。貴方にも、行動を共にしてほしい。」

そう何時もより気取って言って右手を差し出すが、カブトはそれを無視してザビーの隣に立つ。

「悪いが、俺はどんな組織にも属さない。言っただろ、俺は天の道を往く。」

そう言うど何時ものごとく天を指さすカブト、するとザビーも何時もの雰囲気に戻って。

「やっぱり・・・お前だったか、カブトの正体は。」

「そっちこそ、女の方がライダーだったか。そんなことより、一匹取り逃がしたぞ。そいつを倒す事が先決だ。」

お互いに相手の正体が分かったところでカブトから逃がしたワームを追うことを提案される、カブトとザビーが合流した時、カブトの相手をしていたワームは乱戦のどさくさにまぎれて姿を消していたのである。だがザビーはそれを鼻で笑うと・・・

「あいつならばはくは行動を起こさないだろう、戦闘をしてすぐだし、少しぐらいゆっくり話したって罰は当たらないんじゃないか？」

そう言うてカブトの左隣に立つザビー。

「どうしても、組織に入る気は無いと？」

「当然だ・・・。」

「あ、そう・・・。クツ、アツハハハハハハハハ！」

依然として考えを改めないカブトに、ザビーは楽しげな笑い声を上げる。

「フフフフ、良かったよ、お前が考えを改めたりしなくて。あた

しとしても・・・お前と組むなんてまっぴらゴメンだしね・・・。」  
その瞬間二人の間の空気が変わる。カブトが周りを見ると、自分達の周りをシャドウが取り囲んでいる・・・敵意を剥き出しにしながら。

「何の真似だ？」

帰ってくる答えを予想しながら、カブトはザビーに尋ねる。

「カブトを倒す・・・それがあたしの使命。」

そう言った瞬間、ザビーがカブトに裏拳を放ち、カブトはそれを左手で受け止める。しばしの間二人の間に険悪なムードが漂うが・・・

「とまあ、此处でやり合ってもいいんだけどねえ。」

そう言つと拳を収めたザビーは、部下達と共にカブトから離れていく。

「今はあのワームを追つ、お前の相手はそれからだ。」

「ほう・・・すぐに来るかと思つたが・・・。」

「さっきの奴は食前酒、逃げた奴はオードブルだ。メインディッシュはその後で・・・な。」

そう言つと、カブトに向き直つてカブトを指さした。

「その時まで・・・首を洗つてじっくり待つてな。」

そう言つとザビーは再び歩き出し、カブトはそれを黙って見つめて

いた。

## 第4話 出会い（後書き）

というわけで第4話でした。原作の矢車さんと違いもう一匹のワームの存在に気付いてます、ですので今回は宣戦布告だけで本格的な二人のバトルはまた次回です。次回二人が本格的にぶつかるのでお楽しみに。



## 第5話 カブトとハチ（前書き）

どうも、黒服です。今回ついにザビーとカブトが対決します。どんな結果になるのかお楽しみに。

## 第5話 カブトとハチ

深夜・街中

結局あその後、逃げたワームを見つけることは出来なかった。だが久賀達はそう悲観してはいなかった、ワームの行動パターンは分かっていたわけだし人気のない所に行こうとする白い服を着た人物に狙いを絞って警護をつければいいだけの話である。そんな彼女の下に、三島から電話が来ていた。

『カブトを見逃したそうだな・・・何故だ?』

「あの時、ワームが一匹逃げ出しました。そのワームを追うことが先決だと思ったからです。」

『先にカブトを倒してしまおうとは考えなかったのか?』

「カブトは人を襲いませんがワームは襲います、つまりはそういうことです。それに、カブトとは横槍なしでじっくりやり合いたいと思ってきましたし。」

それを聞いた三島は内心で溜息をつきつつ、釘を打っておく。

『お前らしいな。ま、心配はしていないが。次は必ず実行に移せ。』

「分かってますよ、三島さん。」

『・・・その名前はなるべく使わないでもらいたい。』

「・・・失礼しました。」

『いいか、お前はZECTに恩がある身だ。それを忘れるな・・・。』

そう言って三島が電話を切ると、

「あんのクソ眼鏡が・・・。」

と愚痴をこぼした。もとより久賀達は三島の事が気に入らなかった、それこそ最近知り合った天道と同等かそれ以上に。あのどこか他人を見下しているかのような雰囲気を出しているところもそうだし、何より彼の食事が気に入らない。彼には味覚が無いらしいが、だからと言ってサプリメントと水で済ませるなど彼女からすれば考えられないことだった。いくら味覚が無いとはいえ、それでも形ばかりは味のある食べ物を口にするべきではないのか・・・というのは障害を持っていないものの傲慢だろうか？そんなことを考えつつ、久賀達は夜の街を歩いていった。

翌日・ZECT本部

この日久賀達にとって少々意外なことがあった、田所チームの見習い隊員である加賀美が自分の下で働きたいのだと言ってきたのである。正直な話なぜ自分のところなのかと思った。自分の部隊は三つあるシャドウの部隊の中でも特に荒くれ者が揃っている部隊である、良くも悪くも個性の強い者がいる。もともと加賀美が知っているシャドウの部隊が自分のところだけだということも分かっているのだが、田所あたりが教えたりはしなかったのだろうか？試しに思った事を聞いてみる。

「何であたしのところに来ようと思ったんだ？あたしの部隊はシャドウの中でも特にクセの強いが多い、田所さんに聞いたりしなかったのか？」

「勿論田所さんから言われました、久賀達さんの部隊はシャドウの中でも特に厳しい部隊だって。でも俺、久賀達さんの部隊の戦い方に惹かれたんです。久賀達さんのところに行けば、何か学べるん

じゃないかって思ってた……。」

それを聞いて内心で溜息をつく、正直に言っただけで自分はそんな大したことをしているつもりは無い。矢車のように特別な信条もなければ、影山のような情熱も持っていない。自分はただ部下達を失うことが無いようにしているだけである、それなのに此処まで言われるのは少々むず痒いものがある。加賀美の目を見ようと、そこにはこれでもかというくらいまっすぐな瞳があった。どうやら本気で自分の下で何かを学ぼうと思っただけのだろう、それを見て久賀達はしばらく自分のところに置くのもいいかと考える。

「お前の上官、田所さんはそれを承諾したのか？」

「はい、岬さんには怒られたけど、本部には田所さんが話してくれてるって。」

「あたしから何を学ぼうって言うんだ、お前は？」

「ワームを倒すためにも、俺ももっとも強くなりたいんです！」

その言葉を聞いて久賀達は苦笑した、まったくどこまでもまっすぐな奴だ、と。

「お前に一つ言っておく、あたしの部隊は生半可な覚悟じゃない。分かったか？」

「はい！……え？じゃあいいんですか！？」

「フツ、シャドウにようこそ。」

そういうと久賀達は軽くほほ笑んだ。

その後久賀達は部隊の連中がいる訓練場にやってきた、皆それぞれ訓練をこなしていたが彼女の姿を見るなり全員姿勢を正して彼女に向き直った。

「全員、楽にして良い。今日お前らに嬉しい知らせがある、この部隊に新しい仲間が加わることになった。入れ。」

久賀達に呼ばれ、訓練場に入る加賀美。その瞬間彼女の部隊の人間全員からの視線に若干たじろいだ。

「お前、田所さんとこの……。」

「しばらくあたしの下につくことになった、仲良くしてやってくれ。」

「このアマちゃんがですか？」

その播磨からの言葉に流石にカチンときたのか、少し強めの口調で彼に返す。

「俺はアマちゃんじゃありません、加賀美 新です。よろしく。」

「なあアンタ。」

その時手前にいた女性隊員の神田が加賀美に声をかけた。

「アンタ、うちがどういう部隊なのか知っててここに来たのかい？」

「ここが他所より厳しいってことはよく分かってますけど……。」

「そう言うことじゃないんだよ。うちは必要とあれば潜入工作、その他諸々の高い技術を求められるヤバイ任務を多く回される、あたしが何を言いたいか分かるかい？」

「えーっと……。」

「見習いのど素人じゃあついて来れるわけないって話だよ。」

その言葉に流石に加賀美も押し黙ってしまう、厳しいと分かってはいたがまさかここまでストレートに言われるとは思わなかった。何も言い返せない加賀美、その時久賀達が口を開いた。

「そこまでにしる神田、確かにこいつは見習いだがなかなかガッツがあるし見所がある。あたし達と行動を共にすることで何かしらこいつにも影響があるだろう。」

久賀達はそこで話は終わりだと言うと、加賀美を含めた全員に訓練に戻るように言う。ちなみに加賀美の面倒は神田と葛西が見ることになるらしい、先程は加賀美に厳しい言葉をかけた神田だが仲間思いで面倒見もいいからという判断である。

しばらく訓練につき合っていた加賀美（あまりのハードさに一瞬天国にいる弟の姿が見えた）は、気になっていたことを口にする。

「あの・・・久賀達さんって、皆さんにとってどういう隊長なんですか？」

「あたしらはみんな一度は隊長に助けられてる。」

加賀美が口にしたのはこの部隊の者から見た久賀達の人物像である、彼は久賀達とはそんなに多くの時間を共にしてはいないが、それでも何かしら感じるものがあった。自分でそうなのなら、彼女の部下達からは彼女がどう見えるのだろうと気になったのである。そして神田の口から出たのは、部隊の誰もが彼女に助けられているというものだった。

「隊長は決してあたしらを見捨てない、例え逃げる時でも隊長は必ず殿に立ってあたしらが逃げる時間を稼ごうとしてくれる。」

「隊長が初めてザビーになった時もそうだった。」

そう言って葛西は彼女が初めてザビーになった時の事を加賀美に話した。正直彼は驚いた、ワームに対して自分から接近戦を仕掛け、あまつさえ素手でワームと戦おうとまでするとは・・・。

「多分ザビーゼクターも隊長のそんなところに惹かれたんだろうさ。」  
「そう、そしてだからこそあたし達も頑張れる。少しでも強くなつて、少しでも隊長の役に立てるように。そうしてあたし達は強くなつていったんだ。」

「なるほど・・・俺、そう言っの好きです!」

その言葉を聞いて加賀美は感動した、お互いがお互いを思いやるからこそ得ることができた力。それは正しく彼が望んでいた戦うための力でもあったからである。

その後も他の隊員達と共に訓練を行い、自分も少しでもこのチームの役に立てるように頑張ろうと決意を新たにするのだった。

数分後・ZECT本部前

「ワームの奴、随分と好き勝手に暴れてくれてるみたいだな。」

久賀達はZECT本部前にてそう愚痴をこぼした、というのも依然として前回逃がしたワームによる被害者が続出しているからである。既に担当しているエリアのチームにはワームの標的が白い服を着た人物であるという情報を行き渡らせてある、にも拘らず相変わらずワームの足取りを掴むことが出来ていないのだから、彼女としては愚痴りたくもなるというものである。

「どうかしたんですか?」

「ああ、この間取り逃がしたワームについて・・・ちよつとな。」

「この間のつて・・・白い服の人を狙うつていう、あいつまだ見つからないんですか?」

「ああ、そうらしい。このまま行くと、あたしらシャドウが直々に動く必要があるかもな。」

「なるほど・・・って、どこへ行くんですか？」

久賀達が愚痴をこぼしているところへ加賀美がやってきて、久賀達の雰囲気から何かあったのかと聞く。別段隠すようなこともないので、あっさりとは加賀美に前回取り逃がしたワームが依然補足されていないことを伝える。このまま行けば現地のチームでは対処が難しいとみてシャドウが派遣されることになるであろう。そう加賀美に伝えつつ、久賀達は加賀美に一言「買い物」とだけ伝えた。

「そんなの俺が行きますよ！」

「いや、なかなかに美味しい豆腐屋を見つけな、どうせなら影山とかにも食わせてやろうかと思ってな。」

調理するのは自分ではないが、と言うことを付け加えて、加賀美を伴って先日いった豆腐屋へ向かっていった。

商店街・豆腐屋

「ない？一つも？」

たどり着いた豆腐屋で店の主人に聞かされたのはそんな言葉だった。

「アツハツハツハツハツ！悪いね！全部買い占めて行っちゃったんだよ。ほら！天の道を往く〜とかいう人。」

「あいつ・・・ッ！」

「オイ、どこ行くんだ？」



相変わらず大笑いする主人の言葉に、加賀美は怒りを滲ませながら走り出す。久賀達がそれを引き留めどこへ行くのかと問えば、天道から豆腐を取り返しに行くとのこと。そしてそのまま彼女の言葉も聞かずに走って行ってしまった。

「やれやれ・・・全くあいつは。」

そんな加賀美の行動に思わず苦笑すると、天道の行動に内心で大きく舌打ちをする。普通に売り切れたのならまだいい、問題なのは天道というただ一人の人間に全ての豆腐を買い占められたということだろう。本当にあいつは何を考えているのやら・・・。

( やっぱりあいつは・・・気に入らないな。 )

同時に目当ての物が買えなかった客が目の前にいると言つのに相変わらず大笑いしている主人も気に入らなかった。

「天道!!!」

天道に追いついた加賀美は彼の名を叫ぶと彼の方に掴みかかった。

「何で豆腐を買い占めたりした!？」

「ほう、お前もあそこの豆腐が欲しいのか？」

「久賀達さんだ!」

「なんだと?」

加賀美の気迫に天道は彼もあそこの豆腐が目当てだったのかと思っただが、加賀美の口から出たのは久賀達の名前だった。

「・・・分けてやろうかと思っただが、あの乱暴女に分けてやる分な

らないな。」

「久賀達さんのことを悪く言うな、あの人はお前なんかよりも何倍も素晴らしい人だ。豆腐だって、同僚の人に食べさせてやるためだったんだぞ。」

「・・・相変わらずの仲良し子よしだな。」  
「なにい？」

その時、加賀美の携帯から着信音が鳴る。相手は岬からで、ワームが出たから久賀達にも来てもらえというものだった。電話を切るともう一度天道にワームからは手を引くように言つとその場を去つていった。

#### 結婚式場・控室

久賀達が着くと、そこでは既に田所達が現場検証を行っていた。加賀美は施設内の人を避難させるかというが、久賀達が既にワームが擬態している可能性があるからとやめさせた。結婚式はもう一つ予定されているらしく、シャドウが式場を警護して安全を確保することに決まった。同時に毒の分析結果から、犯人は一連の事件と同一のワームによるものであることが分かる。加賀美と岬が式場内にいる白い服装の人物を片っ端から調べていくが、特にこれと言った成果も上がらず遂に式が始まってしまふ。

「久賀達さん、中の様子は？」

「うちの連中がもうチェックした。特に問題は無かつたし、警備の方は問題ない。ワームが入り込む隙は無いよ。」

「じゃあワームは既に施設の外へ？」

そう尋ねてきた加賀美に久賀達は難しそうな顔をする、それはワ-

ムに逃げられたかもしれないという予感から来るものではなく、むしろその逆だった。

（なぐんか見落としてる気がするんだよなあ、警備自体は完璧な筈なのに。あたしは一体何が気になってるんだろう・・・？）

行動に特に問題は無かった。新郎新婦、その他式場内にいる人間は全てチェックした。結果は特に問題もなく後はワームの侵入を阻止するだけだ・・・というのに、彼女の本能が警鐘を鳴らしている。今までもこの警鐘に助けられたことは多くあるので、これが杞憂ではないだろうことは確信を持って言える。ただ何に対して警鐘を鳴らしているのが彼女自身分からなかった。

「岬、エリアB4を重点的に捜査する。」

「はい。」

そうこうしていると田所が岬を伴ってその場を離れていった。それを見て何時までも悩んでいても仕方がないと考えて、施設の警備は部下達に任せて自分も田所について行こうとする。その時、式場内からひどく聞き覚えのある声が聞こえてきた。嫌な予感がしつつも式場内に入る久賀達と加賀美、するとそこには・・・

「おばあちゃんはこの方も言いました。汝、天の道を往き、総てを司る・・・べし。」

神父の服装に身を包んだ天道がいた。正直な話久賀達は驚くと同時に呆れ果てた、いくらなんでも大胆すぎる。そもそも一体どうやって神父になりましたのか？

「お前・・・一体全体こんなとこで何やってんだ？それ以前にどう

やって入ってきた。」

「何が警備に問題は無いだ・・・招かれざる客がもう一人入り込んでいるぞ。」

「何!？」

その言葉で式場内の客がざわつき始め、久賀達も慌てて周囲を見渡す。しかし当然のことながら見ただけではワームとそうでない人は分からない。

「此処の聖歌隊、この間の矢車とか言う奴が言ってた『パーフェクトハーモニー』とやらが乱れてないか？」

「ッ!？」

その言葉を聞いて慌てて会場にいる聖歌隊を見上げ、それと同時に彼女は自分の失態によろやく気付いた。聖歌隊の存在を完全に失念していた、彼らも白い服装をしているのだから今回のワームが擬態している可能性が十分にある。それを忘れて新郎新婦、白い服を着た客やコックなど真っ先に白い服装として思い当たる人達だけをチェックしたのは完全に自分のミスである。一人の聖歌隊の青年を天道が指さすと、その青年が飛び降りながら擬態を解く。会場内はたちまちパニックになり、久賀達と加賀美は会場内の一般人を避難させる。あらかた避難させ終わったところで久賀達がワームの方を見ると、ちょうどワームがステンドグラスを突き破って外に逃げているところだった。それを見て即座にカブトに変身して追いかける天道、久賀達はそれを黙って見ているだけだった・・・。

数分後、久賀達は未だに式場内にいた。その手は握り締められ、よく見ると微妙に震えている。彼女は非常に苛立っていた、天道にではなく自分自身に。聖歌隊の存在を見落としてまんまと天道にしてやられてしまった。あの場で苛立ちに身を任せて天道と共にワーム

を追いかけて始末しても良かったのだが、自分がやると手柄を横取りした様な気になるし、目の前で天道にワームを取られるのも癪だったから彼女はその場に残っていた。

「隊長、先程報告が入りまして・・・会場から逃げたワームをカブトが始末したようです。」

「ふーん・・・。」

自身への怒りに震える彼女を加賀美が見ていると、カブトがワームを始末したらしいことを報告に戸高がやってきた。久賀達はそれを聞いて気のない返事を返すだけだった・・・。

B i s t r o l l a S a l l e

ワームを倒した天道は、その足でSalleまで来ていた。

「じゃあ7時ごろに来てくれ。」

「・・・いいのか？ホントに。」

「決まってるだろう、主賓はお前だ。」

天道は自分の家で行う豆腐パーティーに使う豆腐を引き取りに来ていたのだ。天道からの誘いに若干申し訳なさそうにしながらも、厨房から出ていこうとする。すると店の中にいつの間にか人影があることに気付く。

「だれか・・・いる・・・。」

「何だお前か・・・。」

そこにいたのは久賀達だった、俯いているので表情は分からないが、

彼女が纏っている雰囲気は決していいものではなかった。

「ちょうど良かった。これ・・・取って置いてやったぞ。同僚とやらに食べさせてやれ。」

「ふん、今は豆腐何かに興味は無いよ。・・・ちよつと来な・・・。」

そう言つて天道は豆腐の入った器を久賀達に差し出すが、久賀達は受け取らずに天道に自分についてくるように言う。天道も久賀達から感じる只事ではない雰囲気には大人しく従つ、下手なことをして此処で暴れられても困るからである。

それから場所を移した二人は、お互いに夕日の方を向いていた。自分達が今いる場所は特に人もいない、あまり周りに迷惑はかからないだろう。

「どうしてもやるのか？」

「ライダーは二人もいらぬ。それに・・・お前があたしのサラダを取つちまつたからな、もう腹ペコでイライラが収まりそうもない・・・カブトはあたしが倒す。」

「星がどれほど輝こうと、太陽には敵わんぞ・・・。」

「あたしは星じゃない。あたしは月、暗い夜道を照らして人々を導く満月・・・。そして・・・月と太陽は決して相容れない。」

「昼にも月は見えるぞ？」

「でも夜には太陽は見えない・・・夜と言う人々が明日への希望を抱きながら眠りにつく時間に、無駄に光り輝く太陽は邪魔でしかない。」

お互いに言葉で相手を牽制し合うが、お互いに決して譲らない。これ以上話していても無駄だと考えた二人は、お互いに向きあってそ

それぞれの変身ツールーライダーブレスとライダーベルトーを翳す。その瞬間お互いの背後からザビーゼクターとカプトゼクターがぶつかり合う、何度もぶつかりあった拳句お互いに弾き飛ばされたゼクターは、それぞれの資格者の手に渡る。

「変身。」

H e n s h i n

ゼクターを手に取った二人は変身すると、お互いに近付きあった。そしてある程度近づいたところで立ち止まると、同時にライダーフォームへとなる。

「キャストオフ。」

C a s t o f f

その瞬間お互いに一瞬距離をとると、一気に距離を詰めて戦い始めた。カプトの蹴りをザビーが受け止め、ザビーのパンチをカプトが捌く。

「フッ、セイツ、ハッ！」

「ハッ、フンツ、ハッ！」

しばし攻防が続いていると、ザビーの蹴りがヒットしたカプトが吹き飛ばされる。カプトはそのまま橋の柵に叩きつけられ柵を破壊するも何とか持ちこたえた。追撃を仕掛けるべくザビーがカプトに殴りかかるが、体勢を整えたカプトに攻撃を捌かれ逆に投げられて橋から落ちてしまう。

「グウツ、・・・チイ！」

「二人が戦う必要なんかない！もうやめてくれ！！！」

カブトも橋の下の歩道に降りてくる、するとその時ひよりから天道と久賀達がヤバい雰囲気はどこかへ行ったという情報を聞き追いかけてきた加賀美が表れる。加賀美は必死に戦いをやめるように言うが、久賀達は聞く耳を持たずライダーステイングの体勢に移る。

「ライダーステイング！」

R i d e r   S t i n g

ザビーがカブトにライダーステイングを叩き込もうとした瞬間加賀美は止めようと走りだが、その瞬間頭上から何か落ちてくる。上を見上げると先程の戦いで破壊された柵が崩れ落ちてくる所だった。思わずその場で立ち止まり手で頭を守ろうとする、しかし何時まで待っても瓦礫は落ちてこなかった。恐る恐る顔を上げるとそこには……

「天道！久賀達さん！」

クナイモードのカブトクナイガンを振り上げたカブトと、ライダーステイングを放った後のザビーの姿があった。加賀美に瓦礫が落ちる寸前二人が瓦礫を破壊して加賀美を守ったらしい。

「……邪魔が入ったな。」

「まだ続けるのか？」

「当然だ、言っただろ？あたしの使命はカブトを倒すことだって……まだ勝負はついちやいない。」

そう言って再び戦おうとする二人を加賀美が止めようすると、突然久賀達の携帯に着信が入る。舌打ちしつつも変身を解き携帯に出ると、相手は戸高だった。



「何だよ戸高！今いいところ」ワームが表れました！『何！？』  
『現在近場にいるチームが応戦しているとのことですが、成虫が混  
じっているため我々にも出撃要請が入りました。急いで戻ってくだ  
さい！』

「チツ・・・ええい、クソツッ！！」

彼女は苛立ちながらも電話を切ると、カブトを指さして言った。

「今回は邪魔が入ったから見逃してやるけど、この次あった時は必  
ず倒してやる。いいな！」

そついうと久賀達は即座に現場に向かうべく走り出し、加賀美は一  
瞬どちらと行動を共にするか迷ったが、久賀達から「早く来い！」  
と言われとりあえずそれに従った。

久賀達と共に現場に向かう途中、加賀美の胸中は大きく揺れ動いて  
いた。

## 第5話 カブトとハチ（後書き）

というわけで第5話でした。勝敗はつかずドローと言うことになりました。本当は原作と同じくカブトがベルトを壊される話にしようかと思っていたのですが、少し話にオリジナリティを出そうと思い対決シーンに入る直前に変更してこのような結果になりました。今後この二人がぶつかり合うことはありますが、果たして決着がつかく時が来るのか？

それでは次回をお楽しみに。

## 第6話 二者択一（前書き）

どうも、黒服です。今回は久賀達にある危機が訪れます。その危機が一体何なのか、どうかお楽しみに。

## 第6話 二者択一

ザビーとカプトが戦った翌日、久賀達の部隊に再び出動命令が出ていた。その準備のために集まっているシャドウ第2番隊と共に出動準備を行っている加賀美の顔は、冴えないものだった。というのも先日の戦いでザビーの目的を知ってから、自分はどうすればいいのかと考えていたからである。

「何だ加賀美？しけた面しやがって。」

「播磨さん……。」

そんな加賀美の姿を見た播磨は、彼に声をかけた。先日のカプトとザビーが戦った直後の戦闘では加賀美は後方に控えており、今回のように現場近くで行動を共にすることは無かった。それが彼を緊張させているのだろうと播磨は考えていた。

「もしかしてビビってんのか？安心しろよ、この部隊は久賀達隊長が率いる第2番隊！そんじょそこのワームなんかには負けやしねえよ。どれ、お前にこの部隊の武装を見せてやる。」

そう言うと播磨は部隊の装備が置いてある所に近付いて行った。

「こいつがマシンガンブレード！まあどのチームも持ってるだろうが、使い方さえ間違わなきゃ蛹どもなんてイチコロよ。そしてこいつが最新鋭装備ガトリングガン！強力な炸裂弾を連射できる部隊で一番の火力を持った武器さ、こいつがありゃあワーム共なんてあつという間に蜂の巣よ。」

その後もマシンガングレネードやアクティブセンサーなどの装備を

加賀美に見せていく播磨、その姿に加賀美もとりあえずこの問題はあとで久賀達に直接問い合わせるとして、今は出勤に備えるべきだと考えることにした。

港

シャドウ第2番隊とワームの戦いはシャドウの方が圧していた、もともと数の上でも彼らの方が有利であったし、何より彼らにはザビーがいる。ザビーの力の前では蛹数体では力不足だった。加賀美はそんな部隊の戦いを少し離れた所から撮影している、そんな時彼の目に戦闘区域に近付いてくる1台のワゴン車が見えた。それは彼も良く知っている、田所チームの移動指揮車である。案の定ワゴンからは田所と岬が降りてくる。加賀美は近付いてくる田所達に軽く会釈するとすぐに撮影に戻った、彼が視線をザビーの方に戻した時、戦いは終わるところだった。

「フツ、フツ、ハッ！」

ザビーのコンビネーションパンチにより残っていたワームは一掃され、それを確認したザビーは変身を解いた。その姿はどこか不満そうだった、まるで楽しみにしていたモノを何時までもおあずけにされているような感じに……。

「見事だな、久賀達。」

「ありがとうございます。」

「カブトは現れませんでしたね。」

久賀達が田所と挨拶していると、岬がカブトが来なかったことを不思議に思っけて口を開く。

「ザビーだけでは何か不満でも？」  
「いえ……。」

岬の言葉に若干怒りを滲ませつつそう口にする久賀達、岬の方はその気迫に圧されて押し黙ってしまった。

「ふん、次に遭った時が……奴の最後だ。もとよりカブトを倒すのはあたしの使命だし、それ以前にあの男も気に入らないしな。」  
「……頑張ってくれ。」

「ライダーは何人もいらぬ、特に組織に属さない者など……。」

久賀達のその言葉に驚く岬、田所はしばらく考え込むように黙った後久賀達を激励してその場を去っていった。加賀美は撤退していく部隊の最後尾についていった、その際に彼は岬達の方を名残惜しうに見てから踵を返していった。

定食屋 『かゆうま亭』

あの後久賀達は矢車、影山と合流し、加賀美を伴って以前矢車達に紹介した店（第2話参照）に来ていた。すでに加賀美と影山は自己紹介を済ませており、今はそれぞれが注文した定食に箸を伸ばしているところだった。ちなみに注文した品は久賀達が焼肉定食、矢車と影山がチキンカツ定食、加賀美がサバ味噌定食である。

「そうか……カブトと決着はつかなかったか。」  
「残念でしたね。」

久賀達は二人にまあな、と答えると

「でも次に遭った時は必ず倒して見せるさ、あいつを倒すこと位なんてことは無い。次は、必ず勝つ。」

そう言っただけ定食をあっという間に平らげ、2杯目のお代りをする久賀達。その時今まで黙って三人の会話を聞いていた加賀美が口を開いた。

「あ、あの・・・本当にカブトは倒さなきゃならないんでしょうか？」

「どっという意味だ？」

「一応今までだってカブトは人を守るためにワームと戦ってきてくれたわけですし、それを組織に従わないって理由で倒すのは・・・ちよつと・・・。」

加賀美がそう口にした瞬間久賀達の動きがピタリと止まり、それを見た矢車と影山は彼女から若干距離を取った。

「・・・いいか加賀美、あたしらはシャドウだ。それが意味するとは分かるか？」

「え、え」と・・・。

「あたしらには任務に意見を言う権利なんてないんだよ、多少の寄り道はともかく任務の内容についてあれこれ考えるのはお門違いで奴だ。」

久賀達はそれに、と付け加えて。

「分かつちやいるとは思うがあたしはあいつが大っ嫌いだ、そいつを倒せば組織のためになっておまけに気に入らない奴も叩き潰せる。こんなにいい仕事をやめるわけねえだろ・・・。」

「で、でもそれじゃあ今まで天道がしてきたことは「加賀美……」、はい……。」

「一度しか言わないから良く聞いておけ、お前は組織に属するものなんだ。分かってるな？」

その言葉に頷く加賀美、それを見て久賀達は続ける。

「組織の人間には最低限の条件として上からの命令には従う義務がある、たとえどんなに気に入らないこととはいえ組織に属するものはそれに従わなきゃならないんだよ。そうしないと、組織って奴は瓦解しちまうのさ。」

その言葉に加賀美は黙るしかなくなってしまう、久賀達の言いたいことも良く分かるのだ。自分もそれを覚悟しないで入ったのかと言えば嘘になる、しかしそれでも今回の事は彼のとってそう簡単に割り切れるものでもなかったのである。

そうこうしている内に全員食べ終わり（ちなみに久賀達は4杯分のお代りをした）、矢車と影山の二人はZECT本部へ、そして久賀達と加賀美は……

「Saileに!？」

「ああ、現状あいつがいる可能性が一番高そうなのがあそこだからな。ワームが出てくればカブトも姿を現すかと思っただがなかなか出て来やしねえ、だったらこっちから行ってやろうかと思っただ。」

もっとも可能性が一番高そうと言ってもそれはあくまでも比較的である、久賀達が天道の立場だったら狙われているのに態々自分が行く可能性があるところに行くことはしない。天道が自分と同じことを考えていればまず雲隠れしているだろう、久賀達は心の中でそう思っていた。



(もしいなかったら・・・内の連中も駆り出してしらみつぶしにでもするかなあ・・・)

そんなことを思いながら久賀達は加賀美と共に『Bistro la Salle』へと向かって行った。

Bistro la Salle

正直に言っただけ信じられなかった、まさかこれほどまでのバカだとは思ってこなかった。

「よお、また来たな。」

「て、天道!？」

そこにはSalleで寛いでいる天道の姿があった、あまりにも堂々としたその姿に久賀達も勝負を挑むよりも呆れて思わず額に手を当ててしまう。加賀美は慌てて天道を引っ張っていった、天道はそれに面倒くさそうな顔をした。

「何だお前は、相変わらず騒々しい・・・。」

「(ひそひそ)バカ!お前今の自分の状況分かってんのか!?お前今狙われてるんだぞ!」

「だからどうした、来たいのなら来ればいい。俺は逃げも隠れもしない・・・。」

「ほお・・・いい度胸じゃねえか。」

そう言っただけ天道に近付いて行く久賀達、その体からは尋常ではないオーラが漂い、周囲にいる客も久賀達から距離を取っている。今に

も天道に殴りかかりそうな久賀達の姿に、天道が待ったをかけた。

「勝負は何時でも受け付けるが、今は駄目だ。」

「何？」

「今は食後の一服の最中だ。食事の楽しみとは、待っている時間と食べている時間、そして食後の余韻を味わう全ての時間からなるものだ。」

「ふざけるな、なんならこの場でケリをつけたっていいんだぜ……。」

そう言つて凄む久賀達に、天道は涼しい顔でいいのか？、と問う。

「周りを見てみる、ここには普通に食事を楽しみにしてきている客達もいるんだぞ？そんな中で暴れるつもりか、お前は？」

そう言われて周りを見渡す久賀達、確かに周りには一般客も数多い。目があった客など久賀達の気迫に完全に怯えている、小さい子供など泣き出しそうだ。こんな所で暴れるのは正直に言つて得策ではないだろう、彼女とてそれくらいの倫理観は持ち合わせている。

「……チツ。」

久賀達は一度舌打ちすると、踵を返して荒々しく出ていった。恐らくこの後はイライラを解消するために自棄食いでもするものと思われる。とりあえず最悪の事態は免れた、と加賀美が一安心していると、彼の目に見知った一人の女性の姿が映る。

「……岬さん？」

そこにいたのは加賀美の先輩の岬だった、岬は加賀美に見つかり

その場を去っていき、加賀美はそれを追いかけていった。

川辺

加賀美は岬と共に川辺のテラスに来ると、今現在彼が悩んでいることを打ち明けた。

「どうやって久賀達さんを止めたらいいか？」

「はい……。」

加賀美はカブトとザビーが戦っている最中に、落下してきた柵の残骸から二人が自分を守ってくれたことを話した。

「あの時、天道はともかく久賀達さんも戦いよりも俺を助けることを優先してくれたんです。だから俺は二人とも本当は戦うべきじゃないと思うんです！でも、それを正面から久賀達さんに言ったって多分無視される。」

おそらく無視どころか全力で否定されるであろう、それとこれは別問題だ……と。

「だから、どうすれば久賀達さんを止められるかわからなくて。」  
「なるほどねえ……、こればかりは難しい問題ね。今回に事は久賀達さんの個人的な事情以外にも組織の一員としての自覚が絡んでるんでしょうから、あの人もあれでいて組織の一員としての自覚云々はしっかり持つてみたいだし……。」

そう言って黙りこむ岬、その時

「悪いが何言われてもあたしはカブト討伐をやめる気は無いよ。」  
「ッ!? 久賀達さん……。」

いつの間にかテラスに降りる階段の上に久賀達が出た、彼女は加賀美達にゆっくりと近づいていった。

「一体天道君の何がそんなに気に入らないんですか? いくらなんでも敵視し過ぎだと思えますけど……。」

「……あたしとあいつは絶対に分かりあえない、それが理由だ。」

最初に出会ったときから久賀達は天道の事を嫌っていた、そこにあるのは純粹に彼の性格が気に入らないというモノだけではなくもっと根深いものがあることを久賀達は自覚していた。恐らく自分は天道 総司という男に嫉妬している、彼の常に自身に満ちているところに、彼の絶望を知らないその目に。そしてそれを認めることは彼女のこれまでの人生全てを否定することに繋がりがねない、だからこそ久賀達は天道の事が気に入らなかつた。そうしてしばらく久賀達が岬達と向き合っていると、久賀達の携帯に着信が入る。

『ワームだ……始末しろ。』

相手は三島で、内容はワーム討伐に向かえというものだった。久賀達はそれに了解の旨を伝えるとマシンゼクトロンの下に向かって歩いた。

(今度こそ……出て来てくれるかな?)

次こそカブトが現れてくれることを願いつつ、マシンゼクトロンに跨る久賀達。加賀美はそれを見て天道のもとへ向かうことにした、

天道にワームを倒しに向かわないように警告するためである。

倉庫街

シャドウ第2番隊は数体のワームに対して銃撃を加えていた。そこに久賀達が近付いて行く。

「変身！」

H e n s h i n

倉庫街に近付き、銃声が聞こえるくらいにまでなった時に久賀達はザビーゼクターを呼び出した。ザビーゼクターは自分からライダーブレスに収まり、久賀達はザビーへと変身した。ザビーはワームの群れに突っ込み次々とワームを跳ね飛ばし部下達と合流する。

「各小隊、周囲に展開して十字砲火でワーム共を殲滅する。」

その指示を聞いて彼女の部下達はすぐさま小隊ごとに周囲に展開し、ワームに対して周囲から銃撃を加えていく。ある程度ワームにダメージを与えたのを確認してザビーはマスクドからライダーフォームになった。

「キャストオフ。」

C a s t o f f C h a n g e W a s p

そして一気にワームにたたみかけようとした時、ふと頭上に気配を感じてそちらに目を向ける。そこには彼女が待ち望んでいた人物・  
・天道 総司がいた。彼は加賀美の説得を無視してワームを倒しに来ていたのである。

「変身！」

H e n s h i n

天道はカブトに変身するとワームの群れに向かって飛び降りた、そしてワームに攻撃を仕掛けるが、そこにザビーからの攻撃を受ける。

「戸高！しばらく指揮はお前に任せる、あたしはこいつを始末する！」

「わかりました、任せてください。」

戸高からの返事を聞いてザビーはカブトに向かっていく。待ちに待っていた瞬間、今度は逃がしたりしない。

「キャストオフ。」

C a s t o f f C h a n g e B e t t l e

ザビーが殴りかかると、カブトはキャストオフしてライダーフォームとなる。その際に弾き飛ばされてきたマスクドアーマーに一瞬怯むが、持ち直したザビーはカブトと戦闘を始める。その時シャドウと戦っていたワームが脱皮を始めた、しかし……

「ッ！？な、何！？」

脱皮したのは一匹だけではなかった、同時に三匹のワームが成虫となったのである。これにはザビーも焦った、彼女の部下は彼女直々の訓練で成虫一匹程度なら足止めすることもできるほどの実力があつた。だが相手が成虫三匹となれば話は別だ、いくらなんでもそんなの相手に出来るわけがない。彼女はすぐに部下の指揮に戻ろうとしたがカブトの存在がそれに待ったをかける。組織の一員としての

自覚もそうだが、彼女は2度もカブトを取り逃がしていることもあって立場が微妙に危うくなっていた。この機を逃せばもしかしたら組織から捨てられるかもしれない、家族も全て失った彼女からすればここが最後の居場所であった。それを失うかもしれないという懸念が彼女に決断を迷わせる、彼女が任務と部下の間で揺れ動いている時戸高が彼女に声をかけた。

「隊長！此処は我々が抑えて見せます、隊長はカブトを！」

「戸高・・・分かった！」

そういうとザビーはカブトに再度攻撃を仕掛けた、だがその攻撃はいつもの正確さを欠いていた。

「どうした？攻撃にキレが無いぞ？」

「うるさい！」

戸高からはカブトに集中するように言われたが、三匹の成虫を相手にしている部下達の事がどうしても気になってしまう。案の定彼女の部下達はクロックアップしたワームに次々と弾き飛ばされてしまふ、それが余計に彼女の集中力を奪う。

「そんなに部下達の事が気になるならあっちに行ったらどうだ？」

「うるさいっつってんだよ！あたしはお前を倒す、絶対に！そうしないと・・・。」

そこでザビーは一旦言葉を切ると、絞り出すように言葉を紡いだ。

「そうしないと・・・あたしはあたしを保てなくなる、あたしがあたしでなくなるんだ！？」

そう叫んでカブトに突っ込んでいくザビー、その彼女の目に弾き飛ばされてきた部下の姿が映る。

「ぐ、うう……。」

「ッ!? あ……う……うあああああああ!」

それを見た瞬間一瞬たじろぐと、何かを耐えるかのような叫び声を上げ……

そのままカブトに背を向けて部下達のもとに走っていった。

「各小隊、一時態勢を立て直す! 負傷者を囲んで円陣を組め!」

そしてそのまま成虫ワームと戦い始めた。

「それがお前の選んだ道か……あいつも加賀美並みに面白い奴だな。」

ワームと戦うザビーを見て、カブトはそう言葉を漏らした。そしてザビーが相手になっているワームの内の一体に攻撃を仕掛けた。

「フツ、ハツ、セイッ!」

「ハツ、ハツ、フンッ!」

ザビーとカブトは成虫ワームを相手にしていき、ゼクトルーパーは蛹ワームを相手にする。カブトとザビーが成虫だけでなく蛹にも攻撃したので、蛹ワームはものの数分で殲滅され、残りは成虫ワーム三匹だけになっていた。ザビーのパンチとカブトのキックがそれぞれ一体のワームを弾き飛ばし、二人はそれぞれ必殺技を放つ。



「ライダーステイング！」

Rider Sting

「ライダーキック。」

Rider Kick

ザビーのライダーステイングとカブトのライダーキックが炸裂した二匹のワームは爆散し、残ったワームはクロックアップで逃げ出して行った。カブトは逃げたワームを追い、ザビーは部下達に駆け寄っていった。

「大丈夫か！？」

「た、隊長……。」

変身を解いた久賀達が部下達に駆け寄り、皆大なり小なり負傷しているようだが幸いなことに全員生きているらしい。それを見て久賀達はホッと一息ついた。

「……すまなかった。」

「た、隊長！？」

「あたしが決断を迷ったから、お前達に無用な被害を出した。本当にすまない……。」

突然頭を下げて謝罪してきた久賀達に、戸高をはじめ彼女の部下達は慌てて頭を上げさせようとする。もとはと言えば自分達が不甲斐ないせいだ、自分達がワームを足止めしきれなかったから久賀達もカブトとの戦闘を中止して自分達の方に来た。

「我々こそ申し訳ありません……我々が不甲斐ない所為でまたカブトを……。」

「お前達に比べれば安いもんだ、気にするな。」

彼女はそう言って苦笑する。まったく、自分も加賀美の事をどうも  
う言えない。組織の命令に従うよりも部下達を守ることを取った、  
感情を理性で抑えることができなかつたのだから。今回の事で自分  
は3度カブトを取り逃がしている、となれば恐らくは……。  
そんなことを考えていると、本部から三島の下へ行くようにとの連  
絡が来た。彼女はやはりきたか、と考えつつ部下達と共に本部に戻  
っていった。

「お前からザビーの資格者と、シャドウ隊長としての権限を剥奪す  
る。」

本部に戻ると、そんな言葉が三島から久賀達に伝えられた。

## 第6話 二者択一（後書き）

というわけで第6話でした、久賀達は原作の矢車さんと違ってカブトではなく部下の方を取りました。それだけ彼女にとって部下や仲間への存在は大きいということでもありませんね、ただその所為で組織からは睨まれることに……。彼女が今後どうなるのか、次回もお楽しみに。それでは。

## 第7話 降格と新たな八子（前書き）

どうも、黒服です。今回は後の原作の流れに関係のあるシーンが多い話です、前回から久賀達がどうなっていたのか、お楽しみください。

## 第7話 降格と新たな八チ

ZECT本部

「お前からザビーの資格者と、シャドウ隊長としての権限を剥奪する。」

三島から聞かされたその言葉は、久賀達が予想していた通りのモノだった。自分はすでに3度もカブトを取り逃がしている、2度目は加賀美を守るために、3度目は部下を優先して。

「あの場ではそれが最善だと思って行動したままでです。任務の重要性も理解してますが、あの場での損害を考えるとカブトより部下を優先させるべきであると考えました。」

「・・・お前はもう少し利口だと思っていたがな、とにかくお前は指示があるまでしばらく待機している。」

「了解・・・。」

そう言うと久賀達は部屋から出ていった。

久賀達は三島の下から去って行ったあと、真っ先に部下達のところに向かった。自分がもう彼らの隊長ではなくなったこと、しばらくは彼らは矢車と影山の部隊の予備戦力になるだろうことを伝えるためである。

「・・・て訳だ、しばらくお前らは矢車達に世話になりな。」

「ちよつと待ってくださいよ、いくらなんでもそれはあんまりですよー！」

「そうです、隊長は我々を助けるためにカブトを見逃したんです。」

それなのに隊長が外されるなんて……。」

戸高達は自分達の弱さを悔いていた、あの時ワームが脱皮する前に倒せていたら、あの時ワームにクロックアップを許していなかったら、久賀達が隊長の任を解かれることもなかっただろうに。

「しょうがないさ、あたしは組織の命令を何度も無視したんだ。むしろクビになったりしないだけまだましだったよ。」

そう言うと久賀達は部下達の下から去っていった、その姿に部下達はもう引き留めることもできなかった。

## 久賀達宅

あの後適当なところで夕食を食べた久賀達は、自宅のマンションに戻ってきていた。そしてベッドに横になると、ぼんやりと今回の事について考えていた。

（まあしょうがないよな、多分あの時カブトを取ってたらあたしは何か大事なモノをなくしてた。だったらまだ組織での立場が悪くなっただ方が……。）

そこまで考えて久賀達はふと自分の左手首に視線を向ける、そこにはシャワーを浴びる時と寝る時以外は片時も外さなかったライダーブレスが無かった。それに彼女はふう、とため息をつく。ZECTでの立場が若干悪くなったことに関しては別に構わない、待遇が悪くなっただけだし捨てられたわけではないのだからまだいるとやりようがある。ただザビーゼクターと別れたことはどうしても残念に思ってしまう。初めてザビーゼクターと出会った時、お互いを

相棒と認めあつた時、曇に擬態したワームにトドメを指して悲しみに暮れていた自分を慰めてくれた時の事を思い出して、久賀達は虚脱感の様なものを感じていた。

「・・・寂しいな・・・。」

心にぼつかり穴が開いた様なその感覚に、久賀達はそんな言葉を漏らした。

## 都内・公園

翌日久賀達にはある任務が与えられていた、シャドウの隊長としての任を解かれただけでZECTにはいまだに所属している状況であるのだから何かしらの任務が与えられるのは当然と言えば当然である。ちなみに今の彼女はこれと言ってどこかのチームに所属している訳ではない、隊長の任を解かれたのが突然だったこともありまだ現状は自宅待機で任務が回されるのを待っている状況だった。

「さて、コイツを渡すべき奴つてのは・・・。」

今回彼女に言い渡された任務とは新たなる資格者にツールを渡すことである。【ドレイクグリップ】と【サソードヤイバー】、この二つをそれぞれの資格者の下に届けるのが彼女に与えられた任務であった。

(情報によると風間 大介つてのはこのあたりにいる筈なんだけど・・・ん?)

選ばれた資格者の一人「風間 大介」はフリーのメイクアップアー

テストとのことで、普段はあちこちをぶらついているらしい。組織から与えられた情報だと最近はこの公園でよく見かけられているとのことで試しにここへ来てみたわけなのだが、彼女が公園にたどり着くと公園の一角で奇妙な光景が見られた。ベンチに座った一人の女性と、その女性の前にいる男性と少女の二人。男性は女性の顔に何かを塗ったりし、女性はそれを黙って受けている。

「もしかして・・・あれか？」

久賀達が男性について考えていると、メイクが終わったのか男性はメイク道具をギターケースにしまい、女性は自身の変わりように感激の声を上げた後男性にお礼を言って去っていった。久賀達はそれを見てとりあえずその男性にコンタクトを取って見ることにした。

「オイお前。」

「何ですか・・・っと、これは失礼しました。まさかあなたのような美しい方に声をかけてもらえるとは。」

「世辞はいい。お前、風間 大介だな？」

「あなたほどの方に名前を知ってもらえるなんて、感激ですよ。」

どうやら彼が風間で間違いないらしい、久賀達はそれを確認すると風間にドレイクグリップを渡した。

「あの、これは？」

「それを持った状態で引き金を引いてみる。」

「こ、こうですか？」

言われるままに風間がドレイクグリップの引き金を引くと、グリップから電子音が鳴り始め、どこからか機械で出来た大きなトンボードレイクゼクターが飛んできた。



「な、なんですかコイツ!？」

「・・・どうやら、お前が資格者で間違いないらしいな。」

それを見た久賀達はその場から踵を返して去っていき、風間はそんな久賀達に声をかける。

「ちょっと待ってください!なんですかコレ!？」

「お前はそのトンボ・・・ドレイクゼクターに選ばれたんだよ。」

「ドレイクゼクター?」

「そいつでワームと戦っておけ、じゃあな。」

そう言うと久賀達はその場を去っていった。正直な話あの男が積極的にワームと戦うとは思えなかったが、自分の任務はドレイクグリップをあつめる男に渡すこと。初見で見ると限りの男は随分と軽そうに感じたが、自分が嫌うような人間ではない。だったらこれ以上あの男について考える必要もないと久賀達は次の資格者の下へと向かって行った。

### 高級住宅街

公園を後にした久賀達は、次の資格者の下へ向かっていた。資格者の名前は「神代 剣」、資料を見る限りでは英国の名門貴族・デイスカビル家の本筋に当たるとは思われるらしいが彼女には特に関係ないことだった。しばらく住宅街の中を歩き回っていたが、ある大邸宅の表札に「神代」という名字を見つけた。

「これか?」

試しにインターホンを鳴らしてみると、スピーカーから初老の男性の声が聞こえてきた。家の大きさから考えるに恐らく執事か何かが出ているのだろう。

『どちら様ですか？』

「こちらに神代 剣という人物はいますか？」

『坊ちやまでしたら居られますが、一体何のご用でしょうか？』

「そちらの剣さんにお渡ししたいモノがあります、会わせてはもらえないでしょうか？」

『少々お待ちください。』

そう言われて門の前でしばらく待っていると、初老の男性がやってきた。恐らくスピーカー越しに会話していたのはこの男性であろう。

「坊ちやまが会ってもいいということですので、どうぞお入りください。」

どうやらこの坊ちやまとやは今などこの馬の骨とも知らない女を、すんなりと家に入れてくれるらしい。よほどのバカなのか自分の腕に自信があるのか……。

邸宅の中に入ってまず久賀達を感じたことはあまりにも静かすぎることだった、これだけ大きければもっと多くの人が働いている気があってもいいのでは？と思うが、そこで彼女は資料に書いてあったことを思い出した。デイスカビル家はすでに没落しており、本家筋である神代家も財政難であるということに。大方給料が払えなくなったとかでほとんどの執事やメイドは解雇ということになったのだろう。そんなことを考えているうちに執事に連れられた久賀達は、神代 剣のいる応接室にたどり着いた。財政難に陥っているとはいえ流石は貴族の家、応接室ですら彼女の家のリビングより広い。

「お前か、俺に会いたいと言ってきた女と言うのは。何の用だ？」  
(こいつは……)

久賀達は神代に天道と同じ匂いを感じていた、コイツは天道と張り合えるくらいの所謂『俺様系』だと確信を持って言える。だがそれ以上にこの男からは天然と言うかとにかくそんな感じのモノも感じた、まだ会って数分しか経ってはいないが自分はこの男を天道ほど毛嫌いはしないだろう。もっとも進んで近づこうなどとも考えないであろうが……。

「これを……。」

久賀達は特に前置きもせずいきなり本題を切り出すことにした、サソードライバーの入ったケースを神代に差し出す。

「なんだこれは？剣か……？」

神代がサソードライバーを手に取った時、どこからともなく機械的で大きなサソリーサソードゼクターがやってきた。

「なんだこの大きなサソリは？」

「坊ちやま!？」

「落ち着け、コイツはそんなに危険なモノじゃない。」

久賀達はそう言ってそれが何で何をする為の物なのかを神代に伝えた、それを聞いて今まで偉そうにしていただけの表情に初めて変化が起きた。渡りに船というか、とにかく求めていたモノが手に入ったとでも言いたげな表情だった。

「なるほど……これがあればワーム共を倒せるというわけか。」

「ワームの事を知ってるのか。」

「ああ、よく知ってるさ。・・・奴らは姉さんの敵だ。」

神代はそう言っただけで憎しみに満ちた顔をした、深くは尋ねないがどうやらこの神代と言う男は姉をワームによって殺されているらしい。この男なら案外ワームを倒すためにZECTに入隊するんじゃないだろうか、久賀達は駄目もとで神代に話を持ち出した。

「どうだ、ZECTに入らないか？ZECTに入れば今より多くのワームに関する情報が手に入るぞ。」

「断る、俺は何者にも従いはしない。」

久賀達の提案を、神代は即答で断った。まあ予想していた答えだったので特に驚きはしなかったが。

「だがまあコイツを俺にくれた礼だ、俺を雇わせてやる。」

「は？」

「ワームが出たら俺に伝えろ、そうすれば俺が全てのワームを倒してやる。」

「・・・戻ったら上に伝えてみる、上がお前を雇うようなら連絡するよ。」

神代のあまりの物言いに若干疲れを滲ませながらそう言って立ち去ろうとすると、神代が久賀達を引き留めて尋ねてきた。

「待て。少し聞きたいんだが・・・お前もライダーなのか？」

「・・・・・・・・元ライダーだよ。」

神代からの問いかけに久賀達はそう言って去っていった。

神代の邸宅から出た久賀達は、任務終了の報告と神代からの提案を伝えると、その足で Salle に向かった。正直天道と出会う可能性があるためあまり来たくは無いのだが、ちよつとした気の迷いの様なもので来てみたのである。店内に入ると昼時から微妙にずれているからか店内にはほとんど客はいなかった。だが全くいないというわけでもなく、店内には店員のひよりの他に店長と思われる女性と加賀美・・・そして天道がいた。天道は特に気にした様子を見せなかったが、加賀美の驚きようは尋常じゃなかった。何せ久賀達が天道を目の敵にしていることを知っているのだ、焦らないわけがない。

「く、久賀達さん!？」

「落ちて着け加賀美、今日は客としてきたんだ。」

そう言うと久賀達は適当な席に座って適当に注文した。注文した料理を待っている間、天道が久賀達に声をかけてきた。

「また勝負しにきたのか？随分と熱心なことだな。」

「・・・多分もうあたしとお前が戦うことは無いよ。」

「ほお、どういう意味だ？」

「・・・資格と隊長としての権限を剥奪されたのさ。だからもうあたしがお前を倒す必要はないんだよ、あたし個人としてはお前の事は相変わらず大っ嫌いだけど。」

その言葉に加賀美が驚いた声を上げた、まさか久賀達がザビーの資格者から外されるなど思いもよらなかつたからである。

「そんな！久賀達さんは何も間違ったことなんか「当然だな。」天道！？」

加賀美が久賀達をフォローしようとするが、天道がそれを一刀両断する。

「そいつは組織に所属しながら命令に背いた。なら、何かしらのペナルティーが与えられるのは当然だ。」

「・・・ふう、アハハハハハハハハ！・・・やっぱり、嫌な奴だなあ・・・お前。」

天道からの言葉に久賀達は笑った後にそう返したが、その言葉にはやはりどこか覇気がなかった。ちょうどその時久賀達が注文した料理が来た、久賀達はそれを軽く平らげ即座に店を出ようとするが。

「待て。お前、まだ入るか？」

「？・・・まだ余裕だけど・・・。」

それを聞いた天道は店の厨房に入っていく、何かを調理しだした。それをしばらく待っていると、厨房から出てきた天道が皿に乗った料理を持ってきた。

「コイツは・・・。」

「中華風冷奴だ、まあ食べ。」

それは以前天道が矢車と料理対決をした際に作っていた冷奴だった、久賀達はそれに少々驚きながらも箸を伸ばした。

「どうだ？」

「・・・美味しいよ、思ってた通りに。」

「当然だ、何せ俺が作ったんだ。」

「そう言つとこころがなきゃ、普通に友達になつても良かったのにな。」

そう言つて軽く笑つと店の入り口に向かつて行くが、店を出る前に立ち止まり……

「……ありがとよ。」

天道に対して聞こえるかどうか分からないほどの声でそう呟いて、店を出ていった。

「あいつも、相当滅入つてるみたいだな。」

「久賀達さん……。」

そんな彼女の姿を二人は何とも言えない表情で見つめていた。

夜・東京タワー近く

久賀達はタワー近くのとあるおでんの屋台に来ていた、この日一日でらしくないくらい気が沈んでしまったので少し気分転換に何時もと違う店に来てみようと思つたのである。

「へい、らっしやい！」

「コンニャクと大根、あと竹輪ね。」

「はい！」

店のオヤジから頼んだものを受け取り、日本酒を注いでもらう。たまにはこういうところも悪くは無いかと考えながら、久賀達はしば

らくおでんの味を楽しんでいた。

「お客さん、よく食うねえ。」

「ん？ああ、まあな。」

数分が立つ頃にはおでんも大分減っていた、その食いつぷりにオヤジも驚く。そんな時屋台に新たな客がやってきた。首に手ぬぐいを巻いた中年の男性だった。

「はんぺん。」

「はい！」

男性は久賀達を一瞬見ると、席についてオヤジに注文をする。はんぺんを受け取った後久賀達と同様に日本酒を注いでもらうと、男性ははんぺんを箸で持っておもむろにオヤジに声をかけた。

「オヤジイ！」

「へい？」

「幽霊・・・へっへっへっ。」

「はあ、ははは・・・。」

どうやら白くて三角のはんぺんを日本人が幽霊と聞いて真っ先に思い浮かべる、頭に白い布を巻いている幽霊の額の三角の部分に見立てたギャグらしい。はつきり言って寒いことこの上ない（体感温度が2 ほど下がった）のだが、オヤジの方は慣れているのか適当に愛想笑いを返している。恐らくこの男性は常連なのだろう。そんな二人を横目に見ながら、腹も膨れてきた久賀達はオヤジにお金を払って屋台を後にした。



## 公園

屋台を後にした久賀達は、家には帰らず夜の街を適当にぶらついていた。幾分かマシになったとはいえ、まだ心のもやもやが晴れないからである。

(・・・?ワームか・・・)

適当に街をぶらついた後で公園によつた久賀達は、ふと自分の後をつけてくる妙な気配を感じた。この感じからして恐らくワームが自分をつけて来ているのだろう、とりあえず撒くかなどと考えている矢先に向こうの方が行動を起こしてきた。彼女の目の前に一匹のワーム―セクテイオワーム―が現れ、それを見た久賀達は軽く舌打ちした。今の彼女は何も持っていない、それこそライダープレスは勿論ゼクトガンさえ持っていない。あまりの迂闊さに自分が嫌になつてくるが過ぎたことを嘆いていても仕方がない、何もすることができない以上ここは逃げるしかない。久賀達がワームに背を向けて逃げ出そうとするが、クロックアップであつという間に追いつかれて攻撃を受ける。

「グウツ！ガツ・・・ゲホツ！」

動きが鈍つたところで立て続けに攻撃されてボロボロにされていく久賀達、もはや完全に逃げることもできなくなつてしまった。

「ガハツ！？ウ、グウ・・・(もう、終わり・・・か)」

この場にいるのは自分とワームのみ、戦う手段は無く、もはやワームに殺されるのを待つだけの獲物でしかなかった。久賀達は自分がこれで死ぬのかと考えると、部下達の事を心残りに思いながらも、

これが自分の最期かと思い助かることを諦め目を閉じた。せめて苦しみが一瞬で済むように……。だがその時、ワームに無数の銃弾が命中した。

「え？・・・あ、あれは!？」

そこにいたのはシャドウ、しかも矢車が率いる第1番隊だった。

「全小隊、正面からの射撃で久賀達からワームを引き剥がせ。」

その命令と共に次々とワームに銃撃が加えられ、流石のワームも後退を余儀なくされる。ワームが久賀達からある程度離れた頃に矢車が久賀達に駆け寄った。

「大丈夫か？」

「大丈夫そうに見えるのか？」

「遅れてすまない、少々準備に手間取ってな。とにかく、後は任せる。」

そう言うと矢車は久賀達の前に立つ、それと同時に周囲から数体の蛹ワームが現れた。

「おい、ちよつとヤバいんじゃないのか……。」

「安心しろ、何とかなるさ。」

「そりゃ一体……ってお前それ!？」

珍しく楽観的な意見を言う矢車に久賀達が皮肉の一つでも言おうとすると、彼の左手首に視線が向く。そこに有ったのは見紛うことないライダーブレスだった。彼が立ちあがると同時に空間に穴があき、ザビーゼクターが姿を現す。

「変身！」

Henshin

矢車はザビーゼクターを手に取ると、ライダーブレスに収めてザビーへと変身する。久賀達はそれを呆然と見ているしかできなかった。

「B、C小隊は射撃で左右から、A小隊はブレードで接近戦に備える。」

部下達に指示を出すと自身はゼクターに手を伸ばした。

「キャストオフ！」

Cast off Change Wasp

ザビーはライダーフォームになると、セクティオワームに殴りかかっていた。他の隊員達も蛹ワームを相手に奮戦していく、そんな状況の中、セクティオワームが戦闘のごたごたに紛れて逃走していた。すぐさまそれを追おうとするザビーだが、他のワームが邪魔をする。

「ライダーステイング！」

Rider Stinging

ザビーは一気にケリをつけるためゼクター上部のスイッチに手を伸ばし、ライダーステイングの体勢に入った。チャージアップがされたを確認すると蛹の群れに突っ込んでいき、すれ違いざまに次々とワームに攻撃を叩き込んでいき、全てのワームを粉碎してしまっ

た。ワームが全ていなくなった後、ザビーは変身を解除した。矢車は変

身を解除すると、久賀達の下へ近付いて行った。

「お前……ザビーに。」

「ああ……お前の後にザビーの資格者となった。」

「そうか……。」

それを聞いて若干顔をうつ向かせる久賀達、そこにザビーゼクターがやってきて久賀達にすり寄っていく。

「なんだよ、お前の主はあたしじゃない、矢車だ。安心しろ、コイツならお前の事を任せられる奴だから。」

――！――！？

ザビーゼクターは何かを訴えるように飛び回るが、久賀達には伝わらず、矢車に「後は頼む」とだけ告げてその場を去っていった。矢車はその背中を見ながら二つの事を思う。一つは予想通り彼女が大分滅入っているらしいこと、そしてもう一つは……

（やはり俺では、ザビーにはなれない……。）

そんなことを考えながら矢車は寂しそうな久賀達の背中を、見送っていた。

## 第7話 降格と新たな八子（後書き）

というわけで第7話でした。今回は後々原作の流れ上のキーパーソンとなる人達に多く会いましたね。特に風間と神代、この二人は原作ではいつの間にかドレイクグリップやサソードヤイバーを持っていましたが、この作品の中ではシャドウを放逐された久賀達が渡しに行ったということになっています。

ザビーが矢車に手に渡ったことで久賀達の無気力化がさらに進みそうな雰囲気ですが、ザビーのなった矢車は矢車である懸念を抱えています。最後に彼が思ったことが何を意味しているのか、次回も楽しみにしてください。

それでは。

## 第8話 八千の意思（前書き）

どうも、黒服です。今回は原作の13話あたりの話です。

## 第8話 八千の意思

ゼクト支部

久賀達に新たな配属先が伝えられた、配属先は田所がチームリーダーを収める支部で、久賀達はそこに着任の報告をしに来ていた。

「本日より、こちらでお世話になります。」

「ああ、お前が来てくれるとなるとこちらとしても色々心強い。よろしく頼む。」

そう言ってお互いに挨拶を交わす久賀達と田所、挨拶が終わると久賀達は加賀美と岬にも挨拶をした。

「これから一緒に働くことになる、精々よろしく。」

「こちらこそ……。」

「久賀達さんは、その……いいんですか？これで。」

正直加賀美はまだ納得していなかった、確かに久賀達は命令を無視したのかもしれない。だがそれは自分や仲間を守るためにしたことであり、ザビーとしての資格を奪ったりするほどの事ではなかったのではないか？そんな思いがまだ彼の中には渦巻いていた。

「構わないよ、全部あたしが原因なんだから。」

「でもそれじゃあ久賀達さんが「加賀美い！」た、田所さん……。」

「そこまでだ。これは久賀達本人の問題、部外者である俺達が口をはさむことじゃない。」

「でも俺、一応助けられた一人なんですよ！それなのに……。」

「いいよ、加賀美。」

久賀達はそこで加賀美を宥め、その後加賀美に心なしか弱々しく微笑みながら礼を言った。

「ありがとよ、その気持ちだけで十分さ。」

「久賀達さん……。」

その弱々しい様子に、加賀美も何も言えなくなってしまった。

数日後

あれから数日後、久賀達は加賀美や岬と共にワームによるものと思われる事件の調査をしていた。状況を見るにランニングをしている途中を襲われたらしいが、その男性を見て久賀達が驚いた顔をした。

「こいつ……。」

「どうしたんです、久賀達さん？」

「こいつ矢車の部下だ。」

「え！本当ですか!？」

それを聞いた岬が男性の懐を調べてみると、中からゼクトガンが見つかった。どうやら本当にZECTの、それもシャドウに所属している人間が狙われているらしい。

「って言うことは、ワームはZECTの人間を狙ってるってことですか？」

「寧ろ狙わない方がおかしいだろう、現状連中の邪魔をしている唯一の組織だ。」



「でも、ワームは一体どうやって組織の人間を割り出してるのかしら……。」

三人が事件について意見を述べ合っていると、何かの気配を感じた。久賀達が即座にそちらの方に視線を向けてみると、一匹のワームが姿を現した。

「あいつは、まさか!？」

「久賀達さん、見たことあるんですか？」

「あいつは知らないけど、あいつと似た形のワームは見たことがある、っていうかあたしも襲われた。恐らくあの時の奴の仲間だ。」

三人がそのワームーセクティオワーム・アクエレーの方に視線を向けていると、ワームが彼女達の方に向かってきた。慌てて久賀達がゼクトガンで応戦しようとするが、その瞬間別方向からの攻撃でワームが怯んだ。何が起こったのかとワームが攻撃を受けた方に目を向けると、ゼクトガンを構えた矢車がいた。

「矢車!」

「油断するな、撃て!」

矢車からの叱責に我に返った三人は、慌てて自分達の懐からゼクトガンを取り出してワームに射撃を加えた。流石のワームもこれには参ったのか急いでその場を離れていく。矢車が後を追うが、既にワームは姿を消していた。

「……逃げられたか。」

「……矢車(さん)!」

ワームを見失った矢車の下に久賀達らがやってきて、彼の口から今

ZECT内で起こっていることを聞かされる。

「シャドウのメンバーが？」

「ああそうだ、最近シャドウのメンバーばかりがやたらとワームに狙われている。恐らく同一のワーム仕業によるものだろう、お前が狙われたのも案外偶然じゃなかったのかもな。」

数日前のあの時の事を思い出す久賀達、あの時自分を襲ってきたワームは恐らく今しがたの奴の仲間。となればあれも最初から自分を狙っていたのかもしれない、しかしここで久賀達に疑問が浮かび上がる。

「なあ、連中がシャドウの隊員を狙ってるのは分かるんだが、どうやってシャドウのメンバーを特定してるんだ？基本的に組織内の人間しか知らない筈だぞ？」

「・・・今はまだ何とも言えないな、ただ何かしらの方法で我々シヤドウのメンバーを把握していることは確実だろう。」

矢車は口を濁しているが、それは言外に「内通者がいる」と言っていた。はつきり言って由々しき事態ではあるが、大きな組織となればそれなりに様々な問題も起こる。これはある意味では当然と言えば当然の事態とも言えた。

「事態が事態だけに流石の俺でも対処するのが難しい。久賀達、協力してくれないか？」

「ザビーでなくなったあたしにどれだけの価値があるかは知らないけど、こっちとしても協力は惜しまないよ。」

「・・・そうか。」

相変わらずどこか後ろ向きな考えをしている久賀達に、矢車は心の

中で溜息を吐く。実際彼女のこういつたことに関する鼻の良さは尋常ではないのだ、例えザビーでなくとも彼女の価値は大きいものがある。ただザビーと部下という彼女にとって唯一無二の存在を一度に奪われてしまったことが、彼女をネガティブにしまっているらしい。この状況に矢車はどうしたものかと頭を抱えるが、やはりいい案は浮かばなかった。

#### 輸入雑貨店・倉庫

この日久賀達は矢車と共にとある倉庫に来ていた、というのもこの日は矢車の部下の一人が表の顔である店長として、店の商品を倉庫から出しに来ていたのである。二人はワームが次に狙うならタイミング的に狙いやすいこの男だろうと考えたのだ。

二人が倉庫に来て部下の男を護衛していると、見知った男達がやってきた。天道と加賀美である。

「天道・・・加賀美、お前ら何しにきたんだ？」

「俺はこのオリーブオイルを買いに来ただけだ、この辺のレストランはみんなこのオリーブオイルを使ってるんだな。」

「ああそうかよ。」

久賀達は特に興味もなさそうに天道にそう返すと、そっぽを向いて黙りこむ。多少は天道に対する態度も丸くはなったようだが、嫌っているのは相変わらずらしい。とそんな時、倉庫の中に二人の男性が入ってきた。

「・・・客か？」

「いいや、違うな・・・。」

「来たか。」

入ってきた二人は既に殺されている筈のシャドウの隊員だった。二人の男性は擬態を解いてそれぞれセクティオワーム、セクティオワーム・アクエレになると、5人に向かって襲いかかって来た。するとそこに銃撃が加えられる。

「隊長、指示を！」

「各小隊、地形を利用してワームを攻撃。弾膜を張って敵を寄せ付けるな。」

ワームに銃撃を加えたのは矢車が率いる第1番隊だった、矢車はこっそり彼らをついてこさせワームが出てきたら一網打尽にしまおうと考えていたのである。一方のワームの方も、仲間の蛹ワームを呼び寄せて倉庫内はたちまち銃声が響きわたる戦場と化した。

「お前も早くザビーに！」

「分かっている。」

そう言つて矢車がザビーゼクターを呼び出すとゼクターは二人の方へ飛んでいき……

そのまま久賀達の手に収まった。

「何やってんだお前！この前も言ったがお前の主は矢車だろう、矢車、ほれ。」

そう言つて矢車がザビーゼクターを渡す久賀達、矢車は難しそうな顔でそれを受け取る。

「変身。」

Henshin

「ハア！」

ザビーは変身が完了すると、セクテイオワーム・アクエレと戦闘を開始する（ちなみにセクテイオワームは倉庫から逃げていった天道の方に向かって行った）。ザビーはコンビネーションパンチをメインにワームに攻撃を加えていき、久賀達もゼクトガンで蛹ワームを攻撃するなどで援護していた。ザビーは蛹を2匹倒し、他の隊員も柵に間に入り込んだワームに集中砲火を喰らわせて一体ずつ確実に倒していく。

「キャストオフ。」

Cast off Change Wasp

セクテイオワーム・アクエレにある程度ダメージを与えたことを確認すると、ライダーフォームとなったザビーは軽快な動きでさらにダメージを与えていく。そしてワームに十分なダメージを与えると、ライダーステイングの体勢に移った。

「ライダーステイング。」

Rider Steing

「ハアッ！」

ライダーステイングを受けて爆散するワーム、他の蛹ワームもシャドウによって倒されたのか周囲にワームの姿もない。ザビーは変身を解いて矢車の姿に戻った。

「おつか・・・うわっ、お前また!？」

久賀達が矢車を労いに向かうとまたしてもザビーゼクターが久賀達

にすり寄っていった。すでに三度目となるこの行為に、久賀達は困惑していた。自分は既にザビーの資格者ではない、なのにどうして……。

「まだ気付かないのか、お前は……。」

「え？そりやどいう……。」

「ザビーゼクターは俺じゃなく、お前を主人として求めてるんだよ。今でもな。」

「ッ!？」

ザビーゼクターからの必死のアピールに未だに気付かない久賀達を見かねて、矢車が久賀達にザビーゼクターの意思を伝えた。ザビーゼクターにとつては主は自分ではなく久賀達であると、それを聞いた久賀達はさらに困惑した。

「でも、どうして……。あたしはもう資格者を外されたのに……。」

「それはあくまでも組織としての意思で、ザビーゼクターの意思は全く違うモノだったことだ。その行動だってそうだが、それ以上に決定的なモノがある。」

「なんだ、それ？」

「お前、前にザビーゼクターに認められると胸にザビーの紋章が浮き出るって言ってたよな。」

その言葉に久賀達は頷く、特に資料に書いてあったわけではないが、あれはザビーゼクターが自身を認めてくれていた証しだと思っている。

「その紋章なんだが、俺にはいまだに浮かび上がらない。」

「え!？」

久賀達に紋章が浮かび上がったのは2回目の変身をした後、それも連日での変身であったからザビーゼクターと過ごした期間的に矢車にもそれが浮かび上がっていてもおかしくは無い筈なのだが。

「それに、変身自体いつでもどこでも出来るわけじゃない。特定の条件がそろわなきゃ変身できないんだ。」

「特定の条件？」

「お前だよ、ザビーゼクターはお前がワームの近くにいる時じゃないと俺には変身させてくれないんだ。」

「そんなまさか……。」

そこまで言っただけと思いつつ、矢車がザビーに変身した時の事を。最初に見た時、自分はワームによって殺される一歩手前まで来ていた。今回だってワームが近くにいる状態で、しかもザビーゼクターは自分の手に収まった。

「でも、それは単に偶然ってことも……。」

「勿論お前がない時にもザビーに慣れようと変身しようとした時はある、だが出来なかった。お前が近くにいてなおかつお前に危機が迫っていないとザビーゼクターは現れないんだ。」

それを聞いて久賀達の心は大きく揺れた。その心の大半を占めているのは嬉しいという感情、ザビーゼクターは自分を求めてくれている。自分と共に歩んで行こうと、そう言っている。

「お前……まだあたしと居たいのか？」

-.!!!---.!!!--

久賀達がザビーゼクターにそう聞くと、ザビーゼクターはそれを肯

定するかのように上下に飛んだ。それを見て久賀達はたまらない気持ちになる。

「確かにあたしは、まだザビーになりたい。だが組織に属する以上、ザビーを外されたあたしがまたザビーになるなんて……。」

「はあ、何時もの強気な態度はどうした。お前らしくもない。」

なおもネガティブな発言をする久賀達に溜息を吐くと、矢車は一言「任せろ」と言っただけで去っていった。

#### 田所チーム指揮車

それからしばらくして、指揮車で待機していた田所の下に三島から連絡が入った。内容は内通者が判明したというものだった。指揮車内のディスプレイにその人物のデータが転送されてくる、だがディスプレイに映し出された人物を見て田所は驚愕の表情を浮かべる。と言っのもその人物とは……。

「久賀達……。」

久賀達 時雨……それがディスプレイに映っている人物だった。



## 第8話 八千の意思（後書き）

というわけで第8話でした。本当は原作14話あたりの部分もまとめて1話にする予定だったんですけど、流石に長すぎてしまいそうなので泣く泣く2話に分割を（汗）。久賀達がザビーに戻ることはできるのか？次回もお楽しみに。それでは。

## 第9話 再誕（前書き）

どうも、黒服です。今回は連続で2話を投稿しました、果たして久賀達はどうなっていくのか、お楽しみに。

## 第9話 再誕

田所チーム指揮車

田所は信じられなかった、あの久賀達が内通者だということが。そしてそれは偶々指揮車に来ていた加賀美も同様だった、二人は愕然とした様子でディスプレイに見入っていた。

「久賀達・・・信じられん、あいつが内通者など。」

最初は二人とも何かの間違いかと思っていたが、問い合わせてみると確かな情報だった。

「田所さん、どうしましょう・・・。」

「むう・・・。」

あまりにも突然の事態に、加賀美どころか田所すらも判断に迷っていた。

歩道橋

岬は再び起こったシャドウメンバー襲撃の調査をしていたのだが、そんな中被害者の携帯を調べて着信履歴に久賀達の名前があるのを見つけてしまった。時間的に考えてかかって来たのは男性が殺される前後。念のため携帯をさらに調べてみると隊員のデータも添付されており、岬は久賀達が件の内通者なのでは？と考えてしまう。

「ワームにシャドウの情報を流していたのはあなただったんですね。」

「何のことだ？」

「殺された隊員の携帯にあなたからの着信履歴がありました、その中には隊員のデータも添付されています。」

「……………」

「話はゆっくりと聞かせてもらいますので、一緒に来ていただきませう。」

そうやって岬が久賀達にゼクトガンを向けると、久賀達は軽く舌打ちをしてそのまま逃走を図った。しばらく岬が久賀達を追いかけていると、久賀達は車が走っている車道を横切るといふ行為に及び、岬の追跡を振り切ってしまった。

「ハア……ハア……、ふう。」

追手が来なくなったことを確認した久賀達は、物陰に潜んで息を整えていた。

「さて……上手くいくかな。」

久賀達がそんなことを言っていると、加賀美が彼女に近付いてきた。

「チツ、加賀美……………」

「待つてください！俺は久賀達さんの味方です！」

そう言うとき加賀美は久賀達に向かって「こっちです」と言って、人気がない建物の下のところへ連れてきた。

「ここならそう簡単に見つかりませんよ、とりあえず安全だと思います。」

「加賀美・・・ありがとよ。お前が居てくれて本当に良かったよ。」  
「いえ・・・俺が出来ることなんてこれぐらいですし。」

加賀美が照れながらもそう言っている時、彼女達の周囲を影山率いるシャドウが取り囲んだ。即座にゼクトガンを取り出す二人だが、構えるよりも早くシャドウがマシンガンブレードを二人に向けて、止む無く動きを止めてしまう。

「影山・・・。」

「久賀達さん、大人しく投降してください。」

「言つとくがあたしは組織の情報を売つたりなんてしちやいないぜ？」

久賀達がそう言つて一応言葉による抵抗を試みるが、影山は聞かなかった。

「だつたらなおのこと投降してください、そしてあなたが無実であることの証明をしてください。俺も微力ながら弁護しますから。」

「一つ聞きたいんだが、何であたしが疑われてるんだ？」

「組織の情報を流すからにはそれなりの理由が必要です、そしてその理由としてもっとも可能性が高いのがシャドウから放逐されて逆恨みを持った者による犯行なんです。」

「ちよつと待つてください！そんなのあんまりじゃないですか！？いくらなんでもそんな理由で久賀達さんを疑わなくても。」

「俺だつて久賀達さんが無実だと思いたい！だから久賀達さん、投降してください。さ、銃をこちらに。」

「・・・・・・・・。」

久賀達はその言葉に無言でゆっくりとゼクトガンを影山に差し出した、加賀美は何かこの状況を変えようと頭を働かせるが・・・。

久賀達がゼクトガンを影山に渡した瞬間、

一発の銃声が響き、久賀達の体が吹き飛ばされた。

「久賀達さん!？」

「誰だ!発砲の許可を出した覚えは無いぞ!？」

そこに岬もやってきて加賀美と二人で久賀達に必死に呼びかける、いくらなんでもこんな状況になるとは思ってもみなかったのだ。そんな時、硝煙を上げるマシンガンブレードを持った一人の隊員がヘルメットを取った。

「ああ、すみません。隊長が打たれるかと思つてつい……。」

「いや……おかげでハツキリしたよ。本当の内通者が誰なのか。・  
……お前だつたんだな。」

「え?御冗談を。」

影山は周囲にいた隊員に指示を出し、その男から武器を取り上げさせ銃口を向けた。

「久賀達さんはただの囷だよ、本当の内通者は久賀達さんに罪を着せたまま口を封じようとする。俺はそれを待つていたんだよね。」

その言葉を聞いた瞬間、加賀美と岬が憤慨する。

「久賀達さんを囷に使つたですつて!？」

「正気ですか!?お二人は仲間だつたんでしょ!それなのに犠牲にしたりするなんて!」

二人からの非難の声にも、影山は特に動じることは無かった。

「それは、こうでもしないとさらに多くの被害者が出てしまうからですよ。って言うかそれ以前に……。」

「勝手に、人を殺すなよ。」

「く、久賀達さん!？」

今まで死んだと思われていた久賀達が突然起き上がって、加賀美と岬の二人は驚愕した。

「まったく、矢車よお、もうちょっと優しく出来ねえの。」

「文句を言うな、命があっただけでもありがたいと思え。」

久賀達が背中と腹部を擦りながら起き上がると、あさつての方向に声をかける。視線を追うところには、ライダーフォームとなったザビ―、矢車が立っていた。あまりにも突然の事態に困惑する加賀美と岬、その時矢車が変身を解きながら口を開いた。

「全ては俺達三人で仕組んだことだったのさ。」

「そう、あたしを囿にして犯人をあぶり出すためのね。」

今回の事は全て3隊長で仕組んだ作戦だった、犯人として最も疑われやすい久賀達が自ら囿になることで犯人をあぶり出すための。

「問題は誰の部隊に内通者がいるか、ということでしたが、第2番隊は隊員全てが久賀達さんを心から尊敬している人ばかりで構成されている。それなのに久賀達さんが襲われたということはこの部隊の中に内通者がいる可能性は限りなく低い、と言うことは残った第1、3番隊のどちらかに内通者がいると言うことになる。」

この場にいるシャドウは第1、3番隊の中で無傷で生き残った者た

ちを掻き集めて編成されている、今回の件で殺された隊員やワームとの戦いで負傷して入院している者たちを除いた隊員で構成されているのである。そして案の定生き残った隊員の中に本当の内通者がいて、久賀達を消そうとした。だが久賀達が撃たれる直前、ザビーに変身した矢車がクロックアップで久賀達を突き飛ばしつつ銃弾を受け止めたのである。

「問題は今回選ばれた連中以外、例えば入院してる奴らやうちの連中の誰かに内通者がいる可能性もあったんだがな。まあその場合はその場合で次の手も考えてあったんだけど、上手くいってよかったよ。」

そのやりとりを見ていた加賀美は啞然とした、自分の決意は一体何だったのだろうか。三人の話をまとめると、自分も騙されていたことになる。ということは、先程久賀達が自分に向けた言葉も……。

「さて、年貢の納め時だな。大人しくしてもらおうぞ。」

影山がそう言って内通者の男を取り押さえようとする。

「さて、まだ全てが終わったわけではないぞ。」

「お前、カブト！」

そこにはカブトが立っていた、そして彼らはカブトから驚くべき事実を聞かされる。

「クロックアップしたザビーを見ることができた奴がいる……お前はワームだ。」



そうやってカブトは内通者の隣、男の武器を奪った隊員を指さす。それを見て他の隊員はその隊員に銃口を向ける。銃口を向けられた隊員は特に動じることなく自分のも含めて武器を捨てると、ヘルメットを外しだした。そこにあつた顔は内通者の男と全く同じものだった。

「貴様！」

「俺を守ってくれるんじゃないのか？」

「お前は・・・俺の中で生きるがいい。」

「何？」

そう言うと男に擬態したワームは擬態を解き、内通者の男に爪を突き刺した。それと同時に周囲から蛹ワームが現れる。

「各小隊、小隊ごとにまとまってワームを攻撃しろ！」

影山が即座に指示を出すも、やはりもともと別々の部隊を掻き集めて編成した状態だからかチームワークが少々粗い。そこにカブトも加わって周囲は乱戦状態になる。そんな中まだ変身を解いたままな矢車に久賀達が疑問の声を上げる。

「おい、変身しないのか？」

「これからはお前がザビーだ。」

矢車はそう言ってライダーブレスを久賀達に差し出す。

「上に掛け合っておいた、やはりザビーはお前でなくては本当の力は発揮できない。第2番隊も再結成される。」

「矢車・・・お前。」

「それに、ザビーはお前の方が似合う。」

「・・・フツ。」

矢車からの言葉に久賀達は苦笑すると、ライダーブレスを受け取り左手首に装着する。その瞬間、何年も付けていなかったかのような感覚に、思わず久賀達の頬が緩む。同時にザビーゼクターがやってきて、喜んでいるのがアリアリと見て取れる動きを見せた。ザビーゼクターのそんな様子に久賀達は微笑みながら、手を伸ばしザビーゼクターを手に取る。

「また一緒に暴れるか、相棒・・・変身！」

H e n s h i n

感傷に浸りつつもゼクターをブレスに収めて、久賀達はザビーへと変身する。久しぶりのその感覚になんとも言えない者を感じる。

「さあて、行くぞ！」

ザビーはワームの群れに突っ込んでいく、ザビーは苦戦している隊員を援護しつつワームに的確なダメージを与えていく。

「キャストオフ！」

C a s t o f f C h a n g e W a s p

「ライダーステイング！」

R i d e r S t i n g

ザビーは頃合いを見計らってライダーフォームになると、ライダーステイングの連続攻撃で次々とワームを葬っていく。周囲のワームが居なくなつた時にふとカブトの方に目を向ける、久しぶりにザビーとして戦うことが出来たのだし、ウォーミングアップも済んだ。ここいらでカブトと一戦交えようかどうしようか等と考え、カブト

の方を見ると。

「あれは・・・ドレイク？あいつ、ライダーとして戦うことを選んだのか？」

そこにいたのはドレイクだった、中身が風間かどうかまでは分からないが、声からすると彼本人だろう。カブトとドレイクのやりとりを見ていると、ドレイクがカブトに殴りかかっていった。それを見てザビーは呆れる。ドレイクはドレイクゼクターによる射撃を利用した中々遠距離での戦いに適したライダーである、それなのにわざわざドレイクゼクターを捨てて接近戦を仕掛けるとは何事なのか。接近戦自体も決して得意とはいえなさそうの戦い方に、見かねたザビーが二人の間に割って入る。

「お前は!？」

「よお、ライダーになったんだな。」

「その声はあの時の!」

「下手な戦い方しやがって、よく見てる。」

そう言ってカブトと向き合う。

「ザビーに戻ったんだな。」

「まあな、お前にも一応世話になったんだし、礼は言っておこうか。」

「別にいらん、それより・・・やるのか？」

「・・・当然!」

そう言った瞬間ザビーはカブトに殴りかかった。カブトはそれを捌きつつ反撃を加えるが、ザビーも時に受け流し時にかわしてカブトと一進一退の攻防を続ける。ザビーもカブトもお互いに一歩も譲ら

ず、二人の実力はまさに互角だった。

「以前より少し技にキレがないな、腕が少し鈍ったんじゃないか？」  
「ハント、まだまだ序の口。本番はこれからだ。」

ザビーがそう言いながらゼクター上部のスイッチに手を伸ばし、カブトはクナイモードのクナイガンを構える。まさに一触即発な雰囲気になったその時……

「久賀達、悪いが勝負は延期になりそうだ。三島さんからすぐに戻るようにと命令が来た。」

その言葉に久賀達は若干残念そうにしながらも、命令に従うことにした。せつかくザビーに戻れたのに、また睨まれて外されるなどバカバカしい。

「上からの命令じゃ仕方ない、今回は勝負はお前に預けとくぜ。じゃあな。」

そう言ってザビーは変身を解きながら矢車、影山達と合流した。変身を解くとザビーゼクターが久賀達にまたしても擦り寄って来た。しかしそれは今までの必死さを感じさせるものではなく、むしろ嬉しさが感じられるものだった。それに久賀達は笑顔を浮かべて「わかったわかった」と言ってザビーゼクターを宥めながら矢車達と共にその場を去っていった、カブトは久賀達のその背に、今までなかった清々しいモノを感じていた。

「お前に再びザビーとしての資格と、シャドウ隊長としての権限を与える。」

本部に帰還した久賀達に三島はそう伝えた。彼自身あらゆる意味で今回の事は予想外の事の連続だったとも言える、ザビーゼクターが矢車を資格者と認めず、あまつさえ資格を剥奪された筈の久賀達を主人として求め続けるとは。実際報告を見る限りでは久賀達とワームが同時に存在する場合のみ矢車は変身できたようで、当然のことながらこんなことでは矢車にザビーを任せ続けることなど出来ない。そんな時矢車本人から「今回の内通者のあぶり出しに久賀達が貢献できたなら、彼女をもう一度ザビーの資格者と第2番隊の隊長にしてほしい」と言う話が持ち込まれた。正直な話このまま矢車にザビーは任せられないし、第2番隊の戦力も持て余していた。久賀達は3度カプトを見逃しているが、それについても問題が無くなったので今後は久賀達にザビーの資格者と第2番隊の隊長を任せることにしたのである。

「ありがとうございます、次こそは必ずカプトを仕留めて御覧に入れます。」

「そのことだが、カプトについては保留と言うことになった。勿論倒せるなら倒しても構わんが、最近はワームもシャドウの隊員を直接狙うなど活発な動きを見せている。しばらくはワームの討伐に力を入れてくれ、期待している。」

「ハッ！」

その後久賀達は真つ先に部下達のところに戻った、いつも集まっている訓練所には既に第2番隊の隊員達が集まってきていた。彼らは久賀達の姿を確認すると歓声を上げた。

「隊長！」

「お帰りなさい、隊長！」

「やっぱり俺らのリーダーは久賀達隊長じゃないと。」

「お前ら、迷惑をかけたな。」

久賀達は部下達のそんな様子に苦笑しつつも、本来自分が居るべきところに帰ってきたことを感じた。それからしばらくして部下達を解散させると、次に矢車達のところへ向かった。今回は矢車達に世話になりっぱなしだった、せめて何らかの形でお礼はしておかねばなるまい。

「よお、今回は本当に世話になったな。」

「気にするな。」

「そうですね、やっぱりシャドウは俺達3隊長が揃ってないと。」

「まあなんだ、それじゃああたしの気が済まないから、とりあえず礼はさせてくれ。」

そう言うと久賀達は二人に近付いて行き……

一瞬の隙を突いて二人の頬にキスをした。

「ちよっ!?!?!?」

「……………」

あまりにも予想外な事態に影山は顔を真っ赤にし、矢車は啞然としていた。久賀達はそんな二人の様子に笑みを浮かべる。

「さて、あたしの復活記念だ。今日はとことん食つぞ！」

その言葉に我に返った二人は、まだ若干顔を赤くしながらも久賀達について行った。

## 第9話 再誕（後書き）

というわけで第9話でした。めでたく久賀達がザビーに復帰するこ  
とが出来ました。久賀達はザビーゼクターに愛されてます、もうこ  
れでもかっつくくらいに。原作では資格者をコロコロ変えてましたけ  
どこの作品ではこれ以降資格者が変わることは無いです。次回は遂  
にあのライダー達が登場予定です、お楽しみに。  
それでは。

## 第10話 二人のバツタと二人の男（前書き）

どうも、黒服です。若干間が空いてしまいましたが第10話を更新しました。今回は原作より早めにあのライダーたちが登場します、お楽しみに。



## 第10話 二人のバツタと二人の男

ZECT本部・訓練施設

久賀達がザビーと第2番隊の隊長に復帰した翌日、彼女に思いもよらない人物が会いに来ていた。田所チームの一員である岬である、しかもどこか怒っているような雰囲気醸し出している。

「な、なんだそんな怒って。」

「なんだじゃありません！加賀美君はあなたを助けようとして単独行動をしたんですよ！それなのにあなたは加賀美君をだました、彼の気持ちを踏みにじったんですよ！？わかってるんですか。」

開口一番岬はそう言って久賀達に詰め寄っていた、その気迫に流石の久賀達も若干後退する。しかし岬の言葉を聞くとすまなさそうな顔をして岬に頭を下げた。

「ああ、あれは確かにすまないと思ってる。流石にあれはあんまりだったかな、って。」

「そう思ってるんだったら彼に直接謝ってください、あれ以来彼完全に自信喪失してしまってるんです。何とかして彼を立ち直らせてください。」

そういうと岬はその場を去っていき、後には久賀達だけが残されていた。久賀達は去っていく岬の後姿を見て、流石に今回の事は自分も悪いと考え、加賀美に謝るために部下達に何時も通りの訓練メニューをこなすように言つと後の事を戸高に任せ、加賀美の下へ向かって行った。

かゆうま亭

あの後久賀達は街をぶらついている加賀美を見つけて何とかここに  
来ていた。ちなみに出会った瞬間加賀美は一目散に逃げ出そうとし  
ていたが、久賀達の説得で何とかここに来てもらうことが出来た。

「おばちゃん、サンマ定食一つ。大盛りで。」

「あいよ！」

「お前何にする？今日はあたしが奢るよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

久賀達が加賀美に何を頼むか聞くが、加賀美は一向に口を開く気配  
がない。久賀達は内心でやれやれと思いつながら、焼肉定食を注文す  
る。注文してしばらく待っている間に、久賀達は加賀美に謝罪する  
ことにした。

「今回は、その・・・悪かった。お前をダシに使うような真似をし  
て。」

「・・・・・・・・。」

「ただ、あたしがお前を騙したのは決してお前が間抜けそうだから  
だとか、そんな理由じゃないってことだけは分かって欲しい。」

「ホントですか？本当は俺がバカだから、騙しやすいからあんなこ  
とやって俺をノセたりしたとかじゃないんですか！？」

あんなこととは、『お前が居てくれて』の部分の事を言っている  
のだろう。それに対しても久賀達は真剣な表情で答える。

「あれは多分相手がお前じゃなかったとしても言ってたと思う、少  
しでも本当の感情がこもった奴が居てくれた方が相手を騙しやすく

なるし。」

「それはつまり俺じゃなくても誰でも良かったってことじゃ……。」

「悪い言い方をするとそうなる。が、裏を返せばそれはお前を他の見習いじゃない連中と同様に扱ってるってことにもなることを考えて欲しい。それに……。」

そこで久賀達は言葉をいったん区切ると、改めて加賀美の目を見て言った。

「お前があたしのところに来た時にあたしが言ったガッツや見どころ諸々の部分は本心だ、あれは本当にそう思ったからそう言ったままで、決して御世辞や冗談なんかじゃない。それは覚えておいてくれ。」

「久賀達さん……。」

加賀美は久賀達からの言葉に、その真摯な瞳に彼女が嘘を言っているのではないことが分かった。そして久賀達は、いつの間にか運ばれてきた料理に箸を伸ばし始める。

「……食いな。ここの飯は冷めても美味いだろっが、冷めてない飯はもつと美味い。」

そう言われて加賀美も焼肉定食に箸を伸ばし始める。最初はゆっくりとしたスピードで箸を口に運んでいたが、徐々にスピードが上がっていくその姿に久賀達は笑みを浮かべる。とりあえず持ち直してはくれたらしい、ここからさらに上に行くことができるかは彼次第だ。そう考えながら久賀達はサンマ定食を平らげ、さらに2杯ほどお代りをしていた。

## ZECT本部

加賀美を元気づけた久賀達は、本部に戻ってきていた。時間的には部下達はまだ休憩している頃だろう、部下が戻ってくるまで自分はどうしようか。そんなことを考えていると、不意に矢車が声をかけてきた。

「久賀達、今暇か？」

「まあ、一応今は手持無沙汰だけど……。」

「ちよつと付き合ってくれないか？」

そついうと矢車は歩き出し、久賀達はそれを訝しく思いながらついて行った。

ついて行った先は訓練施設、そこには影山とZECTの研究員の姿が見えた。その光景に久賀達の疑問はさらに募っていく、一体何が始まるのだろうか……。

「実はな……俺達もライダーになるんだ。」

「お前達が？……てことは第3世代が？」

「そうですね、第3世代マスクドライバーシステム【キックホッパー】と【パンチホッパー】が完成したんですよ！」

第3世代マスクドライバーシステム……ゼクトバックルにホッパーゼクターを装着して変身するタイプで、マスクドフォームを持たず変身するとそのままライダーフォームとなるのが特徴のライダーである。またゼクターがリバーシブルなので、パンチ・キックどちらのライダーにも一人でなれるのも特徴である。

「で、それは分かったけど、それとあたしがここに来到ることに何の

関係が？」

「なに、簡単なことだ。・・・ちよつと模擬戦に付き会ってもらいたいんだが。」

「久賀達さんライダーとして戦って結構立つんじゃないですか？だから久賀達さんからいろいろとアドバイスをもらおうと思つて。」

それを聞いてやれやれという仕草を見ると、戸高に矢車達と模擬戦をするので休憩後の訓練の指揮を任せる旨を携帯で連絡する。

「それで、どつちからやるんだ？」

「じゃあまず俺から。」

久賀達が二人に尋ねると、影山が名乗りを上げた。久賀達と影山が訓練所に入る。それと同時に矢車と研究員達が施設から出ていった。恐らく研究員達はデータを取るのが目的だったのだろう。久賀達らはある程度離れると、久賀達はライダーブレスを露わにし、影山はゼクトバツクルを開いた。

「「変身！」」

Henshin

Change Punch-Hopper

久賀達はライダーブレスにザビーゼクターを収めザビー・マスクドフォームに、影山はホッパーゼクターをゼクトバツクルの右側からセットしパンチホッパーに変身した。資料通りパンチホッパーは変身と同時にライダーフォームになった。

「キャストオフしないでいいんですか？」

「まずはウォーミングアップしてやつだ、行くぞ！」

そう言うと同時にザビーはパンチホッパーに殴りかかっていった。パンチホッパーはザビーからの攻撃をかわそうとするが、ザビーの方はフェイントを混ぜて攻撃してくるので思った様に攻撃が避けられずダメージを受けてしまう。パンチホッパーの攻撃もザビーには当たっているが、ただでさえライダーフォーム以上の防御力を誇るマスキドフォーム、しかもザビーは的確に攻撃を防いでくるのでなかなかダメージが与えられない。

「クッ！クロックアップ！」

C l o c k   u p

このままではギリ貧であることを悟ったパンチホッパーはクロックアップで形勢逆転を図る。

「キャストオフ！」

C a s t   o f f

「クロックアップ！」

C l o c k   u p

しかしザビーもライダーフォームとなり、クロックアップしてパンチホッパーに対抗する。

「ハッ、セイッ、ダァ！」

「クッ！フッ、ハッ！」

クロックアップした状態でザビーとパンチホッパーはお互いに激しい攻防を繰り返すが、状況はザビーの方が圧していた。

C l o c k   o v e r

「クッ、ライダージャンプ！」

R i d e r J u m p

「ライダーパンチ！」

R i d e r P u n c h

ザビーとパンチホッパーのクロックアップが切れると、一気に勝負をかけるべくホッパーゼクターのフーゼクターレバーをスライドさせ、通常の跳躍を遥かに超える跳躍を行う。そして十分な高度に達するとレバーを戻し必殺技のライダーパンチを放つ。

「フッ！」

「な、何！？」

だがザビーはパンチが当たる寸前、体を捻りつつパンチホッパーの腕をとり一本背負いを決めると、倒れたパンチホッパーの顔面すれすれに拳を落とした。しばらく二人ともその状態で硬直していたが、ザビーの方が拳を収めると同時に、パンチホッパーも起き上がった。

「いてて、まさか投げられるとは思わなかったですよ。」

「お前は自分のライダーの特性を理解した戦いが出来てた感じだけだな、パンチの速度も速かったし。でもその分足元が御留守だったな、結構隙だらけだったぞ。」

ザビーの言う通り、パンチホッパーは素早いパンチなどでザビーに対して手数が多い攻撃を繰り返していたが、足元へのローキックなどで翻弄されていることが度々あった。

「それと最後のライダーパンチだけだな、あれはちょっと焦りすぎたな。あれじゃ今回みたいにあっさりかわされたりするぞ。」

「そうですね、気をつけます。」

そう言つてパンチホッパーが変身を解いた時に、矢車が二人に近付いてきた。

「なかなかいい勝負だったぞ、二人とも。」

「次はお前か、矢車。」

「そうだが、休憩しなくていいのか？」

「あん？いらねえよ、んなもん。」

ザビーがそう言つと、矢車は不敵な笑みを浮かべる。

「いいのか、そんな余裕を見せて。」

「お前よりはあたしの方がライダーとしても長く戦つてる、寧ろちよつどいいハンドデつてやつだよ。」

ザビーの方は仮面で表情が見えないが、恐らく矢車同様不敵な笑みを浮かべているのだろう。矢車は苦笑しつつも影山と交代で訓練所に入つていった。そしてザビーからある程度距離を取ったところに立つと、ゼクトバツクルを開いて中央部にホッパーゼクターを左側からセツトする。

「変身！」

Henshin Change Kick-Hopper

変身が完了すると、そこにはパンチホッパーとほとんど同じ姿の戦士ーキックホッパーがいた。だがパンチホッパーと違い、目の色が赤で全身が緑、そしてパンチホッパーで右腕についていたアンカージャッキが左足についていた。

「・・・ハッ！」

「フッ！」



しばらく見つめ合っていた二人だが、ザビーが殴りかかると同時にキックホッパーも蹴りを放った。ザビーのパンチとキックホッパーのキックがお互いにぶつかり合い、激しい応酬が繰り広げられる。キックホッパーは自慢の蹴り技でザビーを攻撃するが、ザビーも負けておらずパンチとキックで対抗する。

「セイツ、フツ、ハア！」

「ハツ、フツ、セリヤ！」

ザビーはキックホッパーのキックを捌き、キックホッパーはザビーの攻撃をかわしていく。そんな攻防が数分続き、お互いに息が上がって来た。

「ハツ、ハツ、ハツ……。」

「フウ、フウ、フウ……。」

しばしお互い息を整えると、二人とも勝負をかけるべく必殺技を発動させる。

「ライダージャンプ！」

R i d e r J u m p

「ライダーキック！」

R i d e r K i c k

「ライダーステイング！」

R i d e r S t i n g

これまでの攻防で体力を消耗したザビーはキックホッパーのライダーキックをかわせないと判断し、ライダーステイングで正面から迎え撃つことを選択する。ザビーとキックホッパーの必殺技がお互い

にぶつかり合い、爆発を起こす。

「グウ！」

「ガハッ！」

お互いに弾き飛ばされた二人はしばらく地面に倒れていたが、やがて変身を解きながら立ちあがった。

「流石だな、久賀達。」

「お前も、なかなかやるじゃないか。」

「二人とも、お疲れ様です。」

久賀達と矢車がお互いに褒め合っていると、影山が二人にドリンクを持ちながら近付いてきた。矢車は影山からもらったドリンクを飲みながら、先程の模擬戦について考える。

（さっきの戦い、確かに互角に持ち込めたが……もし久賀達が万全の状態だったらどうなっていたか……。）

実際久賀達は影山と模擬戦をして、碌に休まず矢車と模擬戦を行っている。影山も決して弱くは無いので久賀達の消耗もそれなりにあっただろう、そのことを考えると今回の結果をそのまま受け止めることは出来なかった。

（やっぱり……お前は強いよ、久賀達。）

ドリンクを飲みながら影山に戦い方を教える久賀達を見ながら、矢車はそんなことを考えていた。

屋台

あの後久賀達は、部下達と合流していつもの訓練メニューをこなした後、以前来たおでんの屋台に来ていた。何気にこの屋台の雰囲気や、おでんと日本酒の味にハマっているのである。彼女が暖簾をくぐると、以前もみた常連らしき中年の男性が来ていた。

「ヘイ、らっしやい！」

「大根にがんも、はんぺん。」

「はい！」

注文をすると即座に屋台のオヤジが小皿に具を乗せていき、久賀達が受け取るとコップを差し出して日本酒を注いでくれた。しばらく日本酒とおでんに舌鼓をうっている、もう一人が席に着く気配がした。久賀達が何気なくそちらに視線を向けると・・・

「ヘイ、らっしやい！」

「はんぺん。」

「はい！」

先に来ていた常連の男性とまったく同じ容姿の男性が入ってきた、そしてその男性は先に来ていた男性と同じくはんぺんを頼む。

(双子?・・・にしちゃんか妙だな。)

しばらくこの二人を観察することにした久賀達は、酒を飲みながら二人の男性に視線を向ける。男性ははんぺんを受け取ると、屋台のオヤジから酒を注いでもらう。

「んぐ、んぐ、んぐ・・・かぁーウマイツツちゃー！」

男性は日本酒を飲むとそんな風に言う、そういえば前回来たときは特に気にしてはいなかったが前もこんな風に言っていたかもしれない。

「オヤジイ！」

「へい？」

「幽霊……へっへっへっ。」

「はあ、ははは……。」

かますギャグも全く一緒、その後は同じ顔同士で仲良く飲み始める二人。もうしばらく様子を見ようかとも思ったが、恐らくこれ以上は何もわからないだろうと判断した。ワームであればどちらかがどちらかを消そうとするはずだし、今回は片方しかギャグをかましていない。現時点でどちらかがワームであるという判断を下すのは早計である、もしかしたら単なる双子かもしれないのだ。もっとも古い年した大人が双子だからと言ってまったく同じ格好をするのも、それはそれでどうかと思うのだが。

なにはともあれ久賀達は屋台を後にし、自宅のマンションへの帰路についた。

## 第10話 二人のバツタと二人の男（後書き）

というわけで第10話でした。加賀美は前回久賀達に騙される形になったことを気にしています、ですので今回久賀達自身に加賀美を励ましてもらいました。原作では岬が加賀美を一喝しますが、この作品では久賀達は当事者であるので、そのような強気な態度には出られません。ですので真摯に言い聞かせるようにして加賀美を励ましてもらいました。

そしてホッパーライダーズ登場、ホッパーライダーについてはどのシーンで活躍しているかはある程度考えていたのですが、どういふふうに登場させるかは考えてなかったのですがどうしようか迷いましたが、今回加賀美の励ましついでに登場してもらいました。これ以降は矢車さんと影山の活躍の場も増えると思いますので、お楽しみに。それでは。

## 第11話 捜査と人事（前書き）

どうも、黒服です。今回は原作の15話あたりの話です。前回久賀達から励ましてもらった加賀美が、どっという行動に出るのかお楽しみ。

## 第11話 捜査と人事

屋台

久賀達はここ最近毎晩のようにこのおでんの屋台に来ていた、あの二人の男性のどちらかがワームなのかそうではないのかを見極めるために。しかしなかなかうまく具合にタイミングが合わず、すでに来ていたり、彼女のあとに来たとしてももう一人がなかなか現れないということが多かった。もうしばらく辛抱していればあるいはもう一人が現れたのかもしれないが、あまり長居しすぎるのも屋台の方に迷惑になる。なのでギリギリの時間まで屋台にいたり、屋台を離れた後近くの茂みで見張ったりしていたのだが、そのまま男性が帰ってしまったりでなかなかうまくいかなかった。そんなわけで今日も屋台に来ていたのだが、突然男性の懐から救急車のサイレンのような着信音が鳴った。

「しもしも。」

これもギャグか何かか？そんなことを考えていると、男性の話している携帯から話の内容が漏れ聞こえてきた。詳しいことは分からないがどうやらこの男性が手術を行うらしい。正直に言って無謀だろうと思った、まだ飲んでそんなに経っていないが明らかに男性は酔っている。こんな状態の男性に手術なんてさせたら手術ミスは間違いないだろう、そんなことになっては不味いのではないか。そう思うのだが男性はどうやら行く気らしい、止めようかとも思ったが向こうもこんな酔っぱらいにメスを持たせるなんて馬鹿な真似はしないだろうと思い男性のことは放っておくことにした。今日も収穫はなさそうなので、自分も帰ることにしお金を置いて屋台を後にする久賀達。

その帰路にて、久賀達は線路の下を通る時に奇妙なものを見つけた。かろうじてシルエツトは人であるとわかるが、肉体から衣服に至るまで朽ちた木のようになっている。元がどんな人物だったのかはもはや判別不可能である。いや、そもそもパツと見これは人には見えないかもしれない。だが久賀達にはこれが元は人間だと確信をもつて言える。人が死んだ時に発するこの独特の臭気、嫌でも過去のことを思い出させるこの匂いに顔を顰めつつ久賀達は犯人について考える。

「ワーム・・・だよな、こんなやりかた。」

むしろ人間でこんなことができる奴がいたらお目にかかりたいくらいである。とにかくこのままでは何もわからないので、久賀達はこのことを報告することにした。現場を残すためにその場に残りつつ、今回の犯人であろうワームのことを考える。現場の発見者としていろいろと事情を説明せねばならならうことを考えて若干憂鬱になる。おそらく『あの時』と同じようにしばらく足止めされることは間違いないであろう。そんなことを考えながら空を見上げると、月がキレイな夜空が見えた。それを見た久賀達は唐突にザビーゼクターを呼び出した。

「...? ...!」

「いや、特に用があるってわけじゃないんだけど。状況があの時と似てるから、なんとなく呼んでみたくなってるな。」

ザビーゼクターは最初ワームでも出たのかと勇んで久賀達の周りを飛び回っていたが、久賀達からの言葉を聞いて納得した。ザビーゼクターと久賀達が初めて出会った時も、こんな月夜だった。ザビーゼクターはそのまま久賀達の手の中に納まり、久賀達はそんなザビーゼクターを黙って撫でていた。そのまま調査のチームが来るまで、



一人と一機は静かにその場に佇んでいた。

街中

その日加賀美はある一人の男を尾行していた、尾行している相手は首に手拭いを巻いた中年男性・若林。最近の人間が朽ちた木のように変化して死亡する事件の犯人が、この男性に擬態したワームである可能性が高いとのことなので、加賀美は若林を尾行しているのである。ただし今の彼は休職中であつた、彼は自分一人の力でワームを追い自らの力を証明するつもりだったのである。

何故そんなことを考えたのか？それは先日久賀達に言われた『ガッツや見どころ諸々の部分は本心』という言葉や、父である陸からの言葉『お前は私の誇りだ』に励まされ、自分一人でも戦えることを証明するためである。

（そうだ、俺だってやろうと思えばなんだってできる！久賀達さんにああまで言われた以上、あの人の期待に応えられるように少しでもやれるってところを見せないと！）

そんな風に考えつつ、若林を尾行し続けて二日が立っていた。二日たつても何の動きも見せない若林に、加賀美にも疑念が浮かび上がる。ワームがいれば必ずその相手を消しに来るか消しに行くはずなのに。もしやすでに本物は消してしまつたあとなのではないか？という疑問が加賀美の中に浮かび始めるが、とりあえずもう少し尾行を続けることにした。

そうこうしている内に夜になり、若林はおでんの屋台に入つて行つた。屋台にはすでに客が一人来ていた。若林を見つつ屋台にいるもう一人の客を見て、加賀美は驚愕した。

(く、久賀達さん!?)

そこにいたのは確かに久賀達だった、一体なぜ彼女がここに?などと考えていると、屋台に近づくもう一人の人物。先に入って行った若林とまったく同じ容姿の人物だった。それを加賀美とは別の茂みからのぞいている岬と風間。

「いい?どつちかがワームになったら、あなたの出番だからね。」

そう言われて頷く風間は、そのまま双眼鏡で屋台の様子を観察しだす。するとそこに久賀達の姿を確認した。

「ゲツ!あの人は???。」

「どうしたの?」

風間の様子に疑問に思った岬は同じく双眼鏡を取り出して屋台の様子を観察し、久賀達を見て同じく驚愕した。なぜ彼女がここにいるのかと、もしや彼女も若林が怪しいと睨んでいたのかと考える。

一方の久賀達は待ち望んだ瞬間に内心で喜んだ、先に来た方の若林(あとから来たチームの調査の結果を聴いてわかった)はまだ席について間もない。ここから先の行動によってこの二人がただの双子なのかそうでないのかわかる、そう思っていた。

「はんぺん。」

「ハイ!」

オヤジから一つの小皿にはんぺんを乗せてもらうと二人仲良く受け取り、順番に酒を注いでもらい乾杯をする。ここまではまだいい、問題はここからの行動だ、そう思ってみていると、二人同時にコッ

プに口をつけた。

「んぐ、んぐ、んぐ・・・かぁーウマイツツちゃー!」「」

二人ともまったく同じ反応をした、そして二人ともはんぺんをつかむと額の前にもっていき。

「オヤジイ!」「」

「へい?」「」

「幽霊・・・へっへっへっ。」「」

「はあ、ははは???。」「」

まったく同じギャグを、二人同時にかました。その際の笑い方など二人ともまったく同じだった。

(これでほとんどハッキリしたな、どっちかがワームだ。)

自分は双子ではなかったのだからないが、いくら双子でもこれはおかしいだろう。もちろんお茶目な双子という可能性もあるが(最もお茶目なんて言葉が似合う年でもないが)、ここまで同じということは双子よりワームの方を疑った方がいいだろう。だがそうすると次の疑問が浮かび上がる。

(何で仲がいいんだこいつら?)

そこである。通常ワームは擬態した相手を殺そうとする、それなのにこの二人はまるで本当の双子かなにかのように振る舞っている。それを見て久賀達の中にある嫌な考えが浮かぶ。

(オイオイちょっと待てよ、まさか・・・。)

そこまで考えたとき、外からかすかに悲鳴が聞こえてきた。オヤジや飲んでる二人は気づいていないようだ。久賀達の耳にはハッキリ聞こえた。慌てて勘定を済ませ悲鳴が聞こえた方に向かうと、一人の男性に白い煙のようなものを吹き掛けているワーム。フォルミカルビュスワームがいた。ワームからの煙を浴びた男性は朽ちた木のようになってしまった。これには流石の久賀達も驚いた。今回の事件の犯人は若林に擬態しているワームだろう、にもかかわらずまったく同じ殺害方法をしているワームが目の前にいる。ということはあの二人は本当に双子だったのか？そんなことを考えていると、風間がドレイクに変身した。とりあえずしばらく様子を見てみると、ドレイクの後方からもう一体のフォルミカルビュスワームが現れた。流石にこれは助けねば不味いと考え、久賀達はザビエクターを呼び出す。

「変身！」

Henshin

変身が完了するとザビエはワームの片方に攻撃を仕掛ける。ワームはザビエに対して煙による攻撃を行おうとするが、モーションから判断して顎を蹴り上げるなどしてその攻撃を阻止するザビエ。ドレイクとの戦いを見ていたが無機物すらボロボロにする煙である、いくらマスクドアーマーとて無傷とはいかないであろう。しばらく攻防が続いていると、二体のワームにどこからか銃撃が飛んできた。攻撃が来た方に目を向けると、そこにはシャドウが来ていた。肩の部隊識別用のペイントを見るとどうやら第3番隊らしい、ライダーの数はこれで3対2。状況はこちらに有利になった。とその時、久賀達は信じられない光景を目撃する。

「影山、パンチホッパーに変身して正面から攻撃しろ。」

「は？」

第3番隊隊長は影山のはずである、それなのに影山はシャドウの一人から命令を受けている。命令を受けた影山はヘルメットをとるとパンチホッパーに変身した、その際の顔には不満がありありと浮かんでいた。いや、それ以前に今の隊員の声にはどこか聞き覚えが……。

「……キャストオフ。」

Cast off Change Wasp

とにかく今はワームの方に集中すべきと考え、キャストオフして一気に勝負にでるザビー。もう一体の方にはドレイクとパンチホッパーが攻撃をたたみかけているので問題は無いだろう、自分はこつちをさつさと始末してしまおうと考えていると、聞きたくもないフレーズが耳に入る。

「おばあちゃんが言っていた、戦いはへそでするモノだってな。」

「ッ!? あいつ……まさか……。」

「へそに気合を入れる!」

そう訳の分からないことを言う隊員に気を取られた一瞬の間をついで、ワームに逃げられてしまうザビー。ドレイク達の方もドレイクとパンチホッパーの同時攻撃の反動を利用して上手いことワームに逃げられてしまったらしい。そしてもう一度先程の隊員の方に視線を向けると……

「天道……。」

そこにはシャドウの戦闘服に身を包んだ天道がいた。天道はワーム

が逃げたのを確認すると、追いかけるためかその場を去っていった。ザビーも追いかけたかったが、変身を解いた影山に事情を聴くために彼女も変身を解いて影山の下に向かった。

「影山！」

「あ、久賀達さん……。」

影山に声をかけると、彼は若干沈んだ声で久賀達に返した。

「何だ一体、何がどうなってる！何なんだあいつは！」

「わかりませんよ、いきなり新しい第3番隊の隊長だなんて言われて……。何がなんなのかこっちが知りたいですよ。」

久賀達は影山に矢継ぎ早に尋ねるが、帰ってきた答えは彼自身も何が何だか分からないというものだった。隊長から外された影山は、すっかり自信を失っているらしい。その影山の様子に久賀達の天道に対する怒りはさらに募っていった。

「あんの俺様野郎——！！！」

そんな久賀達の叫び声が東京の夜に響いて消えていった。

## 第11話 捜査と人事（後書き）

というわけで、第11話でした。加賀美の行動は原作とそう大して変わりませんが、ヤル気は原作より幾分か上がっていると思います。久賀達と陸の二人に励まされる形になったわけですし、言外に久賀達からは「期待している」的なことを言われていますから（久賀達こそここまで考えていたかは別として）。

この話の登場するワームですが、原作より数が増えています。この時点で登場するライダーが原作より増えてますから、ワーム側も少し強化しないと下手するとフルボッコになってしまいますので（汗）。

それと現在早くも二作目を構想中です・・・いや、分かってはいるんですよ小説書き始めてまだそんなに経っていないのに掛け持ちで小説を書くのが無茶だったことは（汗）。でもどんどんインスピレーションが浮かんでしまうorz

とにかく現在制作中の二作目も含めて、次回の更新もお楽しみに。それでは。

## 第12話 若林の真実(前書き)

どうも、黒服です。今回は原作16話の部分の話です、果たして二人の男の関係と、ワームの関係は何なのか。お楽しみに。



## 第12話 若林の真実

ZECT本部

「一体どういうことですか！？何故影山がシャドウの隊長を下されるんです？」

久賀達は天道がシャドウの隊長になっている理由を聞くため、影山と共に三島のもとを訪れていた。だがやってることはほとんど怒鳴り込みと大差ないモノになっていた。

「ほお、そんなに不満か？」

「当然です、影山はこれまでも十分にやってきました。特に最近パンチホッパーの資格者にも選ばれて彼の活躍はこれからの筈。なのに何故今になって、影山が隊長から下ろされてあの男が第3番隊の隊長なんですか!？」

「久賀達さん……。」

影山は三島に怒鳴り散らすように質問をする久賀達を宥めつつ、彼女の言葉にある種の感動を覚えていた。普段は彼女の言動に振り回されたり、時々行っ合同訓練などで散々に扱かれたりしているが、彼女がここまで自分を見ていてくれたことに。

「私にも聞かせてください、何故第3番隊の隊長をあの天道寺と言う男に？」

「天道寺？」

久賀達は影山のその言葉に訝しげな顔をする、彼の名前に『寺』など付かなかつた筈だが……。

「ZECTはあくまで実力主義・・・確かにお前はパンチホッパーの資格者であり、貴重な戦力ではあるが、統率者としては向こうの方が優れている。様々なデータからそう言う結果が出た、わかるな？」

三島がそう説明している間に、久賀達は天道が明らかに偽名と分かる名前を使ってZECTに入っている理由を考える。偽名を使っているからには恐らく馬鹿正直に入っている訳ではなく、何か裏があるのだろう。それは一体何なのか？

(タイミング的にはあのワームに関する事だろうが・・・)

とにかくこのことに関してはあとで影山と話し合うことにして、久賀達らは三島の下を後にした。本部の廊下をしばらく歩いていると、反対側から矢車が来た。

「あ、矢車さん。」

「聞いたぞ影山、隊長を下ろされたんだってな。」

「・・・はい。」

「一体どこのどいつだ、シャドウの隊長はそう簡単になれるモノじゃない。それが何故どこの馬の骨とも分からんような奴に・・・。」

どうやら矢車も影山が隊長を下ろされたのが気に食わないらしい、今回の事に関して不満の声を上げる。

「ちょっとそのことに関して、二人に話があるんだけど・・・。」

かゆつま亭

あの後久賀達は二人を伴って、何時もの店に来ていた。ここなら組織の人間の耳を気にすることなく、いろいろな話が出る。

「それで、何なんだ？話つてのは。」

「・・・影山、お前から隊長の座をぶんどった奴の名前を言ってみてくれないか？」

「何ですか急に？」

「いいから。」

「え〜つと、天道寺 総司郎ですけど・・・。」

その言葉に久賀達は確信した、天道はやはりZECTを利用するつもりだ。彼に決定的に足りないのは情報網、加賀美と繋がってはいがより精度が高くて新鮮な情報を手に入れるには組織に入るのが手っ取り早いであろう。

「その男について、何か知っているのか？」

「お前も前に会ったことがある男だよ、そいつの本当の名前は、天道 総司。」

「天道・・・そいつ、確かカブトの？」

「ああ、大方組織の力を使って今回の件についていろいろ調べるつもりなんだろう。」

「でも一体何のために？」

久賀達は影山からの質問に「さあな」と答えると、思い出したかのように二人に気になっていたことを尋ねる。

「そう言えばあの若林って男だけど、あいつについて何か知らないか？」

「少なくとも双子という記録は無い筈ですよ、だからあの場にいた

若林のどちらかがワームであることは間違いないかと。」

「だが同じ手口で人を殺すワームがもう一体出たんだろう？それに二人ともお互いに仲が良かったって聞いたぞ。」

矢車のその言葉に3人とも唸り声を上げる、今回の事は流石に初めての事であるしいくらなんでも不可思議すぎる。いや、久賀達の中では答えがある程度固まってきた。確かにこれならあの二人が仲良くしていて、しかも同じ手口の奴がもう一体居ても不思議ではない。そんな時、影山の携帯から着信が鳴り響く。

「はい・・・はい、分かりました・・・。」

そう言っつて影山は携帯を切ると、席を立った。

「召集です、どうやら何かしらの作戦を行うようです。」

「そうか・・・頑張れよ。」

矢車からの励ましを受けつつ、影山は店を後にした。後に残されたのは矢車と久賀達のみとなる、その時矢車が口を開く。

「で、今回の事なんだが、一体どうということなんだ？」

「どっちが？」

「両方だ。」

矢車が言っているのは天道がシャドウの隊長になっている件と、二人の若林の事である。影山は意気消沈していたようなので気付かなかったようだが、矢車は久賀達の顔に何らかの確信のようなものを感じていた。

「・・・まず天道の方についてだが、恐らくあいつは今回のワーム

について調べるためだけにZECTに入ったんだろう。」

「それだけの為にか？」

「あいつはそう言う奴だろうさ、自分の目的のためなら利用できるモノは何でも利用する。本当につくづくいい性格してるよ、あの俺様なところがなけりゃホントに仲良くしたいくらいだ。」

「という事は……。」

「ああ、今回の事が済んだらあいつはZECTを抜けるだろう。そうなれば影山がまた隊長だ。」

その言葉に矢車は安堵する、やはり3隊長はこの3人でなくてはならない。

「じゃあもう一人の若林については？」

「そのことだがな……。」

そして久賀達の口から出たのはとても信じられない言葉だった。

「まさか、それは……！」

「だがこれなら辻褃は合う、こういうことだったならもう一体くらい出てきても不思議はないだろう。あたしの勘だと、もう一人くらい若林が出てくるんじゃないかな。」

矢車はその久賀達の勘が外れてくれることを願うばかりだった、もし当たっていたら面倒なことの上ないからだ。

ZECT本部

翌日、矢車は影山から聞きたくなかったことを聞かされた、件の若林がよく行く屋台に3人目の若林が現れたというのだ。

「あいつの勘が良く当たるのは知ってはいたが、まさか今回も当たるとは……。」

「久賀達さん、3人目が出ること分かってたんですか？」

「いや、あいつ自身確信があつたわけじゃないらしい。ただそう考えると今回の事は説明がつくってだけで……。」

「あれ？そういえば久賀達さんは、どこに行つたんです？」

「あいつなら今日は確かオフだった筈だが……。」

広場

天道は風間をZECTに入隊しよう説得していた、理由はZECTに所属しないと組織から目をつけられる可能性があつたからである。だが案の定風間はその提案を断り、天道に軽蔑の眼差しを向ける。二人がそんなやりとりをしているところに、久賀達が近付いていた。

「天道！」

「何だお前は、そんなにカッカして。」

「お前何でシャドウに入った、しかもあんなふざけた偽名まで使って!？」

「それは俺が「大方今回のワームについて調べるためにZECTの力を使おうとか考えたんだろ!」……何故そう思う？」

久賀達の剣幕に若干引きながら、天道は久賀達にそう尋ねる。

「いくらお前でも一人で何でもできるわけがないからな、でかい組織の力で色々やろうとか考えたって不思議じゃない。」

そこまで久賀達が天道に言った時、それまで蚊帳の外だった風間が口を開いた。

「そんなことよりも貴女、どうしてくれるんですか。あなたがこんなモノを私に渡したりするから面倒なことに巻き込まれて「知るかななこと!!」「ッ!？す、すみませんでした……。」

ドレイクとして戦うことになった原因である久賀達にそう抗議しようとするが、久賀達のあまりの迫力に大人しく引き下がる。よく見ると天道も若干後ずさりしていた。

「……俺はこの後若林が勤める病院に潜入する。」  
「何?」

「お前も来たいなら来るといい。もしかすると、今回の件の真実が分かるかもしれないぞ。」

「……つかお前、そのためだけにZECTに入ってシャドウの隊長に?」

天道がそれに「まあな」と答えた瞬間、天道の顔に久賀達の拳が突き刺さった。

「ッ……痛う。」

「それは隊長から下ろされた影山の悔しさその他諸々の分だ。本当はもつとあるんだが今回は特別にその一発で勘弁してやる。」

そう言つて久賀達はその場を去っていき、後には頬を抑える天道と、呆然としている風間だけが残された。

病院前

久賀達はあの後天道の言葉を信じて若林が勤務している病院の前に来ていた。彼が言っていた今回の事件の真相を知るために。しばらく待っている若林と、それを追う天道・・・と何故か加賀美の姿が見えた。それを見た久賀達は急いで天道達と合流した、その途中加賀美が天道に何か喚いていたが、天道は構わず若林の肩に手を置いた。

「あんたが本当の若林だ、ワームではない。」

「何!？」

「き、君は・・・?」

久賀達は訳が分からなかった、どうやって天道が本物の若林を特定できたのか。彼女の中では既に本物は死んでいる可能性すらあったので、これには非常に驚いていた。

「調査の結果、あんたにだけ他の若林には無い癖があった。」

そういうと天道は他の若林と本物の違いを指摘した、どうやら本物は酔っ払っていてもオペの前に看護師に気合を入れてもらうと、別人のように手術を成功させるらしい。

( ってことは酔っ払ってても手術はしたんだ・・・ )

久賀達は目の前の男が本物であることに驚くと同時に、そちらの事にも驚いていた。気合を入れてもらうとはいえ、まさか酔った人間にオペをさせていたとは・・・。ハンドルや刃物を握ると性格が変わるアレの様なものだろうか、とそんなどうでもいいことを考えってしまう。そうこうしている内に話は進み、本物の若林から明日、海辺の遊歩道で話を聞くことになりこの日は解散することになった。



## 遊歩道

翌日、久賀達は天道らと共に若林から話を聞いていた。ちなみに本物の若林が特定できたことは既に矢車達には知らせてある、もうじきここに来るころであろう。

話を聞いていると、どうやらワームは若林の「オペを待っている患者のために1ヶ月だけ待つてほしい」という願いを聞き入れて、彼の代わりにオペを行ったりしていたらしい。この話を聞いて患者のために命乞いをする若林を立派だと思うと同時に、随分と風変わりなワームだとも思う。態々擬態した相手を生かして、あまつさえ手術して人を救うとは。しかも二人だけでは手が足りなかったようにさらに仲間を呼んで、そいつらも若林に擬態していたらしい。通りで三人も若林が居る筈である、しかも同族のワームの数からいえば少なくとももう一人、計四人の若林が居る計算になる。と言うことは久賀達が観察していた若林がワーム同士で飲んでいた可能性もあったわけだ、こんなの分かるわけがない。と、その時・・・

「タイムリミットだ。」

「約束通り貰うぞ、お前の命。」

そう言いながら二人の若林が来た、どうやらワームが本物の若林を殺しにきたらしい。左右から二人来るのと少し遅れて正面からも若林が・・・三人やって来た、計6人の若林、なんとも奇妙な光景である。

「ろ、6人もいたのか!？」

「相当忙しかつたんだな、あんた。」

「幾らなんでも居すぎだろう。」

「おかげでこつちも苦労した・・・全員同時に調べるのにはな。」

加賀美は天道の言葉に、彼がZECTに入った理由を悟つたらしい。まったくこんなことで隊長を外されるなんて、影山も飛んだ災難である。やはりもう一発殴つておこつかなどと考えるが、今はそれどころではない。

若林に擬態したワームは多くの人をオペで救ってきたことで自分達の正当性を語るが、天道の「一方で人を襲つていては話にならない」という言葉に一刀両断される。これには久賀達も同感だった。どんなに人を救つていてもそれと同様に人を襲つていては、何人救つていようが結局は人殺し、変わったワームでも結局はそこいらのワームと何も変わらないのである。その言葉にワーム達は擬態を解いた、久賀達らの前には5体のフォルミカルビュスワームが出現した。

(5対2か、少し骨が折れそうだな・・・。)

実際には少しどころではない、流石に加賀美や若林を守りながら5体のワームを相手にするのは流石に辛いモノがある。その時カブトゼクターとザビーゼクター・・・そしてドレイクゼクターがワームに体当たりをした。どうやら風間も近くに来ていたらしい、これの数の上では5対3。

(あたしと天道が2体、風間が1体で何とかなるか。)

そう考えながら3人はそれぞれのゼクターで変身する。

「変身!」

Henshin

3人はそれぞれカブト・ザビー・ドレイクに変身してワームと戦い

始める、その時。

「「変身！」」

Henshin

Change Kick-Hopper

Change Punch-Hopper

矢車と影山がKホッパーとPホッパーキックに変身して参戦してきた、どうやら最高にいいタイミングで到着してくれたらしい。

「これで数は五分五分だな、ハア！」

ザビーはワームに連続で攻撃を喰らわせる、ワームも反撃してくるがそれらは全てマスクドアーマーの強度を利用して防がれる。もとよりマスクドフォームの弱点は小回りの利かなさである、下手にかわそうとするよりは正面から防いだ方がダメージが少なくて済む。ワームは堪らずクロックアップで逃げようとする、しかし

「キャストオフ！クロックアップ！」

Cast off Change Wasp Clock up

ザビーもキャストオフと同時にクロックアップでワームに追撃を加える。

「ハッ、ハッ、セイッ！」

ザビーからの連続パンチを受けたところにキックを受け、弾き飛ばされるワーム。ザビーはそこにトドメの必殺技を叩き込むためライダーステイングの準備をする。

「ライダーステイング！」  
R i d e r   S t i n g

ゼクター上部のスイッチを押すと、立ち上がるうとしている最中のワームに飛びかかるザビー。そしてワームに対して必殺の一撃を叩き込み、ワームは爆散する。

一方KホッパーとPホッパーの方は、二人の方が圧していた。Kホッパーは多彩なキックでワームの攻撃を寄せ付けず、Pホッパーは素早いパンチでワームに反撃の隙を与えなかった。

「フツ、ハツ、セリヤツ！」  
「フツ、フツ、ハツ！」

二人はお互いにワームを弾き飛ばすと、ゼクターレバーに手をかけた。

「「ライダージャンプ！」」  
R i d e r   J u m p

ゼクターから電子音声がなると同時に、足にタキオン粒子が集められ驚異的な跳躍を行う。

「ライダーキック！」  
R i d e r   K i c k  
「ライダーパンチ！」  
R i d e r   P u n c h

跳躍を行った後二人はレバーを元に戻し、必殺のキックとパンチをワームに喰らわせる。二人のキックとパンチが炸裂すると同時に左

足と右腕のアンカージャッキが稼働し、2体のワームは吹き飛ばされながら爆散していった。

ザビーはワームを始末した後、カブトの方がどうなったのか確かめに来ていた。まあカブトの事だから仕損じるといふことは無いとは思うが、念のためと言う奴である。

「ん？あれは・・・加賀美！」

C l o c k   u p

何かの気配を感じそちらに視線を向けてみると、そこにはワームにゼクトガンで銃撃している加賀美の姿を見た。いくらなんでも無茶だと思ひ、クロックアップしてワームを始末しようとする。するとそこにはカブトがいて、既にワームに攻撃を仕掛けていた。いつもとは違う連続攻撃の数々、そしてライダーキックでワームを攻撃すると即座にその場を離れた。

(あいつ・・・まさか。)

そう考えクロックアップを解くと、加賀美の放った弾丸がワームに着弾すると同時にワームが爆散した。はたから見ると加賀美がワームを倒したようにも見えるだろう。それを見て一瞬呆然としていたが、すぐに大喜びする加賀美。ザビーは変身を解くと、加賀美の後ろの方にある木の陰に隠れている天道に近付いて行った。

「ん？お前か・・・。」

「どついう風の吹きまわしだ？お前が他人のためにこんなことをするなんて。」

久賀達の問いに天道は答えず、黙ってその場を去っていった。本当

だったらやはりもう一発くらい殴っておこうかと思っていたのだが、加賀美の喜びように免じて今回は水に流すことにした。彼女の予想が正しければ……

ZECT本部

影山は、三島からシャドウの隊長に復帰してもいいという言葉聞いていた。正直言って驚いた、悔しいが確かに統率者としては向こうの方が上であることを肌で感じ、もう隊長には戻れないと思っていただけに。

「でも天道寺と言う男は、一体どうしたんです？」

「行方が知れなくなったよ……惜しい人材だったが仕方あるまい。」

それだけ言うと三島は影山に背を向け、影山は三島の下から去っていった。

「よお、隊長復帰おめでとう。」

「久賀達さん……。」

「やはり3隊長はこの3人であるべきだな。」

「矢車さん、ありがとうございます。」

三島の下から去った後、影山は久賀達と矢車の二人に会った。二人とも心の底から影山が戻ってきたことを喜んでいた。

「よし、影山の復帰を祝って！矢車、何か作れ。」

「いきなりだな……まあいいか、麻婆豆腐でいいか？」

「ホントですか！？ありがとうございます！」

久賀達からの提案に矢車は苦笑しつつも承諾し、影山はそれに喜んだ。3人はそんな話をしつつ、本部の廊下を歩いて行った。

## 第12話 若林の真実（後書き）

と言うわけで第12話でした。やっといてなんだけどワームが凄回数だったな（汗）。矢車さんと影山にも活躍の場を与えるために増やしたら、若林どんだけ忙しかったんだよ、って話に（苦笑）。

久賀達の予想ですが、9割方当たってはいました。彼女の予想は同じ人物に擬態したワームが複数いる、と言うモノでしたので。ただ彼女の中では本物も既に死んでいるのではないか？という予想が立っていたので若林本人が生きていることには少なくとも驚きがあったわけです。

今回は原作とちょっと違う話にする予定ですので、どうか楽しみに。  
それでは。



### 第13話 少女の記憶（前書き）

どうも皆さん、黒服です。今回は原作第17話を基にして作ってみました。

### 第13話 少女の記憶

B i s t r o l l a S a l l e

久賀達は今、非常に面倒なことに巻き込まれていた。というのも今彼女の目の前にはこの店の店員ひよりと天道、そして……

「ウツ……グツ……エグツ……。」

泣いている風間の相方の少女・ゴンがいた。何故こんなことに巻き込まれているのか、それは数分前に遡る。

数分前

この日久賀達はオフの日だった、午前中は特に何をするでもなく街を適当にぶらついていたが、ふと気がつくとSaalleeの前に来ていることに気付く。そこで彼女はここの賄いがかなり美味しいことを思い出し（以前加賀美に聞いた）、ちょうど腹も減ってきていたので自分もここの賄いを食してみようと思ったのである。で、店内に入ってまず最初に目に入ったのは泣いている少女に近寄るひよりと天道だったのである。彼女としては別にその場で回れ右をして帰っても良かったのだが、少女の泣き声にどうしても後ろ髪を引かれてしまい仕方なくその場で少女の話を聞くことになったのである。

（たしかこいつ、風間の相方だったよなあ。こんなとこに来て一体どうしたんだ？）

そう疑問に思いながら少女ーゴンーの話の聞いていると、どう

やら昨日の夜に不審者に襲われたらしい。幸いすぐ近くに風間が来ていたので、不審者の手を振りほどき風間に助けを求めるも、既に不審者はその場から離れており風間にはまともに相手にしてもらえなかったらしい。それ以来どうしても怪しい視線を感じ、先程ついに仕事でミスをして結果風間に怒られてしまったというのだ。

（あいつ・・・こんな子供相手に、バカか・・・。）

久賀達は話を聞いてまず最初にそれを思った、いくら何時も仕事について行っているとはいえ相手は子供である。子供はちよつとしたことでも不安になればとことん不安になってしまう、それを考慮せずにもともに話を聞かず、あまつさえ仕事のミスを怒るなど大人げ無いにも程があるだろう。

「そうか・・・風間 大介もバカな奴だ。お前が居てくれる有難味を分かかっていないらしい。」

久賀達も同感だった。時たま風間の仕事風景を見たことがあるが、あの男はボキャブラリーが気の毒なほどない。言葉に詰まるたびにゴンにサポートしてもらっているのに、それを考えずこの子を突き放すような真似をするとは・・・。

「でも・・・悪いのは私だし・・・。」

なんとも健気な子供である、今回の事はこの子の言うことをまともに聞かずメンタル面でのケアを怠った風間に原因がある。それなのに自分が全て悪いみたいなのを言うのだから、健気と言うほかは無い。

「ねえ姉ちゃん達、あたし大介に謝りたいから一緒に来てよ。大介、

女の人に弱いから。」

「悪いがあたしはパスだ、というより多分あたしはあいつに嫌われてる。」

「どうして?」

「ほら、お前もあの時一緒にいただろ?あたしがあいつに・・・えくと、その・・・ほら・・・。」

そこまで言って久賀達は言い淀む、天道とゴンだけなら良かったのだがこの場にはひよりもいる。一般人の彼女の前でドレイクグリップの事を口にするのは流石にまずい。

「ッ!ああ、あの時の事ね。」

どうやらゴンの方が自分の言いたいことを汲み取ってくれたらしい、本当に出来た子供である。

「でも、大介いつまでも気にしてるかなあ。」

「こないだそれについて文句を言われてね、その時はこっちもちよつと機嫌が悪くてバツサリ切り捨てちまったんだよ。多分そのことも含めてあたしは嫌われてると思うよ。」

実際彼は自分にいい印象を持っていないだろう、最初に会った時は特に自己紹介もせず訳の分からない者を渡して面倒なことに巻き込み、次に会った時にはそれに関する文句を一刀両断した。久賀達だったら先ず悪印象以外持たないことは間違いない。

久賀達がそんなことを考えていると、ひよりの方が承諾し、さらに気になることを口にする。どうやらゴンには親が居ないらしいのだが、だがゴンによれば覚えていないとのこと。

(記憶喪失ってやつか。)

大介とは記憶を失った直後に出会ったらしい、彼とはそれからの付き合いなのだとか。そうこうしているとゴンがひよりを伴って風間の下へ向かって行った。それを見届けた後久賀達も店から出ようとしたが、天道に引き留められる。

「さて、お前も店を手伝え。」

「何であたしが……。」

「大方、お前もこの賄いが目当てで来たんだらう？手伝えば、その礼に賄いぐらい食わせてもらえと思うぞ。」

「……残念だが今は　グウ~~~~　……。」

「体は正直なようだな、どうする？」

久賀達はこの時ほど自分の難儀な体質を呪ったことは恐らくないであろう、よりもよってこんな時に腹の虫を鳴らして空腹を知らせてなくともいいだろうに。仕方なく久賀達も店を手伝うことにした、とはいえ彼女自身は人に出せるほどの料理など出来ないのでもやることと言えば専ら掃除や皿洗いなどになるのだが。

しばらく二人が店番をしていると、客が入ってきた。店の入り口に目を向ける久賀達、するとそこには風間と見知らぬ女性がいた。二人の会話から察するに、どうやら女性は雑誌か何かの記者らしい。基本的に風間はフリーのメイクアップアーティストとして名が売れている訳だし、記者からの取材があってもいいだろう。そんなことを考えていると、天道が風間のテーブルに水を持っていった。そこで風間は初めて天道の存在に気付く。天道がゴンの話を出すと、風間は仕事を理由にそれを突っ撥ねる。

「お前、最低だな。この男は最低だ、記事にそう書いておけ。」

「はぁ……。」

「子供の気持ちも分からない無神経な男だな。」

天道はどうやら相当怒っているらしい、いつもとは違った雰囲気  
の天道に久賀達も少なからず驚く。こんな男でも子供が絡むと話は違  
うのか、と。一方の風間も言われてばかりでなく反撃に出た。

「やめろ！子供の気持ちくらい分かっている。あの年頃の子どもは  
な、注目を引きたがるものなんだ！誰かに襲われたとか言っていた  
が、それもホントかどうか。」

そこまで聞いて、流石の久賀達も口を出すことにした。いくらなん  
でも今回のこいつの行動は馬鹿すぎる。

「あのなあ……お前、そうやって相手にされないあの子の気持ちを  
少しは考えたのか？」

「あ、貴女は！？」

「確かにあの年頃の子どもは注目を引きたがるかもしれないがな、  
だからって言うこと全部そう言う風に決めつけてると、今に取り返  
しのつかない事態になるぞ。」

そう言っただけの奥に引込もつとした時、久賀達と天道はあるモノ  
に気付く。店の窓の外からこちらを見ているザビーゼクターとカブ  
トゼクターに。どうやらワームが出たらしいが、二つのゼクターは  
お互いにお互いを弾き飛ばし合っている。どうもカーテンによって  
遮られている窓の僅かなスペースを取り合って喧嘩しているらしい。  
いや、もしかするとどちらがワームを倒しに行くかで揉めているの  
かもしれない。久賀達はそんなゼクター達の様子にやれやれと首を  
振ると、天道に視線でどちらが行くかを尋ねる。ワームを天道に取  
られるのは癪だが、正直今は空腹であり激しく動きたくは無。  
あまり空腹が酷くなると彼女の洒落にならない事態になる、それ  
にどの道どちらかがこの店で店番をしなければならぬ。そのこと

を考えて天道の方を見ると、彼は既に行く気満々だった。

「俺は少し買い出しに行ってくる、ちゃんと店の番をしてるよ。」  
「ガキじゃないんだ、それくらい言われなくても分かってる。」

そう簡単な受け答えをして天道が店から出ていくのを確認すると、改めて久賀達は店の奥へ引っ込んでいった。その際チラリと窓の外に目を向けると、勝ち誇ったように宙返りをするカプトゼクターとズーンと言う効果音が似合いそうな雰囲気醸し出したザビーゼクターがゆっくり下に降下していくのが見えた。

その後記者の女性は取材を終えたのか店から出ていき、風間はその後も店でコーヒーを飲んでいた。時たまお代りしてきた時は、久賀達が慣れないながらも風間が満足できるだけのコーヒーを出した。それからしばらくはお互いに何を話すでもなく、久賀達はザビーゼクターに構い（先程ワームを天道とカプトゼクターに譲ったことへの詫びも含めて）、風間はコーヒーを飲んでいた。その時、ザビーゼクターを撫でながら久賀達が口を開く。

「お前さあ、結局どう思ってるわけ？」

「何のことです？」

「ゴンのことだよ。お前にとって、あいつは何なの？」

久賀達からの問いかけに風間は押し黙る。恐らく今まで考えたことも無かったのであろう、だが考えたこともないということは逆に考える必要もない間柄であるとも言える。それはつまり……

「戻ったぞ。」

「ああ、随分と遅か……ってゴンはどうしたんだ？頭でもぶつけたのか？」

その時天道がひよりとゴンと共に店に戻ってきた、天道にしてはワーム相手に随分と時間をかけたモノだと考えていると、どうもゴンの様子がおかしい。頭でもぶつけたのか俯いて頭を押さえているのである。

「ああ、それがな・・・。」

天道が言うには、ひよりとゴンがワームに襲われていて、ひよりがワームの攻撃からゴンを庇った際にゴンが頭をぶつけてしまったとのこと（もちろんこの会話はひよりに聞こえないようにこっそり話した）。しかもその際のショックでゴンが記憶の一部を取り戻したらしい。天道は賄いを作るために厨房に入り、久賀達はひよりと共にゴンから話を聞いていた。

「琴川駅行きのバス？じゃあ、記憶が戻ったのか？」

どうやらそのバスがゴンの記憶と何らかの関係があるらしい、ひよりがさらにゴンに尋ねるが完全に思いたしたわけではないのか、それ以上の事は分からないらしい。するとおもむろにゴンが椅子から立ち上がると、大介に先日のお事を謝った。

「それより・・・ごめんなさい、大介。さっきは、仕事の邪魔をして。」

「ふう・・・ああ、まっただ。」

風間の態度は相変わらず素っ気無い、もうちょっと他にかける言葉は無いのかと久賀達が風間に一言言おうとした時、天道が厨房から出てきて賄いをテーブルに置いた。

「今日の賄いは俺が作った、食べてみてくれ。」



出された料理に久賀達は早速箸を伸ばす、相変わらず天道の料理は美味い。本当にこんな性格なのが惜しいくらいである。

（あの性格が無きゃ、仲良くしてやってもいいんだけどなあ。）

矢車に勝るとも劣らない美味さの料理、思わず顔が綻んでしまうが天道の料理でそれをするのは非常に癪なので、自身の理性を総動員して表情が変化しないように努める久賀達。ゴンも天道に促され味噌汁に口をつける、すると・・・

「不味い。」

久賀達は思わず耳を疑った、彼女自身自分の味覚に絶対の自信を持つている訳ではない（むしろ口に入れられるものであれば何でも食べれる自分の味覚は常人のそれとはだいぶ異なると思っている）がこの味噌汁の味は口にした者の10人中10人が美味しいと言うほどのモノであろう。にもかかわらず何故ゴンはこの味噌汁を不味いなどと言ったのだろう。天道を見てみると、彼も不味いなどと言われたのは初めてなのかかなり動揺している。彼のそんな顔を見れたことに満足しつつ、久賀達はゴンに何故この味噌汁が不味いのか尋ねた。

「だって・・・前にもっと美味しい味噌汁を飲んだような気がするの。」

これを聞いて久賀達はなるほどと思った、ゴンが言うもっと美味しい味噌汁、それは恐らくゴンの母親の作った味噌汁であろう。他人がどんなに美味しい料理を作っても、心に沁み込むほどに美味しい料理は母親にしか作れない。

「ゴン。お前、記憶が戻ったんなら、家に帰ったらどうなんだ。」

「大介……。」

「当然だろ？俺達はもともと街で偶然出会っただけだ、ずっと一緒にいられるわけじゃない。それに、俺はこれからもっともっと有名になる。子連れじゃカツコがつかないしな。」

ひよりがその言葉に思わず立ち上がって風間に近付くが、それよりも早くゴンが立ちあがって口を開いた。

「わかった、大介の邪魔になるなら……もういいよ。」

ゴンは泣きそうな声でそう言つと店から出ていき、ひよりが慌ててその後を追いかけていった。久賀達はその様子を黙って見ていた。

「お前、やっぱり最低だな。もう少しマシな奴かと思つたが。」

風間は天道からの言葉に何も言わず、ただ黙ってゴンが出ていった扉を見つめていた。

「……それじゃあ、あたしはこれで失礼するよ。腹もそれなりに膨れたし、じゃあな。」

しばらく何かを考える様な素振りをした久賀達はそう言つて店から出ていくと、急いである場所へと向かつて行った。

バス停近く

ひよりはゴンの記憶に関係のある琴川駅行きのバスに乗っていたが、

ゴンが一向に記憶を取り戻す気配が無いので、仕方なく途中のバス停で降りることにした。その時、ゴンが突然うずくまりしきりに何かを呟いていた。

「ゴン？」

「…ないで。こ…さないで。殺さないで…。殺さないで！」

次第にその声は大きくなり、遂には叫ぶように「殺さないで」と何度も言い始めた。そのゴンの姿に、ひよりは昔の自分を重ねる。その時……

「うっ！……。」

突然何者かに後ろから殴られ、ひよりはそのまま気を失ってしまった。ひよりを気絶させた人物はうずくまっているゴンに近寄り、ゴンと目線を合わせるようにしゃがみこむ。ゴンが顔を上げると、そこにいたのは……

「フツ……。」

ZECTの制服に身を包んで、軽く微笑んでいる久賀達だった。

とあるカフェ

久賀達はここである人物を待っていた、時間的にはまだ余裕があるのでその間に久賀達はノートパソコンを起動させる。

「何の用ですか？」

とその時、目的の人物・・・風間 大介が来たようだ。彼は何時ものごとく面倒臭そうに久賀達に話しかけてきた。

「こんな所に呼び出して・・・ZECTに入れと言う話なら、断った筈です。」

「それが・・・ちょっと事情が変わってなあ。」

そう言いながら久賀達は風間にノートパソコンの画面が見えるようにする、するとそこには・・・

『大介！開けてよう！』

どこかのビルの中だろうか、扉から見える窓を必死に叩いているゴンの姿があつた。それを見た風間は思わず画面に顔を近付ける。

「ゴン・・・。」

「お前の態度次第で、こいつの扱いが変わってくる。」

「貴様・・・。」

風間は久賀達を睨みつけるが、久賀達は涼しい顔をしている。その間にも画面からは助けを求めるゴンの声が聞こえてくる。

「今からあなたはZECTの一員、まずはカブトを倒してもらおうよ。」

「・・・無駄だ、俺とゴンは何の関係もない。好きにすればいいな。」

風間はそう言っているが、その様子からはゴンを心配しているのが手に取るように分かる。久賀達はもう少し風間を刺激してやるため、画面を操作してゴンの顔をアップにする。さっき以上に鮮明に見える

るゴンの顔と依然として助けを求める声、それに風間は画面から目が離せなくなってしまうた。

とある遊歩道

天道が歩いていると、いつの間にか後ろに風間が来ていた。

「どうした？」

「お前は俺を最低だと言ったが……残念だ、どうやら最低にはなり切れないらしい。」

そう言うと風間はドレイクグリップを構えてドレイクゼクターを呼びだし、即座に変身した。

「お前、何を考えている。こんな時に喧嘩を売るつもりか？」

ドレイクは何も言わずにドレイクゼクターを構えていた。

「おばあちゃんが言っていた。未熟な果物は酸っぱい、未熟者ほど喧嘩をするってな……。」

相変わらずドレイクは何も言わず、黙ってドレイクゼクターの引き金を引いた。

### 第13話 少女の記憶（後書き）

と言うわけで第13話でした。今回久賀達が変身しなかったなあ、って言うか戦闘シーン自体なかったですね今回（汗）。シーンのほとんどもがSaleeの中ばかりだったのでこの作品では結構珍しいことかもしれないです。終盤の方で久賀達が結構悪役っぽいことをしてますけど、勘のいい読者の皆様だったら彼女が何を思っただけで行動したのかわかりますよね（^^;）。とはいえ一応分からない人の為に予想を感想に書いたりするのは控えてくださるとうれしいです。次回の更新もお楽しみに、それでは。

## 第14話 仲直り（前書き）

どうも、黒服です。カブトの方が随分と間が空いてしまいました（汗）、申し訳ありません。とりあえず前回の久賀達の行動の答えが今回明らかになります。

## 第14話 仲直り

伊豆・ZECT保養所

風間が天道に発砲したのとはほぼ同じ頃、久賀達は二人の様子をパソコンでモニターしていた……。ゴンと共にジュースを飲みながら。

「おお、やってるやってる。」

「大介……。」

二人の間には険悪とか緊張とか……早い話が誘拐犯と人質の間にある様な雰囲気は一切なく、むしろどこか仲良さげな雰囲気が漂っていた。

「良かったじゃないか。あいつ、お前の為にああして戦ってるんだ。愛されてるって証拠だよ。」

「うん……。ありがとう、姉ちゃん。」

今回の事は久賀達が考えたゴンと風間を仲直りさせる為の作戦である、Saleeでの風間の様子を見て思い切ってゴンを危ない目にあわせて風間の心を刺激してやるうと思っただのだ。ゴンの事を心の底では大切に思っているのなら、ゴンに危機が迫った時には助けるために動くだろうし、もし仮に動かなかつたらその時は思いっきりぶん殴った後で自分の近くに置きながら本当の親を探してやるつもりだった。

「ほう、風間の奴もなかなかどうして。案外やるじゃん、普段からあれだけ本気出せばいいのに。」



久賀達の言う通り、風間の動きは何時もの動きとはまるで違っていった。ドレイクゼクターによる射撃を最大限に使うてカプトにダメージを与えていく。組み合つた際に零距离からの連射、横にスライドしながらの射撃と多彩にドレイクゼクターを使いこなしている。本当に普段からこれほどの戦い方をしていれば、もつと活躍できる筈なのに・・・

「でも、大丈夫かなあ。」

「ん？何が？」

「だって大介、結構本気だし・・・天道を往く人や大介が怪我したりしないかな・・・。」

「そこんところは大丈夫だ、天道がそうそうやられる筈がないし、もしヤバくなつたらうちの連中にちよつかいかけさせて戦いを中断させる手筈だから。」

そう言いながら久賀達は画面の一部をアップにしていく、そこには久賀達の部下の姿があつた。ただ何時ものボディーマーではなく私服姿で。彼らも久賀達同様非番だつた所を久賀達に召集をかけられて、今回の事に付き合わされているというわけである。

その頃久賀達の部下達は・・・

「何でおれ達せつかくの休日を使ってこんなことしてんだ？」

「しゃーねーだろ、隊長からの命令なんだから。」

「んなこと言つたつてよお、何で風間つてやつと相棒の女の子の仲直りの為に態々ここまで・・・。」

「そりゃあ、俺らの隊長が根は優しいお方だからだろ。見捨てておけなかつたんだよ。」

「そうかもしれないけどよ。」

「そう言う隊長だから俺達も従ってる。それに・・・そう言うお節介な上司と仕事するのは楽しいだろ？」

「……違いねえ。」

場面は戻って久賀達とゴン

「でも・・・なんでここまでしてくれるの？」

「なんでって？」

「態々他の人達にも協力させて、あたしと大介を仲直りさせてくれようとして……………」

その言葉に久賀達はしばし考える素振りを見せると、ゴンに向かって言った。

「そんなに深い理由は無いよ、どうせ暇だったし。たまにはこういうお節介もいいかと思っただけさ、それだけだよ。」

そう言っただけ久賀達はそっぽを向いてしまう。ゴンはそんな久賀達の様子にくすりと笑うと、一言……

「ありがとう。」

と言った。それに久賀達は一瞬だけゴンの方に目を向けると、軽く微笑んですぐにまたそっぽを向いてしまった。

そうこうしていると、どうやら勝負は終わったらしい。ドレイクがライダーシューティングを放つがカブトはそれにライダーキックを当て、爆発を利用してその場から離れて行き、後にはドレイクだけが残されていた。ここまでやれば風間にゴンを返してやってもいい

かもしれないが、この戦いを見て久賀達の中にある思いが生まれる。

（もう一回くらい天道と戦わせれば、あいつも少しは強くなるかな？）

今回の風間の動きはなかなかいいモノだった、この調子でいけば案外行くところまでいけるかもしれない。そこで久賀達はもう少しゴンに協力してもらおうことにした、ゴンも風間が今より強くなれば戦いで危ない目にあう確率が減ると言われると快く承諾してくれた。

数時間後

風間はゴンに会いに保養所に来ていた、その顔にはゴンを心配している様子がありありと見える。そんな風間にゴンは扉越しに近付いていく。

「大介、早く助けて・・・私こんなとこヤダ。」

そう言うゴンの顔にはあたかも不安と言う感じが見てとれ、これが演技と気付くのは正直難しいかもしれない。健気な上になんとも恐ろしい子供である、と久賀達は思う。

「ああ、分かっている！必ず俺が助け出してやるから！」

そう言われてゴンは嬉しそうに顔をうつ向かせる、今までこんな風に言われたことが無かったのである。するとゴンが表情を曇らせて、風間に謝罪し始めた。どうやら風間の本心に触れて今までの事を申し訳なく思ってしまったらしい。

「ごめんね、大介。いつも我儘ばかり言って……迷惑ばかりかけちゃって。」

そのゴンの言葉に、風間は辛そうな顔で首を振る。

「私、記憶をなくして、どうしたらいいのか分からなくて。そして大介がイチゴ牛乳買ってくれて、あの時私に優しくしてくれたの……大介だけだった。」

そのゴンの独白に、久賀達はかつての自分を思い出す。彼女も同じだった、一瞬にして全てを失い、ただ生きることのみを考えていた時。そんな時久賀達はZECTに拾われ、矢車をはじめとする今の仲間達に出会った。彼らは皆久賀達にとってはかけがえのない存在なのである、ゴンにとってはそれが風間なのである。

「イチゴ牛乳ぐらいいくらでも買ってやる！何せお前は、俺にとつて一つの……一つの……。」

「……相棒？」

「そうそう、それぞれ！」

全くしまらない男である、だがだからこそ風間であるとも言える。久賀達はそんな様子に苦笑しながらも、風間に近付いていく。この雰囲気壊すようにで気乗りしないが……というよりこの会話を聞いてぶっちゃんも戻したやりたくて仕方が無くなってきたが、言いだしっぺでもある上に風間本人が今後ワーム絡みで上手くやれるようにするために二人を引き剥がしに行く。

「残念だが、そろそろ時間だ。」

もとより……ゼクターに選ばれた時点で戦いから逃れることは出

来ないのだから。

翌日・港

風間は天道をこの場所に呼んでいた。カプトを倒し、ゴンを救い出す事を考えて。

「ゴンの為に俺を倒したいと言うお前の気持ちは分かっている、お前は俺が思っていたよりマシな男のようだ。だが……あまり頭は良くないな。」

「何だと!?!」

「ゴンを助けるなら、もっとほかにも方法があるだろう。」

「黙れ! お前を倒せばそれで済むんだ、変身!」

H e n s h i n

風間は天道の言葉を一蹴すると、ドレイクゼクターを呼んでドレイクに変身する。ドレイクは発砲しながら天道に向かっていくが、天道に命中する弾丸は全てカプトゼクターが弾き飛ばす。

「変身。」

H e n s h i n

カプトゼクターはそのまま天道のベルトに収まり、天道はカプトに変身した。ドレイクはそのままカプトに突っ込んでいき、カプトと殴り合いを始める。

「あいつまゝたドレイクで態々接近戦を……ハア、しょうがねえなあ。変身!」

H e n s h i n

そう言うと近くで見っていた久賀達もザビーゼクターを呼んでザビーに変身して、風間に加勢する。

「ハッ、フッ、セイッ！」

「お、お前……。」

カブトはザビーと戦いながらも小声で話しかける。

「お前、今回の事に絡んでたのか。ゴンを攫ってあいつを脅迫して……一体どういつつもりだ？」

「別に無理難題を吹っ掛ける気はないよ、ゴンにだって不自由させちゃいないしな。」

「何だと？」

「それより、ちょっと付き合ってもらうぜ。風間あ！」

カブトとの会話を打ち切ると、ザビーはドレイクの声をかける。

「あたしがコイツを足止めしてっから、お前はそこからコイツを撃て！」

その言葉にドレイクは慎重に狙いを定め、ザビーがカブトから離れた一瞬の隙を突いて射撃を喰らわせる。ザビーが殴りつつ、ドレイクが射撃でダメージを与える。ザビーがうまく誘導していると言うのもあるだろうが、それを差し引いてもドレイクの射撃はやはり正確だった。

( いい腕だ、やっぱりこのまま行けば案外……。 )

ザビーがそんなことを考えていると、ドレイクからの射撃でカブト

が海に弾き飛ばされる。海に落ちるカブトを見て、ドレイクもその後を追っていった。ザビーはその様子に満足そうに頷く、他のマスクドライダーシステムには無いドレイクだけの利点、それはマスクドフォームだと水中戦に対応しているということ。自身の持つライダーの特性を上手く利用した戦いをドレイクが出来ていることに、ザビーは満足していた。

「これで少しは自分の戦い方ってやつが分かってくれたかな？あいつも……。」

そうこうしていると水中で閃光が幾つか光った後、ドレイクが浮かび上がってきた。どうやら彼は勝負がついたと思っているらしい。

(ま、こんなんであいつがやられるとも思えないんだけどね。)

恐らく天道はこちらの真意を汲み取っただろう、とすればこの場は上手いこと逃げだした筈。それも風間にカブトを倒したと思わせて

(それじゃ、ボチボチ仕上げにかかるとするかな。)

伊豆・ZECT保養所

風間は久賀達に食って掛かっていた、というのも久賀達が一向にゴンを解放しようとしなからである。

「どついうことだ！カブトを倒したらゴンを自由にする約束だった筈だ！？」

「んな約束した覚えはないな、あたしは『まずは』カブトを倒してもらおうかって言ったんだよ。お前がドレイクの資格者である限り、

あんたにはZECTとして働いてもらうよ。」  
「貴様あ!?!」

久賀達はこれでもかと言うくらい悪どい言い方をし、それに風間は思わず久賀達に掴みかかった。だがゴンがそれを止める。

「やめて大介!もういい……もういいから。」  
「ゴン……。」

ゴンからの言葉に風間はゴンが閉じ込められている扉に近付いた。

「私が悪いんだもん、全部……私が……。」  
「違う、俺の所為だ!俺が……お前の手を離れたから……。」

二人の様子を見て、久賀達はどこか眩しさを感じた。これが絆か……と、だからこそ担当医からの報告を思い出す度にどこか遣る瀬無いモノを感じてしまう。

(ゴンの記憶は確実に戻ろうとしてる筈。でもそうすると……ゴンは風間の事を……)

記憶を取り戻せばゴンは母親の下に帰ることが出来る、それは確かに素晴らしいことだろう。だが、その代償としてある意味輝ける時間を失うとすれば、一体どちらが彼女にとっての幸せなのだろうか?久賀達はそんな事を考えていた。

翌日、ゴンが監禁されている保養所に天道や風間らが潜入していた。ゴンがZECTに誘拐されたということに納得できない加賀美と岬が田所に詰め寄った結果、この保養所の存在に行きついたのである。そして彼らは給仕になりすましてここの職員達を最初は食べモノに



薬を混ぜて眠らせようとする。しかしそれは天道により却下され、代わりに美味い料理で職員達を釘づけにする案が実行される。この案は大成功を収め、彼らはまんまとゴンが監禁されている場所の力ギを入手することに成功していた。風間は力ギを使ってゴンが監禁されている部屋の扉を開けて、ゴンを解放した。

「大介!!」

「ゴン……。」

再会して抱き合う二人と、それを見つめるひより。そこに……

「よお。」

「き、貴様は!?!」

いつの間にか久賀達の下から上がってくる扉の前に立っていた……  
・手にサバ味噌の乗った皿を持ちながら。

「こいつなかなか美味しいな、お前が作ったのか?」

「まあ……そうだけど……。」

「そんな事よりも、ゴンは返してもらった!もうお前の言う通りにはならないぞ!?!」

「ああ、構わないよ。」

「何?」

あまりにもあっさりとしている久賀達の様子に、風間もひよりも啞然としてしまう。そんな様子の二人を見つつ、久賀達が言葉をかける。

「とりあえずここだといろいろ面倒だから、場所を移すか?」

そうやって久賀達は、天道達と一緒にS a l l e eに向かうことにした。

## 第14話 仲直り（後書き）

と言うわけで第14話でした。久賀達が何を思って行動してたかは勘の良い方なら前回の時点である程度予想がついたかもしれないですが、風間とゴンを仲直りさせることが目的でした。本当はこの次の話と合わせて1話で投稿するつもりだったんですが、またしても長くなってしまい止む無く2話に分けての投稿とすることに（汗）。なので次回の更新は早めになりそうです。次回の更新も楽しみにしててください。それでは。

**第15話 戻る記憶、消える記憶（前書き）**

どうも、黒服です。今回でゴンの記憶編が終了します。

## 第15話 戻る記憶、消える記憶

Bistro la Salle

あれから彼らはここで事情を聴くことになった、全員が大なり小なり訳が分からないと言った感じの顔をしている。そんな彼らに、ゴンが第一声で謝りながら頭を下げた。

「まずは・・・ごめんなさい、皆さんに迷惑をかけてしまつて。」

「そんな事よりも、何が一体どうなってるのか説明してくれないか？」

「それはあたしからしよう。」

加賀美が事情を聴くと、久賀達がそれに答える。今回の事は自分が仕組んだものであること、風間にゴンの大切さを認識させる為に行ったものであることなどを全員に話した。

「それって、ゴンは知ってたのか？」

「勿論、ゴンは知ってるよ。寧ろゴンに協力してもらったところが多いな。」

「つまり・・・あれは全部演技だったと？」

「最初にお前に見せたモニターではゴンに演技してもらつたよ、ただそれ以外のところはほとんどゴンの本心から来てるもんだ。正直流石のあたしも良心が痛んだよ。」

風間は自分がゴンに踊らされてたのではないかと思ひ始めるが、久賀達がそれを否定する。ゴンは心の底から風間に対して申し訳ない気持があつたと、風間の事を本当に信頼していると言つた。風間がそれに安心したように溜息を吐くと、今度は岬が口を開く。

「それじゃあ今回の件に組織は全く関与していないんですね？」  
「ああ、今回の事は完全にあたしの独断さ。もっとも、使える権限は最大限に使わせてもらったけどな。」

久賀達がそんな風に事情を話していると、おもむろに風間の方に向き直る。

「そんな事より、今回の事で少しはゴンに対する態度を改める気になったか？わかっただろ、お前にとってゴンがどついう存在なのか。」

「……ああ、すまなかつたゴン。俺が少し無神経過ぎた、もうちょっとお前の話を聞いてやれば……。」

「そんな！大介、私だって……。」

風間とゴンがそんな風にお互いに謝っていると、厨房から天道がトレーにいくつもの味噌汁の入ったお椀を持ってゴンに近付いてきた。

「全く傍迷惑かつお節介な奴だ、態々そこまでするなんてな。」

「うるさいな。そんな事よりも、なんだよそれ？」

「ゴンは俺の作る味噌汁より美味しい味噌汁を飲んだことがある……そう言っただな？そこにゴンの記憶を取り戻す切っ掛けがあるかもしれない。」

天道にそう言われ、ゴンは次々と味噌汁に手を伸ばしていく。だが味噌汁は悉くハズレ、結局全ての味噌汁にゴンは不味いと言った。

「……駄目か。」

「ごめんなさい……。私が覚えてるのは、もっと爽やかな味だったような気がするの。」

「爽やかな味噌汁ねえ……。」

正直久賀達には全くピンとこなかった。だが風間はその言葉に、あ  
ることを思い出していた。

「そう言えば……昨日飲んだ味噌汁は、爽やかな風のような味  
がしたが……。」

その言葉に天道をはじめとする全員が風間に詰め寄っていた。

## BAR・BOOKS

天道、久賀達、風間にゴンは、風間が昨日訪れたBARに来ていた。  
ゴンの言う爽やかな味噌汁がこのモノなのかを確かめるために。

「これは……!?!?」

「これ!この味!」

どうやらこの味噌汁であたりだったらしい、久賀達も一口飲んで  
みる。

「なるほど……爽やか、ね。」

ゴンの言う通り確かに爽やかな味だった、まさか味噌汁を飲んで爽  
やかと言う感想を持つ日が来るとは思ってもみなかった。天道は力  
ウンターから身を乗り出し、味噌汁が入っている鍋の蓋を開ける。  
そこには皮を剥いたトマトが丸々一個入っていた。

「なるほどなあ、出汁にトマトを使っていたとは……。この味

「噌汁、どこで覚えた？」

「ああ、何時も来るお客さんに教えてもらったんですよ。あくほら、昨夜あんたと一緒に来た、雑誌のライターさん。」

「ッ！？もしかして……まさか！」

屋外ステージ

風間はゴンと共にこの場所であの女性記者を待っていた。

「私の……お母さんが？」

「ああ、分かったんだ。お母さんの方も、ずっとお前を探していたらしい。」

「私の……お母さん……。」

風間の言葉にゴンは複雑そうな顔をする、実の母親が見つかったのは確かに嬉しい。だがそれは同時に、風間との別れを意味している。

「……もうすぐここに来ることになってる。」

「……嫌だよ！私どこにも行かない、ずっと大介の傍にいる！？」

ゴンが風間に言ったその時……

「百合子！？」

あの女性記者……ゴンの実の母親がやってきた。

「百合子……。」

「……行けよ、ほら。」

「……ヤダヤダ！大介の傍にいる！」



ゴンはそう言って風間の手を握る、その時ステージ上に管楽器が何かの様な音が響きわたった。その場にいた全員が周囲を見渡していると、ゴンの母親に触手のようなモノが巻き付いた。

「うっ！？」

そこにいたのは1体のワームービエラワームーだった。

「百合子……。」

それを見たゴンは一歩近づいていく、風間はそれを確認してハツとした顔を見ると、ドレイクグリップを取り出す。風間に呼ばれたドレイクゼクターが触手を切り落とし、ゴンの母は解放される。だがワームはしつこく彼女を狙おうとするが、ドレイクゼクターの射撃がそれを許さない。

H e n s h i n

風間はワームを銃撃しながらドレイクに変身し、ワームをその場から引き剥がした。その隙にゴンの母はゴんに近寄っていく。

「百合子！」

「早く逃げるんだ！」

ゴンの母はゴンの手を取ってその場を離れていき、その様子をしばしドレイクは見つめている。その後ドレイクはワームに飛びかかっていくが、案の定下手に接近しすぎたからかドレイクゼクターを弾かれて上手い具合に攻撃出来ない。そこにステージ上部に久賀達が見れた。

「まったく、あいつは。感情に任せ過ぎだよ、変身！」

H e n s h i n

久賀達がザビーに変身した時、ちょうどドレイクがキャストオフしてライダーフォームになったところだった。ザビーも相手が成虫体ということに変身してすぐにライダーフォームになり、ワームに殴りかかっていく。

「風間、すぐ接近戦に持ち込むな！港で天道と戦った時の事を思い出せ！」

「ッ！よし！」

ドレイクはザビーの真意を読みとってその場から少し距離をとり、ザビーはその間にワームに対して攻撃を加えていく。

「ハッ、ハッ、そりゃっ！」

「ライダーシューティング！」

R i d e r   S h o o t h i n g

ザビーがワームにパンチやキックの連打を与えている隙に、ドレイクはワームに向けてライダーシューティングを放つ。ザビーはそれを横目で確認すると、ワームに対してコンビネーションパンチを喰らわせて足止めするとその場から離れた。そしてその場に残されたワームにライダーシューティングが命中し、ワームは爆散していった。

ワームを倒すとドレイクはそのままゴンの方にクロックアップで向かっていった。するとそこでは、母親に手を握られたゴンが涙を流しているところだった。ドレイクは零れ落ちるゴンの涙を一滴手に乗せると、そのまま去っていき、その直後にクロックアップが解け

た。

「ふう……。」

「どうだった？ゴンは。」

ゴンから離れたドレイクが変身を解くと、久賀達がゴンの様子を見てきた。

「思い出してたよ、母親の事も何もかも……。」

「そうか……。」

風間からの答えに、久賀達が若干辛そうな顔をする。その時どこからか天道が現れた。

「久賀達……お前、何を隠してる？」

「……。どういう意味だ？」

「惚けるな、Saileeに戻ってからと言うモノお前が風間とゴンを見る時の目がどうもおかしい。何か隠してるんじゃないのか？」

天道からの問いかけにもう言い逃れは出来ないと悟った久賀達は、素直に二人にゴンの記憶が戻った場合の代償について伝える。

「……担当医からの報告なんだが……。ゴンの記憶が戻った場合、ゴンは記憶をなくしてからの記憶を全て失う可能性があるらしい。つまり、お前と過ごした時間を忘れちゃうんだとよ。」

「そ、そんな……。」

久賀達からの言葉に愕然とする風間、彼のその様子に久賀達は本当に申し訳なさそうな様子で頭を下げた。

「悪い、本当はもっと早くに言うべきだったんだろうけど……お前達を見ると、どうしても言い出せなくなってるな。本当に、すまない……。」

「……お前でも、そう言う風に物事を言い出せないって時があるんだな。少し意外だったよ。」

「どういう意味だよそりゃ……あたしだって一応人の子だ。そう言う風に思うこともある。」

そう言うと久賀達はその場を去っていき、天道もしばらくしてから帰っていった。だが風間だけは、何時までもそこで立ち尽くしていた。

#### 数日後・歩道橋

あれから数日して、ゴン……いや、高山 百合子は再会した母親と平和を満喫していた。母親の方も再び会えた娘との日常に幸福を感じつつ日々を過ごす。今はちょうど二人で買い物をしているところで、二人が渡ろうとしている歩道橋に一人の男が立っていた。ギターケースを持った若い男性、風間 大介だった。風間は百合子に微笑みかけると、彼女に声をかけた。

「ゴン……。」

口にしたのは相棒として彼女が彼と共に歩んでいた時の名前、だが百合子は全てを忘れてしまっているため風間が何を言っているのか分からない。その様子に風間が目を僅かに見開らき、先程よりも若干強い口調で「ゴン」と百合子と呼ぶと、百合子は母親の陰に隠れてしまう。

「お母さん・・・誰あの人？」

「百合子、あの人はね……。」

「ごめんね、お嬢さん。君があまりに可愛かったから……つい声をかけたくなっただけですよ。」

母親に風間について尋ねる百合子、そんな彼女に対し母親は風間が誰なのかを教えようとするが、風間自身がそれを止めさせた。

「君の可愛さは、まさに一つの……一つの……えつと……。」

風間は何時ものように気障なセリフを言おうとして、何時ものように言葉に詰まる。そして百合子の方をチラリと見た、これで思い出さずにはくれないかと期待を込めて。だが百合子は何も言わず、母親の陰に再び隠れてしまった。

「……なんでもありません、失礼しました。」

その様子に風間は完全に諦め、その場から去っていった。二人の横を通り過ぎると、一度振り返り二人の後姿を見ながら口を開く。

「全部思い出したんだな、ゴン。そして俺の事を忘れてしまった……と言っことか、良かったな。いいんだよ、それで……。」

風間は自分自身に「これで良かったんだ」と言い聞かせながら、今度こそその場から去っていった。百合子は一度後ろを振り向いたが、そこには既に誰もいなかった。

## 第15話 戻る記憶、消える記憶（後書き）

と言うわけで第15話でした。流れるには原作と大して変わりません。ただ話の都合上天道と風間の連携、ライダーキックでライダーシューティングを蹴り返すが無くなってしまいました（汗）。次回は遂に神代 剣が登場します。久賀達との出会いがどのようなものになるのか楽しみにしててください。それでは。

## 第16話 怪盗シャドウ（前書き）

どうも皆さん、黒服です。最近は『剣&キバ』の方はかりでこちらの更新が遅くなってしまいました（汗）。今回は剣登場編です、と言ってもすでに久賀達と剣は出会ってるわけですが、この二人がで再び出会った時どうなるのかお楽しみに。

## 第16話 怪盗シャドウ

朝・久賀達の自宅

現在の時刻は午前6時30分、久賀達はまだベッドの上で眠っている。とその時、彼女にザビーゼクターが近付いていった。ザビーゼクターは久賀達に近付くと、彼女の頭をしきりに突き始める。

《――ツ！――ツ！――》

「ん？あ、ああ朝か……。分かった起きる、起きるよ。」

最近はこのようにザビーゼクターが久賀達を起こしに来るようになった、ザビーになって最初の頃はそれこそ久賀達も目覚まし時計をセットしていたものだが、最近はザビーゼクターが彼女を起こしに来てくれるようになったのでセットしていない。久賀達はある程度ザビーゼクターに突かれると目を覚まして、上半身を起き上がらせると大きく伸びをした。

「ふあ〜あ、あ〜よく寝たっつ。」

久賀達は寝る際に寝間着などは着ない、いや決して裸で寝ている訳ではないのだが、上はタンクトップで下は下着のみといった格好である。正直年頃の女性のすべき格好ではないとも思うが、お洒落等には全く関心を持たない久賀達である。恐らく余程の事が無い限りはまともに寝間着を着ることも無いであろう。

そうこうしていると久賀達はベッドから起き上がり、キッチンに向かって朝食の支度を始めた（ちなみに恰好は起きてからそのまま）。朝食と言っても久賀達は基本食べられれば何でもOKと言うタイプなので、メニューは基本毎朝同じである。トースターに食パンを入



れ、フライパンの上にベーコンと卵を乗せて焼く。後はこれに適当な野菜で作ったサラダで朝食を済ませている。この日も同様にフライパンを火にかけて、ベーコンを乗せた後に卵を落とす（ついでに言う）と卵の殻はそのまま久賀達の口の中へと入っていった、久賀達曰く「カルシウム源」だそうだ。適度に火が通ったら塩コシヨウを振って味をつける、ところが久賀達がキッチンの上を見渡すと目に見える範囲に塩コシヨウが見当たらない。何処に行ったかと目で探している……

《……ッ!》

「ん？おおサンキュー。」

ザビーゼクターが塩コシヨウの入った瓶を抱えて飛んできた、どうやらテーブルの上に置いてそのままだったらしい。塩コシヨウを振った目玉焼きとベーコンを皿に移し、冷蔵庫の中から適当な野菜を取り出して軽く洗ってから盛りつけて久賀達の朝食は完成である。これがこの日のメニューだと言えばまだいいが、毎日続いているとなると雑に見えて仕方がない。ちなみに他所の家だと……

天道家

「いったただつきまゝす!」

天道の義妹・樹花が朝食に箸を伸ばす、その朝食は炊きたての白いご飯に始まり味噌汁に焼き魚、出汁巻き卵に御浸しと言った正に食欲をそそるメニューだった。

「うん、おいしいー! こういうの朝食の和風フルコースって言うんだね。サイッコー!」

そう言いつつ樹花は料理に舌鼓を打っていた。

神代家

一方の神代家では、クラシック音楽をBGMにしつつ神代がダイニングルームに入ってきた。それを確認して彼の執事のじいやが挨拶をする。

「おはようございます、坊ちやま。」

「ああ、おはよう。」

神代がじいやに挨拶しつつテーブルにつくと、じいやがディッシュカバーを取っていく。全ての皿のディッシュカバーを取るとそこには、見事な洋風料理のフルコースがあった。

「舌解をメインにした、フルコースでございます。」

「今日の朝食も最高だぞ、じいや。」

「ありがとうございます。」

と、なんとも貴族らしい優雅な朝を迎えていた。

久賀達の自宅

「いただきます、と。」

それに比べてこちらは何とも優雅さのかけらも無いモノである、一般の一人暮らしでも少なくとも服装ぐらいはもう少しまともにする

モノではないだろうか。

その後朝食を平らげた久賀達は、身支度を整えてZECT本部へと向かっていった。とは言っても久賀達は実働部隊の隊長、やることと言えば部下達と共に訓練するだけなのだ。

「さてと、今日も一日働きますかっ」と。

まあ本人がそれで満足しているならそれはそれでいいのかもしれない。

ZECT本部

久賀達は本日の訓練を行う為に、訓練施設へと向かっていた。ちなみにこの日の御供はフライドチキン、しかもお得な家族セットである。最低4人家族が食べる物を一人で、骨ごと食べながら本館内を歩いていく。時たま他の人とすれ違うこともあったが、もう皆慣れているのか誰一人としてそれを気にする者はいなかった。とその時、久賀達の反対側から見知った人物が歩いてくるのが見えた。

「お前・・・確か神代。」

「ん？お前は・・・。」

神代の方も久賀達の事を覚えていたのか、その場で立ち止まると久賀達をしばし見つめた後、彼女に対して口を開く。

「そう言えばお前もこの組織の人間だったな。」

「お前は・・・ああ、ワーム倒して報酬受け取りに来たのか。ご苦労なことだな。」

お互いに特に挨拶も無く言葉を交わし合う、別に険悪な雰囲気は漂ってはいないが、なんとも居心地の悪さは感じてしまう。

「ま、精々頑張れよ。こっちはこっちで適当にやらせてもらうから。」

「待て！全てのワームは俺の獲物だ、誰にも渡しはしない。」

神代は久賀達に警告するが、久賀達の方はそんな事などお構いなしに神代の隣に立つと、挑発するような笑みを見せる。

「悪いな、こちとら食欲旺盛なんだ。取られたくなかったら早めにワームを倒しちまうんだな………食うか？」

そう言いながら久賀達は持っていた器からチキンを一つ出すと、神代に差し出す。だが神代はそれを受け取らず、ただ久賀達を睨みつけていた。

「……食わねえか、お坊ちやまは……。」

そう言いつつ久賀達はチキンを自分の口に持っていき、そのまま神代の隣を通り過ぎて行った。神代はそんな久賀達の後姿を黙って見送っていた。

#### ZECT本部・訓練所

あの後久賀達は部下達と共に訓練に励んでいた。特に変わったことも無く、何時も通りに訓練を行っている、唐突に播磨が話しかけてきた。

「そう言えば隊長、また出たんですつてよ。」

「またつて？なんだ、ワームでも出たのか？」

「そんな訳ないじゃないですか、出たつて言ったらアレですよ。怪盗シヤドウ。」

「怪盗シヤドウ？なんだそりゃ？」

その久賀達の言葉に、播磨だけでなく神田や檜和田まで久賀達に詰め寄つていく。

「隊長、怪盗シヤドウ知らないんですか！？」

「今巷を賑わせてる大泥棒ですよ。あちこちで騒ぎを起こしてるらしいですよ。」

「しかも盗みに行く前に必ず予告状を出すときたもんです、まさに怪盗つて感じでしょ！」

3人がそう言つて熱弁を振るうが、久賀達は特に興味も無いらしく・・・

「アホかお前ら、そんなたかが盗人に何興奮してんだ。」

と言つてのけた。

「お前らそんなもんにつつつ抜かしてる暇あつたら、訓練しろ訓練！」

そう言つて久賀達は話を終了させると、再び訓練に没頭していった。

かゆつまま亭

訓練が一段落した久賀達は、矢車と影山を伴って昼食を取りにここに来ていた。そこで久賀達は先程部下達が話題に上げた怪盗シャドウについて二人にも聞いてみた。

「お前らさあ、怪盗シャドウって知ってるか？」

「怪盗シャドウですか？それなら知ってますよ、最近は何新聞とかでも大きく取り上げられてますもん。」

「と言うかお前は知らなかったのか？ニュースとかでもやってただろ。」

「あたしはニュースも見ないし新聞も取ってないんだよ。悪かったな。」

そう言うと久賀達は茶碗の中のご飯を掻き込み、注文した定食（焼き魚定食、すでに3杯目）を平らげた。その様子を見ていた影山が、ふと思つたことを久賀達に言う。

「謎って言えば久賀達さんも色々謎が多いですよね。」

「は？」

「だって、私生活とか想像できないですし。普段だって何考えてるか分からないですし。」

「いや、違つぞ影山。」

影山の言葉に対して、矢車が待ったをかけた。

「久賀達は何を考えてるのか分からないんじゃない、何も考えてないんだ。普段から自分が思つたままに、それも突然行動するから他人からは何を考えてるのか分からないだけだ。」

「いや、それはちよつと言い過ぎなんじゃ……。」

「おい……。」

矢車の言葉に影山は顔を引き攣らせながら久賀達をフォローする言葉を探し、久賀達はジト目で矢車を睨みつける。

「それに、コイツの私生活なら大体想像がつく。大方かなり雑な生活を送ってるんだろ。」

「雑って言うത്?」

「脱いだ服をその辺に脱ぎ散らかしたりとか……。」

「悪かったな、生憎脱ぎ散らかせるほど服を持つちやいないよ。」

「……毎朝同じ物ばかり食べたりとか。」

矢車からの指摘に久賀達も反論するが、的を射ているモノもある為久賀達も時たま黙ってしまう。

「だが……確かにお前にはなにかと謎があるな、その異様な食欲もそうだが、何よりお前の過去が一番の謎だ。」

「あ!それ俺も思ってたんですよ、久賀達さんZECTに入る前の事何にも話してくれないんですもん。」

矢車と影山の言葉に久賀達はしばし黙って考えると、おもむろに口を開いて言った。

「何だっついていいだろ、別に昔がどうだからって今のあたしが変わるわけじゃなし……。」

「だが多少なりとも興味はあるぞ?」

「人間秘密の一つや二つはあった方が面白いだろ?それに、誰にだっついて話したくないことや思い出したくない過去はある。」

そう言うと久賀達は席を立ち、お金を置いて店を後にして行った。

矢車はそんな久賀達の様子を見て、少し無神経だったかと考える。

久賀達の言う通り誰にだっついて話したくないことや思い出したくない

ことはある、それを根掘り葉掘り聞こうとするのは無神経と言われ  
ても仕方がない。だが同時にどうしても気になってしまつのである、  
時折久賀達が見せる、あの底なしの闇の様な瞳が。

（久賀達……昔お前に一体何があつたんだ？何故お前ほどの奴  
があんな目を……。）

同僚として、矢車としても久賀達に何かしてやりたいとも思うが、  
彼女自身が何も話したからない以上彼には現状に対処するしか出来  
ない。それが時にどうしようもなく歯がゆく思えるのだった。

???

久賀達は只管に彷徨っていた。別に目的地がある訳ではなく、ただ  
生き残る為に彷徨っている。だがそこは灼熱の大地、止めどなく流  
れる汗と照りつける太陽に熱さで彼女の意識は既に朦朧としていた。

（暑い、暑い熱いアツイ……。）

すでに久賀達の意識はほとんど無く、もはや無意識に本能のみで歩  
いている様なものだった。今の彼女の思考を占めていることは二つ、  
『生きたい』と言う生への執着と『暑い』と言う苦痛のみである。

（暑い、生きたい、こんな所で死にたくない。誰か……誰でなく  
ても、何でもいい。助けて……助けて、助けて！！）

久賀達は心の中で必死になって助けを求めるが、周りには人の陰な  
ど無く、地平線の彼方まで広がる灼熱の大地と地面から立ち昇る陽  
炎、そして忌々しいほどに青く澄み渡つた空とその空に浮かんでい



る太陽だけしか見えなかった。幾分か歩いて遂に体力の限界が来たのか、久賀達は焼け付くような大地に倒れ込む。何とか立ち上がるうとするが、もはや腕どころか体全身に力が入らず、暑さに苦しみながら久賀達の意識は闇に落ちて行った……。

### 久賀達の自宅

「ッ！！？？ハア……ハア……ハア……、クソッ。」

久賀達が飛び起きると、外はまだ暗く時計を見ると時間は深夜の1時だった。久賀達は呼吸を整えると苛立たしげにベッドから立ち、キッチンでコップ一杯の水を飲む。そうして気分を落ち着けると久賀達はそのまま浴室へと入って行った、先程の悪夢の所為でかいた汗で体中がびっしょりだったからである。シャワーが汗を流しているのを見ながら、先程の夢について考える。

（よく今生きてるよなあ……あたし。）

食料も水も無いあの状況を生き残れたのは、恐らく奇跡以外の何物でもなかっただろうと久賀達は考える。でなければあんな地獄を生き抜いてこんな生活が送れている筈がないからである。だが逆にあの地獄を生き抜いたからこそ、今の久賀達があるとも言える。あの地獄が久賀達に強靱な精神を与えたのだとすれば、”あれ”がなければ今頃は……。

「……何考えてんだよ、くだらねえ。昔の事なんて考えたって仕方無いだろうが。」

その後久賀達は再びベッドに横になり、眠りについて行った。また

あの夢を見ないようにと願いながら……。

翌日・かゆうま亭

次の日、何時も通りに訓練してここで昼食を取っていると、加賀美が店に入ってきた。基本的に久賀達が誘わなければ来ることが無かった加賀美が店に来たので、珍しいことがあるものだと思われ、加賀美が考えていると、こちらを見つけた加賀美が久賀達に走り寄ってきた。その目は心なしに彼女に縋っているようにも見える。

「く、久賀達さん!？」

「落ち着け加賀美、お前が一人でここに来るのも珍しいじゃないか。一体どうしたんだ？」

久賀達は一先ず興奮している加賀美を落ち着かせると、彼から話を聞くことにした。流石にしようも無いことでもここまで動揺するほど彼も子供ではないだろうと考えての行動である。

「お、落ち着いて聞いてくださいね。落ち着くのはお前の方だろう、いいから話してみる。」……じ、実はですね……。」

そして加賀美の口から聞かされたのは、予想の斜め上をいくことだった。

「は？ 岬が怪盗シャドウ？」

「しいー！ 声が大きいですってば!？ ほ、本当なんです。俺見たんですよ、岬さんが怪盗シャドウの恰好してたところを。」

彼の話によると、ここ最近出没しているおかしなワームに関する情

報を得る為監視カメラのチェックを行っていると、偶然にも怪盗シヤドウが仮面を取ったところを見てしまったらしい。

「で、その仮面の下にあったのが岬の顔だった・・・と。」

「は、はい。俺もどうしたらいいか分からなくて、天道は相手にしてくれないし・・・。」

加賀美の言葉に久賀達はしばし考え込むと、加賀美の方を向いて考えを言った。

「とりあえず田所さんに相談してみたらどうだ？あの人だったら色々知ってるかもしれないし、いざって時には頼りになる。もしかしたら意外な情報を持つてるかもしれないぞ。」

「な、なるほど！ありがとございます！！」

そう言っただけで加賀美は店から出て行った、残された久賀達はそんな加賀美の様子に苦笑しつつも残った料理を平らげて行った。

（それにしても岬が怪盗シヤドウ・・・ねえ、あいつがそんな事をするってのもなんだかおかしな話だよなあ。・・・ってことはコイツもワーム絡みか？とりあえず色々調べてみるか・・・。）

そんな事を考えながら久賀達は勘定を済ませて、店を後にした。

## 第16話 怪盗シャドウ（後書き）

と言うわけで第16話でした。今回はちょっと久賀達の日常を公開にしてもホントに女らしさが感じられない生活送ってるなあ（書いたのは自分ですが）。剣との再会は実にあっさりしたものでした。流石に日中から天道と剣の対決に乱入したら、お前何時仕事してんだよって話になってしまいますので（汗）。今回再び描かれた久賀達の過去は前回とは違うシーンでした、これからも小分けにしてちよくちよく明かしていく予定です。

次回の更新も楽しみにしていてください。それでは。

## 第17話 サソリの正体（前書き）

どうも、黒服です。今回遂にサソードが登場します。剣の設定もちよっと弄りました、多分皆さん驚くと思いますよ。

## 第17話 サソリの正体

ZECT本部

久賀達は本部で訓練の合間を縫って、ここ最近現れているワームに関して調べていた。すると犠牲者にある共通点があることに気付く。

「ふうん、随分と変わったワームなんだな。襲われてるの全部犯罪者ばかりじゃないか。」

今回のワームの犠牲者は、全員が何かしらの罪を犯して刑務所に行く様な者ばかりだったのである。どうやら今回のワームは犯罪者を狙う傾向にあるようだ。

「正義の味方気取りなのかねえ・・・とはいえ、このまま黙ってコイツに好き勝手させるのも癪だな。」

そこまで考えて久賀達は、岬が怪盗シャドウなどをやっている理由を確信した。要は相手が犯罪者を狙うのならば、自分達が犯罪者となってワームを誘き出そうと言うのである。

「にしても囮作戦かよ、随分と思いきった事考えたなあ。まあ、あたしもやるかもしれないけどさ。それにしたってもうちょっと他の名前はなかったのかよ、何で『シャドウ』を名乗るかねえあいつは。」

久賀達にとってシャドウとは自分と仲間達の繋がりを示す、強い思い入れのある名前である。それをこのような形で使われるのはどうにも面白くないものがあった。

「さつてと、どうしたもんかねえ……。」

久賀達はそう言いながら、椅子の背もたれに体重を預けた。悩んでいるのは今後の行動、こっちはこっちで地道にワームを追いかけるか、それともいっそのこと岬達に協力するか……。

翌日・とあるビルの階段

影山はここで加賀美を待っていた、彼にどうしても聞きたい事があったからである。彼がこの場所について数分後、加賀美がやってきた。

「よく来てくれた、加賀美。」

「……知ってますよ、またワームが現れたらしいですね。これで……6人目と聞いています。」

「ああ、大分変わったワームらしいね。被害者は碌でもない人間ばかり、刑務所に行くような奴ばかりを狙ってる。」

影山は加賀美からの話題を適当に受け流すと、今度は自分の話題を加賀美に切り出す。

「だが……お前に聞きたいのはワームとは関係ない、岬さんの事だ。」

「ッ!？」

加賀美は影山が岬の名前を口にした事で内心動揺したが、極力それを表に出さないようにそれに答えた。

「岬さんが・・・何か？」

「彼女は怪盗シャドウだと言う情報入手した・・・何か知らないか？」

「・・・岬さんに限ってそんなことある筈ないじゃないですか。」

加賀美は動揺を悟られないように影山から顔を反らす、それが逆に彼に加賀美が隠し事をしている事を悟らせる。だが影山はあえてそれに気付かないふりをして会話を続ける。

「本来なら警察の仕事だが、ZECTに犯罪者がいるとなると放つてはおけない。第一・・・。」

影山はそこで言葉を区切ると、加賀美に顔を近付けた。

「シャドウの名を騙るのが許せない・・・そうは思わないか？」

影山にとっても『シャドウ』の名は非常に重要な意味を持つ。自分を鍛えてくれた矢車と、何時もは素っ気無いが面倒見のいい久賀達この二人と出会う切っ掛けとも言える特別な名前なのである、それをこのような事に使われるのは彼としても許せる事ではなかったのだ。

「当たり前です！ゆ、許せませんよ・・・シャドウの名を・・・騙るなんて。」

加賀美は影山の言葉にそう返すが、その言葉は若干震えており、動揺しているのがバレバレだった。

「まあいい、いずれ真実が分かるさ。とりあえず、久賀達さんにも聞いてみるよ。あの人の協力があれば、より詳しい事が分かる筈だ。」



「  
そう言つて影山はその場から立ち去り、残された加賀美は滝のように汗を流していた。」

（や、ヤバイ！久賀達さんには岬さんが怪盗シャドウだつてこと話しちゃつてる！？で、でも・・・久賀達さんの事だし、黙つてくれるよなあ？あの人の事だから、俺達が何をしようとしてるかなんて多分もう分かつてる筈だし・・・。）

加賀美はそう淡い期待を久賀達に抱いていた、が・・・

Z E C T本部

「久賀達さん、怪盗シャドウに関して何ですが・・・。」

「ああアレなあ、正体岬だぞ。」

当の久賀達はそんな事など何処吹く風と言つた感じにアツサリバラしてくれていた。加賀美の淡い期待はいとも簡単に打ち砕かれたのである。

「やつぱり。俺、すぐに岬さんのところに行つてきます！」

久賀達の言葉に影山は頷くと、すぐさま岬を捕らえる為に岬の下へ向かおうとする。だがそれは久賀達に止められてしまう。

「まあちよつと待て、それには多分訳がある筈だ。」

「訳？」

久賀達はそう言うと、影山に自分の考えを打ち明けていく。岬が怪盗シャドウをやっている理由、囹作戦の事を。

「なるほど・・・確かにここ最近現れてるワームの被害者は全員が犯罪者です。だから岬さん自身が犯罪者になってワームを誘き出すと言うのも理解は出来ませんが、それにしたって何でシャドウを・・・」

「まあその気持ちはあたしも分かる、ホントにもうちよつとマシな名前はなかったのか・・・」

「それで、久賀達さんはこれからどうするんです？」

「それなんだよなあ・・・」

久賀達は正直迷っていた。岬が怪盗シャドウを名乗る前にこの作戦の事を知っていたなら彼女の部隊を使って色々サポートしても良かった。だが岬は既に騒ぎを大きくしてしまった、こうなると迂闊に部下を動かすと上にバレた時色々面倒になる。せめて盗みをする前だったら自分から作戦と言う形で上に申請していたモノを・・・

「とりあえず、もうしばらく様子を見よう。警察の動きをみるから今夜も動くらいしい、決めるのはそれからでもいいだろ。」

## 翌日・商店街

久賀達は昼食をかゆうま亭でとる為に、商店街の中を進んでいた。だが今の久賀達の頭の中は何を食べるか？ではなくどう行動するか？を考えていた。昨夜も怪盗シャドウが現れたのだが、未だにどう行動するか決めかねていたのだ。

「フゝ、やっぱこうするしかない……か……は？」

久賀達が岬達に対してどういう行動を取るかある程度決めた時、彼女の目に奇妙なモノが飛び込んでくる。

「籠が……買い物籠が歩いてる……。」

久賀達の目に映ったのは、逆さで人ごみの中を進んでいく買い物籠だった。思わずその場で目をこすって自分の目がおかしくなったのではない事を確認するが、次の瞬間それが誰だったのか明らかになった。

「か、神代！？何やってんだあいつ？」

ある程度人が減ったところに出た買い物籠に突然手が掛けられ、籠が取り払われるとその下には神代 剣の顔があった。その様子に久賀達は一瞬驚いたが、すぐに呆れ果てた。

「なんでお坊ちゃんが買い物籠なんか持って商店街に来てんだ？まさか買い物にでも来たのか？……まさかな。」

久賀達は自分の考えをすぐに取り得ないと否定した、あの手のお坊ちゃんが態々こんな所に買い物に来ると思えなかったからである。久賀達はその事について考えるのを止めると、目的地に向かって歩いて行った。

ちなみにこの後神代はあちこちで問題を起こし、警察の厄介にまでなるのだがそれはまた別の話。

あの後、警察の動きから神代邸に怪盗シャドウが現れる事を知った久賀達は、影山を伴って神代邸に赴いた。本来だったら警察が警備している為こんなことは出来ないのだが、今回は話が別だった。神代本人が警察を追い返してしまっただ。これなら自分達がこっそり動いても警察と衝突する危険も無いし、警察が少なければワームが出現する可能性が高くなる。だからこそ久賀達と影山は神代邸の堀の陰で張っていたのだ。

しばらくすると二人の耳にピアノの音が響いてきた。最初は一人で演奏してらしかつたが、途中から音が増えた。どうやら演奏者が一人から二人になったらしい。一人は神代だろう、こういうところのお坊ちゃんらしく今はピアノの稽古の真っ最中らしい。それにしても神代もそうだがもう一人の方もかなりの腕である、この二人だったら世界を狙えるのでは？そんな事を久賀達が考えていると、突然窓から何か飛び出してきた。それが落ちたあたりに近付いて行くと、堀の角から怪盗シャドウと思われる仮面を被った人物が現れた。久賀達は咄嗟に壁に身を寄せると、その人物に足を引っ掛けて転ばせた。その際に仮面が外れて、仮面の下の素顔……岬の顔が露わになる。

「岬……。」

「本当に、貴女だったんですね。」

「違うのよ二人とも！これは……。」

その時、堀の上から1体のワームーセパルチュラワームーが現れて、岬に襲いかかろうとした。だがそれは久賀達のハイキックにより失敗に終わることになる。

「知ってるよ、お前が囿になってコイツを誘き出す作戦だったんだろ。」

「え！？な、何でわかつたんですか？」

「最初に加賀美に相談を受けてな、お前が怪盗シャドウの恰好してたの見てどうすりゃいいかってあたしに相談してきたのさ。そんな時から色々調べてピンときた。」

久賀達を選んだのは、結局部下達を動かさず自分達だけで動くことだった。すでに岬が怪盗シャドウとして行動を起こしてしまった以上、今更上に報告して作戦として申請しても面倒になるだけである。だったら自分達だけで動いてさっさと事態を終わらせてしまうのが一番いいと判断したのだ。久賀達が話していると、ワームの方が体勢を立て直した。それを見て久賀達と影山はゼクターを呼びだした。

「影山、行くぞ！」

「はい！」

「「変身！」」

《《Henshin》》

《Change Punch-Hopper》

変身した二人はワームに攻撃を仕掛けていく。最初は2体1で有利に状況を進めていたが、途中から蛹ワームが加わってきた。二人が蛹に気を取られていると、ワームの方はその場から離れて行った。

「チツ！あいつ・・・影山！成虫の方が逃げた、あたしはそいつを追いかけるからこの場はお前に任せるぞ！」

「ええ！ちよつ、待っ！？」

影山の返答を聞かずに久賀達はキャストオフしてクロックアップでワームを追いかけに行った。残された影山は一人で5体の蛹を相手にしていく。

「まったく！あの人も本当に自由な人なんだから。」

P ホッパーはそう愚痴を呟きながら蛹に次々と拳を叩き込んでいく。

「フツ、ハツ、セイツ！」

相手は動きの遅い蛹である為、P ホッパーもジャブなどは加えず大ぶりかつ素早いパンチを浴びせて行く。その猛攻に蛹達は次々と爆散していき、その場にはP ホッパーだけが残されていた。

河原

ワームはザビーとP ホッパーから逃れる為に河原の吊り橋の上を走っていた。だがそのワームの前に先回りした天道が立ち塞がる。

「随分と手間をかせさせてくれたな、今度は逃がさん。」

天道がそう言うとは何処からかカブトゼクターが飛んできて、天道の手に収まり天道はカブトに変身する。

「変身！」

《Henshin》

それと同時にクロックアップで追いかけてきたザビーも追いついてきた。

「やっと追い付いたぞ、もう逃がさないぜ。」

だがワームはしぶとくクロックアップして逃げようとするが、ザビーとカブトがそれを許さない。

「逃がすかよ、クロックアップ!」

《Clock up》

「キャストオフ。」

《Cast off Change Beetle》

「クロックアップ。」

《Clock up》

クロックアップしたカブトとザビーはワームを追いかけていき、二人でワームに攻撃を加えて行く。カブトはワームの攻撃を受け流しながらカウンターを加えて行き、ザビーは隙を見つけて積極的に攻撃していく。そしてカブトのパンチが決まり、それと同時にクロックアップが解除されると、ワームの前に神代が姿を現した。

「神代……。」

「……………」

《Standby》

神代は静かにワームを見据えると、サソードゼクターを呼び出した。サソードゼクターは川の中から飛び出すと、そのまま神代の手に収まる。

「変身!」

《Henshin》

神代がサソードヤイバーにサソードゼクターを取り付けると、神代の体をマスクドアーマーが包んでいき、彼を【仮面ライダーサソード】に変身させる。ワームはサソードに突っ込んでいき、サソードがそれを迎え撃つ。ザビーもそれに参戦しようとしたが、横合いからまたしても蛹が現れる。

「チツ、邪魔だな、こいつら!」

ザビーはそのまま2体の蛹を相手にしていき、サソードはセパルチユラワームに斬りつけて行く。カブトはそんな二人を黙って見ている。

「フツ!」

サソードは卓越した剣技でワームを切り刻んでいく。ワームも負けじとサソードドライバーを掴むが、その瞬間サソードがゼクターの尻尾を倒す。

「キャストオフ!」

《Cast off Change Scorpion》

サソードから弾き飛ばされたマスクドアーマーに、ワームも堪らず吹き飛ばされた。

「フツ、セイツ、ハツ!」

サソードがキャストオフしたのと同じ頃、ザビーと2体の蛹の戦いは終わろうとしていた。蛹達はザビーに取りつこうとするが、ザビーの鋭いパンチやキックによって近付くことすらできない。

「そろそろ決めるか、ライダーステイニング!」

《Rider Steining》

「フツ!ハツ!」

ザビーの必殺技を喰らった2体の蛹が爆散したのを確認すると、ザ



ビーはサソードの方を見た。するとそちらも勝負がつくところだった。

「ライダースラッシュ。」

《Rider Slash》

サソードが再びゼクターの尻尾を倒すと、ゼクターから電子音声が発せられる。

「クロックアップ。」

《Clock up》

サソードヤイバーにタキオン粒子がチャージアップされ、ヤイバー内のポイズンブラッドが混合された光子が刃先に集中される。そしてサソードはそのままワームに斬りかかっていく。

「ヤアアアアアア！」

サソードがワームを3回斬り付けると、ワームは空中に浮いた状態で爆散、それと同時にクロックアップも解除された。ワームが全て倒された時、その場にはカブト・ザビー・サソードの3人のライダーだけが残された。

「言った筈だ、ワームには手を出すなと。全て俺の獲物だ……とな。」

「お前の言う事を聞くと言った覚えはない。」

「こつちも言った筈だぞ、取られたく無きゃ早めにワームを倒せつてな。」

「その声……お前まさか！」

ザビーの言葉に、サソードはザビーの正体が久賀達である事を見抜いた。最初は驚いたサソードだったが、すぐに気を取り直すとザビーに食って掛かる。

「お前、ライダーじゃないんじゃないのか!？」

「悪いな、あの後ライダーに復帰したんだ。」

「貴様あ、ハアッ!」

「フンッ!」

サソードはザビーの飄々とした様子に怒りを露にすると、ザビーに斬りかかって行った。ザビーはそれを受け流すとサソードにストリートパンチを叩き込む。ザビーの攻撃に怯んだサソードだが、すぐに体勢を整えると再びザビーに斬りかかって行った。今度はサソードも隙のない連続攻撃でザビーを追いこんでいくが、ザビーもゼクターニードルでヤイバーを受け止めたりしてしばらくサソードと戦っていた。だがしばらくするとザビーがサソードの攻撃を受け止めて、サソードの声をかける。

「いいのか?こんな所で油を売って。」

「何?!」

「全てのワームを倒すんだろ?だったらこんな所であたしに突っかかってないで、さっさと他のワームを潰しに行ったらどうだ?」

「クッ!」

ザビーの言葉にサソードは悔しそうな声を上げるが、ザビーの言うこともある意味正論なので大人しくサソードヤイバーを下ろし変身を解除すると、何も言わずにその場を去っていった。

ザビーらと別れた神代は、苛立ちを抑えながら街の中を歩いていた。そして彼が地下通路への階段を降りていると、突然女性の悲鳴が聞こえてきた。そちらに向かうと、1体の蛹ワームに襲われそうになっている一人の女性の姿が見えた。神代は蛹に蹴りを喰らわせると女性を逃がし、自身は蛹と戦おうとする。だがサソードヤイバーを取り出すと蛹はそれを弾き飛ばしてしまう。

「ッ！？貴様！」

神代は怒りに顔を歪めるが、蛹の方はそんな事お構いなしに神代に攻撃を仕掛けてくる。神代はそれを必死になって避けていた。

「クツ、おのれえ・・・ならば！」

避け続けるのにも限界が来たのか、次第に追い詰められていく神代。その時神代が体に力を込めるようなくさをする、すると・・・

「ぬわあああああ！」

彼の咆哮と共に神代の体が見る見る変化していき、そこには1体のワームー・スコルピオワームーがいた。蛹が驚愕して動きを止めていると、スコルピオワームは腕の突起を蛹に突き刺して一撃で蛹を葬り去ってしまう。蛹を始末して神代の姿に戻った時、その場に近づく者がいた。それは・・・

「お前・・・ワームだったんだな。」

「お前は！」

近付いてきたのは久賀達だった。なぜ彼女がここにいるのか、理由

は単純でザビーゼクターがワームを見つけて久賀達にそれを知らせたのだ。そして久賀達が到着したとき、ちょうど神代がワームの姿になった瞬間だった。

「それにしても驚いたよ、まさかライダーの資格者に選ばれた奴がワームだったなんてな。・・・お前、何を考えてんだ？」

「言った筈だ、俺は全てのワームを倒すと。」

「その全ての中には・・・お前も入ってるのか？」

神代は久賀達の質問には答えず、サソードヤイバーを回収した。そして久賀達に近付いていき・・・

「・・・・・・・・。」

そのまま久賀達の横を通り過ぎて行った。久賀達がそれを黙って見送った後、ザビーゼクターが彼女の周りを飛び回っていた。

《ーッーッーッ？》

「いや・・・まだいい、もうしばらくは様子を見るぞ。もうしばらくは・・・・・・・・な。」

そう言うと久賀達は神代が歩いて行った方向とは逆に歩いて行った。

## 第17話 サソリの正体（後書き）

と言うわけで第17話でした。この作品では剣は自分がワームであることを自覚してます。何故彼が自分がワームであるのを知っているながら人間に味方するのか？今後明らかにしていく予定です。どうかお楽しみに。それでは。

## 第18話 久賀達の休日（前書き）

どうも、黒服です。今回は久賀達の休日の様子を描いてみました。一体どんな休日を彼女が送っているのか、お楽しみに。

## 第18話 久賀達の休日

エリアC・工場区

シャドウ第1・第2番隊は現在ワームの集団と戦闘を行っていた。すでにゼクトルーパーの十字砲火によって蛹体は全滅しており、後は成虫体2体を倒すだけとなっていた。ザビーとKホッパーは共にクロックアップしてワームと戦っていた。

「セイツ、ハッ、フッ！」

「ハッ、フッ、セリヤッ！」

2体の成虫体ーアラクネワーム・ニグリティアとアラクネワーム・フラバスターに対してザビーは相手の防御の間を縫ってパンチやキックを喰らわせていき、Kホッパーはハイキックやローキックなど多彩な足技でワームを翻弄していく。

「そろそろ決めるか、矢車！」

「よし！」

「ライダーステイング！」

《Rider Steing》

「ライダージャンプ！」

《Rider Jump》

ザビーがゼクターのスイッチを押しKホッパーがレバーを起こすと、二人ともワームに向かって飛びかかっていく。

「ハアッ！」

「ライダーキック！」

《Rider Kick》  
「セヤッ！」

ザビーのライダーステイングとKホッパーのライダーキックを受けたそれぞれのワームは爆散し、周囲にワームの姿は見当たらなくなっていた。それを確認すると、二人とも変身を解いて元の姿に戻っていた。

「ふう、終わった終わった。」

「隊長！」

「おう、被害状況は？」

「ウチの部隊からは損害は皆無です。」

「第1の方も大きな損害はありません。」

久賀達らが一息つくと、久賀達と矢車それぞれの部隊の副官が被害状況の報告にやってきた。とは言っても今回の戦闘ではシャドウの方が先制を取った形になっていた。蛹に対しては被害など一切出なかった。厄介だったのは途中で2体の蛹が脱皮したのだが、それも久賀達と矢車が迅速に対処したので大きな被害は出なかったのである。

「よし、では総員速やかに撤退を。」

「ウチも引き上げるぞ。」

「ハッ！」

二人からの撤退指示を受けた戸高らは、部隊の者たちに撤退の指示を出していく。その様子を見ながら、久賀達は何気なく口を開いた。

「それにしても、今更ながらホントに凄いやなあ、このマスクドライダーシステムってのは。」



「まったくだ、これならもはやワームも恐れるに足りないな。」  
「……一体誰が作ったんだろうな？」

矢車がマスクドライバーシステムに対する評価を口にすると、そう久賀達が呟いた。矢車はそれに怪訝な顔をする。

「誰って、それは当然ZECT」あたしが言ってるのは組織じゃなくて個人の方さ、一体どんだけ頭のいい奴が作ったのかって話だよ。」  
「……それは……。」

「ヒヒイロカネなんて金属だって今まで聞いたことも無いし、クロックアップなんてどう考えたって今の時代からすればオーバーテクノロジー以外の何物でもないだろ？それを考え出したのが一体誰なのかってのが気になる訳だよ、あたしは。」

久賀達の言葉に何も言えなくなる矢車、言われてみれば確かにその通りである。今までは組織が作ったからと言うだけで特に疑問に思っただけではなかったが、よくよく考えてみればマスクドライバーシステムに使われている技術はどれも今の時代からは大きくかけ離れているモノばかりである。矢車は久賀達が挙げた疑問点に思考の海に入りかけるが、それを押し留めたのも久賀達だった。

「ま、もつともあたしらが知らない間に見つけられた金属がヒヒイロカネって可能性もある訳だし、クロックアップだって実はワームを捕まえてそいつをバラして得た技術だって可能性もある訳だから、そこまで複雑に考える必要も無いかもな。」

そう言うと久賀達は矢車を促して、その場から立ち去っていった。

次の日、久賀達は休暇を満喫していた。とは言っても久賀達の休日の過ごし方は専ら食べ歩きである。休暇になると街に繰り出しては様々な店に入り、様々なモノを口にしていく。この日も久賀達は既に3軒の店をハシゴした後だった。

「さうと、次は何処に行こうか……。」

そんな事を呟いていた久賀達の目に、とあるラーメン屋が飛び込んできた。しかも表の看板には『激辛閻魔ラーメン、制限時間以内に食べ切れたら賞金1万円 ただし食べ切れなければ料金1万円』と書いてあった。久賀達はそれに興味を持ち、早速店に入ってしまった。するとその時……

「ぎゃあああッ!？」

「な、何だ？」

店の中から一人の男性が叫び声を上げながら飛び出て来た、心なしかその唇は赤く腫れあがっているようにも見えた。どうやらこの激辛ラーメンとやらは尋常ではない辛さらしい、だが久賀達はそんな事を気にすることも無く、そのまま店に入ってしまった。

「へいらっしやい!」

「表に書いてあった激辛閻魔ラーメンってのを一つ。」

「お!お客さんチャレンジャーだねえ、ああなる覚悟は出来てるかい?」

そう言つて店の主人が指さす方向には、老若男女問わず複数の人が倒れていた。皆一様に唇を赤く腫れさせ、呻き声を上げている。そして彼らの前には件の激辛ラーメンと思しき赤一色と言つていいモ

ノが入った器があつた、どうやらこれを根性で食べ進めようとして体の方が参ってしまったらしい。

「ま、何でもいい。作るならさっさと作ってくれ。」

「へへへ、あいよ。」

そう言うと主人はラーメン作りに取り掛かり、久賀達はそれをじつくり待っていた。だが単に待つてるのも退屈だったので、先程から呻き声をあげている哀れな挑戦者達の方に視線を向けてみた。よくよく聞き耳を立ててみると、何やら呟いていた。

「痛い暑い辛い痛い暑い辛い痛い暑い……。」

「うう、こんなの人の食いもんじゃねえよ。」

「え、閻魔様……わしやちゃんと清く正しく生きて来ましたじや。だから、だから地獄行きだけは……。」

「あ、じいちゃん……え、何？こつちに来るなって？何言ってるんだよ、今そつちに行くから待っててね。」

何やら不穏な言葉が聞こえてきたが、自業自得と言つ事で無視することにした。そうこうしているとどうやらラーメンが出来上がったらしい、久賀達の前に激辛閻魔ラーメンとやらが出された。

「へいお待ち！コイツが激辛閻魔ラーメンだ、時間以内に食いきれば賞金1万円、食いきれなきゃ料金1万円いただきますぜ！」

これは本当にラーメンだろうか？とにかく目に映るものは赤い色のみ、スープも麺も、それ以外の具も全て赤一色に染まっていた。心なしか湯気も赤く染まっている様な気がする。その様子に一瞬気押される久賀達だが、気を取り直して箸を手に取り麺を掴んで口に運んでいき……

数分後

「ま、まさか全部食いきつちまうとは……。」

「ふう、なかなか美味かったな。」

久賀達はラーメンを完食していた、しかもスープから何まで全て食べつくし、丼の中は洗ったかの如く綺麗になっていた。店の主人が啞然とする中久賀達は賞金を貰い、ケロッとした様子で店から出て行った。

河原

ある程度食べて満足した久賀達は、腹ごなしに河原をぶらついていた。天気は快晴、久賀達にとっては快晴はあまり喜ばしいことではないのだが、空に文句を言っても仕方が無い。久賀達がそう思いながら河原を歩いて行くと、突然女性の悲鳴が聞こえてきた。ワームでも出たかと考えて久賀達がそちらに行くと、一人の男性と一人の女性が久賀達の目の前を走っていった。男性が女性物のバッグを持っているところを見るに、どうやら引ったくりらしい。

「ふう、しょうがねえなあ。」

溜息を吐きながらそう呟くと、引ったくりの男性を追いかけ始めた。訓練を受けているだけあって久賀達の足は速く、あっという間に男に追いついて行った。

「オラア！」

「うおあっ!?!」

久賀達が男性に飛び蹴りを喰らわせると、男性はよろめきそのまま倒れてしまう。男はなおも逃げようと抵抗するが、久賀達に押さえつけられてそれもままならない。そうこうしていると女性が追いついてきて、久賀達を取り返したバッグを受け取った。

「さくで、大人しく警察に捕まりな。」

「クッ！」

久賀達の言葉に男性が呻き声を上げると、男性がワームの姿になった。女性はそれに悲鳴を上げて逃げ出し、久賀達は一瞬驚いて抑えつけている腕の力を一瞬抜いてしまう。その隙にそのワームーランピリスワームーは久賀達の腕から抜け出し、そのまま逃げて行くとした。だがそれを許す久賀達ではない。

「変身！」

《H e n s h i n》

久賀達はザビーに変身すると、ワームに殴りかかっていく。だが奇妙なことにワームの方は一切反撃してこず、逆に必死になって逃げようとしているのである。そのワームの様子にザビーは違和感を持つ。

(何だコイツ? 何で戦おうとしないんだ、今までの奴なら蛹だって躊躇わずに突っ込んできたってのに……。)

ザビーがそのワームに対して首を傾げていると、ワームはクロックアップでその場から逃げて行ってしまった。ザビーも当然キャストオフすればクロックアップで追いかけることも出来たのだが、どうにも様子がおかしかったので追いかける気になれず、結局そのまま

見逃す形になってしまった。

「ふう、なんか変だったなあ今のワーム、なあ。」

《……ッ!》

ザビーが変身を解いて久賀達の姿に戻ると、ザビーゼクターにそう言う。ザビーゼクターもそれに同意するように久賀達の周りを飛び回っていた、その時……

「久賀達!」

「ん? 矢車……。」

矢車が久賀達の名前を呼びながら走り寄ってきた。

「お前、今ワームと……。」

「ああ、なんか変なワームだったなあ。碌に戦いもせずに逃げるだなんて。」

「それなんだがな……。」

矢車の口から聞かされたのは、現在彼の部隊があつたワームに狙いを定めていること。あのワームはここ最近引ったくりや盗みをしているものの、人を殺す事は一切していないということだった。久賀達はそれに疑問を深めた。

「変な奴だなあ本当に。盗みだけで殺しをしないワームだなんて……いや待てよ……。」

「ん? どうした、久賀達?」

「……いや、何でもない。」

矢車には何も言わなかったが、久賀達の脳裏には一人の人物の姿……

・神代 剣の姿が浮かんでいた。あの男はワームを狙うワームであるが、今の姿に擬態する以前は一体どうだったのかが少し気になったのである。

「そんな事より、あのワームに関して他にどんだけの事が分かってんだ？」

「ああ、擬態してる時は佐々木ささき 浩司こうじと名乗ってるらしい。本人が生きているかは不明だ。」

矢車はそう言って佐々木の写真を見せる。久賀達はしばらくそれをじっと見つめると、おもむろに指笛を吹いてザビーゼクターを呼びだした。

「お前ちよつとこの男を探してこい、いいな？」

《……ッ！……ッ！》

久賀達がザビーゼクターに佐々木を探してくるように言うと、ザビーゼクターは任せておけどでも言うようにその場で一回転してからどこかへと飛んでいった。矢車はそれに久賀達に「いいのか？」と問いかける。

「お前今休暇中の筈じゃ……。」

「構いやしないよ、どうせ暇だったし。どうにも気になってしょうがないしな。」

そう言って久賀達は矢車に軽く笑みを向け、それを見た矢車もフツと笑みを浮かべた。

## 第18話 久賀達の休日（後書き）

と言う訳で、第18話でした。久賀達は基本無趣味なので、やることと言ったら食べ歩くくらいしかできません。ただ食べ歩きの内容は尋常ではないですが（笑）。それでも厄介事に巻き込まれてしまふのは、もはや宿命と言ってもいいかも……。次回、一体どんな結末を迎えるのかお楽しみに。それでは。



## 第19話 生きるも死ぬも（前書き）

どうも、黒服です。今回は早めに更新できました。前回登場した引  
ったくりは一体何なのか、お楽しみに。

## 第19話 生きるも死ぬも

数時間後・喫茶店

アレからしばらく時間を潰していると、二人のところにザビーゼクターが飛んできた。どうやら佐々木を見つけたらしい。二人がザビーゼクターについて行くと、そこは……

「病院？」

「だな。」

そこは都内にある総合病院だった、ザビーゼクターはそこに久賀達らを連れて行くこうとしている。場所が病院だと分かった久賀達は、若干嫌そうな顔をした。以前一人の人間に5体ものワームが擬態すると言う事態があった為、またあんなことになるのではないかと若干不安になっていたのである。ただでさえあの時は天道が影山からシャドウ隊長の座を奪うと言う彼女的に胸糞の悪いことがあったのだ、それと相まってワーム絡みで病院と言う事態は久賀達にとつて正直御免被りたいものでもあった。だが事が事だけにそんな事を言うわけにもいかないのです、久賀達と矢車の二人はとりあえず病院内に入っていくことにした。

病院内

久賀達らは病院内に入っ行き、不審に思われない程度にあちこちを見て回っていた(ちなみにザビーゼクターは久賀達の懐の中に入っ、久賀達をナビゲートしている)。するとある診察室の前で、突然ザビーゼクターが騒ぎ始めた。

《……ッ！……ッ！》

「うおっ！？コラ、いきなり暴れるな！」

「近くにいるのか？」

矢車が診察室の一つを覗き込んでみた、するとそこには目的の人物である佐々木がいた。

（おい、いたぞ。）

（やつとか、にしても何話てんだ？）

二人が聞き耳を立てていると、医者と佐々木の会話の内容が聞こえてくる。

「残念ですが、彼女は今夜あたりが峠かと……。」

「そ、そんな！先生、何とかならないんですか？」

佐々木は医者に懇願するように言うが、医者はただ黙って首を横に振るだけだった。佐々木は呆然とつつ部屋から出ると、久賀達と矢車の姿を目にする。彼は一瞬身構えるが、久賀達がそれに待ったをかける。

「ちよつと待て、今は別に戦いに来たわけじゃない。それよりも、詳しい話を聞きたいんだが。」

## 病室

久賀達の説得を受けた佐々木は、二人をとある病室へと連れて行った。そこにはベッドの上に一人の女性が横になっていた。医学に関

しては素人の久賀達にも、その女性がもう長くはないだろうことが分かるくらい彼女は衰弱していた。

「誰だ？この人……。」

「彼女は……伊藤 圭子、私の婚約者です。」

そう言うと佐々木は伊藤との関係について色々と述べていった。数年前に知り合ったこと、それから付き合いだして次第にお互いを好いて行った事、去年から癌になり、その治療費を多く稼ぐために盗みに走った事を述べていく。ある程度佐々木が話し終わると、久賀達が彼に質問をした。

「お前がその人を好きなのは、擬態した相手の記憶がお前に干渉してるからか？それとも……。」

「私が彼女と知り合ったのは、この体を手に入れた後になってからです。それ以前のこの体の持ち主は、彼女とは一切面識がありませんでした。」

「つまり、お前は……。」

「人間を愛したワーム……ってことか。」

矢車はそれを聞いて啞然とした、まさかワームが人間に愛を抱くことがあるなど思いもよらなかったのである。だが久賀達はその事実を受け止めた。

（神代もこんな感じなのか、もしかして……。）

まだ神代本人から聞いた訳ではないのでハッキリとは分からないが、彼も人間を愛したがゆえにワームでありながらワームを倒そうとするのだろうか？

「ところで、彼女の方はお前がワームだってことは？」

「いえ・・・知りません、言えるわけありません。そんな事・・・でも！私の彼女を想う気持ちに偽りはありません。」

「ああ、それはなんとなく分かるけどよ。でもこう言っちゃなんだが、医学に関しちゃう素人のあたしの目から見ても彼女はもう・・・」

「

久賀達がそう口にするると佐々木はしばし黙った後、突然立ちあがり伊藤を抱き上げた。久賀達と矢車は一体どうしたのかと佐々木に尋ねた。

「おい、何してんだ。そんな風に動かしたりしたら・・・。」

「彼女がもう助かる見込みがないなら、せめて彼女が一番好きだった場所に！もう一度あの場所を見せてあげたい！」

そう言つて佐々木はワームの姿になり、クロックアップして窓から出ていってしまう。二人はしばしそれを見つめると、再びザビーゼクターに佐々木を追跡させた。

### 都内・自然公園

佐々木は伊藤をこの公園内にある花畑に連れて来ていた、この場所は彼女が最も好きだと言つていた場所だったのである。佐々木が伊藤を花畑の真ん中にある木の幹に寄りかかると、ちょうど久賀達らがやってきた。

「圭子・・・。」

「・・・浩君？」

佐々木が伊藤の名を呼ぶと、彼女が薄らと目を開けた。佐々木はそれを確認すると、伊藤に周囲を見せる。

「ほら、見えるかい？君が一番好きだった場所だよ。」

伊藤はそれに周囲を見渡して微かに微笑んだ、佐々木はそれを見て重苦しい顔をして彼女に秘密を明かそうとする。

「圭子……俺、実は君にずっと黙ってたことが……。」

佐々木がそれを口にする前に、伊藤が彼の頬に手を当てた。

「……知ってたよ、浩君が何か隠してたの。」

「け、圭子！」

佐々木が驚いていると、伊藤が息も絶え絶えになりながら言葉を続けていく。

「ねえ、浩君……あたしね、あなた……と、出会ってから……幸せだったよ。」

「圭子……。」

「あな……たと、会えて……ほんと……うに、良かった……。」

「圭子？……圭子?!」

伊藤は言葉を全て告げる前に静かに息を引き取っていき、佐々木はそれを悲しみと共に受け止めていた。しばらくあたりには彼のすり泣く声が響いていたが、おもむろに久賀達が彼に声をかける。

「……お前、これからどうするんだ？もしまだ人間の中で静か

に生きていく気があるなら……。」  
「う……ウアアアアアッ!？」

久賀達が全部言いきる前に佐々木がワームの姿になって久賀達に突っ込んできた。久賀達はそれを静かに見つめると、ワームからの攻撃をかわしてザビーゼクターを呼びだす。

「矢車、手を出すなよ。変身!」

《Henshin》

「キャストオフ。」

《Cast off Change Wasp》

久賀達はザビーに変身すると、即座にライダーフォームになってワームと戦いだす。

『うう……ウアアアアア!』

「……………」

ワームは悲しみに満ちた声を上げながらザビーに殴りかかっていき、ザビーはそれを冷静に見つめながら攻撃を捌き、反撃にパンチやキックを浴びせていく。

「ハッ、セイッ!」

何度もザビーの攻撃を受け、次第に動きが鈍くなっていくワーム。

『ううううう、ウオオオオオ!』

ザビーに蹴り飛ばされたワームは、最後の力を振り絞るかのごとくザビーに突撃していった。ザビーはそれをかわす素振りも見せずジ

ツと見つめていた。そしてワームの腕が振り上げられ、ザビーに攻撃が当たる寸前、ザビーが腰を落としてカウンターで左ストレートをワームの腹部に当てる。その状態で一瞬どちらも動きを止めていたが……

『……ありがとう……』

「……ああ。」

《Rider Stinging》

ザビーにワームが一言礼を言い、ザビーがそれに短く答えるとワームをライダーステイングが貫き、ワームは静かに消滅していった。ザビーはしばらくその体勢でジツとしてしていると、立ち上がり変身了解いた。

「生きるも死ぬも一緒に……か。」

久賀達は一言そう呟くと、矢車の下へ戻っていった。佐々木の様子から、彼がこう言う行動に出ることは久賀達には予想できていた。分かっていたにもかかわらず久賀達は佐々木にトドメを刺した、それが彼の望みだと、そうすることが彼にとつての救いだと理解出来てしまったから。そしてそれしか出来ない自分に、久賀達はある種の無力感を感じていた。そしてそれを感じる自分自身に久賀達は違和感を覚えていた。

（なんでこんなことを感じるんだ？他人が死のうが生きようが、あたしには関係のないことだろうに。）

だがそうは思っても久賀達は自身の中の無力感を無視することが出来なかった、そして次第にそれが何なのかを自覚していく。



（まさかあたしは・・・助けたかったのか？ああする以外の方法で？・・・バカバカしい。）

久賀達がそこで思考を振り払うと、矢車が見えてきた。

「どうだった？」

「ああ、終わったよ。しっかりと、な。」

「そうか・・・。」

矢車はそう言つて空を見上げ、久賀達は今なお木に寄り掛かった状態で息絶えている伊藤に目を向けた。その顔は何処となく微笑んでいた。

（幸せは人それぞれ、本人達が満足してるならそれが一番・・・  
つてことか。）

そう心の中で呟くと、久賀達は矢車を連れてその場を離れていこうとする。矢車は伊藤のことを警察にでも知らせようと言つたが、久賀達がそれを止めさせた。

「どうせなら、もうちょっとだけこうさせておこう。これが彼女にとっての一番の幸せだろうからな。」

そう言つて伊藤の方を一瞥すると、すぐに矢車を連れてその場から離れていく。後には木に寄り掛かつて、静かに微笑みながら息を引き取つた伊藤だけが残されていた。

## 第19話 生きるも死ぬも（後書き）

と言う訳で第19話でした。今回の話は仮面ライダーキバの第24話あたりを基にして作ってます。あの話は個人的に印象に残ったので……。ちなみに病院に潜入した時にザビーゼクターが久賀達の懐に入ってますが、具体的には久賀達が来てる上着の左の胸元に隠れてます。だから右側から見るとザビーゼクターの頭だけがちよこつと見える形に（笑）。次回遂にガタツク登場編、お楽しみに。

## 第20話 ガタツク（前書き）

どうも皆さん。黒服です。今回遂にガタツク登場編になります、とはいえ加賀美の活躍は今回は少ないですけど（汗）。

## 第20話 ガタツク

ZECT本部

久賀達は訓練を終えた後、軽い事務処理をして本部内の廊下を歩いていた。ZECTは基本的にワームを倒すための組織、その為久賀達のような実働部隊には普段は訓練する以外特にやることはないのだが、部隊維持の為の事務処理が時たまあるのである。久賀達は基本頭より体を動かすタイプなのでこう言った面倒なことは遠慮したいと思っっているのだが、隊長である為やらない訳にもいかない。そう言う訳で投げ出すことなく仕事をこなして、先程ようやくそれが終わったところである。

「さして、帰るとするかな。」

久賀達がそんな事を呟きながら廊下を歩いていると、彼女に声をかける物がいた。口元に髭を生やした、屈強そうな男性である。

「久賀達！」

「ん？あ、大和。帰ってたのか？」

「ああ、つい先程な。織田も一緒だ、今は部隊の連中と一緒にいる筈だ。」

「ふん……。」

この男性の名前は大和やまと 鉄騎てつき、ZECT戦闘部隊の統括であり、実質シャドウなどの特殊部隊を除いた全ての部隊を指揮下に置いている人物である。最近は所用で海外へと出張に出っていたが、つい先程戻ってきたらしい。

「どうだった、向こうは？」

「ああ、やはりワームなどそうそう信じてはもらえないよ。説明するのに一苦勞だった。映像を見せても映画か何かと思われてな、協力を取り付けるのも楽じゃない。」

彼が行っていたのは、海外からの支援である。ZECTはあくまで政府のみが知っている秘密組織、その為予算には限りがある。その予算を少しでも上げる為に外国から資金援助をもらう為に今まで奔走していたのである。

「で、結果は？」

「何とか援助はしてもらえるようになった、これからは対ワーム用の兵器の開発に一層力がいれられる筈だ。ところで……。」

大和は結果を久賀達に話すと、話題を別の事に変えた。内容は久賀達自身に関する事だった。

「マスクライダーシステムに選ばれたらしいな、お前。」

「ん？ああ、まあな。あたしだけじゃなくて、矢車や影山もだけだな。」

「ほお、3隊長全員がライダーか、これは頼もしいな。」

大和がそれに感心していると、今度は久賀達の方が彼に質問した。

「計画の方は今どこまで進んでるんだ？現状第3世代までは出来あがっちゃいるが。」

「もうじき第4世代が出来上がるらしい、だがそれ以上に可及的速やかに済ませねばならない事がある。」

「ガタツクゼクターの資格者……だな？」

「ああ。」

現在分かっている中で資格者が決まっていないうゼクターはプロトタイプカブトとも言えるダークカブトゼクターと、今話に出ているガタックゼクターのみとなっている。特にガタックゼクターが曲者で、これまでに何人も人間で適合実験を行ってきたが全員病院送りになっている。

「まったく勘弁してほしいよなあ、一体何人半殺しにすりゃ気が済むんだか。」

「要は面食いつてことだろ、お眼鏡にかなう奴がいないのさ。」

「違うない……。そんじゃ、あたしはこれで。」

「ああ、悪いな引き留めて。」

「別に構いやしないよ、じゃあな。」

それだけ言うと、今度こそ久賀達は踵を返していった。大和はその背中を見送ると、自分の仕事場へと戻っていった。

#### 数日後・操業停止後の工場周辺

久賀達の率いるシャドウ第2番隊と影山の率いる第3番隊は、この工場周辺で包囲網を敷いていた。ワームの行動パターンなどを解析した上で、一気に突入作戦を仕掛ける為である。作戦としては、影山の率いる部隊が工場の正面で派手に戦闘をしてワームの注意を引き、その間に久賀達の率いる第2番隊が内部に突入、爆弾を仕掛けて撤退するという作戦である。なおこの作戦では陽動する側は派手な方がいいと言う事で、久賀達と神田、葛西の3人も影山の部隊と共に陽動側に回る事となった。

「大分行動が分かってきましたね、この分だと明後日には準備も完

了します。」

「ああ。ま、何にもトラブルが起こらない様に祈るとするか。」

その時、久賀達の携帯に着信が入った。相手は矢車らしい。

「何だ一体？矢車、どうした。『大変だ、田所さんが大怪我を負ったらしい！』、何！？」

「久賀達さん、どうしたんですか？」

「田所さんが大怪我したって。矢車、どういうことだ！」

『詳しい事は良く分からないが、どうやらガタツクゼクターの適合実験で弾かれたらしい。病院に搬送されたってさっき連絡が入った。』

「チツ、またガタツクゼクターかよ。」

久賀達はその情報に苛立ちを募らせる。一体何様のつもりだと、何故態々被験者全員を半殺しにする必要があるのかとガタツクゼクターに問い詰めたくて仕方がなかった。

「それで、田所さんの容体は？」

『ちよつと待て……。どうやら命に別状はないらしい、ただしばらくは絶対安静だとか。』

「そうか、ならまだ良かった。また何かあったら教えてくれ、じゃあな。」

そう言うと久賀達は携帯を切って、大きく溜息を吐いた。影山がやや心配そうな顔で久賀達に声をかける。

「田所さん、大丈夫なんですか？」

「ああ、とりあえず命に別状はないってさ。」

「そうですね、良かった……。」

影山も思わず安堵のため息を吐く、久賀達が心の底から敬語を使う数少ない人物である田所の事を、影山も尊敬していたのである。

「とりあえず、この作戦が終わったら田所さんに見舞いの品の一つでも持っていくとするか。」

「そうですね……、って久賀達さんアレ!？」

「ん? ゲツ、あの馬鹿何やってんだ!」

そんな二人の目に飛び込んできたのは、ゼクトガンを構えながら工場内に入っていく加賀美の姿だった。

「ど、どうします? 久賀達さん、思い切って突っ込みますか?」

「馬鹿野郎、んなことしたら全部。ペアになっちまうだろうが! とにかく今は様子を見る、話はそれから。」

「でも、もし加賀美が中に入ってやられでもしたら……。」

久賀達は久々に悩んだ。今下手に動けばこちらの動きがワームにつかまれる、だがこのまま加賀美を見捨てるのも後味が悪い。久賀達はどうするか悩んだ末、ザビーゼクターを呼びだした。

「お前、中に入ってそれとなく加賀美を援護しろ。出来るな?」

《……ッ!》

ザビーゼクターは久賀達の指示を受けると、一目散に工場内に入っていた。現状下手に動く事が出来ない久賀達らには、こうすることしか出来なかった。

しばらく待っていると、ザビーゼクターが工場から出てきた。それから少しして加賀美も、フォークリフトに乗って工場から出てきた。



このまま何とか逃げ切れるかと久賀達も思ったが、フォークリフトに乗った加賀美の前にもう一人の加賀美、すなわちワームが擬態した加賀美が現れた。擬態加賀美はワームの姿に戻ると、フォークリフトを正面から止めて加賀美を引きずり下ろした。

「チツ、こうなったらしょうがねえ。影山はここに居る！戸高、A小隊を連れて着いてこい！」

「ハッ！」

「えっ？！久賀達さん！」

久賀達は影山の制止を聞かずに走りだし、即座にザビーに変身した。

「変身！」

《Henshin》

「射撃開始だ、撃て！」

ザビーの号令と共に第2番隊A小隊が加賀美に近付いて行くワームーブラキペルマワーム・ビリディスーに対して銃撃を開始、それと同時にザビーもワームに殴りかかっていく。

「ハッ、フツ、セイッ！」

ザビーはマスクドフォームのパワーと防御力を生かして、ワームに対して連続でパンチやキックを叩き込んでいく。ワームも応戦するが、巧みに防御してくるザビーに圧されていく。ザビーもパンチが決まり弾き飛ばされるワーム、その際に距離が開いた隙を吐いてワームが糸を吐きそれをザビーが避けた。その瞬間にワームはクロックアップして逃げて行ってしまった。

「チツ、ハア。」

ザビーは溜息を吐くと、ゼクターをプレスから外して久賀達の姿に戻る。そこに加賀美が近付いてきた。

「久賀達さん！大変なんです、この先の工場にワームが！？」

「知ってるよ、んなこと！調べだつてとつくの昔についてたんだ。なのお前が勝手に動いてくれたおかげで、こっちの動きを勘づかれちまつたんだぞ！分かつてんのかそこんとこ！？」

「それは謝ります、でも中に子供がいるんです！急いで助け出さないと……。」

「子供？……残念だがそいつもワームだよ、そうだろ？」

《……ッ！……ッ！》

加賀美の『子供がいる』と言う言葉に久賀達は一瞬怪訝な顔をするが、すぐにそれを否定する。ザビーゼクターに加賀美を尾行させた時、ついでに内部に生存者がいないか確認させたのである。

「こいつが見て回って、生存者なしって出たんだ。もう諦める。」

「そんな……あのマコト君が……ワーム……。」

加賀美は呆然としながらその場を去っていき、久賀達は影山と共に今後について話し合う。

「どうします？なし崩しとはいえ、連中にこちらの動きを……。」

「……作戦を早めよう、今夜やるぞ。」

「分かりました、そのように伝えます。」

影山はそう言って他の隊員達の下へと向かっていき、久賀達は作戦の先行きに不安を覚えていた。

夜

工場の正面に影山率いるシャドウ第3番隊が展開している、久賀達の率いる部隊もすでに周辺で待機している。後は作戦の開始を待つだけである。久賀達と影山の二人はすでに変身を完了しており、準備は万端、影山が変身したPホッパーの指示で影山の部下達が散開していく。

「構え！」

彼の命令と同時にマシンガンブレードが構えられていく。そしてPホッパーがゆっくりと手を上げ、いざ作戦を開始しようとしたその時……

「隊長！」

ザビーに近づく隊員がいた、彼女の部下だ。その隊員から伝えられたのは、衝撃的な言葉だった。

「はぁ！中止?!」

ザビーのその叫びに、構えていた第3番隊の隊員達とPホッパーがザビーの方を向く。

「久賀達さん、中止ってどういうことですか？」

「知るか、こっちだって聞きたいよんなこと！おい、どういうことだ？」

「分かりません、ただシャドウは直ちに作戦を中止して撤退せよと。」

「~~~~ツ、クソツ!？」

ザビーは苛立たしげに地団太を踏むと、その場にいた隊員に撤退を促し始めた。ザビーも変身を解いて久賀達の姿に戻ってその場を後にしながら、なぜ作戦が中止になったのか考えていた。作戦は特に問題はなかった、トラブルこそ起こったものの作戦そのものは行える。なのにどうして中止になるのか？

「まったく、何なんだよ一体……。」

とにかく戻ったらすぐにでも三島に文句を言いに行こうと、心に誓った久賀達だった。

ZECT本部

久賀達は本部に戻ると、早速三島の下へと向かっていた。彼女は三島の下につくと開口一番作戦中止に関する文句を口にする。

「何故殲滅作戦を中止したんですか！作戦に問題は……。」

「あの工場は、お前達の手に負える仕事ではない。」

三島のその言葉に、久賀達は納得の出来ないものを感じてすぐに反論しようとする。だがそれよりも早くに影山が口を開いた。

「そんな事はありません。三島さんは、俺と久賀達さんの実力を侮っています。」

「……………」

「聞いてるんですか?!」

影山が三島に反論していると、彼は何時ものサプリメントによる食事を言い始めた。その人の話を聞いているかも知からない様子に、久賀達が怒鳴り声を上げる。

「……サソードを味方につける。」

「えっ？」

「……。」

三島の言葉に影山は驚き、久賀達は釈然としないものを感じていた。彼が何を考えているのか分からないのだ。先程の作戦中止にしてもそうだし、既にライダーが二人いる状況でさらにライダーを増やすなどと言うことも分からない。だが三島はそんな事お構いなしに、久賀達と影山二人の肩に手を置いた。

「お前達なら……出来るよ。」

「……。」

影山は三島からの激励に素直に嬉しそうな顔をし、久賀達は対照的に冷めた様子で三島の顔を見つめていた。

## 第20話 ガタツク（後書き）

と言う訳で第20話でした。今回少しだけ大和と、名前だけでしたが織田を登場させました。彼らも今後登場していく予定ですのでお楽しみに。

それでは。

## 第21話 クワガタ誕生(前書き)

どうも、今回2話連続投稿です。黒服です。遂にガタツク登場、漸くここまで来ました。

## 第21話 クワガタ誕生

B i s t r o l l a S a l l e

久賀達は影山と共に、この店に来ていた。久賀達としては非常に気に入らないが、ここで三島からの言葉を無視して二人だけで作戦を起こしに行くともたしても三島に睨まれかねない。そうなるといういと面倒なので、ここは素直に従っておこうと言うことにしたのである。最初は自宅にいるものと思っていたが、どうやら調べてみるとS a l l eに向かっていたらしい。久賀達らも早速そこに向かった。

「よお。」

「お、お前は!？」

「チツ。」

店に入ると、厨房から天道が声をかけてきた。彼に一度は隊長の座を奪われた影山は驚きの声を上げ、久賀達は苛立たしげに舌打ちをした。だがそれ以上に気になっている事がある、それは……

(なんだこの内装、なんかのお祝いか?)

どうも以前来た時と内装が異なっている様なのである、前来た時はそんなではなかったのだが、今はこれでもかと言うくらい派手だ。

「何だ、また店の手伝いでもしに来たのか？」

「んな訳ないだろ、あたしらはコイツに用があるんだよ。」

「おい……仕事だ。」



久賀達が天道からの言葉を軽くいなしていると、影山が神代に本部からの依頼を告げる。だが神代はそれを即座に断った。

「駄目だ、まだ歌を聞いていない。」

「歌？」

「俺の誕生日を祝う歌だ……丁度いい、お前らのどつちかが歌え。じゃないと俺は、動かない。」

その言葉に流石の影山も怒りを露わにしだす、久賀達も同じだ。ただでさえ色々トラブルが続いて面倒になっているのに、この上さらに面倒を増やすと言った心境である。

「ふざけるな!？」

「お前、自分の立場が分かってんのか!？」

「すみません、ちょっと……。」

二人が神代に怒鳴り始めると、彼の執事が二人を店の隅に引っ張っていく。隅に行くと、二人に小声で耳打ちしだした。

「坊ちゃまは、一度機嫌を損ねると言う事を聞いてくれません。」

「何だよそれ、ただの我儘坊ちゃんじゃないか。どういう教育してんだよ。」

「そう仰らずにここはどうか一つ、どうか一つ。」

そう言っつて執事の彼は頭を下げてきた。流石に年老いた彼にここまですされると、久賀達でもそれを無碍に断るわけにもいかない。

「しょうがねえなあ。」

久賀達は一言そう呟くと、影山とじゃんけんどちらが歌うか決め

た。結果は影山の負けということ、影山は三角帽を被り、歌詞の書かれた本を持って神代の前に座って歌いだした。

「きょくは、すつてきな、た・ん・じょ・うび……………」

影山が歌を歌うが、その顔はしかめつ面で苛立ちを全く隠せていなかった。案の定それで神代が満足する筈も無く、執事が手に持ったワイングラスをフォークで叩いた。虚しい音が店内に響く、その様子に影山が驚いた顔をする。

「なんか…………つまんなそうだな。」

「もつと笑顔で、どうか一つ。」

その言葉に影山は苛立ちを何とか抑えながら、笑顔はその顔に作る。

「みくんの、すつきな、坊ちやま、おめでとー！」

再びワイングラスの虚しい音が響く。

「気持ち悪い。」

「もつと、マイルドに。どうか一つ。」

その言葉に影山は本の陰に顔を埋める、肩と手は震え、苛立ちを必死に抑えているのが分かった。そして再び上げたその顔は……………

「余計気持ち悪くなってる……………」

「中間管理職は辛い……………」

怒りを必死に抑えて笑顔を作っている為、メチャメチャ引き攣った笑顔になっていた。そんな状態で歌ったため歌声も震えている。そ

の様子を見て、久賀達が立ち上がり影山に声をかける。

「おい、影山……。」

「は、はい……っ!?!?!?」

声をかけられた影山が久賀達の方を向くと、最初は疲れたような返事を返したがすぐに恐怖で顔が引きつった。彼女の顔は意外なほどに冷静だったが問題は彼女の背後、影山がそこに見たモノとは……

「貸せ、あたしがやる。」

「は、はい……どうぞ……。」

久賀達の言葉に影山は即座に歌詞の書かれた本と三角帽を渡す、久賀達はそれを被り本を見ると歌い出す。

「きょくはすつてきな たんじょうび みん

くの すつきな 坊ちやま おめでと〜!」

その顔はこれでもかと言うほどの自然な笑顔で、顔も声も引きつることなく完璧に歌っていた。その様子に神代も満足そうな顔をし、天道達も驚いていた……ただ一人、影山を除いて。

「凄いな、全然嫌そうな顔をしてない。」

「大した奴だ、見事に感情を抑え込んでる。」

「……お前本当にそう思ってるのか?」

天道が久賀達の事を褒めていると、影山がそう尋ねて来た。その顔は一言で言うと、何時爆発するか分からない爆弾を前にして怯えているかのような顔だった。

「当然だ、他に理由があるか？」  
「じゃあなんでさっきから久賀達さんの方を見ない？」  
「・・・気のせいだ。」  
「見る！ちゃんと見る、見えてるんだろお前にもアレが！？」  
「いいや見てない、俺には何も見えてない。」  
「????」

そんな事を言い合う二人を、ひよりは不思議そうな顔で見つめている。彼女には見えていないらしいが、今久賀達の背後には・・・  
・般若顔の3面6手の阿修羅が浮かんでいた。どうやら抑えきれない怒りが阿修羅を象ったオーラとなり、彼女の背後に現れたらしい日ごろ鍛えている天道と影山にはその恐ろしい姿がはつきりと見えていた。では同じく鍛えているであろう神代は一体どうなのか？肝が据わっているのか、またはただのバカなのか・・・。

「ハッピーハッピーバスデー　ワックワック・・・。」

その間にも、店の中には久賀達の（聞いただけなら）楽しそうな歌声が響いていた。そして窓の外では、ザビー・カブト・ホッパー・サソードゼクターらが身を寄せ合いながら震えていた。

## 工場前

あの後、久賀達は何とか神代に作戦への参加を承知させると、即座に工場前へ来ていた。正直何時までもあの場所にいると本当にあの阿修羅が動き出しそうだったので、神代が満足すると同時に影山が久賀達をあの場合から連れ出していたのだ。下手をするとザビーに変身して当たり構わず暴れ出していたかもしれない。

「戸高、準備はどうなってる？」

『もうあと少しでこちらの準備も完了します。』

「よし、こっちが突入開始したらあたしが合図を出す。そしたらお前らも内部に潜入しろ。」

『了解！』

「各小隊、散開して突入の指示を待て！」

「ハッ！」「ハッ！」「ハッ！」

影山の指示と共に、第3番隊隊員達が散開して突入の準備をした時、それを引き留める声が辺りに響く。

「待て！お前らは帰れ、全てのワームは俺の獲物だ……俺が倒す。」

「お前……クツ！？」

神代がその場の全員に帰るように言いながら、久賀達の前に先程の三角帽を差し出す。久賀達はそれを苛立ちながら払い落した。その時、シャドウがいるのにも構わず一台のバイクが工場へ突っ込んでいった。

「アレは?!」

「チイ、あの馬鹿また……影山、作戦開始だ！」

「は、はい！総員、突入だ！」

「ハッ！」「ハッ！」

「戸高、トラブルが起こった。指定の位置に着いたらあたしの指示を待たずに内部に突入しろ、いいな！」

『分かりました、隊長！』

久賀達にはそのバイクに乗っているのが誰なのか一発で分かった、

あれは加賀美だ。こんな事をする馬鹿は彼以外にあり得ないと彼女は考えたのである。シャドウが突入する中で、工場に突っ込んでいくバイクの前にプラキペルマフォーム・ビリディスが現れ、バイクを一撃でスクラップに変えた。バイクに乗っていた人物は弾き飛ばされ、ヘルメットが外れて素顔が露わになる。乗っていたのは案の定加賀美だ。

「マコト君、俺だぁ！加賀美だ、助けに来たぞ！！」

加賀美が工場に向かってそう叫ぶ中で、工場から出てきたフォームと突入したシャドウの戦闘が始まった。フォームは接近戦を仕掛けようとし、シャドウは銃撃で応戦する。辺りはたちまち敵味方が入り混じる乱戦状態となった。

「派手に行くとするか・・・影山、行くぞ！」

「はい！」

「変身！」

《《Henshin》》

《《Change Punch・Hopper》》

久賀達と影山は即座にゼクターを呼びだして、ライダーに変身する。

《《Standby》》

「言った筈だ、フォームは全て俺の獲物だとな・・・変身！」

《《Henshin》》

神代も戦場にゆっくりと近づきながら、サソードライダーにサソードゼクターをセットしてサソードに変身する。

「フツ、ハツ！チツ、ちょっと数減らすか。全員巻き込まれんなよ

「キャストオフ！」

「総員、伏せる！」

《Cast off》

「キャストオフ。」

《Cast off》

ザビーはあまりのワームの多さに、キャストオフの際に弾き飛ばされるマスクドアーマーでワームの数を少しでも減らす事を考える。ザビーがキャストオフすると同時にサソードもキャストオフして、その瞬間シャドウは伏せた為彼らに被害はなかったがワームの方は少なくないダメージを受けた。何体かはこれですでにやられていた。

「フツ、ハツ、セイッ！」

「フンツ、ハア、デヤッ！」

「ハツ、ハツ、フツ！」

3人のライダーはそれぞれ複数のワームを相手取って戦っていた。ザビーは軽快な動きでワームを翻弄し、サソードは卓越した剣技でワームを寄せ付けず、Pホッパーは素早いパンチでワームに反撃の隙を与えなかった。そんな中、プラキペルマワーム・ビリディスが工場内部に逃げていった。

「あんにやる、影山！あたしは一足先に中に入って中に残ってる連中を潰してくる！」

「分かりました！俺も少ししたら中に入ります！！！」

それだけやりとりすると、ザビーは工場内部に入っていた。

## 工場内部

内部に突入すると、もうほとんどワームの姿は見られなかった。だが完全に居ない訳ではなく、何体かのワームがザビーに向かってきていた。彼女としては先程の成虫体を何とかしたかったのだが、こいつらを見逃すわけにもいかない。今工場内部には、彼女の部下が潜入して爆弾を仕掛けてる真つ最中なのだ。

「ハッ、フンツ、ダアッ！」

ザビーのパンチやキックで翻弄される蛹達、ある程度攻撃するとザビーは蛹を片付ける為にライダーステイングを発動する。

「ライダーステイング！」

《R i d e r S t i n g》

ザビーは蛹達に向かって走っていき、すれ違いざまに次々とライダーステイングを叩き込んでいく。そしてワームの群れをザビーが抜けると同時に、ワーム達が次々と爆散していった。

「ふう……さて、先に進んでみるか。」

そう言つてザビーは工場の奥に入っていった。ある程度進むと、軽く開けたところに出た。だがワームの姿は見当たらない、どうやら陽動が予想以上に上手く働いているらしい。これなら彼女の部下の方も楽に進められるだろう。その時、彼女の目にあるものが飛び込んできた。

「ん？あれは……………」

そこで彼女が見たのは……………



ZECT本部・総帥室

ZECT総帥・加賀美 陸は一人チェンバロを弾いていた。その音色はどこか寂しく、陸の顔には後悔しているかのような表情が見てとれた。

「今生の希望……それは、全て……打ち砕かれねばならない。絶望の底に、堕ちた時……人は……真の希望で、己を……救う事が出来る。」

彼はそう呟くと、その目から一筋の涙を流した。息子に過酷な運命を背負わせてしまったことに、このような事しか出来ない自分の無力さに。それと同時に、彼の脳裏に一人の女性の姿が浮かぶ。

「君も、こんな気持ちだったのか？久賀達……雪乃君……いや、君の場合はもっと苦しかっただろう、何せ……君は……」

その後も部屋には、悲しげなチェンバロの音が響いていた。

工場内

工場の内部に潜入したザビーの目に飛び込んできたのは、仰向けに倒れている加賀美の姿だった。彼はピクリとも動かず、まるで死んでいるかのようにだった。

「ッ?!加賀美!……ん？」

ザビーが急いで彼に駆け寄りとした時、彼女よりも先に加賀美に近付いた人物がいた。

「ありや……誰だ？……つかあれは！？」

こちらに背中を見せているのでそれが誰なのかは良く分からない、だがその人物が手にライダーベルトを持っているのは分かった。その人物は加賀美にベルトを巻き終わると、静かにその場を去っていた。そして後に残された加賀美は、ゆっくりと動き出す。

「加賀美………たく、心配せんなよ。それにしてもあれは………まさか。」

ザビーが見守る中、加賀美は彼の先にいる二人の人物ーワームが擬態したと思われるもう一人の彼と、彼が言っていたらしい小さい子供ーに向かって言葉を紡ぐ。

「人と人の信頼をも利用するワーム……俺は絶対に許さない！」  
そう言っただけで彼が右手を上げると、工場の天井を突き破ってガタツクゼクターが彼の手に収まる。

「ッ！？やっぱり、あれはガタツクのライダーベルト………ってことは、あいつが……。」

ザビーがその光景に驚いていると、加賀美は一度ガタツクゼクターを見た後、ベルトにゼクターを収める。

「変身！」

彼が掛け声と共にゼクターを収めると、彼の体を銀と青のマスクドアーマーが覆っていき、次の瞬間には重厚な装甲に身を包んだ戦士【仮面ライダーガタック】がいた。ガタックは2体の成虫体相手に接近戦を挑むと、2体をいとも容易く弾き飛ばした。1体のワーム・プラキペルマワーム・ビリデイスがガタックに突っ込んでいくが、ガタックの両肩に装着された大砲【ガタックバルカン】の連射を受けてあつという間に倒されてしまう。

「ほお、流石に大した威力じゃないか。」

ザビーがそれに感心していると、ガタックがもう一体に狙いを定める。すると……

「止めてお兄ちゃん！僕を消したりしないで！」

ワームータランテスワーム・パープラーから子供の姿が浮き上がり、ガタックに攻撃を止める様に懇願する。それにガタックは攻撃を躊躇してしまう、だがザビーはそれを見ても彼を助けに行くとはしなかった。彼女は興味があったのだ、この状況に立たされた時、彼がどう行動するのかに。その時外の影山から連絡が入った、恐らく爆弾の設置が完了したのだろう。

「影山か？」

「久賀達さん、今どこです？もう爆弾の設置は完了しました、早く撤退を！」

確かに早く逃げ出さないと彼女も爆発に巻き込まれてしまうだろう。だが彼女は見届けたかった、ガタックの、加賀美の決断を。

「悪い、今ちよつと手が離せなくてなあ。まあこつちはこつちで何とかうまくやるから、そつちも作戦通りに事を進めとけ。」

『しかし！……分かりました、気を付けてくださいね。』

「あいよ。」

ザビーはそれだけ言うと、通信を切つて再びガタツクの方に視線を向ける。すると彼の後ろからカブトが近付いてきた、ザビーは一瞬カブトを止めに行こうかと考えたが、それよりも早くにガタツクがカブトを止める。

「やめろ天道！」

「お前……加賀美か？」

「ここは俺に任せてくれ……。」

「……いいだろう。」

それを聞くとガタツクは再びワームの方を向き、ゼクターホーンを外側に軽く開いた。それと同時に浮き上がるマスクドアーマー、そして……

「キャストオフ！」

《Cast off Change Stag-Beetle》

ガタツクがゼクターホーンを180。反対側に倒すとマスクドアーマーが弾け飛び、ライダーフォームとなる。ワームはそれを見た瞬間クロックアップでその場から逃げだそうとするが、ガタツクも即座にクロックアップしてワームを追跡する。

「クロックアップ！」

《Clock up》

「・・・クロックアップ。」  
《Clock up》

ザビーはワームとガタックがクロックアップするのを見ると、自身もクロックアップした。勿論それはガタックを援護する為ではなく、クロックアップ状態でガタックがどのように戦うのかを見届ける為である。ザビーがクロックアップすると、ちょうどガタックが両肩に収められている剣【ガタックダブルカリバー】でワームに斬りかかるどころだった。

「ハッ、ハッ、ヤッ！」

幾度か斬り付けられ、遂に弾き飛ばされるワーム。ワームは何とか立ち上がると、再び子供の姿を浮き上がらせる。

『お兄ちゃん・・・まさか僕を・・・？』

「・・・・・・・・ウオオオオオオ！・・・ハアッ！」

ガタックはワームの言葉に一瞬戸惑うかのような仕草を見せると、雄叫びを上げて飛び上り、天井をカリバーで切り裂いた。

（なんだ？一体何を・・・。）

『何なの？』

「・・・・・・・・どうしても君にこれを見せてあげたかった。」

そう言われてワームが上を見上げると・・・・・・・・

月の光によって出来る虹『ムーンボウ』がワームを照らした。

ガタックは近くに落ちていた小さな望遠鏡を手に持ち軽く埃を払う

と、ゆっくりとワームに近付いて行く。ワームはしばしそのムーンプウに見入っていた、ワームから浮かぶ子供の顔は何かを耐えるかのような顔になっている。

一方工場の外では・・・

既に戦闘はあらかた終了しており、変身を解除した影山の下に一人のシャドウ隊員が近付いてくる。その手には爆弾のリモートコントロールの爆破装置が握られていた。

「爆破準備、完了！」

「ああ・・・久賀達さん・・・。」

影山は久賀達の事を心配しながらも、彼女の事を信じて作戦を遂行する為に指示を出そうとする。

再び工場内

ガタツクは望遠鏡を差し出しながらワームにゆっくりと近づいて行く。

『お人よしだね・・・お兄ちゃん。』

ワームがそう言った瞬間、子供の姿が消え、ガタツクの手から望遠鏡を払い落とす。それと同時にクロックアップも解除された。

「ッ!？」

《Clock over》

クロックアップが解除されると同時にワームがガタツクに連続で攻

撃を加えていく、だがザビーの目にはその攻撃に力が乗っているように見えなかった。

(あのワーム……まさか……。)

そうこうしている内に、ワームがガタツクに突っ込んでいく。それを見てガタツクはゼクターのスイッチを3回押し、必殺技のライダーキックを発動する。

《One Two Three》

「ライダーキック!」

《Rider Kick》

「ハアッ!」

カブトのモノとは違う、空中回転回し蹴りによるライダーキックがワームの顔面に炸裂する。それと同時に……

「爆破!」

「ハッ!」

影山の命令で隊員が爆破装置のスイッチを押す。工場内の各所で爆発が起こり、カブト・ガタツク・ザビーがいる所にも爆風が飛んでくる。ガタツクが居たのはちょうど爆風が通るところ、このままだといくらなんでもマズイ。

「ヤベッ、加賀美!」

ザビーが急いでガタツクを助けようとそちらに走りだすが、それよりも早くガタツクのライダーキックを受けたワームが爆風からガタツクを守った。

「ッ!?マコト君!」

ガタツクがそれに驚きの声を上げると、ワームは手で輪を作りそれを左右に弾けさせる様な仕草をした。そしてそのまま静かに消滅していった。

「あ、ああ……。」

ガタツクはそれにしばし呆然としていた。

それからしばらくして、爆風が止んだ工場内にカブト・ガタツク・ザビーの3人がいた。ガタツクは落ちている小さな望遠鏡を手に取り、それをじつと見つめていた。先程の様子からすると、あれはあのワームの……と言うよりワームが擬態した少年の物だろうか。そんなガタツクに、カブトが声をかける。

「甘いな……相変わらず。」

「俺は……俺にしかねない。でも、これが俺なんだ。」

そう言うとガタツクとカブトはお互いをしばし見つめ合っていた、そんな二人にザビーも声をかける。

「いいんじゃないか……それで。」

「久賀達……。」

「久賀達さん……。」

「人間皆他人になるなんて出来やしないんだ。だったら、自分が思うようになればいい、それが……人間ってもんだろ?」

そう言うとザビーはその場を離れていった。流石に何時までもここにいる訳にもいかない、恐らく影山も心配しているだろう。早く戻



って安心させてやらなければならない、そんな事を考えながらザビ  
ーは工場から出ていった。

## 第21話 クワガタ誕生（後書き）

と言う訳で第21話でした。このガタツク登場の話は個人的に好きな話に入るんですよえ。

今回陸が久賀達の母親の名前を呟きました、果たして彼と久賀達の母親との間にどんな関係があるのか。今後の展開も楽しみにしてみてください。

ご意見・ご感想も待ってます。

今回の更新もお楽しみに。それでは。

## 第22話 弟子入り（前書き）

どうも、黒服です。お待たせしました、第22話を更新します。

## 第22話 弟子入り

渋谷・エリアX

久賀達はこの日、護衛任務としてこの地に来ていた。護衛の対象は三島と田所、何でも三島が何かを田所に見せたいがためにこの地に足を運んだらしい。もっとも護衛任務以外の事を何も聞かされていない久賀達には関係のない話であろうが。そうこうしていると、三島と田所がエリアX内から出てきた。だがどうも田所の様子がおかしい、心なしか顔色が悪かった。

「まさか、こんな……。」

「あれしきの事で動揺していたら、ZECTのチームリーダーは務まらないぞ。」

（田所さん……一体どうしたんだ？）

久賀達がそんな事を考えていると、二人がゲートから出てきた。二人が出るのを確認すると、久賀達の部下がゲートを閉める。

「何故私を……エリアXに入れたんですか？」

「ガタツクを得たことにより……マスクドライダー計画は次の段階に入った。」

「……次の段階？」

「そして多分……ワームもな。」

その言葉に、久賀達は内心で驚いた。マスクドライダー計画が次の段階に入ったと言うのはまだいい、だが気になるのはその次に出た言葉。

(ワームが次の段階に入った？ 一体……)

久賀達はその言葉について考えるが、いくら考えても何も思い浮かばない。何にしても、今後はさらに警戒する必要があるだろうと言う事を確信する久賀達だった。

その日の夜

久賀達はザビーゼクターに導かれるままに走っていた、護衛の任務も終わり、帰って寝ようかと考えていたらワームを見つけたザビーゼクターに呼び出されたのである。特にそこまで疲れていた訳でもなかったなので、バイクに乗って急いでザビーゼクターが導く場所へ向かっていくと……

「ん？ あれは……ガタツク？ 加賀美に先を越されたか。」

現場では既にガタツクが戦闘を行っており、ガタツクダブルカリバーで1体の成虫体のワームージオフィリドワームーを切り刻んだところだった。切り刻まれたワームは耐えきれずに爆散、ガタツクは変身を解いて加賀美の姿に戻っていった。

「よお。」

「あ、久賀達さん！」

「随分と活躍してるみたいじゃないか、加賀美。」

久賀達は加賀美が変身を解いたところに声をかけに行った、彼に聞きたい事があったからである。

「久賀達さんのおかげですよ、今俺がこうしているのも。」

「ふ〜ん・・・お前、今の気分はどうだ？」  
「へ？ 気分？」

加賀美がライダーになってワームを倒すところを見た久賀達としては、現在の加賀美の精神状態を知っておきたかった。ライダーの力を自身で扱いこなせるのか、はたまた力に飲まれて暴走してしまわないか。

「いいか、ライダーってのはマンガやアニメに出てくるようなヒーローじゃない。単なる力だ、使い方を誤れば容易く他人をも傷つける。そこんところをお前は・・・。」

「分かってます！ 俺はこのライダーの力で、ワームの手からもっと多くの人を助けたいんです！！」

そう発破をかけてくる加賀美の瞳には一切の迷いが無かった、久賀達はしばし加賀美のそんな瞳を見つめると、軽く笑って彼に声をかける。

「オーケー、そこまで言うんならこつちも面倒見てやる。時間が空いたら本部の訓練施設まで来な、あたしか、矢車のどつちかがお前に戦い方を教えてやるよ。」

「久賀達さん・・・ありがとうございます！」

久賀達はそれにフツと笑うと、その場から踵を返して帰っていった。

## ZECT訓練施設

その日、久賀達は加賀美と訓練施設の中で対峙していた。先日久賀達が言った『時間が空いたら訓練施設に来い』と言う言葉に、加賀

美が彼女に鍛えてもらおう為にやってきたのだ。

「先に言っておくが、あたしは優しくないぞ。覚悟は出来てるんだろっな？」

「はい！ 宜しく願います！！」

加賀美がそう言うと、二人の下にそれぞれのゼクターが飛んでくる。ゼビーゼクターは直接ライダープレスに、ガタックゼクターは加賀美の手に収まる。

「「変身！！」」

《《Henshin》》

二人が変身すると、その場にはゼビーとガタックが対峙する。ゼビーはいつもと変わらないスタイルで、ガタックは両手を前に出して戦闘の構えをとって。

「……来い！」

「ウオオオオオオ！」

ガタックはゼビーに殴りかかっていくが、ゼビーはいとも簡単にガタックの攻撃をいなしていく。だがまだ反撃はしない、もうしばらくガタックに攻撃せて彼の癖などを理解するためである。そしてしばらくしてこのままでは埒が明かないと考えたのか、ガタックがキヤストオフをする。

「キヤストオフ！」

《《Cast off Change Stag-Bee》》

ガタックから弾き飛ばされてくるマスクドアーマー、ゼビーは軽く

それをかわすと漸く口を開いた。

「安易にライダーフォームに頼るな、もっとマスクドフォームを有効に使え！」

「え？ マスクドフォームを有効に使う？」

「マスクドフォームの特徴はライダーフォーム以上のパワーと防御力だ、コイツを有効活用しない手はないだろう。」

そう言いつつもザビーはガタツクの攻撃を軽々とかわしていく。時にはザビーに攻撃が当たる事もあるが、それらは全てマスクドフォームの強固な防御力の前に防がれていった。

「でも、小回りの利かないマスクドじゃ久賀達さんに攻撃が……」

「何のためにガタツクバルカンがついてんだ、自分のライダーの特性をもっと理解してみろ。」

久賀達は戦闘で安易にライダーフォームにはならないようにしている。ある面からみればそれは単に手を抜いていると言うことでもあるのだが、今言ったようにマスクドの特性を最大限に生かすのも対フォーム戦では有効だからだ。実際彼女は蛹体のみが相手の場合、ほとんどマスクドフォームのみで戦っている。

もっとも相手の中にクロックアップをする成虫体がいた時などは、クロックアップによるアドバンテージを取られない為に自身もライダーフォームになるが。

ザビーの言葉の意味が分かり、ガタツクは即座にプットオンしてガタツクバルカンによる射撃でザビーを攻撃していく。ザビーはその攻撃を辛くもかわしていきながら、仮面の中で満足そうな顔をする。



「そうだ、それでいい。ガタツクバルカンはドレイクの通常射撃を上回る威力を持つてるんだ。蛹程度なら場合にもよるが基本そいつで一掃する事を考えると無駄な体力の消費が無くなる、覚えておけ。」

「はい！」

「よし、次はライダーフォームでの戦いだ。キャストオフ！」

《Cast off Change Wasp》

「キャストオフ！」

《Cast off Change Stag-Beetle》

二人のライダーから弾き飛ばされたマスクドアーマーがお互いにぶつかり合い、相手に届く事はない。その間にザビーは素早くガタツクの懐に入り、次々とパンチやキックを叩き込んでいく。

「フツ、セイツ、ハアツ！」

その連続攻撃にガタツクは反撃できず、防戦一方になってしまった。

「相手の連続攻撃につかまったら反撃する事を考えるな、そこから抜け出す事を考える！」

「は、はい！」

そうは言ってもガタツクも先程からこの状況を何とかしようとはしている。だがザビーが抜け出す事を許してくれなかったのだ。その状況に、遂にザビーがガタツクにアドバイスをする。

「相手の攻撃から抜け出せない時は、相手の攻撃を利用しろ。ここまで言えば分かるな？」

「ッ！？　そ、そうか！」

ザビーの言葉にガタツクは何かに気付いた。そして次にザビーの攻撃がガタツクにヒットした時、ガタツクはその攻撃の反動を利用してザビーから距離を取った。

「そう、馬鹿正直に突っ込むだけじゃ勝てるモノも勝てない。時には発想を変えることも重要だ、分かったな？」

「はい！」

そして再び訓練を再開しようとした時、施設内に戸高の声が響いた。

「隊長！ 加賀美、電話です。」

「誰からだ？」

「田所さんからです。」

「田所さんから？」

加賀美は変身を解除すると、戸高から携帯を受け取り田所と話をする。2、3話すと加賀美は久賀達の下へやってきて田所からの電話の内容を伝える。どうやら最近起こっているワームによる事件に関する事らしい。

「すみません、田所さんに呼ばれちゃったんで今日は・・・。」

「ああ、別に構いやしないよ。さっさと行ってきな。田所さんは、怒らせると怖いぞ。」

「はい、分かっています。それじゃあ、今日はありがとうございました！」

「おう、また来な。」

加賀美が出て行った後、久賀達はこれからどうしようか考える。もうじき昼時、そろそろ訓練を一区切りしてもいい頃だろう。今日は

何処で昼食をとろうかと考えていると、矢車と影山がやってきた。

「久賀達、訓練終わったか？」

「ああ、そろそろ一区切りつけようかと思ってたところだ。って言うか影山何でいるんだ？ お前今日は非番の筈だろ。」

「実は最近話題のラーメンの屋台がありまして、お二人も誘って行くどうかと。」

影山が言うラーメン屋とはここ最近巷で噂になっている屋台の事である。何でも最初は老人がやっていたらしいが、今は青年が一人、もしくは少女一人か二人で経営しているらしい。そして味は最高クラスだとか。久賀達も興味はあったのでその話に賛成すると、3人でその屋台へと向かっていった。

#### 街中・ラーメンの屋台

久賀達ら3人は現在列に並んで順番待ちをしていた。3人とも最初ここに来た時はあまりの人の多さに驚いたものである、まさかたかが屋台でこれほどの行列が出来るとは。

これは味にも期待できそうだと久賀達が思っていると、ザビーゼクターが久賀達の下へとやってきた。最初はワームでも出たかと考えたが、どうもそうではないらしい。ザビーゼクターは久賀達に屋台の背後、街路樹の影に目を向けてみると言いたげな仕草をする。それに久賀達が頭にハテナマークを浮かべながら従ってみる、すると

・・・

「・・・なるほど、この屋台が誰のか大体分かった。」

「知り合いか？」

「屋台の後ろにある木をよく見てみな、そうすりゃ大体見当はつく。」  
久賀達に言われて矢車と影山もそちらに視線を向けた、するとそこにはチラチラと赤いカブトムシの様なモノが見える。

「アレって……もしかしてカブトゼクターじゃ……。」  
「なるほど、あいつの店ってわけか。」

3人が屋台の経営者が誰なのかに気付くと、列が進み始めた。屋台から漂ってくるラーメンのスープの匂いに、3人とも食欲をそそられる。そうこうしていると、遂に3人の順番がやってきた。久賀達らが暖簾をくぐるとそこには……

「お前達……。」  
「よお、来てやったぜ。」  
「やっぱりお前だったか。」

久賀達らの目の前には、三角巾を頭に巻いてエプロンを身に付けた天道がいた。

「噂の上手いラーメンの屋台がどんなもんなのか気になってな、早速作ってもらおうか。」  
「言っておくが、俺は味にはうるさいぞ。」  
「いいだろう、望むところだ。全部入り3丁。」

天道の言葉に、彼のすぐそばにいた少女・樹化が元気良く返事をする。

「お、おい!?!? そんな勝手に……。」

「いいじゃないか影山、お手並み拝見といこう。」  
「矢車さん……。」

最初影山は勝手に注文を決められた事に抗議しようとしたが、矢車に宥められる。実は影山は味噌ラーメンの方が好みだったのだ。

しばらくしてラーメンが出される。出てきたのは醤油ラーメン、それにチャーシューや海苔、卵などにかく具材も盛りだくさんのモノだった。3人は早速出されたラーメンに口をつける。

「どれどれ……ッ?! こ、これは……。」

「う、ウマッ!」

「……。」

矢車はラーメンのスープを飲みその味に驚愕し、影山は正直な感想を述べた。どちらもあまりの美味しさに一心不乱にラーメンを食べ続ける。

「クッ、これは……俺の負けだ。」

「こんなに美味しいラーメン初めて食った……。」

「当然だ。さて、最後にお前から何か感想を聞きたいんだが……。」

ラーメンを食べきった矢車はその美味さに敗北感に打ちのめされ、影山は満足そうな顔をしていた。だがただ一人久賀達だけは何のリアクションも起こさず、ただ黙々とラーメンを食べていた。そして麺も具材も全て食べきり、スープも飲み干した久賀達はしばし眉間を抑えた後……。

「釣りはいらねえ。」

そう言つて1万円札を置いて屋台から出て行つた。その後ろ姿に矢車と影山は呆然となる。

「想像以上に美味かつたけど素直に褒めるのも何か癪だから代金で示した、つてところか。」

「気持ちスキップしているようにも見えるな。」

「大分満足したみたいですね、あんな久賀達さん始めてみましたよ。」

天道達からは死角になつて見える事はなかったが、屋台から出て行つた久賀達の顔は……彼らが今まで見たことも無いくらい満足げな顔だつた。

## 第22話 弟子入り（後書き）

と言う訳で第22話でした。加賀美が久賀達の弟子みたいなポジションになりました。

原作だとライダーってすぐにキャストオフしてた印象があるんですよねえ、序盤はそれでもマスクも良く活躍してたんですけど、終盤に近付くにつれてだんだんとマスクの出番が減っていった。まあマスクじゃクロックアップに対抗できませんから仕方ないんですけどね（汗）。

次回、久賀達に関わる衝撃の事実が明らかになる。一体どんな事実なのかお楽しみに。

それでは。

## 第23話 謎（前書き）

どうも、黒服です。今回久賀達にとって衝撃の事実が明らかになります。



## 第23話 謎

### 公園

久賀達は天道が作ったラーメンに満足して屋台を出た後、腹ごなしに公園に散歩に来ていた。訓練再開まではまだ時間がある。偶にはこう言ったところをぶらつきながらゆっくりとするのも悪くないと考えながら公園内を歩いて行くと、突然どこからか悲鳴が聞こえてきた。

「ウワアアアアッ?!」

「チッ、ワームか?」

久賀達が急いで悲鳴が聞こえた方へ向かうと、そこでは1体のムカデのような赤紫色の成虫体・・・ジオフィリドワームが一人の男性に襲いかかるうとしていた。久賀達はザビーゼクターをワームに体当たりさせて怯ませると、急いで男性を助け起こして逃がす。

「偶にはゆっくりとさせてくれてもいいんじゃないのか? ま、食後の運動にはちょうどいいか。」

久賀達がそう言いながら右手を前に出し、ザビーゼクターを手に取る。ワームは久賀達に威嚇をするが彼女はそんなものを気にすることなく、ライダーブレスにザビーゼクターを収めた。

「変身。」

《Henshin》

久賀達はザビーに変身すると、ワームに殴りかかっていく。マスク

ドのパワーを生かした重いパンチはワームを容易く吹き飛ばす。

「ハッ！」

ワームも応戦するが相手の攻撃は全てザビーに防がれてしまい、逆にワームはザビーのマスクドフォームのパワーを生かした連続パンチにダメージを受けていく。

ザビーの連続パンチから辛くも脱出したワームは、クロックアップでその場から逃げようとする。だがザビーがそれを許す筈も無く、彼女もキャストオフした後にクロックアップする。

「キャストオフ。」

《Cast off Change Wasp》

「クロックアップ。」

《Clock up》

ザビーがクロックアップした途端、彼女の目に逃げ出そうとするワームの姿が映る。周囲の全てが時間が止まったかのように感じる空間で、ザビーとワームが戦っていた。とは言ってもすでに戦いは一方的となっており、ワームの動きは非常に鈍いモノとなっていた。

「トドメいくか、ライダーステイング。」

《Rider Stinging》

「ハアッ！」

ボロボロとなったワームに、ザビーの必殺技ライダーステイングが炸裂する。ザビーの攻撃にワームは爆散し、同時にクロックアップも解除された。

「ふう……ん？」

ワームを倒したのを確認してザビーが変身を解くと、あるものを拾う。緑色の奇妙な石で出来たストラップ、それが地面に落ちていた。久賀達はそれが先程ワームに襲われていた男性が落としたものであることに気付く。

「こんなの持っててもなあ、ここに置いとくときゃ元の持ち主が拾いに……何だよ？」

久賀達がストラップをこの場に置いて行こうとすると、ザビーゼクターがそれに待ったをかける。まるで『それを持って帰れ』と言っているかのような口ぶりだ。

「……コイツに何か秘密でもあるのか？」

《……！！》

久賀達の言葉にザビーゼクターは肯定するような仕草をしたので、彼女はとりあえずそれを持ちかえることにした。久賀達にはこれが何なのかさっぱり見当がつかないが、ザビーゼクターが捨てるなど言うのだ、きっと何かあるに違いないと彼女は考える。

（何かよく分かんねえけど、とにかく調べてみるか。）

久賀達はそう考えると、そのまま本部の方へと歩いて行った。

久賀達はここで現在昼食後の食休みをしていた。とは言っても今の彼女の頭にあるのは食後の余韻ではなく、先日拾ったストラップについていた石に関する事である。持って帰って研究員に調べさせた結果、これが渋谷隕石の一部である事が分かったのだ。

もっともこれは久賀達が出て帰った物を調べて分かった事ではなく、それ以前から起こっていたワームによる事件の被害者が全員同じ物を持っていたと言う事から分かった事なのだが。

(一体何なんだろうな、これ……。)

久賀達がそんな事を考えながら何気なく店にあるテレビを見ると、そこには『高貴ラーメン 剣』という名前のラーメン屋が映っていた。

「剣？ 変わった名前だな……。」

久賀達がそのままテレビを見てみると、どうやら新しいラーメンの店がオープンしたらしい。その内容が凄いもので、世界中から腕利きの料理人を集めて様々な高級食材をふんだんに使って、しかも代金3000円と言うモノだった。これを見て久賀達は……

「馬鹿じゃねえの。」

とだけ言った。どう考えてもアレだけの食材を使って3000円では割に合わない、しかも腕利きの料理人達への給料だつて必要なのである。店の売れ行きが良くても悪くても赤字は必須だろう。そう考えていると、画面に神代の姿が映る。どうやら彼がオーナーらしい。

「あああいつか、なら納得だな。あいつにまともな金銭感覚がある

とは思えないし、それにしても一体何を考えてるのやら……。」  
久賀達がそのまま画面を見ていると、今度は天道が映った。どうやらあの店は先日久賀達が向かった屋台の目の前に出来たらしい。

そうこうしていると話は進み、どうやら神代の店と天道の店で勝負をするらしい。単に勝負するとだけしか言っていなかったのどういった勝負なのかイマイチ分からないが、店同士の対決なら集客数と言ったところだろうか。それかもしくは売り上げか。

「どっちにしてもこれ最終的に生き残るの天道の方だろう、どう考えても神代の店確実に大赤字になるだろうし。」

久賀達が勝負の行方を予想していると、リポーターが道行く人にインタビューを始める。その最初の人物は、何故かその場にいた岬だった。

『どちらが勝つと思いますか？』

『かけ蕎麦。』

ガンッ！

リポーターが岬にどちらが勝つと思うかと尋ねると、彼女は一言だけそう言った。そのあまりにも的外れな答えに、久賀達は思わず脱力して机に額をぶつけてしまった。

「あ、あの馬鹿、何の勝負だか分かってねえだろ。なんでそこで蕎麦が出てくるんだよ。」

久賀達はそう言いながらしばらく額を擦った後、店から出て行った。

渋谷廃墟・エリアX

この日久賀達にはエリアXの警備の任務が言い渡されていた。どうも最近渋谷廃墟に任務で来る事が多くなってきている様な気がしている久賀達だが、その理由にも大体見当がつく。先日田所と三島がここに来た時に三島が言っていた、『ワームも次の段階に入った』と言う言葉が関係しているのだろう。

具体的にどう連中が次の段階に入ったのか分からないが、それによって連中の行動に何か変化が起こる可能性がある。要はそう言うことだろう。久賀達がそんな事を考えていると、ザビーゼクターがやってきた。

「どうした急に、うん？ あれは……。」

ザビーゼクターの様子に久賀達が怪訝な顔を見ると、彼女の目にエリアXに近づく加賀美とひよりの姿が見えた。エリアXに入るつもりだろうか？ とにかくここから先に通す訳にはいかない、久賀達は部下を引き連れて加賀美の前に立ち塞がる。

「待ちな。ここから先に通す訳にはいかない、そう言う命令なんだな。」

「……この先に何かあるんですか？」

「さあね？ そんなのあたしの知ったこっちゃないし、知る必要も無いだろ。」

《Henshin》

そう言いながら久賀達はライダーブレスにザビーゼクターをセット

し、ザビーに変身する。そして適当にあしらって二人を追い返そうとするが、そこにガタツクゼクターが飛来する。

「あつちに隠れてる！ 変身！」

《Henshin》

加賀美はひよりに隠れるように言うと、自身はガタツクに変身してザビーと対峙する。

「ハッ！ 面白い、いくぞ！」

そう言いながらザビーはガタツクに殴りかかっていく。ガタツクも反撃しようとするが、やはり戦いではザビーの方が分がある。ガタツクの攻撃は的確に防がれ、逆にザビーの攻撃はガタツクを捉えていく。

「ほらほらどうした？ もっと腰を入れる！」

「クッ！？」

ザビーの体重の乗ったパンチや、遠心力を利用したキックに翻弄されガタツクは窮地に陥っていた。なお悪い事に彼女の部下がひよりを見つけてしまっていた。

「見つけたぞ。」

「やめろ！？」

「大人しくしろ！」

「ひより?!」

ひよりの悲鳴にガタツクは気を取られてしまい、その隙を吐かれてザビーの攻撃を受けてしまう。

「何よそ見してんだ！ そんな余裕がお前にあるのか？」  
「うっ！？クソッ！」

ガタックがザビーと戦っている間にもひよりをシャドウ隊員が連れて行くとする。だがその時、無数の小型のカプトゼクターの様な物が彼らに纏わりついてきた。

「う、うわあっ！？」

「クソッ！ 何だこいつ等は？！」

「何っ？！」

「あれは！」

その小型のカプトゼクター・・・【マイザーボマー】によって隊員達が倒された後、土煙が晴れたところにはカプトが立ち尽くしていた。カプトはひよりの手を引くと、そのままエリアX内に入っているってしまった。ガタックが慌ててそれを追い、ザビーもそれを追いかけてようとするが、その前に倒れた彼女の部下達の下へと向かった。見たところ大きな怪我はないようだが、急いで医療班に見せた方がいいだろう。

ザビーが別の小隊に連絡を取り増援と医療班を手配すると、急いでカプトらを追いかけていった。増援が来るまでには3分とかからない、このまま彼らをここに置き去りにしても問題はないだろう。

ザビーがエリアXに入ってしまったらしくすると、何かの爆発音が聞こえた。そちらに向かうと丁度カプトとガタックが2体のジオフィリドフォームを始末したところだった。ザビーはそれを見るや自身もキャストオフしてライダーフォームとなる。



《Cast off Change Wasp》

「お前ら……ここから先には行かせ、ツ!？」

ザビーがカブトとガタツクに近付いて行くと、彼女の目の前にひと振りの剣……フェンシングで使う様な細いサーベルが突き刺さった。ザビーがそちらに目を向けると、神代がやって来ていた。

「じいやが言っていた。高貴な振る舞いには、高貴な振る舞いで返せ。それが俺の……ノブレス・オブリージュ!」

《Standby》

「変身!」

《Henshin》

神代はサソードゼクターを呼びだすと、サソードダイバーにセットして変身した。ザビーはそれに苛立ちながら殴りかかっている。

「お前……邪魔すんな!」

「コイツは俺に任せろ、お前達は行け!」

サソードの言葉に、カブトとガタツクはさらに先へと進んでいく。

「チクシヨウ、待て!」

「キャストオフ。」

《Cast off Change Scorpion》

ザビーが3人を追いかけてようとすると、サソードがライダーフォームになり邪魔をしてくる。ザビーが苛立ちながらもサソードの相手をしていると、ホッパーゼクターが飛んできてサソードに体当たりする。ゼクターが飛んできた方を見ると、そこには矢車がいた。

「矢車！」

「ここは俺が何とかする、お前は行け！」

《Henshin Change Kick-Hopper》

「よし、頼むぞ！」

サソードの相手をKホッパーに任せると、ザビーもカブト達の後を追いかけていった。

エリアX・地下

久賀達はサソードの相手をKホッパーに任せした後、天道達の後を追っていた。階段を下りていく久賀達、そしてその先に何かの金庫かシエルターの様な扉が開いているのを見つけた。迷わずそこに入る久賀達、そこは何かの研究室の様な部屋で、案の定天道・加賀美・ひよりの3人がいた。

「ようやく追いついたぞ、観念しな。」

久賀達がそう言うと、ひよりが驚いた顔をした。だが天道はさして動じることも無く、加賀美に至っては慌てて久賀達を呼び寄せた。

「久賀達さん！　ちょ、ちょっと来てください！」

「？　何だ、一体……。」

「これ、これ見てください！」

「一体何だってん……え？」

加賀美は久賀達に一冊のファイルを手渡し見るように言う。久賀達はそれに訝しげな顔をしながらもファイルを受け取り、中身を読んでいくと驚愕に目を見開く。ファイルにはこう書かれていた。

“ 戦いの神・ガタツクに選ばれし人 加賀美 新 ”

このファイルが書かれた日付は今から35年前、そんな昔のファイルに加賀美の名前が、それもガタツクの資格者として書かれていることも驚愕に値する。だが久賀達が驚いたのはそこではなかった。彼女が驚いたのはその先、そこに書かれていたのは……

“ 月光の神・ザビーに選ばれし人 久賀達 時雨 ”

## 第23話 謎（後書き）

と言う訳で第23話でした。正直やってしまった感が物凄い（汗）。一応今までもチヨロツと伏線を張ってきたつもりではありますしこの先の展開も一応考えてはいますが、皆さんからの反応が怖くて仕方ないです（^^;）。

とりあえず、皆さんからのご意見・ご感想をお待ちしております。それでは。

## 第24話 新たな敵（前書き）

ども皆さん、黒服です。今回ついに強敵・ウカワームの登場、ついでに劇場版から新たなキャラが登場します。

## 第24話 新たな敵

エリアX・地下

久賀達は呆然としていた。何故自分の名が35年も前のファイルに、それもザビーの資格者として書かれているのか。

「何であたしの名前が……まだ生まれてもない時に？」

久賀達はしばしそのファイルを見続ける、その時階段から人の下りてくる足音が聞こえてきた。そちらを見るとKホツパーがゼクトルパーを伴って降りて来る。久賀達は咄嗟にファイルを棚に戻した、なんとなくだがこれを何時までも持つているのは流石にまずいと思ったのだ。

「久賀達！」

「矢車……思ってたよりも早かったな。」

「ああ、そんな事よりもここは何だ？ それに天道達は？」

久賀達は矢車の言葉で漸く天道達がこの場から居なくなっている事に気付いた。どうやら少しファイルに見入り過ぎていたらしい。

「ここに関しては私にも分からないよ、天道達は……確かにここに……」

久賀達がそう言って周囲を見渡していると、物陰から天道達が出てきた。3人は急いで出口に向かっていく。

「ッ！？ あそこだ！」

「追えっ！」

Kホッパーの命令で天道達を追いかけるシャドウ隊員、階段で彼らを足止めする為に射撃が行われると、何時の間に持っていたのか加賀美が先程とは別のファイルを落とす。

「あっ!？」

急いでそれを拾おうとするが、射撃の余波でファイルに火が付いてしまった。加賀美は残念そうな顔を浮かべるがすぐに気持ちを切り替えたのか階段を駆け上って行く。シャドウ隊員達がそれを追いかけていった後を見送り、Kホッパーは変身を解除した。

「多分逃げられるだろうな……」

「ふう、まあ仕方が無い。それよりも、あの部屋は一体？」

「よくは分からないけど、あれもあの部屋に有った物だ。ちよつと見てみるか？」

そう言つて久賀達は燃えているファイルに近付いて行く。火が付いてから大分経つてしまったがまだ読める所はあるだろう、そう思つてファイルを拾おうとした時、出し抜けにファイルが何者かの足に踏まれた。

「ッ!？……三島……さん。」

久賀達が顔を上げてファイルを踏んでいる人物を見上げると、それは三島だった。あまりにも突然の出来事に、思わず久賀達は三島を呼び捨てにしそうになった。

「三島さん、そのファイルは？ それに、あの部屋は一体……」

「お前達には関係ない。」

矢車が三島にファイルと部屋に関して質問するが、彼は矢車の質問を切り捨てた。矢車はその答えに納得のいかなそうな顔をするが、すぐに気持ちを入れ替えて三島を横切つて階段を上つて行く。久賀達は依然として三島の顔を見つめていた。

「何をしている、お前もさっさと行け。」

「……はい。」

しばらく見つめていたが三島は完全なポーカーフェイスを貫いていた為、これ以上は何も分からないと考えて大人しく指示に従うことにした。

そして久賀達が地下から出ていった後、地下室の扉が重々しく閉じられた。

翌日・ZECT本部

久賀達は依然として悩んでいた、流石の彼女でも今回の事は訳が分からない事だらけなのである。

（やっぱり分かんねえなあ、何であたしの名前が35年も前にファイルに書いてあったんだ？ あそこでマスクドライダーシステムが考えられたんだろう事は分かるけど、それにしただって何であたしや加賀美の名前が？）

久賀達は朝からその事ばかり考えていた、だが一向に答えは見えてこない。もう一度あそこに行って詳しく資料を読み漁れば何か分か



るかもしれないのだが……

（無理だよなあ……多分三島がガードを固めちまつてるだろうし。）

昨日の今日で流石にノーガードと言う事は無いであろう、そう考えると再びあそこへ行く事は諦めざるを得ない。

「はあ、どうしたもんか……ん？」

久賀達がそんな事を考えて溜息を吐くと、いつの間にか食堂に来ていた。そしてそこには見慣れた人物二人がいることに気付く。

「よお、久賀たちじゃないか。どうしたこんな所で？」

「別にどうってことも無いんだけどよ、お前らは随分と楽しそうだな。」

そう言った久賀達の視線の先にはトランプを片手に余裕の笑みを浮かべている大和と、対照的に引き攣った顔をしている頭にバンダナを巻いた男性の姿があった。

「久しぶりだな、織田。」

「おう、そんな事よりもお前から大和に一言言っただけよ！ イカサマはすんなって！」

この男性の名は織田<sup>おだ</sup> 秀成<sup>ひでなり</sup>、特殊遊撃隊の隊長である。『遊撃隊』の名の通りシャドウとは異なり、本部からの指示もなしに独自に動くことが可能な部隊であるが、代わりにシャドウほど高い権限は無い部隊なのだ。

二人はお互いに戦友同士である為、よくこの様にポーカーなどをして  
いる光景が目撃されるのである。

「おいおい、たかが5連勝したくらいでイカサマ師呼ばわりは無い  
んじゃないか？」

「じゃあなんでお前の手札はさつきから良いのが当たりまくるんだ  
よ！？ どう考えたっておかしいだろうが！」

まあこのように織田が大和にカモられているのもはや見慣れた光  
景ではあるので、久賀達は特に何も言わずにその場を去ろうとした。  
だがそこで大和が声をかけてくる。

「どうだ、お前も一口。ん？」

そうやって大和は久賀達をポーカーに誘う、特にこの時は用事も無  
かった久賀達は少しだけ考えてから参加することにした。

「それにしても流石に景品が欲しくなってきたなあ。」

「何だよいきなり？」

「負けた奴が奢るとかか？」

大和の言葉に久賀達は特に興味も無いと言った風に答える。大和は  
それにニヤリと笑みを浮かべる。

「そうだな・・・俺が勝ったら久賀達とデート1回ってのはどう  
だ？」

「あつ！？ ずりいぞ大和！ それなら俺だって・・・」

織田がそう言おうとしたがすぐに口を閉じる、久賀達の視線がかな  
り冷たいモノだったからだ。

「じよ、冗談だよ・・・冗談・・・」  
「・・・別にあたしは構わないよ・・・」

久賀達の言葉に二人はホツと一息つく。

「そうかそうか、お前ならそう言ってくれると思ってたよ。」

そう言いつつ大和は二人からは見えないところで袖に隠してあったカードを手札に加える、完全なイカサマである。

「ようし、そうとくりゃ負けらんねえ・・・ヨッシャ！ どうだよフルハウスだぜ！」

織田はそう言っ得意げに自身の手札を見せるが・・・

「悪いな、フォーカードだ。」

大和の手札にすぐに落胆する。

「はっはっはっ、さあてお前の手札は？」  
「・・・」

勝ち誇った笑みを浮かべて久賀達に手札を聞く大和、久賀達がそれに何かを言おうとすると、突然どこからともなくザビーゼクターが飛んでくる。

「うおっ！？ 出た、これがザビーゼクターか・・・」

「何だ、ワームか？」

《ーーーーー！》

どうやらワームが現れたらしい、久賀達は手札を伏せた状態でテーブルに置くと即座にその場を立ち去ろうとする。

去り際に一度立ち止まって大和の方を向くと・・・

「デートは夢のまた夢だな。」

とだけ言って去って行った。

「おいおい、ただのゲームだぞ。あいつもジョークが通じない奴だな。」

「さて、あいつの手札は、っとおおおおおッ!？」

大和がイカサマがバレたと思ってやれやれと首を振っていると、織田が勝手に久賀達の手札を見る。ひよつとしたら大和に嵌められて悲惨な手札になっているのではと考えた彼は、彼女の手札を見て驚愕の叫び声を上げた。

「? どうした織田、ッ!? これは・・・」

そして織田の様子を訝しく思った大和が、彼の持っている久賀達の手札を見る。するとそこには・・・

(ろ、ロイヤルストレートフラッシュだと・・・)

そこにはポーカーの中でも最強の手札、スペードの10からAまでが揃った『ロイヤルストレートフラッシュ』があった。

それを見て思わず大和は久賀達が去って行った方を見る。

(類稀な戦闘スキル、どんな状況でも的確に行動できる判断力、そしてここぞと言う時の勝負強さ・・・)

大和は久賀達に対して常々思っていた事を頭に浮かべる。普段はどこか雑な女だが、ここぞと言う時は彼女ほど頼れる存在もない。

「・・・やはりあいつは、ZECTの切り札だな。」

大和は久賀達をそう判断した、だが織田がそれに待ったをかける。

「でもあいつ、ただもんじゃないぜ。」

「どういう意味だ？」

「心の中にヤバイもんを飼ってるって意味だ。あいつの瞳には闇が見える、今はそれが也を潜めちやいるが、もしそいつが暴れでもしたらどうなることか・・・」

織田の言葉に大和は考え込む、彼は本能的な直感力に優れている。その直感力が久賀達の中に眠っているモノに気付いたのだろう。

大和は織田の言葉に、静かに押し黙ってしまった。

街中・歩道橋近く

ザビーゼクターの案内で街中を進んでいた久賀達は、歩道橋の近くに倒れている影山と風間、そして喪服の様な黒い服を着た一人の女性の姿を見つけた。女性は倒れている二人に近付いて口を開く。

「ライダーの力は、この程度か？」

「何だと!？」

女性の口ぶりから恐らく彼女がワームである事を確信する久賀達、そして女性の言葉に憤る影山の近くに久賀達は近寄って行った。

「く、久賀達さん・・・」

「よお、随分と派手にやられたもんだな。」

影山は満身創痍とは言われないがかなりのダメージを受けたのだろう、まともに立てないでいる。そして久賀達の言葉に彼は顔を俯かせた。

「すみません・・・負けてしまいました。」

「らしいな。ま、とりあえず休んでろ、後はあたしが何とかするか  
ら。」

「はい・・・」

力無く返事をして顔を俯かせている影山の頭に、久賀達は軽く手を乗せる。

「久賀達さん？」

「なぐにしょげてるんだよ。安心しろ、次は負けたりしない様に、  
あたしがきつちり鍛えなおしてやるから。」

そう言つて久賀達は軽く微笑むと、次に風間に近付いて行く。思えば随分と久しぶりに彼の顔を見た。

「久しぶりだな風間、元気してたか？」

「元気に見えますか？ この状態が・・・」

「全く見えないな。最近どうだよ？ なんかあんまり噂とか聞か  
ねえけど。」

特に久賀達自身メイク関係に興味があつた訳ではないのだが、あれから風間がどうなったのが気になつて雑誌などを立ち読みした事が何度かある。その際に次第に風間の話題が少なくなつていった事に、大分彼が参つていないかと思つていた。

「そんなに寂しいんだつたら、試しに会いに行つてみたらどうだ？  
もしかしたら奇跡でも起こつてお前の事を思い出すかもだぜ。」

「ふふっ・・・いいんですよ、もう・・・」

「・・・ま、お前がいいんだつたら別に構いやしないけどな。精々頑張れよ。」

そう言つて久賀達は風間の肩を軽く叩くと、今度は女性の方を向いた。女性は終始無表情なのか笑つているのか微妙な顔をしている、それがなんとも不気味だった。

「お前か、ウチの同僚を可愛がつてくれたのは。」

「久賀達 時雨・・・またの名をザビー・・・」

久賀達はワームが自分の名前を言い当て、さらにライダーである事も指摘した事に一瞬だけ驚く。だがすぐに平常を取り戻すと、不敵な笑みを浮かべる。

「ほお、ワームに名前を覚えてもらえてるとは・・・光栄だな。」

「お前にも、極上のレクイエムを歌つてやろう。」

そう言つと女性はその姿を、白く体中に棘の生えた異形・・・右手だけが異様に大きいシオマネキの様なワーム、ウカワームになった。

それを見て久賀達もザビーゼクターを呼び出す。

「レクイエムはむしろ・・・お前の方に必要なんじゃないのか？  
変身！」

《Henshin》

久賀達はザビーゼクターをライダーブレスにセットし、ザビーに変身する。

そしてしばらくお互いに睨みあった後・・・

「ハッ！」

『フッ！』

ザビーとワームの戦いは始まった。



## 第24話 新たな敵（後書き）

と言う訳で第24話でした。今回は戦闘なしで次回ウカワームと壮絶な戦いを繰り広げることになります。何気におっかない女同士の戦い・・・想像すると何やら怖いモノがありますね（^^;）

あと今回遂に織田が登場しました、近い内にヘラクスとケタロスの雄姿もお見せできると思います。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

## 第25話 募る疑念

歩道橋

現在、歩道橋の上では激しい攻防が行われていた。

「フツ、ハアツ！」

ザビーがマスクドフォームのパワーを生かしてウカワームに対してパンチを放ち、ワームがそれに対して巨大な右手によるボディープローを放ってくる。

何時に無く長く続く攻防、しかもそれは単に相手がしぶといからではない。今までにないくらい強い相手との戦いになっているのだ、知らず知らずの内に仮面の下で久賀達の顔は笑みを作っていた。

「まさか、ここまで強いワームがいるなんてな。」

『お前もなかなかやるな、まさかこれほど強い人間がいるとは思わなかったぞ。』

「ハツ、そんじゃあもつと楽しませてやるよ。キャストオフ！」

《Cast off》

ザビーがゼクターを変形させるとマスクドアーマーが弾け飛び、ザビーはライダーフォームとなる。

《Change Wasp》

「ハツ！」

そして今度は先程までとは異なり、軽快なフットワークでウカワー

ムに立ち向かっていく。

ザビーの連続パンチを凌いだワームが右腕を振るってザビーを斬り裂こうとし、ワームの腕をかわしたザビーがワームに対して鋭いキックを放つ。両者の戦いは正に一進一退だった。

「久賀達さん・・・すげえ、あのワーム相手に互角に戦ってる！でも・・・」

ザビーとワームの戦いを見ていた影山は、改めて久賀達の実力を目の当たりにして驚愕する。だが同時に今の久賀達から何時もとどこか違うモノを感じていた。それが何であるのかは分からない、だがこのままでは何か不味いのではないかと言う気がしてきた。

このまま久賀達を戦わせると、何かとんでもない事が起こってしまう様な・・・

「ハアアッ！」

『又ウン！』

影山がどうにかしてザビーの戦いを止めようと考えていると、先に戦いが終了した。ザビーの放った左ストレートと、ワームの放った右手による斬撃が決まりお互いに弾き飛ばされたのだ。

「ぐうっ・・・」

『うう・・・』

ザビーは弾き飛ばされた際の衝撃で変身が解け、ワームも人間の姿になった。そしてどちらからともなく立ち上がる。

「くっそ、ワームにしちゃあ本当に骨がありやがるな・・・」  
「……今日はここまでにしておこう。」

ワームだった女性はそう言ってその場から立ち去って行く。久賀達も追いかけたかったが正直体は既に大分参っている、下手に追いかけるのは止めた方が得策だろう。

久賀達がそう考えていると、女性が振り返ってきた。

「言い忘れるところだった。私の名前は間宮 麗奈。死に行く時、その名を呼ぶがいい。美しいレクイエムで、地獄へ誘ってやる。」

そう言って不敵な笑みを浮かべると、女性・・・間宮は踵を返して立ち去って行った。

#### 翌日・公園

次の日久賀達は適当に公園を散歩していた。別にサボっている訳ではなく、少し自分の中で様々な事に整理を付ける為にあえて休暇を貰ったのだ。ちなみに彼女の部下も一応非番と言う事になってはいる、勿論有事の際には即座に召集がかけられることになっているが。

「あのワーム、確か間宮って言ってたな。今まであんなワームは出てこなかった・・・あいつの存在がワームが次の段階に入ったことの証ってことか。」

それはつまり今後の戦いがさらに厳しくなることを意味していた。その事を考えて久賀達はこれからの部下の訓練にさらに力を入れる必要がある事を考えて、先日のワームとの戦いを思い出す。

「そう言えば・・・どうしちまったんだろうな、あたし。」

そして考えるのはあの戦いの最中の自分自身、あの時ハッキリとはしなかったが彼女は戦いを楽しんでいた。いや、それは正確ではない。厳密に言えばあの時久賀達は戦う事と言うよりも・・・

相手を攻撃する事を楽しんでいた。

影山が言うには先日の自分は何時もと違ったらしい。傍から見てもうなのだからあの時自分は普通ではなかったのだろう。だが一体どうして普通では無くなったのか、これと言って思い当たることが無い為久賀達は頭を抱えることになる。

そして、もう一つ彼女の頭を悩ませた事があった。それは・・・

「加賀美の奴、いくらなんでもやり過ぎだろう。」

久賀達がワームと戦闘する前後で、加賀美が田所を装って本部に入ろうとしたらしいのである。もっともそれはあっさりとバレて、本部とは関係のない場所に連れていかれた揚句田所の手によって一先ず不問と言う事になったらしいが。

ちなみに加賀美は何度も本部の訓練場に、久賀達に訓練を付けてもらいに来たりした事があった。だがそれはいずれの場合も彼女の部下によって送り迎えされての事で、彼自身は本部への行き方を知らなかったのだ。

その際の車両は運転席を覗いて完全に外部から隔絶された車両だったので、加賀美は車の外の景色を見れてはいない。車に乗って降り

たらそこはもう本部だったのである。

「まったく、田所さんに迷惑かけて。」

久賀達はそんな事を考えながら近くのベンチに腰掛けた。

組織の一員としての責任感には人一倍厳しく自分にも厳しい田所の事だ、恐らくこの事に責任を感じて辞表などを出してしまうかもしれない。

（もしそうなら加賀美の奴思いつきりド突きまくってやる。）

久賀達がそんな事を考えていると、彼女の隣に一人の男性が腰かけた。眼鏡をかけた壮年の男性である。

久賀達は特に男性の事を気に止めてはいなかったが、男性の方が彼女に声をかけてきた。

「どうも・・・お嬢さん。」

「？ はあ・・・どうも。」

随分と馴れ馴れしいと言うか、何故彼はあつた事も無い自分に突然声をかけてきたのだろうと久賀達は考え込む。そんな事を考えていると、次に彼の口から出てきたのは衝撃的な言葉だった。

「4年前の事は、本当に悲しい出来事だったね。」

「ッ!?!?!?」

久賀達は驚きに目を見開いて男性を見る。渋谷隕石が落ちてきたのは7年前、4年前には特に大きな事件はなかったはずだ。だが久我

たちにとっては違う。

4年前・・・それは今の久賀達の始まりであり、それ以前の久賀達の終わりを意味している。何故彼が4年前の事を知っているのか？

「あなた・・・一体何者だ？ 4年前の何を知っている？ どうしてあたしがそれに関係していたと・・・」

「あれは・・・悲しい出来事だった。だが同時に必要なことでもあった。」

「~~~~ツ！」

ついで男性が口にした言葉に、思わず久賀達は立ち上がってゼクトガンを男性に向ける。嘗て起こったアレが必要な事だった・・・それは久賀達にとって許容できるものではない。あれの所為で久賀達はそれまでの全てを失った。

家族はおろか、それまでの自分自身すら・・・

「言えっ！ お前は何なんだ！ 必要だったって一体どういう事だ！？」

久賀達は怒声を上げながら男性にそう尋ねるが、彼は特に慌てることも無く立ち上がるとまっすぐと彼女の目を見つめてくる。そして久賀達の肩に手を置いてきた。

「しかし・・・これだけは覚えていてほしい。彼女は確かに君を愛していた。できれば本当はもっと穏やかに人生を送って欲しいと、彼女・・・雪乃君は願っていたよ。」

「ッ?! 雪乃・・・母さんの名前、お前・・・一体・・・」

男性の言葉に久賀達は呆然としながらゼクトガンを下す。彼女が呆然としている中、男性はその場から踵を返して去って行くこととした。だが途中で止まって振り返ると、再び彼女に話しかける。

「あ、そうそう・・・息子が世話になっているそうだねえ。これからも、あいつをよろしく頼むよ。」

それだけ言って男性は今度こそその場から去って行く。

久賀達はそんな男性の後姿を、ただ呆然と見続ける事しか出来なかった。

公園近く

久賀達が入って行った公園の前に、三島が車を停めてある人物を待っていた。三島が待っていると、公園から一人の男性・・・先程久賀達と会っていた壮年の男性、加賀美 陸が出て来て、三島が停めている車の後部座席に座る。陸が座つたのを確認して、三島は車を走らせる。

「どちらへ？」

「君は、獅子の子育てを・・・知っているかね？」

「は？」

陸の表の顔は警視総監である。今はその警視総監としての仕事を終えてZECTの本部へと戻って行く途中だったのだが、いきなり陸が車を停める様に行つて来たのだ。

そして陸は車から降りると一人公園へと入って行ってしまふ。三島



は陸が何をしていたのかを尋ねたが、彼から帰って来たのは突拍子もない質問だった。その質問に三島は首を傾げる。

「獅子は、己の子を谷底につき落とし、自力で這いあがって来た者のみを育て上げると言う。では……もし親が子と共に谷底に身投げしたら……残された子供は一体どうするのだろうか……」

陸の口にする言葉の意味を三島も考えるが、何を意味しているのかは全くわからない。そんな三島を余所に、陸は言葉を続ける。

「親と共に朽ち果ててしまえば、所詮そこまでの器ということだろう。だがしかし、親の屍を踏み越えて生き抜いたモノはどうだろう。頼るべきモノが何もない中で必死に生き抜き、立派に育ったモノこそ、真の王者としての器を持っているとは、思わんかね？」

「はあ……」

話を振られた三島は、やはり訳が分からず生返事をするしかなかった。

「……彼女の娘も、ずいぶん立派に育ってくれたみたいだ。後は、時が来れば……」

そう呟いた陸の言葉は、考えるのを止めて運転に集中しだした三島の耳に届く事はなかった。

## 第25話 募る疑念（後書き）

という訳で第25話でした。今回久賀達の謎がさらに強くなりました。今後も徐々に彼女の過去などが明らかにされていきますのでどうかお楽しみに。

それでは。

## 第26話 帰って来たゴン(前書き)

どうも、黒服です。今回は風間とゴンのコンビ復活の話です。

## 第26話 帰って来たゴン

ZECT本部

久賀達はこの日本部の訓練施設にて、部下と共に訓練をしていた。と言っても久賀達自身はほとんど上の空と言った感じだったのだが。

「隊長？」

「ん？ ああ……」

「隊長……隊長ッ！」

「んあつ!?! な、何だ？」

播磨が数回呼んでようやく反応を示す久賀達、その様子に播磨だけでなく戸高や神田なども久賀達を心配して寄ってきた。

「隊長、今日は一体どうしたんです？ 何時になくボーっとしちゃって。」

「訓練中もほとんど上の空でしたし。」

「何か悩みでもあるんですか？」

彼らの心配を余所に、久賀達は未だに考えに没頭してしまふ。考えるのは先日男性に言われた事。

彼自身も一体何なのか非常に気になるが、それ以上に気になるのは彼の言っていた言葉。その事がずっと頭にへばりついて離れなかったのだ。

(必要だった？ あれがか？ 一体どういう意味だ?)

「隊長、隊長つてば!」

「ッ!? ああ、悪い・・・何だ?」

その時再び播磨が久賀達に声をかける。

「本当に大丈夫ですか、隊長?」

「なんでしたら今日も休んだらどうです? 隊長何時も無茶するんですから。」

「後の事は俺達に任せてください。」

「お前ら・・・悪い、それじゃあ・・・」

そう言つて久賀達は訓練施設から去つて行く、戸高らはそんな久賀達の後姿を心配そうな顔で見送つていた。

B i s t r o l l a S a l l e

あれから久賀達は気持ちを切り替えて持ち直そうと街をぶらぶらとしていたが、どうにもやはりあの事を考えてしまう。

どうしたものかと考えていると、いつの間にかS a l l eの前に来ている事に気付く。ちょうど腹も減つてきていたのでちょっとここで食べて行こうかと扉に手をかけると・・・

「あっ!」

「ん?」

同時にそこに一人の少女がやってきた。それは久賀達も良く知る少女、ゴンこと高山 百合子だった。久賀達は久しぶりに出会ったゴンに声をかけようとしたが、そこである事を思い出す。

(そついやコイツ、記憶をなくしてた間の記憶が無いんだよな。だったらあたしの事も覚えちゃいないか・・・)

久賀達がゴンと出会ったのは、彼女が記憶を失った後の事である。つまり今のゴンこと百合子は久賀達と面識が無いと言う事になる。

その事を少し寂しく思いながらも、久賀達はゴンに構わず扉を開けようとする。すると・・・

「姉ちゃん！ 久しぶり！」

「久しぶり？ 姉ちゃん？・・・ッ!? おまつ！ 思い出したのか?!」

久賀達の言葉にゴンは笑顔で頷く、久賀達はそれに驚いた様な顔になった。

「はっ・・・こりゃ奇跡だな、まさか記憶を取り戻すだなんて・・・」

「ねえ姉ちゃん、あたし大介に会いたい。」

「風間か？ あいつなら一昨日会ったけど・・・」

久賀達の言葉にゴンは彼女に風間の居場所を聞く。だが別に久賀達は風間の居場所を知っている訳ではなかったので、それに答える事は出来ない。

「とりあえず入るか？ 何時までもこうしてるのもなんだし。」

「うん。」

そう言って久賀達は店の中に入って行く。店には何時もの如くと言うか、店員のひよりの他に天道もいた。

「お前は……それに、ゴン……」

「お前ら……」

「よお。」

「大介は？」

ひよりと天道は珍しい組み合わせの二人に少し驚き、久賀達はそんな二人に軽く手を上げる。そしてゴンは店に入るなり店内を見回すと、風間について聞いた。

「お前……記憶を取り戻して、家に帰ったんじゃないのか？」

「大介何処にいるか知らない？」

「……そう言えば最近顔を見てないな、結構なことだ。」

ゴンはひよりの質問には答えず依然として風間の居場所を尋ねる。そのゴンと久賀達の様子から大体の事情を察した天道が、風間は最近Saalieに来ていない事を伝える。それにゴンは残念そうな顔をする。

「そう……」

ゴンは一度顔を俯かせると、次の瞬間には久賀達らの驚くような事を口にする。

「ねえ、この店で、バイトさせてくれないかな？　お願い。」

「バイトって？」

「10年早えぞ。」

ゴンはひよりに店でバイトさせてくれと言う、その言葉にひよりは怪訝な顔になり、久賀達は呆れた顔をした。いくらなんでも8歳の

少女がバイトなど早過ぎる、お手伝いが精々だろう。

「どういう事だ、何があった？」

天道がゴンに事情を聞こうとする、久賀達も何故ゴンがいきなりバイトなどと言い出したのか気になったのでゴンの話を聞こうとしたのだが、そこに乱入してくる者がいた。突然何者かが扉を開けて入ってくる、やって来たのは神代だった。

「大変だあ……じいやが……じいやがあ……」

「どうした?!」

珍しく狼狽した様子の神代は店に入るなり柱に手を突いてしきりに『じいやが』と呟いていた。その様子に尋常ではないものを感じ取った天道も、神代に焦った様子で事情を尋ねる。もとより天道は神代の執事の老人を尊敬している、その老人の危機となれば焦りもするのだろう。

「……とうとう無理が祟ってポツクリ逝ったか？」

どさくさに紛れてこっそり口にした為、久賀達の言葉に突っ込む者は誰もいなかった。

神代邸

あの後久賀達は天道について神代の家に向かった。あの場においても仕方なかったし、なにより執事がどうなったのか少し気になる。

そして神代邸について、神代の案内で執事の老人の部屋に行くと、



そこには布団をかぶって寝ている執事の姿があった。

天道は執事に近付くと、彼を抱き起こして腰のところにくっしおんを敷く。そしてお粥の入った器を持ってレンゲで彼に食べさせた。

「どうぞ、食べてください。」

「……すみません、私なんかの為に……」

「で？ どうなんだよ、具合は？」

神代はそう言つて執事の容体を尋ねる。だが久賀達にはこれが何の症状なのかすぐに分かった。疲れが溜まっていると言つた風な顔、医者に見せるまでも無く彼の身の回りについて知っている者なら誰でも分かる。

「過労に決まつてんだろ、見りや分かるよこんなの。大方お前が何時も苦勞ばっかかけてるからだろ。」

久賀達はそう言つて執事の症状を一発で言い当てる。もとよりこの執事もかなりの高齢である、その彼が一人でこの世間知らずなお坊ちゃんの世話を見ているのだ。何時体調を崩しても不思議ではない。

「ち、違いますよ！ 私が至らないばかりに……」

執事はそう言つて久賀達の言葉を否定するが、その様子は無理をしているのが丸分かりだった。何しろ部屋の中には内職だろう造花が複数あつたのだ。久賀達と執事以外は知らない事だが神代の家は既に没落貴族となっている、生計を立てる為に彼も必死なのだろう。

「あなたは人類の宝だ、早く良くなつてください。料理なら、俺が何時でも作りに来ますから。」

そう言つて天道は執事に再びお粥を食べさせる。その時神代が天道に声をかける。

「お前の手は借りん。じいやの面倒は、俺が見る。」

「・・・出来るのか、お前に？」

「寧ろ余計に悪くしたりしないだろうな？」

「誰に向かつて言っている、俺は看病においても頂点に立つ男だぞ。」

「・・・頼もしい事で。」

神代の自信たつぷりの言葉に、久賀達の皮肉が飛ぶ。その時、ゴンが神代に近付いて行く。

「ねえ、じゃああたしを雇つてよ。ちゃんとお手伝いするから。」

「お前・・・」

「悪い事言わないからやめといた方が・・・」

「いいだろう。」

どうやらゴンはここならそれなりにいいバイト代が貰えると思ひ込んでいたようだ。だがこの家の事情を知っている久賀達はそれを止めさせようとする、この家で働いたってまともにバイト代など出る訳が無い。

「何があつたかは知らないが、家に帰つた方がいい。きっとお母さんが心配してる。」

「やだ！ 大介に会うまでは帰らない。その為にはお金があるの。」  
「どういふ事だ？」

天道がゴンに事情を尋ねると、ゴンは顔を俯かせる。とはいえ久賀

達には大体想像はついていて、最近では評判が少し下がってきたが風間は名のあるメイクアップアーティスト、多忙だろう彼に会う為に考えた結果が客として彼に会う事だったのだろう。

「心配するな、この子は責任を持って俺が預かる。俺は子守においても頂点に立つ男だ。」

「お前子守したことあんのか？」

そうやってゴンの頭を撫でる神代。するとその時執事が咳き込みだしたのでゴンが彼の背中を撫でる、するとそのゴンの頭を神代が撫で始めた。どうも頭を撫でる事が子守とでも思っているらしい。

(・・・何だこの光景・・・)

久賀達の目の前では、ゴンが執事の背中を撫で、そのゴンの頭を神代が撫でると言うなんとも奇妙な光景が繰り広げられていた。

翌日・ZECT本部

次の日久賀達は、何とか持ち直して本部に来ていた。良くも悪くもSaileeに行った事が気分転換になっただけらしい。

(にしてもゴンの奴、大丈夫かなあ。神代んここで働いても給料なんか出ないぞきつと。)

久賀達はそんな事を考えながら本部内の廊下を歩いている。あの家の経済を事実上担っていた執事が倒れた以上、恐らく神代自身の耳にもあの家が没落したことが何らかの形で伝わるかもしれない。そう考えるとゴンと神代、二重の意味で心配だった。そして・・・

(こいつもか・・・)

久賀達が持っているのは今日の朝刊、そこには風間が指名手配されている事が書かれていた。

一体何がどうしてこんなことになったのか分からないが、現在風間は追われる身となっている。

(あいつも馬鹿っちゃ馬鹿だけど、人殺しするような奴じゃない筈なんだよなあ。)

「おい、久賀達!」

久賀達がそんな事を考えていると、後ろから声をかけられる。彼女が後ろを振り向くと、そこには大和と織田の姿が。

「何だ、どうしたんだお前ら?」

「へっへっ、見るよこれ!」

そう言つて織田が右手を上げると、その手首には彼女も見慣れたライダーブレスがあった。

「ライダーブレス・・・つてことは、第4世代が?」

「ああ、ついさつき完成してな。」

久賀達の言葉を大和が肯定する。これでZECTに所属しているライダーは、見習いの加賀美を含めて総勢6人。何とも壮観である。

「んで? 単に見せびらかしに来たつてわけでもないだろ?」

「察しがいいな。ライダーとして長く戦つてるお前に、ちよつと模

擬戦の相手をしてもらおうと思っただけだ。」

久賀達の質問に答えた大和の言葉は、概ね久賀達の予想した通りのものだった。久賀達としても別に模擬戦につき会うことはやぶさかではなかったのだが……

「別に構わないけど、それよりもっといい相手がいそうだな。」

「いい相手？　なんだ、矢車か？　それとも影山か？」

怪訝な顔をする織田に対し、久賀達は彼らの後ろを顎でしゃくって見せる。彼らが後ろを向くと、そこにはザビーゼクターの他に二つのカブティックゼクター、ヘラクレスオオカブトとケンタウルスオオカブトをモチーフにしたゼクターが宙を飛んでいた。

「ワームのお出ました、行くぞ。」

久賀達の言葉に、二人は不敵な笑みをしてゼクターについて行った。

### 駐車場

ゼクターに導かれるままに3人が向かったのは、とあるビルの近くにある駐車場であった。そこで今正に一人の男性が1体の成虫体のワーム……鉤状の爪のついた右腕を持つダニの様な黒いワーム、アキヤリナワーム・ノワールに襲われそうになっている。

3体のゼクターが一斉に成虫体に体当たりして、それにワームが怯んでいる隙に襲われそうになっていた男性は逃げのびた。

そして同時に久賀達ら3人が駐車場に入ると、周囲から複数のサナ

ギ体が現れる。

「お前らはサナギの相手をしてな。いきなり成虫体が相手つてのも酷だろう。」

「誰に向かつて言つてやがるんだ！」

「むしろお前が倒すよりも早くにサナギ共を全滅させて、お前と一緒にワームを袋にしてやるよ。」

「ハッ、やってみな。」

久賀達がそう言つて二人を挑発すると同時に、成虫体に体当たりしていたゼクター達が各々の下にやってくる。ザビーゼクターは久賀達の手にとまり、カブティックゼクター達は大和と織田、それぞれのライダープレスに自分でとまる。

「『変身！』」

《《Henshin》》

《《Change Beetle》》

3人がそれぞれゼクターをプレスにセットすると、ゼクターから電子音声が発せられ彼女達をライダーに変身させる。

久賀達はザビーのマスクドフォームに、そして大和と織田の二人は、第3世代以降の特徴であるマスクドフォームを飛ばしてのライダーフォームになった。

大和は銅色の装甲に大きな突起の付いた右肩を持つケンタウルスオオカブトの様な頭部をしたライダー、仮面ライダーケタロスに。織田は装甲が銀色であることと頭部がヘラクレスオオカブトを模したものになっている以外はケタロスと同じライダー、仮面ライダーヘラクスに変身する。

3人は変身すると、複数のサナギ体に突っ込んでいった。

「フツ、ハツ、セイッ！」

ザビーがマスクドのパワーと防御力を生かしてサナギ体を蹴散らしていき、

「フンツ、ハアツ、デリヤアッ！」

ケタロスは持ち前のパワーとカブトの持つ物と同型のゼクトクナイガン・クナイモードでサナギ体を薙ぎ払い、

「ドイツ、ラアツ、オリヤア！」

ヘラクスはやはりカブトと同型のゼクトクナイガン・アックスモードで敵を切り裂いて行く。

「キャストオフ。」

《Cast off Change Wasp》

それでもやはりライダーとしての経験ではザビーが頭一つ抜きんできていたのか、いち早くサナギ体の群れから抜け出ると即座にキャストオフして奥にいた成虫体に攻撃を仕掛ける。

「ハッ！」

ザビーのハイキックがワームに決まり、吹き飛ばされるワーム。ワームはその場で体勢を立て直すとクロックアップでその場から逃げだそうとした。

「逃がすかよ、クロックアップ。」

《Clock up》

ザビーがクロックアップしてワームを追いかけると同時に、ケタロスとヘラクスはサナギ達にトドメを刺し始めた。

「ライダービート！」

《Rider Beat》

「オリヤアアアアアツ！」

ヘラクスは右腕のカプティックゼクターを180°回転させる。するとゼクターから電子音声が流れて、アックスモードのゼクトクナイガンを持つ右腕がタキオン粒子で強化される。その強化された右腕でクナイガンを振るって行き、瞬く間にヘラクスの周囲にいたサナギ体は全滅した。

一方のケタロスの方はと言うと・・・

「ライダービート。」

《Rider Beat》

「フツ！」

こちらもヘラクスと同様に必殺技のライダービートを発動。このライダービートは第4世代共通の技で、パンチ力ではなく腕力を強化するのが特徴である。その為同じ技名でも使用者によってそのままパンチ力を上げたり、手に持った武器による攻撃の威力を上げたりなど使い方に違いが生まれる事がある。

ケタロスは強化された腕力でクナイモードのクナイガンによる威力



を上昇させ、その状態で次々とサナギ体を切り裂いて行った。

二人がサナギ体を全滅させた頃、ザビーの方も決着がつくところだった。

「フンッ！」

ザビーはワームを壁に向かって蹴り飛ばし、さらに右足でワームを壁に押さえつける。ワームは脱出しようともがくが、ザビーがそれを許さない。ザビーはワームを抑えつけた状態でゼクター上部のスイッチに手をかける。

「ライダーステイング。」

《R i d e r S t i n g》

ゼクターから電子音声がすると同時にゼクターニードルにタキオン粒子がチャージアップされていく。そして十分に粒子がチャージされた頃……

「フッ！」

ザビーは右足を話すと同時に左足でワームを蹴り飛ばし、その勢いのままワームに対してライダーステイングを決める。

「ハアッ！」

ザビーに蹴り飛ばされた直後で体勢を立て直せていないワームに、ザビーの必殺の一撃が容赦なく決まる。ワームは爆発し、それと同時にザビーのクロックアップも解除された。

「よう、お疲れ。」

「ああ、お前らもな。」

「ちつくしよう、結局いいところはお前に持ってかれちゃった。」

ザビーは変身を解除しながら二人に近付いて行き、それにならって二人も変身を解除する。大和は素直に久賀達を労い、織田は成虫体を久賀達にとられた事を悔しがっていた。

「ま、そう焦んなよ。チャンスはいくらでもあるさ。」

「くっそう、次は絶対俺が仕留めてやる。」

「ま、精々頑張んな。そんじゃ帰るか。」

久賀達がそう言って踵を返すと、二人もそれについて行った。

## 第26話 帰って来たゴン（後書き）

と言う訳で第26話でした。今回ゴンが復活したただけでなく、ケタロスとヘラクレスも登場させました。これで残るはコーカサスのみ、黄金のライダーの登場の時をお楽しみに。

それでは。

## 第27話 コンビ復活

街中

大和達と共にワームを倒した後、久賀達は街中を歩いていた。

「さうで、これからどうするよ？」

「どっかに飯食いに行かねえか？」

「悪いが俺はパスだ。まだ仕事が残ってるんでな。」

「仕事熱心だ事で・・・」

久賀達の提案に織田が賛成し大和が断っている時、突然久賀達の携帯に着信が入った。相手は岬らしい。

「もしもし、あたしだ。」

「久賀達さんですか、実はあなたに伝えたい事が・・・」

「何だよ、お前があたしに伝えたい事があるなんて珍しいじゃないか。」

「実は・・・」

岬の口から伝えられたのは、彼女にとってもそれなりに衝撃的な内容だった。

「何？・・・風間 大介が？」

「私もこれから確かめに行くところです。すでに天道君や加賀美君にも伝えてあります、久賀達さんも来てください。場所は・・・」

なおも先を続けようとする岬の言葉を、久賀達は止めさせる。今しがた聞いたことは久賀達にもおいそれと理解できるモノではない。

「おいおいおい、ちょっと待て。それマジなのか？ なんかの間違  
いとかじゃ・・・」

「それを確かめる為にも、久賀達さんも来てください。お願いしま  
す。」

「ホントか？ あの風間 大介が・・・」

久賀達が岬から聞いた内容、それは・・・

病院・死体安置所

死体を保管しておく冷凍庫、そこには左の首元に大きな傷がついた  
風間 大介の死体があった。

「まさか・・・本当に？ あの、風間 大介が・・・」

加賀美が呆然としながら呟く。彼と風間は決してそこまで親しい間  
柄ではなかった。だが同じライダーとして、それなりに仲間意識は  
持っていた筈だ。

天道が脈を確かめるように風間の頸動脈に手を付ける、そこに岬の  
手が重なった。

「ZECTにより・・・死亡が確認されているわ。残念だけ  
ど……間違いない。」

その岬の言葉に、加賀美は肩を落とす。久賀達も少なからず彼の死  
を残念だと思っているのだ。彼は馬鹿かもしれないが、少なくとも  
悪い奴ではなかった。

加賀美は肩を落とした後、壁を殴り付ける。抑えられない怒りを吐き出すように。

「犯人はワームよ……そしてワームは風間 大介に擬態している。……現在指名手配中の風間 大介の目撃情報が、警察に何件も届いているわ。」

「ああ……今生きている風間 大介はワームだ。」

天道の言葉に、加賀美は怒りに震えた。

「……許せない、こんなこと……絶対に！」

「任せておけ、全てのワームは俺が倒す。」

そう言つて加賀美と神代は風間に擬態しているワームを倒す事を決意する（もっとも神代はいつも通りだが）。

そんな中、久賀達だけは一人考えに没頭していた。

（おかしい……なんか引つかかるなあ。風間がワームに殺されたのは……まあまだいいとして、それよりも前に起こった風間の殺しつてのはなんなんだ？）

久賀達はそこが腑に落ちなかった。基本ワームの行動は人間に擬態し、そして他の人間に近付いてその人間を殺して他のワームに擬態させる事である。だが、今回の事はどうにもおかしかった。

（何で『普通』の殺し方なんだ？）

今回のワームの事件で気になっていたのはそれである。風間の事を

隅から隅まで知っている訳ではないが、彼が人殺しなんてする訳が無い。となれば指名手配される原因の殺しをしたのはワームの方だろう。

では、何故ワームは普通に人を殺したのか？ 通常ワームが人を殺す場合、それは人間に出来る手段を超越したモノが多い。であるにもかかわらず今回殺された人は首を絞められると言うごく普通の方法で殺されている。

(こいつはちょっと裏がありそうだな・・・)

久賀達はそう考えながら、天道達に続いて部屋を出ていった。

港

風間は現在、警察の追跡から何とか逃げのびて周囲を警戒しながら港をひた走っている。

と、そこに天道、加賀美、久賀達、神代の4人がやってきた。

「君達・・・っ!？」

風間が彼らが来た事に驚いていると、久賀達が風間を指差しながら口を開く。

「そこまでだ、観念しな。」

「死ね、ワーム!」

神代がそう言った瞬間、4人のゼクターが何処からともなく飛んで

きてそれぞれの手に収まる。

「「「「変身!」」」」

《《《Henshin》》》》

加賀美から順に変身していき、カブト・サソード・ザビー・ガタックと4人のライダーが勢揃いする。その様はまさに圧巻の一言だった。

「俺は本物だ! ワームじゃない!? ……一体何がどうなってるんだ……」

風間は訳が分からないと言った風にそう言うが、4人には伝わらない。

「いい加減にしろ!? その手の芝居にはもうウンザリなんだよ!」  
真っ先にザビーと共に駆けだしたガタックが、風間に殴りかかりながらそう言う。そこで風間は逃げながらドレイクゼクターを呼び出し、ドレイクに変身した。

《Henshin》

「見る! 本物だろうが!」

ドレイクはそう言って自分が本物であることを証明しようとする。だが彼は一つ重要な事を見逃していた、それは……

「ワームは全てをコピーするんだよ。変身できたって不思議じゃないだろう。」



ワームがコピーするのは姿形だけでなく、記憶から何まで全てをコピーする。その事を風間は知らなかったのだ。

もっともこの時点で久賀達はこの風間がワームではなく本物なのは、と考えていた。

(この抜け具合、やっぱりこいつが本物か？ ワームだったらこういうへまはしない様な気も・・・いや、駄目だな。ワームは全てをコピーする、こういう抜けた所もコピーされてる可能性が高いからこいつが本物だって証拠にはならないか。)

そう考えながらザビーはドレイクに殴りかかって行く。

「ッ!? 何でこうなるんだ・・・」

ドレイクはそう言うモノの、それで事態が好転する訳もなかった。それどころかガタツクにサソード、カブトも参戦してきていよいよ状況は不味くなってくる。

「クッ!」

ドレイクは苦し紛れにドレイクゼクターの連射で彼らを足止めしようとするが、マスクドの防御力を一番理解しているザビーが腕で顔を防御しながら突撃してくる。

「ハアッ!」

「うわあああっ?!」

そしてザビーの助走をつけてのパンチを喰らって、ドレイクは貨物を入れるためか何かの船の中に落ちてしまう。それを追ってザビー

も船の中に跳び下りる。

そしてザビーの激しいパンチとキックにドレイクは追い詰められていく。

「くうっ、どうして信じてくれないんですか!？」

「ちよつと黙ってる。」

「何っ!？」

なおも自身の無実を口にするドレイクに、ザビーの突き放すような言葉が突き刺さる。彼がそれに言い返そうとすると、それよりも早くにザビーが口を開いた。

「とりあえず今はやられとけ、後で何とかしてやるから。」

「は？ うわっ!？」

ザビーの言葉にドレイクが首を傾げていると、彼女のキックに弾き飛ばされる。そしてドレイクとの距離が開いた瞬間、ザビーは上の方でこちらを見ていたガタツクに指示を出す。

「加賀美ツ！ 撃てえ！」

「ッ!？ フッ！」

ガタツクバルカンから放たれる強烈な砲撃が次々とドレイクに降り注ぎ、遂に爆風で吹き飛ばされてしまった。

「ぐあああああつ!？」

吹き飛ばされたドレイクはそのまま海へと落ちてしまう。そしてそのまま上がってはこなかった。

それを見届けた4人は変身を解除し、ドレイクが落ちていった海を見つめる。

「・・・あとはZECTに任せときな。あいつの死亡を確認するついでに、ドレイクグリップも回収しとくから。」

そう言つて久賀達は足早にその場を去つて行く。後に残された3人の内、神代は法被（何故彼がこれを着ているのかは久賀達は知らない）を着なおしてその場を去つて行つた。

「これで敵をとつた事になるのかな？・・・風間 大介・・・」

後味が悪いと言つた感じに久賀美がそう呟く。だが天道は何も言わず、ただドレイクが落ちていったところを見つめている。

「？ どうかしたのか？」

久賀美がそう尋ねたが、天道は何も言わずただジツと海を見つめていた。

その後久賀達は、港の海沿いを走つて何かを捜しながら、三島に連絡をしていた。

「久賀達です。風間 大介に擬態したワームを始末しました。」

『そうか、分かった。』

「ワームは海に転落、ドレイクグリップも一緒に海に落ちてしまいました。」

『問題ない、後はこちらで何とかする。ご苦労だったな。』

「いえ・・・それでは。」

そう言って久賀達は携帯を切ると、再び何かを捜し始めた。

「ガタツクバルカン結構強力だからなあ、大丈夫かあいつ？」

そんな事を呟きながら久賀達は海沿いを走って行った。

橋の下

ガタツクの砲撃を受けて海に落ちた風間は、ここで目を覚ました。目に映るのは捨てられたガラクタやゴミ、橋の裏側、そして・・・

「大介・・・」

嬉しげに微笑むゴンの顔だった。ゴンの顔を見て、風間も思わず微笑む。

「ゴン・・・やっと、会えた。最高に、嬉しいよ・・・ゴン。」

そう言ってゴンの手に触れる風間、その様子にはにかむ様に笑う。

「馬鹿、何素直になってるの。恥ずかしい。」

そう言ってゴンは体を少し風間から離すと、気になっていた事を尋ねる。

「でも、一体どうして大介がこんな目に？」

「俺にも・・・さっぱりなんだ。」

実際風間には訳が分からないだろう。いきなり殺人犯呼ばわりされて今度はワームに間違われる、ハッキリ言って散々だった。

「・・・もういいから、行ってくれ。」

「ヤダよそんなの！ 会ったばかりなのに！」

風間はゴンに自分から離れるように言うが、ゴンは即座にそれを拒否する。

「一目だけで、十分だ。俺の傍にいと、碌な事が無い・・・」

風間はそう言ってなおもゴンに離れるように言うが、ゴンは首を振ってそれを拒絶する。今まで苦労してきたのだ、ここでそう簡単に別れたくはない。

「ヤダッ！？ 大介の傍にいる、絶対に絶対に離れない！」

「随分と愛されてるなあ、お前・・・」

「ッ！？ お前はっ！」

ゴンが風間の傍にいる事を告げていると、不意に何処からか女性の声が聞こえてくる。風間が声のした方を見ると、そこには久賀達がいた。

「ゴンッ、離れてろ！」

「でも大介・・・」

「安心しろ、別にお前をどうこうするつもりはないから。」

そう言って久賀達は風間の傍に腰を下ろすと、手に持っていた缶コ

「コーヒーを手渡す。」

「飲むか？ 散々だったな、お前も。」

「当事者であるあなたが、何を言ってるんですか……」

「あれは仕方が無い。とりあえずあの場ではああするしか道が無かったんだよ。」

そう言いながら久賀達は自分の分のコーヒーに口を付ける。一口飲むと、一息つきながら再び口を開く。

「ふう、感謝しろよ。海に浮いてるお前をここまで担いでくるの、結構大変だったんだからな。」

久賀達にそう言われて、風間とゴンは改めて久賀達をまじまじと見つめる。よく見るとその顔は薄らと汚れていて、髪も何処か湿っていた。

「……何故俺を助けた？」

風間にはそれが分からなかった。久賀達はカブト達と一緒に風間を攻撃してきた、それなのに何故……

「……今回の件、どうもおかしい。何かが匂う。」

そう言ってもう一口コーヒーを口に含む。持っていたコーヒーを飲み干すと、久賀達は立ち上がって踵を返していく。

「とりあえずお前はそこにいな、どっち道しばらくは動けないだろ。」

そう言つて久賀達がその場を去つていった。

## ZECT本部

風間と別れた後、久賀達は本部に戻つて来ていた。だが戻つてきたは良いモノのどうやって今回の事を調べようかと悩むことになってしまう。その時、久賀達に大和が声をかけてくる。

「どうした久賀達、そんな難しそうな顔をして。」

「ちよつと、気になる事が合つてな。」

大和はそれに特に興味もなさそうな顔を見ると、次に久賀達が驚くような事を口にする。

「そう言えば、ドレイクゼクターな・・・新しい資格者の手に渡らしいぞ。」

「はあっ!？」

大和の言葉に久賀達は驚愕の声を上げる。いくらなんでも早過ぎるのではないだろうか？

ドレイクグリップが回収されたのは恐らく数時間前程度の話だろう、にも拘らず早くも次の資格者の手に渡る。どう考えてもおかしかった。

「大和、次の資格者って誰か分かるか？」

「さあな、そいつに関してはかなり機密度が高くなつてる。流石の俺でもそれは分からんよ。」

「じゃあ何時何処で次の資格者に渡されるんだ？ それは知ってる

のか？」

「まあ、場所とかは知らないが誰が行くかは知ってるぞ。」

久賀達はそれを聞いた瞬間、大和のネクタイを掴んで通路の陰に引っ張って行く。通路の陰に連れて行かれる途中大和が何か喚いていたが久賀達はそれを無視した。

「で？ その新しい資格者にドレイクグリップを私に行くのは何処のどいつなんだ？」

「お、お前なあ、こっちは危うくいいから早く答えろ！」……

三島さん直属の部下だよ。」

「三島の？」

大和の言葉で久賀達の中である程度今回の事件が読めてきた。

「ちなみに大和、お前ワームの擬態が何処まで凄いか分かるか？」

「何だ藪から棒に……」

「例えば……人間の死体に化けることもできるのかって話だ。」

「それは……フム……元々人間とは違う構造をしてる訳だし、もしかしたらそう言う事も出来るかもしれないが……確証が無いぞ？」

あくまでも想像にすぎないと言う大和に対し、久賀達は十分だと言った風な顔をした。これだけの材料が揃えばあとは取引の現場を押しさえるだけだ。

久賀達はザビーゼクターを呼びだすと、ある命令を伝えた。それは・



山中・洞窟

久賀達はザビーゼクターの案内で山の中の洞窟を進んでいた、ちなみに大和も一緒である。

「一体何なんだ？　こんな所まで来て……」

「いいから黙ってついてこい、多分面白いもんが見れるぞ。」

そう言つて久賀達はなおも先へ進んでいく。大和はそれにやれやれと首を振りながらついて行った。

しばらく進むと、出口と思われるところが見えてきた。そしてそこには3人の人影が見える。それは……

「……やつぱりな。」

「何だと？　風間　大介が二人！？　それにあいつは……三島さん直属の！」

大和の言葉に久賀達は満足そうな顔をする。久賀達がザビーゼクターに命令したこと、それは橋の下以外の場所で風間がいるところを探せというものだった。

恐らく今回の事は三島が考えた手駒としてのライダーを増やす為の作戦であろう。何らかの形でワームと手を結んだ三島が、ワームの手を借りてZECTに従わないライダーを言う事を聞くようにさせようとしたのだ。

そんな事を久賀達が考えていると、片方が先日彼女が倒したモノと色が違うタイプの黄色い成虫体……アキヤリナワーム・アンバーになる。

それを見た瞬間風間がドレイクグリップを手に取るうとするが、それよりも早く三島の配下の手からワームがドレイクグリップを弾き飛ばした。

そしてワームは再び風間の姿になると、あるうことかドレイクゼクターを呼び出してドレイクに変身してしまった。

「くそっ！？ ワームがドレイクに！」

「あのバカ、どうせやるならちゃんとやれよな！」

正直な話、久賀達はこの場に本物の風間が出てくるとは思わなかった。彼女としては取引の現場を押さえ、その場でドレイクグリップをワームの手に渡らないようにするつもりだったのである。

（大体なんで本物がここにいるんだよ、無理しやがって！）

久賀達が大和と共に岩陰から出ると同時に、どこからともなくカプトゼクターとガタツクゼクターが飛来、別のところに隠れていたらしい天道と加賀美の手に収まる。

「よくも騙してくれたな！ 手の込んだことしてくれやがって！」

「お婆ちゃんが言っていた。手の込んだ料理ほど不味い・・・どんなに真実を隠そうとしても、隠しきれものじゃないってな。変身。」

《Henshin》

「変身！」

《Henshin》

天道と加賀美が変身すると同時に、周囲から複数のサナギ体が現れ

る。それを見て久賀達らも自分のゼクターを呼び出した。

「「変身！」」

《《Henshin》》

《《Change Beetle》》

ザビーとケタロスが変身すると、彼女達もカブト達に混ざってサナギ体の群れに飛び込んでいく。

ドレイクを味方につけているとはいえ、この場にいるのはいずれもかなりの実力者。サナギ体は次々と蹴散らされていく。

サナギ体にある程度ダメージを与えると、カブト・ガタック・ザビーの3人はキャストオフし、一気にサナギ体を殲滅した。

サナギの姿が見えなくなった時ザビーがふとドレイクの方を見るとドレイクの変身は解除されていた。どうやらカブトに攻撃を受けて、強制的に解除されたらしい。

そしてゴンが拾ったドレイクグリップを二人の風間が手に取ろうとする、だが……

「退けっ！」

「させるかっ！」

「あっ?!」

「おいおい……」

二人の風間はお互いにお互いを妨害し合って、どちらが本物だか分からなくなってしまうた。

これにはさすがの久賀達も頭を抱えてしまう。見れば他の面々もどちらが本物だか見分けが付いていないらしく、その場から動けなくなっていた。

「ゴン、グリップを！」

「俺が本物だ！俺にくれ！」

二人の風間がゴンにグリップを渡せという、ゴンは一瞬の間の後、すぐに片方の風間の方へと向かう。それを見てもう片方は愕然となる。

「何故分かった?!」

「私の目は誤魔化せない、見れば分かるわ！」

訳が分からないといった感じの擬態風間の言葉に、ゴンは得意げにそう返した。

「さすがゴン。なんてったって、俺達は永遠に一つの……一つの……えつと……その……」

「相棒。」

「そうそう、それそれ！」

(折角の良いシーンだったのに、相変わらずだな……ん?)

毎度の如くここぞと言うところで締まらない、だがそれでこそその風間である。久賀達が彼のそんな様子に苦笑していると、あることに気付く。ここにドレイクグリップを持ってきていた三島の配下がいなくなっているのだ。どうやら戦闘のドサクサに紛れて逃げ去ったらしい。

「逃がすと思ってるのかよ……大和、行くぞ！」

「いいのか、こつち放つといて？」

「別に構わないだろ、それよりも三島の配下だ。」

ザビーは三島の配下が立っていた場所を注視する、するとそここの場から離れていく足跡を見つけた。恐らくこれが三島の配下の足跡だろう。

ザビーとケタロスはその足跡をクロックアップして追いかけていく。しばらく足跡を追いかけていくと、案の定逃げている途中の男を見つけた。

《Clock over》

「よお、逃がさねえぞ。」

「今回の件、どういふことなのか詳しく話を聞きたいもんだな。」

「クツ!？」

突如目の前に現れた二人のライダーに男が悔しそうな顔を見ると、その男はサナギ体のワームに姿を変えた。

「ツ!？ こいつもワームだったのか！」

「なるほど……そう言うことか。」

ケタロスが驚き、ザビーが何かに納得していると、サナギ体が二人に突っ込んでくる。二人はそれを軽くかわすと一気に勝負を決めるべく、ゼクターに手を伸ばす。

「ライダーステイング。」

《Rider Sting》

「ライダービート。」

《Rider Beet》

二人のライダーの必殺技を喰らい、その場で爆散するワーム。サナギワームを倒したことを確認したザビーとケタロスは、変身を解除してその場から離れて行った。

ZECT本部

「……………報告は以上です。」

「そうか……………」

久賀達は三島に今回のことを報告していた。今回のことはライダーシステムを手中に収めようとした三島の独断だろう。だが建前上はZECTの存在意義はワームの脅威から人類を守ることである、その組織がワームと手を組むなどあってはならない。

なので久賀達は建前上、ワーム側の計画を察知してそれを阻止して見せたと三島に報告したのである。

「危ない所でした、もうあと少し遅かったらワームに完全にゼクターを奪われるところでした。」

「ご苦労だったな……………もう下がっていいぞ。」

「ハッ！」

三島の言葉に久賀達はその場から去っていく、そして室内に一人になった三島は……………

「……………クッ!?」

その場で悔しそうに地団太を踏んだ。

そして……

「はは、悔しそうにしてる。ざまみろ。」

部屋の外では久賀達が聞き耳を立てていた。扉に耳を押し付けた彼女には、三島の悔しがる声と地団太を踏む音がしっかりと聞こえている。それを聞いてニヤニヤと笑みを浮かべている久賀達に、大和が声をかけてきた。

「それにしても、信じられないな……あの三島さんがワームと手を組むなど……」

「何でそこまでライダーシステムを手元に置いときたいのかねえ……」

そんなことを二人が話していると、織田・矢車・影山の3人がやって来た。

「よお、なんか今回大変だったらしいな。」

「危うくワームの手にゼクターが渡る寸前だったとか……」

「な〜に、大したことはないよ。」

和気藹々と話すZECT所属のライダー5人、これだけでもかなりの戦力だろう。それなのに何故三島はそこまでライダーシステムに拘るのか……

「（ま、今考えても仕方ないよな。）よし、それじゃちよっくら何処かに飯食い行くか。」

「いいな、いつもの定食屋か？」

「たまには焼肉でも食い行こうぜ、勿論織田の奢りで。」

「ちょっと待て!?! なんて俺だ!」

久賀達の発言に、当然のごとく反応する織田。久賀達がいるとなるとその出費も馬鹿にできないレベルになることは確実なので、彼も必死である。

「だってお前、この間ポーカーで負けたじゃんか。」

「そう言えばそうだな、久賀達とのデートはなしになったが、それが景品でもいいか。」

「織田さん、御馳走さます!」

「待て待て、矢車と影山は自分で払え! コイツ(久賀達)がいるとマジで出費半端ねえんだぞ!?!」

賑やかに話をしながら、彼女達はその場から去って行った。



## 第27話 コンビ復活（後書き）

と言う訳で第27話でした。原作でも風間が完全復帰した回ですね、あまり目立ってませんでしたが風間とゴンって実はカブトに登場するメンバーの中で一番強い絆を持つてるんじゃないですかね？

何気に今回ドレイクグリップを擬態風間に渡した人物が影山ではありません。この作品では影山もワームから人類を守ると言う信念を持って行動しているので、今回の三島の作戦には首を縦に振らないだろうと考えたので。

次回・・・多くは語りませんが、例のテンションがどこかおかしかった闇キツチン編です、お楽しみに。それでは。

## 第28話 闇の料理人（前書き）

どうも、黒服です。今回は原作の中でも異彩なテンションを放っていた、闇キッチン編です。

## 第28話 闇の料理人

かゆつま亭

この日久賀達は訓練に一区切りがついた時に、部下を連れてこの店に来ていた。思えばこの店を知っている知り合いが矢車や影山、それに加賀美程度であることに気付いたので、部下にもこの場所を教えてやるうと思っただのである。

連れてきた面子は副官である戸高、砲手の神田に葛西、それと播磨、檜和田の5人である。

「隊長、この店美味いつすねえ！」

「確かに、素朴にして大胆な味付け。隊長が言うだけのことはありますね。」

播磨と檜和田がこの店の定食を称賛する。

「そうだろ。ここは有名じゃないけど美味いんだよ。」

久賀達は二人の言葉に少し満足そうな顔をして、さらに箸をすすめる。

それだけならば何も問題なかったのだが、ここで何時もの如く播磨が余計な一言を口にする。

「まあ隊長にとっては何食っても美味いんでしょうけどね。」

「…………お前後であたしと組手、時間無制限の耐久バージョ  
ンな。」

「ちよつ!?!?!」

（ ）（ ）（ また余計なことを。 ）（ ）（ ）

余計な一言で久賀達の機嫌を損ねた播磨に、他の4人はまたかと言った顔をしながら我関せずと言った感じで食事をすすめた。実際何時ものことなので、態々気にするのも馬鹿らしかったのである。

「そう言えば隊長、最近話題の洋食店があるのを知ってますか？」

「話題の洋食店？　なんだそれ？」

食事が済んで軽く一服していると、神田が久賀達にこんな話題を振って来た。基本物事に無関心な久賀達も、ことが食べ物になると話が別である。久賀達は神田の振って来た話題に食いついた。

「何でも最近急に有名になったらしくて……」

神田の話す情報を聞きながら、久賀達は戻ったら播磨をどんな風に扱いてやるのかなどと考えていた。

### 翌日・話題の洋食屋

久賀達は空いた時間を見つけて、先日神田に教えてもらった洋食店にやって来た。彼女の情報によると相当美味しい料理を出すとのことなので、久賀達もそれなりに興味があったのだ。だが……

「話題……って言う割には随分と人が少ないな。」

実際は少ないどころかほとんど皆無である。神田の話によれば連日行列が出来る店と聞いていたのだが、今店の前にいるのは久賀達の

他に約2名。しかもその2名の内片方は、久賀達のよく知る人物だった。

「天道？ お前何してんだこんな所で？」

「それはこつちのセリフだ。お前こそなんでこんなところに・・・」

「あたしは最近話題の洋食店があるって聞いたから食べに来ただけだ。お前はどつなんだ？」

「俺は可愛い妹の頼みで、この店の視察にな。」

何でも天道の妹、樹花の友達のお店がこの店の人気に負けてしまっているらしい。そこでそのレストランを手助けする為に、まずは敵情視察をしに来たとのこと。

しかし敵情視察をするだけの価値があるのかと、今の店の状況を見て久賀達は考える。これでは何をすることもなく勝手に自然消滅しそうな勢いだからだ。

とにもかくにもこのまま店の前にも何も始まらない。3人は店の中に入って行った。

店に入ると、3人は『マグロの目玉が飛び出るほどおいしいマグロの野菜添え』なる料理を注文した。正直随分とオーバーな名前だとも思ったが、これがこの店のお勧めの一つとのことだ。

で、3人はその料理を口にしながら・・・

「マズッ！」

「不味くて・・・不味くて・・・」

「樹花!？」

天道兄妹はそのあまりの不味さに愕然とした、特に樹花などは泣きながら店を出て行ってしまふ。天道は店を出ていく妹を見送ると、当然のことながらシェフに怒りを向ける。

「なんだあの料理は！？ 人を悲しくさせるほど不味い、客に出すべき代物ではない！」

天道の怒りを受けても、シェフらしき着物の男は素知らぬ顔でタスキを袖にしまい・・・

「いいんだよ、これで。」

と口にする。その答えに天道も驚きを隠せない。

「俺は料理で人の感情を操ることが出来る、喜怒哀楽の全てをな。」  
「もうやめてくれ！」

男が得意げに喋っていると、店の奥から店長と思われる男性が出てきた。その顔は悲しみに歪んでいる。

「あんた！ ウチの店を救ってくれるんじゃないのか！？」

どうやらこの男はこの店の正式なシェフと言う訳ではなく、外からやって来た雇われシェフらしい。道理で着ている服がこの店の雰囲気合わない訳だと、久賀達は思った。

そうこうしていると、男は店長に自分がこの店に来た目的を話した。

曰く、自分はただこの店を自分の料理の実験場として選んだとのこ

と。

それを聞いた途端、店長はその場に崩れ落ちた。そして天道は彼の言葉にさらに憤る。

「お前は間違っている。料理とは、常に人を幸せにするべきものだ。」

「お前は、料理の持つ奥深さを……その魔力を知らないようだな。」

「それはお前の方だ、お前に料理人である資格はない。お婆ちゃんが言っていた、刃物を持つ手で人を幸せにできるのは……料理人だけだ。」

二人の間に険悪な雰囲気漂い始めた頃、漸く今まで黙っていた久賀達が口を開く。

「なあ天道。」

「なんだ、今忙しッ!？」

突然口を挟んできた久賀達に天道が文句を言おうとそちらを見ると、彼は驚愕に目を見開く。シェフの男も同様だった、何故なら……

「食わないんだったらコイツもらっぞ?」

久賀達の前には綺麗に料理を食べつくされた皿が置いてあるだけだったからだ。そして何処に料理が消えたかを考えれば、考えられる場所は一つしかない。

「貴様……何故その料理を食べられる?! それは悲しさを増幅させるほど不味い料理の筈だぞ!」

シェフはうるたえながら久賀達に問いかける、実際初めてのことだったのだ。今まで彼の料理を食べた者の中で、なんのリアクションもせずに食べきった人物など。

「不味かろうがなんだろうが料理は料理、食い物だろう？ だったら何を気にするってんだよ。」

そうやって久賀達は、天道兄妹が残した料理も食べ始める。『ん、不味い。』などと口にしながら。

「・・・はあ、人間ポリバケツだなまるで。」  
「テメ今なんつったこの野郎。」

天道はそんな久賀達に思ったことをボソリと呟いたが、久賀達の耳はしっかりとその言葉を受け止める。久賀達からの怒りを軽く受け流しながら天道はその店を去って行き、久賀達はそんな天道を睨みつけながらなおも料理を食べ続けていた。

## ZECT本部

「まったく天道の奴、好き勝手言いやがって。」

あの後久賀達は怒りを滲ませながら本部に戻って来た。実際いくらなんでも人間ポリバケツはないだろう、流石の久賀達にも口にしないものはある・・・。筈だ。

久賀達がそのようなことを考えながら歩いていると、前方から大和が歩いてくる。手には何かの資料を持っていた。



「よう、大和。なんだそいつは？」

「久賀達か。こいつはあれだ、マスキッドライダーシステム強化の資料だよ。」

ライダーシステムの強化・・・その言葉に久賀達の脳裏にある物が浮かび上がる。

「ハイパーゼクター・・・か？」

「ああ、そうだ。」

ハイパーゼクター・・・それはマスキッドライダーシステムをさらに強化させるためのゼクターである。資料で軽く読んだ程度だったが、久賀達の抱いた感想は凄まじいの一言だった。

「完成したのか？」

「いや、まだ完成はしてはいないらしい。時間の問題ではあるようだが。」

大和の答えに久賀達は適当に答えた。完成しても彼女の使うザビーには、コネクターが付いていないのでどっち道使うことはできないのだ。彼女がそこまで気にするべきではない。

久賀達は大和に軽く手を振ってその場を離れようとしたが、ふと気になることがあったので彼女は大和を引き留めた。

「なあ、大和。」

「ん？　なんだ？」

大和は突然引き留めてきた久賀達に、どうしたのかと尋ねる。する

と彼女の口から出てきたのは……

「お前さ、あたしのことを人間ポリバケツとか思ったことってあるか？」

先程天道に言われたことだった、何気に気にしているらしい。それを言われた大和は、何を言うべきか迷った後……

「さて、仕事仕事……」

何も言わずにその場から立ち去って行くことを選んだ。それは彼の心の内を何よりも雄弁に物語り、残された久賀達の背中では心なしに哀愁が漂っていた。

翌日・Bistro la Salle

次の日、久賀達は矢車と共にSalleに来ていた。何気に先日のことを気にしているらしく元気がなかったので、天道がいるだろう此処に矢車が連れて来たのだ。イヤなことがあった時は美味しい物を食べるのが一番だ、と言う訳である。天道ほどの料理の腕だったら、久賀達も文句は言わない。

矢車が店の扉を開けると、案の定店の中には天道がいた。その手にはチャーハンの乗った器が握られている。

「なんだ、お前達二人がそろってこの店に来るなんて珍しいな。何の用だ？」

「久賀達の元気がないんでな、ちょっと美味しい物でも食べさせようかと。」

矢車が事情を話すと、天道はやれやれと言った顔で久賀達を見る。

「なんだ、昨日のことをまだ気にしてるのか？ 意外と小さいことを気にするんだな。」

「うるせえ、人のことを人間ポリバケツとか言いやがって。」

「……なんだ、君が原因か。」

ちなみにトドメは大和であるが、矢車は知らないことである。彼が大きく溜め息を吐くと、店の奥から加賀美がやたらと高いテンションで出てきた。

「いや、驚いたよ田所さんの蘊蓄にはさ！ どうやら田所さんの実家って有名な蕎麦屋さんらしいんだ……って、久賀達さんに矢車さん？」

「そんなに顔を近付けるな、唾が飛ぶ。」

「よお、お邪魔してるぞ。」

加賀美が久賀達らの存在に気付いて矢車がそれに軽く挨拶した時、店の扉が開かれる。入って来たのは先日のシェフだった。

「貴様、何しに来た。」

「この店の評判を聞いてな、味を確かめに来た。」

そう言うと男は袖からレンゲを取り出して、天道の前に置いてあったチャーハンを掬って口に運んだ。そしてそれを咀嚼して飲み込むと、何も言わずにレンゲを袖に戻してチャーハンを作った人物を尋ねた。ひよりがそれに答えると、男は先程までの雰囲気を一変させて……

「この料理は豚の餌だ！」

と言った。その物言いに加賀美は愕然としながらひよりの方を見て、久賀達は彼女が作ったチャーハンを食べて見る。久賀達は特にこれを不味いと思わなかったが……

「お前、これを作る時に中華鍋を振ったな？ 鍋を振っていいのは、舞い上がった飯粒を、ガスの直火に当て、その飯粒の水分を飛ばすと言う超絶技巧を持つ者だけに許されたことだ！」

男の蘊蓄に、久賀達は『へ〜』と感心した。鍋を振るのは単に具材などを効率よく混ぜ合わせるとかそんな理由があるんだろうと思っていたからである。

男がさらに辛口評価を口にし、天道が彼を止めると突然彼の近くに置いてあった黒い布で包まれた何かが光り出した。

男はそれに驚くと布に包まれた何かに向かって手を差し出す、すると布に包まれていた物……黒い鞆に納まった包丁が男の手に向かって飛んできた。

「これは……伝説の黒包丁！ 何故お前がこれを持っている？  
(なんだ包丁が伝説って、そんな大したもんなのかそれ?)」

久賀達が伝説の黒包丁とやらに首を傾げていると、天道がある人から正統な持ち主に渡してくれと頼まれたと言う。

「ならばこれは俺の物。黒包丁を使いこなせるのは……この俺だけだ！」

そう言つて男が包丁を抜いた瞬間、雷が落ちて周囲が何故か暗くなつた。いつの間にか窓も開いて風が吹き込んでくる。

「ああ、感じる、感じるぞ！ 過去の料理人たちの魂が俺に乗り移つたようだ！ 俺は………神だ！！」

男は一人で勝手にテンションを上げているが、久賀達はそんな彼に若干引いていた。いくらなんでもオーバー過ぎる。

(コイツ……頭大丈夫か?)

「お前は料理の王道から外れている！ 俺と……勝負しろ。」

「俺も混ぜてもらおう。同じ料理を嗜むものとして、お前の考えは許せない。」

久賀達が呆れていると、天道と矢車が男に勝負を挑んだ。久賀達から先日の顛末を聞いた矢車は、男のやり方が許せないらしい。

男はそれを承諾し、彼らは天道と矢車の得意料理、麻婆豆腐で勝負することになった。

数分後、加賀美の前には3種類の麻婆豆腐が置かれていた。加賀美は天道の作ったものから順に食していく。

「じゃあ、まずは天道のから……何時食つても美味しい、流石天道。次に矢車さん……こつちも凄く美味しいです。じゃあ、最後は……」

そう言つて加賀美は男が作った麻婆豆腐を口に運ぶ。そしてそれを口に含んだ瞬間……

「ッ!?!?!?」

加賀美は顔を押しさえて下を向いてしまう。天道がそれを見て、悲しくなるほど不味かったかと口にすると、次の瞬間顔を上げた加賀美の顔はこれでもかと言うつくらい輝いた笑顔だった。

「うま〜い！！　こんなに美味しいものが食えて、幸せだ〜！！」

そう言った加賀美の背中には天使の翼が生え、頭には天使の輪っかがあるように久賀達には見えた。その結果に天道と矢車は愕然となる。

そんな二人を余所に、久賀達も3人が作った麻婆豆腐を食べ比べて見る。その間に男は得意げに口を開いた。

「言った筈だ、俺は料理で感情を操れると。だがな、それはいくつもの超絶技巧を駆使してのこと。」

（ふむ、こいつは美味いな。こっちも相変わらず・・・）

「例えば、お前達は豆腐を切る時に包丁を使ったが、豆腐は手で干切った方がいい。その方が大豆の旨味が残るからな。」

（ほお、なるほど。こいつはなかなか美味いな、言うだけのことはある。でもこっちも・・・）

「お前達は包丁を使うことで、豆腐だけでなくその旨味をも切ってしまったのだ。」

男はそこまで言って肩をわなわなと震わせて、先程の落ち着いた雰囲気とはガラリと変わった雰囲気。久賀達に向かって口を開いた。

「なのに何故お前はどれに対しても同じリアクションしかとらん？

！　俺が作った麻婆豆腐を食っておきながら！」

先程から久賀達は全ての料理に口を付けていたのだが、彼女はどれに対してもうんぐんと頷くだけでこれと言って変わったリアクションを取らなかつたのだ。

「別にいいだろう、美味しいもん食ってどう反応しようが。」

「お前は料理を食べて何とも思わんのか?! お前にとって食べるとはなんだ!」

男の言葉に久賀達は持っていたレンゲを置くと、彼に向かって口を開いた。

「あたしにとつては・・・食べることそのものが『嬉しい』んだよ。味がどうかそんなことは気にしないね。」

久賀達の言葉に男は悔しげに唸る。するとその時複数の人が店に入つて来た。入ってきて人達を見て、男は不敵に笑う。

「そこまでだ! 生簀 一郎。」

「フツ、お前達は俺に敗れた輩共ではないか。」

どうやら全員何かしらの料理の料理人であるらしい、久賀達が天道と矢車の作った麻婆豆腐（生簀が作った奴は加賀美が手放そうとしないので諦めた）を食べていると、彼らが『自分達の敵は師匠が取る』と言って道を開けた。すると店に入つて来たのは・・・

「貴方は・・・」

「あ、神代のとこの・・・」

神代家の執事だった。

あの後久賀達は落ち込んだ矢車を伴ってSalleeを後にしていた。久賀達は矢車の作った麻婆豆腐も美味かったと評価したが、彼は「一人にしてくれ」と言っただけでどこかに行ってしまったのだ。何かしらの料理人としてのプライドもあるのだろうと久賀達が矢車を追いかけるのを止めると、代わりにザビーゼクターが目の前に飛んできた。どうやらワームが出たらしい。

久賀達がとあるビルの上に着くと、そこではすでに加賀美と神代が複数のサナギ体と戦っていた。久賀達もそれに参加するべく変身する。

「変身。」

《Henshin》

変身したザビーは、サナギ体が最も密集しているところに突っ込んで行く。

「フツ、セイツ！」

ある程度サナギ体をパンチやキックで薙ぎ払うと、ザビーはゼクターを180°回転させてキャストオフする。

「キャストオフ！」

《Cast off Change Wasp》

ザビーがライダーフォームになると、その際に弾け飛んだマスクドアーマーがサナギ体を吹き飛ばす。ザビーはその隙を逃さず、即座にクロックアップする。



「クロックアップ。」  
《Clock up》

瞬間身の回りの全てがスローモーションな動きになり、吹き飛ばされたサナギ体も宙に浮いていた。まさに格好の的である。

「ライダーステイング！」  
《Rider Stinging》  
「ハアッ！」

ザビーは宙に浮いているワームに次々とライダーステイングを叩き込んで行き、その場にいたワームを全滅させてしまう。もう辺りにワームがないことを確認すると、ザビーはガタツクとサソードの方を見た。

「ゲッ!? ヤバッ！」

ザビーが二人の方を見ると、二人は非常にピンチだった。どうやら倒しきったと思って変身を解除したところを襲われたらしい、二人は変身することも出来ずにワームの攻撃を逃れようとしている。

ザビーが二人を助けに行こうとした時……

「うおおおおおっ!!」  
「な、何っ?!」

神代は加賀美がいるのも構わずに、その場でサソリのワームの姿を晒してしまう。彼がワームであることを知らない加賀美は、それに愕然とした表情になる。

彼が驚いていると、スコルピオワームはサナギ体達を次々と薙ぎ払っていく。

「神代……」

ザビーはそんなスコルピオワーム……神代の姿を、何とも言えない気持で見つめていた。

## 第28話 闇の料理人（後書き）

と言う訳で第28話でした。原作で（料理人としては）強敵として描かれた生簀ですが、この作品では思わぬ天敵（笑）が登場してしまいました。基本久賀達は食べられれば何でもいいと言った考えです。モノを食べてそこまで大きな反応を示すことはありません。だから久賀達に一万円を出させて見せた天道の作ったラーメンはかなりの美味しさと言うことになるわけです・・・あ、なんだかラーメン食べたくなってきた（笑）

今回の個人的お気に入りシーン：大和に人間ポリバケツと思われるいたことを知って、背中に哀愁を漂わせた久賀達。

彼女だって些細なことを気にするんです！ だって女性ですもん！！

次回の更新もお楽しみに。それでは。

## 第29話 料理と言うモノ

加賀美が神代の正体を目撃した次の日、彼は岬にこのことを相談しようとしていた。彼女ならこう言ったことにも柔軟に対応できると考えたからだ。

ところが彼女に相談しようとした矢先に、神代本人が岬をデートに誘いにやって来た。昨日の今日で相変わらぬ神代の様子に加賀美は呆れながらも岬を逃がし、彼自身に問い詰めることにした。

「お前、岬さんをどうするつもりだ！」

「ミサキー又は俺が守る、必ず・・・この手で。」

「ふざけるな！？ お前ワームだろ、そのお前がどうして」「そこま  
でだ加賀美。」「ッ！？ く、久賀達さん！」

神代の言葉に加賀美が噛みつこうとした時、久賀達が彼を宥めにやって来た。

「ど、どうしてここに？」

「お前の考えてることなんて大体分かる。昨日の感じからして、神代を問い詰めに来るだろうと思ってな。」

そう言うと久賀達は踵を返すと、首だけ後ろを振り返り口を開いた。

「いろいろ気になるだろうが、今は置いとけ。誰にだって言いにくいことの一つや二つはあるだろ。そいつが言いたいって言うんだっ  
たら、その時間いてやれ。」

それだけ言うと今度こそ久賀達はその場から去って行き、加賀美は

そんな久賀達の後ろ姿を見つめることしかできなかった。

## ZECT本部・食堂

現在食堂には、加賀美を除いたZECT所属のライダー達が集まっていた。集めたのは矢車、と言うのも先日のことがかかなりシヨックだったらしく、彼なりに味を探求してきたから試食してみてくださいと言ってきたのだ。

「しっかしどうしたんだ、矢車の奴？ 急に料理の試食をしてくれとか言い出しやがって。」

「しかも何か思いつめてるような感じだったな。」

「矢車さんの料理が不味い筈なと思いますけど。」

先日何があったか知らない織田・大和・影山の3人はそう口にする。実際久賀達自身も事情を知っているとはいえ、そこまで気にするほどのことかと思っただけだ。

そうこうしていると、矢車が手に自宅で作って来たのだろう様々な料理が入ったタッパーを持ってきた。持ってきた料理は煮物からお馴染の麻婆豆腐まで様々だ。

「待たせたな、早速食べて見てくれ。」

「それはいいが、一体どうしたんだ？」

大和の質問に、矢車はただ『超えたい奴がいる』としか答えなかった。そんな矢車の様子に久賀達は溜め息を吐きながら、彼の持ってきた料理を口に運んで行く。他の面子も思い思いに料理を食べるのだが……

「ん？」

「あれ？」

「こいつは……」

料理を口にした瞬間久賀達以外の全員が顔を顰める。それを見た瞬間矢車は魂が抜けたような顔になってしまう。

「あ……そ、そうか。不味い……か。」

「いえ、決して不味い訳では……」

「なんつったらいいんだろうな。」

「何時も食べてる味と、何かが違うな。」

彼らが言うように、今日の味は何か違った。それが何なのかを具体的に指摘することはできなかったが、矢車にとってはそれで充分だったらしく、放心状態でその場から立ち去ってしまった。

若干ふらつきながらその場から去っていく矢車の後ろ姿に、久賀達らは心配そうな顔を向ける。

「なんなんだ、あいつ一体どうした？」

「スランプって奴ですかね？」

「さあね。」

この場にいる中で久賀達だけは理由を知っているのだが、それを書いても多分どうにもできないだろうからもうしばらくは放っておくことにした。

その後も久賀達は矢車が置いて行った料理を次々と平らげていき、何とも微妙な味のそれを何時も通りに食べられる彼女を大和達は何

とも言えない顔で見つめていた。

翌日・料亭『しらくら』

次の日久賀達は休暇を利用して何時もの如く食べ歩きに出ている。この日の最初の店は老舗の料亭『しらくら』である。昔ながらの味を現代も守っているとのこと、どんな味なのかと久賀達が店に入ると料理が来るのを待っていると、店に生簀がやって来た。

「お前、何しに来たんだ？」

「フンツ、料亭破りさ。」

(道場破りじゃねえんだからさ……)

生簀の言葉に久賀達が呆れていると、店の料理人の一人が慌てて厨房に入って行った。生簀がそれについて行く形で厨房に入っていると、面白そうだからと久賀達も入って行く。

「貴様ア……」

「噂には聞いている、京懐石の正統を継ぐお前の腕……見せて見る。」

そう言うと生簀は黒包丁を取り出した。

「勝負だ！」

そして生簀と店の大将は刺身で料理対決を行うことになった。

数分後、厨房には生簀と大将二人が作った2種類の刺身が出来上がる。

「まずは、俺のから食ってみる。審査は、お前に任せる。」  
(おいおい、どれだけ自信たっぷりなんだよ。)

実際相手に自分の料理を評価させるなど無茶にも程があるだろう、少なくともその料理がよほど美味いのでなければ。

店側も同様に思っているのか、笑いながら大将は刺身を口に運ぶ。そして……

先日の加賀美と同様に彼の背中と頭には天使の羽と輪っかが付いていた。

「これは……これは、ち、違う！ 味も香りも、俺の刺身とは全然違う！！」

大将の反応に生簀は得意げな顔で『自分の包丁捌きは光よりも速い』と言ってのける。その証拠にと先程捌いた鯛を見て見ると言われてその場の全員が水槽を見ると、そこには頭以外は骨だけになりながらも元気に泳いでいる鯛の姿があった。

(いやいや、どう考えてもおかしいだろ。ゾンビってレベルじゃねえぞ……)

恐らくゾンビの方がまだマシであろう、少なくとも向こうには腐っていても筋肉が付いている。

それを見て大将が崩れ落ちると、生簀は久賀達に向き直る。

「さて、お前も俺の刺身を食ってみる。今度こそ俺の料理に平伏す



のだ。」

「……ま、料理を食えって言うのを断る理由はないしな。」

そう言つて久賀達は生簀の物と大将の物、二つの刺身を口にする。

「ふむ……うん、美味しい。」

「それだけか？」

「それだけ。」

案の定久賀達はどちらを食べてもほとんど同じリアクションしか取らなかった。勿論どちらが美味いかなどは口にするが、あくまでそれだけである。それ以上のリアクションは皆無であった。

それを見てまたしても生簀は肩を震わせる。

「おのれえ、覚えている！ 次こそは必ず貴様を、俺の料理の虜にしてやる！―！」

そう言つて生簀は店から出ていく店の看板を持って行くのを忘れずに。

そんな彼を、久賀達は刺身を平らげつつ見送っていた。

その後久賀達は寿司屋によつて行ったのだが、またしても生簀に出会う。そして当然の如く料理対決に巻き込まれるのだが……

「天国だ〜。」

「うん、美味しい美味い。」

生簀の寿司に天にも昇る気持を味わっている大将とは対照的に、久賀達はどちらの寿司も美味いと言って平らげるだけ。それに生簀はまたしても悔しそうな顔をしていた。

「さくで、次はどこに行くかなつと。」

久賀達が次の店を探して街を彷徨っていると、道の先に見知った3人を見つけた。加賀美を含めた田所チームの3人である。

「よお、加賀美！」

「あ、久賀達さん。」

「どうしたんだ今日は3人揃って、なんか珍しいな。」

加賀美に聞いたところ、どうやらこれから田所の実家である蕎麦屋に向かうとのこと。田所と加賀美に誘われて、久賀達もついて行ったのだが、そこで意外な人物に遭遇した。

「矢車？ 天道まで、お前ら何してんだ？」

「此処の蕎麦はなかなか美味い、歯応えが絶妙だ。」

「ああ、それに蕎麦と汁の香りもいい。」

店の客（何故か全員顔が怖い）に交じって、天道と矢車が蕎麦を食べていたのだ。どうやら味の参考にでもするらしい。

二人の感想に田所が感心し、天道が田所のことを尋ねる。岬がそれに対して簡単に田所を紹介すると、田所が此処は弟が経営している店だと言う。すると厨房から田所の弟らしき人物が出てくるのだが、

（なんだあの顔の怖さは・・・遺伝か？）

とにかく尋常ではないくらい顔が怖かったのである、それこそ久賀達も若干後ずさってしまふほどに。久賀達でさえそうなのだから、加賀美と岬は酷かった。岬は彼と距離をとり、加賀美など完全に逃げ腰だ。

「まあ、ごゆっくり！ へっへっへっ……」

とりあえずそのドスの利いた声を何とかしてはくれないだろうか、と久賀達は思わずにはいられなかった。ただでさえ迫力のある顔なのにそのドスの利いた声の所為で怖さに拍車がかかる、せめてもう少し声のボリュームを下げてほしいモノである。

そうこうしていると、またしても店に生簀がやってくる。久賀達にとっては本日3回目だ、思わず何か変な縁でもあるのではと考えてしまう。

「老舗蕎麦屋の正統を継ぐお前の腕、見せて見る。」

「お前……」

生簀は店に入るなり、田所の弟に勝負を挑んできた。天道と矢車がそんな彼を睨みつける。

「蕎麦屋破りか！？ お、お兄ちゃん！」

「うるたえるな！ 300年の伝統を持つ田所の味が負けるわけがない。」

（って言うか今度は蕎麦屋破りかよ。それって結構ある話なのか？  
にしてもお兄ちゃんて……似合わねえ。）

久賀達が心の中でツッコミを入れてみると、田所の弟と生簀がそれ

それぞれ蕎麦を4人分作ってくる。

田所・加賀美・岬・久賀達の4人がまずは弟の蕎麦を口にする。味はなかなか良く、流石老舗と言っただけはあった。4人の称賛に、弟はすでに勝ち誇っている。

続いて生簀の作った蕎麦、こちらは何をどうやったのかは分からないが真つ黒な蕎麦だった。4人が生簀の作った汁に蕎麦を付けて口に入れると……

「これはっ!?!」

「美味い!」

「凄いわ!」

「汁の切れ味、奥深さ……人間業じゃない!」

「……天国だ!」!」!」!」

田所・加賀美・岬の3人は、もはやお約束となりつつある天使の羽と輪っかをつけて幸せそうな顔をする。普段険しい表情をしていることが多い田所までも幸せそうな笑顔をしていることに、久賀達は珍しい物が見れたと感心していた。

田所の弟がその結果に崩れ落ちると、生簀が久賀達に近付いてくる。

「どうだ、今度こそ俺の味に……」

「だ〜から、あたしに料理の味でリアクションを求めらなつての。」

3人が生簀の蕎麦に感激している傍で、久賀達だけは相変わらず何時も通りの反応をしていた。どちらの蕎麦に対しても平等のリアクションしか取らない。

その反応に、生簀は勝負に勝ったにもかかわらず悔しそうな顔をする。料理対決には勝っても久賀達に反応させることが出来なかったことが悔しかったのだらう、勝負に負けて試合に勝ったと言ったところだらうか。

「~~~~ツ、まあいい。とにかくこの店の暖簾は貰って行く。」

そう言っただけで生簀は店から出て暖簾を持っていく。だがそれを天道と矢車が引き留める。

「待て、何の為にこんなことをする。」

「老舗の看板や暖簾を奪って、どうするつもりだ？」

二人の言葉に、生簀は自身の野望を口にしていく。

曰く、自分の目的は全ての料理人のプライドをズタズタに切り裂くことだと。

曰く、自分が世界で唯一無二の料理人になることだと。

曰く、自分の料理で世界中の人々を支配することだと。

「やはりお前は腐っている、放っておくわけにはいかん。」

「もう一度勝負しろ、俺達と。」

「いいだらう、お前達にトドメを刺してやる。2度と立ち上がれないようにな。」

久賀達の自宅

「で？　なんであたしの家に来るんだ？」

あの後矢車はいろいろな食品を買い込んだと思ったら、久賀達の家  
に上がり込んで来たのだ。勿論それには彼なりの理由があった。

「あの男が現状唯一出来ていないのは、お前に料理の味でリアクシ  
ョンを取らせることだ。つまり、俺の料理でお前にリアクションを  
取らせることが出来れば……」

あの生簀に勝てると言っことなのだろう。巻き込まれる形になった  
久賀達に言わせれば、『下らん』の一言で済ませるだろうが。

ともかくにも、久賀達協力の下矢車の料理修業が始まった。

「鰯の煮付けだ。食べて見てくれ。」

矢車が早速皿に料理を盛って久賀達に食べさせた。久賀達はそれを  
口にして……

「うん、美味しいな。」

いつも通りの反応をした。

彼女にリアクションを取らせることが出来なかった矢車だが、諦め  
ずに久賀達に次々と料理を持っていく。だがそのどれに対しても久  
賀達は似たような反応しか示さない。いや、正確に言っと……

「美味しいな。」

「うん、いける。」

「まあまあだな。」

「ふむ……」  
「……………」

と言った感じに、回数を重ねるごとに反応が逆に鈍くなっていった。この状況に矢車は次第に焦る、何時もなら久賀達も淡泊なものながら何かしらの反応を見せるのだが、もはや頷く程度の反応しか見せない。

「もしかして、不味かったのか？」

「そうじゃなくって……………はあ。」

焦って尋ねてくる矢車に、久賀達は大きく溜め息を吐く。正直な話今の矢車の料理は進んで食べたいと思うものでもなかった。何しろ何時もと味が違うだけではない、一々反応を観察されるのだ。これでは食事を楽しむことも出来やしない。

「あんな、ハッキリ言わせてもらうけど……………あたしが食べるのは純粹に食べることが嬉しくて楽しいからだ。それだつてのに何で一々食べる毎に反応を観察されなきゃならないんだよ、面倒くさい。」

久賀達からの辛口コメントに、矢車はがっくりと肩を落とす。焦りで目の前が見えなくなり、何がダメなのかも分からなくなってしまった。そんな矢車の目の前に、久賀達は彼の作った料理を差し出す。

「食ってみる自分で。この間あたしらが言いたいことがなんとなくだけど分かるかもしれないぞ。」

久賀達に促され、矢車は自分で作った料理を口にしてみる。とは言え一度は味見をしているのでいまさらという気もしたのだが。

「・・・・・・・・ん？」

自分の料理を自分で食べて見て、矢車は違和感に気付く。いくつか料理を食べる内に、それが何なのか漸く分った。

「なんだこの料理は、ハーモニーの欠片もない・・・・・・・・これが俺の料理なのか？」

その料理は素材それぞれがバラバラに味を主張し、統一性の欠片も見られなかった。それはいつも彼が信条としているパーフェクトハーモニー・・・完全調和とはかけ離れたものだった。

「ああ、そっか・・・ハーモニーがなかったんだ。だから今の前の料理にはどこか違和感があったんだな。」

久賀達はそこまで言うと、矢車に向き直って口を開く。

「お前が料理に対してどれだけ拘りを持つてるかは、あたしも少しくらいなら知ってる。でもよお、お前の作る料理つてのはお前ご自慢の『パーフェクトハーモニー』が一番の売りなんじゃないのか？」

久賀達の言葉は矢車の心に深く突き刺さる。自身が一番大事にしていたことを、こんなにも簡単に忘れてしまっていたのかと。そしてそれを自覚すると同時に、矢車は急いでその場から立ち去って行く。何か思うところがあるらしい。

もつともその目には先程までとは違う何かが宿っていたので、もう心配はいらないだろうと久賀達は一安心した。これでまたいつもの矢車の料理が食べられる・・・と。



ちなみに余談だが、矢車が置いて行った料理の残りは全て久賀達の胃袋に収まったとか。

## 第29話 料理と言つモノ（後書き）

思いの外長くなってしまいましたが、生簀との料理対決は次回決着です。矢車も参加しての料理対決がどうなるのか、お楽しみに。

### 第30話 決着の味噌汁

翌日

どこかのスタジアムの特設キッチンにて、一昔前の貴族のような派手な格好をした加賀美 陸の司会による闇キッチンが開催されていた。闇キッチンとは決められたお題による料理対決、負けた者は料理人としての地位と名誉を全て失うと言うものだった。

今回のお題は味噌汁。勝負は生簀対天道・矢車の3人で行われる筈だったのだが……

「対戦者はどうしたのかな？」

天道と矢車、二人の姿は見当たらなかった。生簀はそれに尻尾を巻いて逃げたのではと口にするが……

「俺が相手だ！」

その場になんと田所がやってくる。どうやら彼が二人の代わりに勝負するらしい。鉢巻きにエプロンと言う衣装の組み合わせから何かいろいろいるとミスマツチな格好をした田所が、長年封印していたと言う包丁を取り出すが、それは完全に錆びついていた。

陸も呆れる中で田所が慌てて包丁を研いでいると……

天道と矢車がその場にやって来た、その顔には自信があふれている。

「ほお、逃げなかったただけ誉めてやろう。」

余裕の表情を見せる生簀に対し、天道は白い鞘に収まった包丁を取り出した。それを見て生簀の顔は驚愕に染まる。

「それはっ！？ 伝説の・・・白包丁！」

生簀が驚く中で天道は包丁を鞘から抜く。

そして料理対決が始まった。

生簀は手際よくフグを捌いていく。それに対して天道は白包丁で大根を捌こうとするが、その時になってようやく包丁を研ぎ終わったらしい。田所が使ってくれと天道に包丁を差し出した。

天道はそれを快く受け取ると、改めて大根を捌きだした。それを見て生簀はほくそ笑む。

（馬鹿め・・・大根だと？ そんな平凡な味噌汁でこの俺に勝つつもりか？ それにあいつは何をしてるんだ、さつきから。）

生簀が見る先の矢車は、一切食材を捌いていなかった。ただ何かを煮込み、赤味噌と白味噌を混ぜ合わせているだけだった。

（俺の超絶味噌汁の味を味あわせてやる！）

生簀はすでに勝利を確信していた。

そして味噌汁は完成する。生簀の味噌汁はフグを使った贅沢な一品それを飲んだ瞬間、陸は天使の羽と輪っかを着けて生簀の味噌汁を称賛する。

次に陸が口を付けたのは天道が作った味噌汁、見た目は大根を使った何処にでもある普通の味噌汁だった。

陸は早速それを口にしますが、口を付けるとその瞬間口を付けた姿勢で固まった。生簀がコメントのしようもないほど不味いのかと問いかけると……

「違う……表現のしようがない。この味噌汁の味は、天国の上に位置している！ 私に言えることはただ一つ。この味に比べたら……お前のは……豚の餌ああっ！」

そう言っ陸が浮かび上がって行くところで、矢車がその足を掴んだ。

「ちょっと待て、飛び上がるのは俺の味噌汁を飲んでからだ。」

そう言っ陸を下した矢車は、自分の味噌汁をすすめる。彼が作った味噌汁は何ともシンプルな出来だった。具などは一切なく、ただ味噌汁『だけ』があるものだったのだ。

陸は黙っそれを飲んで見る。すると……

「なんだこれは……何とも摩訶不思議な味だ。味はシンプル、味噌の味。なのに同時にいくつもの味を感じる。言っなれば全ての味が完全に調和し、一つとなっているかのようだ……これぞ正しくパーフェクトハーモニー！ この二つの味噌汁に比べれば……お前のは……豚の餌ああっ！！」

陸はそう矢車の作った味噌汁を評価して、改めて浮かび上がって行

つてしまった。その結果に生簀は愕然となり、二人の作った味噌汁を飲んだ。

天道と矢車、二人の味噌汁を飲んだ生簀には、今まで彼の料理を食べてきた全ての人物（久賀達除く）が着けてきたのと同じ天使の羽と輪っかが着いた。

「これは・・・この大根は、なんだ？ それにこっちの味噌汁の出汁は・・・」

愕然とした生簀がそう口になると、二人はそれぞれ自分の料理の味の秘密を口にした。

「料理の途中俺は外に出て、細切りにした大根をそよ風に晒した。

そよ風にコーティングされて、大根が独特の歯ごたえを生んだんだ。

「俺は料理の初めから、複数の出汁を取っていた。煮干、カツオ節、貝・・・それに加えて味噌も白味噌と赤味噌の2種類を使った。この全てをお互いが阻害し合わないように絶妙のバランスで組み合わせることで、全ての味がお互いを引き立て合ったのさ。」

二人の言葉に、生簀はよろけながら口を開く。

「そよ風を調味料にするとは・・・森を抜け、川を渡ったそよ風が、味噌汁の中を吹きぬけていくっ！ それにもう片方も・・・絶妙なバランスで調和された出汁と味噌の旨味が、口の中で同時に奏でられる！」

「お前は自分の技と味覚に頼るあまり、世界を見ようとしなかった。

「後食材自体もな。料理において最も大事なこと、それは食材を知

り、食材を完璧に生かしきることだ。これぞパーフェクトハーモニー・・・完全調和だ。」

「お婆ちゃんが言っていた。自分に溺れる者は、いずれ闇に墮ちる。この勝負・・・俺の勝ちだ。」

「俺『達』・・・な。」

天道と矢車の勝利宣言に、生簀は素直に負けを認める。が・・・

「俺からも褒美をやるう・・・」

そう言った瞬間生簀の姿は吸血鬼と蚊を合わせたようなワーム、キレックスワームになった。

『死ね!』

「なるほど、そう言うことか。」

「なら遠慮はいらないな。」

いつの間にか場所に移り、二人と1体がいるのはどこかの競技スタジアム。ワームと相對している天道と矢車の下に、それぞれのゼクターがやってくる。

「『変身!』」

《《Henshin》》

《Change Kick-Hopper》

二人がカブトとKホッパーに変身したのとほぼ同じ頃、スタジアムの別の所ではザビー・サソード・ガタックが複数のサナギ体と戦っていた。

何故この3人が揃っているのか？ それは神代の動向を加賀美が観

察し、そんな加賀美が妙な行動を起こしたりしないように久賀達が見張っていたところで、数人の女学生がワームに襲われたからである。

ライダーフォームのガタツクとサソードの二人は自身の武器でサナギ達を切り裂き、ザビーはひたすらにマスクドフォームのパワーでサナギ達を圧倒していく。

サナギ体は完全に3人のライダーに圧されており、この時点で勝敗は明らかだった。

一方のカブトとKホッパーも、ワームに対して有利に戦っていた。カブトはカウンター主体で戦い、Kホッパーは多彩な蹴りでワームを寄せ付けない。

何時しかワームはKホッパーとカブトに挟まれる形になり、今はちよつと二人からある程度距離がある中間地点に位置していた。ある程度ワームにダメージを与えたと判断したカブトとKホッパーは、トドメを刺すべく必殺技を発動する。

《One Two Three》

「ライダージャンプ。」

《Rider Jump》

カブトが順番にスイッチを押ししていく中でKホッパーはライダージャンプで跳躍した。

「ライダーキック！」

《Rider Kick》

「ハアッ！」



そしてKホッパーのライダーキックが炸裂すると、ワームはカブトに向かって吹き飛ばされていく。

「ライダーキック・・・」

《R i d e r K i c k》

「ハッ！」

そしてタイミングを見計らったカブトのライダーキックを受けて、ワームは赤い炎を上げて爆発する。なし崩し的とはいえ二人の息が合った見事な連携であった。

その頃もう一方でも、戦いに決着が付いていた。ガタツク・サソードの剣技とザビーの攻撃で、サナギ達は一掃されていた。

そしてその場にいるのが3人だけになった時、神代は変身を解いて口を開く。

「あまり多くを語るつもりはないが、俺から言えるのはただ一つ・・・全てのワームは俺が倒す。」

「・・・お前自身も、ワームなのにか？」

「そうだ！」

神代はガタツクの言葉に答える、その姿をスコルピオワームに変えた。それを見て一瞬身構えるガタツク、だがスコルピオはそれを気にせず話を続ける。

「俺は嘗て、姉さんを守れなかった。だが！ 今度こそ俺は、ミサキーンを守り、そして・・・全てのワームをこの手で倒して見せる！」

スコルピオの強い意志が感じられる言葉に、ガタツクは圧倒される。そして何故そこまでするのかと聞こうとした、その時……

「ハアツ！」

「天道?!」

「大丈夫か、久賀達？」

「矢車、なんでここに？」

タイミング悪くカブトとKホッパーがやって来てしまった。おそらくスコルピオの存在に気付いて急いでやって来たと言ったところだろうか。

「止める天道!？」

ガタツクはカブトを止めようとするが、彼は聞く耳を持たない。ガタツクを振り払って以前としてスコルピオに攻撃を加えていく。

そこにザビーが乱入、スコルピオを守るように立ちはだかった。

「お前、何のつもりだ？」

「久賀達、これは一体……」

「今回の事……あたしに免じて退いちゃくれないか？ ちつとばかりし事情が複雑でなあ……」

そしてザビーはスコルピオにその場から離れるように促す。流石にこの場で正体を明かすといろいろと面倒な事態になりかねない、スコルピオもそこは分かっているのかクロックアップでその場から離れて行く。

そしてスコルピオが逃げている間、ザビーとガタツクはカブトの前に立ちはだかり続けていた。

「お前達……正気か？」

「あたしは……何時でも正気さ。」

ザビーはいつもと変わらない様子でそうカブトに返した。それに対してガタツクはしばし自身の拳を見つめて、迷う素振りを見せた後……

「う、うおおおおおおっ！」

雄たけびを上げながらカブトに向かってパンチを放つ。カブトもそれに對して正面からパンチを放ち、両者のパンチがぶつかり合つて小さな爆発が起こった。

その瞬間、ザビーとKホッパーはカブトとガタツクに注目していた為気付かなかつたが、少し離れた所からカブトと非常によく似たライダーがその場の全員を見つめていた。

### 第30話 決着の味噌汁（後書き）

と言う訳で第30話でした。矢車さんの料理はやっぱりパーフェクトハーモニーが最大の武器だろうと言う事で、このようになりました。

ついでにカブトとキックホッパーの連携も今回炸裂。思えば以前カブトとドレイクの連携を見せる事が出来なかつたので、代わりと言つては何ですが今回二人を連携させてみました。原作だとトリプルライダーキックのところ以外ではこの二人が協力することが無かつたので。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

### 第31話 ひよりの正体

高架下・林

カプトとガタツクは、スコルピオワームのことについてお互いぶつかり合っていた。ガタツクはスコルピオの正体が神代であることを知っている、だがそれを言えばカプトは人間の姿の神代を襲うかもしれない。それがガタツクに判断を迷わせていたのだ。

しばらくそれを見ていたザビーだが、流石にこのままでは最悪の事態になりかねないと止めに入る。

「そこまでだお前ら！」

ザビーは二人の間に入って、戦いを止めようとする。だがそれにカプトが納得しなかった。

「久賀達、お前何を知っている？ どうして加賀美とそろってあのワームを庇うんだ？」

「今はそれを言うべき時じゃない。無駄に場を混乱させるよりは……」

ザビーがそこまで言った時、突然猛烈な暴風が3人を薙ぎ払った。

「うわあっ?! な、なんだ今の?」

ザビーは突然の事態に慌てて周囲を見渡す。するとカプトがある一方を見つめていることに気付いた。一体何があるのかとザビーもそちらを見るが……

「？ 何にもないじゃないか・・・」

ザビーがそちらを見た時にはすでに何もなかった、だがカプトには何かが見えていたらしい。一人で何かを勝手に納得していた。

その後、有耶無耶の内にその場から解散した久賀達は、加賀美と矢車からの質問攻めにあっていた。

「久賀達さん、あれは一体どういうことなんです！？ なんでつる、あいつがワームに！」

「俺も聞きたいな、なんであのワームを庇う？ あれは一体誰なんだ？」

詰め寄ってくる二人を宥めると、久賀達はそれに答えていく。

「そのことなただけだな・・・あたしも詳しいことを知ってるわけじゃないんだよ。だからおいそれと口にすることはできないが、一つ言えるのは・・・あいつは敵じゃないってことだけだ。」

「何を証拠にそんなこと・・・」  
「矢車、この間あたしと二人で見たあのワームを覚えてるか？ あの人間を愛したワーム。」

久賀達に言われて矢車は記憶を掘り返す。確かにそんなワームがいた、あれには彼自身かなり驚いたものだ。

加賀美が一人訳が分からないと言った風な顔をしていたので、久賀達が簡単に説明をしてやる。人を愛したワーム・・・そのことに加賀美も驚愕の表情を浮かべる。

「ほ、本当にそんなワームがいたんですか？」  
「この目で見ただ、間違いない。今回のも多分そんな感じだろうけど、本人が喋ってくれるまで待とう。下手に聞き出して面倒な事態になるのだけは避けたいしな。」

そう言つて久賀達はその場を去つていく。矢車と加賀美は去つていく彼女を何とも言えない表情で見つめていたが、彼女の敵味方を判断する際の鼻の良さは付き合ひの長い矢車がよく知っている。ここはとりあえず久賀達に任せようと言つたことで、加賀美にもそう伝えて彼もその場から去つて行つた。

#### ZECT本部・三島の部屋

灯りを落としたZECT本部の一室、そこで三島は何者かと連絡を取り合つていた。

「そうか……警備を厳重にして保管しておけ。決して奴らには気付かれるな。」

奴ら……と言つのは間宮率いるワーム達だろう。彼は利害の一致から彼女達と手を組んでいるが、そこには信頼関係など一切ない。むしろお互いを警戒し合っているくらいだ。

「奴らとは……私達のことか？」

三島が報告を受けて通信を切ると、突然何者かが声をかけてくる。彼がそちらに振り向くと、そこにはワーム達のリーダー、間宮 麗奈がそこにはいた。彼女がいるとは思つてもみなかつたのか、三島

も驚愕している。

「貴様……何時の間に？」

「遂に完成したようだな……ハイパーゼクター。」

三島の質問を無視して、麗奈は先程の三島への報告の内容を言い当てた。

ハイパーゼクター……それは現存するマスクドライダーシステムをさらに強化するゼクターである。それがあれば全てのワームを倒しきることすら可能かもしれない。

だが三島は麗奈の言葉に、知らない振りをする。

「何のことだ？」

「とぼけても無駄だ。しかし……惨めなものだな。」

麗奈は三島を侮蔑するようにそう言った、彼はその言葉に彼女を睨みつける。

「すでに【ハイパーカプト】が現れたと言うことは……やがて、ハイパーゼクターは、カプトに奪われる定め。」

そこまで言っただけで麗奈は自分で言ったことが余りにも可笑しかったのか、思わず嘲笑してしまう。三島はそれに対して忌々しそうに口を開いた。

「そこまで分かっているならそれを阻止しろ！」

「……して下さいだろう？」



三島の物言いに麗奈がそれまでの笑みを消して、冷たい表情で三島を睨みつける。三島もそれに睨み返していると……

「ッ!？」

出し抜けに暗がりから人影が飛び出してきた。それは一直線に麗奈に向かつていき、拳を振り上げている。麗奈はそれを見て咄嗟にワームの姿になると右手を相手に突き刺そうとする。

ワームと人影がお互いに右腕を前に突き出して相打ちになるかと思われた瞬間、どちらも相手に攻撃が当たる直前で動きを止めた。

しばしその状態で双方ジツとしていると、ワームの方が麗奈の姿に戻った。

「……まあいい、まずは……あの女を使おう。」

そう言って麗奈はその場を去っていく。あとに残されたのは彼女の後ろ姿を依然として睨みつけている三島と、

所々がカブトに酷似した、黄金のライダーだけだった。

### 立ち食い蕎麦屋

昼時になって昼食を取ろうと街をぶらついてた久賀達は、偶然にも岬と出会った。お互いの目的が昼食と言ったので、折角だから岬の行きつけの蕎麦屋に来ないかと誘われたのだ。

一瞬田所の店かと思ったが、どうやらそことは別にある店だったら

しい。

二人が店の暖簾をくぐり、各々注文すると……

「おじさんじゃない、俺は蕎麦の世界でも頂点に立つ男だ。」

そこにいたのは法被を着た神代 剣だった。それを見た二人は呆れた、こんな所で一体何をしているのかと。

「あなた何してるの?!」

「……あつ、お前この間法被着てたけど此処のだったのか。つてかホントに何してんだこんなところで?」

「ミサキー又に喜んでもらおうと思つて俺が作つた。どんな調味料にも勝る俺の愛情がたつぷりと入つてる、食べてくれ!」

そう言つて神代が出したのは、丼などと言つ言葉では控えめ過ぎるほどの大きさの器に、伊勢海老の天ぷらと共に入つた大盛りの蕎麦だった。並みの人間だつたら見ただけで腹が膨れるだろう。久賀達はこれを見て流石に呆れ果て、対する岬は……

「愛情の押し売りは迷惑よ、それにあたしはかけ蕎麦しか食べないわ。」

そう言つて岬は店から去つていく。神代はそれにがっくりと肩を落として椅子に座り込み、久賀達はと言つと……

「なあ神代、コイツ貰つてもいいか?」

岬が食べなかつた蕎麦に手を出そうとしていた。実際これだけの蕎麦を食べないと言つのはもつたないだろう。

だが神代はこれを拒否した、彼としては岬に食べてもらいたかったのだからある意味それは当然だろう。

「駄目だ！ これはミサキーヌの為に作ったんだ、お前などには絶対やらん!？」

「別にいいだろうが、残すのももったいないしよあ。」

「駄目なものは駄目だ!？」

「はあ……ん？」

神代とそんな風に問答していると、第3者の気配を感じた。何気なく視界の端にその人物を捉えると、そこにいたのは神代の執事だった。

(………初めてのお使い………)

彼の様子に久賀達がそんなことを考えていると、執事の老人に加賀美が近づいて来て執事とどこかへ行ってしまった。まあおおよその見当はつくが……

「………なあ神代、お前つて………」

久賀達が神代に対して口を開いたその時、突然彼女の携帯から着信音がした。

「ああっ!？ ったくなんだよいきなり。はい、もしもし？」

電話の相手は大和だった。どうやらワームが現れたらしく、急いでそちらに向かってほしいとのことだった。

「現場近くの部隊も応戦してるがかなり手こずっている、急いでくれ！」

「了解、やれやれ・・・飯くらい食わせてくれよったく。」

そうばやきつつ久賀達は急いでその場から去って行った。

高架下

現在ZECTのチームの一つが、複数のサナギ体と戦闘を繰り広げていた。相手はサナギばかりで成虫体がないとはいえ、曲がりなりにワーム。それも複数いる為彼らも苦戦していた。そこに・・・

「A小隊、あたしと一緒に突撃して現地部隊を助けるぞ。B、C小隊は援護しろ。」

『『『了解！』』』

ザビーが率いるシャドウ第2番隊がやって来た。

ザビーがワームを蹴散らし、A小隊の隊員が怯んだワームに集中攻撃してトドメを刺す。そしてザビーから少し距離があるワームに対しては、B、C小隊が援護射撃を加えてその場に釘付けにした。

特に神田と葛西の持つガトリングガンの威力が凄まじく、運の悪いワームなどはこれによる射撃だけで倒されてしまっている。

そして何時しかその場にはサナギ体が1体だけ残されていた。ザビーがサナギ体に近付くと、相手は人間の姿に擬態して命乞いを始める。

「ま、待ってくれ!? 俺が悪かった、もう人間は襲わない! だから・・・だから、助けてくれ!」

相手の言葉に耳を傾けることもせず、ザビーは擬態したワームに近付いて行く。その姿に相手はさらに恐怖して、必死に命乞いをする。

「お願いだ、頼む! 頼むよ、助けてくれ!」

「・・・」

ザビーはある程度擬態したワームに近付くと、彼女は立ち止って口を開いた。

「これからはもっと静かに暮らす事だ、そうすりゃ騒ぎも起きないしな。」

それだけ言うとザビーは踵を返した。その様子に一般部隊の隊員は驚くが、彼女の部下は特に動揺もしない。

そしてザビーが擬態したワームからある程度離れた時・・・

「馬鹿め!」

相手はワームの姿になりザビーに襲いかかった、それに一般部隊の隊員は即座に銃口を向けようとすがそれよりも早くにザビーのハイキックがワームを蹴り飛ばす。

「・・・馬鹿はお前だ、撃て。」

ザビーの命令と共にシャドウ隊員が一斉にワームに向けて銃撃を開始した。一切の情けも容赦もない銃撃、瞬く間にワームは蜂の巣に

なり爆発してしまった。

「よしっ、任務終了。撤収する。」

『ハッ！』

ザビーの号令と共に即座にシャドウ隊員はその場から離れていく、それを一般部隊の連中は呆然と見ているしかなかった。

緑地

サナギの群れを殲滅した久賀達は、部下と別れた後適当に食べるモノを買って食べ歩いてきた。考えてみれば昼食を食べようと思っていた矢先の出来事だったので、空腹で仕方が無い。

久賀達がハンバーガーショップで買ったバーガーを食べながら緑地を歩いていると、彼女の目にあるモノが見えた。

「あん？ あれは……天道に加賀美、それと……ってヤバッ！？」

そこには複数のワームと戦っているカプトとガタック、そしてワームに襲われそうになっているひよりの姿があった。

久賀達はそれを見て急いでバーガーを口に突っ込んで飲み込むと、ザビーゼクターを呼び出して変身しようとする。

「変し……」

だが彼女が変身しようとしたその時、ひよりの体から光が溢れだす。

そして次の瞬間、ひよりの体はカゲロウのようなワーム・・・シシー  
ラワームに変異していた。

「なっ?! おいおいマジか・・・」

あまりの事態に久賀達も啞然としている。彼女がそうなのだからカ  
プトやガタツクはもっと驚いていた、二人とも信じられないと言っ  
た雰囲気を出している。

久賀達はそんな彼らの様子を、少し離れたところから呆然と眺めて  
いた。

### 第31話 ひよりの正体（後書き）

今回コーカサスが少しだけ登場しました、これ以降またしばらく登場しなくなると思いますが、登場の時に楽しみにしてください。

それでは。



### 第32話 捕獲命令

緑地

久賀達は依然として呆然としていた、すでに人間社会に溶け込んでいるワームと言うのを彼女も知ってはいたが、流石に見知った人物が実はワームだったなどと言うのは彼女の想定を完全に超えている。

久賀達がそうしていると、シシーラワームはその場から急いで離れて行き、カブトはウカワームと再び戦い始める。そしてガタツクはやりきれない思いを吐き出すかのように、マスクドフォームに戻ると叫びながらガタツクバルカンで辺りのサナギワームを一掃してしまった。

「ッ！？ おっと、ぼんやりしてる場合じゃなかった。」

ガタツクの叫びと掃射に我を取り戻した久賀達は、急いでシシーラワームが走って行った方に駆けていく。とにかく今は彼女と話をしなければならぬ。

だが一瞬出遅れてしまったことが災いしてか、残念ながら久賀達がシシーラワームと話をすることは出来なかった。

「ああ、くそっ！ 何やってんだか全く、それにしても……まさかあいつがワームだったとはな。何がどうなってんだよ、ホントに。」

久賀達はひよりと合流できなかつた事に悔しげな顔を見ると、溜め息を吐きながらその場を離れていく。これから自分はどうするか、

そんな事を考えながら・・・

ZECT本部

久賀達は影山と共に三島に呼び出されていた。また新たな任務が言い渡されるといふ久賀達の予想は当たっていたが、その内容は驚くべきモノだった。

「新たなワームだ。」

そう言つて三島はノートパソコンの画面を二人に向ける。影山が画面に映し出されている女の映像をアップにすると、そこには二人も知っているひよりの顔があった。

「この女は・・・」

(ゲッ、マジか・・・)

久賀達が内心で苦い顔をしていると、三島から奇妙な命令が言い渡された。

「間宮 麗奈が不穏な動きを始めている、奴らより先に捕獲しろ。」  
(捕獲？ 殲滅じゃなくてか?)

三島は言いたい事を言い終えると、二人に背中を向ける。もう話は終わりと言う事だろう。久賀達は首を傾げつつ、影山と共にその場から去つて行った。

三島の部屋から出てしばらくした所で、影山は久賀達に話しかける。

「久賀達さん、あの女って確か・・・」

「天道や加賀美と仲がいい奴だよ、あたしも何度か会った事がある。」

それを聞いて影山の表情に影が落ちる。知り合いがワームだったという状況に、久賀達がどう行動するか心配になったのだろうか。

「久賀達さんは・・・その、えっと・・・」

「・・・あたしはZECTのライダーでシャドウの隊長だ、命令には従うさ。」

「久賀達さん・・・」

確かにひよりがワームだったと言う事には驚いたが、自分はいくまでもZECTのライダー。組織がひよりを始末しろと言うなら始末するし、捕獲しろと言うなら捕獲するだけのこと。少なくとも公私を分けるだけのメリハリはあるつもりだった。

「行くぞ。」

「はいっ！」

久賀達に促されて、影山は彼女の後に続いていった。

海岸

ひよりは両親の墓がある海岸に来ていた。自分がワームである事を知り、もはやどうすればいいのか分からなくなってしまったのである。

だがひよりが墓に向かうと、そこには天道が来ていた。彼はひより

の両親の墓に花を添えてくれている、その様子にひよりは天道に近付こうとするが、自身がワームである事を思い出して思いとどまりその場から去って行く。

そして墓から少し離れた海岸に出た時……

「俺と一緒に来てもらおう。」

彼女の目の前に影山が現れた。ひよりは後退りして彼から距離をとるが、すぐに彼の部下に銃口を向けられて身動きが取れなくなる。

「来い！」

このまま連れて行かれてしまうのかとひよりが考えたその時、第三者の声はその場に響いた。

「随分威勢がいいなあ、影山 瞬。」

「ッ！？ 貴様！」

影山が後ろを見ると、そこには間宮 麗奈の姿があった。彼女は影山を見下しながら口を開く。

「その女をこっちへ渡して貰おう。」

「なんだと？ そんな話は聞いていない。」

「それはお互い様だろ。」

間宮がそう言うと同時に、その場に旋風に紛れてコノハ虫の様なワーム・・・フォリアアスワームが現れる。さらに複数のサナギ体までもが現れ、シャドウ隊員はすぐさま戦闘態勢をとる。

両者が睨みあい一触即発の状況になる中、突然そこにガタックに変身した加賀美が乱入してきた。

「待てっ！」

ガタックはひよりの近くにいる隊員を薙ぎ払うと、彼女を守る様に立ち塞がった。

「ひよりをお前達の好きにはさせない！」

「そいつはワームだぞ、ワームを庇うつもりか？」

「それは何かの間違いだ、ひよりはワームなんかじゃない！」

加賀美がそう叫ぶと、間宮が彼に向かって口を開いた。

「相変わらず暑苦しいな。」

「組織に逆らう者は許しておけない、撃てっ！」

影山の命令で、一斉にガタックに銃撃を開始するシャドウ隊員。ガタックは両手を広げてひよりを守り、銃撃をまともに受けてしまう。その様子を見ながら影山はPホッパーに変身した。

「変身！」

《Henshin Change Punch-Hopper》

影山がPホッパーに変身すると同時に、間宮もウカワームの姿になる。そして他のワーム達もガタックに向かおうとしたその時、ワーム達に銃撃が行われた。

『何っ！？』

「ッ！？ 久賀達さん！」

そこにいたのは久賀達率いるシャドウ第2番隊、彼女達は影山率いる第3番隊の後ろにつくとワームと戦い始めた。

「影山、あいつらはあたしの部隊が引き受ける。お前は目標の確保を優先しろ。」

「了解です！」

「変身！」

《Henshin》

久賀達は影山に指示を出すと、ザビーに変身し部下と共にワームと戦い始めた。だがいくらザビーと第2番隊と言えど、全てのワームを抑えきることは出来なかった。サナギはともかくとして2体いる成虫体の内、フォリアタスワームに突破を許してしまう。

「チツ、あいつ！」

『お前の相手は私だ。』

ザビーは即座に部下にフォリアタスワームを止めるように指示しようとするが、ウカワームが向かってきた事でそれを断念。こいつの相手は久賀達と言えどもかなり大変なのだ。

「クソツ、影山！ 何体がそっちに行つたぞ、気を付ける！」

「はいっ！」

ザビーがPホッパーに警告をすると、すでにPホッパーはガタツクと複数のサナギ体を相手に奮闘している。彼の部下は必死になつてひよりを確保しようとしているが、サナギ体も同じ目的で動いている為お互いにお互いの邪魔をして上手くいっていない。

その時、その場に神代がやってくる。その手にはサソードヤイバーが握られていた。

「我が友、カ・ガミ！」

「剣!？」

「何だ、今の変な呼び方？」

ガタツクとザビーが神代の方を見ると、彼はなおも近付いてくる。

「今こそ君の、気高き友情に応える時！ 変身！」

《Henshin》

神代はサソードに変身すると、サソードヤイバーを振るってサナギ体を切り裂いて行く。

「まったく、今の状況分かってんのかよあいつ。キャストオフ！」

《Cast pff Change Wasp》

ザビーは突然のサソードの登場に愚痴を言いながら、キャストオフしてライダーフォームになる。それを見てガタツクとサソードもキャストオフし、その際に数体のサナギ体が吹き飛ばされた。

ガタツクはガタツクダブルカリバーでサナギ体を斬り払い、サソードはフォリアアタスフォームを相手に戦っていく。そしてPホッパーはサナギ体を薙ぎ払いながら着々とひよりに近付いて行った。

ザビーはウカワームと互角に戦っていたが、ひよりの方を見てガタツクがすでにひよりの守りにについているのを目撃する。するとここで彼女は思い切った命令を出す。

「戸高、撃て！」

ザビーは戸高に向けてそう言いながら顎でガタツクと、彼とひよりを囲んでいるサナギ体を顎でしゃくる。それを見て一瞬戸惑いながらも彼らはザビーの命令に従って、一斉にそちらに銃撃を開始した。

「う、うわああああっ?!」

突然の横合いからの銃撃にガタツクも怯み、サナギ体も複数が倒される。その隙を見逃さずPホッパーがガタツクを殴り飛ばして彼の部下がひよりを確保する。

「目標、確保しました!。」

「よしっ、久賀達さん!」

「上出来だ、お前達はさっさと行け! あたしはコイツを片付ける!」

「ひより?!」

ザビーの言葉にPホッパーが部下達と共にひよりを連れて行く、ガタツクが叫び声をあげてそれを止めようとしたその時・・・

「ハッ!」

「なにっ?! くわあっ?!」

「影山!?!」

突然カブトがその場に現れて、ひよりを取り押さえているシャドウ隊員とPホッパーを薙ぎ払ってしまう。ザビーがそちらを見ると、カブトはフルスロットを押しながらひよりに近付いて行く。

《One Two Three》



「ライダーキック・・・」  
「お前まさか?!」

カブトが行おうとしている事にガタックが気付き声を上げるがもう遅い、カブトが近付くとひよりはワームの姿になり、カブトはライダーキックを発動する。

《R i d e r K i c k》

「ハアッ！」

「止めるお!？」

ガタックの叫びも虚しく、ライダーキックはシシーラワームに直撃。ひよりだったワームは爆発してしまった。

「あ、ああ・・・」

(天道がひよりを殺した・・・のか?)

ガタックがその様子に呆然とする中、ザビーは何か釈然としないものを感じていた。何かが引つ掛かる。

「まあいい、影山！ 作戦は失敗だ、撤退するぞ。」

「え!？ あ、はい！」

P ホッパーはザビーの声に反応すると、即座にその場から撤退を開始。ザビーも部下を引き連れてその場を離れていった。

「久賀達さん、どうしますか？」

「とりあえずあれを見たら作戦は失敗だったと報告するしかないだろう。悪いが、一足先に戻っててくれないか？ ちょっと確認したい事があるんだ。」

「分かりました、でも一体？」

変身を解除した影山は、同じく変身を解除した久賀達にそう問いかける。彼女はそれに『野暮用さ』とだけ言ってその場から離れていた。

### 海岸近くの教会

影山と別れた久賀達は、ザビーゼクターに天道を捜させた。今まで彼は何度となくひよりを守る様な行動をとっていた、その彼が戸惑いもなく彼女を手にかけるとは考えにくい。となると考えられるのはただ一つ。

(演技・・・だろうなあ、でもどうやって?)

そこだけは久賀達にも分からなかった。あの瞬間どう考えてもライダーキックはシシーラワームを捉えていた、となれば確実にひよりは死んだ筈。だが久賀達にはどうにもあの光景に違和感があったのだ、特に何が見えたと言う訳ではないが、彼女の鋭い野生の勘のようなものだ。

そしてザビーゼクターが天道を見つけ、久賀達がそれについて行きこの教会に入る。案の定そこに天道とひより、そしてその近くで隠れているらしい加賀美を見つけた。

久賀達が音もなく教会に入ると、天道がひよりに何かを話している。気配を消して聞き耳を立てると、二人の会話が聞こえてきた。

「・・・でも何の為にそんな事を？」

「あいつらにひよりは死んだと思わせる為だ、これでもう追われることはない。」

( やっぱりあれは演技だったってことか、それにしても一体どうやったんだ？ 肝心のところを聞きそびれちまったか・・・ )

どうやら一足遅かったのか、どのようにして天道がひよりを殺したように見せかけたのかは分からなかった。

その後も久賀達が聞き耳を立てていると、驚くべき事が分かる。ひよりは天道の妹だと言うのだ。

なんでも天道の旧姓は日下部で、天道は彼を引き取った人物の姓であるとの事。そして彼の本当の両親は、ワームに擬態されて殺されてしまったらしい。

ひよりはその際に天道の母親のお腹にいた赤ちゃん、生まれてくる筈だった天道の妹に擬態したワームだと言うことらしい。

そしてその彼の両親に擬態したワームも、7年前の渋谷隕石の落下で命を落としたと言う。

「お前は俺の妹だ、生まれる前に殺された・・・ たった一人の妹だ。俺が助けなくて誰が助ける？」

「でも、僕はワームから生まれたんだな。」

「心配はいらない。もう店には戻れないが、お婆ちゃんがお前を引き取ってくれる。」

天道はそう言ってひよりに微笑みかけると、何かに気付いてそちらを見る。そこには加賀美の姿があり、天道は急いでそちらに向かうと加賀美を連れて教会の外に出ていった。その場に残されたのは、

椅子に座っているひよりと隠れている久賀達だけだった。

(さて……どうしたもんか。)

これを見て、久賀達は今後の行動をどうするか迷ってしまった。本来ならばこの事を報告してひよりを確保すべきなのだろうが、久賀達の心がそれに待ったをかけてしまう。

(家族……か、どうすりゃいいんだろうな。)

家族……それは久賀達がすでになくしてしまったモノ。両親は事故で、たった一人の妹はワームに……。その事を考えると天道にもどこか親近感の様な物を覚えてしまい、理性的な行動がとれなくなってしまう。

久賀達がどうするか悩んでいると、教会の扉が開く音がする。随分と早く戻ってきたものだ。久賀達がそちらを見ると、そこにいたのは天道ではなく間宮の姿だった。

(あいつ!?)

久賀達とひよりが驚愕する中、間宮はひよりに近付きながら口を開いた。

「騙されるな、天道 総司の言う事は所詮……絵空事だ。」

「僕は……あいつを信じたい。」

「ほう？ だが……私をここへ誘ったのは、あいつだぞ。」

間宮の言葉に久賀達は顔を顰める。天道がそんな事をするとは思えない、となれば彼女はただ単に天道の後を付けただけだろう。

久賀達がそう予想していると、間宮はさらに言葉を続ける。

「奴は……お前を売ったのだ。」

彼女の言葉に、ひよりは困惑した表情になる。天道を信じたいと言  
う想いと、本当に天道が自分を売ったのではという疑念がせめぎ合  
っているのだ。

その様子に我慢できなくなった久賀達は、二人の前に姿を現す。

「吹くじゃねえか、単に天道を尾行しただけのくせに。」

「お前は……」

「久賀達 時雨……何時から居た？」

「天道とそいつが話してる時から。こいつに天道を捜させてな。」

そう言つて久賀達はザビーゼクターを呼び出して、手に持つとその  
頭をゆっくり撫でる。ザビーゼクターは嬉しそうに羽を鳴らした。

しばしゼクターを撫でた久賀達は、間宮を睨みつけながらひよりに  
声をかける。

「あたしはハッキリ言つて天道が嫌いだ、だが同時にあいつが他人  
を売る様な奴じゃない事も良く知ってる。嫌いな奴だからこそ、そ  
う言つ良いところつてのがよく見えるもんさ。」

そう言つて久賀達はひよりに向かつて軽く微笑む。

「信じてやんな、あいつを……」

久賀達の言葉にひよりは頷く、それと同時に間宮は久賀達を睨みながら殺気を出し始めた。

「ここから出な、ちょっと騒がしくなる。」

「……………ありがとう。」

ひよりは久賀達に軽くお礼を言うと、急いで教会から出ていく。残された久賀達と間宮は相変わらず睨みあっていた。

「よくよくお前は私の邪魔をしてくれるな。」

「悪いな、こういう趣味なんだよ。変身！」

《H e n s h i n》

久賀達が不敵に笑いながらザビーに変身すると、間宮もウカワームの姿になる。

二人は取っ組み合いになりながらも教会から出ると、そのまま戦い始めた。

「フツ、ハツ！」

ザビーが連続でパンチを繰り出し、ウカワームがそれを捌いて行く。対するウカワームも特徴的な右腕を振るってザビーに攻撃を仕掛け、彼女を弾き飛ばしてしまった。

「グッ?! くそっ！」

『フツ……………』

ウカワームが倒れたザビーに追い打ちをかけようとしたその時、ザビーはゼクターを反転させてキャストオフする。

「キャストオフ！」

《Cast off Change Wasp》

キャストオフによって弾け飛んだマスクドアーマーがウカワームにぶち当たり、相手の動きを牽制する。その隙に体勢を整えたザビーは、ウカワームに反撃を開始した。

「フツ、フツ、セイツ、ハアツ！」

コンビネーションパンチから流れるような動作で繰り出されたミドルキックに、流石のウカワームも蹴り飛ばされてしまう。

『ぬう、くっ！』

「ハハツ、まだまだこれからだ。行くぞ！」

ザビーがそう言ってウカワームに跳びかかると、ウカワームは後方に飛び退いてザビーから距離をとる。

「どうした、逃げんのか？ まだまだこれからだろ！？」

『今はお前と遊んでいる場合ではない、お前の相手はまた今度な。』

そう言うとウカワームはクロックアップでその場から逃げて行き、ザビーもクロックアップを発動するがすでにウカワームはその場から離れてしまっていた。

「チツ！ 逃げ足の速い奴・・・」

ザビーは舌打ちしながらそう言うと、変身を解除して久賀達の姿に戻る。久賀達はその場でしばし周囲を見渡すと、興味を失ったかの

よじにその場から離れて行ってしまった。



### 第32話 捕獲命令（後書き）

と言う訳で第32話でした。久賀達は一応公私を分けるタイプです、ただそれでも仕事一徹と言う訳ではなく場合によって柔軟に対応しようとする時もあります。

今回は原作ではキックホッパー初登場の回、でもこの作品では既にホッパーライダーは登場しているのであって……

今回の更新もお楽しみに。それでは。

### 第33話 怒れる蜂（前書き）

どうも、黒服です。今回は遂に原作でキックホッパー初登場の回に相当する話です。後今回影山が頑張ります。

### 第33話 怒れる蜂

#### 久賀達の自宅

この日久賀達は、非番であるにもかかわらず珍しく家に籠っていた。普段だったらあちこち食べ歩きをしている筈なのだが、今日はそんな気にはなれない。と言うのも・・・

「ひよりが消えた・・・か。」

久賀達がウカワームを取り逃がした後、天道達はエリアXで間宮と出会ったらしい。あの研究室の様な部屋があったところだ。

幸いその時は戦闘にならずに済んだらしいが、部屋に入るなり突然海辺に移動させられていたとのこと。何を言っているのかイマイチよくわからなかったが、とにかくそれからというものひよりと連絡がつかなくなってしまったと言うのだ。

なおその時に彼らは一人の男性・・・聞いた特徴からして三島が倒れているのを見つけたらしい。何があったのかを尋ねようとしたが、彼は何も答えずに去って行ってしまったとのこと。

それからというモノ1週間、加賀美は元気が無くなってしまった。ひよりがいなくなってしまった事もそうだが、何より彼女がワームであると言う事が彼を悩ませているのだろう。

どうしたものかと久賀達が考えていると、突然携帯に着信が入った。相手は大和だ。

「あたしだ、どうした？」

『召集だそうだが、すぐにこれから言う所に来てくれ。』

「はあ？ あたしは今日非番だぞ、矢車か影山に回せよ。」

『その二人もすでに召集済みだ。何でもシャドウ全部隊の隊長と、それぞれの小隊一つを集めるだそうだ。』

大和の言葉に久賀達は首を傾げつつ、了解の旨を伝えると携帯を切る。非番が潰れた事に内心で愚痴を言いながら彼女は戸高にA小隊だけを集める様に伝えて指定された場所に向かっていった。

とある工場前

久賀達がやって来たのは、とある廃工場だった。すでに戦闘服には着替えてあり、部隊も揃って準備は万端だ。

工場前には既に矢車達もやって来ていたので、久賀達は片手を上げながら彼らに近付いて行く。

「よお。」

「ああ、久賀達か。大変だなお前も。」

「全くだよ、非番でゆっくりしてたらいきなり呼び出した。ホントにどうしたんだか・・・」

「しかも見てくださいよ、シャドウ以外のチームも集められてるみたいですよ。」

影山が指さす先には、確かにシャドウ以外のチームの姿があった。

その中には加賀美達田所チームの姿も。

その様子に久賀達が首を傾げていると、突然通信が入る。

『ぼやぼやするな、全チームとシャドウは正面より突っ込め。』  
(ん？ 何か聞き覚えが・・・)

久賀達はその通信機から聞こえてくる声に首を傾げる、隣を見ると矢車もその声に違和感を感じているらしい。

とりあえずここにこうしていても仕方が無いので、部下に合図を出して正面から突入させる。

内部にはシャドウの他、多くのチームが整列している。その様子に何ともおかしなものを感じていると、彼女達はあるモノを見つけた。

「あれ？ 久賀達さん、あれって・・・」

「訓練生・・・ブライトルーパーが何でここに？」

そこにいたのは白いボディーマーに身を包んだ訓練生、ブライトルーパーの姿だった、それも複数。通常彼らは訓練時以外は衛生兵として機能している事が多く、マシンガンブレードを持って戦場に來ることなど基本あり得ないのだが・・・

『ワームが一番奥の部屋だ、3分以内に始末しろ。』

「ちよつと待て、何で訓練兵がここにいるんだ。実戦はいくらなんでも早過ぎるだろう。」

『久賀達、文句は会議室で言え。』

「それよりもあんたは誰だ、本部の人間なのか？」

『質問は受け付けないぞ、早く行け。』

通信機の相手に舌打ちすると、久賀達は矢車・影山と共に内部に突入する。他の部隊もそれに続くのだが・・・

「うわあああつ?!」

「た、隊長?!」

「お、降ろしてくれ! 早く・・・」

「影山!?!」

「何だこれ・・・」

内部に突入した影山が床に散乱しているロープの近くを踏むと、出し抜けにロープが足に巻き付いて宙吊りにされてしまった。彼の部下が必死になって降ろそうとするが、如何せん微妙に高い為上手くいっていない。

その様子に業を煮やした久賀達は・・・

「影山!」

「は、はい?」

「ちゃんと受け身とれよ。」

そう言うなり銃口を影山の足を吊っているロープに向けた。

「ちよちよちよつ!?! 久賀達さんちよつと待つ、どわあああああつ!?!」

彼女が何をするつもりなのか理解した影山が慌てて彼女を止めようとするが、無情にも銃弾がロープを見事に撃ち抜いた。当然の事ながら影山はそのまま落下、強かに背中を打ちつけることになる。

「いつてててて、もう少し優しく降ろしてくれても・・・」

「そんな悠長な事言ってる場合か、早く行くぞ。他の連中に後れを

とる。」

久賀達が戦闘に立って先を進む、すると突然上から岬が降って来た。

「うおっ!? お前何処から!」

「どうやらあちこちに色々なトラップがしかけてあるらしいな。」

工場の奥へ進むルートは一つではない、だがこの様子だとトラップに隙はないであろう。

しかしトラップを過剰に警戒しても仕方が無い、このままでは何時まで経っても奥には進めない、久賀達がさらに奥へ進むとしたその時……

カチッ

「ん? へぶっ?!」

久賀達が前に足を踏み出した途端、何かのスイッチを押したような音が聞こえてきた。久賀達がそれに気付いて足を止めると、突然久賀達の顔にパイがぶち当たった。バラエティ等で罰ゲームに使われたりする、あのクリームだけのパイである。

パイがぶち当たったままの姿勢で、久賀達は微動だにしない。

「く、久賀達? 大丈夫か?」

「久賀達……さん?」

矢車と影山がおっかなびっくり久賀達に声をかける、すると徐々に久賀達の方が震えてきて……

「ふっざけんなあああああっ!!??」

「ちよっ!?!? おい久賀達!」

「そんな走ったらやばいですって!」

パイを乱暴に振り落として、そのまま奥に向かって走り出してしまった。慌てて矢車と影山が制止するが、彼女は聞く耳持たず突撃していく。二人と他のシャドウ隊員達も急いでそれについて行った。

## 工場の奥

トラップに引っかかりながらも何とか工場の奥の部屋にたどり着いた久賀達ら3人（彼女達の部下は途中のトラップで已む無くリタイアしている）は、そこに加賀美と一人の訓練生、そして天道の姿を見つけた。

「よお、お前達も着いたんだな。」

「天道!?!? 何でお前がここにいるんだよ!」

「今この二人にも話したが、今回は俺の副官を決めるサバイバルレースだったのさ。」

何でも天道がカブトの資格者として正式にZECTのメンバーに入るらしい、おまけに本部は彼の能力を評価していきなりこのエリアの司令官に任命したとのこと。

どうやら天道はより優れた人物を自分の傍に置く為に、今回の様な事を行ったらしい。

「お前とも知らない仲じゃない、何だったらお前が俺の副官になる



か？」

「~~~~ツ!? ふざけてんのか！」

久賀達がそう叫んで天道に銃口を向けようとした時、加賀美の傍に立っていた少女が何かを取り出して久賀達に向けて投げてきた。

「ツ!?!?」

「久賀達さん!?!」

咄嗟に久賀達はマシンガンブレードを手放してその場に倒れ込む、すると直後彼女の手放したマシンガンが真っ二つに切断されてしまった。

(ワイヤー!? 何持ってんだコイツ!)

「貴様、久賀達さんに何を「動くな、お前の首にも巻かれている。」  
ツ?!」

どうやら本来久賀達に巻かれる筈だったワイヤーが、彼女が避けた事でその近くにいた影山の首に巻かれてしまったらしい。

「なかなかやるな・・・よしっ! お前に決めた。」

天道は自分の副官をこの少女にするらしい、それに彼女はよろこんで飛び跳ねる。下手をすると首が切断されてしまう為、影山もそれに合わせて飛び跳ねざるを得なくなる。

「ちよっ!? 首、首っ!」

「こいつ、ほれっ。」

「あ、ありがとうございます・・・」

影山の首にワイヤーが巻かれている事を忘れていたのか態となのか分らない少女の事を睨みながら、久賀達は持っていたナイフでワイヤーがあるだろうところを一閃する。果たして僅かな手ごたえと共に、影山の首からはワイヤーが無くなったらしい、彼は安心したように首を擦っている。

「まったく馬鹿らしい、付き会ってらんねえな。帰るぞ！」

影山を解放した久賀達は、そのまま踵を返して工場から去って行き、矢車と影山もそれに続いた。

ファミレス

あれから久賀達は私服に着替えた後、イライラを紛らわせるために適当なファミレスに入っていた。ちなみに矢車と影山も一緒である。

久賀達が注文した料理は、何時もの如く山の様の量だった。しかも心なしか何時もより多い気がする。

「随分苛立ってるな。」

「当たり前だ、下らない事で休暇を潰されたんだぞこっちは。」

そう言いながら久賀達は次々と料理を口に運んで行く。その様子を見ながら矢車は彼女の様子に違和感を覚えた。

「なあ久賀達、お前最近なんか変だぞ。」

「あ？」

「いや、どうも近頃の久賀達はどこかおかしい様な気がしてなあ。」

「あ、それ俺も思いました。何かあったんですか？」

二人の言葉に、久賀達はしばし考え込む。言われてみれば最近の自分はどこか好戦的になってきている節があるかもしれない、そしてそうなりだしたのは……

(あの間宮が現れた辺り……か。)

ZECTとワームが次の段階に入った、それが一体どういう結果を招くのかは知らないが、自分に変化が起こったのはあの辺りからだ。だが考えてもそれと自分の変化に関連が見えてこない。

「特に何も無いよ、何もな……」

とりあえず久賀達はそう言って誤魔化す事にする。当然二人は納得できないと言った顔をしていたが、無闇に踏み込んで話さないだろうと考えてこの話題はこれまでにした。

その時……

「全員動くな!？」

その怒声と共に、二人の男性が店内に入ってくる。その手には拳銃が握られていた、もしかしなくても強盗だろう。

店の従業員や他の客は悲鳴を上げながら逃げようとするが、強盗犯たちが天井に向けて1発撃つとすぐに大人しくなる。そして次々と店の隅に集められてしまった。

「これで全員か……ん？」

あらかた店内にいた人を集めてさあこれから金を貰おうとした時、一つのテーブルで未だに食事を続けている人物がいる事に気付く。言うまでもなく久賀達一行だ。

強盗犯の一人は、そんな久賀達の様子に銃を向けながら彼女に近づく。

「おい、お前今の状況分かってるのか?!」

「……………今忙しい。」

強盗からの言葉に、久賀達はそれだけ言って食事を続ける。彼女の態度に強盗は怒気を強めて銃口をつき付けた。

「食つのを止めて、今すぐ他の客と一緒に部屋の隅に行け!」

そう言つて久賀達を銃で小突くと、電光石火の早業で相手から拳銃を奪う久賀達。そして……

「いいかお前1度しか言わないからよく聞いとけ。あたしは今機嫌が悪い、あたしはお前らの邪魔をしないからお前らもあたしの邪魔をするな!」

「あの、悪い事言わないから今の久賀達さんを刺激しない方がいいですよ。」

そう言つて久賀達は奪い取った拳銃を再び男に返した。そして影山は彼女の怒りが爆発しない内に強盗を宥めようとする、だがそれは結果的に彼の怒りの火に油を注ぐことになった。

「テメエ、ふざけんなこのお!?!」

強盗は怒鳴りながらテーブルの上にあった料理の皿をひっくり返す、それを見た矢車と影山の顔は一気に青くなってしまう。

対する久賀達はしばしじつと静止した後、口を持って行こうとしたフォークをテーブルに置き口を開いた。

「おい、矢車、影山……」

「は、はいっ!？」

「………退いてる。」

それからの久賀達らの行動はクロックアップ並みに速かった。矢車と影山は一瞬で隣の席に移動し、二人が退いたのを確認するや久賀達はテーブルを跳ね上げて強盗に直撃させた。

それを見てもう一人の強盗は彼女に銃口を向けようとするが、それよりも早くに久賀達が手に持ったナイフとフォークを彼に投げつける。ナイフとフォークが肩に突き刺さった強盗は悶絶しながらその場に倒れ込み、その隙にいつの間にか彼に近付いていた影山が当て身を喰らわせて強盗犯を沈黙させた。

「はぁ……騒がせたな。」

あつという間に強盗を黙らせた久賀達は、溜め息を吐くと会計のところに迷惑料込みで料金を置いた後店を出ていく。矢車と影山も慌ててそれについて行った。

とある海辺のテラス

あの後影山は久賀達と別れて、このテラスに来ていた。と言うのも

天道の副官になった蓮華と言う少女に突然呼び出されたのである、なんでも天道が彼に用事があるとかで……

本来彼らシャドウは本部の直轄である、故にエリア司令官とはいえ一般部隊の人物に従う義理はないのだが、話を聞く程度なら構わないだろうとこうしてついてきたのである。

「天道さん、お連れしました。」

「何の用です、一体……」

影山が天道にそう尋ねると、彼の口から出てきたのは驚くべき言葉だった。

「ホッパーゼクターを渡せ、今すぐにだ。」

「何っ!? 貴様、本気で言ってるのか!」

「ああ……」

影山の言葉に、天道は当然と言った風に答えた。すると影山の下に、ホッパーゼクターがやってくる。

「冗談も大概にしろ、渡すとも思ってるのか!」

「じゃあ力尽くでいただく。」

そう言つて天道はカブトゼクターを呼び出した、影山もそれに対してベルトのバックルを開く。

「「変身!」」

《《Henshin》》

《《Change Punch-Hopper》》

「ホッパーゼクターは久賀達さんと矢車さん、二人と共に研磨して

きた証。お前如きには絶対渡さん！」

そう言つてPホッパーとカブトは戦い始める。だが戦闘に関してはカブトの方が上を行っているのか、着々と追い込まれてしまった。

「ぐう、クソッ！」

「止める・・・止めるお！ 変身！」

《Henshin》

その様子を見ていられなくなったのか、加賀美がガタツクに変身してPホッパーを救出する。

Pホッパーを救出したガタツクは、そのままカブトと戦い始める。本当の事を言えばPホッパーも加勢してカブトを抑えつけたところだが、先程カブトに手酷く攻撃されてしまった為足手まといにしなければならない。已む無くPホッパーはその場を後にした。

そしてあの場から離れてしばらくしたところで、影山は変身を解く。先程のダメージで若干ふらついているが、今は休んでいる暇はない。

(く、久賀達さんと矢車さんに急いで知らせないと。あの男は、天道はゼクターを狙っている！)

とにかく天道がゼクター強奪と言う暴挙に出たのだ、まず確実に久賀達と矢車も狙われるだろう。そう考えて影山は足を進めるが・・・

「ッ!？」

「無様だなあ・・・」

そんな彼の前に間宮が現れた、近くには彼女の仲間のワームが擬態していると思われる女性の姿もある。

「助けてやってもいいんだぞ？」

「誰がお前なんかに！」

間宮は影山に手を差し伸べようとするが、彼女は以前影山と戦った間柄。それに久賀達も彼女の事をハッキリ敵と認識している、そんな相手に助けを求めるなど出来ない。

影山がそう考えて断ると、間宮はワームの姿になった。

「ッ!? くっ！」

『ほお、戦うつもりか・・・そのボロボロな状態でか?』

影山は間宮がワームの姿になったのを見てホッパーゼクターを呼び出すが、彼女はそんな影山を嘲笑する。実際今の影山が戦ったところで間宮どころか普通のワームと戦っても負けてしまうだろう。

「それでも・・・それでもお前に助けてもらうよりはマシだ！ 変身！」

《Henshin Change Punch-Hopper》

影山は負けると分かっていたながらもPホッパーに再度変身した。正直勝てるとは微塵も思っていなかったが、せめて一撃加える程度はするつもりだ。Pホッパーが玉砕覚悟でウカワームに立ち向かって行こうとすると・・・

何処からともなくゼビーゼクターが現れてウカワームに体当たりを喰らわせた。



「又ツ!? くっ、これは……」  
「ぎ、ザビーゼクターが……ツ!? 久賀達さん!」  
「チッ、退くぞ。」

ザビーゼクターがここにいると言う事は、久賀達が近くにいると言う事。Pホッパーは周囲を見渡して彼女の姿を捜し、ウカワームは面倒な奴が現れる前に撤退することにした。

ウカワーム達が逃げていくと、Pホッパーは変身を解除する。それを見たザビーゼクターは影山に「ついてこい」と言いたげな仕草をした。影山は首を傾げつつそれについて行く、するとその先に久賀達が出た。

「久賀達さん!」  
「よお影山、一体何があったんだ? いきなりザビーゼクターが大騒ぎし始めたから、とりあえず先に行かせただけど……」  
「実は……」

神社

影山のゼクターを奪うのに失敗した天道は、代わりに風間のドレイクゼクターを手に入れることにした。ゴンにドレイクグリップを持ってきてもらい、こちらは容易く手に入れる事が出来たのだ。

ドレイクゼクターを手に入れた天道だが、その直後にウカワーム率いる複数のワームに遭遇してしまう。だがそれは天道にとって好都合、ひよりが消えた日に何があったのかをウカワームに尋ねようとカブトはウカワームと戦いだす。

カブトはが戦っているのはほとんどはサナギ体だったが、ウカワームの他にエビに似た青いワーム・・・キャラマスワームもいた為、流石のカブトも苦戦を強いられていた。それだけでなく・・・

「言えっ！ エリアXで何があつた？ ひよりはその所為で消えたんじゃないのか!？」

『人間には関係ない・・・諦める。』

ひよりが消えてしまったと言う精神的な動揺、それが相まってカブトから何時もの実力を奪っていた。

『ハアッ!』

「ゲツ?! くっ・・・・・・・・」

次第に追い詰められるカブト、そして遂にウカワームからの強烈な一撃にその場に膝をついてしまった。

『そろそろトドメといくか。』

「くう・・・・・・・・」

ウカワームがいよいよカブトにトドメを刺そうと、彼に近付いて行ったその時・・・・・・・・

「ちょっと待ちな。」

『うん?』

突然何者かに後ろから声をかけられる。ウカワームがその声に後ろを振り向き、カブトが声の聞こえた方を見ると、そこには久賀達が立っていた。

「お前……」

「あたしもそいつに用があるんだ、お前らは引っ込んで。」

久賀達はそう言いながらカブトに向かって歩いて行く。当然サナギ体の1体がそんな彼女に襲いかかるが、久賀達は容易にサナギ体を蹴りで追い払ってしまう。

「邪魔するつもりなら……容赦しねえ。」

そう言うと同時に久賀達の手収まるザビーゼクター。

「変身……」

《H e n s h i n》

久賀達はザビーに変身すると、真っ直ぐにカブトの方に向かって歩く。他のサナギワームもザビーに襲いかかるが、ある者は殴り飛ばされ、ある者は蹴り飛ばされてあっという間にザビーはカブトとウカワームの前にたどり着いてしまった。

「退けよ、邪魔だ……フッ!」

ザビーは目の前の障害を排除するかのようにウカワームに殴りかかる。ウカワームがそれを防くとキャラマスワームがザビーに攻撃を加えようとするが、それはいとも簡単に避けられ逆にハイキックをまともに食らってしまう結果となる。

「ハッ、フッ、セイッ!」

ザビーはさらに攻撃を加え、ウカワームとキャラマスワームはザビ

ーから距離をとる。その時他のサナギワームが体勢を立て直してザビーに戦いを挑んでいく、ウカワームとキャラマスワームは流れが悪くなってきた事を悟り即座にこの場から去って行った。

その後もサナギワーム達はザビーを相手にしていたが、完全に子供扱いで全く相手にならない。

「キャストオフ……」

《Cast off Change Wasp》

ザビーはある程度サナギ体にダメージを与えると、ゼクターを反転させてキャストオフ。弾け飛んだマスクドアーマーが周囲にいたサナギ体に直撃して怯ませる。

「ライダーステイニング。」

《Rider Stinging》

「ハアッ！」

ザビーはその隙を見逃さず、次々とワーム達をゼクターニードルで刺し貫いていく。全部で5体いたサナギ体は、ザビー一人にあつという間に倒されてしまった。

そしてその場にワームが居なくなつた事を確認すると、ザビーは改めてカブトの方に向き直る。

「天道……影山から聞いたぞ。ゼクター集めなんて面白そうな事やってるみたいじゃないか。」

「分かっているなら話は早い、お前のも貰おうか。」

カブトはそう言ってザビーに手を差し出す、すると彼女は上を仰ぎ

見てから再びカブトを見る。

「天道お、あたしはお前の事を嫌な奴で嫌いだと思っちゃいたが…  
…ここまで馬鹿だなんて思わなかったよ。」

そう言いつつザビーから感じられるさつきはさらに膨れ上がった。

「悪い奴とは思っちゃいなかったが、見損なつたよ……ハア  
アアアアアッ！」

ザビーはそう言つと、カブトに跳びかかって行った。

### 第33話 怒れる蜂（後書き）

という訳で第33話でした。今回影山に頑張ってもらいました、原作だと間宮がワームの姿になるとそれまでの勢いを失ってあっさり頭を下げたりしましたけど、こちらでは玉砕覚悟でウカワームと戦おうとしたり・・・

そして気になるキックホッパー登場のシーンはこのようになりました。今回はワームを追い払った程度ですが、次回は遂にカブトVSザビーの戦いになります。そして次回、ザビーにとんでもない事態が！

次回の更新もお楽しみに。それでは。

### 第34話 決着と変身不可(前書き)

どうも、黒服です。今回いよいよカブトとザビーの戦いに一応の決着がつかます！。そして前回言ったようにザビーに緊急事態が！？

### 第34話 決着と変身不可

ZECT本部

矢車は久賀達と別れた後、本部に戻って事務処理をしていた。隊長ともなれば部隊管理も大変なのだ。

その時、矢車の携帯に影山から通話が入る。

「矢車だ、どうしたんだ影。矢車さん大変です！ 大変なんです！  
！」・・・どうしたんだ一体？」

携帯の向こうから聞こえてくる影山の声は非常に慌てており、言葉もイマイチ要領を得ない。矢車はとりあえず彼を落ち着かせることにする。

「何があつたか知らんがとにかく落ち着け、一体どうしたんだ？」

「久賀達さんが・・・久賀達さんが・・・」

「久賀達がどうした？」

「久賀達さんが本気でキレる一歩手前です、めっちゃめっちゃヤバいです！？」

矢車は影山の言葉に目を見開いた。

本気でキレた久賀達・・・以前1度だけそうだった事があつたが、あれはハッキリ言って惨劇だった。当時はもう久賀達はZECTにいられないだろうと思つたくらいである。

何でも影山の話によると、天道にゼクターを奪われそうになった後



間宮に出会い、戦おうとしたらザビーゼクターに助けられたとのこと。そしてその後合流した久賀達に事の顛末を話した瞬間、彼女から感じられる雰囲気が一変したと言っただ。

「久賀達は今何処にいる?!」

『分かりません! あっという間に走って行っちゃって、止める暇もありませんでした。』

「とりあえず何とかして久賀達を見つuckerんだ、あいつが暴走したりしたらとんでもないことになる。」

矢車はそう言うのと急いで本部から出て久賀達を捜し始めた。最悪の事態にならない事を祈りながら・・・

神社

矢車と影山が久賀達を捜し回っている頃、ザビーとカブトは激しい戦いを繰り広げていた。

「フツ、ハツ、セヤツ!」

ザビーは正確なパンチやキックをカブトに放ち・・・

「フンツ、ハツ!」

カブトはザビーの攻撃を捌きつつも、カウンターで反撃する。お互い相手に効果的な一撃を与えられず、一進一退の攻防となっていた。

「はあ、お前・・・何でゼクター集めなんてやってんだ?」

「お前が知る必要はない。」

ザビーの質問にカブトはそう答えた、だがザビーにはカブトの考えが大体分かっていた。

「ひよりの為か？」

「……………」

「ZECTはワームを倒す為に存在してる、そしてそのZECTにとってワームであるひよりは敵になる。だからお前はライダー狩りを始めた……………」

カブトはザビーに何も言わなかったが、その沈黙は何よりも雄弁に物語っていた。

そしてそんなカブトを、ザビーは鼻で笑った。

「ハッ、くだらねえ……それで？ ライダーを全部倒して、ZECTも叩き潰した後はお前が一人でひより以外のワームと戦うつもりか。」

「そうだ、それでひよりはひよりとして生きていける。それが最善の道だ「ふざけるな!？」……………」

ザビーにはカブトの言う事も分かる。大切なモノの為に戦いたいと言う気持ちは彼女も持っている、だがそれにしただって今回の事は極端にも程がある。

ザビーは再びカブトに殴りかかりながらも言葉を続ける。

「お前一人で何が出来る！ たかがちっぽけな一人の人間の、お前が一人で戦ったところで!？」

「俺になら出来る、全世界の人間を救う事も……………」

よりだ。俺はたった一人の妹であるひよりを助けて見せる。」

カブトはザビーに反撃しながらそう答える。だがその言葉はさらにザビーの怒りの炎に油を注ぐことになった。

「お前の考えは確かに立派さ、誰か一人の為にそこまで必死になれるってのは大したもんだ。でもな！　どんなにデカイ手だって、水を一滴も零さずに掬う事なんて出来やしないんだよ！？　お前に背負えんのか！　その手から零れ落ちた奴の命を！！」

「背負って見せるしそれ以前に零しはしない、俺は天の道を往く男だぞ。」

「思い上がりも大概にしろ！？」

ザビーとカブトは戦いながらもお互いの意見をぶつけ合った。

ザビーは人間が一人では弱い生き物である事を知っている。だからこそ仲間と共に歩き、お互いに支え合う事が大切であると主張する。

だがカブトは自分に絶対の自信を持っている。自分は全ての頂点に立っていると、全てを超越した存在であるとその存在全てを賭けて言いきることが出来る。

二人の考えはこの時点で徹底して平行線で、決して交じり合いそうも無かった。

それに何より、ザビー・・・久賀達にはどうしてもカブト・・・天道を許せない理由がある。それは・・・久賀達からザビーゼクターを奪おうとした事。

彼女にとってザビーゼクターはただの変身ツールではない、掛け替

えのない相棒なのである。その相棒が天道に、それもハツキリ言っ  
てしまえば極端かつ身勝手な理由で奪われようとしている。それが  
非常に久賀達には許せない事だったのだ。

ザビーの右ストレートをかわしたカブトが、お返しにとクナイモー  
ドのカブトクナイガンをザビーに振るう。ザビーはそれを前転で回  
避して見せ、すぐさま体勢を整えた。

《One Two Three》

「ライダーキック……」

《Rider Kick》

カブトは一気に勝負をかける為、ライダーキックを発動する。それ  
に対してザビーもライダーステイニングを発動した。

「ライダー……ステイニング。」

《Rider Stinging》

お互い必殺技の準備をして、しばしお互いに睨みあった後……

「アアアアアアアッ！」

「ハアッ！」

同時に相手に向かって飛び、ザビーは左腕を、カブトは右足を相手  
に突き出した。

そしてお互いの攻撃がぶつかり合い、小規模な爆発と共にどちらも  
吹き飛ばされた。

「ガハッ?!」

「ぐう……」

カブトは未だにその場に倒れていたが、ザビーは即座に体勢を整えた。

「残念だったなあ、お前もこれで！」

そう言いながらザビーはゼクター上部のスイッチを押し、カブトにトドメを刺す為に走り寄る。だが……

「ハアアアア、ツ！？ な、何?!」

あと一歩でカブトに近付くと言う時に、突然ザビーの変身が解除された。あまりの事態に脳の処理が追いつかず困惑する久賀達。

「何だこれ、どういう事だ……あつ?! ザビーゼクター!?!」  
「?」

困惑しつつ久賀達がザビーゼクターに目をやると、ゼクターには大きな輝が入っていた。

「ま、まさか……」

その輝は、恐らく先程の必殺技のぶつかり合いの時に付いたものであろう。当たり所が悪かったのか、ザビーゼクターがライダーキックに耐えきれなくなってしまったのだ。

久賀達はその場で壊れたザビーゼクターを持ってへたり込んでしまった。対するカブトは、そんな久賀達にゆっくり近づいていく。

「終わりなのはお前の方だったな……ザビーゼクターを渡せ。」  
いくらザビーゼクターが壊れたとは言っても、ZECT本部で修理することは可能だろう。再び修理されてしまうよりも、自分の手元に置いておいた方がいいだろうと判断したのだ。

久賀達はザビーゼクターを守るように抱え込むが、そんなモノは気休めにしかならない。カブトの手がいよいよ久賀達に触れそうになったその時……

《R i d e r   K i c k》

「ッ!？」

「セヤアッ!」

突然横合いからKホッパーが飛び出してきた、ライダーキックをカブトに叩き込む。カブトは何とかそれを防ぐが、カブトのそれをも上回る威力のライダーキック、カブトはその場に膝をついてしまう。

「久賀達、大丈夫か!」

「矢車、ザビー……ゼクターが……」

「どうした……なっ?!」

Kホッパーは久賀達が手に持っているザビーゼクターの状態に驚愕した。よもやザビーゼクターが破損しているなど思いもよらなかったのだ。

「カブト……貴様一体何を考えている。影山のゼクターを奪おうとしただけじゃなく、久賀達のゼクターまで……」

「くっ……っ!？」

カブトはKホッパーの問いに答えずに立ち上がろうとしたが、そこで限界が来たのか変身が解けてしまう。それを見てKホッパーは、即座に久賀達を連れてその場を離れていくことにした。今は久賀達を助けるのが最優先だし、何よりザビーゼクターを本部に持って帰って修理してもらわねばならない。下手に刺激を与えず早急に持ちかえれば、まだ損傷は軽く済むかもしれない。

ZECT本部・技術部

久賀達・矢車・影山の3人は、本部の技術部の研究室に来ていた。ここにはゼクターを修理できる施設があり、ザビーゼクターは現在修理中である。

「じゃあ、直るのか？」

「はい、幸い損傷したのは外装部分だけでしたから。変身が解除されたのは、システムに負荷がかかったからでしょう。」

どうやら見た目は派手に壊れていたが、損傷自体は大したことはないらしい。その結果に久賀達はホッと溜息をつく。

「良かったですね、久賀達さん。」

「ああ、全くだ。」

「それで、修理が完了するのは何時頃になりそうだ？」

矢車が尋ねると、技術者は修理自体は数日で完了すると答えた。という事は少なくとも数日は久賀達はザビーとして戦えなくなると言う事だが、これは正直言って面倒だ。ただでさえ最近のワームは間宮の登場により以前より強くなっている。それなのに久賀達の変身できないと言う事は……

「悪い、しばらくはお前らに面倒をかけることになりそうだ。」

「気にするな、お前には何時も世話になってるようなもんだ。これくらいどうってことない。」

「そうですね、たまにはゆっくりしてください。」

二人の言葉に久賀達は軽く微笑んでかえした。しばらくは二人のサポート的な事しか出来ないだろうが、たまには二人の好意に甘えるのも悪くはない。

「でも、気を付けてくださいね。」

「ん？ 何にだ？」

「あの間宮とか言うワームです。あいつ、ザビーゼクターが出ただけでその場から逃げて行きました。それって、久賀達さんが苦手だつて事で・・・」

久賀達は影山の言いたい事が大体分かった。普段は強くてなかなか手が出せない相手、だがそいつが傷付いて戦えない場合、それは絶対の攻撃のタイミングである。

「久賀達が狙われる・・・ってことか？」

「その可能性が高いんじゃないでしょうか。少なくとも今の久賀達さんは無防備では無くても、ハツキリ言っただけの力しかありませんし。」

影山の言う事は正論だ、まず間違いなくゼクターの修理が完了するまでの間に間宮は何かアクションを起こしてくるだろう。

しばらくは気が抜けない事に、久賀達は深く溜息を吐くのだった。



その頃……

とあるビルの屋上にて、三島は非常に苛立っていた。それこそ普段かけている眼鏡を地面に叩き付けて壊してしまうほどに……

それと言うのも、天道の手にハイパーゼクターが渡ってしまったのである。間宮が天道達にハイパーゼクターについて話し、おまけに三島の直属の部下である蓮華が天道側に寝返ってしまった。

最初は間宮に奪われたハイパーゼクターを爆破する事で天道の手に渡るのは避けたと思っていたのだが、彼も予想していなかった事に未来からハイパーゼクターがやってきてしまい、結果天道はハイパーゼクターを手に入れてしまった。

今回は結局天道の手にハイパーゼクターが渡ることになってしまい、彼を快く思っていない三島としては非常に面白くない状況となってしまった。だが……

「まあいい、こちらにはまだ『これ』がある。カブトがハイパーフォームになれたとしても、『これ』と『奴』が揃えばもはや敵はいない。」

そう言うって懐から何かをとりだした三島、その手に握られていたのは……

つい先程、自身で爆破した筈のハイパーゼクターだった。三島はそれをしばし不敵な笑みで見つめた後再び懐にしまうと、静かにその場を立ち去って行く。それを本来手にとるべき人物に持つていく為に……

### 第34話 決着と変身不可（後書き）

という訳で第34話でした。ザビーゼクターが破損しました、破壊されてはいませんが修理に時間が必要です。という訳で久賀達はザビーに変身不可、そんな状態の彼女を間宮がほったらかしにする訳がなく・・・

次回の更新もお楽しみに。それでは。

### 第35話 二人のキックホッパー（前書き）

どうも、黒服です！ 今回はちょっとしたサプライズを用意しています、きっと皆さん驚きますよ。

### 第35話 二人のキックホッパー

ZECT本部

ザビーゼクターを修理に出してから数日後、久賀達は何時もの如く訓練と事務処理をしていた。

技術部からの報告によれば、ザビーゼクターの修理も間もなく完了するとの事。しかも修理だけではなく、ザビーゼクターをバージョンアップさせる作業も並行して行っていると言っただ。

・・・という話を久賀達のデスクにやって来た大和が彼女に話していた。

「大和、ザビーゼクターって強化する必要あったのか？ あたしは別にあのままでも良かったんだけど・・・」

「最近はワームも強くなってきた。いい機会だしこのタイミングで強化しておくのも悪くはないだろう、ザビーゼクターが強くなればお前も強くなるしな。」

久賀達が近くにいた大和に尋ねると、そう答えが返って来た。彼女としてはザビーは以前のままだも良かったのだが、大和等はそうは思っていなかったらしい。

強化のプランとしては武装の強化、全体的な性能の上昇などがあるらしいが、詳しい事はまだ秘密だと言う。もつとも久賀達としてはザビーゼクターが戻って来さえすればそれで十分なので、特に興味はなかったのだが。

「……ところで大和、お前何の用だ？」

そこで久賀達がずっと気になっていた事を尋ねる。まさかそんな事を態々言う為に来た訳でもないだろう、ここまで足を運んだとなればその内容は自分に何かしらの任務が与えられると言う事だ。

「そうだったな。まずはコイツを見てくれ。」

そうやって大和は久賀達の前に持っていたノートパソコンの画面を見せる。そこには一人の男性の写真が写っていた。

「……コイツを倒せってか？ そう言う事だったらあたしより矢車か影山に言った方が今は確実だぞ。」

「残念だがそうじゃない。今回の任務は、この男の護衛だ。」

「護衛？ 珍しいな、組織の要人か何かかコイツ。」

普段このような形で命令が伝えられる時、大抵はワームだから倒せなどが多い。だが今回のように守れと言う命令は久賀達の言うように珍しいモノだった。

「組織にとって重要な人物らしい。矢車達に任せてもいいんだけど、貴重な戦力のライダーシステムを一つの任務に集中させる訳にもいかない。そこでお前の出番と言う訳だ。」

既に田所チームが先行して彼の護衛についているとのこと、それならばワームが出てきても何とかなるだろう。少なくともガタツクの援護という形で戦闘に参加もできる。

久賀達は任務を受領して、早速護衛任務に向かう事にした。

## 幼稚園

加賀美は任務の為に、この場所に来ていた。今回の任務は一人の男性の護衛というなんとも奇妙なモノだったが、一応組織の一員である彼としては従わない訳にはいかない。

「よお、加賀美。」

「あつ、久賀達さん。」

内心で首を傾げつつ護衛目標の男性・・・立川 大吾を見張っていると、後ろから久賀達が声をかけてくる。今回の任務は久賀達の部隊と共同で行うとの事、それに頼もしさを覚えつつも加賀美は胸中の疑問を久賀達に打ち明けた。

「久賀達さんどう思います？ 今回の任務・・・殲滅しろとかならよく聞きますけど、守れって言うのはなんか・・・」

「何でも組織にとって重要な男らしいな、組織の幹部なのか・・・はたまた外部協力者か。」

二人はあれやこれやと意見を出し合いながら見張っていると・・・

「見つけたぞ、立川 大吾・・・お前には死んでもらう！」

突然どこからか現れた黒装束の女性、その女性が護衛対象である立川にそう言うと、その姿をカタツムリの様なワーム・・・コキリアワームに変えた。加賀美と久賀達は即座に立川を守りに動いた。

「逃げろ！」

「俺達はあなたを守るように言われています！」

「ありがとう。加賀美 新、久賀達 時雨。」  
「？ 何であたしらの名前を・・・」

名乗ってもいない筈の自分達の名前を言い当てて見せた立川に、久賀達が尋ねようとする。だがそれよりも早くにコキリアフォームが襲いかかって来た。

「くっ!?!」

「加賀美、そいつは任せる!」

久賀達はこの場をライダーに変身できる加賀美に任せて、自分はこの男を逃がす事にした。しかし・・・

「きゃあああああつ?!」

「ツ!?!?!」

逃げようとする久賀達の前に、今にもサナギ体に襲われそうになっている親子を見つけた。久賀達は即座にゼクトガンを抜いてサナギ体に攻撃を仕掛けようとするが・・・

「あつ!?! お、おい何やって・・・なっ?!」

突然護衛対象である筈の立川がワーム達に向かって走り出した。慌てて久賀達が彼を止めようとしたが、立川はワームの姿になる。その様子に久賀達とガタツクに変身した加賀美は絶句してしまう。

「あいつワームだったのか!?!」

「ワーム? にはどこか・・・」

ガタツクは立川がワームであることに驚いていたが、久賀達はどこ

か違和感を覚えていた。彼女が知るワームとはところどころが違  
うのだ。パツと見は確かにサナギ体のワームなのだが・・・

そうこうしていると、立川だったワームは親子を襲おうとしていた  
サナギ体と戦い始め、あろうことが襲われそうになっていた親子を  
逃がしていった。今までのワームにはあるまじき行動に、久賀達の  
疑問はさらに募る。

「何故ワームがワームに攻撃されている!？」

加賀美の疑問は久賀達も同感だった。親子が逃げていくと、他のサ  
ナギ体は親子など目もくれず立川だったワームを集中的に攻撃し始  
める。

『助けてください!』

「お前……この俺にワームを助けろっていつのか？」

立川だったワームからの助けを求める声に、ガタツクは後退りしな  
がら拒否の反応をする。だが久賀達は即座にゼクトガンを向けると、  
とりあえず周りのサナギ体を撃ち始める。

「加賀美、今は任務の真つ最中だ、任務の目的だけを考えて行動し  
る。お前も何時までもその姿になるな、紛らわしい! 戸高!！」

久賀達は辺りに隠れさせていた部下を呼び出して、立川だったワー  
ムを護衛させる。彼女の部下はあまり気が進まないと言った雰囲気  
を出していたが、任務は任務であるので目標を守る為に行動した。

「くそつ、こいつ等ワラワラと一体何処から。神田! ガトリング  
で固まってるワーム共を薙ぎ払え!」



「了解！」

ワームは次から次へと現れ、久賀達の部隊はそれに必死に対抗する。だがワームは執拗に立川を狙って動き、他のワームの道を開く為か積極的に銃撃を受けに行く者まで出始めた。次第に窮地に陥って行く久賀達の部隊だが、そこで立川が思いもよらない行動を起こした。

「くっ、仕方が無い。ならっ！」

危機を悟った立川が左手を中に掲げると、何処からともなくドレイクゼクターがグリップに装着された状態で飛んでくる。そして・・・

《Henshin》

「んなっ!？」

立川がそれを手にとり、ドレイクに変身してしまった。これに久賀達はこの日何回目になるか分からない驚愕を覚えることになる。

ドレイクはドレイクゼクターの射撃で瞬く間に周りにいたサナギ体を全滅させると、次いでキャストオフしてライダーフォームになり他のワーム達も倒してそのままどこかへと去って行ってしまった。

高架下駐車場

久賀達はいずこかへ去って行った立川を捜して、あちこちを彷徨っていた。彼女の部下も同様に動いている。

「くそう、あの男一体どこに・・・」

久賀達は口ではそう呟きながらも、心の中で立川は何者なのかと考  
え始める。

（ワーム・・・に良く似てるけどどこか違うんだよなあ。ドレイク  
に変身までして、一体何なんだか・・・）

そんな事を考えていると、久賀達は視線の先に立川の姿を見つけた。

「立川！ やつと見つけたぞ、お前自分が護衛を必要としてる奴だ  
って分かってるのか？」

久賀達はそう言いながら立川に近付くが、その時周囲に不穏な気配  
を感じた。慌てて周囲を警戒すると、あちらこちらからサナギ体の  
ワームが現れる。久賀達は即座に立川を守る様に構える。

最初はこのワームは立川を狙ってきたものだと考えたが、どうも様  
子がおかしい。ワーム達の敵意が自分に向いているのだ。

久賀達はその様子に怪訝な顔をしていると、近くの柱の陰から間宮  
が姿を現した。

（あつ、そっぴや影山の奴が・・・）

「久賀達 時雨、今のお前はゼクターを持たないただの人間だ。お  
前には消えてもらおう。」

間宮の言葉に久賀達は嫌な予想が当たった事を確信し、引き攣った  
笑みを浮かべる。こいつ等は自分を狙ってきたのだ、影山が言っ  
ていたように、ライダーに変身できない今の自分を仕留めて障害を減  
らす為に。

「随分と姑息な手を使うな、無防備な相手を狙うとは……」  
「お前は非常に読めん奴だからな、天道 総司と違って弱点も無い。だから、変身できない今の内に片を付けさせてもらおう……」  
「やれ。」  
「クソッ！」

間宮がワーム達に指示を出した瞬間、一斉に周りのワーム達が久賀達に向かってきた。久賀達は立川を逃がしながら、自身もその場から離れていく。久賀達が狙いという言葉に偽りはなかったのか、それとも確実に久賀達を葬る為か間宮は逃げていく立川には目もくれずに久賀達だけを狙ってくる。

久賀達はゼクトガンで牽制しながら必死に逃げていくが、やはり多勢に無勢。トンネルに逃げ込んだところで壁際に追い込まれてしまった。

「これで貴様も終わりだな。」

「チッ！（ここまでか……そういや前にもこんな事があったな。）」

久賀達は以前ザビーの資格を剥奪されて無気力になっていた時の事を思い出していた。あの時は間一髪という所で矢車の部隊が助けにきてくれたものである。

（そう都合よく何度も助けはこないか。ま、こうなったらサナギの1体や2体は道連れに……）

「変身！」

《《Henshin Change Kick》Punch》  
《《opper》》

「ッ!? 矢車! 影山！」

久賀達が諦めてワーム達に突撃しようとしたその時、突然トンネルの奥から矢車と影山の二人が変身しながらやって来た。それに久賀達はまたも驚きつつそちらを見る。

二人は持ち前のキックとパンチでワーム達を追い払うと、久賀達を守る様に立ち塞がった。

「お前ら、なにしてんだこんなところで？」

「何って、お前を守る為に来たに決まってるだろ。」

「警戒して置いて正解でしたね！」

どうやら二人は久賀達に危険が迫った時の事を考えて、自分達のゼクターに彼女の周りを警戒させていたらしい。そして案の定久賀達はワームに襲われることになった。

二人は久賀達を後ろに下げさせると、ワーム達と戦い始める。久賀達もただ守られているだけでは癪なので、ゼクトガンで援護射撃をすることにした。だが……

「ハッ、セリヤッ！ くそっ、数だけは多い……」

「久賀達さん、逃げてください！」

間宮はかなり本気で久賀達を潰す気なのか、かなりの数のワームがやってきていた。KホッパーとPホッパーが必死に相手をするものかなか数が減らない。

「ハアッ！」

「うわあああああつ?!」

「ッ!?!? 影山!」

P ホッパーがサナギ体に気をとられていると、ウカワームが隙を突いてP ホッパーに強烈な一撃を喰らわせる。その衝撃でP ホッパーは弾き飛ばされ、変身を解除されてしまった。

影山は久賀達の傍に倒れ、ホッパーゼクターは久賀達の手を受け止められる。

「影山、大丈夫か?! おい、影山!」

久賀達が彼の名を叫びながら軽く揺ると、影山は軽く呻きながら臉を振るわせた。どうやら気絶しているだけのようだが、しばらくは目を覚ましそうにない。

その間にもワームは確実に久賀達に近付いていた、K ホッパーはウカワームを相手にして援護に来る余裕が無い。敵にはウカワームの他にコキリアワームまでいる、ハッキリ言って絶体絶命だ。

「~~~~~ッ、こうなったら仕方無い。影山、ちょっと借りるぞ!」

そう言つて久賀達は影山の腰からベルトを外し自分に装着し、バツクルを開く。

「今だけでいい、頼む。上手くいってくれ……変身!」

《Henshin》

久賀達が祈りながらホッパーゼクターをバツクルに左からセットすると、ゼクターから電子音声が響きその体を緑色の装甲が覆っていく。

《Change Kick-Hopper》

「何っ?!」

「く、久賀達!？」

「上手くいった・・・よし!」

久賀達の変身したホッパーは、軽くガッツポーズをとると一気にワーム達に向かって突っ込んでいく。

「フツ、セイツ、ハアツ!」

ホッパーはワームに近付くと、キックとパンチで戦い始める。その戦い方は、キック主体のキックホッパーにしては何とも奇妙なモノと言えただろう。

だが久賀達の戦闘スタイルは手足を駆使したインファイト。状況に応じてキックとパンチを使い分ける彼女にとっては普通の事であった。

「イヤアアツ!」

それでも久賀達がキックホッパーの特性を理解しているからか、その戦いはどこか蹴りに主体が置かれていた。勢いを乗せた回し蹴りがサナギ体のワームを大きく弾き飛ばす。

そしてホッパーはコキリアワームの姿を捉えると、一気に走り寄って行きゼクターレバーをスライドさせた。

「ライダージャンプ!」

《Rider Jump》

「ハアアアアッ！」

ホッパーはコキリアームに走り寄りレバーをスライドさせると、そのまま跳びあがってワームに両足でドロップキックを叩き込む。それと同時にライダージャンプが発動して蹴りが決まると同時にワームを大きく吹き飛ばした。

本来はライダー自身に驚異的な跳躍をさせる為のライダージャンプである、それを敵に向けて放てば相手は巨大なハンマーで殴り飛ばされたかの如く大きな衝撃で吹き飛ばされるだろう。案の定コキリアームは吹き飛ばされ、後ろにいたワームを巻き込んで壁に叩きつけられた。

その隙をホッパーは見逃さず、そのまま走り寄ってレバーを戻した。

「ライダーキック！」

《R i d e r K i c k》

「イイイヤアアッ！」

ホッパーは今度は左足だけを前に突き出して、壁に叩きつけられているコキリアーム他数体のサナギ体に向けてライダーキックを叩き込んだ。体勢を整える事が出来ないでいるワーム達はあえなくホッパーのライダーキックを喰らい、壁とキックに挟まれてまとめて爆発した。

「ライダージャンプ。」

《R i d e r J u m p》

「ハッ！」

一方矢車が変身するKホッパーも周囲のワームを始末する為に、ラ

ライダージャンプで飛び上がった。

「ライダーキック。」

《Rider Kick》

「セヤツ！」

Kホッパーのライダーキックはサナギ体の1体に決まり、左足のアンカージャッキが稼働する。

「フツ！ ハツ！」

それだけでなく、アンカージャッキが稼働した際の反動を利用して再び跳躍。次々と周囲のワームにライダーキックを叩き込み、辺りのワームを全滅させてしまう。

そしてその場に立っているのは二人のキックホッパーと、ウカワームだけになっていた。二人の視線を受けて、ウカワームは思わず後退りする。

「矢車・・・」

「ああ、行くぞ久賀達！」

二人は頷き会つと、同時にレバーをスライドさせる。

「ライダージャンプ！」

《Rider Jump》

同時に発動したライダージャンプにより二人のホッパーは大きく跳躍する。ウカワームは急いでその場を離れようとするがもう遅い。



「ライダーキック！」  
《《R i d e r K i c k》》

矢車のKホッパーはドロップキックのスタイルで左足だけを突きだして、久賀達のホッパーは左足から右肩を一直線にするように左足を突きだしてウカワームにライダーキックを叩き込む。二人のライダーキックがウカワームに直撃すると思われたその時・・・

「何っ!？」

「こいつっ!」

二人とウカワームの間に新たなサナギワームが割って入り、ウカワームの代わりにライダーキックを受ける。おかげでそのワームは消し飛んでしまったが代わりにウカワームは生き延びた。ウカワームは二人から十分に距離をとると・・・

『しくじったか、まあいい・・・』

とだけ呟いてその場から去って行く。

後にはその場に佇む二人のキックホッパーだけが取り残されていた。

### 第35話 二人のキックホッパー（後書き）

という訳で久賀達がキックホッパーに変身です。いや、自分でもやっってしまったとは思っているのですが（汗）。でもまあ緊急事態ですし、三島がザビーゼクターを強引に捕まえて変身したこともありましたが別にいいですよ、こちらは無理やり捕まえた訳じゃありませんし（オイオイ）

ちなみに久賀達キックホッパーのライダーキックは、典型的なライダーキックです。ファイズのクリムジンスマッシュとかを思い浮かべてくれれば分かりやすいかと。

**第36話 解き放たれる狂気(前書き)**

今回は2話連続投稿です。

### 第36話 解放たれる狂気

ZECT本部

久賀達がウカワームの襲撃を逃れて次の日、彼女は本部に来ていた。ちなみにホッパーゼクターはあの後影山に返している。流石に何時までも借り続ける訳にはいかないし、何より彼女の相棒はザビーゼクターだけだ。

なお、変身を解除した時影山のホッパーゼクターがどこか名残惜しそうにし、その後妙に熱い視線を久賀達に送っていた事はその場の誰も気づかなかった。

「それにしてもまさか久賀達さんがホッパーになるとは・・・」  
「ま、かなり強引な手段ではあったけどな。他のゼクターでも出来るらしいぞ、ツール手に入れて何とかしてゼクターを捕まえることが出来たらの話だけだ。」

久賀達の言葉に、矢車が立川に関する報告を思い出していた。突然ドレイクに変身したと言うワーム、立川は謎が多い男だ。

「そう言えばお前が護衛を命じられた男・・・立川だったか？ そいつは一体何者なんだ？」

「ああ・・・あたしにもよく分かんねえんだよなあ、ワーム同士で戦ったと思ったらドレイクに変身しやがったし。」

「ド、ドレイクに変身!？」

久賀達の言葉に影山が驚愕して彼女に詳細を尋ねる。そして久賀達から事の顛末を聞いて二人はさらに難しい顔になった。

「ますます分からないな、一体何なんだその立川って奴は。」  
「ドレイクを呼び出して変身するだなんて、それもワームが・・・」  
「ま、あたしにも詳しい事は分かんねえよ。ワームつつつてもなんか他のとは違う感じだったし。」

彼女達がそんな話を話しながら廊下を歩いていると、技術部の人間が久賀達に近付いてきた。

「久賀達さん、ゼクターの修理が完了したので技術部までお願いします。」

「おっ！ 出来たか。よし、案内しろ。」

研究員の言葉に久賀達は待ちかねたと言った顔をすると、即座に彼について技術部に向かって行った。

ZECT本部・技術部

技術部にやってきた久賀達らの目の前には、新品同然となったザビ―ゼクターの姿があった。あれほど入っていた輝も完全に無くなり、傷一つない。

久賀達が近付くと、ザビ―ゼクターは目を光らせて一目散に彼女に向かつて飛んできた。そして久賀達に近付くと、甘えるように擦り寄ってくる。

「よしよし、あたしも会えて嬉しいよ。悪かったな、壊しちゃって・・・」

《ーッ！ーッ！ーッ！》

久賀達がザビーゼクターに軽く頭を下げると、ザビーゼクターは『そんな事はない』とでも言いたげに体を左右に振った。

矢車と影山がそんな久賀達らを微笑ましく眺めている中、研究員が口を開いた。

「あの、宜しいですか？」

「ああ、悪い。なんだ？」

「今回ザビーゼクターを修理するにあたってついでに強化を行いました。これがその強化プランです。」

久賀達は研究員が差し出した資料に目を通す、そこにはザビーの強化でどこがパワーアップしたのが具体的に書かれていた。

分かりやすく強化されたところをまとめると、

- 1、ザビーゼクター自体の強度の上昇
- 2、ライダーフォーム時に新装備【ニードルシューター】を追加
- 3、マスクドフォームを介さず直接ライダーフォームへの変身

以上である。ニードルシューターと言うのは、タキオン粒子を収束して作りだした針を散弾の様に撃ちだす武装である。散弾として飛ばしたりする都合上あまり遠距離には攻撃できないが、これによりザビーは中距離でも戦えるようになった訳だ。

直接ライダーフォームへ変身できると言うのは、相手が成虫体だけだった場合には便利だろう。これは別にマスクドフォームが無くな

った訳ではなく、ゼクターをライダーブレスにセットした際に即座に展開させる事でマスクドフォームを飛ばして直接ライダーフォームになれることを意味している。

「何と云うか、オールマイティーに戦えそうになったな。」

「カブトに並びますね、これ。」

「おもしれえ、次に会ったら今度こそ倒してやる。」

そう言つて掌に拳を打ちつける久賀達、ザビーゼクターもそれに呼応するように一回転すると・・・

《ー？ ー??》

「ん？ 何だ急に・・・」

突然何かを探る様にザビーゼクターが久賀達の周囲を回り始める、そして・・・

《・・・ツ?!?!? ー?!?!? ー!!!!》

「ちよつ?! な、なんだどうしたどうした!」

何かに気付いたのか、これでもかというくらい久賀達に擦り寄るザビーゼクター。いや、これはもう擦り寄るなんてレベルではない。自分の体を擦り付ける勢いだ、その様子に久賀達も訳が分からず頭にハテナマークを浮かべる。

「ど、どうしたんでしよう?」

「・・・あつ! もしかしてこの間お前がキックホッパーに変身した事で・・・」

「えっ!? お、お前もしかしてやきもち妬いてんのか?!」

《ーッ! ーッ!!》

久賀達の驚きにザビーゼクターは、肯定するようなくさをした。そしてその直後に再び久賀達に体を擦り付ける。あまりの必死さに久賀達も余裕をなくしてザビーゼクターに話しかけた。

「悪かった悪かった！ アレは緊急事態だったんだって、もうしないもつしないから！」

久賀達が必死に弁解するとようやく納得してくれたのか、ザビーゼクターは自分の体を擦り付けるのを止めて彼女の手に収まった。その様子にホッと一息つく久賀達。

「やれやれ、やっと止まってくれた・・・」

「愛されてるな、久賀達。」

「まあな・・・」

そう言った久賀達の顔は、どこか晴々としたモノだった。

### 久賀達の自宅

あの後帰宅した久賀達は、夕食を済ませた後早々に眠りについてしまった。気疲れなどもあって色々と疲れていたからだ。

久賀達は今夢を見ていた。珍しいのは、彼女自身が夢を夢と認識して見ていることだ。

（これは・・・4年前、あの日の事か。）

夢の中の自分は4年前の、まだ少女としての幼さを幾分か顔に残し



ている姿だった。今彼女がいるのは飛行機の中、久賀達は飛行中の飛行機の客席に座っていた。右隣には妹の雲、前の席に彼女達の父親の屋九郎。そして反対に左隣には……

(母さん……)

久賀達の母親、久賀達 雪乃がいた。顔立ちは母親と言っただけあって久賀達とそっくりな、ただし彼女よりもどこか柔らかな印象を持たせる顔だった。

雪乃はしばし4年前の久賀達と話していると突然席を立つ。トイレにでも行くのだろうか、と考えたところで久賀達は思い出す。

(そつだ……この後ッ！)

ちょうどこの後、久賀達にとって忘れられないあの事件が起こる。

無意味と分かっているにもかかわらず久賀達は過去の家族に手を伸ばそうとしたその時、雪乃の口が動いたのが見えた。その口から紡がれたのは……

「ごめんなさい……」

(えっ？ 母さん、一体何を……ん？)

久賀達が雪乃の言葉に疑問を抱いていると、彼女の手になんかが握られているのを目撃する。彼女がそれをよく見てみようとして雪乃の手元に注目した時、何かに頭を小突かれる感覚が……

(ちよっ?! 待てザビーゼクター、今起こすな!)

それは日課となっているザビーゼクターによる目覚まし、久賀達が

夢の中で叫んでもザビーゼクターに聞こえる筈もなく急速に彼女の意識は現実に戻されていった。

「ん、うう……」

《——ッ！！》

「ああ、おはよう……はあ。」

何か大事なモノを見逃した様な気がする久賀達は、その場で大きく溜息を吐いた。先程みた夢は謎が多過ぎる。突然紡がれた母の言葉、そしてその母の手に握られていた物。

勿論今のは久賀達が見ていた夢であるので、それが現実起こっていたとは考えにくいかもしれない。だが彼女には確かに4年前の出来事だったと確信を持って言えたのだ。

「母さん……あれは、一体……」

考えても一向に分からない事態に、久賀達は再び大きく溜息を吐いたのだった。

ZECT本部・総帥室

この日天道はZECTの総帥室にて、総帥の加賀美 陸と対面していた。発端は立川の事を本部に伏せて全チームに創作させようとした天道と、それを不快に思った三島とのいざこざが原因だった。

天道は立川がいうネイティブという種類のワーム、そしてひよりに関して陸に尋ねるが、彼ははぐらかすだけ。その様子に天道が痺れを切らせたかのように陸に詰め寄ると、彼は突然『赤い靴』の物語

を口に始めた。

「ある少女が……赤い靴を履き、ダンスパーティーに行く。だが靴が勝手に踊りだし、止まらなくなってしまふ。」

「何が言い……」

突然関係のない話を始めた陸に天道が声を荒げながら口を開くと、陸はそれを遮るように天道の耳に顔を近付ける。

「カブトもガタツクも……そしてザビーも履いているんだ。君達  
の意思に関係なく全てのワームを倒すまで、踊り続ける赤い靴を。」

その言葉に天道は愕然となる。

「全てのワームを……倒すまで？」

全てのワーム……当然その中にはひよりも含まれている。つまりそれは天道が自らの意思に関係なく、いよりを手にかけると言っているのだ。

「その靴が、何時勝手に踊りだすか。それは……誰にも分からない。」

そこまで言っただけの言っている事がおかしかったのか、笑い声を洩らす陸。天道はそれを信じられないと言った様子で見つめていた。

ZECT本部・オフィス

久賀達は本部のデスクで、上の空と言った感じで事務処理をしてい

た。考えているのは今朝見た夢。

（あの時母さんが持ってたあれ、もしかして……いや、そんな馬鹿なことある訳ないか。）

久賀達はい今しがたまで考えていた事を振り払うように頭を振る。そして何気なく視線を向けた先ではザビーゼクターがホッパーゼクター……恐らく影山の物だろう……を追い回している様子が見えた。恐らく先日の事を未だに根に持っているらしい、矛先を久賀達からホッパーゼクターに向けたのだろう。

それに久賀達は軽く溜息を吐きながら書類に目を戻す、だがやはり今朝の夢の事が気になってしまう。

（母さん、ごめんてどういう事だ？ あたし謝られる様な事された覚えがないのに……）

タイミング的におかしい謝罪の言葉、それと雪乃が持っていた何かを踏まえると久賀達の頭に最悪のシナリオが出来あがってしまう。彼女がそんな事はないと再び頭を振っていると、突然ザビーゼクターが久賀達の頭を小突き始めた。

「ん、何だどうした？」

《……！？ ……！！》

「……ワームか。」

久賀達はザビーゼクターの行動の意味を悟ると、即座に行動を起こした。

訓練所にいる影山に声をかけると、急いでゼクターが導く先に向か

つて行く。部隊は引き連れていない、今回はあくまで自発的な行動であって命令によるワームの討伐ではなかったからだ。

だがそれはある意味で正しかったのかもしれない、これから起こる悪夢の事を考えれば……

とあるビル

久賀達らは途中で同じくゼクターに導かれていた矢車と合流すると、とあるビルに入って行った。

そこではカプトとガタツクが戦い、その近くでは傷付いた立川と思われるワームらしきものがいた。カプトは執拗に立川に攻撃を仕掛けようとし、ガタツクはそれを必死に守っている。

「なんだなんだ、どういう状況だこれ？」

「とりあえず、止めないとマズイですよこれ！」

「ああ、行くぞ！」

久賀達は矢車の言葉に頷くと、ザビーゼクターを手にとりライダープレスにセットした。

「変身！」

その際に新しく追加された機能を試してみるべく、セットしてすぐにザビーゼクターをライダーフォーム時の状態に展開させた。するとマスキッドフォームではなくライダーフォームの装甲が展開されていた。

《Henshin Change Wasp》

「ほお、こいつは便利だ。」

ザビーが新しいザビーの使い心地を確かめっていると、矢車と影山もライダーに変身する。それを確認してザビーはカブトとガタツクの下に向かって駆けていく。

状況はイマイチよく分からないが、カブトが普通の状態でない事はよく分かった。3人はガタツクに加勢し、カブトを止める為に行動する。

「加賀美、大丈夫か！」

「久賀達さん、来てくれたんですね！」

「まあな、一体何がどうなってるんだ？」

ザビーがガタツクに尋ねている間、二人のホッパーがカブトの相手をしている。何時もと全く違う我武者羅な攻撃に若干戸惑った二人だが、それでもまだ何とか抑えていられている方だった。

「それがよく分からないんです。天道がいきなり苦しみ出したと思つたら、今度は突然立川を・・・」

ガタツクの言葉にザビーは首を傾げていたが、今はカブトを止めるべきだと考えて二人に加勢していく。ガタツクも痛む体を押してそれに参加した。

ZECT本部・総帥室

陸は机の上に置いてあるファイルからページを2枚抜き取っていた、

それにはマスクドライダーシステムに関する資料が書いてある。

陸はそれを懐かしむ様に見つめていた。

「君の壮大なる計画は、我々の息子達が・・・完遂してくれるだろう。それに、君の考えた計画も順調に進んでいそうだよ。君の思い描いたように事は進むだろう・・・不本意だろうが。」

そう言いながら陸は資料に火を付けていく。

「安心したまえ・・・日下部君、雪乃君。」

とあるビル

場面は戻ってカブトと4人のライダーとの戦い。一度カブトは再び苦しみ出し、その隙にガタツクが立川を逃がしたので今この場には5人のライダーしかない。

「加賀美、大丈夫か？」

「は、はい・・・何とか。」

「無理するな加賀美、防いだとはいえライダーキックを受けたんだ。ダメージもかいだろう。」

Pホッパーの言う通り、ガタツクは立川に向かって放たれたライダーキックをその身に受けて防いだのだ。その隙を突いてKホッパーがカブトを蹴り飛ばし、ザビーとPホッパーがその周りを囲んでいる。

「天道・・・一体どうしたんだ？」

「うう、うわあああああつ!?!?」  
「クソツ、返事くらいしろよ!」

カブトは目標を見失ったからか、手近にいたザビーに拳を振り上げる。ザビーもそれに対抗してカブトにパンチを叩き込み……

お互いのパンチが顔面に決まった

「ッ!?!?!? あ……………か……………う……………」  
「? 久賀達?」

パンチが決まった瞬間、突然ザビーが動きを止めたと思っただけのように震え始める。その様子にKホッパーは怪訝そうに声をかけるが、返事は返ってこない。

「うう、あ……………はっ、はっ……………」  
「久賀達さん、一体どうしたんです?」  
「ま、まさか……………」

Pホッパーも突然の事態に訳が分からないと言った感じだったが、ガタツクは違う。彼の脳裏には嫌な予感が過っていた。ザビーの今の状態、感じこそ違うが雰囲気はカブトがああなる直前のそれによく似ていた。

という事は……………

その頃久賀達の意識は再び4年前の飛行機の中に移っていた。突然の事態に久賀達は戸惑ったが、彼女はそれよりも気になっていた事を優先させる。そこではちょうど雪乃が席を立つ瞬間だったのだ。



(母さん、そんな筈はない。母さんがそんな事をするなんて・・・)

久賀達は必死に自身の想像を否定するが、それとは裏腹に彼女の心は雪乃の手に持っている物を見るのを拒否している。まるでその手に持っている物を知っているかのように・・・

「ごめんなさい・・・」

(母さん、手に持つてるのは・・・ツ!??!?)

謝罪の言葉を口にした雪乃の手に握られていた物、それはボールペン程度の太さの筒状の物体で先にスイッチの様な物が付いていた。

それは見紛う筈もなく・・・

(起爆・・・装置?)

久賀達がそれを確信した瞬間、雪乃がスイッチを押す。それと同時に機内が爆音と共に揺れて悲鳴が響きわたった。

衝撃の事実、それは久賀達にとってそれ以上の言葉が見つけれないものだった。

(母さんが・・・嘘だ・・・嘘だ・・・)

久賀達はその事実を否定しようと耳を塞ぎ頭を振るが、悲鳴は相変わらず彼女の耳に突き刺さる。

それに久賀達が視線をあちこちに彷徨わせていると、囊を守るように抱きしめている4年前の久賀達を見つめている雪乃の姿が目に入る。

そして・・・

「ごめんなさい・・・」

再び彼女は謝罪の言葉を口にした。

(うわあああああああつ?!?!?!?!?!)

久賀達が意識の中で挙げた悲痛な叫びは、

「あああああああああああつ?!?!?!?!?!」

狂気を纏った叫びとしてザビーから発せられる。その瞬間ザビーに、久賀達の心に掛けられていた枷が全て外れ、そこに閉じ込められていた野獣が姿を現す。

狂気が・・・暴走した。

### 第36話 解き放たれる狂気（後書き）

という訳で第36話でした。原作通りにカブトが暴走しましたが、それに加えてザビーも暴走状態に突入です。その暴れっぷりは次回明らかになります。

今回ザビーが強化されました。強化内容としてはディケイド版のそれに近くなった感じですね。ちなみにゼクターをツールにセットした時にライダーフォームの状態にしてライダーフォームに直接変身するというのは、ディケイドのネガの世界でダークカブトがやっていた事です。ベルトにゼクターをセットすると同時にゼクターホーンを倒してそのままライダーフォームに変身していました。

ちなみにザビーゼクターがホッパーゼクターを追いかけていたのは単に嫉妬しているからとかではなく、久賀達に悪い虫が付かない様になっているからです（笑）。

今回の更新もお楽しみに。それでは。

第37話 狂気と絶望の淵で（前書き）

どうも、黒服です。今回は暴走したザビーが大暴れします。

### 第37話 狂気と絶望の淵で

とあるビル

ガタツク達は突然叫び声を上げたザビーに、半ば呆然としていた。一体何が起こったのか、何故ザビーが叫び声をあげているのかが全くわからなかった。

ただ一人、ガタツクを覗いて・・・

「まさか・・・久賀達さんまで？」

「久賀達さん、一体どうしたんです!？」

「ツ!？」 待つてください! 今久賀達さんに近付くのは・・・」

ザビーに近付くPホッパーをガタツクが制止するよりも前に、ザビーが行動を起こすのが早かった。

不用意に近付いたPホッパーに、ザビーは問答無用で攻撃を開始した。Pホッパーを押し倒すと馬乗りになって、殴り始めたのだ。

「うっう、ああ、あああああああああ!？」

「ちよっ!？」 待つ、久賀達さっ、やめっ、ガハッ?!」

Pホッパーは必死にザビーに呼びかけるが、ザビーは一切聞く耳を持たない。ひたすらに叫び声を上げながら彼を殴り続けていた。

最初は抵抗していたPホッパーだが、次第にその抵抗も薄くなつていく。それを見て慌ててKホッパーが止めに入る。このままでは本当にPホッパーが、影山が死んでしまう。

「久賀達止める!? 影山を殺す気か!」

「ああ、あああああああああつ!」

「うわっ!?!」

Kホッパーはザビーを取り押さえようとしますが、彼女は凄まじいほどのパワーでKホッパーを振りほどく。そしてそのままゼクター上部のスイッチに手を伸ばした。

《R i d e r S t i n g》

「ッ!? 止めるお!」

Kホッパーは必殺技をPホッパーに放とうとしているザビーに、反射的にキックを放つて強制的にPホッパーから引き離すと、同時にPホッパーの変身が解除された。Kホッパーが影山の容体を確認すると、辛うじて息はしていた。ボロボロで意識を失っている状態だったが。

一方Kホッパーに蹴り飛ばされたザビーは、そんなダメージなど意にも介さない様にゆっくりと立ち上がる。そしてKホッパー達の方に視線を向けた時……

「ッ!??!?!」

Kホッパーは凍りついた。何故ならその視線からは、彼が今まで感じたことも無いくらいの殺気と狂気が感じられたからである。しかもザビーの複眼自体何時もと違う。

普段は黒に近いブラウンの複眼、だが今は鮮血の様に赤く染まっていた。

「ふう……ふう……ううううあああああああつ！  
？」

ザビーはしばし肩で息をすると、再び叫び声を上げながらKホッパーに向かってくる。彼は慌ててガタツクに手を貸してもらおうとしたが、彼は彼でカブトの相手に忙しそうだった。

ガタツクはカブトの相手で精一杯、影山は戦闘不能。救援は期待できそうにない。

「クソツ！」

Kホッパーは仕方なくザビーを相手にしていくが、ハッキリ言って圧されている。

Kホッパーの多彩なキックは悉くがザビーにかわされ、防がれてしまい、逆にザビーの攻撃は的確にKホッパーの急所を狙っていた。正常な判断ができる思考など無いであろう状態であるにもかかわらず、その攻撃には何時も以上の正確さがあった。

それだけでなく、何時もとは違いどこか荒々しく本能に任せた出鱈目な攻撃ばかりする。攻撃の軌道が全く読めない状況に、Kホッパーは仮面の下で盛大に舌打ちした。

そんな時、Kホッパーの蹴りがいい具合にザビーの頭部にヒットした。ザビーは若干平衡感覚を失った様子で数歩後ろに下がってKホッパーに背を向ける。

「あ、ああ……うううう……はああああ……」

「ッ!? 来るか・・・」

ザビーの様子からまだ大してダメージは受けていないことが見て取れる。いや、ダメージは受けているかもしれないが、もしかしたらダメージをダメージと感じていないかもしれない。

何にしても全く油断できないこの状況、片時も気を抜かずに身構えるKホッパーだが、ザビーの様子に違和感を覚える。

敵意が自分から反れていったのだ。そして今ザビーの視線の先にいるのは・・・カブトとガタツク。

「ま、まさかあいつっ!?!」

「うるあああああああっ!」

Kホッパーがザビーの狙いに気付いた時にはもう遅い、ザビーはカブトとガタツク二人に突撃していった。

「く、久賀達さん!」

ガタツクがそれに気付いた時、ザビーは近くにいたカブトに襲いかかった。カブトは突然襲い掛かって来たザビーに応戦しているが、ザビーは巧みに自身の武装を使ってカブトと戦って行く。新装備のニードルシューターで牽制し、隙が出来たところにゼクターニードルによる左ストレートを叩き込む。

ザビーの様子は正に暴走と呼ぶに相応しい。だがカブトのそれが明確にワームを狙っていたモノであるのに対し、ザビーのはどこか違っていた。



一言で表すなら無差別、目に映るもの全てを敵と認識し目標を叩き潰すまで戦うのを止めない・・・狂気の死神。

Kホッパーとガタツクは、ザビーの様子に戦慄を覚えるのだった。

その頃久賀達の意識は、精神の非常に深いところにあった。

そこで久賀達は、目をつぶり耳を塞いで完全に塞ぎ込んでいる。知りたくはなかった事実、知ってはいけない筈の事実を目の当たりにして彼女は自分の殻に閉じこもってしまったのだ。

(もう嫌だ、何でだよ母さん・・・何でなんだよう・・・)

嘗ての自分が終わり、今の自分が始まる・・・その原因が母親にあった事を知ってしまった。久賀達はもう何も考えたくない、ただ全てを拒絶して自分だけの世界に引き籠っていたいと思っている。

その時、久賀達の前にザビーゼクターが現れた。ザビーゼクターは必死に久賀達の頭を小突く・・・と、漸く久賀達が反応を見せた。

ゆっくりと顔を上げてザビーゼクターを見つめる。だがその目には生気が宿っておらず、何時もの力強さなど微塵も感じられなかった。ザビーゼクターを見ているかどうかさえも怪しい。

《ーッ！ーッ！？》

(ほっといてくれよ・・・もうどうだっていいんだ。)

ザビーゼクターの呼び掛けに、久賀達は興味が無いとでも言いたげに返した。ザビーゼクターはそれでも必死に久賀達に呼び掛けるが、

彼女は全く相手にしようとしなない。

（もうどうだっていい・・・そう、何もかも無くなればいいんだ・・・）

久賀達の思考がそんな危険な方向に傾いてきた時、ザビーゼクターから光が発せられる。久賀達がそれに反応してそちらに目を向け、光が収まった時そこにいたのは・・・

（かあ・・・さん？）

久賀達の母、雪乃がそこに立っていた。その顔は後悔、罪悪感、その他様々な感情がごちゃ混ぜになったかのように歪んでいた。

「時雨・・・ごめんなさい・・・」

（謝るなよ、謝るくらいなら・・・何でこんなことしたんだ。大勢巻き込んで心中でもしたつもりなのか？）

久賀達が雪乃に拒絶の意思を見せても、雪乃は構わず口を開く。

「私があなただの前にいると言う事は、時雨がザビーの資格者に選ばれたのね。という事は、あなたは地獄を生き抜いたと言う事。」

（地獄だったよ・・・頼れる人間は誰もいない、食べる物も何も無い状況だったんだ。今でも夢に見るよ・・・）

絶えず飢えに苦しみ、昼は灼熱夜は極寒。おまけに心細さも相まって何度も死んでしまおうかと考えた。

だが久賀達はこうして生きている。絶望を上回るほどの生への執着が、久賀達をここまで生かしたのだ。

「あなたには本当に申し訳ない事をしたと思ってる。あなたには出来れば平穩に、穏やかに生きていてほしかった。」

（白々しい、地獄を用意したのは何処のどいつだ。他でもない母さんだろ・・・ッ!?）

そう心で言いながら、久賀達は漸く雪乃を見た。そして雪乃の顔に久賀達は初めて反応らしい反応をした。

雪乃の目からは涙が溢れ、その顔は先程までの罪悪感などに歪んだモノから安堵のモノに変わっていたのだ。

「だけど・・・あなたが生きていてくれて良かった！ 廬九郎さんや霧、他の大勢の人を巻き込んでしまった私がこんな事を言う資格はないのだけれど・・・それでも！ あなたが無事でいてくれて、私は・・・」

（何を言ってるんだ？ あたしを・・・霧や父さんをあんな目に遭わせたのは、母さんなんじゃ・・・）

久賀達には訳が分からなかった。何故あの事件の犯人である雪乃が久賀達の無事を喜ぶのか、そもそも何故あのような事をしたのか・

「私はあなたや大勢の人達に対して取り返しのつかない事をしてしまった・・・だけど、それでも・・・これだけは言わせて・・・」

（母さん・・・）

依然として涙を流しつつ言葉を紡いでいく雪乃、次第に久賀達は彼女の言葉を一言も聞き洩らさない様に耳を傾けていた。

雪乃の言葉にジツと聞き入る久賀達、そして雪乃の口が最後の言葉を紡ぐ。

「生きて!！」

(ツ!?)

言葉としてはたったそれだけ、だがその言葉には言葉以上の意味が込められているように久賀達には感じられた。

それと同時に久賀達の意識は現実に戻されていく。

その頃ザビーとカブト・ガタック・Kホッパーの戦いは、ザビーの勝利に終わっていた。

理性を失いながらも攻撃してくるザビーに反撃したカブト、手を組んでザビーとカブトを止めようとしたガタックとKホッパーだが、ザビーを止めることは出来なかった。

必死に抵抗するガタックとKホッパーだったが、ザビーはまるで何も感じていないかのように攻撃を無視して突っ込んでくる。その常軌を逸した戦い方に二人は、そして同じく暴走状態と思われるカブトは手も足も出なかった。

遂にはダメージが限界に来た際の際を突かれてライダーステイングを受けてしまい、3人の変身も解除されてしまう。

「ぐっ!?! うう……くっ。」

矢車は必死に立ち上がるうとしていているが、ダメージの所為で足がもつれて上手くいっていない。加賀美も同様だ。

ザビーはそんな彼らにゆっくりと近付いてくる、トドメを刺すつもりであるうことは明らかだ。

「ふう……ふう……ふう……」

腕を振り上げながら一歩一歩確実に近付いてくるザビー。彼女が目の前に近付きいよいよ最期かと矢車が目を瞑ったその時……

「うぐつ!?!? あ、ああ……」

「? 久賀達?」

「あ……あああああああああああああつ!?!?」

突然ザビーがビクリと震えて動きを止めたかと思うと、徐々にその場から後ずさつて行く。矢車がその様子に怪訝な顔を見ると、彼女は頭を押さえながら絶叫した。

絶叫して頭を押さえながらその場で暴れるザビーに矢車と加賀美が呆然としてみると、突然ザビーの動きがピタリと止まる。

「く、久賀達……」

「うう……あつ。」

ザビーは突然動きを止めて俯いていたかと思うと、何かに気付いたようにその場から去って行った。それを見て矢車は呆然とし、加賀美は天道に近付いていく。天道はかすかに意識を取り戻したのか、ゆっくりと動き始めている。

「天道、大丈夫か？」

「俺はッ！？俺は今まで……何を？」

「覚えてないのか？」

加賀美が近付くと、天道は訳が分からないと言った風に加賀美に掴みかかる。彼の様子に加賀美はしばし啞然とした後、彼に何があったのかを口にした。

「おいっ！？俺の制止を聞かずに立川に襲いかかったんだぞ！」

加賀美の言葉に愕然となる天道。そんな彼を加賀美が助け起こすと、天道はその場の全員にとって衝撃的な言葉を口にしていく。

「あの言葉は、本当だったんだな……」

「えっ？」

「カブトとガタツク、そしてザビーには……俺達の意味とは関係なく、全てのワームを倒す、言わば……暴走スイッチの様な物が仕込まれているらしい。」

加賀美はその言葉に驚愕し、矢車はその言葉に驚くと同時に納得していた。暴走と言うならば先程のザビーの行動も説明がつく。

だが一つ腑に落ちない事がある。天道が言うには暴走スイッチとやらはワームを倒すものらしいが、ザビーはワームも人間も関係なく攻撃していた。目に映る動くモノ全てに攻撃していたのだ。

矢車が内心で首を傾げていると、天道は慌てて立川の下へと向かって行った。何でもひよりの居場所を聞き出すとの事。

それを見て矢車もある事を思い出して顔を青くした。ザビーが向か

って行ったのは立川が逃げて言った方向なのだ・・・

空き地

そこでは命からがら逃げ出したワームの姿の立川が、複数のサナギ体にリンチされているところだった。カブトに受けたダメージもあって、反撃どころか防御も出来なかった。

そこにウカワームとコキリアワームがやってくる。コキリアワームが立川に近付いていくと・・・

『ーーーーッ!?!?!?』

右腕の触手を立川に突き刺した。ワームの姿の立川は苦しげな声を上げ、コキリアワームが触手を引き抜くと立川は人間の姿になりその場に倒れ込む。コキリアワームが倒れた立川に足をかけようとしたその時・・・

「はあああぁっ!」

その場にザビーが現れ、ワーム達に跳びかかって行った。ザビーはそのまま複数のワームを相手に対等に戦っていく。

「ひ、人々を導きし・・・月光の神に選ばれし・・・人、久賀達・・・時雨。」

「立川あ!」

立川が朦朧とした意識の中でザビーを見てそう呟くと、それに少し遅れる形で天道と加賀美がやってくる。二人ともふらつきながらも

立川に向かって走り寄り、彼が倒れているのを見て加賀美がガタツクに変身した。

「変身！」

《Henshin》

加賀美はガタツクに変身すると、ザビーと共にワーム達と戦い始める。その間に天道は立川に近寄っていた。

「しつかりしろ……おいつ！」

「皆既日食を……探して……」

立川は朦朧としつつも最後の力を振り絞り、天道に伝えるべき事を伝える。そして天道にその手に持った何かを渡すと、そこで力尽きワームの姿に戻って行った。彼が天道に渡したのは、最近のワームによる被害者が持っていたのと同じ隕石の欠片だった。

その頃ガタツクはコキリアワームと戦っていた。ワーム自体はほかにも数体のサナギ体があったのだが、それらは全てザビーが一人で相手をしている。だが先程の戦闘での消耗が激しいのか、成虫ワーム1体相手にも苦戦を強いられるガタツク。天道が変身したカブトも、ウカワーム相手に苦戦している。その時……

「フッ！」

『うぐっ?! 何だとッ!』

ザビーがカブトとガタツクを追い詰めている2体のワームに対し、ニードルシューターで攻撃してきた。まだザビーの周囲にはサナギ体がいるのだが、彼女はそのサナギ体の間から的確に援護射撃を行ったのである。



《Hyper Cast off Change Hyper Bettle》

その隙をカブトは見逃さず、ハイパーゼクターを呼び出してハイパーカブトになる。ウカワームはそれを見て即座にその場から去っていく。

「フンツ・・・ライダーステイング！」

《Rider Stinging》

援護射撃を終えたザビーは、周囲のワームを一掃する為ライダーステイングを発動。次々とサナギ体を刺し貫いて一掃する。

サナギ体を片付けたザビーがハイパーカブトの方を見ると、彼もコキリアワームを必殺技のハイパーキックで始末していた。

それを見届けると同時にザビーの目が赤から元の色に戻り、直後に変身が解除されながらその場に倒れ込む。意識を失う直前に、久賀達は矢車が彼女を呼んでいる声が聞こえた様な気がした・・・

### 第37話 狂気と絶望の淵で（後書き）

という訳で第37話でした。久賀達ザビーの暴れ方は本当にバーサーカーです、目に映る動くものなら何でも攻撃します。これにはちゃんとした理由があるのですが、それは今後の展開をお楽しみに。

現在エンジェルさんが執筆されている小説『Wと黄金の不死鳥』とこの作品をコラボさせていただいています。そちらの方も是非読んでみてください！

次回の更新もお楽しみに。それでは。

## PV50000突破記念番外編

黒服「どうも皆さん、いつもご愛読ありがとうございます。黒服です。この度この『仮面ライダーカブト 狂気宿す蜂』のPVが50000を突破いたしました。そのお礼も込めて今回はちょっとこの小説作成の裏話をしていこうかと思えます。ゲストはこちら！」

久賀達「あゝゝゝまあいいや、久賀達 時雨だ。」

黒服「ちよつとちよつと、他にもなんか話してよ。」

久賀達「うるせえなゝゝゝまあなんだ、何時も読んでくれてありがとな。これでも一応感謝してるよ。」

黒服「やれやれこの人はゝゝゝ後今回は彼女の他に二人ゲストが来てくださってます、こちらの二人です！」

青羽「やつほーっ！ 『仮面ライダー剣&キバ 青く輝く炎』の主人公、桐沢 青羽よ。よろしくねゝっ！」

優紀「どうも、『仮面ライダー剣&キバ 白き帝王』のメ、メイン・ヒロインの、東雲 優紀です。」 耳まで真っ赤

青羽「いやゝ、ホント優紀さんってば反応が初心で見てて微笑ましいわねゝ。」

黒服「はいはいそこ、二人で盛り上がらないの。今回の主役はこつち、久賀達なんだから。」

青羽「は〜い。」

優紀「す、すみません。」

久賀達「ところで黒服、ちょっと気になってんだけど・・・」

黒服「何？　と言うか作者を呼び捨てって君・・・」

久賀達「んなことどうでもいいから。それより何であたしだけ名字で呼ぶんだ？　こいつ等は下の名前で呼ぶのに。」

黒服「ああ、簡単だよ。久賀達が主役やってる世界はあくまで原作に合わせて書いている訳、んで、原作カブトの世界だと一部を覗いて皆名字で呼び合う仲だからさ。それに合わせてる訳。」

久賀達「青羽達は？」

黒服「彼女達がいる世界はファンタジーRPGの世界を意識して書いているんだ、そう言う世界って漢字の名前があるかどうかは別にして皆下の名前、ファーストネームで呼び合うじゃん？　だからそれに合わせてるんだよ。」

久賀達「なるほど、理由は分かったけど・・・」

黒服「とはいえ流石にこのままじゃ一人仲間はずれを感じがあるかな、よし！　ここから先は君も下の名前で呼ぶことにしよう。」

時雨「唐突だな、まあいいけどよ。」

黒服「細かい事は気にしない。何時までもこんな事で時間を潰す訳

にもいかないんだしさ。それじゃあ早速行ってみようか!」

1、時雨が出来た経緯は?

青羽「裏話としては王道と言えば王道ね。で? 時雨さんってどうして出来たの?」

優紀「あちこちで言いふらしてる内容からすると、時雨さんは仮面ライダー龍騎の浅倉に理性を持たせて女性にしたキャラとのことですが……」

黒服「それはあくまで彼女を作る上での構成要素として付け加えた設定、切っ掛けは別の所にある訳だよ。」

時雨「別の所? なんだそれ?」

黒服「まあぶっちゃけて言うと、あるものを見てそれを見た瞬間時雨と言うキャラを作ろうと思ったんだよね。」

青羽「なになに、何を見て時雨さんを作ろうと思ったの?」

黒服「うーんとねえ、DCFF7の攻略本に載ってる敵キャラの女兵士の設定画。あれを見た瞬間にビビッときて時雨と言うキャラを作ろうと思ったんだ。」

時雨「は? なんだそりゃ……」

黒服「いいじゃん別に、何事も切っ掛けなんて些細なことの場合が多いんだから。それじゃあ次行ってみようか!」

青羽「流したわね・・・」

2、時雨の部下にモデルはいるの？

黒服「時雨の副官の戸高と、隊員の檜和田にはいないけどもそれ以外の神田とかにはいるよ。具体的にはねえ・・・」

神田 亜紀「バスケット（エイリアン2）」

葛西 剛輝「ドレイク（エイリアン2）」

播磨 勇次「ハドソン（エイリアン2）」

黒服「とまあこんな感じだね。」

青羽「み、皆映画『エイリアン2』の登場人物だね・・・」

優紀「しかも全員海兵隊・・・」

黒服「エイリアン2はエイリアンシリーズの中でも特に評価の高い作品なんだよね。この作品を書く上で主人公はZECT側の人間にしようって決めてたから、その時に部隊の隊員との絡みも演出に入れる為に作る隊員のキャラ作りの参考にした訳。時雨は見ての通り厳格さよりも繋がり重視するタイプだから、そういう意味でも仲間意識の強いつながりを持つ海兵隊は絶好のモデルだったんだよ。」

時雨「にしてもまあ、バスケットとハドソンはともかく何でドレイクなんだよ？ あいつ序盤の戦闘で死ぬじゃん。」

黒服「分かって無いなあ、バスケエスの相棒つつたらドレイクしかいないでしょうが！」

時雨「あゝあゝ分かった分かった。そんじゃ次行こうか。」

3、ザビーが主人公なのは何故？

青羽「あつ、これ気になる。なんでなんで？」

黒服「一つには原作で最初の資格者だった矢車さんと違う行動をザビーにとらせたかったのがあるんだよ。小説にも書いてるけど部下とカブトを天秤にかけて部下を選ぶザビーって言うのが書きたかったんだ。」

時雨「今更だけど、何で矢車じゃないんだ？ 別にあたしじゃなくてもあいつがザビーのままですう言う行動をとればいいんじゃないのか？」

黒服「いやゝゝそれだとなんか面白みが無い様な気がしてさあ。それに矢車さんはきれいなままキックホッパーを使ってほしいとも思ってたし。」

優紀「まああの人はザビーの時よりもホッパーを使ってる時の方がインパクトはありましたからね。それで、もう一つは？」

黒服「割と単純、自分がザビーが好きだから。」

青羽「本当に単純だね。」

4、ザビーはハイパーフォームにならないの？

黒服「なりません。」

時雨「ハッキリ言ったな。」

黒服「最近の話で強化はされたけどザビーはそこまでだよ、それ以上の強化変身とかを出すつもりはないから。」

優紀「でも構想の段階では出すつもりだったんでしょう？」

黒服「まあね、ザビーを主人公に据える訳だしその特権としてハイパーゼクターが使える様に強化する案もあつたんだよ。でもさ、最近思っただけど主人公だからって最強形態があるってのはありきたり過ぎる気がするんだよね。」

時雨「あゝまあ王道ではあるよな、そう言っつので、お前はそれに待ったをかけた訳だ。」

黒服「作者をお前呼ばわりは止めなさい。でもまあそう言っつ訳、今後もザビーにはこのまま強化変身はなしのまま頑張ってもらっつからよろしくね。」

時雨「はいはいっつ。」

5、ちょっとがっかりしてる事があるって？



青羽「何これ？ どういう事？」

優紀「何か気に入らないことでもあるんですか？」

黒服「気に入らないって程の事無無いんだけどね、ただギャグが受けなかった時の虚しさみたいな感じ。」

時雨「もしかして……あれか？」

黒服「うん、時雨の行きつけの定食屋の名前。」

青羽「時雨さんが行きつけの定食屋の名前って……」

優紀「かゆうま亭……でしたね。」

黒服「かゆうまつてのは有名なゲームバイオハザードに出てくる日記からきてる……まあ早い話がネタだね。日記で一人の人間がだんだんゾンビになりながら書いてる日記の最後の方に書かれてる「かゆい うま」のところ、これをネタにしたのが『かゆうま』。最初はふざけて付けてみたんだけど、だくれも突っ込んでくれないから寂しいの何の……」

時雨「まあぶつちやけ……微妙なボケだったって事だな。」

優紀「嘘を吐いたという事自体が嘘と言う様なモノですね。」

青羽「ま……頑張んなさいよ！ それじゃ次行ってみよう！」

黒服「勝手に仕切らないの。」

6、今後何か小説を書く予定は？

青羽「あたしと優紀さんのところ、それとここでとりあえず『ブレイド』と『カブト』、それに『キバ』は書いてる訳だけどさ。他の仮面ライダーで何か書く予定とかないの？」

黒服「予定というか、どのライダーでどんな小説を書くかは大体決まってるよ。平成ライダー限定だけど。」

青羽「ええっ！？ 嘘お！」

黒服「ホント、具体的にはこんなの。」

1・『アギト』と『ファイズ』の世界が融合した世界、人間とオルフェノク、アンノウンの三つ巴の戦いを描いていく予定

2・原作とディケイド版を組み合わせで作った『龍騎』の世界、『剣&キバ』の世界同様仮面ライダーが世界的に認められて、年に一度最強のライダーを決める世界大会が開かれる。世界大会での優勝を狙うライダー達の戦いを描いていく予定

3・原作とほとんど変わらない『響鬼』の世界、ただし主人公や登場人物がオリジナル、オリジナルあり

4・こちらも原作とほとんど変わらない『電王』の世界、多分オナー以外は人間もライダーもオリジナル

5・使命を果たし終えたディケイドが様々な世界を巡る物語、ディケイド・ディエンド共にオリジナルキャラ

6・ガイアメモリを生活に取り入れた『W』の世界、原作とは基本関係のないパラレルワールド。オーズとの接点もなし

黒服「ざつとこんなところかな。」

時雨「おい、クウガがねえぞ。どうしてだ？」

黒服「クウガはまだどんな世界観にするか決まって無いんだよ。クウガには基本登場する仮面ライダーがクウガだけだし、オリジナルの世界観にするとしてもクウガとグロンギを絡めてどんな世界にするかまだ決まらないから。」

優紀「2番目の龍騎の世界って、敵は出ないんですか？」

黒服「基本的に世界大会に向けて頑張っていく人を書いていく予定だからね、強いて言えば同じ仮面ライダーが敵と言えるよ。もっとも死人とかが出ない世界観にする予定だから、そうだなあ……『メダロット』と『Gガン』の世界を組み合わせたって言えば分かりやすいかな。」

時雨「ここまで決まってる書き出さない理由は？」

黒服「無理。これ以上増やしたら自分の頭が破裂しちゃう。今はあくまでも構想を練る程度に留めて、今書いているのが完結したら書き始める予定。あつ、ちなみに書きは始める順番はこの通りとは限らないので。」

青羽「でもさあ、これの他にも『剣&キバ』のスピノフも書く予定なんでしょ？」

黒服「そうなんだよね、そっちも書いちゃいたいからもしかしたらこれを書くのはもうちょっと後になるかも・・・」

7、読者の皆さんに一言

黒服「え、執筆活動初心者の自分の小説をこんなに見ていただいて、皆さん本当にありがとうございます。今後も皆さんにお楽しみいただける作品を目指して頑張って行きますので、何卒よろしくお願いいたします。」

時雨「詳しく言うとネタばれになるから言えないけど、これから物語はマスキッドライダーシステムとネイティブの核心に徐々に迫って行く予定だから。その所も含めてどうぞよろしくお願いします。」

青羽「おおっ！時雨さんが敬語使った！それは置いといて、あたし達が出てる『仮面ライダー剣&キバ』もよろしくね！」

優紀「こちらの方もPVが突破するかした際にこのような企画を行うらしいので、何卒よろしくお願いします。」

PV50000 突破記念番外編（後書き）

と言う訳で今回はちょっと息抜きがてらキャラ達との対談形式で、この小説の裏話なんかをやってみました。実はこういうキャラの対談形式の話を書いてみたくて仕方なかったので、書いてる間は楽しかったです（笑）

ザビーのハイパーフォームなんかは、実はこれを書く前に結構本気で考えたりしてました。ただ後になって主人公だから強化変身態ってのは安易な気がしてしまったので、元がサブライダーなので強化変身はなしで行った方が面白いのでは？ と考えてしまった自分がいる訳ですよ。

今後執筆予定の方も、今書いてるのが完結したら書きはじめる予定になってますので楽しみに！

次回からは再び本編です。あの後久賀達がどうなったのか、次回の更新も楽しみにしてください。

それでは。

第38話 明かされる過去・終わりと始まり（前書き）

どうも、黒服です。今回ついに謎多き久賀達の過去が明らかに！  
それと今回ちょっとシヨッキンゲな描写があります。グロい描写が  
苦手な方は気を付けてください。

### 第38話 明かされる過去・終わりと始まり

病院

暴走スイッチが入ったザビーに翻弄され、久賀達が天道と共に暴走した後倒れた久賀達はこの病院に運ばれていた。天道の方はあれからすぐに復帰したが、何故か久賀達の方は肉体に相当の疲労が蓄積していたらしく5日経っても意識不明となっていた。ベッドで眠っている彼女の近くには、彼女を心配そうに見つめる矢車と、体のあちこちに包帯を巻いた影山の姿がある。彼も怪我人だが、それでも未だに意識不明の状態の久賀達が心配だったのだろう。

二人が久賀達の様子を見てみると、不意に彼女の瞼がピクリと動いた。

「久賀達・・・？」

「久賀達さん！？」

「うっ・・・ここは？」

久賀達は目を覚ますと自分がどこに居るのか確認する様に周囲に目をやる。しばしぼんやりと辺りを見回していたが、次第に意識がはつきりしてきたのか自分が病院の一室で横になっている事に気付く。

「あたしは・・・一体？」

「久賀達、何があつたか覚えてるか？」

矢車の言葉に、久賀達は顎に手を当ててしばし考え込む。最後に覚えていてるのはウカワームを含んだ複数のワームが立川をリンチにし、そのワームの中から成虫体を天道達に任せて自分はサナギ体を葬り

去った所まで。

「あたしは確か、天道を止めようとして・・・」

「カブトと殴り合った時、お前暴走して影山を半殺しにしたんだぞ。」

「ッ！？ あたしが、影山を？」

「ああ、その後俺と加賀美、これから暴走したカブトも戦闘不能にして、最後にトドメが来るかと思っただらいきなり苦しみ出したんだ。その後は真っ直ぐ立川の所に向かって、あいつの周りに集まったワームと戦ってた。」

矢車から聞かされた事実には、久賀達は頭を押さえて俯いてしまう。

そんな彼女を心配してか矢車と影山は椅子を引っ張ってきてベッドの近くに腰掛ける。

「久賀達さん、大丈夫ですか？」

「影山・・・悪い、何か・・・お前に酷いことしたみたいで。」

「気にしないでください、何か訳ありだったみたいです。それよりも久賀達さんですよ、いきなり暴れ出したと思ったら、今度は丸々5日間ずっと眠ってたんですよ。」

その間の久賀達は呼吸による胸の上下運動以外は一切身じろぎすることなく、パツと見死んでいるのではないかと思えるほどだった。

矢車が医師に訊いた所、どうもかなりの疲労が原因との事。可能性として考えられるのはあの暴走だが・・・

「久賀達、一体何があった？ あの時の事で何か覚えてる事は？」

久賀達が覚えていることと言えば、カブトと戦っている最中に突然意識が飛んで気が付いたらワームと戦っていた事。その事を言おう



として、彼女の脳裏にある光景が浮かんできた。

それは・・・4年前の事件直前の光景。それを思い出ししてしまえば後はアツサリと思いだせた、暴走状態にあつたらしい自分が何を見ていたのか。

「実は・・・」

数分後・・・

それから久賀達は、彼女が暴走している間に何を見ていたのかを二人に話した。正直この事に関してはあまり話したくはなかったのだが、二人に迷惑をかけてしまった手前だんまりを決め込むのも気が退けたのである。

彼女の話聞き終えた二人は、正直なところ信じられないと言った顔をしていた。

「どういう事なんだ？ 何故ザビーゼクターからお前の母親が・・・」

「それは・・・分からない。ただ思うんだ、母さんはザビーゼクターと何か関わりがあるんじゃないかって。」

「あの、ちよつと気になるんですけど・・・久賀達さんのご両親って？」

「・・・死んだよ、4年前に。」

「あつ、その・・・すいません。」

話の流れからある程度は予想できていたが、それでもこの事を聞かずに居られなかった。久賀達の話からすると彼女の母親、雪乃は

久賀達がザビーゼクターに選ばれる事を知っていたらしい。もしかやZECTの関係者かと考えるのは普通の事だが、これに関しては久賀達も何も知らないらしい。

重い雰囲気になった室内で誰も口を開けないでいると、思い切つて矢車が久賀達に質問した。

「久賀達、4年前お前に何があつたんだ？ 俺にはお前の4年前の事が鍵になっている様な気がしてならないんだが・・・」

矢車の質問に、久賀達はしばし口籠る。これはあまり他人においてそれと話したいモノでも、ましてや思い出したいモノでもない。

だが矢車の言う通り今回の事は彼女の4年前の事が関係しているのは間違いない。何より久賀達がZECTにスカウトされたのが4年前なのだ、全く無関係と言う事はないであろう。

「・・・そうだな、そろそろ話してもいい頃かもな・・・」

そう口にする、久賀達はゆっくりと口を開いた。

#### 4年前・飛行機内

その日、久賀達は家族旅行でフランスに向かう為飛行機に乗っていた。機内には久賀達一家の他にも旅行や仕事の理由で乗っているであろう乗客の姿が確認できる。

「姉ちゃん姉ちゃん！ あたし飛行機なんて初めて乗ったよ、うわくわくする！」

「分かった分かった、とりあえず落ち着け。他の乗客に迷惑だから。」  
久賀達はそう言って席に座ってはしゃぐ雲を宥める。もつとも久賀達自身飛行機に乗るのは初めてだったため、全くはしゃいでいないかと言えば嘘になるのだが。

「雲、はしゃぐのもいいけど向こうでは気を付けるよ？ 不用心な観光客ほど狙われやすいモノはないからな。」

そんなはしゃぐ雲に彼女達の父、蜷九郎が軽く注意を促す。実際現地人にしてみれば雲の様に警戒心の欠片もない観光客は絶好の獲物と言えるだろう、あつという間に金目の物を奪われて最悪人間の方にも手を出されることだつてあり得る。

だが当の雲はそれを聞いてもケラケラと笑って口を開いた。

「だ〜いじょうぶだつて父さん！ 何せ姉ちゃんが付いてるんだもん、強盗なんてあつという間に捻り潰しちゃうつて。」

雲の言葉に久賀達は思わず苦笑を洩らす。頼りにされるのは嬉しいが、過剰に頼られても困ってしまう。もつとも久賀達自身家族が危ない目に遭いそうだつたらすぐさまその相手を叩き潰す気満々だつたのだが。

そんな久賀達の様子を、横に座っている雪乃は笑みを浮かべながら見ている。

「ほ〜んと、時雨は下手なボディガードよりも頼りになるからねえ。向こうで母さん達が思いつきり羽を伸ばしても安心だわ。」

「母さんまで・・・全く・・・」

雲に同意して久賀達に頼る気満々な雪乃の様子に、彼女は思わずため息を吐いてしまう。外見は母親似だとよく言われるが、こういう所を見ているとつくづく自分は用心深い父親似だと思えて仕方が無い。前の席に座った厩九郎に目を向けると、彼も久賀達と同じような表情で溜息を吐いていた。どうやら本当に性格面では父親似らしい、そう思うと意味もなく笑みが浮かんでしまう。

そうこうしていると、機内にアナウンスが流れる。どうやら今飛行機はサウジアラビアの上空に位置しているらしい。窓の外を見ていた雲は、地上に広がる砂漠に興奮していた。

久賀達も雲と一緒に軽く窓の外に目を向けていると、雪乃が席から立ち上がる。久賀達がそちらに目を向けると、雪乃は『トイレに行く』とだけ言ってその場から離れてしまう。久賀達も特にそれを気にすることなく本でも読もうかと考えていたその時・・・

機内に爆音が響きわたった。

「きゃああああっ?! 何、何っ!?!」

「伏せる!?!」

突然の事態にうろたえる雲を宥めながら、久賀達は妹を守るように抱きしめる。機内には何らかのアナウンスが流れているが、慌てふためく他の乗客の悲鳴に紛れて何も聞きとれない。その間にも久賀達を浮遊感が襲い、否が応でも飛行機が間違いない墜落する事を教えてくれる。

久賀達が何とか窓の外を見てみると、機体から黒煙が上がっている

のが見える。その向こうには猛烈なスピードで迫ってくる地上の様子も。

久賀達は必死に雪乃の姿を探すが、爆発で電気機器がやられたのか照明が落ちた機内で雪乃を探すのは不可能だった。その時機内に大きな衝撃が走る、どうやら機体が地上にぶつかり滑っているらしい。その後も大きな振動が立て続けに起こり、次第に機体に亀裂が入り始める。

そして一際大きな振動が久賀達を襲った時、彼女は座席から投げ出され……同時に意識が闇の中に堕ちていった。

「うつ……」

久賀達が気付くと体は機体の外、砂漠の上に投げ出されていた。どうやら座席から投げ出された彼女はそのまま機体に空いた亀裂から外に飛び出してしまったらしい、周りを見ると少し離れた所に彼女が乗っていた飛行機の姿が。

「うつぐつ?! くつ……震……父さん……母さん。」

彼女が立ちあがろうとすると、全身に鋭い痛みが走る。外に投げ出された時全身を地面に叩きつけられたらしい。一応五体満足だが、骨折があるかどうかは分からない。立ち上がれる所から少なくとも足の骨は折れていない様だが、輝くくらいは入っているのではないだろうか。そう思わせるほどの激痛が久賀達を襲う。

だが久賀達は痛む体に鞭打って飛行機へと近付いていく、まだ家族があそこにいるかもしれないのだ。

「はっ・・・はっ・・・はっ・・・」

片足を引き摺りながら墜落した機体に近付くと、その惨状が良く分かった。機体には真ん中に大きな亀裂が入り、翼は根本から千切れてしまっている。底の方に目を向けると一際目を引く大きな黒い穴が開いていた、これがそもそもの発端だろう。

テロか何かと思ったが、とにかくこの場ではその疑問は無視する。今優先するべきなのは家族なのだから。

「父さん・・・母さん・・・霧。皆・・・何処にいるの？」

辺りは墜落の際に飛び散った残骸や投げ出された死体などが燃え、ただでさえ熱い砂漠をこれでもかと熱くしている。その熱に汗を流し、熱さと激痛にフラフラになりながらも久賀達は家族の姿を探していた。その時、残骸の陰に妹の腕を見つけた。何時も付けているお気に入りのブレスレットがその証だ。

「霧・・・？ 霧え！？」

久賀達は急いで妹に駆け寄り寄るべく残骸の影を覗きこんだ。しかしそこには妹の姿は何処にもなく、肘から下の腕だけがあった。

「ッ！？ あ・・・み、霧・・・霧？ 霧え！」

久賀達は必死に妹の名を呼ぶが、一向に返事は返ってこない。辺りを見渡しても目に入るのは残骸に押し潰されて内臓を飛び出させている男性の死体や、誰が誰だか分からないほど炭化した焼死体しかなかった。

その状況でも久賀達は諦めることなく家族を捜した、限りなく低い可能性に全てを賭けて・・・

だが現実是非常だった。何とか機内に入れそうな所を見つけるとそこから入り、機内で家族を捜した久賀達。自分が座っていたと思われる席の近くには妹の姿はなく、代わりに残骸に心臓を貫かれて死んだ父の姿と、こちらに残骸に押しつぶされてすでに息のない母の姿しかなかった。しかも火の手はいよいよもって強くなっていき、このままいけば彼女自身も危ないだろう。

久賀達は名残惜しそうにしながらもその場を後にした。もう自分の家族はこの世にいない、そう自分に言い聞かせて・・・

それからしばらく久賀達は砂漠を彷徨っていた。あのままあの場になれば燃料に引火して起こる爆発などの二次災害に巻き込まれてしまっていたかもしれない。勿論少し離れた所で爆発を逃れて、後から来る救助隊を待った方が生存率はずっと高い筈だが、突然の事態と家族を失ったショックで正常な判断力を欠いていた久賀達にはそこまで頭が回らなかった。

(とにかく人・・・人に会えれば・・・)

そう久賀達は心の中で呟くが、実際問題人に会えるかは非常に微妙な所だ。そもそも彼女がいるのは砂漠のど真ん中、そんな所に人がいる可能性は限りなく低いだろう。

それでも久賀達は歩き続けた、生き残る為に・・・

それから3日が経った。未だに人に会う事は出来ず、久賀達の身も心もすでに限界に来ていた。

(暑い・・・熱い、水・・・)

それと言うのも食べる物も何もない状態で砂漠を彷徨っていたのである。日中は強い日差しが体力を奪い、夜は極寒の寒さが体温を奪っていく。渴きと飢え、そして昼夜の温度変化に久賀達はボロボロになっていた。

その目に光はなく、目は虚ろで意識は朦朧としている。何時倒れてもおかしくはないだろう。

(もう・・・限界だ。このまま逝けば、皆に会えるかな・・・なんて、ハハツ・・・)

この極限状態で、次第に久賀達の意識も諦めの方向に向かっていく。歩くスピードも遅くなり、遂に足を止めてその場に膝を突いてしまった。もう歩くだけの体力も無い。

(ヤバ、足が動かないや。これであたしもお終い・・・か。)

体は思うように動かず、空腹も限界。その上周囲には人影もなく食べる物など何も持ってはいない。正しく絶体絶命、並みの人間だったらここで全てを諦めて大人しく死神が来るのを待つであろう。

だが・・・久賀達はここにきて死の運命に抗った。

(お終い・・・こんな所で？ 誰もいない・・・何も無い所で死ぬ・



・・・嫌だな。）

それはどういった心境の変化だろうか。さっきまで生きる事を諦めていた筈なのに、ここにきて死ぬ事に拒否感を抱きはじめた。

「い、嫌だ・・・こんな所で死ぬなんて、そんなの嫌だ。死にたくない・・・死にたくない・・・死にたくない！」

久賀達はそう叫んで足に力を込める。必死になって立ち上がろうとするが、やはり体力の限界なのか体が動かない。

その時、彼女の目にある物が映った。砂の中で蠢く細長い生き物・・・蛇だ。

それを見た瞬間久賀達の目の色が変わった、その目はそれまでの弱々しいモノではなく獲物を狙う獰猛な肉食獣の目。久賀達は蛇に近付くと迷わず蛇の首根っこを掴み、そして・・・迷わず蛇に齧り付いた。

当然の事ながら蛇は派手に暴れるが、久賀達の手は蛇の首根っこをガッチリと掴んでいる為噛みつく事も出来ない。久賀達は食い千切った真つ二つになった蛇の尻尾の方を咀嚼していく、内臓も、久賀達が齧りつくよりも前に蛇が捕食して消化され切った獲物のなれの果ても、骨も砂も関係なく。尻尾側を平らげると、今度は頭側の方を口に入れていく。頭から口に入れると噛まれる危険があるので、食い千切った断面の方から。蛇の体は久賀達に咀嚼されていき、頭だけ残されて彼女の胃に収まった。

「はぁ・・・はぁ・・・く、くくく・・・」

蛇を平らげ口元を蛇の血で汚した久賀達の顔に浮かんでいたのは、紛れもない歓喜の表情。血で汚れたその口から次第に笑いが漏れてきて、堪え切れなくなったのか狂ったような笑い声を挙げ始めた。

「あつはははははははっ!? はは、あははっ、ははははははは・・・

」

漸く得られた栄養源、体が求め続けた養分を摂取出来た事に彼女の体が歓喜する。だがその表情と笑い声とは裏腹に、その瞳からは止めどない涙が流れていた。悟ったのだらう、自分が戻れない所に来た事を。それからしばらくの間、誰もいない砂漠の真ん中に久賀達の狂笑が響きわたっていた。

それから一週間、久賀達は執念で生き残った。生き残る事を胸に必死になって歩いてきたが、人のいる所には出ず肉体的に最早限界だ。足が完全に動かなくなり、ゆっくりと地面に倒れる。灼熱の大地に顔が焼かれるがもう身動きも出来ない、これまでかと久賀達が本気で諦めかけたその時・・・

「生きてる? 生きてるぞ!」

「ほ、本当か?!」

(だ・・・誰?)

突然近くで人の声が出た、それも日本語だ。一体誰なのかと気になる久賀達だが、動く事が出来ないで相手の顔を見ることが出来ない。人の気配はだんだんと近付いて来て、声だけ聞こえていた人物は倒れている久賀達を仰向けにした。太陽の逆光で顔を見ることが出来ないが、相手は二人の男らしい。そこにさらに一人の男が加わる。

「驚いた、まさか本当に生きているとは……合格だね。」  
「総帥？」

声からして相手は初老の男性だろう、彼の言葉に別の男性が訝しげな声を挙げるが初老の男性はそれに答えず久賀達を連れていくように指示した。相手が誰なのか久賀達には全く心当たりが無かったが、人に会えたと言う安心感から一気に眠気が襲ってくる。そして久賀達はそのまま深い眠りに落ちていった。

現在

久賀達の話聞いた矢車と影山の二人は絶句していた、まさか彼女にこんな壮絶な過去があるとは思わなかったのだ。

「お前……良く生きてたな。」

「ハハツ、あたしもそう思うよ。未だにあたしがこうして生きているのが信じられないね。」

矢車は呆然としながらもそう呟いた、と言うよりそれ以外に言葉が出てこなかったという方が正しいだろう。

「結局誰だったんだ？ 砂漠でお前を助けてくれたのは。」

「それは……分からない。あたしもあの時の事は結構あやふやだから、もしかしたらどこか間違ってるかも。ただ……」

「ただ？」

「老人の声の方は最近どこかで聞いたことがある様な……」

久賀達はそう言って首を捻る。今思い出してみれば、あの時の声は

どこかで聞いたことがある様な気がするのだ。だがどうしても思い出せず、この事についてはとりあえず保留にすることにした。

「久賀達さんは、その・・・食ったんですか？ 蛇を・・・」

「ああ、食ったよ。蛇だけじゃない、サソリにトカゲ・・・とにかく目に映ったモノは何でも食った。そうでもしないと生き残れなかったからな。もしかしたら、人間も食ってたかもな。」

久賀達はそう言って笑うが、聞いている矢車達にとっては冗談ではない。話を聞く限りではそのような事をしていても全く不思議ではないからだ。生きている動物を食べるのは正直信じられない事だろうが、人間極限状態になるとなりふり構ってはいられないもの。特に久賀達が経験したような場合だと、その一線を越えられるかどうかが生き残る鍵だろう。食べる物が何もない状況では、例え生きている生物だろうがなんだろうが口に入れて咀嚼して飲み込まなければ待っているのは確実にやってくる“死”だけである。

「もしかして・・・お前が悪食になったのは・・・」

「ああその通りさ、あの時はもう食うもん選んでられなかったからな。食える物は何でも食つとかなないと、あつという間にお陀仏だったから。」

あの時から久賀達の味覚は変わってしまった、それまではもつと普通の味覚をしていた筈だが今となっては彼女にとって味覚などあって無い様なモノ。不味い物だろうが美味い物だろうが食べることに意味がある彼女にとっては、味など完全に二の次となっていた。勿論美味いに越したことはないのだが・・・

ついでに言えば大食漢になったのもこの頃からだ。空腹はこの時の記憶を嫌でも呼び起こす、とにかく常時物を腹に入れて空腹の時間

を少なくしなければ心の傷を刺激されて平常を保てなくなってしまう危険性があった。

その時久賀達の腹から盛大な音が鳴った。考えれば5日間も何も口にしていないのだから、空腹になるのは当然だ。それを聞いて影山が人を呼ぶと言って病室から出ていく、ナーズコールを使えばすぐだろうが、恐らく久賀達に気を使ったのだろう。

矢車もそれに付いていこうとしたが、それは久賀達に止められる。彼女は何も言わなかったが、今は一人になりたくないのかもしれない。何時もと違って弱々しい様子の久賀達に、矢車は内心驚きながらその場に残る事にした。

「……母さんだった。あたしをあの地獄に叩き落としたのは母さんだったんだ。」

二人つきりになった病室に、久賀達の声が響き渡る。矢車は何も言わずにそれを聞く。

「でも、母さん言ってたんだ……ゴメンって。ザビーゼクターがあたしに母さんの言葉を伝えてくれた……訳分かんねえよ。自分であたしを地獄に付き落としておきながら、ゴメンて言ったり生きろって言ったり、もう何がどうなってるんだか全然分かんねえよ！」

そう言う久賀達の声は震え、俯いた彼女の頬を涙が伝っていた。

(泣いてる？ あの久賀達が?)

それは彼女と付き合いの長い矢車が初めて見た久賀達の涙だった。

矢車は泣いている彼女に驚いていたが、すぐに気を取り直すと優しく彼女を抱きしめた。下手に慰めの言葉をかけるよりはこの方がいい。つとよい。

それからしばらくの間、病室には久賀達の押し殺したような嗚咽が響いていた。

それから数分後、落ち着いた久賀達はややバツが悪そうな顔をしていた。普段見せない弱い部分を曝け出してしまったのだからそれも当然か。

「悪い、迷惑かけた・・・」

「気にするな。むしろ珍しいモノが見れて眼福だったぞ。」

そう言うて軽く笑ってみせる矢車に、思わず久賀達も笑みを浮かべる。その時廊下が急に騒がしくなってきた、何事かと二人がドアの方に目を向けるとドアが乱暴に開かれて、廊下から久賀達の部下全員が雪崩れ込んできた。

「隊長ツ!? 大丈夫ですか!」

「5日間もずっと眠りっぱなしだったって!」

「さつき影山さんに隊長が起きたって聞いて、俺等もういてもたってもいられなくて・・・」

病院だと言う事も忘れて大騒ぎするシャドウ第2番隊の面々、その様子に最初は呆気にとられていた久賀達だが、次第に我を取り戻していく。

「お前ら・・・」

『『『ツ!?!?!?』』』

「ここ何処だと思ってんだッ!? ガキじゃねえんだから静かにしろお!」

あまりの騒がしさに、久賀達の雷が全員に落ちる。それと同時に全員病室から蜘蛛の子を散らすように出ていった、彼女のことは心配だがそれとこれとは話は別、キレた久賀達は何よりも怖いのだ。

「はぁ・・・ったくあいつら。」

「ハハッ、いい部下じゃないか。お前の事をあそこまで心配してくれてるんだ。」

「・・・まあな。」

「なんか、すみません。止めようとはしたんですけど、この状態じや止められなくて・・・」

戸高らが出ていったドアの陰から影山が申し訳なさそうに顔を覗かせる。もっともこれはたまたま久賀達の部下に見つかってしまった影山の運の無さが原因とも言えるので、そこまで彼が気にするほどの事ではない。要は偶然の結果だ。

久賀達は影山に気にしないように言つと、ベッドから降りて外に出ていく。

「何処に行くんだ?」

「決まってるだろ、腹ごしらえだ。食ってなかったら日間分たっぶり食うぞ。」

大分調子を取り戻した様子の久賀達に矢車は苦笑すると、影山と共に彼女に付いていった。とりあえず何時もの久賀達に戻った事を心の中で喜びながら。

### 第38話 明かされる過去・終わりと始まり（後書き）

と言う訳で第38話でした。ちょっと前から話題に上がっていた久賀達の過去がメインの話です。自分で言うのもなんですがかなり壮絶な過去じゃないですかね（汗）、事故で家族失って砂漠を彷徨うって……。

今回久賀達の悪食と大食漢の理由が明らかになりました。料理対決編で彼女が言っていた『食えることが嬉しい』と言うのはここに繋がる訳です。何しろ食える物があるかどうかも分からない状況ですからね、サバイバルなんてレベルじゃありません。

まだまだ謎は多いですが、それは今後の物語をお楽しみに！  
それでは。



### 第39話 迷う者と導く者（前書き）

どうも、黒服です。今回はエンジェルさんの小説『Wと黄金の不  
死鳥』とコラボしていただいた際のコラボ小説と関係しています。

### 第39話 迷う者と導く者

ZECT本部・訓練施設

久賀達が目を覚ましてから数日後、見事に復活した彼女は現在訓練施設で射撃訓練に精を出していた。

それと言うのも回復してから少し経った先日、とある事情で彼女は神田や葛西など一部の部下と共に『片倉 景綱』が主人公の世界『Wの世界』に赴き彼が変身する仮面ライダーWと戦ったりした。だがその際に思いの外自身の射撃能力が下がっていることが露呈してしまったのだ。景綱と和解した際、損傷したザビーに代わり仮面ライダーカイザに変身してスーパーショッカーの残党とも戦ったのだが、その際も武装の性能を最大限に発揮する事が出来なかった。

「……ヤツベ、ヒドいなこれ。」

今もマシンガンブレードで訓練用的に向けて銃撃を行っているのだが、その結果は散々なモノだ。辛うじて的に当たってはいるものの、命中率はあまり宜しくはない。ゼクトルーパー時代はそうではなかったものの、ザビーとして戦うようになっては格闘訓練ばかりで射撃訓練をしなくなった。

元々久賀達は射撃が得意な方でもなかった。ザビーになる前はマシンガンブレードを扱う必要から毎日訓練していたのでまだ良かったが、今はほとんど射撃訓練をしなくなったので大分鈍ってしまったらしい。

「にしても影山の奴、大分参ってたな……」

少し射撃訓練を休むことにして、ふとそんな事を呟く久賀達。先日彼女が『Wの世界』に赴いた時、入れ違いになる様に『Wの世界』とは別の世界の片倉 景綱がやってきた。その彼が変身するオーデインによつて、矢車と影山を始めとするZECT所属のライダー達が軒並み倒されてしまったのだ。

幸いなことに全員命に別状はなかったが、その間は久賀達が一人で戦えない彼らの分も戦う必要が出来た為にかなりハードな日々を送っていた。何しろオーデインはライダーだけでなく、配下のゼクトルーパー達も戦闘不能にさせてしまったのだ。結果久賀達は他の部隊が動けない分をカバーするだけでなく、戦える葛西や神田といった少数の部下で戦うか、錬度の異なる一般チームの隊員を指揮して戦わねばならなかった。

現在は全員回復し、加賀美も含めて訓練に励む様になった。あの敗北が大分悔しかったらしい。

ただ一人、影山だけは少々ショックが大きかったのか塞ぎ込み気味だ。それだけが久賀達は気がかりだった。

「少しはそつとしいてやれ。」

「矢車……」

「男には、時に一人で静かに塞ぎ込みたい時つてのがあるもんだ。

そこから這い上がれば、一皮剥けてる場合もある。」

「……女のあたしにや分らん。」

とはいえ影山の今の心境が分からないでもない。最近は新たに登場した強敵、ウカワームこと間宮 麗奈相手にほとんど負けてばかり。先日は天道にゼクターを奪われそうになり、加賀美の助けがなければ

ば危つくゼクターを奪われていた可能性だつてあつた。失敗ばかりの現状に影山は自信を無くしてしまつたのだらう、どうにかしてやりたいとも思うがどうすればいいのか流石の久賀達にも分からない。久賀達が軽く溜息を吐いていると、神田が声をかけてくる。

「塞ぎ込んでるって言えば、あそこにももう一人悩みまくってるのが居ますよ。」

「神田？ どいつだそれ？」

「あいつです。」

そう言つて神田が指さす先にいたのは、久賀達の部下の一人である葛西。今はベンチに座つて俯いて、傍から見ても何かを悩んでいるのが手に取るように分かつた。

久賀達は内心でここにも居たかと考えながら、葛西に近付いていく。彼女が近付くと、その気配に気付いたのか葛西が久賀達の方を見た。

「あつ、久賀達隊長・・・矢車隊長も。」

「よお、元気ないな。どうしたんだ一体？」

久賀達の質問に葛西はしばし悩んだ後、先日異世界に行った際にその世界で出会つた『原田 佐之助』に言われた言葉を口にしていく。久賀達の命令に従つて只管戦う事には自分の意思がない、ただの人間と同じだと・・・。

「あん時は頭に血が上つちまつてたからまともに考えてなかつたですけど、今になって考えたら自分はただ隊長の後ろに隠れて楽しんでただけなんじゃないかって、そう思つちまつて・・・」

誰かの指示に従っているだけと言うのは確かに楽だ。相手が無能だったらそれはある種かなりの苦痛を伴うが、久賀達や矢車と言った優秀な人物の下に付いて命令に従っていれば大抵の場合は間違いがない。そうなれば自然と葛西等部下という立場にいる者達は責任のほとんどを隊長である久賀達に委ねて、意思も何もなくなった命令に従って動いているだけの人形と化しているという見方もある。葛西はその事に気が付いて、久賀達に必要な以上に迷惑をかけていたのではないか、自分は久賀達の後ろに隠れて面倒を彼女に丸投げしている卑怯者なのではないかと思いはじめたのだ。

彼の言葉に久賀達は溜め息を吐き、矢車は苦笑する。

「葛西！ 気を着け！！」

「は、はいっ！？」

久賀達は手っ取り早く葛西を元気づける為に、まずは彼に号令を出す。葛西はそれを聞いた途端、慌てて直立不動で姿勢を正した。彼の顔が引き締まったのを確認すると、久賀達はフツと肩から力を抜いて口を開いた。

「いいか葛西？ あたしらはシャドウ、ZECTのメンバーだ。組織の人間である以上、そこには個人の意思を殺して効率を求める必要がある。全員が自分の意思に従って思い思いに動いちまったら、組織としては成り立たなくなっちゃうからだ。分かるな？」

「は、はあ・・・」

「それでだ、お前はあたしの部下な訳だが、それを言ったらあたしはZECTと言う組織の一部にすぎない。シャドウ隊長なんて、上の命令一つで簡単に無くなっちゃうもんだしな。」

思い返すのは数ヶ月前、独断でカプト抹殺の命令を無視して部下を

助けに走った時の事。あの時久賀達は命令を無視した為に、ザビーの資格者とシャドウの隊長の任を解かれてしまった。組織のトップでもなければ、地位なんてものは案外簡単に失ってしまうモノなのだ。

「で、それでも普通の組織、例えばそこいらの証券会社とかだったらそれこそ命令に忠実に従う歯車になり切ることだって一つの道さ。それで食い扶ちが確実に稼げるんだからな。だがあたしらは違う、あたしらZECTは・・・それもシャドウは、ワームなんて危険な連中と真っ向から戦ってるんだ。それも最前線だな。」

一般にZECT内部では通常のチームは錬度の問題から消耗が激しく、対照的に訓練を受けているシャドウは消耗が少ないとされている。だがそれは大きな間違いであり、実際は激戦が予想される所に真っ先に送り込まれるシャドウは下手をすると全滅する危険が非常に高いのだ。その分本部直轄の特殊部隊と言う事で、物資や人員が最優先で回されてくるが、それは裏を返せば凄まじい勢いで物資や人員を消費していくと言う事である。

今でこそライダーである久賀達や矢車、影山の存在で人員の消耗は抑えられているが、マスクドライバーシステムが開発される以前は久賀達や矢車ですら幾度も撤退せざるを得ないほどの壊滅的な打撃を受けた事すらある。現在久賀達の部隊で古参のメンバーは副官である戸高ただ一人、ではそれ以外のメンツは他所の部隊へ移ったのかと言うとそうではなく、全員がワームとの戦いで命を落としたか良くて再起不能なほどの大怪我を負ってZECTから去って行ってしまったのだ。

「お前だって、何度か死にそうになった事はあるだろ？」

「ええ、まあ・・・」

「じゃあなんでお前はそんな何時死んでもおかしくない様な部隊に何時までも居続けるんだ？ 一般のチームに移ったり、それこそZ ECTから抜けて普通の生活をするって選択肢もあるぞ？」

「そんな事できません！ 自分は隊長に何度も命を助けられた恩がある、隊長がいたからこそ自分は今まで生きて戦ってこれたんです。その隊長に恩も返さずにいるなんて、自分には出来ません！」

葛西は久賀達の言葉にそう啖呵を切って見せる。彼自身久賀達の部下に配属された当初は、女が隊長だと言う事で彼女を嘗めてかかっていた。だが実際に訓練などで彼女の実力を目の当たりにし、部隊が危機に陥った時に真っ先に殿を買って出て何度も部下を守ろうとした久賀達に、葛西は次第に心から彼女を信頼する様になって行ったのだ。おそらくシャドウ第2番隊のメンバーは全員似たような理由で彼女の下にいるのだろう。

矢車は葛西の言葉に満足そうに頷くと、彼の持つ信念を確かめる為にある事を尋ねた。これが即答できれば何も心配いらぬ。

「一つ尋ねるが、君は仮に久賀達が一人ワームの群れの中に取り残されたら「助けに行きます！ 一人でだって行って見せます！！」・・・全部言いきる前に答えを返したか。」

「当然です！ 何時も隊長に助けられてばかりなんだ、そんな時に助けに行けなくて・・・」

「じゃあ何も問題はない、君は久賀達の後ろに隠れたりなんかはしていない。他人の後ろに隠れて楽しんでるような奴が、そんな事出来る筈がないからな。一人でも行くなんて言えるんなら上等さ。」

普通いくら特定の人物の下にいるのが楽だからとはいえ、その人物が本当に命の危機に陥っていた場合大抵の人間は自分の身の安全を考えて助けに行こうとまでは考えないだろう。仮にその人物がいな

くなつてしまつても、新しく楽が出来る人物の下に付けばいい。

だが葛西の目には揺るぎない信念の光があつた、それは打算や保身を考へているモノには出せないモノだ。

「ついでに言えば、お前が戦つてるのは別にあたしの為だけじゃないんじゃないのか？」

「えっ？ そいつは一体……」

「ウチの連中、良くも悪くも横繋がりが強いからな。お前だって、神田とか仲間がヤバかつたら助けようと思つたろ？ お前は人形のように命令に従つて戦つてるんじゃない、“仲間”の為に戦つてる……そんな見方も出来るんじゃないのか。」

久賀達の言葉に葛西はハツと目を見開く。彼女の言う通りシャドウ第2番隊は他の部隊やチームに比べて横の繋がりが強い。勿論隊長である久賀達に対しては別であるが。

「隊長……ありがとうございます！」

「ま、人間なんて弱くてちつぽけな存在だからな。本当の意味で一人で戦つてる奴なんている訳がない、あたしだってそうだ。お前達がいだから戦つてくれたのさ、だから気にすんな。」

久賀達の言葉に感じる物があつたのか、葛西はそれまでのどんよりとした雰囲気吹き飛ばして久賀達に頭を下げてきた。

一般に一匹狼と呼ばれる人物がいるが、狼とは本来群れで生きるモノである。そんな狼が一匹になつてしまつたら、当然の事ながら生きてはいけなйдらう。人間も同じである、一匹狼だ何だと言いつつも、その人物もどこかで必ず他の人に助けられている部分がある筈だ。そう久賀達は考へている。



「それにしても、まさかお前の口から仲間や集団のなんたるかを聞く事になるとは思わなかったよ。」

「それを言ったら、お前が葛西のスタンドプレイを仄めかす様な言葉を肯定した所にもびっくりだね。昔はあんなに嫌ってたくせに。」

「ま、お互いさまって事だな。昔はあんなに仲が悪かったのに、今はこれだ。」

「ちょっと待ってください！ 仲が悪かったって、久賀達隊長と矢車隊長がですか?!」

何気なく言葉を交わし合っていた久賀達と矢車だが、ふと矢車が口にした言葉に葛西が反応する。

久賀達と矢車の仲の良さは、すでに知らぬものなどほとんどないくらいだ。久賀達自身恋愛方面に関わりがある様な性格ではなかったが、それでも周りは二人を『友人以上恋人未満』の関係だと評価するほどである。

その二人が昔は仲が悪かった、その言葉に葛西は驚き神田は戸高を呼び寄せる。

「おい戸高、久賀達隊長と矢車隊長が仲悪かったって本当か？」

「そうなんですか、隊長？」

戸高は久賀達との付き合いが部隊の中でも最も長い人物である、だが彼ですら二人の仲が悪かったと言うのは初耳だったらしい。

「ああ、仲悪かったのは戸高があたしの下に付く前だったからな。知らねえのも無理はないか。」

「たまには、昔話でも聞かせてやったらどうだ？」

「そうだなあ・・・」

矢車の言葉に久賀達は昔を懐かしむかのように、何処か遠くを見つめながら口を開いていった。

### 第39話 迷う者と導く者（後書き）

と言う訳で第39話でした。今回は久賀達が隊長らしく悩む葛西を導いてくれました。時にはこう言ったメンタル面でのケアを行うのも隊長の仕事ですよ、やっぱり。

そして今回発覚した意外な事実、昔の久賀達と矢車は仲が悪かった。これが一体どういう事なのか、次回の更新をお楽しみに！

なお今回の話の展開は、前書きにも書いた様にエンジェルさんの『Wと黄金の不死鳥』とコラボ小説を踏まえた展開となっています。そちらでは久賀達だけでなく、神田や葛西など彼女の部下も活躍している、そちらの方も是非とも読んでみてください！

それでは。

## 第40話 昔話（前書き）

どうも、黒服です。

今回は久賀達がZECTに入った当初の話です。ZECTに関してはいろいろと不明な部分も多い為捏造設定となる所が多くなりますが、そこは出来ればご容赦を。

## 第40話 昔話

4年前・ZECT本部

その日、まだシャドウの隊長ではなく訓練生として日夜訓練に励んでいた矢車は、他の訓練生と共にブリーフィングルームに集められていた。何でも新しくZECTのメンバーに加わる人物を紹介したいらしい。

新入りが入る事自体は別に珍しい事ではない。渋谷隕石が落下して3年、ワームが隕石から出現してからと言うモノ漸く設立されたZECTは未だ人員不足。一人でも多くワームに対抗する人物を求めて、組織もスカウトなど様々な方法で人員を確保しているのが現状だった。

そうこうしていると、訓練の教官が室内に入ってくる。

「今日は先程言った様に、新しいメンバーを紹介する。仲良くしてやれよ？ よし、入れ！」

教官の言葉に部屋の扉が開き、室内にいる全員の視線がそこに向く。矢車を含めた全員が注目する中、室内に入ってきたのは一人の女性・  
・いや、少女だった。

(女?)

「今日から君達と共に訓練することになる、久賀達 時雨だ。」  
「よろしく……」

教官に紹介された少女……久賀達は、特に何を言うでもなくそう

そっけなく口にしただけで何も言わなかった。

(随分と暗いな・・・)

久賀達を見て、矢車が最初に抱いた感想がそれである。この時の久賀達はほとんど口を開かず、目にも何処か虚ろな光が宿っていたのでそれも已む無しか。

その後新しく加わったメンバーである久賀達も交えて訓練していた。射撃の腕はハッキリ言ってイイとはいえず、彼女が射撃を得意としていない事が伺える。マシンガンブレードで戦うゼクトルーパーがこれではマズイのではないかと矢車は考えていたのだが、モノが格闘訓練に移ると彼女に対する認識は一変する。

「フツ！」

「ぐあああつ?!」

(これで5人抜き・・・おいおいマジか?)

格闘訓練では訓練用のフィールドで一人ずつ行っただが、久賀達は立ち会った相手を悉くあつという間に倒してしまった。相手が少女であると言う事で油断していた部分もあったのだろうが、それよりも何よりも久賀達の格闘センスが高いらしい。技は以前から何かしら学んでいたのか少々荒削り感があるが、一瞬で相手に近付いて急所を的確に打ち据える。久賀達がどんな過去を持っているのか知らない矢車だが、彼女がこれまでに相当な鍛錬を行って来ているだろう事は感じ取ることが出来た。

流石にこれでは訓練にならないと感じたのか、久賀達を下がらせて別の者をフィールドに入れる教官。戻ってきた久賀達が矢車の隣に座ると、彼は何気なく彼女に話しかける。

「凄いな、まさかこれほど強いとは思わなかったよ。」

「あたしが女だから？」

「それが無いと言えば嘘になるが・・・それより、以前何かやってたのか？」

「ジークンドーを少し・・・」

ジークンドーとは空手やムエタイ、柔道やボクシング等20種類もの格闘技を取り込んだ格闘技である。実戦格闘技であり、様々な格闘技を盛り込んでいることから様々な局面で使える格闘術だ。ちなみに創始者はブルース・リー。

久賀達は少しと言ってはいるが、実際は少しどころではなかっただろう。何の為に強くなるうとしたのかは知らないが、相当の鍛錬を積んでいるに違いない。久賀達はこれから共に闘う仲間である、そう考えた矢車は彼女との距離を少しでも縮める為、彼女が強くなるうとした理由を尋ねてみる事にした。何事も歩み寄ることが大切だ。

「気になるんだが、どうして君はここまで強いんだ？ あれだけの強さ、一朝一夕に手に入れられるものじゃないと思うんだが・・・」  
「何でお前にそれを言う必要があるんだ？ お前には関係ないだろうが・・・」

だが久賀達から返ってきたのは拒絶。それも単に恥ずかしいからという理由などではなく、本当に煩わしいと思っっているのがアリアリと感じ取れた。彼女の様子に矢車もムツとなる。

「だが俺達はこれからは共にチームと戦う仲間だ。仲間である以上、お互いの事をいろいろと知って置くのは悪い事じゃないと思うが？」  
「知るかなこと、あたしは別にお前の事を知りたいとは思わない

ね。」

久賀達はそれだけ言っただけでその場から去っていく。矢車はそんな彼女の背中をしばしジッと睨みつけていた。

最初は単に暗いだけの少女だと思っていたがここにきて矢車は彼女に対する認識を改めた。人は共に手を取り合い、調和してこそその力を何倍にも強める事が出来る。それが信条の彼にとって調和を乱しかねない彼女の存在は矢車にとって嫌悪の対象でしかなかったのである。

それから久賀達と矢車の仲は非常に悪いの一言だった。訓練でも場合によっては自分勝手な行動をする久賀達を見る度に矢車は彼女にチームワークのなんたるかを説き、対する久賀達はそれを煩わしく思っただけにも取り合わそうとしない。それが矢車をさらに苛立たせ、二人が顔を合わせる度に久賀達を説教する矢車と、彼の説教を右から左に聞き流す久賀達の姿が目撃されるようになっていった。

それでも二人はなんだかんだで訓練では優秀な成果を叩きだしていた。矢車は勿論のこと、一部では問題児扱いされていた久賀達も。

それから1年と半年後、無事に訓練生を卒業した久賀達と矢車は正式なセクトルパーとなっていた。それもただの部隊ではなく、本部直轄の主力部隊（後のシャドウ）に配属となっていた。

だがそれでも二人の関係は相変わらずで・・・

「久賀達！？ 君はもう少しチームで動くと言う事を・・・」

「うるせえなあ、そこまでおかしなことやってる訳じゃねえんだからいいだろうが。」



このように未だに二人の関係は徹底して悪かった。そんな時、二人が所属する部隊に一人の新人が入る事になる。

「初めまして！ 本日よりこの部隊に入ることになりました、影山瞬と言います。よろしくお願いします！！」

そう言つて敬礼する影山に、真つ先に近付くのは矢車だ。新たなメンバーを歓迎する気満々な彼に対して、久賀達の方は全く興味がないと言いたげな表情をしている。

「矢車 想だ。これからよろしく頼むぞ、影山。」

「はいっ！ あの矢車さんと同じ部隊に配備されて、俺光栄です！！」

「ん？ 俺の事を知ってるのか？」

今まであまり組織内でも自分の評価と言うのを耳にしてこなかった為、やや意外そうな顔をする矢車。それに対して影山は目を輝かせながら答えた。

「勿論です！ チームワークを何よりも大切にしている矢車さん、そして個人戦で右に出る者はいないとされている久賀達 時雨さん。お二人とも訓練生時代から有名でしたから！」

有名であると言う事には満更ではなかった矢車だが、久賀達とセツトで有名になっているらしい事にやや顔を顰める。なんだか久賀達と同列に扱われている感じがしたのだ。

「一つ言っておくが久賀達には間違つても憧れたりしない方がいいぞ。あいつはただの自己中女だからな。」

「えっ？ でも結構優しい所もあるって聞きますよ。」

「優しい？」

「はい、さり気無く助けくれたって話を結構聞きますよ。助けてくれたってのは大袈裟かもしれないですけど、怪我した奴がいるといつの間にか救急セットを用意してくれてたり。」

影山のその言葉に、やや意外そうな顔をする矢車。彼の中では既に久賀達は『他人とは一切関わりを持ちたがらない人物』と言う認識があつた為、彼女が他人の為に行動する姿が想像できなかったのである。

とはいえそれで彼女を見直すつもりはまだ矢車にはない。彼女が他人を多少なりとも気遣えるとは言っても、依然としてチームとして行動しようとしていないのは確かなのだから。

それからというもの、久賀達・矢車・影山の3人は日々ワームを倒す為訓練に明け暮れた。矢車が影山を厳しくも確実に指導してそんな二人や他の連中を少し離れた所から久賀達が眺め、訓練に疲れている者には久賀達がさり気無く差し入れを渡す。そんな毎日を過ごしていた。

そんなある日、彼女達に出動命令が言い渡される。場所は港の倉庫街、そこに出現したワーム殲滅の報告を受け、久賀達らが所属する部隊は出動する事になった。

## 倉庫街

本部からの命令に従い出動した本部直轄主力部隊、だが倉庫街に着いてもワームの姿は全く確認出来ない。しばらく周辺を警戒しながら

らワームを搜索していたが倉庫街にある小さい倉庫にはワームの存在が確認出来ない為、いよいよこの場で一番大きい倉庫内部を搜索する事になった。

「それではこれより、倉庫内部の探索を開始する。総員、周囲に警戒しつつ内部に突入しろ！」

『『『ハッ！』』』』

部隊長の命令に従い倉庫内部に突入していくゼクトルーパー達、その中には当然久賀達ら3人も混じっている。

内部に突入した彼らは早速分隊ごとに分かれて倉庫内を搜索し始める。久賀達・矢車・影山の3人は同じ分隊だ。だが彼らの分隊は倉庫のかなり奥の方まで入ったのだが、未だにワームの姿を確認出来ない。

「おかしい・・・流石に静かすぎるな。」

「もしかして本部の情報が間違いだったんじゃ？」

「それは・・・他の分隊と連絡を取って見よう。」

影山の言葉を否定しきれなくなってきた矢車は、試しに他の分隊がワームを見かけたか確認して見る事にする。とはいえワームがいれば即座に急行する様に要請があってもいい筈なので、それが無いと言う事は未だどの分隊もワームと遭遇してはいないと言う事なのだが。

「こちらC分隊。未だワームの姿は発見できません。」

『うむ、他の分隊もまだ確認できては・・・待て。』

「隊長？」

『何だ？ 何の音だこれは・・・ッ上だ！？ 撃てえ！』

瞬間ヘルメット内部の通信機から聞こえてくる銃声と怒号、ワームが発する特有の唸り声と悲鳴が聞こえてくる。

「隊長？ 隊長！」

「クソッ！ 撤退だ、下がれ下がるん、ぐあああつ?!」

通信機から部隊長の断末魔の叫びが聞こえると同時に、通信が途絶する。数度通信機に話しかける矢車だが、返答が返ってくる事は無い。それは今の現状を如実に物語っていた。

「……一度撤退して、他の分隊と合流しよう。戦力を整えるのが先決だ。」

矢車の提案でその場から撤退を開始するC分隊、他の分隊も考えは同じだったのか矢車の提案に同意して倉庫の前に集結する事になる。それと同時に増援の要請を行い、手近のチームに来てもらう事になった。増援に来てくれるチームのリーダーは田所と言っらしい。

「よし、全員一度この倉庫から出るぞ。体勢を立て直すんだ。」

矢車の指示に分隊のメンバーも従いその場からの撤退を開始する、だが久賀達だけはその場から動かず、ヘルメットを外して虚空を仰ぎ見ている。

「久賀達、何をしている早く「静かにしろ！」何だいきなり？」

「……聞け。」

久賀達の言葉に怪訝な顔をしながら、矢車もジツと耳を済ませてみる。すると……

“うわあああああッ?!”

“クソッ! 撃て、撃つんだ!!!”

“ぎゃあああああッ?!”

この大きな倉庫の何処かだろうか、無数の銃声と怒号と悲鳴が反響しつつも彼らの耳に聞こえてきた。どうやら他の分隊もワームに襲われているらしい。

「急ぐぞ、何時こつちに来るか分からない。」

矢車はそう言つてメンバーをその場から退避させる。今度は久賀達も確りとヘルメットを被りなおして矢車達についていった。

それからしばらく、次第に他に分隊との通信も出来なくなる中久賀達らが所属する分隊は不気味なほど順調に倉庫の出口へと向かつていく。そして遂に倉庫の出口が見え、いよいよここから出られると言ふ所まで来た。

「よし、出口だ! あそこまで行けばなんとか・・・」

影山が安心からそう口にした時、久賀達がそれに“否”を唱える。

「いや・・・無理だな。」

「どういう事だ?」

訝しげな声を挙げる矢車に、久賀達は倉庫の奥の暗がりを顎でしゃくる。矢車がそこに目を向けても、今は何も見えない。彼が再び久賀達の方を見ると、彼女は出し抜けにヘルメットを外して影に向かつて投げつけた。すると刺激されたからか、暗がりから複数のサナ

ギ体のワームが現れる。どうやら待ち伏せされていたらしい。

「走れ!？」

矢車の号令と同時に全員一斉に出口に向けて走り出す。だが出口との距離よりもワームとの距離の方が遙かに近い、どんなに頑張っても彼らが倉庫から出るよりもワームが追いつく方が早かった。そしてワームの鉤爪が彼らに襲いかかろうとしたその時……

「……チツ。」

突然久賀達が振り返り、ワーム達に向けてマシンガンブレードを斉射し始めた。突然の反撃に思わずワーム達も立ち止まり、何が起ったのかと矢車達も足を止めてしまう。

「く、久賀達……お前……」

「何ボサッと突っ立ってるんだ、さっさと逃げろ。」

「ちよっ！ 久賀達さんはどうするんです?！」

「すぐに追いつく。さっさと行け、邪魔だ。」

影山の言葉にそれだけ言うと、久賀達は再びワームの群れに近付いて至近距離から銃撃を浴びせる。決して射撃が得意と言う訳ではない久賀達であっても、近付けばワーム相手にそれなりのダメージを与えられる筈だ。現にサナギ体のワーム達はその場に釘づけにされている。

一方逃げるように言われた矢車は、この場でどうするか迷ってしまっただ。確かにこの場は逃げるを選んだ方が賢明だが、味方を見捨てる事は彼の主義に反する行為である。久賀達は気に入らない相手だが、それでも同じ部隊の仲間だ。

「矢車さん、行きましよう！」

「影山・・・そうだな、ここであいつに全部任せておめおめ逃げるのも気に食わない。」

矢車はそう言うと影山や他のメンバーと共にワームの足止めに向かう。

「なっ!? おい何やって・・・」

「ここでお前に任せるのも癪だ。それに俺達はチーム、全員でかかってこそだ！」

そういう間にも矢車は的確な指示でワーム達を押さえこんでいく。久賀達もそれに負けまいと部隊の攻撃の穴を見つけてはそこに銃撃を加えていった。

このまま増援が来るまで何とか持ち堪えられるかと考えたその時、一体のサナギ体の色が赤色に変色し始める。脱皮だ。

「マズイツ!? 総員、あのワームに攻撃を！」

「間に合いません!?!」

サナギ体の体から蒸気も上がり始め、正に脱皮すると思われた瞬間・

「・・・ッ!!」

「お、おい久賀達ツ?!」

久賀達は脱皮寸前のサナギ体に一気に肉薄し、展開したマシンガンブレードのブレード部分をワームに突き刺した。突然の事に不意を

突かれて痛み悶えるワーム、久賀達はそんなワームに追い打ちとばかりに零距离射撃を加える。その攻撃に溜まらず爆発するワーム、久賀達もその衝撃で吹き飛ばされてしまった。

「ッ!? 大丈夫か!」

「久賀達さんッ!?」

矢車と影山が駆け寄ると、久賀達は軽く手を上げて応えた。どうやら大きな問題はならしい。だがそれにホッとしてはられない、ワームはまだまだいるのだ。

彼らがさらにワームに攻撃を仕掛けようとした途端、後方から銃声が聞こえ同時にワーム達に銃撃が浴びせられた。何事かと矢車達が後ろを振り返ると、そこには厳つい鬚め面の男性と、彼に指揮されているゼクトルーパー達がいる。恐らく要請しておいた増援が来てくれたのだろう。

その後は彼らの活躍もあり、何とかワームを退ける事に成功した。

数分後・大型倉庫前

「この馬鹿者があ!!」

「グッ?!」

「うう……」

ワーム達を何とか退け、一息つけると思った久賀達と矢車は、大まかな事情を聞いて何があったのかを理解した増援のチームのリーダー……田所に開口一番怒声と鉄拳を浴びせられる。突然の事に久賀達は田所を睨みつけ、矢車は訳が分からないと言った風な顔をし



た。

「まず久賀達！ お前何故独断で一人ワームの群れに立ち向かった、普通ならあつという間に命を落としている所だぞ！？」

「・・・・・・・・」

田所の言葉に、久賀達は何を言うでもなくそっぽを向く。矢車はそれに何かを言おうとして、すかさず田所に止められてしまった。

「いいか、今回はお前の行動で結果的に部隊の一部は救われたかもしれん。だが、行き過ぎた単独行動は時に部隊を破滅に導くんだぞ！ それともお前一人で何でもできると思ってるのか！？」

「ッ！？」

田所の最後の言葉に反応した久賀達は、思わず彼に掴みかかるようにする。だがそれは矢車と影山に止められてしまい、結果口で反論するしか出来なかった。

「あんたに何が分かる！ あたしは「お前の過去など俺は知らん！」、何っ！？」

「お前の過去については俺は何も知らない。だがな、これだけは言える。お前が嘗て何を経験したかは知らないが、頼れる他人がいる時は遠慮せずに他人に頼れ！」

「ッ！?!？」

頼る・・・・それは地獄を経験した久賀達が真っ先に失ってしまった言葉である。灼熱と極寒が襲いかかる砂漠で何度も助けを請い、結局ギリギリになるまで助けは現れなかった。次第に精神が摩耗していった久賀達は、そこで「所詮人間は一人、頼る者など誰もいない」と言う結論に達してしまっただ。だからこそ久賀達は一人で

いる事を好み、誰とも過剰に接することなく全て己の判断で行動する。

それが一番正しい事だと心の中で決めつけていた久賀達にとって、田所の言葉は衝撃的であった。心の中で何かが崩れる音が聞こえる気がする。

「それに聞いたぞ、お前他の奴や後輩にこっそり差し入れを持って行ってるそうじゃないか。」

「それは・・・」

ついで田所の口から発せられた言葉、それに思わず久賀達は彼から目を反らせてしまう。その行為には本当に意味はない、ただ気紛れ・・・そう久賀達は考えていた。

「お前は一人を好むそうだが、本当はまだ他人と居る事の方が好きだったんじゃないのか？ だからお前なりに他人との距離を詰める為に、陰ながらそんな事してるんじゃないか？」

「あつ！！？？」

田所の言葉に何かを感じ取ったのか目を見開きつつ俯く久賀達、田所はそんな彼女を見つつ今度は矢車に声をかけた。

「そしてお前だ矢車。お前は何故久賀達と合流した際にさっさと逃げ出さなかった？ 俺達が間にあつたから良かった様な物の、下手をすればあの場で部隊が全滅していた危険だつてあつたんだぞ！」  
「し、しかしそれは久賀達が「久賀達が単独行動をして、そのフォー」に回る為に・・・か？」その通りです。」

矢車は田所の言葉に反論しようとするが、先を読まれたのかその言

葉は田所自身に遮られた。そして次いで田所に睨まれ、その目から発せられる威圧感に思わず後ずさってしまふ。

「お前は完璧な統率のとれたチームワークが大事だと、それがお前の信条だったな？」

「そうです。全員が一致団結してこそ」では何故久賀達の事を見てやらん？」そ、それは・・・」

田所の質問に矢車は口籠る。彼としては決して久賀達を見ていないなどと言う事はなかった筈のだが、田所が言いたいのはそれとは違う意味でだろう。

「いいか、こいつはあくまでも俺の考えだが・・・真のチームワークと言うのは個人の個性を最大限に生かせるモノの事を云うんじゃないのか。」

「えっ？」

矢車が田所にどう応えようか迷っていると、彼が答えるよりも先に田所が口を開く。そして田所が口にした言葉に矢車は思わず啞然として表情になつてしまった。

「確かに行き過ぎたスタンドプレーはチームワークを乱すが、逆に個性を抑えつけたチームプレーは個人個人の能力を殺してチーム全体の能力を下げる。完璧を目指すのも結構だが、チームワークにのみ目を向けて個人を見ていなければそれはただの独り善がりだ。」

「ッ！?!?!？」

田所の言葉に今度は矢車が目を見開く。思えば自分は久賀達の事を表面上でしか見ていなかった。よくよく考えれば久賀達はさり気無く他人を手助けすると言った感じで、彼女なりに周りを支えようと

していた筈だ。その証拠に影山の様に徐々にだが彼女の事を考える者が出てきている、久賀達は自分なりに他人との距離を詰めようとしていた。それが無意識の行動であったとしても……

それに比べて自分はどうだ。ただ己の信条がこうだからという理由で久賀達の事をまともに見ず、あまつさえ彼女の個性を完全に無視していた。これでは見た目が良いだけの料理、味も栄養価も何も無い料理と変わらない。

久賀達と矢車がお互いの考えについて考え込んでいると、唐突に田所が声をかける。

「いいか二人とも。久賀達の行き過ぎたスタンドプレーは確かに褒められたもんじゃない、だが矢車の拘り過ぎるチームワークも決していいとは言えないだろう。大事なのは状況を打開できる適度なスタンドプレーと、味方の能力を最大限に引き出せるチームワークだ。少なくともそう俺は考えている。」

「適度なスタンドプレーと……」

「適度なチームワーク……ねえ。」

田所の言葉に二人は何事か考えるような素振りを見せる。そして少しすると何を思ったのか久賀達は矢車に向けて片手を差し出してきた。矢車は最初彼女が何を考えているのか良く分からなかったが、その片手の意味をすぐに理解する。

これからは少し仲良くしよう……そう言う事だろう。

それを理解した矢車は、肩から力を抜いてフツと笑みを作ると、彼女の差し出した片手に自身の片手を打ち付ける。手を打ち合わせた時の大きな音が辺りに響いた時、二人の顔はどちらも軽い笑みを作

っていた。

それからというモノ、久賀達と矢車は徐々に変わってきた。久賀達は少しずつだが周りと距離を詰め始め、矢車は他人をもつと理解して最良のチームワークを考えるようになって行く。次第に久賀達の周りには人が集まるようになり、また矢車の立てる戦術やチームワークは個人の能力を殺すことなく最善の行動が出来ると組織の中でも評判が高くなっていった。そしてそれと同時に二人の中も徐々に親密になっていく。最初は出会っても言い争いにならない程度だったが、次第にお互い顔を合わせると挨拶するようになり、最終的に共に訓練に励んだり食事の席を共にするようになっていった。

ついでに言うとこれ以降久賀達は田所に会った時のみ、珍しく心から敬語を使うようになっていた。厳しくも自分を導いてくれた彼に、何処か父性の様なものを感じて尊敬する様になったのかもしれない。間違った部分を諭しつつも自分の事を考えてくれる田所の様子に・

それからしばらく経った時、ZECTの本部直轄主力部隊が正式にシャドウという精鋭部隊に変更。その際に部隊を3つに分けることになり、第1番隊の隊長を矢車、第2番隊の隊長を久賀達に任命された。残った第3番隊の隊長を誰にするかで少々一悶着あったのだが、これは久賀達と矢車二人の推薦で影山に任命される事になる。二人が行う訓練についていく彼の様子に、素質か何かを矢車を感じ取ったのだろう。

こうして結成された本部直轄精鋭部隊シャドウは、4年後の現在まで活躍していくこととなるのだった。

現在・ZECT訓練施設

久賀達の話が終わった頃、葛西達は完全に彼女の話に関心が入っていた。何しろ今まで久賀達が昔の話をしたことなど無かったのである。それも無い様が主に矢車と仲が悪かった頃の過去など・・・

「マジで仲悪かったんですか、お二人って？」

「悪いも悪い、最悪だったよ。」

「ああ。顔を合わす度に俺が久賀達にあれこれ言ったりしてな・・・

」

そう言っただけを懐かしむ様に笑う二人。とその時久賀達は周りの気配が増えていた気がした。何かと思って彼女が辺りを見渡すと・・・訓練場にいたメンバー全員が集まっているのに気付く。話に夢中になっていたから気付かなかったのだろうが、本来訓練しているべき者たちまでもが集まって久賀達の話に関心耳を立てていたのだ。

あまりの光景に久賀たちのみならず矢車も呆然としていたが、何時までもこうしている訳にもいかない。

「お前ら何時までそうしてんだ・・・訓練はどうした訓練は！」

「あんまりサボっていると、訓練のグレードをワンランク上げるぞ？」

二人の言葉に関心耳を立てていた隊員達は慌てて訓練に戻っていく。久賀達と矢車はそんな部下の様子に苦笑すると、二人はお互い自分の部下の下へと向かっていくのだった。

## 第40話 昔話（後書き）

と言う訳で第40話でした。今回は久賀達がZECTに入った頃の話と同時に、彼女が田所さんを尊敬する理由となった話も付け加えてみました。昔のZECTに関しては捏造部分も多くて、いろいろと大丈夫かと言う所もありますが（汗）。

それでは。

## 第41話 説得失敗（前書き）

どうも、黒服です。

今回新たに劇場版のキャラが登場します。



## 第41話 説得失敗

銭湯

久賀達はこの日、珍しく自宅のマンションではなく自宅の近くにある24時間営業の銭湯に来ていた。というのも久賀達の自宅にはシャワーしかなく、湯船に浸かりたいときにはこうして銭湯に来るしかないのである。普段の久賀達であればシャワーだけでも十分だったのだが、この日は湯船に浸かりたい気分だった。何しろ・・・

「どうすっかな、影山の奴・・・」

今の久賀達にはある悩み事があったからだ。その悩みとはズバリ同じシャドウの隊長である影山。彼は未だに落ち込んでおり、彼の部下からもなんとか立ち直らせてほしいと頼まれたからである。

年若い彼だが、あれでいて部下からはそれなりに慕われている。物事に真摯に取り組む姿勢がそうさせているのだろう、そんな彼の部下の影山を心配する気持ちは久賀達にも分かる。

とは言えどうしたものだろうか。葛西の場合は自分の道を見失いかけていたために軽いアドバイスをすることで立ち直らせることができた。しかし影山の場合は、失敗が続いた所為で自分に自信が持たなくなってしまうている。今までも部下のケアを行ってきた久賀達だが、影山とは付き合いがそれなりに長いが故に下手なことをすると逆に彼を追いこんでしまうことが想像できたため、効果的な手を打てないでいた。

どうしたものかと悩んで口元まで湯船に沈めてブクブクとやっ

ると、近くで軽く湯を張って湯船に浮かべた洗面器に浸かっていたザビーゼクターが羽を鳴らした。ちなみに今の時間は深夜に近いため、彼女以外に客はいない。その為ザビーゼクターも人目を気にすることなく久賀達の前にいられる。

《——ッ！——ッ！！》

「心配ない？ 何で？」

《——ッ！！》

「ライダーに選ばれた奴がそんなに軟弱なわけがない……んなこと言っただって現に影山の奴、滅茶苦茶落ち込んでるんだぞ？ ライダーだろうが人間は人間、心のケアは必要だよ。」

そう言いながら頭に手拭いを乗せる久賀達。実際、久賀達とてライダーになってからも心が弱った時はある。どんなに強くても、人間の心は意外と簡単に脆さを見せるものなのだ。影山とてそれは同じだろう。

（何か切欠でもあればなあ……）

久賀達が心の中でそんなことを考えていると、入口の扉が開く音がした。もしかこのような時間に自分以外の客かと思っただけでザビーゼクターを隠そうとするが、入ってきたのが誰なのかを確認して警戒を解く久賀達。

「お前、確か……北斗だったか？」

「く、久賀達さん?!」

入ってきた女性の名前は北斗ほくと 修羅しゆら、織田率おだひついる特殊遊撃隊の副官である。もつとも役割としては副官というよりも、織田がやりすぎたりしないようにする為のお目付け役としての仕事が多いのだが。

その北斗は、久賀達がいるとは思わなかったのか非常に驚いている。

「久賀達さん、どうしてここに？」

「そりゃ風呂に入るためさ。あたしん家にはシャワーしか無いんでね、たまにはこうして湯船に浸かりたいって時もあるし。そう言うお前は、よく来るのか？」

「ええ・・・まあ、家の場合はシャワーもないんで・・・」

そう言いつつも体を洗い始める北斗。邪魔しないようにと久賀達が多分黙っている、しばらく経って頭と体を洗い終わった北斗が湯船に浸かってくる。そして湯船に入るなり盛大なため息を吐いた。

「はあ~~~~~っ・・・」

「随分と凄いため息だな、何かあったのか？」

久賀達がそう尋ねると、北斗は自分のため息の理由を口にしていく。その理由は他でもない彼女の上官である織田に関することだ。

曰く、織田の下で働くのは刺激はあるがそれ以上に彼を抑えるのが大変であるということ。

その破天荒で豪快な性格から、任務後の後始末が大変だというのだ。彼が任務に出ると周りを考えずに暴れたいだけ暴れて、結果任務後は始末書を書く破目になる。織田にも隊長としての自覚はあるのか一応始末書は書くものの、量が多かったり始末書以外の書類も書かねばならなかったため必然的に副官である北斗も手伝われる。しかも織田の性格が伝染したのか部隊内他の者も派手に暴れることがあるため、そんな彼らを抑える労力が半端ではないとのこと。

「本当にウチの連中ときたら、最低限の規律は守ってもどいつもこいつもやりたい放題。そのくせ後始末はこっちにも回ってきやがるし、文句を言っても反省一つしやがらねえ。説教しようとするど全員揃って逃げ出しやがるし、織田もですよ！ 信じられますかこれ！？」

「そりゃあ・・・まあ・・・大変だな。」

「でしょう？ 他の部隊に移ろうかと考えたけど、俺がいなくなったらあいつら何しやがるかわかりやしねえ。おかげで毎日ストレス溜まりまくるし・・・」

なおも続く北斗の愚痴を、久賀達は苦笑しながら聞き続けた。実際織田のお目付け役というのは疲れるだろう、彼の破天荒さを知る者なら彼女の苦勞が嫌でも分かる。そこを考えると愚痴の一つや二つ聞いてやるうという気も起きるものだ。

「ホントに全く・・・ん？ あっ！？ お、俺、久賀達さんに何愚痴言いまくって！？」

とりあえず今度織田にあつたら北斗がどれだけ苦勞しているかをこれでもかと言う位分かせてやるう、そう久賀達が心の中で考えていると、言いたいことを言い終わって我に帰った北斗が慌てだした。久賀達はZECTの精鋭部隊シャドウの隊長、その彼女相手に指揮系統の違う部隊の人間であるとはいえ副官でしかない自分が愚痴をひたすら聞かせてしまったことに、今更ながら顔を青くしている。

「えつとその、すいません！ 俺・・・」

「気にするな。織田の下で働いてれば、愚痴の一つも言いたくなるだろ。あいつともそれなりに付き合いあるから、お前の苦勞はよく分かるよ。」

「でも・・・」

「気にすんなって。お互い悩みを持つ者同士、頑張っていこう。」

久賀達はそう言ってザビーゼクターが入った洗面器を持って湯船を出る。ザビーゼクターは洗面器から出ると体を震わせて体についた水滴を飛ばし、久賀達はそんなザビーゼクターに笑みを浮かべながら扉から出ていく。残された北斗はと言うと・・・

「久賀達さん・・・やっぱカッコいゝッ!!」

久賀達が出て行った扉を、しばし目を輝かせながら見つめていた。

「し、しかも俺、久賀達さんと一緒の風呂に・・・くうゝゝっ！これはさっきの相談のことの含めて、ファンクラブ専用ブログに書き込まねえと!」

そう言いながら悶える北斗 修羅、久賀達ファンクラブ（非公式）  
会員番号156番だった。

翌日・海沿い

この日久賀達は、特に行く当てがある訳でもなくあちらこちらをブラリと歩き回っていた。暇を持て余していると言ってしまうばそれまでだが、彼女にも一応目的はあった。影山を探しているのだ。

（とりあえず、あいつに会って話をしないと始まんないよなあ。）

本来であればこの日久賀達はZECT本部にいる筈のだが、影山の落ち込み具合がいよいよもって酷くなってきたので、少しでも彼

を立ち直らせる為に休暇を取ったのだ。勿論非番と言う訳ではないので、有事の際は即座に現場に向かう必要があるが。

そんな訳で久賀達は影山を探しているのだが、未だに彼を見つめることは出来ていない。彼のいそうな所は一通り探したのだが、結局影山には会えず仕舞いだった。完全に手掛かりを失った現状に久賀達が頭を悩ませていると、偶然にも先の方に影山の姿を見つける事が出来た。だがそこには彼だけでなく、女子高生らしき人影も見える。

「いいよなあ、そのお守り・・・砕けられて。俺も砕けてしまいたいよ。」

「何言ってるの？ 人間そんなに簡単に壊れたりしないわ。」

「そうさ、簡単には壊れない・・・壊れないから逆に苦しいんだ。いつそ壊れてしまえばどれだけ楽か・・・」

近づくにつれて聞こえてきた影山の言葉に、久賀達は盛大に冷や汗をかいた。いくらなんでもネガティブ過ぎる。

これは早急に何とかしなければ、このままだと本気で影山がヤバイ。そう感じた久賀達は急いで影山に声をかけた、とにかく何か会話をしなければ・・・

「よお、影山。」

「あ・・・久賀達さん？」

「な〜に辛気臭い顔してんだよ、まあ理由は大体想像つくけど・・・」

近付いて久賀達は改めて思った、今の影山は本当にマズイ。顔には全く覇気がなく、目からは光が消えかけている。

「もしかして……いよいよ俺いなくなりました?」

「はっ?! いやいや、そんなことないって! 別にそう言う事言いに来たんじゃ……」

「いいんですよ、最近俺失敗続きでしたし……実力主義の組織じゃ俺なんて……」

「大丈夫だつて! まだお前の席はあるから、何時までもくよくよしてんなよ!」

影山の今にも自殺してしまいそうなほどの雰囲気、久賀達も若干何時もの冷静さを欠いて必死に彼に話しかける。だが対する影山は、耳に入る言葉の全てをネガティブに捉えてしまう。

なおも二人がやり取りしていると、女子高生の方は興味を無くしたのかその場を去っていく。久賀達にとつても特別気にするべき存在でもなかったため、特別意識することも無く影山を説得し続ける。だが依然として効果は出なかった。

「ああもつつ! 鬱陶しい、お前いい加減に「きゃああああああっ?!」ツ!? 何だ!」

必死の説得も虚しく以前ネガティブな影山に、久賀達も痺れを切らそうとした時突然女子高生が悲鳴を挙げた。何事かと久賀達がそちらを見ると、そこには青紫色の体と左右に平たく刺々しい頭部を持ったワーム……レプトーフイスワームに襲われそうになっている先程の女子高生の姿があった。

久賀達は彼女を助けるべくザビーゼクターを呼び出して変身する。

「変身!」

《Henshin Change Wasp》

相手が成虫体のみであると言う事から、マスクドフォームを飛ばしてライダーフォームに変身する久賀達。変身したザビーは女子高生を逃がすと、レプトーフイスワームと戦い始めた。

「フツ、セイツ、ハッ！」

ザビーは得意のパンチとキックでレプトーフイスワームに攻撃すると、ワームの方も負けじと両腕に付いたブレード状の突起で攻撃してくる。その攻撃は意外にも鋭く、ザビーも数撃喰らってしまった。

「グツ?! チイツ!(どうも最近ワームが強くなってきてるな・  
・間宮とかが出た影響か?)」

思いの外強いワームにザビーも手を焼かされるが、彼女とて伊達に今まで戦い続けてきた訳ではない。敵の攻撃の流れを読んで見つけた一瞬の隙を突いて攻撃する。

「影山何してんだ! 戦えッ!!」

ふと気付くと依然として変身しようとしないう影山に、ザビーが戦うように言う。だが影山は俯いたまま変身する素振りを見せず、それどころかそのまま立ち去って行ってしまった。

「なっ?! おい影山ッ!?! クソッ、邪魔だッ!!」

慌てて何処かへと去っていく影山を追おうとするザビー、だがレプトーフイスワームがそれを許さない。目の前に現れた敵は排除すると言わんばかりにザビーに攻撃を仕掛けてくるのだ、これでは影山



を追うところではない。

ザビーは苛立ちながらもワームに渾身の左ストレートを打ちこみ、そのままの体勢でニードルシューターからニードルを飛ばす。距離が近かったことと訓練を積んで射撃能力を上げた事で、散弾の様に飛ばされたニードルはそのほとんどがワームに命中してそれなりのダメージを与えた。

ザビーから受けたダメージにワームが後退していると、カブトとガタックが各々のバイクに乗ってやってきた。それを見てザビーはワームを彼らに任せて影山を捜しに行く。それなりにダメージも与えた事だし、何より彼らがこの程度のワームにやられるとも思えない。そう考えたザビーは、急いでその場を離れて行った。

数分後

ワームの相手をカブト達に任せた久賀達は、影山の去って言った方に足を走らせた。今の影山の心理状況も理解できなくはないが、流石にあの行動は無視できない。

久賀達が走っていると、前方に海の方を向いて腰掛けた影山を見つけた。その手には先程の女子高生が地面にたたき付けて壊していたお守りが、修復された状態で握られている。

「影山……」

「久賀達さん……」

久賀達が声をかけると、影山はお守りをポケットにしまいながら彼

女の方に視線を向ける。

「お前、何でさつき変身しなかった？」

「俺が変身しても、どうせ何もできやしません。久賀達さんの邪魔になるかもしれないんだったら、いつその事変身しない方が……」

「ッ!? お前なあッ！」

影山の言葉に遂に怒りが沸点を超えた久賀達は、彼の胸倉を掴み上げて無理やり立たせた。

「誰がッ！ 何時ッ！ お前が役立つだなんて言っただッ!? 確かにお前は最近大した成功はしてないかもしれないさ。だがな、それが何だ!? 失敗したなら失敗したでそこから這い上がるくらいして見せる！」

久賀達は影山に顔を近づけつつそう口にする。実際久賀達は影山にならそれが出来ると、今までの彼を見てそう信じていた。だが……

「それは……這い上がる事の出来た人の言葉でしょう？」

影山から返って来たのはそんな言葉だった。そこには自分と久賀達は違うと言う、拒絶にも似た物が含まれていた。

「ッ!?!? お前はッ!?」

激昂した久賀達は思わず影山に拳を振り下ろそうとして、寸前でその手を止めた。今の影山の姿に久賀達は見覚えがあったから。

(こいつもしかして……)

久賀達が見覚えのあつたその姿、その似ている人物とは……自分。

遡る事数ヶ月前、ザビーの資格などを奪われた久賀達は、ザビーゼクターの必死のアピールを完全に無視していた。組織の意向など関係無しにザビーゼクターにとっては久賀達こそが主人だと、彼女の相棒はそう言っていたにもかかわらず矢車に指摘されるまで久賀達はザビーゼクターの言葉を聞こうとしなかった。

その時の事を思い出した途端影山に親近感を抱いた久賀達は、それ以上影山に何かを言う事も、ましてや拳を振り下ろす事も出来なかった。今の久賀達は、影山の目を覚まさせるだけの“何か”を何も持っていないから……

「ぐっ、く……あああああつ!? クソツ！」

それ以上拳を影山に向ける事の出来なくなった久賀達は、ゆっくりと彼の胸倉から手を離すとやり場のなくなった感情の全てを近くの電柱に叩き付けた。渾身の力を込めて電柱を殴った為、拳からは血が滲み彼女の手を流れて数滴地面に落ちて行く。それを見るとそれ以上影山に何を言う事も出来なくなってしまった久賀達は、何処か情けなさを感じながらその場を去っていった。

かゆつま亭

その日の夜、久賀達は矢車と共にかゆつま亭で夕食を共にしていた。

「それで、結局影山は元気付けられず仕舞い……か？」

「ああ……」

矢車の問いかけに生返事を返す久賀達。同僚も元気付けられなかった事が軽くシヨックだったのか、久賀達自身も何時もに比べて元気がない。

「はぁ・・・お前まで落ち込んでどうする？ 元気出せって。」

「そうはいつでも、こいつは意外とくるよ。この前のお前とザビーゼクターの気持ちが良い分かるってもんだ。」

そう言いつつ久賀達は額に手を当てて天井を仰ぎ見る。人間誰しもう力が及ばない事は分かってはいても、それを実感するとかかなり精神的にキツイものがあるということだ。

自分の至らなさを悔やむ久賀達を見ながら、矢車もどのように影山を立ち直らせるか考えていた。久賀達も若干落ち込んでいるが、こちらはしばらくすれば復活するであろう。しかし影山の方はどのように立ち直らせるか・・・

(こいつはなかなか難しい問題だな・・・)

矢車がそんな事を考えながらふと窓の方を見ると、ザビーゼクターが久賀達を呼ぶように飛んでいるのが目に入った。

「ワームでも出たか？」

「らしいな。食後の運動にはちょうどいい。」

二人は勘定を済ませると、急いで店を出てザビーゼクターが導く方向に向かっていった。

## 公園

二人がザビーゼクターに付いていくと、公園にやって来た。二人が到着するとそこには数体のサナギ体のワーム、そして彼女たちよりも先にワームと戦闘していたらしき一般部隊のゼクトルーパー達が、地面に倒れ伏している様子が見て取れる。

「行くぞ、矢車。」

「ああ。」

「「変身!」」

《《Henshin》》

《Change Kick-Hopper》

マスクドフォームのザビーと、Kホッパーに変身した二人は早速ワーム達と戦い始める。

「ハッ、フッ、セイッ!」

ザビーは持ち前のパワーと防御力でサナギ体を圧倒し・・・

「フッ、ハッ、セリヤッ!」

Kホッパーは多彩な蹴り技でサナギ体を寄せ付けない。ゼクトルーパー相手に優位に戦っていたワーム達も、この二人には勝てないらしい。

「はあああっ!」

そんな中遂にザビーが渾身の力を込めたパンチで次々とサナギ体を葬っていく。

「ライダージャンプ。」

《R i d e r J u m p》

一方のKホッパーは、こちらにも決めるべくライダージャンプで驚異的な跳躍を見せる。

「ライダーキック!」

《R i d e r K i c k》

そして上空からの強烈なライダーキックを、次々とサナギ体に叩き込んでいく。その攻撃に耐えられる筈もなく、サナギ体達は次々と爆発していった。

爆炎が消えた後、二人が周囲を見渡すとワームの姿は全く見当たらない。

「これで全部か?」

「多分・・・な。」

二人がそう言つて若干気を抜いた瞬間、二人は高速で何者かに攻撃を受けた。

「うわっ?!」

「グッ!? 何っ!」

二人が急いで体勢を立て直して襲撃者のいるだろう方を見ると、そこにはそれぞれ黄色・銅色・鋼色の3体の鎧兜の様なワーム・・・コレオプテラワームがいた。

「不意打ちたあ、やってくれるじゃないか……キャストオフ！」  
《Cast off Change Wasp》  
「行くぞ！」

ライダーフォームになったザビーは、一気に3体のワームに突撃していく。Kホッパーも当然それに付いていった。

だが先程の不意打ちにペースを乱された事と、やはりワーム全体の能力が上がっているのか二人の苦戦を強いられていた。ただでさえ3対2と言う数的に不利な状況も関係しているかもしれない。

「クソツ、なあ久賀達。最近ワームが強くなってきてる気がしないか？」

「気がするじゃなくて、実際強くなってんだよ！ こいつ等……」  
ザビーはそう言いつつもワーム達と戦っていく。だがやはり少々辛いモノがあるのか、徐々に押されていく。

「チツ！ 本当に厄介になって来やがったなコイツ……アグツ？！」

確実にレベルの上がってきたワームにザビーがそう毒づいていると、出し抜けて頭を押さえて苦しみ始めた。それを見てKホッパーは仮面の下で顔を青くする。その様子が以前彼女が暴走した時と似ていたからだ。

「おい、大丈夫か久賀達！？」  
「グツ?! う、ううう……あああああつ!？」

ザビーは頭を押さえながら我武者羅に手を振り回す。ワーム達はこ

こちらの方が仕留めやすいと考えたのか、3体揃ってザビーに攻撃を仕掛けた。

だがそれは大きな間違いだった。まず右前方から迫って来たワームの攻撃を捌きつつそのワームを盾に左前方から迫って来たワームの攻撃を防ぎ、ついで後方から来たワームの腕を取ってもつれ合っている他2体のワームに思いっきりぶつけた。一瞬の出来事にKホッパも反応できず、ワーム達も混乱しているのが見て取れた。

「ああああああああああつ!?!」

ザビーの攻撃はそれだけに留まらない。3体のうちの1体黄色のコレオプテラワーム・クロセウスに狙いを定めるとそのワームに馬乗りになり、一切の容赦なく連続で拳を叩き込んでいく。その威力は凄まじく、通常のパンチとは明らかにワームに当たった時の音が異なっている。ワームの表皮も耐えきれず砕け、飛び散ったワームの血がザビーの顔にかかっていた。

そしてザビーの連続攻撃に耐えきれなくなったワームは、ザビーに馬乗りになられたまま爆発する。その爆炎からゆっくりと立ち上がった。

「ふう・・・ふう・・・ふう・・・」

「く、久賀達・・・」

肩で息をしつつ次の獲物を探すザビー。その目はかつて暴走した時と同じく真紅に染まっており、溢れんばかりの殺気が滲みだしていた。

「あああああああつ!?!」



そして狂気の赴くままに暴れるザビーは次の獲物に襲いかかる。獲物に選ばれたのは・・・銅色のコレオプテラワーム・アエネウス。

ワームの方も逃げられないと悟ったのか、真正面からザビーに向かって突撃していく。ザビーとワームの距離はどんどん近付いていき、そして・・・

「ハアアアアッ！」

いよいよ両者がぶつかりそうになったその時、ザビーは腰を落とすと“右”ストレートを放った。ゼクターニードルの付いている左腕ではなく右腕を。

当然のことながらザビーの突然の行動にワームは対処できず、ザビーの右ストレートをまともに受けてしまう。だがザビーのパンチは単にワームに炸裂した訳ではなかった。ザビーの攻撃が当たった瞬間、ザビーの右腕はワームを貫いて背中から突き出ていた。

『ーッ!?!?』

あまりの痛みにワームはしばし苦悶の叫びを上げていたが、ザビーが手を引き抜くと力なくその場に倒れてしまう。それを見て最後に残ったコレオプテラワーム・アージエンタムは一目散に逃げ出した。こんな相手に勝てるわけがない・・・と。

だがザビーに得物を逃がすつもりは毛頭なかった。

《Rider Stinging Clock up》

逃げるワームに対して、ザビーはライダースティングを発動。同時にクロックアップで高速移動し、一瞬で残ったワームを始末してしまった。

「はあああああ………」

ワームを始末し終えたザビーは、その場で大きく息を吐く。その様子にKホツパーは彼女の様子を確かめようと近付くが……

「ああ、あ………」

「ッ?!?!?」

彼女がこちらを向いた瞬間一気に身の危険を感じた。ザビーはまだ危険だ、急いでこの場から逃げろと彼の本能が告げている。流石に自分一人では彼女を止めることが不可能だと理解しているKホツパーがその場から逃げたそうとしたその時……

「ああああああああつ!? ぐっ、あ、うわあああ、あああああつ?!」

「く、久賀達?」

ザビーは突然頭を押さえて再び苦しみ始めた。

「ぐうううっ!? クソッ、五月蠅い……煩いウルサイうるさいッ! 黙れ……ダメレッ!?!? あたしは、あたしはっ! クソがッ!?!」

《Rider Steining》

「がああああッ?!」

「久賀達ッ!?!」

頭を押さえながら支離滅裂な事を口走るザビー。Kホッパーがその様子を呆然と眺めていると、何を思ったのか彼女は自身にライダーステイキングを打ちこんだ。Kホッパーが慌てて彼女に近寄ると、それと同時にザビーの変身が解除される。同じく変身を解除した矢車が久賀達を受け止めると、その顔には大粒の汗が浮かび、顔色は死人の様に悪くなっていた。

「おい、大丈夫か!？」

「や、矢車・・・」

「しつかりしろ、お前今にも死にそうって顔してるぞ。」

「そいつは良かった・・・こんな最悪の気分なのに顔に出てなかったらどうしようかと思ってたよ。」

口ではそう軽口を言うものの、今の久賀達の様子は本当に尋常ではなかった。目の焦点も合っておらず、矢車を探すかのように虚ろな視線を彷徨わせている。

「何かまた迷惑かけちゃったみたいだな、とりあえず今日は・・・うっ。」

「無茶するな久賀達、今日は家に泊まってけ。ここからだとすぐだ。」

「ははっ・・・悪い・・・」

無理して自分の足で帰ろうとする久賀達だが、その足取りは危なっかしくまともに立つこともおぼつかない。そんな彼女を見かねて、矢車が自分の家に泊まる様に言った。久賀達自身限界が近かったからか、断ることもせずそれを承諾。矢車はそんな久賀達を背負うと、自宅へ向かって歩き出していった。

## 第41話 説得失敗（後書き）

と言う訳で第41話でした。

今回は劇場版から北斗 修羅を登場させてみました。原作ではスパイとして織田に近付いた彼女ですが、この作品では純粹に彼の副官としての登場です。ただ彼の破天荒さに振り回されている苦勞人ではありますが（^^;）。そして何気に久賀達ファンクラブの会員（笑）。

久賀達が二度目の暴走をしましたが、今度は強引に暴走を止めました。思えば原作でも暴走したのって1回きりでしたが、あの後暴走スイッチってどうなったんでしょね？ 取り外したとか言う描写はなかったと思いますけど、暴走したのは1回だけ・・・まあ自分が何かを見逃しているだけと言う可能性もありますが。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第42話 ザビーゼクターの裏切り？（前書き）

どうも、黒服です。

今回何が起こるかは・・・サブタイを見れば大体の想像はつくか  
もしれません（汗）。

## 第42話 ザビーゼクターの裏切り？

### 矢車の自宅

暴走スイッチの発動によって久賀達が暴走した翌日、久賀達は彼の自室で目を覚ました。

「う……ん？ あれ？ ここ……」

目を覚ました当初、久賀達は自分の自宅とは違う雰囲気やや困惑していたが、昨夜の出来事を思い出してすぐにここが何処なのか思い出した。昨夜は暴走で体力を大分消耗してしまい自宅に帰ることもできなくなってしまったので、矢車の厚意に甘えて彼の自宅に泊めてもらったのだ。

つい今しがたまで久賀達が横になっていたのは、矢車の物だろうベツドの上。基本彼も一人暮らしの筈だから他にベツドがあるとも思えない、恐らく彼自身はソファアーカーか何かで寝ていたのだろう。そう思うと久賀達は申し訳ない気持ちで一杯になった。

とりあえず何時までもこうしていても仕方がない。まだ体は少々気だるいが動けない事も無いので、ベツドから起き上がろうとする。とその時、寢室に矢車が入って来た。

「目が覚めたか？」

「ああ。なんか悪いな、ベツドまで借りちまって……」

「気にするな。俺にも男としてのメンツってもんがある、流石に女のお前をソファアーカーや床に寝かせて自分だけベツドで寝る様な甲斐性なしじゃないさ。」

「ふうん、あたしの事を女として見てくれてたのか？」  
「寧ろ、女以外に見た事はないがな。」

そんな他愛のない遣り取りに笑みを零すと、久賀達は自力でベッドから立ち上がる。

「大丈夫か？」

「これぐらいどうってことないよ。まだちょっと体だるい感じだけ  
ど。」

実際、体全体に何処か気だるい感じがあるのと体の節々が痛むのを無視すれば、動く事自体には何の問題も無い。最初の暴走の後丸5日は眠り続けていたのと比べれば、本当に問題はないのだろう、そう考えた矢車は朝食を取る為に久賀達と共にリビングへと向かっていった。

ZECT本部

「矢車あつ!？」

現在の時刻はちょうど昼、訓練と事務処理に区切りを付けた矢車が昼食にしようと食堂に向かうと、途中の廊下で突然織田に声をかけられた。それもかなりの大声で。

「な、なんだ? どうしたんだ織田?」

「お前、昨日の夜久賀達を自分ちに連れ込んだって本当か!？」

「……ああ。」

最初矢車は織田は何故ここまで声を荒げているのか分からなかった

が、彼が口にした言葉で大体の事は理解した。どうやらいらぬ誤解をしているらしい。

「確かに久賀達を家に泊めてやったがそれは「やっぱりかこの野郎ツ！羨ましいぞツ！」・・・聞け、人の話を・・・」

事情を説明しようとして途中で遮られる矢車、興奮しまくりの織田に思わず彼も溜め息を突いてしまう。

「お、お前久賀達と一晚過ごしたって事は・・・久賀達とあんなことや、こ・・・こんな事を・・・」

「待て。お前が何を想像してるのか大体想像つくが、お前が思ってるような事は何もなかったぞ。」

「何イ！？そんな事信じられるかツ！久賀達がいるつてのに手を出さなかったつてのか？お前それでも男か！？」

「・・・逆に手を出したらそれはそれで怖い気もするがな。」

二人がそんな事を言い合っていると、そこにさらに一人の人物が加わった。大和である。

「随分と騒がしいな？」

「あつ！？いい所に来た大和、こんにやる「また久賀達が、と言うかザビーが暴走したらしいな？」・・・はっ？」

大和は廊下の真ん中で騒ぐ矢車と織田の様子に首を傾げるが、とりあえず矢車に確認する様に声をかける。その大和の言葉に、今度は織田が首を傾げた。

「何だよその・・・ザビーの暴走って？」

「言葉通りの意味だ、ザビーが暴走して誰かれ構わず襲うようにな



った。幸い昨日はワームを倒した後自力で抑えたが、久賀達は大部分消耗してる。」

そう言つて矢車は事の経緯を織田に話した。先日カブトとザビーが暴走し、ザビーが自分以外のライダーに攻撃を仕掛け多大なダメージを与えた事。さらに昨夜、成虫体のワーム3体と戦闘中に再びザビーが暴走した挙句に、僅かに自我を取り戻した久賀達が自身にライダーステイキングを打ち込んで強引に暴走を止めた事を。

「あいつ暴走を止める為とはいえ、自分にライダーステイキングを打ち込んだんだぞ？ そんな状態であいつを一人でほつたらかしくできる筈がないだろう。」

「な、なるほど・・・しかし何だつてザビーは暴走したりしたんだ？」

「それは・・・分からない。天道が言っていた暴走スイッチとやらは、カブトやガタツクにも搭載されているみたいだが・・・」

そう言いつつ首を傾げる矢車。天道の話が真実ならば、暴走スイッチは彼が使うキックホッパーには搭載されていないと言ふ事になる。だが一体何故、カブト・ガタツク・ザビーにのみ搭載されていたのか、それが矢車には分からなかった。

「そう言えば大和さん、久賀達は今どうしてます？」

「あいつなら今は技術部の方でザビーゼクター共々精密検査を受けている。今しがた終わったと言ふ報告を受けたからこれから行く所だ。」

「それなら、俺も・・・」

「俺も行くぜ。」

大和の言葉に、織田共々久賀達の元へ向かう事に決めた矢車。 実際

彼女の容体も心配だったし、ザビーゼクターに何が起こっているのかも気になる所だからだ。

大和は二人の提案を却下することも無く、二人を伴って本部内の技術部に向かっていくのだった。

技術部

大和等3人が技術部に着くと、そこには若干スーツを着崩した久賀達と機械に繋がれたザビーゼクターの姿があった。

「大丈夫か、久賀達？」

「ああ、大したことはないよ。」

「実際疲労は少々溜まっていますが、ほとんど問題ないレベルです。」

心配する様な矢車の声に何でもないと久賀達が答えると、次いで研究員が口を開く。結果は問題ないとのことなので、矢車も肩の力を抜いた。

「それで、調査の結果を報告してもらいたいんだが？」

「あ、はい。詳しい事はこちらに。」

大和の言葉に、研究員はそう言って精密検査の結果などを記載した書類を渡す。大和が書類に目を通していると、横から織田が覗いてくる。

「なんて書いてあんだよ？」

「ちよつと待て……ん？ おい、この筋力の数値少し高すぎな

いか？」

大和が書類に目を通して見て真つ先に抱いたのは、ザビーの戦闘データから逆算した戦闘中の久賀達の筋力の数値である。その数値は明らかに常人を上回っているなどと言う生易しいレベルではなく、正しく異常と言える数値だった。

「検査した結果、詳しい事は不明ですが恐らく久賀達さんの脳内リミッターが外されていた可能性があります。」

「脳内リミッター？ なんだそりゃ？」

「早い話が、人間の脳が無意識のうちに自分の肉体を破壊しない為に設けている、筋力の制御です。」

人間は普段全力を出している訳ではない。脳がリミッターをかける事でその筋力は大分抑えられている。もし脳がリミッターをかけるのを止めていたら、人間は素手でコンクリートを砕く事も出来るだろう。

ただそれは、同時に自身の体に多大な負担をかける。通常のリミッターが掛かっている時でさえ人間無理をすれば筋肉痛を起こしてしまう。もしリミッターが無くなれば、筋肉断裂や骨折を起こして最悪命を落としてしまう可能性だってある。

「お、おいそれ本当に久賀達大丈夫なのか？ どこがおかしくなったりなんかは・・・」

「そこは大丈夫です。良くも悪くもマスクドライダーシステムによる肉体強化の恩恵が久賀達さんの体を守ってくれましたから。もっとも、あまり長い間使い続けるべきものでもないでしょうが・・・」  
「それ以前の問題だろう、さっさと外す事は出来ないのか？」

研究員の言葉に矢車は暴走スイッチを外せないのかと問いかける。実際これ以上あんな危険な状態にならては堪ったモノではないし、何より暴走直後の辛そうな久賀達を見るのも辛い。しかし研究員は彼の言葉に首を横に振った。

「それは不可能です。暴走スイッチと思われるものは発見できませんが、システムのザビーゼクターというシステム全体の根幹に関わる部分に直結されています。つまり、暴走スイッチを外すと言う事は、ザビーゼクターを破壊することと等しいのです。」

「そいつは御免被りたいな。」

研究員の出した結論は、久賀達にとって受け入れられるものではなかった。ザビーゼクターは大切な相棒、その相棒を自分の意思で壊すなど彼女は許容できない。

「でもこのままだとマズインじゃないのか？ お前自身にかかる負担もかなりの物だし・・・」

矢車の意見はもつともだった。事実久賀達はこれまで2度暴走しているが、いずれの場合も体がぼろぼろになるくらい消耗している。これ以上暴走して取り返しのつかない事になったりしたら・・・

「あたしが抑える。それなら問題ないだろう？」

そう言うて見せる久賀達に、矢車は何かを言おうと口を開く。しかし彼女の目を見て何かを言おうと言う気は失せた、全く揺るがない視線に何を言っても無駄だと悟ったのだ。

「だがもし暴走して抑えきれなかったら・・・お前どうするつもりだ？」

「その時は・・・あたしに構うな、何してでもあたしを止める。」

大和の疑問にそう答える久賀達、それは言ってしまった『ヤバくなったら殺してでも止める』と言っている様なものだった。実際今の久賀達からはその覚悟が感じられる。

彼女の見せるその覚悟に、矢車達はもはや何も言えなくなってしまった。

技術部に寄った後矢車は影山を探して街中を歩きまわっていた。久賀達が説得に失敗した為、今度は彼が影山の説得に当たる事になったのだ。

しかし彼の胸中には影山の事以外にも、久賀達に関する心配もあった。いつまたザビーが暴走するか分からず、そのくせ久賀達自身はザビーゼクターを手放すつもりがない。

とりあえず今はホッパーゼクターを久賀達の近くに向かわせている。もし彼女が変身する様なことがあれば、すぐに現場に駆けつける事が出来るように。

(最悪・・・俺の独断でザビーゼクターを破壊する必要があるかもな・・・)

それをすれば間違いなく久賀達は激怒するかもしれないが、それで久賀達が救われるなら矢車は構わなかった。下手に暴走されたら、最悪久賀達が命を落とすかもしれない。それを考えればザビーゼクターを破壊して久賀達に責められた方が何倍もマシだ。

と、その時……

「うわあああああつ?!」

「ん？ 影山ツ!？」

突然目の前に影山が降って来た。彼が落ちてきた所に目を向けると、そこにはレプトーフイスワームの姿が一瞬だけ見えた。恐らく影山は突然襲いかかれて、それに対して反撃しようとしてやられたのだらう。

そんな事を考えていると、影山が何かに手を伸ばす。その手の先には、砕けたフクロウのお守りがあった。

「大丈夫か、影山？」

「矢車さん……ほつといて下さいよ、俺なんて……」

心配するように声をかける矢車に、影山は投げやりな感じでそう答える。先日久賀達に話を聞いていたが、まさかこれほどとは……

「（こりゃ相当だな……）とりあえず、元氣出せ。な？」

「いいんですよもう、俺なんて何やったって駄目なんだ……」

「……その人形みたいに粉々に砕けた……か？」

矢車は先日の久賀達の話から、影山がこの人形と自分を照らし合わせている事を思い出した。失敗ばかりしている影山と、粉々に砕けたお守りの人形……

「いいか影山、お守りなんてのは所詮気休め程度でしかない。本当の勝利だ何だつてのは、自分の手で掴み取るもんだ。」

「そんなの……掴み取る事が出来た人の理屈じゃないですか。」

「どうかな？ 俺だって、昔は失敗したり上手くいかなかったりの繰り返しだ。なんだって成功してきた訳じゃない、それは久賀達だって同じだ。」

矢車は子供を諭すように影山に言う。影山は俯いているので聞いているのかいないのかわからないが、構わず矢車は彼に話し続けた。

「お前も聞いただろう、久賀達の昔話を。あいつは砂漠のど真ん中にたった一人置き去りにされて、それでも執念深く生き延びた。こいつは人生の縮図にも見えないか？」

「どういう意味です？」

「つまりだな、人生いいことばかりじゃない。それまで普通の幸せを謳歌してた奴が、たった一つの不幸で人生のどん底に突き落とされる。それでも生き延びた奴が手に入れたのは、形は変わってもそれ以前に謳歌していた日常だった……それこそ特別な名誉でも何でもない、当たり前前の日常だ。」

「つまり……人生山あり谷ありって事ですか？」

影山の出した答えに、矢車は頷く。

「人間の人生、何処かで必ず心が折れたり地獄の底だと思える様な事にぶち当たる事がある。形は人それぞれだろうが、それは平等にやってくるもんだ。」

矢車の言葉に影山は黙りこむ。彼の言う事も分からなくなかったから。

「矢車さんも……何かそういう人生のどん底な経験をした事があるんですか？」

「俺は……どうだろうな？ 自分の事は意外とわからないモノだ。」

ただ俺に言えるのは、そう言うどん底をどんな形であれ経験した奴は、良くも悪くもそれ以前から一皮も二皮も剥けるって事だ。」

影山は、矢車の言葉に徐々に心を揺り動かされていた。それは矢車の言葉が真摯なモノだったからか、それともワームに痛い目に遭わされて僅かにだが目が覚めたからなのか・・・

「それに、あながちお前の今までの行動だって無駄じゃないだろう。少なくともお前がワームと戦った事で、助けられた人もいるだろうし、これから助けることだってできる。」

「ッ！？」

「風が吹けば桶屋が儲かる・・・何がどう作用するかは分からないが、人の行動は別の人に何かしらの影響を及ぼす。少なくともこうして沈んでるよりも、何かをしていれば必ず何か意味はある筈だ。」

『どんな意味があるかは分からないが。』と矢車は最後に付け加えるが、その言葉は影山には届いていない。自分の行動が無駄ではない、何かしらの意味があると言う矢車の言葉に影山の目には徐々に光が戻り始めていた。

「ついでに言えば、お前結構部下から慕われてるって知ってるか？お前が前に立って戦う事で、お前の部下達は勇気付けられる。それは覚えておけ。」

「矢車さん・・・」

矢車の言葉に目に光を取り戻した影山は彼に何か言おうと口を開く。しかしそれよりも早く矢車のホッパーゼクターが彼の下にやって来た。



「ん？ 久賀達に何かあったのか？」  
《ーッ！？》

矢車の質問に、ホッパーゼクターは焦る様に一跳ねする。生憎と矢車は久賀達のようにゼクターの言っている事が分かる訳ではないが、それでも何かただならぬ事態になっているらしい事は理解出来た。

「どうやら久賀達が何か不味い事態になったらしいな。影山、行けるか？」

「はいっ！！」

「いい返事だ、行くぞッ！」

矢車の言葉に影山が返事をする、矢車は満足そうに頷いてホッパーゼクターに導かれて走っていった。

矢車が影山を説得する数分前・・・

技術部から去った後、久賀達は街中を適当にぶらついてた。本来であれば訓練や事務仕事をしていなければならぬのだが、大和等が『無理をせず今日は休め』と言うので、彼らの厚意に甘えることにした。彼女としても一人でじっくり考えたい事がある。

「どうしちゃったんだろうな、あたしは・・・いや、ザビーは・・・か。」

最近になって急に暴走を始めたザビー。何時暴走するのも分からない。一度暴走を始めたなら最悪味方を巻き込んでしまいかもしれない。先日の暴走では何とか自身を抑える事が出来たが、今後抑える事が出来るかどうか・・・

「はあ……」

階段に腰掛けながら溜め息を吐く久賀達。これから自分はとうなってしまふのか、先程は大和達にああは言ったものの実際は抑えきれぬ自信がなかった。先日は本当に運が良かったのではないかと思えてしまい、不安に気分が沈んでしまふ。

これからの事を考えて再び溜め息を吐くと、ふと背後に気配を感じた。何かと思い後ろを振り向くと、そこには制服姿の女子高生と野球のユニフォームを着た男子学生と思われる人物がいた。

「元気がないお姉さん、お姉さんもあたし達の仲間になりなよ。そうすれば、どんな不安でも吹き飛ばしちゃうよ。」

秀囲気もそうだが、今の一言でこの二人がワームである事を久賀達は確信した。それにしてもまさか自分が狙われるとは……

「ワームに元気づけられるとはね……とつとと帰れ。」

久賀達が二人を突っ撥ねる様に言うと、二人は擬態を解いてワームの姿に戻った。相手はどちらもサナギ体、今の久賀達にとっては楽勝だ。

・  
そう思ってザビーゼクターを呼んで変身しようとする久賀達だが・

「さてと……って、あれっ?」

久賀達の手収まる直前でザビーゼクターは方向転換、明後日の方

に向けて飛んで行こうとして再び久賀達の方に戻ろうとするをし返し繰り返す。そして最終的に何かに負けたようにどこかへと飛んで行ってしまった。

「はっ?! ちょっと、おま、何処行くんだおいッ!? 戻ってこい、コラッ!？」

久賀達の叫びも虚しく何処かへ飛び去ってしまうザビーゼクター。残された久賀達は信じられないと言った顔をしつつ、ゆっくりと背後を振り返った。そこには依然としてやる気満々な2体のサナギ体のワームの姿が・・・

(これは・・・ヤバいぞ・・・)

絶体絶命・・・と言うには今までと比べると大袈裟かもしれないが、危機的状況であることには変わらない。久賀達は顔をやや引き攣らせつつ、ワーム達に向けてゼクトガンを構えた。

「やろつってのか、上等だ相手になってやるよ！」

半ばやけくそになりながらそう言うと、ワーム達に向けて引き金を引く久賀達。しかし当然のことながら銃弾はワームの表皮を貫く事も無く弾かれてしまった。

(チツ、流石に無理だよな・・・つかいい加減ゼクトガンの威力上げてもらえねえかなあ。)

戻ったら大和にゼクトガンに威力を上げる様に進言しようと考えながらワームから逃げる方法を考えていると、後方から矢車と影山がやって来た。

「大丈夫か、久賀達ツ!？」

「矢車ツ! それに影山、いい所に来てくれたツ!」

二人は久賀達を庇うように立ち塞がると、ホッパーゼクターを手にとってゼクトバツクルにセツトする。

「変身!」

《《Henshin Change Kick(Punch) - Hopper》》

二人がKホッパーとPホッパーに変身すると、久賀達は二人の邪魔にならない様にとその場から距離を取った。

一方二人は2体のワームに対して有利に戦いを進めて行く。Kホッパーは勿論Pホッパーも実力的にはサナギ体では相手にならないレベルに達している。苦戦などするはずがなかった。

「ハッ、フツ、セイツ!」

Kホッパーは蹴りのみでワームを階段の上に追い込んでいく。

「フツ、フツ、ハッ!」

方やPホッパーは得意の連続パンチでワームを階段の下の方に追い詰める。そしてある程度ダメージを与えると、二人はゼクターのレバーを動かす。

《《Rider Jump》》

電子音声が響くと同時に二人の足にタキオン粒子が集められる。そして驚異的な跳躍をすると同時に、レバーを元に戻した。

《Rider Kick》

「セイツ！」

《Rider Punch》

「ハアッ！」

Kホッパーのライダーキックが炸裂し、Pホッパーのライダーパンチが打ち砕く。二人の必殺技に2体のワームはいとも簡単に爆発してしまった。

ワームが倒れたのを確認して、久賀達が二人に近付いていく。それと同時に二人は変身を解除した。

「お疲れさん。今回はマジで助かったよ、二人とも。」

「何、これ位どうってことない。お前の方こそ大丈夫か？」

「当然、別に何ともないよ。それと・・・」

久賀達は矢車に礼を言うと、影山の方に向き直る。対する影山は、何処か申し訳なさそうな顔をしていた。

「大丈夫みたいだな、影山。」

「その・・・すみません、いろいろとご迷惑をかけてしまって・・・」

「あたしは別にいいよ。そいつはどっちかって言うとお前の部下に言っただけで、随分と心配してたみたいだし。」

「はい・・・」

頭を掻きながら頭を下げる影山に、久賀達と矢車はフツと笑みを漏

らす。漸く何時もの影山に戻ってくれた、一時はどうなる事かと思  
つたが……

「さて、影山が復活した事だし、今夜は何処かに飲みにも行くか  
」  
「あつ、悪いあたしちよつと今日用事あるわ。3人でやるのは別の  
日でも構わないか？」

「別にいいが……どうしたんだ？」

珍しく誘いを断る久賀達に、矢車はやや意外そうな顔で訊ねた。基  
本こう言つた付き合ひの悪くない久賀達が、用事があると言つて断  
るのはあまりない。一方の久賀達は矢車の問いかけに……

「ちよつと、お仕置きを……な。」

とだけ言つて、何処か不気味さを感じさせる笑みを浮かべる久賀達。

『何に』……とはあえて聞かないでおこつ、そう矢車と影山の  
二人は心に誓つた。

その日の夜・久賀達の自宅

その日の夜、久賀達は自宅のキッチンにいた。電気も点いていて明  
るい室内……の筈のだが、今は何処か薄暗さを感じさせる。そ  
んな彼女の手には1本の棒が握られており、彼女が握っている方と  
は反対側には何処で手に入れたのかエレベーター用のワイヤーロー  
プが括り付けられている。そしてそれが垂れ下がる先には……

《——ッ!? ——ッ!?!?》

ワイヤーでぐるぐる巻きにされて身動きの取れないザビーゼクターが、蜂蜜を一杯に張った鍋の上に吊るされていた。しかも鍋に張られたはちみつはぐつぐつと煮えたぎり、まるで魔女の釜を連想させる。

「さて、弁解があるなら言ってみる。勿論聞く気はないけどな。」

今の久賀達は完全に無表情で、それなのに起こっている事が手に取るように分かる。何しろ彼女の後ろには、嘗て神代を作戦に参加させる際に歌を歌う事になった彼女が怒りを我慢した際に現れた般若顔の阿修羅が浮かび上がっているのだ。

「大体何だつて急に何処かに行つちまいやがったんだ？ 今これから戦うぞつて時に、取り残されたあたしがどれだけ失望させられたか……」

実際あの時の久賀達は、ザビーゼクターに裏切られた気持ちで一杯だった。今までただの一度も無かった、変身直前のザビーゼクターの逃走。悲しみを感じるとともに、身に覚えも無いのに見限られたかのような行動を取られた事に、理不尽さと怒りを覚えているのだ。

そんな彼女に対し、ザビーゼクターは必死で弁解する。

《……！ ……！？》

「はっ？ カブトに呼ばれた？ 何で天道がお前を呼べるんだよ、お前あたしのゼクターだろ。ライダーブレスも持ってない天道にどうやってお前が呼べるってんだ。」

《……！！ ……！！？》

「パーフェクトゼクター？ なんだそりゃ？」

どうもザビーゼクターの話を纏めると、最初ザビーゼクターは何時も通り久賀達を変身させる為彼女の下に向かつていった。だがいざ彼女の手に収まると言う時に、突然パーフェクトゼクターなるモノに強制召喚されてしまったと言うのだ。ザビーゼクターは何とかそれに抗って久賀達の下に行こうとしたのだが、奮闘虚しく作られた物の性としてパーフェクトゼクターの方に向かってしまったのと。

しかし久賀達はパーフェクトゼクターなど聞いたことも無かった。ハイパーゼクターはZECT内部でも開発が進められていたので知っているが、ハイパーゼクター以外にマスクドライバーシステムを強化する様な物は何もなかった筈。それなのにどうして、と久賀達はしばし首を傾げていた。

《……？》

「……まあいいだろう。実際あの時お前何度か行ったり来たり繰り返してたし、今回はそれが本当だったことで許してやる。」

そう言つて久賀達はザビーゼクターに巻き付けたワイヤーを解いていく。拘束から解かれたザビーゼクターは、漸く疑いが晴れた事にホッと一安心していた。そんなザビーゼクターに久賀達が手を差し伸べると、ザビーゼクターは迷わず今度こそ久賀達の手に収まる。

「頼むぞ……お前に見捨てられたら、あたしだって結構傷付くんだからな？」

その言葉に何処か申し訳なさそうなザビーゼクターを、久賀達は黙って撫でていた。



(それにしても、パーフェクトゼクター……ねえ。)

ザビーゼクターを撫でながら、そんな事を久賀達は考える。どうも最近になって自分の知らないマスクドライバーシステム関連の単語が増えている気がする。自惚れる気はないが、自分とて本部直属の精鋭部隊の隊長。組織の内情についてはそれなりに詳しい筈だが、最近自信が無くなって来た。

これから先まだ何か自分の知らないマスクドライバーシステム関連の事があるかもしれない、そう思うと溜め息を吐かずにはいられない久賀達であった。

## 第42話 ザビーゼクターの裏切り？（後書き）

と言う訳で第42話でした。

影山が完全復活、説得は矢車さんに頑張っていたいただきました。

そしてザビーゼクターが久賀達の手を離れて天道の下へ。原作で言うところのあのタイミンで天道がマキシマムハイパータイフーンを使用しました。そのおかげでザビーゼクターがとんでもないお仕置きを受ける事に（笑）。ちなみに久賀達がやるうとしていた事は、スズメバチの蜂蜜漬けです。相手がゼクターだと言う事で、鍋でじっくりことごと煮込むと言う意味で鍋に張った蜂蜜を煮立たせました。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第43話 Masked Rider KABUTO In another

どうも、黒服です。

更新ながらくお待たせしました、何分ちよつとスランプと言っかい  
ろいろとモチベーションが下がってしまっていたモノで(^^;)

今回は聖さんの作品『Masked Rider KABUTO In another would』とのコラボになります。

第43話 Masked Rider KABUTO In another

久賀達の自宅

その日、久賀達はいつも通りに自宅のベッドの上でザビーゼクターに起こされた。

「はいはい、おはよう。くっ……はあ。」

久賀達はベッドから上体を起こすと軽くその場で体を伸ばす。全身の筋肉を緊張させた事で血液が体中を駆け巡り、心地よい覚醒感を久賀達は感じた。そしてある程度目が覚めた所で久賀達はベッドを下りてキッチンに向かおうとするが、歩き出した際に何かを蹴り飛ばしてしまう。

「ん？ 何だ？」

蹴り飛ばした何かを確認するため、久賀達は若干まだ重い臉をこすりながらそれを拾った。

「こいつは……」

久賀達が拾ったのは掌よりも大きめの箱の様な物だ。ただし完全な長方形ではなく片側に一辺が長い三角形の様な突起が付いており、その部分に触ると出し抜けにその部分が展開して中に1枚のカードが収納されているのが見て取れた。

箱の様な物の方が【イージーバイザー】、カードの方が【タイムベント】と呼ばれるもので、これは以前この世界にやって来た異世界

の仮面ライダーオーデインこと片倉 景綱が渡してきた物だ。あの後とりあえず持ち返っては来たものの、影山の事などでゴタゴタしていた為今の今まで忘れていたらしい。

「時間を巻き戻す・・・ねえ。」

久賀達はあの時のことを思い出しつつ、このカードの効果について考えていた。タイムベントのカードの効果は時間の逆行、景綱が言うには歴史を書き換える事が出来るらしい。久賀達はしばしそれを眺めていたのだが・・・

「はっ、くっだらねえ。」

彼女はそう言っただけでイージーバイザーを寝室の隅に放り投げてしまう。確かに歴史を書き換える事が出来ると言うのは魅力的だし、彼女にもやり直したり書き変えたい過去が無いと言えば嘘になる。だが今の生活もそれなりに気に入っている久賀達にしてみれば、別にそれを使う必要など何処にもないのであった。

「異世界か・・・ま、もう関わることも無いだろう。」

久賀達は一瞬この世界以外の仮面ライダーという存在に思いを巡らしたが、今後また関わるかどうかも分からない事。考えても仕方のない事と久賀達はそれまで考えていた事を頭の中から追いやると、朝食を取るべくキッチンの方へと向かっていった。

渋谷廃墟近く

7年前の隕石落下の影響が未だに残り、今では見る影も無い渋谷に

ほど近い所に、突然灰色のオーロラのような光が出現した。場所が場所であった為に昼頃であるにもかかわらず人の姿が無いのは幸いだったと言うべきだろうか、人々の前に突然そのような物が現れればどうなっていたかなど想像もできない。

オーロラはしばしその場に存在し続けたが、しばらく経つと出し抜けにその場から消えてしまう。そしてその場には、学生服を着た一組の男女だけが残されていた。

青年の方はやせ形で、無造作に伸ばされた黒い髪で目が半分隠れている。顔立ちは整っている方だろうが、どちらかと言えば女顔と言える感じた。

一方少女の方は、綺麗な烏羽色のショートカットの髪にこちらも綺麗なガラス細工の様な目をしている。顔の造形は美人と呼べる部類に入るほうで、よく整った顔立ちは人形の様だ。

「何処だ、ここ？」

青年・・・風見 亮は呆然としつつそう口にした。それに続いて、彼の服の裾を掴んで不安そうにしている少女・・・緑川 霧香が辺りを見渡しながら口を開く。

「ここって・・・もしかして渋谷？ でも、なんで・・・」

二人が困惑するのも無理はない。二人はことは別の『カプトの世界』の住人であり、下校時間になったので帰ろうと二人で道を歩いている時突然現れたオーロラに飲み込まれてしまったのだ。

「とりあえず、帰るか？ 何で渋谷まで来ちゃったのかイマイチ分

「かねえけど。」  
「う、うん。そうだね。」

しばしその場で呆然としていた二人だが、ある程度思考が落ち着いたころになつて風見がそう提案する。正直な話神隠しにでもあつたかのような心境だったが、知らない土地ではないということに一先ず安堵したらしい。緑川もそれに頷くと、二人はその場から離れて行った。

## ZECT本部

現在久賀達は本部内にある自分の机にて、書類整理をしていた。ここ2、3日の間はワームも目立つた動きを見せていないため、久賀達や彼女と同じく本部に詰めている影山の率いるシャドウは暇なものである。

とはいえそれも今日までだった。明日からは矢車と交替で久賀達が非番となる、それを思うとそれだけで気が楽になつてくるから不思議だ。

そんな感じで久賀達が書類と向き合っていると、大和が彼女に近づいてくる。

「ああ、ここに居たか久賀達。」

「ん？ なんか用か？」

「ほれっ。」

声をかけてきた大和に久賀達が顔を上げてそちらを見ると、彼は彼女に向つて何かを投げってくる。久賀達がそれを受け取ると、それは

彼女もよく知ったZECT職員標準装備ゼクトガンだった。

「？ 何だ急に、ゼクトガンならあたしだって持ってるぞ？」

「忘れたのか？ お前この間言ってただろう、ゼクトガンの威力をもうちよつと上げてくれ」って。俺も流石にいつまでもゼクトガンがこの威力じゃマズイと思ってたからな、技術部の連中に掛け合っただけ強化してもらっておいだ。」

呆れた顔をして言う大和に、久賀達もようやく思い出す。確かに先日久賀達は彼にゼクトガンの強化を願い出た。ゼクトガンは小型で反動が少なく使い勝手もいいのだが、如何せん威力が弱すぎる為牽制にしかない。複数人で集中攻撃すればワームにもダメージを与えられるだろうが、心許ないことには変わらない。せめてワームを多少は怯ませる程度の威力は欲しかった。

「こいつが改良型ねえ……見た目は特に変化がないけど、なんか変わったのか？」

久賀達が受け取ったゼクトガンを様々な角度から見ながら大和にそう尋ねる。

「とりあえず、銃弾は対ワーム用に開発された最新の物だ。流石にマシンガンブレードの連射ほどの威力は出せないが、少なくとも1発でワームを怯ませる効果は期待できるだろう。」

大和の説明に久賀達は「ふん」と感心する素振りを見せながら改めて手の中に納まっているゼクトガンに目を向ける。物が物だけに流石に銃弾の強化程度しか出来なかつたようだが、ワームを一人でも怯ませる事が出来るようになったと言うのは大きい。少なくとも逃げる時間を稼ぐことは出来るだろう。



とりあえず一通り説明を聞くと、ゼクトガンをペンとライターに分解すると懐にしまった。それを見ていた大和はそれまで言おうと思っていた事を口にする。

「それにしても・・・お前も少し自分の机の上を片付けたらどうなんだ？」

大和に指摘された久賀達の机の上は、書類以上に書類整理の間に摘まんでいたであろうお菓子やオニギリ、その他食べ物の包み紙で溢れかえっていた。今片付けている書類と片付け終わった書類の分を除けば、もはや彼女の机の上には物を置くスペースがない。はっきり言って散らかしすぎである。

「帰る時にはちゃんと片すつて。」

「そう言うこと言ってる奴は大抵忘れて帰るもんだが？」

「大丈夫大丈夫、何時もちゃんと片して帰ってるから。」

久賀達の最後の言葉に大和も流石に絶句した。何時もちゃんと片してる・・・それはつまり基本何時も彼女の机の上はこんな魔窟状態だということを示している。どことなく雑な部分があることは知っていたが、ここまでひどいとは思わなかった。

「まさかお前ん家もこんな有様なんじゃないだろうな？」

「お生憎様、あたしの家には散らかるほど余計なものはないよ。」

彼女はそう言うが、この惨状を見た後では大和はそうそう信じられなかった。尤も久賀達は休日などは食べ歩きで1日を潰すことがほとんどなので、彼女の言うように家には必要な家具以外何も無い状態なのであるが・・・

そうこうしている内に久賀達がふと時計を見ると、針は夜の10時を指していた。そろそろ部下を解散させて自分も帰る支度をしようとしたその時、彼女の携帯から着信音が鳴り響く。

基本的に久賀達はオシヤレと言ったことに興味がないので、携帯の着信音も人によって着メロや着うたを設定したりすることをしない。よって携帯がかかってきた場合相手が誰だかはディスプレイを見るまでは分からないのだが、久賀達は経験からこの中途半端な時間にかかってくる携帯が何を意味しているのか大体想像がついていた。

「はい、久賀達です。」

『ワームが現れた、すぐに現場に急行しろ。場所は追って指示する。』

「了解……はあ。」

久賀達が通話ボタンを押すと、案の定三島の声が聞こえてきた。彼は久賀達に必要な情報を伝え終わるともう用はないとばかりに即座に携帯を切ってしまう。あまりにも予想どおりな結果に久賀達の口からため息が漏れた。

「ま、実働部隊なんだから仕方がないと言えば仕方がないな。終わったらちゃんと片しに帰ってこいよ?」

「んなこと言われなくても分かってるっての。ちゃんと片すよ。」

苦笑を浮かべつつそう言ってくる大和の言葉に苦虫を噛み潰したような顔で答えると、久賀達は部下と合流するべくその場から立ち去っていくのだった。

## 数分前・公園

久賀達の下に出動命令が来る数分前、風見達は渋谷から離れたところにある公園にやってきていた。

周囲はすでに暗くなり、普通の学生なら家に帰っていなければならぬ時間である。にもかかわらず二人はこの公園に来ていた。何故なら、帰るべき家が見つからなかったから。

いや、それは正確ではない。細かく言えば家どころか見知った場所すらなかった。

広く見れば確かに彼らの知る土地もあるのだが、局地的にみると知っていた土地が無かったり知らない土地があったりで頻繁に道に迷っていた。挙句の果てに家に電話をかけても繋がらず、訳のわからない事態に困惑するばかり。

とりあえず一休みして状況を整理しようとするこの公園にやって来たのだが、突如降りかかった災難に二人とも混乱していた。

（くそつ、訳がわかんねえな。一体何がどうなってやがるんだ？  
つて言うかこれからどうしよう・・・）

「ねえ亮君。ここ、日本だよな？ 何で・・・わたし達の家が無いの？ わたし達、一体どこにいるの？」

風見がベンチに座りながら今後の事を考えていると、隣に座った緑川は目に涙を浮かべながら風見に矢継ぎ早に訊ねる。彼女の疑問は風見も抱いていたものだが、それ以上に彼は気になることがあった。

「とりあえず落ち着け。確かにここは日本だ、言葉も同じだし文字

も見慣れてる。でも・・・なんか気にならないか？」

「えっ？」

「何で黒蟻・・・ZECTの兵隊がいないんだ？」

風見は日中歩きまわって、そこが非常に気になっていた。

元いた世界ではZECTは国家機関として公になっているため、街中をゼクトルーパー達が闊歩しているのが普通だった。しかし灰色のオーロラをくぐってからと言うもの、風見はそれらしき者達を全く目にしていない。

風見の言葉に、緑川も漸くその事実気付いたのか考え込み始める。その様子に風見は内心でほっと一息つく。一時的なものかもしれないが、緑川の関心を他のことに逸らすことができた。それで問題が解決するわけでもないが、少なくともこれで緑川も冷静さを取り戻してくれるはずだ。そう風見は考えていた。

その時、何処からともなく機械的な赤いカブトムシ・・・カブトゼクターが現れると、風見の周りを警戒するように飛び回り始める。まさかと思い風見が周りを見渡すと、公園の暗がりから複数のサナギ体のワームが姿を現した。

「チツ、何もこんな時に出てこなくてもいいだろ。緑川、離れてる！」

風見の言葉に緑川は黙って頷くと、彼から少し離れた木の陰に隠れる。風見はそれを見届けると、カブトゼクターをその手に掴んだ。

「変身！」

《Henshin》

風見がカブトゼクターをベルトのバックルにセットすると、彼の全身を銀色に輝く鎧が覆っていく。変身した仮面ライダーカブト・マスコドフォームは、カブトクナイガン・アックスモードを取り出すと手近にいたサナギ体に斬りかかっていった。

カブトはサナギ体のワームを次々と斬り付けていき、ワームはカブトに反撃しようとするが動きが鈍重な為近付く前にカブトの攻撃を受けて弾き飛ばされる。状況はカブトに優勢であり、傍から見ている緑川のみならずカブトもこのまま押し切れると思っていた。だが・

「グアツ?! な、何だ?」

「亮君!?!」

突然背中から斬り付けられたカブトは、その勢いで前のめりに倒れてしまう。うつ伏せに倒れながらもカブトが後ろを振り向くと、そこには彼が今まで見たことも無い様な白い刺々しい外殻に一際目を引く鎌の様な右手を持ったワームが佇んでいた。

『貴様……何者だ?』

白いワーム……ウカワームは、倒れたカブトを見下ろしながらその訊ねてくる。

「何者って……どういう意味だよ?」

『質問しているのはこちらだ。何故、天道 総司でない者がカブトに変身できる?』

「てんどう……そうじ?」

ウカワームが口にした名前の人物に心当たりのないカブトは首を傾げた。近くで隠れている緑川の方に一瞬視線を向けて見ると、彼女も誰の事を言っているのか分からない様子だ。

「誰だよ、そいつ。」

「……まあいい、貴様が天道 総司かそうでないかなど些細な問題だ。名も知らぬカブトの資格者よ、貴様に極上のレクイエムを歌ってやる。」

ウカワームはそう言うのと右腕を高く振り上げた。カブトはそれに対してその場から転がって離れると、急いで立ち上がりゼクターホーンを倒す。

「キャストオフ。」

《Cast off Change Beetle》

カブトは相手が成虫体という事でクロックアップにも対抗できるようにライダーフォームになる。そしてクナイモードにしたカブトクナイガンを構え、右腕を胸の前に構えたウカワームに立ち向かおうとしたその時……

「撃てッ！」

その場に女性の声が響くと同時に、ウカワームを含めたワーム達に銃撃が浴びせられた。

「クッ?!」

「何だ何だ?」

ウカワームが怯んでいる隙に、カブトは銃撃が来た方向に目を向け

る。そこには金色のラインが入った黒いボディ、アーマーに身を包んだ蟻の様な兵隊達と、その兵隊を引き連れている見知ったライダーがいた。

「あれって・・・結城か？ それと周りの黒蟻共、漸くお出ましか。」

カブトは口ではそう言いつつも、見知ったライダーの登場に肩の力を少し抜く。彼の知る仮面ライダーザビー・・・結城 葵の力があれば、この場を凌ぐことも可能だろう・・・そう考えていた。

カブトがそんな事を考えていると、ライダーフォームのザビーがウカワームに立ち向かっていく。周りの黒蟻・・・ゼクトルーパー達もそれに呼応するように散開していった。

「ハッ！」

「クッ！？」

ザビーは手始めにウカワームに助走を付けたパンチを放つと、そのまま勢いに乗って次々と拳を叩き込んでいく。同時にゼクトルーパー達もサナギ体に対して再び銃撃を開始する。

そこでカブトもザビーに加勢するべくウカワームに立ち向かう。このままザビー達に任せても何とかかなりそうだが、不意打ちで背中に一撃貰ってしまったってそのままというのも癪だ。

「フッ！」

カブトはクナイガンを逆手に持ってウカワームに向けて一直線に駆けていく。そして攻撃が届く距離に近付くと、一気にクナイガンを

振り抜いた。

『ぐっ？！』

ザビーに気を取られていたウカワームは、カブトの攻撃をまともに受けてしまう。その後もカブトは執拗にウカワームに攻撃を加えていくが、そのカブトの様子にザビー……久賀達は違和感を覚えた。

（あれ？ コイツなんか……いつもと戦い方が違う様な気が……）

もっと具体的に言えば、戦い方が違うと言うよりも洗練さが無いと言った方が正しいかもしれない。天道の変身するカブトはカブトゼクターを手に入れる前から我流で戦闘訓練を積んでいたのでその戦いにも洗練されたモノがある。しかし、ザビーは知らない事だが今目の前にいるカブトは訓練も何もしていない言わば一般人だ。天道と比較すれば雑な面があってもおかしくないだろう。

だがザビーはとりあえずその疑問を捨て去ることにした。今はウカワームを何とかするのが先決だ。

ザビーは持ち前の素早い動きを最大限に生かした戦いでウカワームを追い詰め、カブトはクナイガンを駆使しつつ攻撃の手を緩めない。先程ザビー率いるシャドウに不意打ちを食らったウカワームは2体1と言うこともあって防戦一方となり、ふと気が付けば周りにいるのはウカワームのみになっていた。カブトとの戦闘でダメージを負っていたサナギ体が、シャドウによって全滅したのだ。

味方がいなくなった事を悟ったウカワームはカブトとザビーに強烈な一撃を見舞った。カブトは横に、ザビーは後ろに跳ぶ事でそれを回避するが、対するウカワームはその隙にその場から逃げ去って行



つてしまう。

ザビーは一瞬追いかけてようと身構えるが、すぐに諦めたのか構えを解いて肩から力を抜いてしまった。そしてウカワームが逃げていった方を見つめながら、ザビーゼクターを外して変身を解除する。

「チツ、また逃がしちゃったか。しょうがねえなあ・・・」

「えっ！？ ゆ、結城さんじゃない?!」

「あ?」

変身を解除して元の姿に戻ったザビー・・・久賀達の姿を見た瞬間、カブトは仮面の下で目を見開き、緑川は思わず声を上げる。その声を聞いた久賀達は、怪訝な顔をしながら緑川に近付いていった。

「何だお前? あたしが誰じゃないって?」

「え、えと・・・その・・・」

久賀達は訝しげな顔をしながら緑川に問い詰めるが、緑川はオドオドとしながら視線をあちこちに彷徨させた。久賀達は決して強面と言いつてではないのだが、知っていると思っていた相手が知らない人物だったという困惑と、人違いを起こしてしまった申し訳なさを緑川は咄嗟に何を言えればいいのか分からなくなってしまったのだ。

「おい天道、何だコイツ? お前の知り合いか?」

このままでは埒が明かないと判断したのか、久賀達はカブトにそう問いかける。だが話を振られたカブトはまたしても出て来た天道という名前に再び首を傾げる事になった。

「あの・・・だからその天道って一体・・・」

「ッ!? 天道じゃない? 戸高!」

訳も分からず首を傾げるカブト。その様子によく相手が自分の知らない人物である事に気付いた久賀達は、部下に命じてカブトに銃口を向けさせた。

「ちよっ!? おい待てよ、何なんだ「黙れ。」」

カブトは慌てながら久賀達らを宥めようとしたが、彼女は彼の言葉を遮ってゼクトガンを構える。

「誰だお前? どうして天道じゃない奴がカブトに変身してるんだ?」

「いや、俺は「答える!」~~~~ッ、あのなあ……」

凄みを利かせてカブトに詰問する久賀達。カブトがそれに対してやや苛立ちながら答えようとすると、カブトと久賀達の間で緑川が割って入った。

「み、緑川ッ?!」

「邪魔だ、退け。」

驚くカブトに対して、久賀達は静かに緑川に退くように言う。だが緑川はその場から一步も動かず、涙目になりながらも久賀達を見つめていた。

久賀達の握るゼクトガンの銃口はカブトの心臓辺りに向けられている。となるとその間に割って入った緑川も必然的にその射線に入ってしまう事になり、現在緑川は久賀達に銃を突き付けられている形となった。勿論、周りのゼクトルーパー達の銃口もカブトに向け

られている訳だから、今彼らが引き金を引けば緑川も確実に蜂の巣になってしまう。冷たさを感じさせる久賀達の目と周りから向けられている銃口、その二つに彼女の足はガクガクと震えており、抑えきれなくなつた涙がその瞳から零れ落ちる。

だがそれでも、緑川はその場から一步も動かなかつた。

「緑川、危ないから下がつてろ。」

「亮君に……亮君に酷いことしないで！」

「もう一度だけ言つぞ……退け。」

カブトと久賀達の二人に退くように言われながらも、緑川はその場から動く気配がない。それどころか涙を流しながら久賀達に銃を下ろすように言つて来た。久賀達と緑川はしばらくの間お互いを見つめ合っていたが……

「チッ。」

揺らぐ気配のない緑川の様子に根負けしたのか、久賀達はゼクトガンを下ろすと片手を上げて部下にもマシンガンブレードを下ろさせた。その様子に漸く安心したのかその場にへたり込む緑川。

「とりあえずお前、今すぐ変身を解け。何時までもそのままではいられたらややこしい。」

糸が切れた人形のようにその場に座り込んでしまった緑川を心配しようとしたカブトに、久賀達の変身を解くように言う。実際何時までもこうしていても何も進展しないだろう、そう考えるとお互い直接顔を合わせて話し合った方が賢明だ。

久賀達の言葉に、警戒しながら変身を解く風見。久賀達は相手が高校生くらいの青年である事を知ってやや意外そうな顔をするが、即座に何時もの顔に戻ると気になっていた事を尋ねる。

「もう一度聞くがお前は誰だ？」

「風見・・・亮。」

「どうしてカブトに変身できる？」

「どうしてって・・・あんた達が俺にコイツを渡したんだろ。」

カブトゼクターに選ばれたからって、俺にコイツを押しつけて、その上後になって回収しようとしたり壊そうとしたり。」

久賀達は青年・・・風見の言葉に違和感を感じた。彼女が知る限りカブトゼクターに選ばれたのは天道以外に誰もいない。確かにZECTは一時期カブトを抹殺しようとしたが、今はその命令も事実上撤回されている。ここ数日の間にカブトの資格者が天道から風見に移った可能性も考えたが、回収や破壊諸々の事になれば自分の所に何かしらの情報が来てもいい筈だ。

一体何がどうなっているのか。そんな事を考えていた時、久賀達の頭にふと引っかかるモノがあった。

（そう言えば・・・）

久賀達が思い返すのは数日前、『Wの世界』に渡った時。あの時久賀達は自分達が住んでいる世界以外にも、様々な部分が異なっている異世界の存在を知る事になった。

もしかやと思い、久賀達は風見にいくつかの質問を試してみようと思える。

「ちょっと訊きたいんだが、渋谷に隕石が落ちたのは何時の話だ？」  
「な、何だよいきなり」「いいから。」「・・・8年前だろ。」「

風見の答えに久賀達はなるほどと思った。彼女の認識の中では渋谷隕石が落下したのは今から7年前。しかし目の前にいる風見は8年前に隕石が落下したと言う。と言う事は少なくとも彼は今から1年後の未来からやって来た計算になる。勿論彼が未来からやって来たのではなく、純粹にこの世界とは別の世界からやってきた可能性も否定は出来ないのだが・・・

「とりあえず、お前とはいろいろと話をする必要がありそうだな。出来れば、これから一緒にZECT本部に来てもらいたいんだが・・・」

久賀達がそう言うと、風見は警戒心を露わにした。それも当然か、何しろ相手の本拠地に来いと言う話なのだ。どんな目に遭うか分かったモノではない。

久賀達もそれを肌で感じたのか、やれやれと言った風に頭を振ると戸高に命じて部隊を撤収させる。戸高に本部に撤収後部下をそのまま解散させるように命じると、久賀達は風見達に向き直った。

「さて、とりあえず・・・どっかに飯でも食いに行くか？ 話ならそこでもできるし。」「

風見は彼女の提案にしばし考え込んだが、本部につれていかれないだけマシかと考えて付いていく事にする。いずれにしろ現状を相談できる相手と話がしたかったのは事実なのだから。

「そう言えば、あんた名前は？」

そこまで来て風見は漸く彼女の名前を知らない事に気付いた。久賀達も自己紹介をしていない事に気付いて、彼に自分の名前を名乗る。

「久賀達だ。久賀達 時雨。」

第43話 Masked Rider KABUTO In another

と言う訳で、聖さんとのコラボ小説でした。

なお今回聖さんからお借りした『風見 亮』、『緑川 霧香』の二人に関しては、聖さんの小説『Masked Rider KABUTO In another would』の方をご覧ください。

これから数話にわたって続く予定のコラボですが、次回の更新もお楽しみに。

それでは。

## 第44話 状況整理

とあるファミレス

あの後部下と別れた久賀達は、風見と緑川を伴って適当なファミレスに足を運んでいた。先程まで居た場所からだ、久賀達の自宅に向かうよりもこのの方が圧倒的に近い。勿論、早急に久賀達の空腹を満たす意味でもあるのだが。

「なるほど、やっぱり異世界から来たってことか。大体の事情は分かった。」

ここに着くと、久賀達は適当に注文しながら風見達に事の経緯を聞いた。彼らが学校帰りに偶然現れた灰色のオーロラに飲み込まれてしまった事。気が付くと渋谷廃墟にいて、帰るべき家も無くなっていて愕然としていた時にウカワーム率いるワームに襲われた事。

そして風見と話している内に、久賀達は彼らが異世界から来た事を確信する。風見の話によると彼の持つゼクターは開発されたばかりの物、となると同じく開発されてすぐに資格者である天道の手にカブトゼクターが渡ったこの世界と矛盾が生じる。

おまけに彼のいる世界には、彼と同年代のザビーの資格者まで居ると言うではないか。言うまでも無くこの世界ではザビーは久賀達唯一人である為、これだけ聞けば風見と緑川が異世界の住人である事を認識するのは容易であった。

「にしても異世界とか・・・本気で言ってるのか？」



久賀達とあらかた話を終えて最初に風見が口にした言葉がそれであった。もつともそれも当然か、いきなり異世界だ何だ言われてもそう簡単に信じることは難しいだろう。久賀達でさえ、最初に別の世界のライダー・リュウガが異世界の存在を口にした時は正気を疑ったモノだ。

「当然だ。あたしがその証明にならないか？」

「それは・・・あなたが結城からザビーゼクターを渡された可能性だって。」

「じゃあ何でZECTは街中を巡回をしてなかったんだらうなあ？」  
「う・・・。」

未だに異世界の存在を疑う風見に、久賀達は二つの世界の相違点を述べていく。一つは彼の知る人物とは異なるザビーの資格者たる自分の存在、そしてもう一つが彼の世界とは異なるあり方をしているZECTの存在である。

彼の話によるとあちらのZECTはその存在を公にし、街中をゼクトルーパーが巡回しているとの事らしい。だがこの世界ではZECTは秘密組織として存在している為、当然の事ながらゼクトルーパーが街中を巡回したりはしない。それどころか防諜上の理由から、組織内の人間であつてもそれなりの地位が無ければ組織の内情を知ることがおろか、本部の場所を知る事さえできない様になっている。

「とりあえず、お前達が別の世界に来ちまったことは事実だ。信じられる話じゃないかもしれないがな。」

そう言つて久賀達はテーブルに置かれた水を一口煽った。彼女が水で口の中を潤していると、今度は緑川が口を開く。

「あの、それで・・・わたし達帰れるんでしょうか？」

不安そうに呟かれたその言葉に、久賀達はふむと考え込む。自分の場合は鳴滝など他人の手を借りて異世界に渡る事になった。風見達の状況と照らし合わせて考えると、どうもこのオーロラは自然に発生する場合と人為的に発生する場合の2パターンがあるらしい。

風見達が何者かの手でこの世界に送られてきた可能性もあるが、久賀達が考える中でこの世界に異世界のライダーを送り込む必要性が見当たらなかった。

「悪いがそいつはあたしにも分からない。あたしの場合他人の手を借りて行き来した感じだからな。」

「そ、そんな……」

久賀達はかつて自分が体験したことを踏まえて緑川の問いにそう答えた。すると案の定彼女は絶望した様な顔になり、風見も若干辛そうな顔をしている。それも当然か、これはもはや遭難レベルの話ではなく家族の下へ帰れる保証がない。見知らぬ土地に知り合いと経った二人だけにされてしまった心細さは、久賀達にも想像できた。

「・・・ま、そう悲観的になるな。」

「えっ？」

「まだ完全に帰れないって決まった訳じゃないんだ。もしかしたらこっちに来た時みたいにあっさり帰れるかもしれないし、もしもって時は生活の支援くらいは何とかしてやる。」

そう言つて小さく笑みを作る久賀達。それで心細さが無くなる訳ではないが、少なくとも生活に関して心配をする必要が無くなっただけでも心が若干楽になったのか、風見と緑川の顔から不安が少し抜

けたように見える。

場の空気が少し軽くなって来た所で、注文しておいた料理が運ばれてきた。思えば風見達は突然の出来事に困惑して食事もとっていないので、運ばれてきた料理の匂いに顔を綻ばせる。

風見の前にはハンバーグセット、緑川の前にはパスタが置かれる。二人はそれに手を付けようとするのだが、久賀達の前を見てその手を止めてしまう。何しろ……

「以上でご注文の品はお揃いでしょうか？」

「ああ。」

「では、ごゆっくりどうぞ。」

久賀達とお決まりな遣り取りをして去っていくウェイトレス。後に残されたのは、ステーキ、ハンバーグ、カレーライス、ラーメン、パスタ、唐揚げetc・・・とにかくファミレスの全メニュー制覇を狙っているのではないかと思えるほどの料理の山だったのである。そのあまりの光景に絶句する二人。

「ん？ どうした、食べないのか？」

「いや、なんて言うかその……」

「それ、全部一人で食べるつもりですか？」

「当たり前だろ、自分で食いきれない物誰も頼みゃしないよ。」

久賀達の言葉は至極尤もであるが、二人にはどう考えても彼女がここまで料理を平らげられるようには見えなかった。パツと見た感じだが久賀達はスマートな体型をしている、そんな女性がこれだけの料理を平らげる様子が想像できないのだ。

だが久賀達はそんな二人の視線を気にすることなく料理に手を付ける。風見達もその量に圧倒されながら、空腹を訴える体に促されるまま自分の分を口に運んでいくのだった。

数分後……

「ふう……」

「す、す……」

「本当に全部食べちゃった……」

緑川の言うように、久賀達は出された料理の全てを平らげてしまった。風見達も食べるのが遅い方ではなかったのだが、久賀達の食べる速度は二人よりも早く風見達が食べきるとほぼ同時に彼女も食べきってしまう。その様子に二人は圧倒されてしまっていた。

「あの、そんなに長い間何も食べてなかったんですか？」

緑川は満足そうにしている久賀達に、遠慮がちにそう訊ねる。普通に考えたらいくら空腹だったとしてもここまで食べることはあり得ないのだが、少々現実離れた光景にそう訊ねるしか出来なかったのだ。

「いや、普段からこれ位は食うぞ。」

緑川の質問に事も無げに答える久賀達。その言葉に二人がまたしても絶句していると、徐に久賀達がレシートを持って立ち上がる。勘定を済ませるらしい彼女の様子に、二人は慌てて久賀達についていくのだった。

## 銭湯

ファミレスから出た後、久賀達は風見達を伴って銭湯にやって来ていた。何故こんな時間にこんな所に来るのかと風見が問いかければ、

「あたしん家にはシャワーしかないんでな。流石にいろいろあつた日には湯船に浸かりたいだろ？」

とのことらしい。実際年相応の感性を持つ緑川にしてみれば、湯船に浸かることができるのは非常にありがたかった。

銭湯に入ると、風間は久賀達らと別れて男湯の方へ向かっていく。

体を洗って湯船に肩まで浸かると、風見は盛大にため息をついた。今日は流石にいろいろなことが起こりすぎだ。

(異世界・・・か)

風見達は久賀達にこの世界のことをある程度聞いていた。秘密組織としてのZECT、自分の知らないカプトやザビー以外のマスクドライダーシステム・・・どれもこれも未だに彼にとっては信じられないことだらけだ。

そして次に考えるのは元の世界にいる唯一の肉親である姉と級友の姿。このまま元の世界に帰れなければ、彼らに会うこともできなくなる。特にたった一人の肉親にもう会えないかと思うと、らしくなく寂しさを感じてしまった。

「帰れんのかな・・・俺達・・・」

風見が何気なくそんなことを呟くと、男湯の扉が開いて他の客が入ってくる。銭湯であるのだから自分たち以外の客が入ってくるのは珍しいことではないだろうが、時間は大分遅い。こんな時間に自分たち以外にも入ってくる客がいるのかと気になった風見は、何気なく扉の方に目を向けた。すると・・・

一方女湯では・・・

風見が湯船に浸かった頃、久賀達と緑川も湯船に浸かっていた。久賀達は適当な洗面器に軽く湯を張ると、湯船に浮かべてそれにザビザクターを浸からせる。

「ほれ、たまにはお前も綺麗になりな。」

《ーッ！ーッ！》

久賀達に軽く湯をかけてもらうと、ザビザクターは嬉しそうに羽を鳴らす。その微笑ましい様子に笑みを浮かべつつも、緑川は久賀達の体形に目を向けていた。

(・・・細い。)

彼女が気になっているのは久賀達のスタイル。決してトップモデル並みにスタイルが良い訳ではないが、適度に出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいる。しかもライダーとして戦っているからか、アスリートの様に引き締まった体をしていて、美しさよりも逞しさを感じさせた。女性として遅く見えるのが良いかどうかは人によって意見が分かれるところだろうが・・・

(もしかして・・・)

だが彼女が美しく見えるかどうか以上に緑川には気になることがあった。それを確かめる為に緑川は行動を起こす。そつと久賀達に近付いていき、彼女の脇腹に手を伸ばすと……

「うをつ?! な、何だいきなり!?!」

緑川は久賀達の脇腹を摘み出した、脇腹を中心に腹周りの肉の厚みを確かめるように。

「ちよつと待てお前!?! く、くすぐったいって! ちよつ、おいつ!?!」

(うう……薄い……)

らしくなくすぐつたさに身悶えする久賀達を差し置いて、緑川は彼女の腹の厚みの薄さに敗北感を感じる。久賀達は言っていた、何時もかなりの量を食べると。それなのにこの細さ、正直言って世界に理不尽さを感じずにはいられない。

「止めるつつうの!?!」

「わぶつ?!」

流石に我慢ならなくなった久賀達に、顔を湯の中に沈められる緑川ようやく解放されて一息ついている久賀達に、緑川は思い切つてあることを訊ねてみた。

「あの久賀達さん、ちよつといいですか?」

「何だよ、言つとくけどあたしそつちの趣味はないからな。」

緑川に警戒しながら反応する久賀達。先ほどのことでいらぬ勘違いをさせてしまったらしい。

「わたしだつてないですよそんなの！ そうじゃなくて、久賀達さんってその……ダイエットとかしたことあります？」

恐る恐る訊ねる緑川。それに対する久賀達の答えは……

「ない。」

即答によるその一言のみだった。今度こそ敗北感に打ちのめされた緑川は、その場がっくりと肩を落とす。

「ほ、本当にダイエットしたことないんですか？ そんなに細いのに？」

「生まれてからダイエットなんて考えたこともないな。特に自分の体形とか気にしたことなかったし。」

久賀達の言葉に羨ましさを感じずにはいられない。緑川も年頃の乙女、異性の目を気にして自分の見た目を気にしたりすることだってある。自分など体重を気にして甘い物を我慢することさえあるというのに、そんな事など関係ないとばかりに思い思いに物を食べるこゝとができる久賀達に軽く嫉妬すら感じていた。

「何か秘訣とかあるんですか？ その、太らないための秘訣とか。」  
「だから知らないって、あたしも意識して何かやってるわけじゃないから。ま、下手なこと考えずに真っ当にダイエットした方が確実なんじゃないのか？」

久賀達はそう言うが、ダイエット経験のない彼女に言われても説得力は皆無である。肩を落とす緑川の前に、流されてきた洗面器の中にあるザビーゼクターが慰めるように羽を鳴らしてきたその時、出



し抜けに男湯の方から声をかけられた。しかもそれは風見のではありません……

「おい、久賀達ッ！ 聞こえるかあ？」

「ふえっ？」

「ッ！？ その声、お前織田か？！」

聞こえて来たのは風見とは違った男性の声は、誰であろう織田の声であった。その声に緑川は首を傾げ、久賀達は驚愕に一瞬湯船の中に顔を沈めそうになってしまう。

「おう！ 修羅の奴からお前がたまにこの銭湯に来てるらしいって聞いたもんだからよ、俺も時々ここに来るようにしてたんだよ。」

「ふん………覗きの為にか？」

その瞬間、空気が凍りついた。

「な……な〜に言ってやがんだよ！？ そ、そんなことする訳ないだろうが！」

織田は口ではそう言っているが、声が明らかに震えている。それに久賀達は軽くため息を吐くと、天井近くの男湯と女湯の境の間隙を指さした。それと同時に飛び立つザビーゼクター。

「とりあえずよお……ゼクターに覗きさせるのは止める。」

それと同時に天井近くから金属がぶつかり合う音が響いてくる。そしてしばらくすると、男湯の方に何かが落ちてきた。風見が近付くと、それは煙を立ち昇らせたヘラクスタイプのカブティックゼクターであった。

「あ、あんたっ!?!」

風見が本当に覗きをしていた織田に非難の声を挙げようとした瞬間、彼はあっという間に湯船から上がりその場を離れていく。しかし・

「うわっ!?!? ちょっ、何でカブトゼクターがッ!?!? 痛てっ?!」

主の意思を汲み取ってか、風見の持つカブトゼクターが織田に体当たりを開始する。さらにザビーゼクターまで参加して、織田はゼクター二つにフルボッコされてしまうのだった。

「ギヤアアアアアッ!?!?!」

「……さて、そろそろ上がるか。」

織田の悲鳴を背景に、素知らぬ顔で湯船から上がる久賀達。緑川はそんな久賀達に薄ら寒いものを感じつつ付いていくのだった。

その後、風呂から上がった久賀達と緑川と風見は織田と合流し、彼の奢りでコーヒー牛乳を飲んでいた。

「ったく、いくらなんでもふざけ過ぎだお前は。」

「悪かったって。だからこうして奢ってやってるんじゃないか。」

「とりあえずお前後で北斗に説教してもらえ。やろうとした事は犯罪だからな、そこんとこ忘れるなよ。」

と言った感じに久賀達に釘を刺された織田は、一通り話が終わると風見達に興味を移した。

「ところで久賀達よ、こいつら何なんだ？」

彼が知る中で久賀達にZECT関係者以外で知り合いがいたと言う話は聞いていない。となると風見達は彼女のプライベートルームでの知り合いか何かかと考えたのである。

尤も、それ以外にも先程現れたカプトゼクターも彼にとっては疑問の対象であったのだが・・・

「ああ、こつちが風見 亮でこつちが緑川 霧香。」

「どうも。」

「よろしくお願ひします。」

久賀達が紹介すると、二人は織田に対して頭を下げる。ただし風見は織田が覗きをしようとしていたということから、若干警戒する様な視線を彼に向けていたが。

「おう、よろしくなッ！ 俺は織田 秀成ってんだ、久賀達と同僚な。」

「ちなみにコイツもゼクターの資格者だ。」

織田が二人に挨拶を返すと、久賀達は彼がライダーである事をアツサリとバラした。その事に織田は一瞬慌てる素振りを見せるが、先程風見がゼクターを見ても対して驚いていない事に気付く。

「そっぴや風見ってゼクター見てもあんまし驚いてるように見えなかつたけど、こいつもライダーの事知ってんのか？」

「知ってるって言うか、こいつもライダーだ。さっきのカプトゼクターはこいつのдарう。」

久賀達の言葉に織田は驚愕した。当然の事ながら彼の知る中でカプトセクターの資格者は天道のみ、その天道以外に資格者が現れたとなればそのような反応をするのも当然か。

「何だそれどういうこつた？ 天道以外にカプトセクターの資格者が出たつてののか？」

「そうじゃない。端的に言えば、こいつ別の世界のライダーだ。」  
「別の・・・世界？」

久賀達の言葉に織田はしばし考え込むと、これでもかと言うくらい顔を顰めた。今彼が何を想像しているのかは大体分かる、彼は以前この世界にやって来た仮面ライダー・オーデインの事を思い浮かべているのだろう。

あの時はZECTに所属するライダー全員が破れてしまうと聞いてもならない事態になった。その際に久賀達はオーデインと入れ替わる様に別の世界にいたので、彼と出会ったのは織田や矢車達を含めたZECT所属のライダー達が全滅した後だが。

「お前が何を想像してるのか大体分かるが安心しろ、こいつはあのオーデインとは似ても似つかない。」

そう言いつつ久賀達は脳裏から仮面ライダーオーデイン・片倉景綱の姿を追いだした。仮面ライダーWに変身している方の彼は信用できるが、仮面ライダーオーデインに変身している方の彼は出来るのであれば今すぐにでも借りを返しに行きたいと考えている。

「まあこいつがそんなにヤバい奴じゃないってのは分かったけどよ、どうすんだこれから？」

「とりあえずしばらくあたしの家に泊める事にするよ。真っ先に関わったあたしにも責任があるしな。」

織田は久賀達の言葉に『そうか』とだけ答えると風見に近付いていき、久賀達と緑川に聞こえない様に二人に背を向けると小声で彼に話しかけた。

(いいかお前？ 久賀達には手え出すんじゃないぞ！ 分かったか  
！！)

(出すか！？)

織田の言葉に風見は必死になって否定し、そんな二人の様子に緑川は首を傾げている。残る久賀達はと言うと、風見の反応からどうせまたしょうも無い事だろうと夕力をくくっていた。

「そんじゃあたし達はそろそろ帰るぞ。もう夜も大分遅いし。」

「おう。お前明日から非番だったか？」

「まあな、精々休ませてもらうよ。じゃあな。」

「ああ。」

久賀達は織田とその様なやり取りをした後、風見と緑川を伴って自宅へと向かっていくのだった。

## 第44話 状況整理（後書き）

と言う訳で第44話でした。

今回は久賀達と風見がお互いの状況について話し合いをする事になりました。風見達とは違い久賀達は以前エンジェルさんとのコラボで異世界の存在を認識しているので、風見達の状況をアツサリ理解しました。

後半は織田が悪ふざけ、当然の事ながら久賀達に制裁を喰らう事になりました。といっても制裁を直接喰らわせたのは風見のカブトゼクターと久賀達のザビーゼクターですが。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第45話 散策・様々な出会い（前書き）

どうも、黒服です。

今回は聖さんとのコラボが第3話！ 風見がいろいろな人物と出会います。

## 第45話 散策・様々な出会い

朝・久賀達の自宅

いろいろとあつた1日から一夜明けて次の日の朝、風見は久賀達の自宅で目を覚ました。

「ん・・・あれ？　ここは・・・そうか、俺、別の世界に来ちゃったんだっけ。」

目覚めたのが自身の部屋でない事に気が付くと、一瞬疑問に思ったがすぐに現在の状況を思い出す。謎の灰色のオーロラに飲み込まれて異世界に渡ってしまった事、その世界で彼が知るザビーとは別の人物が変身するザビーに出会い、その人物の世話になる事に決まった事。

それを思い出すと、彼は元の世界に帰れるかどうか不安になってしまい、天井を見たまま溜息を突いてしまう。もし元の世界に帰る事が出来なかつたら、自分はこの世界で生きていかなばならない。果たしてそれが上手くいくだろうか・・・と。

「ん・・・」

その時、不意に彼の腕に暖かい物が触れる。ハツとなってそちらを向くと、そこにはあどけない寝顔の緑川が風見の腕に身を寄せて眠っていた。

昨夜銭湯によつた後久賀達の自宅に泊めてもらう事になった風見と緑川だが、ここである問題が発生する。



誰が、何処に寝るか・・・である。

久賀達は一人暮らした、そうになると必然的にベッドも1つしかない。だがこの日彼女の家で寝る人数は計3人、一人はソファで寝る事が出来るが残り二人がどのように寝るかで問題になってしまう。

久賀達は真つ先にソファで寝る事を志願した。現状彼女が自分の家に風見達を泊める事になっているので、客をソファや床に寝かせることは彼女のプライドが許さないのだ。

だがそうになると、残った二人は1つのベッドを共有して寝るしかない。しかしまだ未成年とはいえ、風見と緑川は男と女である。二人で1つのベッドに寝るとなるといろいろと問題があるし、それより何よりお互い恥ずかしい。

風見は真つ先に自分がソファで寝るから、久賀達と緑川の二人でベッドを使えと提案。しかしこの家の家主である久賀達はこれを拒否、客を、それも自分より年下の相手をソファに寝かせて自分がベッドで悠々と眠るのは大人として恥だと彼の意見を一蹴した。

その後もしばしベッドをどのように使うかで揉めていたのだが、緑川の放った言葉・・・

『わたし・・・亮君とならいいよ?』

この一言が決定打となり、多数決でベッドを使うのは風見と緑川の二人となった。なおその際風見は最後の抵抗として久賀達に布団か何かはないかと訊ねたところ、久賀達からは無いと言う一言が、そして緑川からは『自分と一緒に寝るのがそんなに嫌なのか?』と言

った感情の籠った目で上目使いに見られた為、已む無く撃沈して二人で一つのベッドを使う事になる。

風見と緑川の二人がベッドに入った当初はお互いに相手を意識してしまい眠れなかったが、疲れがやって来たのかすぐに二人とも眠りに落ちていった。

そして現在、目が覚めた風見は寝ぼけた緑川にこうして寄り添われていると言っ訳である。

それにしても・・・と風見は昨夜の会話を思い出した。

（緑川のあの一言・・・よく考えたら何かアレだな。）

あの時は『男女が一つのベッドで寝る』と言う事で頭が一杯になっていた為気にならなかったが、今になって思い出すといろいろと恥ずかしい物がある。風見は顔を少し赤らめるとすぐに頭から昨夜の緑川の言葉を追い払い、今が何時なのかを確認する為時計に目を向けた。

現在の時刻は午前8時を過ぎたあたり、昨夜眠りに付いたのが深夜0時を過ぎたころだと言う事を考えればそれなりの時間眠っていた事になる。これが元の世界だったら間違いなく遅刻確定だ、この所は異世界に来て良かったと思えることかもしれない。

（つか、異世界に来る事がなければそもそもそんな遅い時間に寝ることも無かったんだけどな。）

などと身も蓋もないことを考えつつ、風見はとりあえず緑川を起すことにする。時間が時間だけに久賀達がそろそろ起きているかも

しれない、流石に厄介になっている身の上でいつまでも惰眠を貪っていては失礼だろう。

「緑川、おい起きろ。」

「ん・・・んん？ 亮君？ あれ、なんで？」

起きてすぐの時は緑川も寝ぼけているからか風見が目の中にいることに不思議そうな顔をしている。しかし次第に目が覚めて来たからか、自分がどういう状態になっているかを考えて赤面しだした。

「えっと、あの、その・・・おはよう、亮君。」

「お、おう・・・」

顔を赤くする緑川につられて自身も頬を赤く染める風見。別に昨夜二人の間に何かがあったという訳ではないのだが、どうにも気まずいものを感じてしまう。

「と、とりあえず起きよう。久賀達さんも起きてるかもしれないし。」

緑川は風見の言葉に頷き、二人は寝室を出てリビングに向かう。寝室の扉を開けるとそこはリビング、そこにはすでに目を覚ました久賀達がいって朝食の用意をしていたのだが・・・

「ん？ 起きたのか。」

「うわっ?! ちよっ!?!」

リビングに入った瞬間、風見と緑川は驚愕した。何しろ今の久賀達の恰好は彼女が普段寝るときのスタイルであるタンクトップと下着のみ、まず間違いないく青少年に見せて良い姿ではないだろう。事実

風見は先程とは違った意味で顔を赤くし、緑川は大慌てで風見の目を塞いだ。

「駄目っ!?! 亮君見ちゃダメえ!?!」

「見てねえ見てねえって!?!」

緑川が必死になって風見の視界を遮り、風見は慌てて踵を返して寝室に引っ込んでいく。そんな二人の様子を久賀達はキョトンとした様子で見つめていた。

「何だあいつら、朝っぱらから騒々しい。」

《ーッ!ーッ!ーッ!》

「何、何だよ。ん?.....あつ。」

何故二人があそこまで慌てているのか分からず首を傾げる久賀達に、ザビーゼクターが近付いていく。ザビーゼクターに促されるまま久賀達は自分の今の状態を確認し、そこでようやく自分が他人、それも男性には到底見せてはいけないような姿になっていることに気付いた。

「いっけね、そう言やまだ着替えてなかったな。何時もこの格好だからうつかりしてた。」

いくらなんでもうつかりし過ぎである。自分から風見を泊めると言っておいて男性がいることに対する心構えの一つもなっていないというのは、女性としてどうなのだろうと緑川は考えずにはいられない。

「久賀達さんて、寝巻きとか着ないんですか?」

「別に着る必要もないだろ? どうせ一人暮らし何だし、裸で寝て

るわけじゃないんだしさ。」  
「はあ……」

久賀達の言い分もわからなくはない緑川だが、それでも彼女には到底理解できないことだった。これが大人の女性なのかと思うと、自分も将来こうなってしまうのではないかと言う言い知れぬ恐怖心を感じてしまう。

「あの、とりあえず着替えてもらえますか？ 亮君もいるわけですし……」

「もうちょっと待ってくれ。今あたしが離れるとこいつが焦げちゃう、あとちょっとで出来るから。」

緑川は久賀達に一先ず服を着るように頼むのだが、現在いつも通りの朝食のメニューを作っている久賀達はそれを拒否。再びフライパンの上の目玉焼きとベーコンに目を落としてしまう。

結局それから少しの間、風見が出てこないよう緑川は久賀達が調理を終えるまで寝室の前で待っているのだった。

数分後……

久賀達と風見、緑川の3人はテーブルの上に置かれた朝食を食べていた。ちなみに久賀達は調理が終わった直後に緑川に急かされて、今はちゃんと服を着ている。とはいってもあまり飾り気のない服ではあるが……

「にしてもなんか意外だな。」

「えっ？ 何が？」

出された目玉焼きとベーコン、それにサラダとトーストを口に運んでいる最中風見が何気なく呟いた。

「いやなんか、昨日あれだけ食った人が今朝は普通の量だからさ。もつところ・・・朝からすごい量を食うのかと思って。」

風見の言葉に、緑川も気がついたように声を上げる。実際昨日の久賀達の食べっぷりを見た風見などは朝からステーキでも出てくるのではないかと考えていただけに、割と普通の量だったことが逆に拍子抜けだった。

「朝は大体こんなもんだぞ。」

「朝はそんなに食べないんですか？」

「いや、食べ終わったらこの後あちこち歩き回って食べ歩きするし。」

朝はそんなに食べない方なのだろうかと緑川が訊ねると、ついで久賀達が口にした言葉に、またも彼女は絶句した。朝っぱらから食べ歩き、緑川には到底想像できないことである。もちろん風見にも。

「ところでお前ら今日はどうするんだ？」

ある程度朝食を食べ終わると、突然久賀達は二人にそんなことを尋ねてきた。

「どっ・・・って？」

「さっきも言ったけどあたしはこの後食べ歩きをするつもりなんだが、お前らはそれについてくるのかって話。ついて来ないならそれでもいいぞ、一応合鍵とあたしの携帯の番号教えとくから。」

そう言つて久賀達は適当なメモ用紙に自分の携帯の番号を書く、家の合鍵と一緒に風見に手渡す。風見は黙ってそれを受け取るのだ。つた。

街中

朝食を済ませた後、風見は緑川と共に街中を散策していた。ちなみに久賀達とは別行動と言う形となっている。理由としては、単に彼女とは別に動いてこの辺りを見て回りたかったからだ。流石に寢床と朝食まで世話になっておいて、この上彼らの散策で休暇を使わせでは申し訳ない物を感じてしまう。

そう言う訳で、風見と緑川は久賀達と別れて街中を歩きまわっていたのだ。幸い携帯の番号を教えてもらっているのも、もしもと言う時は彼女に助けを求めることもできる。

「ふうん・・・やっぱり異世界って言つても、何か実感わかないよな。」

街中を歩きまわつて、風見が抱いた感想がそれである。現在の時刻は午前11時を回つた所、それまで一しきりいろいろ見て回つたが、パツと見た感じ風見達が元居た世界と違う所がそんなにない。ぶつちやけた話、普通に元居た世界で街中を歩いている感覚と大差なかったのだ。

「でも、何だかあたし達のいる世界より平和つて感じがするよ。」

拍子抜けしたと言つた感じで呟いた風見に対して、緑川はこの世界

をそう評価する。何故かと風見が問いかけると、緑川はこう答えた。

「だって、ZECTの兵隊さんが歩き回って無いじゃない。それだけでなんかワームの事とか忘れられそうだよ。」

それは最初に風見自身気が付いていた、二つの世界の違う部分。その事を思い出し再度周りを見渡せば、確かに物々しさの欠片も無い平和な日常がそこにはあった。風見はしばし辺りを見渡すと、『そうだな』と軽く微笑んだ。と、その時・・・

「うわっ?! くらっ! 返せッ!!」

「ん?」

突然誰かの叫び声が聞こえたかと思うと、二人の男性が風見達の方へ猛然と走ってくる。追いかけているのは会社員風の男性で、追いかけているのは黒いジャンパーにサングラス、そしてマスクを付けた如何にも怪しい男性であった。どうやら引ったくりの様であるが、逃がっている男性は手にナイフを持っている。

「た、大変だよ亮君!? 何とかしないと・・・」

「何とかって、どうするんだよ。あいつナイフを持ってるんだぜ、下手に刺激したらこっちが大変な事になっちまう。」

「でも・・・」

こちらに向かってくる引ったくりに緑川は風見に何とかできないかと言った視線を送るが、対する彼は相手がただの人間でしかもナイフを持っていると言う事からかなり消極的な考えだった。

「俺達に出来る事はとりあえず巻き添えにならない様に離れて、後は警察に連絡すること位だろ。」



そう言つて風見は緑川を引つ張つてその場から少し離れる。他の人たちも巻き込まれないように引つたくりから距離をとるのだが……一人だけ構わず前に進む男性がいた。

「ん？ おい、危ないぞッ！ おいつて!？」

男性に気付いた風見が慌てて呼び止めるが、彼の声が聞こえていないのか男性は止まる気配を見せない。引つたくりも男性に気が付いたのか、威嚇するようにナイフを滅茶苦茶に振り回す。だが男性はそれでも前に進んで行き……

引つたくりのナイフが文字通り男性の目の直前で空を切つた。

それと同時に男性はその場から半歩右にずれ、ついでに引つたくりの足を引つ掛けて転ばせてしまう。相当な速さで走っていた引つたくりは勢いそのままにその場で転倒、勢いが付きすぎてしまつていたからか受け身を取る暇もなく顔面から地面に突っ込んでしまつた。風見を含めた周囲の人たちは、その様子を啞然と見つめているしかない。

「な、何なんだあの人……」

あまりにもあつという間に過ぎていった事態に、風見はそう呟くことしかできないのだった。

### 昼・立ち食い蕎麦屋

あの後引つたくりは誰かが呼んだ警察に捕まつた。駆け付けた警察

官は引つたくり逮捕に一役買った男性にお礼の一つも言いたいようだったが、当の本人はすでにその場から去ってしまっていたため結局それが叶うことはなかったという。

そして風見と緑川はどうしているかと言うと、目についた立ち食い蕎麦屋に入っていた。ここを選んだのには特別な理由はなく、ただ単に腹が空いてきたときに目に入ったのがこの店だったというだけのことである。

風見は天蕎麦、緑川はキツネ蕎麦をそれぞれ注文する。そしてそれから少しして出された蕎麦を二人は啜っていたのだが……

「ね、ねえ……大丈夫かなこの店？」

「さあ……あんまり大丈夫には見えないけど。」

小声で話しかけてくる緑川に、風見も小声で返す。

この二人が何を気にしているかと言うと、先程からやたらと皿の割れる音が響いてくるのだ。すでに聞こえただけでも10枚以上の皿が割れた音がした、これでは店としても堪ったものではないだろう。

「悪いねえお二人さん、ウチの馬鹿が騒がしくしちゃって。」

「い、いえ！？ お構いなく……」

二人のそんな声が耳に入ったのか、店主と思しき厳ついがっしりした体形の男性が頭を下げてきた。

「あの、大丈夫なんですか？ あれ……」

風見がそう言っ指差す先には、先程からちらほら見えていた皿を

洗っている男性の姿があつた。

時折一瞬見える程度だが、顔は決して悪くはない。それどころかはずきり言つて美形に入る部類であろう。どこか高貴さを感じさせるその横顔は、ともすれば貴族にも見えた。そんな男性が、言つてしまつては失礼だがこんな蕎麦屋で働くというのはどこかミスマッチに思えてしまう。

「いや、あんまり大丈夫じゃねなあ・・・」

「あ、その・・・これ、代金です！」

風見の言葉に怒りを滲ませながら男性を睨む店主、その様子に危機感を感じた風見は急いで代金を払つて緑川と共にその場を離れていく。離れる途中、

『この馬鹿野郎ッ!? うちの店潰すつもりかッ!?!?』

と言う店主の怒鳴り声が風に乗って彼らの下まで届いてきたが、風見はあえてそれを聞かないようにして緑川とその場を離れていくのだった。

## 公園

あまり落ち着かない気分だったが、とにかく昼食を済ませた風見と緑川は一先ず手近にあつた公園に足を運んできた。

「何だつたんだらうな、さっきの。」

風見がそう言つて思い浮かべるのは先程の蕎麦屋にいた男性。はっ

きり言っただけではいつクビになってもおかしくはないであろう。というよりいくらなんでも割り過ぎである、物が蕎麦を入れる丼である為それなりの重量はあるだろうが、それでも時計が秒針を刻むほどの速度で割っていくのはどう考えてもおかしい。

一方緑川は彼の言葉にしばし悩んだ後・・・

「うん・・・庶民の生活を学ぶためにお忍びでバイトしてる御曹司・・・とか？」

というあながちそんなに的外れでもないことを口にした。

「いやそれはないだろう、流石にドラマや映画の中の話じゃあるまいし・・・」

しかし風見の方は彼女の考えを否定する。流石に現実の世界でそのようなことをする輩がいるとは思ってもみなかったのだ。

緑川も本当にそんなことを思っていたわけでもないらしく、風見が否定すると笑ってそれに同意した。その時・・・

「ねえ大介、何さつきから見てるの？」

突然彼らの耳に女の子の声が聞こえてくる。二人が声のした方を見ると、そこには一人のギターケースを持った男性と、その男性に連れられている一人の少女の姿があった。しかもよくよく見ると、男性はこちら・・・特に緑川の方を凝視している。その様子にどこか身の危険を感じてしまうモノの、気になった緑川は男性に声を掛けた。

「あの・・・どうしたんですか？」

彼女が声をかけると、男性は目が覚めたかのようにハッとすると一目散に緑川に近付いてきた。

「え、えと、あの・・・」

「ああ、怖がらせてすみません。あなたがあまりにもお美しかったものでつい見とれてしまつて。」

「はい？」

男性は緑川に近付くと笑顔で彼女に話しかける。対する緑川は突然のことに反応することができなかつた。

「いやゝ驚きました、まさかこの様な所であなたの様に美しい方に  
出会えるなんて。あなたは正に荒野に咲く一輪の・・・一輪の・・・  
えっと・・・」

男性は緑川をこれでもかと誉めたたえるが、途中何を思ったのか突然顔を曇らせて言いよどむ。風見と緑川がその様子を不審に思っている・・・

「・・・赤い薔薇。」

「ッ!? そうそう、それぞれッ！」

近くにいた少女が呆れたような顔で続きを口にした。少女の一言に男性は的を得たかのような顔になる。

一方、薔薇に例えられた緑川は頬を赤く染めた。今までこの様に言われたことが無かつたので恥ずかしさを感じたのだ。

「そ、そんな薔薇だなんて・・・」

顔を赤くする緑川と、そんな彼女を褒め称える男性。その様子に風見はどこか面白くないものを感じてしまう。見ると男性の近くにいる少女もどこか面白くなさそうだ。

「おいあんた・・・」

これ以上は流石に我慢ならなくなったのか、風見は男性に声をかける。しかし・・・

「見つけたぞ・・・」

「ッ!？」

風見が男性に声をかけた瞬間、公園の木の陰から一人の女性が姿を表した。喪服と思われる黒い服を身につけた女性である。風見が女性に何者かを問おうとした時、彼の近くにカブトゼクターが、そして男性の近くに機械的なトンボ・・・ドレイクゼクターが飛んで来た。

「それは天道 総司の? あなた一体・・・」

「そいつはゼクターか? じゃああんたも、ッ!？」

お互い相手がライダー、しかも男性・・・風間 大介は風見の近くに来たのがカブトゼクターだった事に驚く。風見がドレイクゼクターについて訊ねようとすると、辺りからサナギ体のワームが、そして女性は成虫体のワーム・・・刺々しい体に八エの様な頭をしたミユスカワームの姿になった。

「事情を話してる場合じゃないな、緑川ッ! 離れてろッ!？」

「ゴン、お前もだ。」

風見と風間は緑川とゴンをそれぞれ離れさせると、風見はカブトゼクターを手に掴み風間はドレイクグリップを前に掲げた。

「変身ッ！」

《《Henshin》》

風見はバツクルにカブトゼクターをセットして仮面ライダーカブトに、風間はドレイクゼクターをドレイクグリップにセットさせて仮面ライダードレイクに変身する。

『カブトの資格者、お前には死んでもらう！』

ミユスカワームがそう言うと同時に、ワーム達が一斉にカブト達に向かって襲いかかってくるのだった。

## 第45話 散策・様々な出会い（後書き）

と言う訳で第45話でした。

遂に他人に明かされた久賀達の朝の風景（笑）、相手が風見と緑川なので他のメンツにバレる事はないでしょうが、主のだらしない姿を見られてザビーゼクターも内心で涙を流しているに違いない。

今回風間以外に風見が出会った（と言うか目撃した）のは、言うまでもないと思いますが天道と剣です。天道は原作第1話をちよっと意識して、剣は彼のアルバイトのワンシーンを描く様な感じにしてみました。

次回でコラボも終了予定、どんな展開になるかお楽しみに。

それでは。



第46話 帰還・太陽の光（前書き）

どうも、黒服です。

今回で遂に聖さんとのコラボも終了です。

## 第46話 帰還・太陽の光

公園

普段は休憩に来た人たちや、遊びに来た子供達で溢れている筈の公園。だが今そこは、二人のライダーと複数のワームが戦う戦場となっていた。

「フツ、このっ！」

カブトは手に持ったクナイモードのクナイガンを振るってサナギ体のワームを切り裂いていき、ドレイクは弾膜を張ってひたすらサナギ体を近付けない様になっている。ちなみにどちらも既にライダーフォームになっていた。相手にミユスカワームと言う成虫体がいる為、クロックアップで一方的にやられてしまふのを防ぐためである。

しかしこの時カブト達は劣勢になってはいなかったが優勢になってもいなかった。サナギ体は巧みにチームワークを駆使して戦い、1体だけに攻撃が集中するのを防いでいる。おまけにサナギ体自体そこいらに出てくるのよりも強かった為、必然的にカブト達も決定打を与える事が出来なくなってしまう。

「クソツ!? 何なんだこいつ等、昨日の奴等とは全然違うぞ！」

想定外の強さを見せるワーム達に対し、カブトがそう悪態を吐く。実際彼は今までワームがチームワークを使ってくる所など見た事が無かったので、思いの外強いサナギ体達に戸惑いを隠せなかったのだ。

「それも気になりますが、あなたは一体何なんです?! 私が知る限りではカブトは天道 総司だったはずですが?」

ワーム達に戸惑いを見せるカブトに対して、ドレイクがその様なことを言う。事実彼が知るなかでカブトの資格者に選ばれたのは天道 総司ただ一人なので、そう思うのも当然と言えば当然である。

「今はそれどころじゃないだろう!? 後で全部話してやるから今はこいつ等をッ!」

「クツ!? 仕方ありませんね。」

カブトもドレイクの言い分が分からないわけではなかった。久賀達の話によるとこの世界には風見とは異なるカブトの資格者も存在しているとのこと、その人物しか知らないこの世界の人間からしてみれば自分はかなり異質に見えるのだろう。

だが今はそれを詳しく説明している暇はない。目の前に敵がいて自分達は戦闘中なのだ、余計なことをしていれば自分達は勿論、緑川やゴンの身にも危険が及ぶ。ドレイクもそのことを理解してか、カブトにそれ以上追及することはなかった。

その後もカブトとドレイクは複数のワーム相手に果敢に立ち向かっていく。状況的には多勢に無勢だが、二人が身に纏っているのはワームと戦うために人類が作り出したマスクドライダーシステム。相手がサナギ体程度なら多少数を生かして向かって来たとして、彼らが負けるなどありえなかった。

相手が……サナギ体だけならば。

「ぐわっ?!」

突然カブトの耳に、ドレイクの上げる苦悶の音が聞こえてくる。慌ててそちらを見るとそこにはミュスカワームの攻撃を受け地面に蹲っているドレイクの姿があった。

「お、おいアンタ!? クソツ!」

慌ててドレイクの援護に向かおうとするカブトだが、そんな彼の前にサナギ体のワーム達が立ち塞がった。戦力を分断して各個撃破を図るつもりらしい。

「チイツ!」

行く手を阻むワームに一瞬気圧されるカブトだが、即座に気を取り直すとクナイガンを振り回してワームの群れに突っ込んで行った。カブトの怒涛の攻撃に怯むワーム達、だがやはり数の暴力には勝てないのか次第に追い詰められていってしまう。ドレイクの方も持ち堪えてはいるが、元々接近戦に強くないのかハツキリ言って劣勢だった。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

複数のワームを同時に相手取っている内に、肩で息をするようになるカブト。何しろワーム達は必要以上にカブトと距離を縮めようとはせず、攻めては退くという一撃離脱戦法を取り始めたのだ。決定打を与えられず、しかもドレイクの援護もしなければならぬ。この二つのことで内心焦りを見せるカブトは攻撃も粗くなってしまう。元よりこのカブト・風見は戦闘用に鍛えてはいないのだ、スタミナも本格的に鍛えている者に比べると多くはない。

「クツ・・・」

そして遂に体力に限界が来たのかその場で膝をついてしまった。それを見るやワーム達がカブトに近づいていく。髑り殺しにするつもりなのか、ゆっくりと・・・

「亮君ッ!?!」

カブトの危機に、緑川が飛び出していこうとする。だがそれはゴンに止められてしまった。

「ダメッ!?! 行っちゃダメッ!?!」

「離してッ! 亮君が・・・」

「姉ちゃんが行っても何も出来ないって!?! あたしだって、気持ちには分かるけど・・・でも今出て行っても・・・」

ゴンの沈んだ表情に、緑川も次第に抵抗しなくなる。同じ戦う者を見守るしかできない者同士、お互いの気持ちがよく分かってしまったのだ。

（亮君・・・ッ!）

緑川は出ていくのを止めると、今度はその場で祈るように両手を組んだ。力になれない自分でも、せめて願うこと程度は出来る、と。

（誰か・・・誰か、助けて!）

緑川が祈る間も、ワーム達は着々とカブトに近づいていく。

「畜生・・・緑川・・・姉さん・・・」

いよいよ目の前に迫ってきたワーム達はその爪を振り上げると、カブトはワーム達を睨みつけながら覚悟を決める。疲れが回った脚は思うように動かず、もはや絶体絶命だった。そしてワームの爪がカブトに向かって振り下ろされたとき……

「えっ？」

その瞬間ワーム達を小さい何かが弾き飛ばした。よく見てみるとそれは手のひらサイズの機械的な蜂……ザビーゼクターだった。

カブトが急いで辺りを見渡すと、公園の入口に久賀達と、先程蕎麦屋で見かけた青年が立っているのが見える。

「大丈夫か？ 風見、風間。」

久賀達は戻ってきたザビーゼクターを手に取ると、カブトとドレイクに声をかける。二人がそれに対して適当な返事をする、今度は隣に立つ青年に対して呆れたような目を向けた。

「にしてもお前、何でついてきたんだよ。出前の途中だろ？ 寄り道してていいのか？」

「ワームは全て俺が倒す。それに、俺は寄り道においても頂点に立つ男だ。問題はない。」

「その場合は頂点じゃなくて底辺じゃないのか？ 出前の寄り道はどうかと思うぞ。」

二人は漫才の様なやり取りをしているが、その実全く油断はなかった。絶えずワーム達の動きを警戒している。

「ま、どうせ後で怒られるのお前だからあたしには関係ないけどな。さて……とつとと終わらせるか。」

久賀達はそう言うのと鋭い視線をワーム達に向け、隣にいた青年・神代 剣は何処からか剣の様な物、サソードヤイバーを取り出した。

《Stand by》

神代が剣を構えると、電子音声が鳴り響く。それと同時に地面から機械で出来たサソリ、サソードゼクターが現れて神代の下に向かっていった。

「ワームを全て倒すのは、この俺だ！ 変身！」

《Henshin》

神代がゼクターをヤイバーにセットすると他のライダーと同じような電子音声が鳴り、次の瞬間には全身を装甲とチューブで包まれた戦士・仮面ライダーサソードがそこに立っていた。

「はいはい、好きにしろよ。変身。」

《Henshin》

一方の久賀達も、神代の様子にしばし呆れたような表情をするとザビーゼクターをライダーブレスにセットし、仮面ライダーザビーに変身する。

二人は変身すると、ザビーはミユスカワームの方に、サソードはカブトの近くにいるサナギ体の方に向かって行った。

これに対して、ワーム達は状況が悪くなってきたことを察し新たに

1体の成虫体を呼び出した。現れたのは深緑色の外皮に、頭部にある大きな複眼、そして両腕に生えた鎌のような大きな爪をもつカマキリの様なワーム・・・パラドキサワームだった。パラドキサワームは一目散にザビーに立ち向かっていく。

「チツ!? フツ!」

ザビーも自分に向かってくるワームに気付くと、即座にそちらに攻撃目標を定める。お互いに走り寄ると、ザビーは一瞬で伏せてガラ空きとなった腹部にパンチを放つ。

「キャストオフ!」

《Cast off Change Wasp》

ザビーはライダーフォームになると、まずドレイクの近くにいるワームにニードルシューターで攻撃する。散弾の様に飛んでいく無数の針に、ミユスカワームも怯んで距離を取った。

「風間! とりあえず距離を取れ、そうすればなんとかなる!」

ザビーはそれだけ言うと再びパラドキサワームに向かっていく。一方のドレイクは、何とか体勢を立て直すと離れた距離からドレイクゼクターで銃撃を始めた。

「さつきはよくもやってくれましたね。お返しです!」

先程の鬱憤を晴らすかのような弾幕に、ミユスカワームは攻めることも退くこともできないでいるのだった。



その頃カブトの方はというと、ザビーゼクターとサソードの登場で混乱状態だったワーム達の隙を突いて体勢を立て直すと、サソードと共にワームと戦っていた。

「ハッ、フツ、ヤアッ！」

サソードはキャストオフして飛んできたアーマーにワーム達が怯んだ隙を突いて、一気に斬りかかっていく。

「ハッ、セイッ！」

それに対してカブトは、クナイガンを逆手に持って一気にワーム達に接近すると、複数のワームに対して同時に斬りつけていった。如何にこの場にいるカブト「風見が戦いに関しては何となくは素人だとは言え、彼は変身したての初戦でサナギ体のワームを圧倒している。その彼にとってこの程度の敵を相手取るなど大したことは無かった。

「ライダーシューティング。」

《Rider Shootning》

「ライダースラッシュ！」

《Rider Slash》

ある程度ミユスカワームを追い詰めたドレイクとサナギ体を蹴散らしたサソードは、トドメを刺すべくお互い必殺技を発動する。シューティングモードに変形させたドレイクゼクターのヒッチスロットルを引いたドレイクがミユスカワームに狙いを定め、サソードゼクターのニードルを押し込んだサソードが居合いの様な構えを取った。

「ハアアアアッ！」

そしてドレイクが引き金を引くと同時に、サソードもサソードマイバーを振り抜いた。飛んでいくエネルギー弾と斬撃がそれぞれがミユスカワームを撃ち抜き、切り裂き、攻撃を受けたワーム達は皆その場で爆発する。

「ライダーキック！」

《R i d e r K i c k》

カブトも動きの鈍ったワーム達に必殺のライダーキックを放ち、複数のサナギ体を同時に吹き飛ばした。残るはザビーが相手にしているパラドキサワームのみであるが……

「ライダーステイング。」

《R i d e r S t i n g》

ザビーがゼクター上部のフルスロットルを押し、タキオン粒子を収束させていく。そしていざライダーステイングを放とうとしたその時、出し抜けに現れたサナギ体がパラドキサワームを庇ってしまった。

「ッ!?!? てめえ!！」

その事に反応するザビーだが、ライダーステイングはそのままサナギ体を貫いた。そしてその間にパラドキサワームはその場から一目散に……緑川が居る方へと向かって駆けて行った。

「ゴンツ?!！」

「緑川!?!？」

「畜生!！」

ドレイクとカブトが驚愕する中、ザビーは急いでその場から駆けだす。だが既にパラドキサワームは緑川達の目前にまで来ていた。

「り、亮君!？」

あまりの事態にその場から逃げる事も出来ずその場で目を瞑る緑川とゴン。その様子にカブトは我武者羅に走り出す。必死になって手を伸ばすが、その手は緑川には届かない。ザビーも急いでいるが、位置的に間に合うかどうかは賭けになるだろう。

(間に合え・・・間に合ええ!)

「ちい、クロックアツ・・・」

緑川達に爪を振り上げるパラドキサワームの様子に、ザビーが急いでクロックアツプして攻撃を止めさせようとした時、何かがパラドキサワームを弾き飛ばした。

「えっ?!」

「あれはっ!？」

《Clock over》

駆けだした二人が驚く中、倒れたパラドキサワームの目前にもう一人のライダーが現れた。青い複眼に赤いアーマー、それは正しく風間が変身しているマスクドライバーシステムと全く同じ、仮面ライダーカブトだった。カブトは風間が変身するカブトを一瞥すると、太陽を指差しながら言葉を紡ぐ。

「お婆ちゃんが言っていた。男が何よりも優先するべき仕事は、女を守ることだっつてな。」

そう言うと同時にカブトの手にカブトゼクターに酷似した銀色のゼクターが姿を現す。カブトはそれを迷わず左腰に装着すると、それ・  
・ハイパーゼクターのゼクターホーンを倒した。

「ハイパーキャストオフ。」

《Hyper Cast off Change Hyper Bettle》

カブトがゼクターホーンを倒すと電子音声がり、それと同時にカブトの体に変化が起こる。体中を電光が走ると見る見る内にカブトのアーマーが赤と銀を基調としたモノに変化していき、頭部の角も大型なモノに変化した。

その様子を見た風見が変身するカブトは、自身のカブトとは異なる形態になったカブトを前に呆然としていた。

「何だ、あれ？」

「あれが……ハイパーカブトか。」

「ハイパー……カブト……」

呆然とするカブトの耳に、ザビーが何気なく呟いた言葉が入ってくる。それを聞いた彼は、意識せずその変化……進化したカブト、ハイパーカブトの名を呟いた。

一方パラドキサームは、目の前に現れたハイパーカブトを前に背を向けて逃げだした。自分では相手が悪い事を理解したのだ。

だが、ハイパーカブトに相手を逃がす様な情けは無かった。

「ハイパークロックアップ。」

《Hyper Clock up》

ハイパーカブトがハイパーゼクター上部のスイッチを押すと、全身の装甲が開いて金色のフレームが剥き出しになった。それと同時にカブト達の目から消えるハイパーカブト。

一方のハイパーカブトは、周囲の物体全てが動きを止めた様な空間でパラドキサワームを倒す為に再びハイパーゼクターのゼクターホーンを倒す。

《Maximum Rider Power》

ハイパーゼクターから電子音声が鳴ると、次いでカブトゼクターのフルスロットルを順に押していく。

《One Two Three》

「ハイパー・・・キック。」

《Rider Kick》

ハイパーカブトが眩きながらライダーキックを放つ要領でゼクターを操作すると、その背中から光り輝く翼が現れてハイパーカブトを飛翔させる。そしてその状態で、ハイパーカブトは飛び蹴りの体勢でパラドキサワームに突っ込んでいった。

「ハアアアアアッ!!!」

ハイパーカブトの必殺技『ハイパーライダーキック』がパラドキサワームに炸裂し、相手はそのまま何が起こったのかも分からぬまま爆発してしまった。それと同時にザビー達の目に再び映るハイパーカブトの姿。

「ッ!? い、今何が?」

「あれがハイパークロックアップ、いくらなんでも速過ぎだろ・・・」

その様子に驚く一同を余所に、ハイパーカブトはその場で変身を解除した。そしてその下にあつた顔に見覚えがあるカブトは、またしても驚く事になる。

「あつ!? あんたさつき引つたくりを転ばせてた!」

カブトはそう言いながらも変身を解除し、他のメンツも変身を解除していった。

「一体何なんです? カブトが二人もいるなんて、聞いてませんよ?」

「ん〜とだなあ、これにはちょっと事情があつて・・・」

風間に久賀達が詰め寄られる中、風見は呆然とハイパーカブトに変身していた人物、天道を見つめていた。するとそこに・・・

「亮君!」

「み、緑川、大丈夫だったか!」

先程までその場で動けなかった緑川が風見の下に走り寄ってくる。余程怖かったのかその目には涙が浮かんでいるが、彼女は風見の言葉にしつかりと頷いた。

「あんたが・・・この世界のカブト。ありがとう、緑川を助けてくれて。」

風見はとりあえず天道に礼を言った。あそこで彼が現れてくれなければ緑川がどうなっていたか分からない。最悪の事態を想像して、風見は背中を冷や汗が流れるのを感じる。

「礼を言われる筋合いはない。言った筈だ、男が何よりも優先するべきは、女を守ることだってな。お前こそ、何ですぐにあのワームを止めに向かわなかった？」

「えっ？」

風見は天道の言葉に咄嗟に應える事が出来ないうでいた。何故すぐに動かなかったかと言われれば、確かにあの時の自分は何も考えられなかった。咄嗟の事態に対応しきれなかったとも言える。

「お婆ちゃんが言っていた。奇跡は天下の回り物、何時も起こるモノじゃないってな。今回は運が良かったが、下手をしていればその子は死んでいた。」

天道の言う事は風見も分からないではない。だがあの時は本当に何も考えられず、どう行動するべきか分からなかった。風見自身どちらかと言うと冷静な方だが、それでも咄嗟の異常事態に対処しきれるほど彼は修羅場をくぐってはいない。

「俺は・・・あんだとは違う。あんだみたいに強くは無いし、あんな姿にもなれない！」

風見はそう天道に言い返した。彼自身子供っぽい訳だと分かっていたが、こう言わずにはいられない。

対する天道は、それを聞いても雰囲気を変える事は無く・・・

「当然だ。俺は全人類60億人の頂点に立つ男だぞ。俺とお前が同じである筈がない。」

等と偉そうに言つてのける。それに風見がさらに反発しようとする、それよりも早く天道が口を開いた。

「それ以前に俺とお前は全くの他人だ。違う人間が同じ道を進める筈がない。お婆ちゃんが言っていた、人の歩む道は太陽の光と同じ、ありとあらゆる方向に向かつている・・・と。俺が天の道を往くように、お前にもお前の道がある筈だ。」

「俺の・・・道？」

風見は天道のその言葉に、先程とは違う意味で何も言えなくなつてしまった。それは何か思う所があるが故か、それとも考えさせられる何かを感じたからか。

風見がその言葉について考えていると、突然その場に灰色のオーロラが現れる。風間と神代が驚く中、久賀達はそれを見て風見達をオーロラに向かつて促した。

「どうやら帰りの時間が来たみたいだな。」

「えっ？ そうなんですか？」

緑川が困惑した声を上げた。来る時は確かにこれに飲み込まれたが、久賀達の話からするに異世界はいくらでもある。もしかしたらまた別の世界に飛ばされてしまうのではないか、そう考えるとこれに入るのは気が引けてしまう。

「行こうぜ、緑川。」



「い、いいの!？」

だが風見は緑川の手を取って迷わずオーロラに向かって行く。

「ここにこうしてても帰れる保証はないんだ、だったら行ってみようぜ。もし違ったらその時はその時だ。」

そう言っただけで風見は軽く笑みを作る。その笑みに緑川も勇気付けられたのか、真剣な表情で頷いた。そして風見達はオーロラに向かって歩いていくが、ふと立ち止まると振り返り……

「俺は風見、風見 亮だ!」

とだけ言った。すると天道も太陽を指差して、彼の存在を示す言葉を口にする。

「俺は天の道を往き、総てを司る男。名を、天道……総司。」

それを聞くと、風見は満足そうな顔をして久賀達に手を振ってきた。

「久賀達さん、お世話になりました!」

「ありがとうございます!」

「ああ、お前たちも元気だな。」

二人の口にする別れの言葉に久賀達も返すと、今度こそ二人はオーロラの中に入っていく。それと同時に灰色のオーロラはその場から消え去り、後には何事も無かったかのような公園の様子だけが残っていた。

おまけ

風見達がこの世界から去って行って数日後、非番が明けた久賀達は本部にある自分の机に向かっていた。

途中までは特に何を考えるでもなくいつも通りにしていたのだが、しばらく進んでいくとふとある事を思い出す。

「あつ！？　そう言えば・・・」

思い出したのは非番に入る直前、風見達と出会う前に本部で大和とした会話での事である。

「そう言えばあたし机の上片して無かったな、こいつはちょっとヤバいかなあ。」

そう、あの後久賀達は風見達に話を聞く為にファミレスによってしまい、そのまま机の上を片すと言う事を忘れてしまっていたのだ。あれほど言われていたのに忘れたとあれば、小言程度では済まないかもしれない。

久賀達が覚悟して自分の机に近付くと、机は綺麗に片付けられていた。これはもしかや大和が片付けたのではないかと考えていると・・・

「久賀達。」

「や、大和か？」

「？　何だ身構えて？」

やってきた久賀達に大和が声をかけてくる。久賀達は何を言われる

のかと一瞬身構えたが、対する大和はその様子に首を傾げるといつもと変わらない様子で彼女に声をかけた。

「それにしても、感心したぞ。ちゃんと片付けしに戻ってくるとはな。」

「はっ？」

「流石に部隊の解散を戸高任せにしたのはアレかもしれないが、まあ今回は大目に見よう。じゃあな。」

「あ、ああ・・・あれ？」

久賀達は大和の言葉に首を傾げる。彼女の記憶が確かならば、久賀達はあの後本部に戻ってきてはいない。だが彼の言葉によれば、久賀達の机は片されていたらしい。だが一体誰がやったのか。

久賀達はあまりにも不可解な事態に首を傾げる。そんな彼女の様子を、物陰から見ている存在が居た。

「隊長の名誉と尊厳は、我々が守らなくては。」

《ーッ！！》

物影では、久賀達の部隊の副官である戸高と、彼女のゼクターであるザビーゼクターがそう言って頷き合っていたのだが、それが久賀達に知られる事はなかった。

## 第46話 帰還・太陽の光（後書き）

と言う訳で聖さんとのコラボ最終話でした。

今回ついに風見と天道が対面しました。この話で天道が口にした『お婆ちゃん』は自分のオリジナルですが、どうだったでしょう？

何にしても、コラボしてくださり、聖さんありがとうございました！

今回の更新もお楽しみに。それでは。

**第47話 奇妙な間宮・消えるカフト（前書き）**

どうも、黒服です。

今回は遂にダークカフト初登場、ついでにコーカサスの影も・・・

## 第47話 奇妙な閻宮・消えるカブト

異世界のカブト・風見と久賀達が邂逅してから数日後……

「ハッ、セイツ、フッ！」

久賀達はザビーに変身して、偶然遭遇した成虫体のワームと戦っていた。相手は以前出会った事のある蜘蛛の様な白と黒の縞模様を持つ、アラクネワーム・ニグリティアだ。

出会った経緯はなんて事は無い、適当な所で昼食を取って帰る途中に人がこのワームに襲われているのを目撃し、助ける為にザビーに変身して乱入したのである。

戦い始めの当初はアラクネワームのクロックアップに押されていたザビーだが、キャストオフして対等の立場に持っていくとすぐさま形勢逆転。戦いはザビーのペースで進んでいた。

「ライダーステイング！」

《R i d e r   S t i n g 》

「ハアッ！」

戦いはいつの間にかテラスに移り、動きの鈍ったアラクネワームにザビーのライダーステイングが炸裂する。攻撃を受けたワームは白い炎を上げてその場で爆発した。

「はあ………ん？」

戦いが終わりに息つくザビー。するとテラスの先の方でカブト……

とウカワームが戦っているのが見えた。

「あいつら、あんな所で……」

ザビーが彼らの戦いの様子を見てみると、カブトの下にハイパーゼクターと、もう一つ彼女が見た事のない剣が飛んで来た。

「何だあれ!？」

《Hyper Cast of Change Hyper Beetle》

資料にも載っていないなかったその武装にザビーが驚愕していると、カブトはハイパーキャストオフしてハイパーカブトになる。

そしてハイパーカブトが手に持った剣を構えると、突然ザビーゼクターが騒ぎ出しライダープレスから離れてしまう。

「はあっ?! ちよっ、おい!？」

ゼクターが外れたことで変身が解除され、元の姿に戻る久賀達。慌ててザビーゼクターを捕まえようとするが、あえなくザビーゼクターは久賀達の下を離れハイパーカブトの方へ向かって行き、そのまま彼が持っている剣の先にライダーフォームと同じ状態でセットされた。

「あれは……ッ!? もしかして、あれがパーフェクトゼクターか？」

久賀達がそんな事を呟きながらハイパーカブトを見てみると、彼はパーフェクトゼクターの鍔の辺りに付いている4つのボタンの内黄

色いボタンを押した。

《Thebee Power》

ハイパーカブトがボタンを押すと、そんな電子音が発せられる。

《Hyper Stinging》

「ハッ！」

彼がパーフェクトゼクターの先端にセットされたザビーゼクターのゼクターニードルを突き刺すようにウカワームに突き出すと、ザビーゼクターからライダースティングの強化された技『ハイパーステイング』が放たれる。

『ああああああつ?!』

ハイパーカブトの攻撃はウカワームに直撃こそしなかったものの、頭部を掠って大ダメージを与えることには成功していた。

「あんにやる!?!」

久賀達が怒りに顔をゆがませる中、攻撃した姿勢からハイパーカブトが体勢を立て直すと背後から近付いていた剣と楯を持った金色のワーム、サブストワームがハイパーカブトに攻撃する。彼も反撃するが、このワームはウカワームを逃がすのが目的だったのかすぐにその場を去って行ってしまふ。

そしてハイパーカブトが辺りを見渡した時、そこにはウカワームの影も形も無くなっていた。



「・・・逃げたか「ふざけんな、この馬鹿野郎!!?」・・・なんだいきなり?」

ハイパーカブトがウカワームを逃がした事を確認していると、彼の背中に久賀達飛び蹴りを喰らわせた。だが彼はなんて事無い様にそのまま振り返って変身を解きながら久賀達に話しかける。

「~~~~ツ! お前なツ! ザビーゼクター使っんなら倒せよ!?!? まるであいつが弱いみたいだろ!?!? いやそうじゃなかった、何勝手に人のゼクター使ってたんだ!? おかげで勝手に変身は解除されるし、って言うかこの前マジでヤバかったんだぞ! つか前ザビーゼクターが言った事ってマジだったのか・・・お前は お前で勝手にこいつについていくな!?!?」

ハイパーカブトを蹴ったダメージがそのまま自分に返ってきたのか、足を押さえて悶える久賀達。痛みが和らいだ時を見計らって、彼女は涙目になりながらも怒りにまかせて次々と天道に怒声を浴びせ、ついでに勝手に天道についていったザビーゼクターを叱り付けた。叱られたザビーゼクターは申し訳ないと思っているのか、久賀達の肩に乗ってシユンとなる。

「そんなにいきり立つな、カルシウムが足りてないんじゃないのか?」

「お前なツ!?!?!? はあ、それより一体何なんだありや? あんなのZECTのマスクドライダーシステムに関する資料に乗って無かったぞ?」

天道に対して怒りを露わにする久賀達だが、彼は彼女の怒りなど柳に風と気にした様子を見せない。彼に対して何を言っても無駄と悟った久賀達は、一先ず怒りを収めると改めてパーフェクトゼクター

について天道に訊ねた。彼女はあんな物見た事も聞いた事も無かったのだ。

「恐らく未来からやってきたんだらう。俺のハイパーゼクターも同じようにしてやって来た。」

「なんでお前は未来でパーフェクトゼクターが作られたって分かったんだ？」

「俺は天の道を往き、総てを司る男だからだぞ？ それくらい知ってて当然だ。」

「……そりゃあ大したこと……」

天道の答えになっているのかどうかよく分からない言葉に、久賀達は額に青筋を浮かべる。このまま彼と話していても埒が明かないと考えたのか、久賀達は肩を怒らせながらその場を立ち去って行った。

ZECT本部

あの後本部に戻ってきた久賀達は、技術部に向かってマスクドライダーシステム関連の資料を読み漁っていた。

「ん〜、やっぱりねえなあ。」

「ある筈がありませんよ。本当にカブトがそんなゼクターを持っていたんですか？」

「間違い無い。あたしはそれで2度もザビーゼクターを横取りされたんだ。」

久賀達が探していたのは、パーフェクトゼクターに関する資料。もしや自分が見過ごしていたのではないかと考えてあちこち探しているのだが、研究員の言う通りパーフェクトゼクターに関しては開発

計画やそれを匂わせる資料も含めて影も形も無かった。

だが久賀達は確かにその目で見て、実際にザビーゼクターを奪われもしたのだ。その彼女からすればこの結果は釈然としないモノがある。

「その、もう宜しいですか？」

「ん？ ああ、悪かったな。もう十分だ。」

とりあえず何処か迷惑そうな様子の研究員の『そろそろ出て行ってくれないか？』と言う言葉に、久賀達もその場を立ち去る事にする。マスクドライダーシステムの中でも特定の事に関する資料を探す為に連れて来た研究員である、何時までも引き留めておくのも可哀想だろう。

久賀達は元あった場所に資料を戻すと、その場を立ち去って行く。そして開発ブースを横切って技術部を出て行こうとするのだが――

(・・・ん?)

何気なく周りを見てみると、彼女はある事に気が付いた。それは些細な、本当に些細な違和感。だが彼女の中にある知識とは決定的に食い違うその違和感に、久賀達は内心で首を傾げながらその場を立ち去って行った。

廊下

技術部を出た久賀達は、依然として神妙な顔をしながら廊下を歩い

ていた。

(うーん……やっぱりおかしいな。)

彼女が内心で考え事をしていると、突然誰かに声をかけられる。

「何だ久賀達、らしくなく難しそうな顔をして？」

「大和……それじゃあまるであたしが普段能天気な顔ばっかしてるみたいない方だな……」

大和の何げない言葉に、少々面白くないモノを感じた久賀達はジトつとした目を彼に向ける。そんな彼女の視線を気にも留めず、大和は再び口を開く。

「別に馬鹿にしていった訳じゃないんだがな。で、どうしたんだ？何か悩みでもあるのか？」

「んまあ、悩みって言うか……ちょっと腑に落ちない事があるんだけど……」

久賀達はそう言って軽く頭を掻くと、思い切って大和に質問した。

「なあ大和、第4世代のマスクドライバーシステムってお前のケタロスと織田のヘラクスの2つだけだよな？」

「？ 何だ突然、当たり前だろう。」

「それ以外、例えば第5世代が作られたとかは無いよな？」

「どうしたんだ急に？ あつたらお前にも資料が何かしら行ってる筈だ。それが無いって事は俺と織田が使ってるゼクターで全部だぞ？」

大和は久賀達の言葉の不可思議さに首を傾げている。

「一体どうしたんだ？」

「ああ、実はな……」

訝しげな顔をしている大和に、久賀達は自身の中で腑に落ちない点を口にした。それは……

「何？ マスクドライダーシステムのデータに先があった？」

「ああ、ちよつと調べものして技術部から出る時にチラッと見た程度だったけど、パソコンに表示されてるマスクドライダーシステムのデータにヘラクースとケタロスの次がある感じだった。」

久賀達が見たのは、技術部のパソコンに表示されているマスクドライダーシステムの一覧。普通、第4世代がヘラクースとケタロスで終わりならその二つが一番下に来た時点でそれ以上矢印が下向きに表示される事は無い筈である。だが彼女が見た時、確かにあの一覧にはまだ先がある感じだった。それが彼女にはどうにも腑に落ちない点だったのだ。

「それはアレだろ、一覧の最後にしめくり的な一言でも入ってたんじゃないのか？ 『以上』とかそんな感じの。」

「そう……か。そんなもんか。」

二人は話しながら廊下を進み、その道中久賀達の感じた違和感に大和がありそうな可能性を口にする。

「もし仮にお前の言う俺達の知らないライダーが居るとして、何でそんなもんがある？」

「まあ……確かに言われりゃ「よお、お二人さん！」ツ！？ 何だ、織田か。」

久賀達が大和の言葉に納得しかけていると、何処からか現れた織田が声をかけて来た。

「何だはねえだろ、何だはよ。それで、何話してたんだ？」

「別に大したことじゃねえけどさ・・・」

興味津々と言った様子の織田に、久賀達はこれまでの事を織田に話していく。それを聞いた彼は・・・

「ん〜、それってもしかして『黄金のライダー』って奴に関係してんじゃないか？」

と言つて来た。

「黄金の・・・ライダー？」

織田の口にした言葉に、久賀達は首を傾げる。対して大和はしばし何か考えるような仕草をすると、徐に何かを思いついた様な顔になった。

「ああ、それなら聞いた事があるな。何でもとんでもない強さのライダーが居るって噂だったか。」

「どんなのだ？」

大和の言う噂を聞いた事が無かった久賀達が訊ねると、彼は自分の知る範疇でその噂を話していく。

「何でも、ZECTの意に背く者や組織の重大な秘密を知った者を消して回っているライダーが居るって話だ。」

「その強さつてのが、戦う前から相手は負けてるってんだと。そんなで倒された奴の近くには、一輪の青い薔薇が手向けられてるって話だぜ。」

「織田はともかく、大和は戦闘部隊の統括だろ？ 噂の真意とかは分からないわけ？」

「確かに俺は戦闘部隊の統括だが、だからって組織の内情全てを知ってるわけじゃない。精々がお前の知ってることにちよっと毛が生えた程度だ。噂の真意なんて分かるわけがない。」

どうにも信じ難い話である。防諜上の理由から組織が謀反を働いた者や重要機密を知ってしまった者を始末するだけの非情さを見せることには納得できるが、それにしたって本部直轄部隊の久賀達はおるか、戦闘部隊統括というある意味ZECTのトップに最も近い大和が噂程度でしか知らないライダーがそれをなしているというのは理解できない。そう言ったことであれば本部直轄のシャドウに任せればいいだけのことなのに……

あるいは、この噂自体が防諜を目的とした情報攪乱の為のデマなのだろうか。

「どうせ考えたって分かるわけねえよ。噂は噂なんだし、そう簡単に答えなんて出やしねえって。」

織田はそう言って強引に話を中断させる。実際久賀達らはその黄金のライダーとやらを見たことがない。見たことがない物を噂以上に知ることなどできはしないだろう。

(しかし……どうにもいい気分はしないな。)

久賀達は頭の中から黄金のライダーに対する噂を追い払うも、言い

ようのない一抹の不安を拭い去ることはできないのであった。

夜

その後仕事を終えた久賀達は、書類を片付けてから自身の家に帰る帰路のついでにいた。その手にはコンビニの物と思われるビニール袋が握られており、中には様々な食品が入っているのが薄らと見える。

その中には、久賀達が軽く気になっている物もあった。

「家族ラーメン・・・姉貴醤油ねえ。影山に勧められたから買ってみたけど・・・」

『家族ラーメン』・・・それは、今巷でブームになっている『兄弟ラーメン』から生まれた人気商品シリーズである。手頃な値段でなかなかのポリウムと味が楽しめ、名前もインパクトがあると言う事で人気を呼んでいるらしい。

なおこのシリーズには、久賀達の買った『姉貴醤油』の他に兄弟ラーメンの頃からある、『兄貴塩』、『弟味噌』、新たに生まれた『妹チャーシュー』、『親父豚骨』、『お袋ワンタン』などがあるとのこと。

久賀達がそんな感じに買った物について考え事をしながら歩いていると、目の前に見知った少女の後姿を見つけた。

「？ あれって・・・ゴンか？」

何度も見た事のあるニット帽を被ったその少女は、風間の相棒でも



あるゴンのモノだった。久賀達はこんな時間にで歩いている彼女を心配に思って、ゴンに近付いていく。

「よっ、何してんだこんな時間に？」

「ん？ あ、姉ちゃん。」

「どうした？ また風間に怒られたのか？」

久賀達がゴンにそう訊ねると、彼女は首を振ってそれを否定した。

「うっん、違うの。大介がまた女の人に夢中になっちゃって、それも結構綺麗な人に。」

「ああ・・・ま、しょうがねえな。ありや多分死んでも治らないだろ。」

彼女の言葉にがつくりと肩を落とすゴン。久賀達は一瞬しまったと言った顔をしたが、すぐに気を取り直すとゴンの肩に手を置く。

「とにかく、そうしよげるな。風間の奴だって、別にお前を捨てる様なことはしないだろ。」

「それは・・・そうだけど・・・」

依然として俯いたままのゴンの背中を、久賀達は元気付ける様に叩いた。

「だったら元気出せって。お前は風間の相棒だろ？ だったら信じてやれよ、あいつの事をさ。」

そう言うと久賀達はビニール袋の中から適当にサンドイッチを取り出すと、『それでも食べて元気だしな』とゴンに手渡した。

ゴンはサンドイッチを受け取ると、少しだけ元気を取り戻したのが笑みを浮かべる。

「うん、ありがとう姉ちゃん！」

「気にすんな。それよりも早く家に帰りな、こんな時間に何時までも歩いてると危ないぞ。」

「分かった。じゃあね！」

ゴンは久賀達に手を振りながらその場から立ち去っていき、久賀達もそんな彼女に軽く手を振った後自身も改めて帰路に着いた。

翌日

本部にある自身の机にて、久賀達はあるチラシを見ていた。どうやらオペラの講演会のチラシらしいのだが・・・

「あれは・・・確かに間宮 麗奈・・・だよな？」

久賀達がこれを持っているのは、風に飛ばされて来たのを偶然拾ったからだ。

だが問題はこれを配っていた人物。遠目に見ただけだが風間とゴン、そして現在ワーム達のリーダー的存在である筈の間宮がこれを配っていたのだ。と言っても、ゴンは例によって退屈そうに近くに腰掛けていただけだったのだが。

分からないのはあの間宮 麗奈が、ワームなのかそうでないのかと  
言う事だ。

何度か出会った事があるが、間宮はとても人間と相容れる事があるとは思えない。雰囲気からして完全にワームのそれを常に醸し出しているのが分かる程であると言うのに、あの間宮からはそれが全く感じられなかった。

もしかしたら彼女は間宮 麗奈が擬態した人間なのではないか？とも考えたが、奴が擬態に浸かった容姿の人間を何時までも生かしておくとは考え難い。

「やっぱあれって、人間なのか？ でもなあ……」

そんな事を考えていると、何処からかザビーゼクターがやって来て騒ぎ始めた。

《ーッ！？》

「ん？……ワームか？」

このようにザビーゼクターが騒ぎ出した時は大抵ワームが現れた時である。久賀達がザビーゼクターに訊ねると、ゼクターは肯定する様に彼女の周りを一周した。

「さして、行くとするか！」

久賀達は椅子から立ち上がると、戸高らに出動の準備をするように連絡して自身もその場から去っていった。

とある地下駐車場

ザビーゼクターが導くままマシンゼクトロンで久賀達が現場に向か

うと、そこにはカブトとドレイク、ガタックが複数のサナギ体と1体のサブストワームと戦っていた。そして近くには、間宮 麗奈の姿も・・・

「ちつと狭いな、しょうがない。B小隊だけついてこい、後はこの場で別命あるまで待機だ！」

久賀達は指示を出すと、ザビーゼクターをその手にワーム達に向かって行った。

「変身！」

《Henshin》

ザビーに変身すると、彼女は手近のワーム達に攻撃を開始する。それと同時にシャドウ第2番隊B小隊の隊員達も銃撃を開始した。

「密集してる所には撃つな、加賀美達に当たる！ お前達は1体で行動してる奴から確実に倒せ！」

「了解！」

指示を受けた隊員達は、戦いの輪から少し離れたサナギ体に狙いを絞って着実に攻撃していく。B小隊にはガトリングガンを持った神田もいる為、1体だけで行動しているサナギ体はたちまち蜂の巣にされてしまった。

「フッ、ハッ！」

一方ザビーは、マスクドフォームのままサナギ体と戦闘を始めた。この場には成虫体もいる為本来ならクロックアップにも対抗できるライダーフォームの方がいいのだが、そちらの相手はドレイクがし

ている。どうやら間宮を守る為に行動しているようだが、援護するにしても何にしても邪魔をしてくるサナギを何とかしないと話にならない。

クロックアップして一気にサナギを殲滅するのも一つの手だが、使用には制限時間がある為使い時を間違えると一気に窮地に立たされかねない。そんな訳でザビーは地道にマスクドフォームのパワーでサナギ体を殲滅しようと考えたのだ。

元よりこの様な限定された空間内で複数のサナギを倒すなら、パワーと防御に優れたマスクドの方がやりやすい。

その時、突然ドレイクのいる方から凄まじい音が聞こえてきた。何事かと彼女がそちらを見ると……

「風間ッ!?!」

ドレイクが間宮を庇いながら倒れているのが見えた。どうやらワームの攻撃から彼女を守った際に攻撃を受けてしまったらしい。

ザビーが舌打ちしながらドレイクの下へ向かおうとザビーゼクターに手をかけると、視界の端にハイパーカブトの姿が映った。そしてその手には剣の様な形のゼクター、パーフェクトゼクターの姿も・

「ッ!?!? 天道!?!? お前、ちょっと待っ……」

彼が何をしようとしているのかを勘で察したザビーは、慌てて彼を止めようとするが時既に遅し。ハイパーカブトはパーフェクトゼクターで他のゼクターを召喚し始めた。その中には当然ザビーゼクタ

「も含まれており……」

「コラッ、待てよ?! クソッ!?!」

ザビーはあえなく変身を解除され、敵のド真ん前で久賀達は元の姿に戻ってしまった。

「あんの野郎、状況を考えて使えよな、ったく!?!」

「隊長?!」

「隊長を援護しろ!」

変身が解除された事で急いでその場から離れる久賀達と、そんな彼女を援護しようとするB小隊の隊員達。彼らの活躍もあり、久賀達は何とか戦いの場から離れる事が出来た。

「隊長、大丈夫ですか?」

「ああ、何とか助かった。ありがとうよ。」

命からがら部下と合流した久賀達と、そんな彼女を心配する神田。その時、ハイパーカブトが全てのゼクターを装着したパーフェクトゼクターを振るった。

《Maximum Hyper Typhoon》

強大なタキオン粒子を放出しながらサナギ達を薙ぎ払うハイパーカブト、気が付くとその場からはサブストワームが消えており、後にはハイパーカブトとガタツク、倒れた風間と間宮、そして久賀達らシャドウ第2番隊しかいなかった。

戦いが終わった事を察すると、久賀達は足早にハイパーカブトに向

かっ行ってた。もちろん先程の事に対する文句を言う為である。

「あの野郎、今度という今度は絶対に許さねえ!？」

久賀達が向かって行く中、ハイパーカブトは何かを拾い上げる。遠目からで良くは見えないが、小さい石であるようだ。その時……

「ッ!？ 何だ？」

突然彼が手に持った物……渋谷隕石の欠片の様な物から緑色の波動が放たれると、それと同時にハイパーカブトに電光が走り彼はその場から忽然と消えてしまった。

「天道ッ?!」

「何？ あいつ、一体どこに？」

久賀達はしばし周囲を見渡していたが、ハイパーカブトはおろか天道の姿さえも確認する事は出来なかった。

????

一方消えてしまった天道は、何処とも分からない草原に来ていた。

この場に出た際ハイパーゼクターは離れ、今は通常のカブトの姿だ。

そこは非常に奇妙な場所で、空は昼とも夜とも言えぬ奇妙な色に染まり、遠くには山や森も見える。そして……

「ひより!？」

彼の視線の先には、探していた妹のひよりの姿があった。だがそこに居るのはひよりだけではなく、天道と瓜二つの姿をした男の姿も。カブトがその男を見ていると、何処からともなく羽音が聞こえてくる。そしてもう一人の天道の手に、カブトの物と全く同じ形をした、黒いカブトゼクターが収まった。

「変身……」

「ッ!？」

《Henshin》

カブトが見つめる先で、男は腰に巻かれたベルトに黒いカブトゼクターをセット。それと同時に電子音が鳴り響き、男はマスクドフォームのカブトとほとんど同じライダーに変身してしまう。

「キャストオフ……」

《Cast off Change Beetle》

さらにもう一人のカブトはゼクターの角を倒してキャストオフし、本来の姿であるライダーフォームになった。

黒いアーマーに黄色い複眼、アーマーには赤い基盤の様な模様が描かれている。カブトは知らない事だが、それこそが尤も最初に造られたマスクドライダーシステム、プロトタイプカブト……通称ダークカブトであった。

「お前は……?」

カブトが驚愕する中、ダークカブトはゆっくりとカブトに向かって近づいていき、彼に向かって殴りかかった。



## 第47話 奇妙な間宮・消えるカブト（後書き）

と言う訳で第47話でした。

今回は2度ゼクターを奪われた久賀達。しかも2度目は戦闘の真っ只中。劇中ゼクターを召喚した際は基本ある程度敵が減ってる状態でしたが、場合によってはこんな事態にもなってたかも分かりません。

今回初登場のダークカブト。ダークカブトってクラヒーオーズだととんでもない強さなんですよ、コンボが決まりまくると抜け出せなくてあっという間に体力ゴリゴリ持っていかれる（汗）。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第48話 レクイエム・歌姫のオペラ（前編）（前書き）

どうも、黒服です。

お待ちせして申し訳ありません（汗）、何分先月末に期末試験があったので執筆活動を自重していたと言つのもあるのですが、何よりも展開を考えるのに少し詰まってしまうもので・・・（^^；）

もしかしたら今回は何時にもまして拙い文章かもしれないですが、暖かい目で読んで下されば幸いです。

## 第48話 レクイエム・歌姫のオペラ（前編）

????

何処かも分からない草原、そこでは二人のライダーが戦っていた。

「フツ、ハツ！」

一人は赤い装甲に青い複眼を持つ、天道 総司の変身した仮面ライダーカブト。

「ハツ、ヤアツ！」

そしてもう一人は、天道と全く瓜二つの容姿を持った男が変身したカブトに酷似した姿を持つ黒いライダー、仮面ライダーダークカブト。

両者は殴打の応酬を繰り返し、どちらも一歩も退かなかつた。そしてその近くでは、戦う二人を見守るかのようにそこにいるひよりの姿が・・・

「ひより!?!」

戦いの最中、カブトはひよりに声をかけて近づこうとするが、それはダークカブトのキックによって邪魔されてしまう。

その後も二人の熾烈な戦いは続くが、遂に終わりが訪れる。

「ハアツ!」

二人が同時に放ったパンチは、同じタイミングで相手に当たり両者を弾き飛ばす。お互い距離が離れると、体勢を立て直しつつ腰のゼクターに手をかけた。

《One…》

《Two…》

《Three》

どちらも同時にフルスロットルを順番に押していく。

《Rider Kick》

「ハアッ!!」

そして全く同じタイミングでライダーキックが放たれた。居合い切りの如く放たれた上段回し蹴り、スペック上は同等の戦闘力を持っている筈の二人だったが、この場での勝負を制したのはダークカブトの方だった。

「グッ?!」

カブトの放ったライダーキックはダークカブトのキックに競り負けて、空中に押し出されてしまう。そしてそのままカブトの体に緑色の電光が走り、この場に現れた時と同じように消えてしまった。

神社

その頃風間は、間宮を連れて先日やって来た神社に来ていた。人間

を取り戻した間宮と風間が出会った、あの場所である。

「私……私ッ!？」

ワーム達から何とか逃れる事が出来た麗奈は、困惑と怯えの混じった表情で身を小さくしていた。無理もない、自分の知らない事で自分が狙われているのだ。

しかも自分もその仲間かもしれない。自分は人間だと思っていたのに実は人間ではない化け物だった、そんな小説か映画の中でのしかない様な話が今正に間宮に降りかかっている。その恐怖はどのようなモノか……

「麗奈さん、しっかりしてください……麗奈さん!」

「ねえ、教えて。何なのワームって？ 私もさつきみたいな化け物だって事？」

風間は何とか間宮を宥めようとしているが、ハッキリ言ってあまり効果は出ていない。それどころか間宮の中で疑念がどんどん膨れ上がっていき、ともすれば一気に確信に変わってしまいそうになっていた。

「貴女はワームなんかじゃありません。貴女は……貴女です。」

困惑している間宮に、風間は柔らかい笑みでそう言いながら首を振る。

「でもさつきの化け物、私の事を知ってるような事を言ってた。それに私自身、ある時から記憶が途切れてるんです！もしかして……」

「考え過ぎですよ。私が断言します、貴方はあんな化け物じゃありません。」

そうは言っただけのけるが、実は風間自身以前見たワームとしての間宮の事があった。心の何処かで警戒している部分もあった。彼女が以前自分と戦ったワームであると気付いたのは、Saleeにチラシを配りに言った時天道に指摘されたからなのだが。

だがそれでも風間は彼女に声をかけ続ける。そうせずにはいられなかったから……

「あの、今日はとりあえずここで……」

「あつ、そうですか……送りましようか？」

「いえ、ちよつと……一人になりたいので。」

そんな時、間宮がその場から立ち上がって去っていかうとする。先程のワームの仲間がまた襲ってくるかもしれない、そう考えて風間も彼女についていかうとするが、間宮はそれを拒否して一人でその場から去っていかうしまった。

後に残された風間は、彼女にかける言葉が見つけれず、ただその場に黙って立ち尽くしているしか出来ないでいた。

## 路地裏

風間と別れた間宮だったが、彼女は早くもそれを後悔していた。一人で考えだすと思いがどんとネガティブな方に偏ってしまい、悪い方向に考えが向かって行ってしまう。

(私は……一体……)

間宮が自分自身について考えている時、突然衝撃が頭を突き抜けた。

「ッ!??!?……」

一瞬表情を硬直させた後、間宮はそれまでの人間としての雰囲気から一変、冷たさを感じさせるワームとしての雰囲気を纏い始める。

「私は……グツ?!」

ワームとしての雰囲気を感じながら自身に起こった変化について考えようとする間宮。だがその瞬間、凄まじい頭痛が彼女に襲いかかった。

「う、ぐうう……ああああああつ?!」

間宮は痛みを苦しみながらその姿をウカワームに変え、苦痛を振り払おうとするかの如くしばし近くにあったドラム缶や金網を手当たりしだいに破壊していき、最終的に再び人間の姿になって気絶してしまうのだった。

ZECT本部

次の日、久賀達は影山と共に三島に呼び出され、ある命令を言い渡されていた。

「お前達にある任務を言い渡す……間宮 麗奈を、抹殺しろ。」

この命令を受けた際、久賀達は顔には出さなかったが内心で面食らっていた。今回の抹殺命令は、間宮 麗奈の弱体化を好機とみた事によるモノだろう。しかし先日の間宮の異変に関しては確かに報告は行ったが、その際に彼女が人間かワームか定かではない所はしっかりと言及してある。

にもかかわらず彼女への抹殺命令が出ると言う事は、あの間宮がワームであるという確証があるのであるのか。

「一つ宜しいですか？ 先日の私の報告では、今確認されている間宮 麗奈がワームであると言う確証がないと記してあった筈ですが？」

「あの間宮は間違いなくワームだ。」

試しに久賀達が訊ねて見ると、即答で答えが返ってきた。

「それは間宮がワームであると言う確証が取れている、と？」

「そう言う事だ。分かっただらさっさと行け。」

久賀達の質問に素っ気無く答えると、何時もの如く久賀達らに背を向ける。それを見て軽く肩を竦めると、影山と共にその場を後にしていった。

廊下

三島の部屋から出ると、早速影山が久賀達に話しかけて来た。

「どう思います、久賀達さん？」



「そうだな・・・お前は？」

「俺は、命令である以上とにかく従いますよ。それに、理由がどうであれ、あの間宮 麗奈が倒せるならチャンスだと考えています。」

影山の質問にあえて久賀達が質問で返すと、彼女が予想していた通りの答えが返ってきた。良くも悪くも影山は組織に対して忠実な男だ、余程本人が納得できない様なモノでもない限りどんな命令であってもそれに従う事が出来る。

「でも分からない事もあります。どうして間宮が人間的な行動や言動を取る様になったのか・・・」

「何かしらの切っ掛けがあるのかもな。例えば・・・中途半端に大きなダメージを受けるとか。」

そう言いつつ久賀達は先日のカプトとウカワームの戦いを思い出した。あの時ウカワームは頭部に大きなダメージを受けた筈、そして人間的な行動を取っている間宮を見る様になったのはその後からだ。

(多分、その切っ掛けつてのはアレの事なんだろうけどな・・・)

そんな事を考えながら、久賀達は任務遂行に向けて頭を切り替えていくのだった。

テラス

間宮 麗奈の搜索は、少々時間が掛かったが何とか彼女を見つけ事が出来た。場所は川沿いにあるテラス、間宮の横には彼女に何事か話かけている風間の姿も見える。

二人の近くにゴンの姿は見えない。二人に気を遣ってあえて離れているのか、それとも不貞腐れて何処かでへそを曲げているのか・・・

「何にしてもゴンが居ないのはラッキーだな、巻き込まなくて済むいくぞ、影山。」

「はい。」

久賀達の言葉に影山が頷くと、二人は風間達の前に姿を現す。

「お、お前達ツ?!」

「風間、痛い目に遭いたくなかったらどっか行ってな。あたしらが用事あんのは、そっちの間宮だけなんだ。」

「間宮 麗奈、今日こそ倒させてもらおう!」

そうして二人はゼクターを呼び出して、各々ライダーに変身する。

「変身!」

《Henshin》

《Change Punch・Hopper》

二人がマスクドフォームのザビーとライダーフォームのPホッパーに変身したのを見て、風間も自身のドレイクグリップを取り出してドレイクゼクターを呼び出した。

「させるか、変身!」

《Henshin》

風間はマスクドフォームのドレイクに変身すると、銃撃で二人を牽制する。

「ちいつ！ だつたらー！！」

ドレイクの攻撃に一瞬怯んだ二人だったが、素早くザビーが防御態勢を取ってドレイクに突っ込んでいく。ザビーが盾になった事で、Pホッパーには銃撃が届かずドレイクはそのまま接近戦を挑んで来たザビーと戦う羽目になってしまった。

「どういうつもりだ、お前も知ってるだろ？ あの女がワームだつて事くらい。」

「違う！ 麗奈さんはワームなんかじゃない、何かの間違いだ！？」

「こいつ・・・影山！ ドレイクはあたしが相手をする。お前は間宮を始末しろ！」

「はいっ！」

Pホッパーはザビーの言葉に頷くと、怯えた表情の間宮に近付いていく。ドレイクはそれを止めようとするが、ザビーの妨害によって進路を阻まれてしまった。

「くっ！ 退けッ！？」

「退くか。退いて欲しけりゃ力付くでやってみろ。」

ザビーは焦るドレイクから平常心を奪う為にそう挑発する。戦闘慣れしているとは言えないドレイクはそれに乗ってしまい、距離を取る事をせずに接近戦を仕掛けて来た。

だが元よりドレイク以上に近接戦闘に特化しているザビーである。それも装着者自身も戦闘に慣れている事もあって、ドレイクは劣勢に立たされてしまった。

そうこうしている内に、Pホッパーが間宮の目の前にやって来た。

「あ……ああ……」

「人間の心を取り戻して早々悪いけど、これで終わりだよ。」

そう言いつつPホッパーは振り上げた拳を間宮に叩き込もうとし

- -

「止めるおツ!!?」

「グツ?! お前……」

それを見た瞬間ドレイクは至近距離からのゼロ距離射撃でザビーにダメージを与え、次いでPホッパーにも連続で銃撃を行った。

「くそ、邪魔を……」

攻撃を中断されたPホッパーがドレイクの方に注意を向けた瞬間、突然消火器が噴出された。

「大介え!!」

「ゴン、ナイスだ!」

ドレイクが声のした方に目を向けると、そこには消火器を持ってPホッパーとザビーに消火器の中身を吹きかけているゴンの姿があった。ドレイクはそれを見てゴンにサムズアップすると、間宮を連れてその場から去っていつてしまう。

それから少しして消火器の煙が晴れていくと、その場に残されたのは目標を見失ったPホッパーと……ゴンの手を掴んだザビーだった。

「離して、離してよ！」

「あのなあ……はあ。」

ザビーは暴れるゴンに溜め息をつくど、とりあえず変身を解除した。それを見てPホッパーも変身を解除する。

「逃げられましたね。」

「まあな。にしてもゴン、どういっつもりだ？」

「どういっつもりって、姉ちゃん達が大介達に手を出すから……」  
「そりゃしょうがないだろう、こっちだって一応仕事なんだから。」

久賀達はそう言ってから、とにかくゴンに事情を理解してもらおうと事の顛末を彼女に話していく。

「それって……本当？」

「本当も本当、本当と書いてマジって読むくらい本当だよ。」

「そう言う訳なんだ。もう邪魔しないでくれないか？」

久賀達と影山の説得に、一応の納得を見せるゴン。しかし……

「駄目ツ！？ やっぱり、今は二人の邪魔しないで！」

ゴンは依然として風間の味方と言うポジションを崩さなかった。別にゴンに風間を裏切れと言っている訳ではなかったのだが、同時に子供心ながら風間に対して好意を抱いているゴンが年上のライバルと風間が共にいるのを守ろうとするとは……

尤も、だからと言ってここで久賀達らに風間に近付く悪い虫を追い払わせるかの如く間宮を倒す様に頼んできたなら、それはそれで怖い様な気もするのだが。

「何でだ？ 言っただろ、間宮 麗奈はワームだ。それも他のワームを従えるボスカーリーダー的な存在の。そんな奴が風間の近くに居て、お前平気なのか？」

少々意地の悪い言い方もしれないが決して間違っではない。それに今の久賀達らは知らない事だが、間宮は完全に人間としての心を取り戻した訳ではなく時折ワームとしての心に戻っている。彼女が危険である事は間違いないだろう。

だがそれでもゴンは首を縦に振らない。

「大介、あの人と話してる時すつごく優しい顔してた。それに、あの間宮って人も、あんまり言いたくないけど、凄く優しい人だって分かるもん。だから、そんな二人を邪魔しないであげて欲しいの！」  
「・・・恋愛に関しちやあたしはド素人もいいとこだが、そういう場合って逆に二人を邪魔するもんなんじゃないのか？」

「そうかもしれないけど、でも大介が楽しそうだと・・・あたしも嬉しいから。」

俯きがちに微笑むゴンの様子を見て、久賀達は大きく溜息をついた。

「全くこいつは・・・影山、帰るぞ。」

「えっ！？ 帰るって・・・」

「どっち道間宮は見失っちゃったんだ。だったら一旦戻って体勢を立て直す、分かったか？」

「はぁ・・・」

影山は困惑しつつも久賀達の言葉に頷き、彼女はそれを見てさっさとその場を去っていつてしまう。彼女に遅れまいと影山はその後ろ

についていき、ゴンはそんな二人を見送った後で自分もその場から立ち去って行くのだった。

河原

あれからしばらく、久賀達らから逃げきる事が出来た事を確認した風間は、ホッと一息ついて歩みを止めた。

「追っては来ないようですね。もう大丈夫ですよ。」

風間はそう言うが、麗奈の表情は暗い。

「ねえ風間さん。私やっぱり・・・ワームって言う化け物なんですか？」

「・・・そんな事「嘘ッ!」?」

麗奈は風間の言葉を遮って、昨日あった出来事を口にしていく。

「実は昨日、風間さんと別れてから少し経ってからの記憶がないんです。しかも、何でか周りがめっちゃくちゃになって・・・」

彼女の言葉に風間は一瞬目を見開く。だがすぐに表情を元に戻すと、微笑みながら間宮に語りかけた。

「私は今までいろんな女性と接してきましたが、夢を持ってる人は皆歌について話している貴女と同じ顔をしていました。」

「・・・え?」

「聞かせてくれませんか? 貴女の夢を・・・どうした歌手になりたいと思ったのか。」

風間の言葉に一瞬躊躇するが、間宮はゆっくりと口を開いて歌手になりたいと思つた理由を口にしていった。

子供の頃は他人と話をする事も出来ないくらい人間が怖かつた事 -

- -

そんな自分を直したいと思ひ歌を習ひ始めた事 - -

歌を習う内に多くの人と触れ合い、人間を好きになれた事 - -

そうして、自身の想いを歌いたいと言う夢が出来た事 - - - -

それらを語り終つた後、間宮はそれまでの優しい表情から急に真剣な表情になり風間に話しかけて来た。

「今度、私が私でなくなつたら……もう一人の私に伝えてください。」

「……………」

「心の声に耳を澄ますように。そうすればきっと……私の歌が聞こえるから。」

何かを決意したかのような彼女の表情に、風間は何も声をかける事が出来ずにいた。

街中

一方風間達に逃げられた久賀達は、影山を伴つて街中を適当にぶらついてた。



「久賀達さん、どうするんですか？」  
「どうする……っつってもなあ。」

影山はしきりに久賀達に今後の事について訊ねるが、久賀達自身特に方針があつた訳ではないので明確な答えを出せずにいた。

「本部からの命令ですし、無視するなんて事は……」  
「分かつてるよ、任務はちゃんとやる。ただ今はちよつと……な？」

久賀達はそう言つて間宮を倒す事に若干渋い顔をする。

いくら人間らしさがある相手だからとはいえ、久賀達とてZECTの精鋭部隊シャドウの隊長。非情に徹して任務を遂行する覚悟も持ち合わせている。

とはいえその相手が見知つた人物と繋がりを持っていた場合、その覚悟も若干揺らいでくる。久賀達とて完全に人間を捨てた訳ではないのだ、時には引き金にかけた指の力が緩む時もある。

久賀達がそんな事を考えていると、ふと影山の姿が無くなっている事に気が付いた。何処に行ったのかとしばし辺りを見回していると、少し後ろの方で一点を凝視している彼の姿が。

「影山、急に立ち止まってどうしたんだ？」

久賀達がそう訊ねると、影山はやや呆然とした顔で自身の視線の先を指差した。

「あ、あれ……見てください。」  
「あれ？ あれって、いった……い……い……」

影山が指さす先、そこを見た瞬間久賀達も思わず固まってしまった。何しろ彼女達の視線の先には、並んで歩いている加賀美と岬。そしてそんな二人の後ろから紙吹雪をバラまいている、白い服装に身を包んだ神代の姿があったのだ。

「あのお坊ちゃん……今度は一体何を始めやがったんだ？」  
「さ……さあ？」

久賀達の言葉に、影山も首を傾げるしか出来ない。尤も、世間知らずな神代が間違った知識で何かを始めたのだらうと言う所で二人の意見は一致していたのであるが……

「よお。何か賑やかだな、お前ら。」  
「あつ！？ 久賀達さんに影山さん！」  
「何やってるんです？ ハッキリ言っ目立ちまくりですよ？」

久賀達が声をかけると、それに気付いた加賀美が二人の方を見る。加賀美たちの視線が自分達に向いたのを見て、影山が思った事を正直に口にした。言うまでもないがいい歳をした大人の神代が訳の分からない格好で訳の分からない事やっていれば、否が応にも注目を集めてしまう。

尤もそれは彼らに話しかけた久賀達らも同様だったりするのだが……

「えっと、あのですね……これは「俺は愛のキューピッド！」二

人の愛を祝福しているんだ!!」ちよつ!?!?」  
「・・・・・・・・・・は?」

岬が二人に事情説明をしようとしていると、突然横から神代が口を挟んでくる。そしてその口から出た言葉に、思わず久賀達は目を点にして間の抜けた声を出してしまった。影山に至っては空いた口が塞がらない状態だ。

「愛の・・・キューピッド? 愛って・・・・・・・・この二人がか?」

言われてみれば、神代の恰好はキューピッドのそれに見えなくもない。よく見れば背中には羽が生えており、肩にはハートを模った鏃を付けた弓矢をかけている。

そして彼の言う愛。この場合キューピッドが出張ってくるのだから、愛とは恋愛の事を指しているのだろう。とすると、久賀達らの知らない所で加賀美と岬の間に会いでも芽生えたのだろうか。

「その通りだ! 俺は親友として、二人の愛を応援する事に決めたんだ!!」

「いやあの違うんです!?!? これは・・・・」

「まあ、言われてみればお似合いだと思わなくもないですけど・・・」

「だからッ!?!?」

神代の言う事がどこまで本当かは分からないが、少なくとも手のかかる後輩としっかりした先輩の間に愛情が芽生えると言うのはある意味ありがちな話だろう。影山自身別に加賀美と岬の関係がどうなるかと知った事ではないのだが、本当に二人がそういう関係になったのであれば賛美の言葉でも送ろうと考えていた。

「……ま、精々頑張れよ。行くぞ、影山。」

「あっ、はい。」

「ちよっ、待って！話を聞いてください！！？」

一方の久賀達は、特に興味がないのかそそくさとその場から立ち去って行ってしまう。岬が必死に引き留めようとするが、神代のバラ撒く紙吹雪が微妙に邪魔をしてさっさと歩いていってしまう二人を追うスピードが下がってしまった。

結局、岬と加賀美は久賀達らを見失ってしまい、二人に若干のいらぬ誤解を抱かせてしまったのだった。

## 第49話 レクイエム・歌姫のオペラ（後編）

翌日・Bistro la Salle

「ほお・・・二度とあの女に手を出すな。態々それを言いに来たのか？」

「ああ・・・本気だぞ、俺は。」

その日、風間はSalleを訪れて天道にある話を持ちかけていた。内容は、間宮 麗奈に手を出さない事・・・

だが天道は、そんな風間を鼻で笑った。

「惚れたのか？・・・馬鹿な奴だ、相手はワームだぞ。」

天道のその言葉に、風間は静かに答える。

「大切な人がワームだった。ただそれだけの事だ……お前に、俺の気持ち分かるか！？」

最後の方で力強く口にしたその言葉。だがそれは、天道にも痛いくらい分かっていてる言葉だった。

「分かるさ・・・俺にだって。」

そう口にした彼の脳裏には、今は異世界に居る妹のひよりの姿があった。

今どうしているのか、何故擬態した天道と行動を共にしているのか、

どのようにしていく事が出来るのか……その全てが分からない  
今、彼に出来るのはひよりを思う事だけだったのだ。

しばし重い沈黙が漂う店内。そんな時……

「よお、辛気臭い空気になってるな。」

「お前は……」

「……何しに来たんです？」

出し抜けに店内に久賀達が入って来た。突然現れた彼女に天道は怪訝な顔をし、風間は警戒心を露わにする。

「一つ言っておく。麗奈さんには手を出すな……もし手を出したら……」

「そいつは出来ない相談だ。間宮 麗奈を倒すのはZECT本部からの命令だ、それをやるのがあたしの仕事なんぞな。」

久賀達は淡々とそう言い、それを聞いて風間は彼女に掴みかかった。

「貴様ツ！？ させると思うのか？ 俺が絶対止めて見せる！？」

「出来るのか？ 言っとくが相手はあたしだけじゃないぞ。影山もいるし部下もいる、お前一人だったらあたしが出張らなくてもお前ぐらい蜂の巣だ。」

実際、久賀達の部隊全員が一齐に銃撃すればマスクドはともかくライダーフォームであればドレイクを倒す事が出来るだろう。

だがその事実を突き付けても、風間の決意は揺るがない。

「例えそうだとしても……俺は麗奈さんを守ると誓った！！ お

前が邪魔をするつもりなら、刺し違えてでも俺は!？」

そう言いながら久賀達に詰め寄る風間。彼女は襟元を掴んでくる彼の手を振り払うと、彼に背を向けて……

「それじゃ……次に会った時は敵同士だな。」

とだけ言って、そのまま店から出て行ってしまった。

## 遊歩道

風間と久賀達、天道がSaileeで出会ってからしばらく経って……

間宮 麗奈は風間に電話をかけていた。内容は見事講演会で彼女が歌を歌う事になった事。

その事を伝えて電話を切り、彼女がその場を離れようとした時、何処からともなく目の前に先日出会った黒装束の女性が現れる。

「あ……ああ……」

間宮が恐怖に怯える中、女性はその姿をサブストワームに変えて襲いかかるうとした。だが……

「変身!」

《Henshin Change Kick-Hopper》

出し抜けに変身しながら現れたKホッパーがサブストワームに飛び

蹴りを放って間宮から遠ざける。

「全く、折角休暇を満喫してたつてのに。」

彼がこの場に現れたのは全くの偶然、休暇で暇を持て余していた矢車は適当に街中を散策している最中たまたまこの場を目撃してしまったのだ。流石に見て見ぬふりをする事も出来なかった為、咄嗟に変身してワームの相手をする事になった訳である。

(しかし分からないな……この女確かワームの……)

戦いつつもKホッパーはこの状況に首を傾げる。以前資料で見たりして知っているのだが、今彼が助けた女性は今のワームのリーダー的存在の筈。

彼自身も本部直轄の部隊の隊長なのだが、間宮がこうなった経緯に至るまでの間彼は休暇中だった為事の次第を良く知らなかったのだ。

一体何がどうなっているのか、その事を本人に訊ねようにも間宮は既にこの場から逃げてしまっていた。

「今はとにかくコイツを何とかするか。」

Kホッパーはそう考えて頭を切り替えると、サブストワームに対して何度も得意の蹴りを叩き込む。

「ハッ、セイツ、セリヤアッ！」

ハイ、ミドル、ロー、ニーと多彩なKホッパーの蹴り技に、流石のサブストワームも防戦一方になる。このワーム自体決して弱い訳で



はなく、寧ろどちらかと言えばかなり強い方に分類されるだろう。しかし、Kホッパーとて並み以上の実力を持っており、特に蹴り技に関しては他の追隨を許さない。

上半身に武装が集中していると言う事による攻撃範囲の違いもワームが不利になっている理由だろうが、ともかくこの場はKホッパーが主導権を握っていた。

「ライダージャンプ。」

《R i d e r J u m p》

そしてある程度相手が弱ったとみたKホッパーは、トドメとばかりに必殺技を発動する。

「ライダーキック！」

《R i d e r K i c k》

「セリヤアツ！！！」

上空にジャンプしてから放たれる必殺のライダーキックを、サブストワームは左手の盾で防ごうとするが必死の抵抗も虚しくライダーキックのパワーに押し負けてキックと地面に挟まれる形で爆発してしまった。

ワームを倒し間宮にも逃げられてしまった為、その場に残されたのはKホッパーただ一人。彼はしばし辺りを見渡した後変身を解除すると、溜め息を一つ吐いた。

「ふう……一体何がどうなってるんだか。」

そう呟くと、一先ずその場を離れる事にする。詳しい事情に関して

は、もしかしたら久賀達か大和が知っているかもしれない。後で聞いてみるのも悪くは無いだろうという考えである。

そんな事を考えながら、矢車はその場から立ち去って行った。

区民会館近く

あれから1日経って、遂に紅会の公演の日。風間は公演が行われる場所である区民会館の近くで間宮と対面していた。

ただし、今彼の目の前に居るのは人間としての心を持った『間宮麗奈』ではない。人類に災いをもたらす為に現れた、ウカワームとしての『間宮 麗奈』である。

「麗奈さんを戻せ。返してくれ！！ 麗奈さんをッ！！？」

風間はそう言ってワームとしての間宮に、人間としての間宮を返す様に言うが、相手はそれを聞き入れなかった。

「無駄だ。あの女の心は・・・完全に封じ込めた。」

「違う！？ じゃあ何故お前は歌い続けた？ 途中でワームになった筈なのに……」

間宮は熱の感じられない声でそう言ったが、風間にはそれが信じられなかった。

数分前、自身がワームになりきる事を確信した人間としての間宮は、公演が始まる前にステージに上がり風間が見ている前で歌い始めた。

その途中、人間としての意識が消え、ワームとしての意識に乗っ取られたところを風間は見ていたのだが、間宮はその後も歌を歌い続けたのだ。

風間はそれを見て確信した。間宮 麗奈は、人間としての心は間違いない無くウカワームに何かしらの影響を及ぼしている、と。

だからこそ風間はこうして必死に彼女に語りかける、自分の言葉が彼女に届くと信じて。

だがしかし、風間に背を向けていた間宮は何も言わずにワームの姿になると、彼に向けて右腕を振り下ろした。

「くっ!？」

幾度となく振り下ろされる腕を何とか回避しつつ受ける風間。だがウカワームは一切の躊躇を見せずに風間を攻撃し続け、次第に風間は追い詰められていってしまう。

「もう止めてくれ、帰ってくれ! 麗奈さん!？」

『無駄だと言っただろ。戦え! 風間 大介!!』

制止を訴える風間の言葉も、ウカワームは冷たく突き放す。そのままウカワームの腕が風間に向かって振り下ろされ――

「ハッ!」

『ッ?!』

――ようとした瞬間、横合いから突然ザビーが現れウカワームを殴り飛ばした。

「お、お前はッ!?!」

「言つたる? あたしの仕事は、間宮 麗奈の抹殺だって……キヤストオフ!」

《Cast off Change Wasp》

突然現れたザビーに風間が驚く中、彼女は淡々とした口調で彼に声をかけるとライダーフォームになってそのままウカワームと戦い始めた。

「フツ、ハツ!」

自身の得意なインファイトでの戦闘を仕掛けるザビー。それに対してウカワームも負けじと左手で牽制しつつ右腕による強烈な一撃を放つ。

「止める……止めるおッ!?!」

《Henshin》

近くでその戦いを見ていた風間は、耐えきれなくなつたのか叫びながらドレイクに変身。

《Cast off Change Dragonfly》

彼はそのままライダーフォームになって、ザビーに向かって拳を振り下ろす。

「止める、これ以上はもうッ!?!」

「邪魔するつもりなら……お前も倒す!」

ザビーはそう言ってドレイクに向かって拳を突き出すと同時に、ウカワームに向かって蹴りを放つ。

ザビーとウカワームが戦っていたその場所は、ザビー・ウカワーム・ドレイクが入り乱れる三つ巴の戦いに発展していった。

そんな時、戦いの場に天道が近付いてくる。

「無粋な奴だな・・・」

天道はそう言ってカプトゼクターを呼びだした。が、それは何処からか飛んで来たホッパーゼクターに弾き飛ばされる。

「ん？」

「邪魔はさせないぞ、天道 総司。」

ホッパーゼクターの飛んできた方を天道が見ると、そこには影山が立っていた。影山はカプトゼクターを弾き飛ばしたホッパーゼクターを手に取ると、腰のバツクルにセットする。

「変身！」

《Henshin Change Punch-Hopper》

「全く・・・変身！」

《Henshin》

影山がPホッパーに変身するのを見た天道は、やれやれと首を振りつつ自身もベルトにカプトゼクターをセットしマスクドフォームのカプトに変身した。

「ここから先には、進ませない！」

P ホッパーはそう言ってカブトに向かって殴りかかる。カブトは何とか紙一重で攻撃を弾いて回避するが、次々と襲いかかるP ホッパーの素早いパンチ次第に対抗しきれなくなって来た。

「ハアッ！」

「ぐっ・・・クッ。」

軽い跳躍から繰り出されたP ホッパー渾身の一撃を腕をクロスさせて何とかやり過ごしたカブトは、咄嗟にゼロ距離からのガンモードのカブトクナイガンの射撃で相手を引き剥がす。

「うわっ?!」

流石のP ホッパーもそれには対応しきれなかったのか射撃を喰らって数歩後ずさる。その間にカブトはゼクターの角を操作してライダーフォームになった。

「キャストオフ。」

《Cast off Change Beetle》

それまでの鈍重なマスクドフォームから格闘戦向きのライダーフォームになったカブトは、逆手に持ったクナイモードのカブトクナイガンを構える。

「俺を止める事が出来るのか？ お前に・・・」

「止めるだけなら・・・俺にだって出来るさ!」

そう言ってP ホッパーは再びカブトに立ち向かって行った。

一方、場面は再び三つ巴の戦いに戻すと、依然としてそこでは混沌とし戦いが続いていた。

ウカワームを倒そうとするザビー、そんなザビーとウカワームを止めようとするドレイク、二人のライダーと戦おうとするウカワーム。ザビーがウカワームに攻撃すればドレイクがその間に割って入り、ザビーがそれを振り払う間にウカワームが右腕による強烈な一撃を繰り出す。

そんな決着がつくかもわからない様な戦いを彼らは続けていた。

だがそれにも、遂に終わりの時がやってくる……

『ハッ!』

「グッ?!」

ウカワームの赤い電光を纏った一撃が一瞬の間隙をついてザビーを捉える。その攻撃を受けて吹き飛ばされたザビーが離れた所に打ち付けられた。すると突然聞こえてくる少女の悲鳴、ザビーがそちらを見るとそこには何故かゴンの姿が。

「なっ!? ゴン、お前なんで?!」

「だ、大介を捜しに来たら……」

驚愕に目を見開きながらザビーに返すゴン。その時、ウカワームが二人に向かって走り出した。

「ッ!? ゴン、逃げろ!!?」

「早くそれに気付いたドレイクがゴンに警告するが、時既に遅くウカワームはゴンとザビーの目の前に近付いていた。」

「グッ!? (やべえ、間に合わねえ!?)」

ザビーは体勢を立て直してウカワームを迎撃しようとするが、先程のダメージが大きいのか思うように体が動かない。目の前に近付いて来たウカワームは先程と同じように右手に赤い電光を纏わせて振りかぶっている。このまま振り下ろされれば間違い無くゴンも巻き添えになってしまうだろう、そうなれば生身のゴンなど一溜まりもない。

咄嗟に自分の身を盾にして庇おうとザビーがゴンに覆いかぶさるが

――

『グウウツ?!』

「ッ!? 何?」

直後、ウカワームの苦悶の叫びが聞こえてくる。何事かと背後を見れば白い炎を上げながら倒れるウカワームと、その背後でライダーシューティングの構えのドレイクの姿があった。

「はあ・・・はあ・・・」

彼は震える手で構えていたドレイクゼクターを下ろすと、変身を解除してウカワームに近付いていく。ウカワームは既に人間の姿に戻っていた。

「麗奈さん!?!」



元の姿に戻った風間は、急いで倒れた麗奈を抱き上げる。

「一方ザビーも変身を解除して、痛む体に鞭打ちながら立ち上がった。」

「はぁ……ゴン、怪我ないか？」

「う、うん。ありがとう……その……」

久賀達は溜め息を一つ吐くと、ゴンの無事を確かめる。

「ちよっと……向こうに行ってるか？」

「……うん。」

ゴンが無事である事を確認した久賀達は、彼女を連れてその場から離れようとする。ゴンは一瞬躊躇するも、風間の姿を見て何かを思ったのか素直に頷いてその場を離れていった。

残された風間は、ゆっくりと目を開けた間宮を見つめていた。

「……不思議だ。何故、私は……」

間宮は風間の頬に触れながら、不思議そうにかつ穏やかな顔でその口にする。それは甘んじて倒された自分に対してか、それとも風間に向けて穏やかな感情を向けているが故か……

「簡単な事さ。本当は、お前にも聞こえているからだろ。心の声が……麗奈さんの歌が。」

風間は微笑みながら、間宮に耳を済ませてみる様に言った。その言

葉に従って、目を閉じて耳を済ませた間宮は……

「……そう……だな。いい……歌だな、これは……」

穏やかな笑みを浮かべながらそう言って……力無く目を閉じていった。

「く……くっ!？」

命の灯火が消えた間宮の体を抱きしめながら、風間は涙を流す。

「麗奈さん……大好きでした……本当に……」

そう言つて風間は間宮 麗奈の遺体を抱きしめながら、涙を流し続けていたのだった。

その頃、その場から離れた久賀達はゴンとも別れて一人考え事をしていた。

(ワーム……今更だけど、あいつら一体何なんだ?)

久賀達は戦いの中で気付いていた。間宮は、ウカワームは最初から倒されるつもりでいた事に。

ついこの間まで人類に仇為そうとしていた筈の相手、だが先程の戦いではウカワームからは一切の殺意を感じ取れなかった。ゴンが巻き添えになりそうになった時には咄嗟に盾になろうとしていたが、今思えばあの時にも殺意は無かった気がする。

ワームは人類の敵……それは間違いない筈だ。だが、もしかしたらそう言ったワームは極一部で、本当はワームも平穩を望んでいるのではないかと考えてしまう。

「どうなんだろうな、そこんところ……うん？」

そんな事を考えていると、視線の先に天道が居るのが見えた。その方には一人の男性……影山が担がれている。

「よお、影山を可愛がってくれたみたいだな。」

久賀達は軽い怒気を纏いながらそう口にする。だが彼は特に気にした様子もなく、その場に影山を下した。どうやら天道に挑むも結局は負けてしまったらしい、だが当初の目的であった足止めは果たしたようだ。見事に足止めを果たして見せた影山に、久賀達は心の中で感謝の言葉を述べる。

「無粋な真似をしておいてよく言う。で、どうだったんだ？」

一方の天道は、涼しげな顔で戦いがどうなったのかを訊ねる。久賀達は影山を担ぎながら……

「……ケリは着けたよ、風間の奴がな。」

とだけ答えた。

天道はそれに『そうか』とだけ言うと、もう用は無いとばかりにその場から立ち去っていく。

残る久賀達も、一先ず影山を休ませようと考えて適当にベンチなど

がある場所に移動するのだった。

第49話 レクイエム・歌姫のオペラ（後編）（後書き）

と言う訳で、今回は前後編でお送りしました。

今回はかなり原作との乖離が多かったですね。矢車が間宮に恋したり振られたり（笑）と言った事がなかったり、最後の戦いなんて三つ巴でしたし。

流石に原作通りの展開をなぞっていくのでは面白みもないと思ったので、あえて原作とは違った進み方をさせてみました。まあ、結果自体は変わらなかった訳ですがね。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

10万PV記念番外編 知らぬは本人ばかりなり（前書き）

どうも、黒服です。

今回は番外編、PVアクセス10万、ユニークアクセス1万を超えた記念の話です。これほどまでに読んでいただき、感謝の言葉もありません。

本編とは全く関係の無い話ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

なお今回は完全な番外編ですが、一部のキャラに重度のキャラ崩壊が見られると思いますので、ご注意ください。

それではどうぞ。

## 10万PV記念番外編 知らぬは本人ばかりなり

「あれ？ 岬さん、何か落としましたよ。」

その日、加賀美は先輩である岬が何やら写真を落としたのに気が付いた。その時の彼は、特に何を思うでもなく普通に拾っていたのだが……

彼はその写真を見て表情を驚愕に変えた。

「ん？ こ、これっ!？」

「あっ?! ちよっ、加賀美君、それは!？」

写真を落とした本人である岬も、加賀美がその写真を拾った事に慌てて彼の手からひったくる様に写真を取り返すがもう遅い。加賀美はばっちりその写真に写っていたモノを見てしまっていた。

「岬さん、何で……」

加賀美が見たモノ、それは……

「何で……久賀達さんの写真を岬さんが持つてるんです？」

見紛う事なき久賀達の写真であった。それも見た感じただの写真ではない、訓練中に休憩している時の物だろうか、ボディアーマーを外して前を肌蹴させた姿の写真だ。やや汗を顔に浮かび上げながら飲み物を飲んでいる姿が、何処となく彼女の逞しさと美しさを表している。

「岬さん、何で久賀達さんの写真を持つてるんです？　しかもこれ、写真の感じからして盗撮ですよね？」

加賀美の言う通り、写真のアングルなどを考えるとこの写真は盗撮の可能性が多いに合った。もしかしたら久賀達の事だ、この様な写真を取られてもほったらかしにしていた可能性もある。しかし不自然に傾いたアングルである事を考えると、この写真は訓練中の彼女の際について撮影されたモノである可能性の方が高かった。

「えつとね、これは・・・その・・・」

加賀美の質問に、珍しく言い淀む岬。普段であればほぼ即答で答えが返ってくるだろう事を考えると、この事は彼女にとってもやや後ろめたいところがあるのだろう。

岬が何と言おうかあれこれ考えている時、何時の間にかやって来たのか田所が近付いて来て岬の手の中にあつた写真を取ってしまった。

「ッ！？　た、田所さん！！？」

「岬・・・コイツを何処で手に入れた？」

田所の声はドスが効いており、訊ねられている岬はおろか加賀美でさえも凶暴な肉食獣を目の前にしたかのような錯覚に陥ってしまう。

「その・・・ちょっと前に、いい写真があるから買わないかと言われて・・・」

そう言つて岬は事の顛末を口にしていった。

それを訊いた田所は・・・



「……全く情けない!!」

腰に手を当てながら大声でそう言った。

「す、すいません田所さん!? その、つい出来心で……」

「横流しをした奴が居るのか、それとも何も知らない奴の仕業か……いやこの場合は金に困った奴が横流ししたな。」

「へっ?」

田所の剣幕に思わず頭を下げてしまふ岬だったが、次いで彼の口から出てきた言葉に思わず加賀美共々魔の抜けた声を上げてしまった。一方の田所はそんな二人の様子などお構いなしに、今度は岬に向けて口を開く。

「岬も岬だ。何もそんな奴に頼らなくても良かっただろうが、もしかしたら掘り出し物もあるかもしれないし……」

「あの、田所さん?」

その後もいろいろと話を続けようとする田所に、加賀美がおずおずと口を開いて待ったをかけた。どうにも彼との会話に何処か噛み合わない物を感じてしまったのだ。

「一体何の話をしてるんです? 掘り出し物がどうだとか……」

「そんなのはお前……もしかしてお前達、知らないのか?」

田所の何処か信じられないと言った感じの言葉に、何を言っているのか分からない加賀美と岬は黙って頷いてしまう。すると田所はその場で大きな溜息をついた。

「お前達、ZECTに入っていないながら“アレ”の事を知らないなど潜りもいいとこだぞ。」

「田所さん、“アレ”って一体・・・何の事なんです？」

岬が恐る恐る田所に聞く。すると彼は少し間を置くと・・・

「“アレ”と言ったら・・・『久賀達ファンクラブ』の事に決まってるだろうが。」

そう言っただけだ。

その瞬間、加賀美と岬は世界が静止したような感覚に陥った。

「久賀達・・・」

「ファンクラブ？」

二人が訳が分からないと言った風な顔でそう口にする、田所は懐からカードの様な物を取り出す。

「言葉通り、久賀達のファンが集まってるいつの間にか出来たファンクラブだ。あいつもそれなりに人気があるのは知ってるだろう？」

田所の言葉に素直に頷く加賀美と岬。尤もこの場合は人気と言っよりも人望と言った方がどちらかと言えば正確かもしれない。

「このファンクラブは結構入ってる奴が居るんだぞ。かく言う俺もその一人だ。」

そう言っただけで田所が見せるのは、ファンクラブの会員証だった。しかも書かれている会員ナンバーは90番。

「ふ、二桁だ・・・」

「あの田所さん、ちなみにこのファンクラブって何人くらい居るんですか？」

「俺も正確な数を把握してる訳じゃないが、大体ZECTの半分は入ってるんじゃないか？」

ZECTと言う組織が総勢何人の組織なのかが具体的に分からない為加賀美達はあまりしっくりこなかったが、少なくともそれなりの人数が居る事は想像が付いた。この組織も決して小さくは無い、その半分と言う事はかなりの人数が想像できる。

一体どれ程の人がこのファンクラブに属しているのか、その事を想像して加賀美はしばし呆然としていたのだった。

#### ZECT本部・食堂

今の時間はちょうど昼頃、休憩時間に当たるこの時食堂には多くの職員が食事と休憩の為に食堂に来ていた。

その一角に、スーツを着た職員達とは別に戦闘用のスーツを着た者達が居る。ZECTの誇る戦闘部隊、その中でも精鋭と謳われるシヤドウだ。部隊識別のマーキングから見ると、彼らは第2番隊所属の者らしい。

そんな彼らは、談笑を楽しむ他の職員達とは違い肩を寄せ合って何やら怪しげな雰囲気醸し出していた。

「いいか、一斉にだぞ？」

「オーケー、今日は俺の一人勝ちだぜ。」  
「ほざいてる。いくぞ・・・」

そう言つて一斉に彼らがテーブルの上に出したのは・・・いずれもが久賀達の写真だった。

一つは昼間の公園らしき所のベンチに腰掛け、近寄ってくる子供を邪険にすることなく好きにさせている写真。

二つ目が口元に薄らと笑みを浮かべながらザビーゼクターと戯れている写真。

そして三つ目が、食後なのか頬にご飯粒を付けつつもそれに気付いていない様子で水を口に運んでいる写真である。

「どうだこの写真！　今回は俺の勝ちだろう！！」

「いゝや俺だね。見ろこの写真に写ってる隊長の顔、普段とは違った柔らかさが出てるじゃねえか。」

「お前ら分かつてねえよ。今回はどう考えても俺の勝ちだろう、この何処か親しみを感じるちょっとしたミスがイイに決まってる！」

どうやら彼らは己が持っている写真の良し悪しで賭けを行っているらしい。全員が自分の持っている写真に最大の魅力を感じているからか、決着が付く気配は一向にないのだが・・・

「お前らまだまだだな。」

「おつ、播磨？」

そんな時、彼らの下に播磨が近付いてくる。

「そんなちよつと隊長を注意深く見てれば垣間見れる様な写真なんざいくら競つても大して違いありやしねえよ。」  
「んだと？ だったらお前のはどうなんだよ？」

播磨の言葉が気に入らなかつたのか、賭けをしていた内の一人がそんな事を言ってくる。その言葉に彼は余裕の笑みを浮かべると、自信たっぷり1枚の写真をテーブルの上に出した。

「普段は絶対見れない隊長のレアな写真、つまりこいつにかなう奴はそうはねえぜ！」

「こ、これはっ！！？？」

驚愕する賭けをしていた男達、そんな彼らの視線の先にある播磨の出した写真は……

「へっへっへっ！ どうだこの隊長の強さと弱さを兼ね備えたかのような表情、こいつには敵わねえだろ！！」

何があつたのかは分からないが、痛みを堪えたかのような表情で涙目になりながら、上目使いに何者かを睨んでいる久賀達の写真だった。

上目遣いと言う女性が行えばそれだけでもかなりの威力があるその表情を、久賀達が涙目になりつつ行っている。普段決して部下の前で弱さを見せない様になっている久賀達を知っている彼らにその写真は、常日頃の彼女とのギャップが強烈なインパクトをもたらしていた。

それを見た瞬間、他の3人は全員その破壊力に負けて仰け反った後に頂垂れる。

「こ、こいつは反則だぜおい・・・」

「ま、負けた・・・」

「へっへっへっ、それじゃあ賭け金は俺がいただいて「おい！」」

意気揚々とその勝負に提示されていた賭け金に手を出そうとする播磨。その時突然後ろから声をかけられ、そちらを振り向くと・・・

「なぐにやってんだ、お前ら？」

「た、隊長?!」

手に資料などが入ったものだろうファイルをもった久賀達が立っていた。

突然の久賀達の登場にド肝を抜かれる播磨だが、幸いなことに彼が遮蔽物になってテーブルの上に置かれた写真は彼女に気づかれてはいない。その間に播磨はなんとかこの状況を打開しようと頭を回転させる。

「また何か変なコト考えてるんじゃないだろうな？」

「いや、別にそんなことは・・・なあ?・・・つて、あれ？」

久賀達からの探るような視線に、咄嗟に播磨は後ろにいた仲間相槌を求めながら振り返った。だが彼らはいつの間にかその場から姿を消し、あまつさえ播磨の持っていた物も含めた全ての写真を持ってその場からいなくなっていた。

「あつ!?!? あいつら俺の写真までツ!?!? 「写真?」 あつ、いやその、なんでもないですはい。」

「……………何でもいいが、あんまり変なコトばっか考えんなよ。」

やや不審な挙動を見せる播磨の様子をしばし見つめていた久賀達だが、少しして軽く肩をすくめるとちよつとした注意だけしてその場から立ち去っていった。

播磨は彼女の姿が見えなくなるまでその場で立ち尽くした後……

「くっそアイツら、俺の写真返しやがれッ!？」

持ち逃げされた写真を取り返すべく、急いでその場から立ち去っていくのだった。

#### ZECT本部・総帥室

ここはZECTの中でも最も高い権力を持った人物である、加賀美陸の総帥室。その室内では、部屋の主である陸が椅子に腰掛けてじっと目を瞑っていた。

陸はしばし瞑想するかのようじつとしていたが、何を思ったのか突然目を開けると机の引き出しから何かを取り出す。大きさからしてどつやら写真らしい。

数枚の写真が陸の手には握られており、それらを彼は満足そうに眺めている。

と、その時、何者かが部屋のドアをノックした。

「ッ!? 誰かな?」

『三島です。少々よろしいでしょうか?』

部屋のドアがノックされた瞬間、陸は素早く写真を引き出しのうちにしまい、同時にいつもと変わらない様子で部屋の外の人物に声をかけた。

「ああ、構わないよ。」

『失礼します。』

三島は陸の許可を得たことで室内に入り、2、3報告を済ませて資料を渡した後その場から立ち去っていった。

彼が出ていってからしばらくして、陸は軽いため息を突きながら再び写真を取り出す。

「危ない危ない。三島は彼女のことを毛嫌いしている節があるからね、あいつに見つかってたらどうなっていたことか・・・」

そう言いながら陸が眺める写真には、私服で街中を歩いている久賀達の姿が写っていた。彼はその写真を見て満足そうに、それでいてどこか昔を懐かしむような笑みを浮かべる。

「うむ、やはり彼女によく似ている。」

そんなことを呟きながら、陸はしばしその数枚の写真を眺めていた。

ZECT本部・特殊遊撃隊用オフィス



場所は変わって、今度は本部内にある織田率いる特殊遊撃隊用の逃えられたオフィス。

部隊としての自由度の高い彼らといえども、運用していくためには様々な書類を始末していかねばならない。その為には当然ながらミーティングルームを兼ねた専用のオフィスが必要であるため、彼らにもそれが設けられていた。とはいえ……

「お前らちったあ働け！？　つか織田も書類何とかしろ、隊長お前だろうが！！？」

久賀達の率いる部隊以上に荒くれ者が多いこの部隊、オフィスを書類整理に使用しているのはこの部隊を実質切り盛りしている北斗であり、他の者は織田を含めて休憩所程度にしか考えてはいなかった。流石に酒を飲むなどという輩はいなかったが、それでも室内にいる北斗以外の者のうちある者達はポーカーを、ある者達は数人で駄弁っていたりといった有様だ。

そんな彼らを見かねて、北斗はこれでもかと怒号を上げた。

「もうあらかた終わったじゃねえか、必要な書類全部書いただろ？」  
「まだ始末書があるつつの！　毎度のことだけとお前らもつと装備とか備品大事にしる！？」  
「備品つつたつてどうせいつかぶっ壊れるんだし、別に目くじらたてなくても「いい訳あるか！？　予算つつもんがあること考える！？」あゝ、つたく分かつたよ。」

北斗の怒号混じりの説教に観念して、渋々始末書に手をつけ始める織田。そんな彼の様子に北斗は大きいため息をついた。

今はこんなだが、織田はいざという時にはこれ以上無いほど頼りになる面を見せる。それは他の隊員も同様で、全員引き締めるべき時はちゃんと弁えて行動できるのだ。

だが一度スイッチが切れればこの有様。もつと普段からシャキッとしてくれないものかと北斗は願わずにはいられないのだった。

（あゝ、やべえモチベーション下がってきた……ここは一つ、ファンクラブの掲示板でも覗くとするか。）

もはや何度目になるかも分からないほどに繰り返してきたやり取りに、北斗は精神的な疲れで辟易してしまっていた。特に織田がヘラクスの資格者に選ばれてからは活動の機会が増えた為、それにともなつて部隊運用の上での面倒事も増えていた。思えばその頃から白髪の生え具合も増えていたかもしれない。

ダダ下がりになったテンションを持ち直すべく、北斗は書類を書く手を止め携帯で『久賀達ファンクラブ』のホームページの掲示板に繋いだ。掲示板には会員が目撃した普段の久賀達の何気ない行動から珍しい行動まで書きこまれている。

久賀達に対して強い憧れを持つ北斗にとって、そこは数少ない癒しの場となっていたのだった。

（さて、なにか新しいのは……と？）

何気なく北斗が掲示板の情報をチェックしていると、以前は見かけなかった書き込みがなされているのを発見した。

それを見た瞬間北斗は目を一瞬光らせ、即座にその書き込みを読み進める。

（何々、久賀達さんが子供たちの持つ募金箱に万札を何も言わずに突っ込んだ・・・か。）

内容としては特になんて事はない、額としては大きいほうだが募金に協力したというちょっといい話程度のもだった。

だが・・・

（久賀達さんが募金、か・・・きつと最初は何気なく通り過ぎるつもりだったんだろうけど、子供たちの必死な様子やふとした瞬間に浮かんだ母性とかに突き動かされて財布から万札を取り出して募金箱に突っ込んだんだろうなあ。）

久賀達に対して強い思いを抱いている北斗はそこからさらに妄想を膨らませていった。

（子供たちも久賀達さんの視線に最初はビクつくけど、思いがけず大金を入れてくれた久賀達さんに呆然としながらお礼を言って、それに照れた久賀達さんが薄らと顔を赤く染めて、それでもってそれを悟られまいと即座に顔を逸らしながらその場から離れていったり・・・）

なおも続く北斗の妄想、そして・・・

「修羅？ おゝい、ダイジョブか？」

彼女のそんな妄想は表情に分かるくらいにまでなっていた。具体的

に言えば、今の彼女の表情は頬が緩んで非常にだらしない笑みを浮かべている。俗に言えばトリップしている状態だ。

そしてそんな彼女の表情は、織田たちに不気味さを与えるには十分すぎる威力を持っていた。

「おいお前ら、ちょっと真面目に行くぞ。何かわかんねえけど修羅がヤベエ。」

織田はそう言っただけで馬鹿騒ぎをしている連中を黙らせ、他の隊員たちもそれに従った。

皮肉なことに、普段厳しい言葉を投げかける北斗が緩んだ瞬間今度は他の隊員を引き締めさせる結果になったのであった。

## ZECT支部

加賀美が今まで知らなかったZECT内部に存在するファンクラブに途方にくれていると、いつの間には田所が携帯を操作してファンクラブのホームページにアクセスしていた。

「見る、これがファンクラブの会員のみが入れるページだ。ここで写真の売買なんかも行っている。」

そう言っただけで田所が見せた携帯の画面には、なるほどたしかに何枚もの久賀達の写真が映しだされていた。その中には、明らかに彼女の自宅でしか見ることができないだろう姿までも映し出されている。

「あの、これ明らかに久賀達さんの家での様子ですよ？　こんな

のどつやって撮るんですか？」

加賀美の疑問に、田所は何処か遠くを眺めながら口を開く。

「最近になって、『ハニービー』なるものがファンクラブに加わってな。」

「『ハニービー？』」

田所の口から出た名前に、加賀美と岬は首を傾げる。

「そいつが入ってからというもの、久賀達の珍しい写真が多く入るようになったんだ。おかげでファンクラブも最近はよく賑わってなあ……」

「は、はあ……」

感慨深げに話す田所に、段々ついていけなくなった加賀美は生返事を返す。対する田所は、そんなことなど気にも止めずに言葉を続けた。

「ま、そういう訳だ。お前たちも入ろうって気になったんならいつでも言え。」

田所はそう言っつてその場から立ち去っていく。加賀美はそんな田所の背中を黙って見送り、岬はしばらくしてから徐に田所のあとに付いていった。何かを期待したかのような表情からファンクラブに入るつもりなのだろう。

そんな二人の様子に、これでいいのだろうかとか加賀美は考え込んだ。その時、何気なく下を向くとそこには名刺位の大きさのカードが落ちていた。場所的に考えて、岬が落としたものだろう。

「また岬さんかな？ 今度は一体、つて!？」

何気なく見つけたそのカードには、このように書かれていた。『田所ファンクラブ』……と。

「田所さんにも、ファンクラブあったんだ……」

驚愕の許容量を超えた加賀美は、今度こそ放心状態になってしまった。

加賀美は自分の知らないZECTの内情に、つくづく自分が下っ端なのだということを思い知らされた。決して知りたい内情でもなかったが。

同時に加賀美は思う。確かにZECTは命がけの職場である、非戦闘員であっても命を落とす可能性は低くはない。故に何かしらの潤いは必要なだろう。

だがそれにしただって、もうちょっと別な方面で潤いを求める方法はなかったのだろうか？ 加賀美は離れていく田所と岬の背中を見つめながら、そんなことを思うのだった。

???

どこかも分からない建物の中の一室。灯りも消された暗い室内で、一つだけ光を発するものがあった。

電源の入ったパソコン、その画面には久賀達の写真が映しだされて

おり、その画像からファンクラブのホームページであることが伺える。

そして、その暗い室内には動くものがあつた。画面の前を忙しなく飛び交う小さな物体、響き渡る羽音。室内を動きまわっているのは、ザビーゼクターであつた。

ザビーゼクターは腹部の先についた針で器用にキーボードを操作していき、画面に映し出された久賀達の写真をホームページ内の写真の売買を行うページに転送していった。ザビーゼクターが送った写真は、久賀達の寝顔から朝起きて寝ぼけ眼になった顔の写真、さらには銭湯で写したものだろっ浴衣に牛乳瓶を片手にもつた写真まで様々である。

そして、写真の出品者の欄にはこう書かれていた。

『ハニービー』・・・と。

そう、ここ最近加入して久賀達のレアな写真を流していたハニービーというのは、他の誰でもないザビーゼクターだったのである。

《——！——！！》

ザビーゼクターは写真を転送し終わると、次に掲示板を開いて会員たちの反応を見る。そこには大同小異で久賀達を慕う者達の言葉が書かれていた。

それに、ザビーゼクターは満足そうに羽を羽ばたかせる。

ザビーゼクターにとって、主人たる久賀達が慕われるのは何よりの

幸福であった。だからこそ、ザビーゼクターはこうして自身の主人の素晴らしさを広めるのに一役買う。

例え、その手段に若干何処か間違っているような部分があったとしても……



## 10万PV記念番外編 知らぬは本人ばかりなり（後書き）

という訳で、番外編でした。

今回はZECT内部に存在する非公式の久賀達ファンクラブに関する話です。非公式ですので、久賀達本人は全く知りません。

田所がファンクラブに加入しているのは、自分の教え子の活躍を守る教師のような心境から来るものだと思います。久賀達自身も彼のことは慕っていました。

陸の場合は、久賀達本人というよりも彼女の母親からの繋がりですね。

ちなみに播磨が持っている涙目で上目遣いをしている写真は、第47話で久賀達がハイパーカブトを蹴って文句をいうシーンのアレです。あの瞬間シャッターチャンスを見つけたザビーズクターが、保存しておいた久賀達の写真を流したものが播磨の手に渡ったわけです。

最後のほうで驚愕の田所ファンクラブの存在も暴露。もしかすると他にもファンクラブがあるかもしれません（笑）

本当にみなさんありがとうございました。これからも何卒よろしくお願ひします。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第50話 ZECTとネイティブ（前書き）

どうも、黒服です。

この物語もいよいよ佳境に突入しました。今回から強敵・カッシス  
ワームの登場です。

## 第50話 ZECTとネイティブ

とあるビルの上

その日、街中にあるビルの屋上に3人のゼクトルーパーの姿があった。黒いボディーアーマーの各所に金のラインが引かれ、その肩にはローマ数字の?に重なるようにZECTのロゴがペイントされている。

彼らは周囲を警戒しつつ屋上の端にたどり着くと、一人が持っている二つのアタッシュケースの内大きい方を開いた。中に入っているのは一発の砲弾、そしてそれにはこう書かれている。

『Anti Mimic Bomb』・・・と。

彼は砲弾のケースを開けると、続いて小さい方のケースを開ける。中に入っているのは水色の液体が入った三つのシリンダーだった。その内の一つを取り出すと、弾頭を取り外した砲弾の中にシリンダーを装填し再び弾頭を取り付ける。そしてその砲弾は、彼らが持ってきていたバズーカ砲に装填された。

「こちら、砲撃班。準備完了しました、隊長。」

『よし、作戦を開始する。砲撃開始!』

「了解。」

彼らの内周囲を警戒していた者が通信で合図を受け取ると、即座にバズーカを持っていた兵士にも合図が送られる。

それと同時に砲弾が市街上空に放たれ、何処に着弾することもなく

上空で爆発した。

砲弾が爆発すると、内部に装填されていたシリンダーの液体も空気中に散布される。それを吸い込んだ街の人々は突然の化学薬品に咳き込み始め……

その内の何人かは、人間とは異なる異形へと変わり果てた。

「う、うわあああああつ?!」

「きやあああああつ!?!」

突然近くにいた人間が怪物――サナギ体のワーム――になったことで人々はパニックに陥り、慌ててその場から逃げ出した。と同時に、逃げる人たちとは逆にその場に向かっていく者達がいる。Pホツパー率いるシャドウ第3番隊だ。

「攻撃開始! 怯んでる隙に集中砲火で仕留めろ!!」

彼の命令通り、ゼクトルーパー・シャドウ達はまともに状況判断も出来ていないサナギ体のワームに対して次々と集中砲火を加えていく。以下に頑強な表皮を持つワームとは言え、突然の奇襲、それも今までの戦闘データを解析して新たに作られた最新型の対ワーム用の徹甲弾を至近距離からまともに食らっては到底助からない。砲弾内に入っていた液体が散布された範囲内にいたワームは、全てシャドウ第3番隊によって駆逐されていったのだった。

そして――

「見る、こいつがアンチミミック弾の威力だ。」

ZECT本部内にあるシャドウ専用のオフィスの一画にて、大和がラップトップコンピュータで数日前に撮影されたその映像を流していた。

「おお、スゲーなこいつは。」

「確かに、これがあれば今後ワームとの戦いが有利になるかもしれない。」

そして画面の前には、ソファアに腰掛けた久賀達と矢車の姿があった。と言っても矢車はともかく久賀達はポップコーンとジュースを持っているため、完全に観戦している雰囲気だったが。

「お前は……とにかくこれでワーム共に対抗するための最終兵器ができたというわけだ。」

大和はそんな久賀達の様子に呆れつつも、今後の戦いへの意気込みを語っていく。

「ワームから擬態能力を奪う、か……こいつを使えばこれからは隠れたワーム共を全部燻り出して一気にいけそうだな。」

大和の言葉に、久賀達も空になったポップコーンの入れ物を潰しながら口にする。今までワームとの戦いで最大の問題だった『擬態したワームと人間の見極め』が容易になった。これからはZECTの総力を結集してのローラー作戦が展開されると彼女は思っていたのだ。

しかし、大和はそれに対して首を横に降った。

「残念だが、そうはいかないんだ。」

「はっ？」

「どういう事です？」

彼の様子に久賀達と矢車が訊ねると、彼は現在のアンチミミック弾の欠点を口にしていった。

「こいつは実験中に偶発的に出来たものらしくてな、おかげで効果時間があまり長くない。使うなら使うで、即効でカタをつけないと話にならない。」

「そんなの別にどうってこと」「もう一つ。」「、？」

「もう一つ問題があつてな、今言った通りこいつは偶然出来た代物だ。そんな訳で、数は全部で計三発しか無い。」

大和が口にした2番目の問題点に、流石の久賀達も顔を顰めた。たしかにそれっぽっちでは日本全国は愚か、東京中のワーム全てを殲滅することさえできはしない。しかも・・・

「影山がすでに一発使っているから、残りはたったの二発ということですか？」

「そういう事だ。技術部が今全力でこの問題を解消するためにアンチミミック弾の研究を行なっている。まだあまり進展はないみたいだが、まあ今後に期待だな。」

なんとも悠長な話しではあるが、物が偶然出来てしまったものに関するので仕方が無いのかと久賀達は無理やり納得する。いずれにせよコレをどの局面で使うかは今彼女の目の前にいる戦闘部隊統括である大和が、ひいてはその更に上にある上層部が決めることなのだ。彼女にどうこう言えるものではない。

彼女がそうしていると、徐に隣に座っていた矢車が席を立つ。

「それでは、俺はこれから任務があるので。」

「ああ、頼んだぞ。」

「何だ、早速アンチミミック弾の出番か？」

久賀達が首だけ矢車に向けてそう訊ねると、彼ではなく大和がそれに答えた。

「いや、間接的には関係あるがまだだ。矢車には田所チームと一緒にワーム掃討作戦を行う地域から一般人を退避させる。」

「ま、そういう訳だ。お前もだらけてないでいつでも出撃できるように準備しとけよ？」

「へいへい。」

#### ワーム掃討作戦実施区域

その日、とある運搬業者に成りすました田所チームの面々は、作戦地域から一般人を逃がす任務を遂行していた。

彼らが運転しているトラックのコンテナ部分には、貨物に隠れた人々が入っていたのだ。

しかし、トラックを運転している加賀美の顔は何処か納得がいかないといった様子だった。

「ワーム掃討作戦に備えて一般市民を避難させるのは分かりますけど、何でこの人達だけなんですか？ 矢車さんたちもいるのに？」

加賀美はそう言って、今の自分達の状態を思い返す。トラックのコンテナに入っているのは一般市民の中でもごく数名、しかもトラックから少し離れた後方にはゼクトルーパー運搬用の車両と、矢車の運転するマシンゼクトロンもある。この車両には一般人は乗っておらず、いつも通り兵士の運搬用として使用されていた。どうやら彼らはいつも通り戦闘のみを目的とされているらしい。

自分たちだけならともかく、矢車の部隊もいればそれなりの数の一般市民を避難させることが出来たはず。そう考えるとやはり加賀美は今回の作戦に首を傾げざるをえないのだった。

だがそれに対して、田所は一瞬迷うような素振りを見せた後知らないと言った。

「とにかく彼らを逃がす、それが本部の……」

田所がそこまで口にしたとき、出し抜後に後方から複数の銃声が響いてきた。何事かと田所がサイドミラーを見ると、そこにはトラックに張り付いたサナギ体の姿があった。

田所がその様子に驚愕していると、加賀美も後方を振り返る。すると加賀美の方にもサナギ体が張り付いている。

『田所さん、聞こえますか？　今ワームが貴方達の車両に取り付いています。両サイドだけじゃありません、上にもです！』

通信機からは切羽詰った様子の矢車の声と共に銃声が聞こえてくる。彼らがワームを引き剥がそうとしてくれているようだが、コンテナ内部に一般市民が乗っているため思うように攻撃できないでいた。



「くそ、これじゃ埒があかないな。変身！」

《Henshin Change Kick-Hopper》

そんな中、合を煮やした矢車がKホッパーに変身して一気にトラックの上部に飛び移った。

「フツ、セイツ！」

Kホッパーはトラックに取り付いたワームを次々と蹴り飛ばし、着実に脅威を取り除いていった。しかし・・・

「矢車さん！ 掴まってください!?!」

「何？ うわっ?!」

加賀美がそう言ったと同時に、Kホッパーは突然前方に投げ出された。どうやらワームの攻撃でトラックが障害物に突っ込んでしまい、その衝撃で投げ出されらしい。

Kホッパーは即座に体制を立てなおして再びワームに立ち向かっていく。トラックが停まったことで、ワーム達が餌に群がるアリのように集まってきたのだ。

彼が戦闘を始めると同時に、追いついた彼の部下たちも応戦している。無論その中には田所や加賀美の姿も。

「総員、ワーム共をトラックに近付けるな！」

Kホッパーが部下たちに檄を飛ばすが、もうすでにワームはトラックと接触できる距離まで近付いている。今さらそんなことを言ってももう手遅れだった。

隊員たちはワームに道を阻まれ、加賀美が変身したガタツクも抑えつけられている。そしてコンテナを守っていた田所達が退かされ、ワームがコンテナにはいった瞬間……

突然中からワームが弾きだされると同時に、コンテナから角付のワームが飛び出してきた。それも1体や2体どころではない数が。

「なっ?! どういう事だコレは!?!」

「俺達が運んでいたのは、ネイティブだったのか!?!」

Kホッパーは突然の事態に困惑し、ガタツクは自分たちが運んでいた者達の正体を知って驚愕した。

そんな中、角付のワーム……加賀美曰くネイティブ……達は田所やシャドウと戦うことはせず、それ処か彼らに助けを求めるように後ろに回りこんだ。

「こいつら……角付ってことは、前に久賀達が入ってた?」

「た、隊長!? 我々は、どうすれば?!」

Kホッパーが記憶の奥から彼らが何であるかを思い出しているとき、シャドウの隊員たちが焦った様子で指示を求めてきた。彼らにしても、トラックの中身は避難させるべき一般人であるという認識があったためにこの事態についていけなくなってしまったのだ。

シャドウの隊員たちは、見慣れたワームに攻撃を加えつつも新たに現れたネイティブ達に攻撃をするべきかどうか迷ったように銃口を右往左往させている。

「とにかく、攻撃はするな！　こちらに対して敵対行動は取っていない。角付に対しては攻撃するな！！」

Kホッパーは部下たちにそう指示を出した。事情はどうであれ、彼らが敵対するつもりがないことが明らかでしかも本部から守るように指示があったのだ。ならば、彼らシャドウのやることはたった一つ。

「総員、ワームを殲滅し角付を死守しろ！　いいか！？」  
『了解！』

やや強引な言い方ではあったが、彼の一言で部下たちは統制を取り戻していった。これで一先ずは安心だと、彼自身冷静さを取り戻した時……

『………、トップの息子………！？』

（ん？　なんだ？）

銃撃が響き渡るその場に、何者かが発した声が聞こえてきた。聞こえてきた方を見るとどうやら田所の近くにいるネイティブが発したらしい。

（トップの息子？　一体どういう……）

怒号と銃撃で完全に聞き取ることができなかったが、『トップの息子』という言葉だけは聞こえてきた。彼がそのことに疑問を抱いていると……

出し抜けに田所の後ろにいたネイティブ達が爆発した。

「ッ!?!? クロックアップ!」  
《Clock up》

それを見た瞬間、Kホッパーは一瞬驚愕した後即座にクロックアップした。状況的に見て、今の現象はクロックアップによる攻撃以外にありえない。

クロックアップして、複数の銃弾が空中に静止した空間に入り込んだKホッパー。そこで彼は、自分の目を疑う光景を目の当たりにした。

「な、何っ?!」

彼が見つめる先には、今まさに彼の部下が守っているネイティブに攻撃を仕掛けようとしている・・・

・・・一人の男の姿があった・・・

Kホッパーはその光景に啞然とするも、直ぐ様気を取り直して男の振り下ろしたステッキを蹴りで受け止めた。

「グッ?! (重い!?)」

「ほお・・・」

Kホッパーが攻撃を受け止めると、男は感嘆の声を漏らしつつその場から離れた。それと同時に二人のクロックアップは解除され、周囲の時間の動きも元に戻る。

「お前は・・・」

「フッ。」

Kホッパーの眩きに対して男は薄く笑うと何度かクロックアップで彼らを翻弄するような動きをし、最後にトラックの後方に複数の黒装束の女と共に姿を表した。

その男は黒いスーツに黒いステッキを持ち、スーツの上から黒いコートを着たメガネの男だった。道端で出逢えばどことなく怪しさを感じさせる格好だろう。フードを被ったあたりもそう感じさせた。

「ZECTの諸君・・・今度はアンチミミック弾などというつまりらない兵器を開発したそうだね？」

男はそう言いつつ近づいてくる。それと同時にガタックとKホッパー、そしてシャドウの隊員たちはいつでも攻撃できる体制をとった。このような事を言ってきたということは、この男は間違い無くワームが擬態したものだだろう。

「加賀美、一気に決めるぞ。」

「はい！」

Kホッパーはガタックと共に一直線に向かっていく。

「キャストオフ！」

《Cast off》

ガタックは走りながらキャストオフをし、それと同時に男も人間の姿からワームの姿になった。

(やはりワーム、それも今までに見たことのないタイプだな。)

駆けていきながら、Kホッパーは相手を観察していた。全身紫色の表皮、体の至る所には刺が生え頭部はどこか兜を思わせる。

(まずは軽く攻撃して出方を・・・)

Kホッパーが即興で作戦を立てていたその時、突然ワームの姿が掻き消えたかと思うと信じられないほどの衝撃が彼とガタツクに襲いかかった。

「ぐわあああああつ!?!」

「ガハツ?!」

恐らくはワームの攻撃によるものだろうが、今まで彼が感じたことのないほどの大きなダメージにガタツク共々吹き飛ばされそのまま変身が解除されてしまった。

(な、なんてパワーだ、まさか一撃で変身が解除されるとはな!?)

「隊長?!」

「撃て、撃てえ!?!」

ライダー二人が倒れたことに動揺したシャドウの隊員たちは、一斉にワームに攻撃を開始。しかしその銃弾は、全て何も無い空間を通り抜けただけで終わった。

「ッ!?! ぞ、何処に・・・」

突然敵がいなくなったことに周囲を慌てて見渡す矢車の部下達。だが、矢車には敵の位置が分かっていた。

「後ろだ!?!」

「え？」

矢車の言葉に一人が背後を振り返ると、そこには冷たい視線を向けたワームが擬態した男の姿があった。

「ヒツ?!」

「……フン。」

男の視線に彼らが萎縮すると、彼はつまらなそうに鼻を鳴らし、生き残ったネイティブ達と加賀美たちを一瞥してその場から立ち去っていった。

「あいつ……何で？」

「見逃してもらった、と見るべきだろう。その気になれば奴はこの場の全員を始末できた筈だ。」

恐らく興が削がれたか何かでこれ以上戦う気が失せたのだろう。その事に矢車は幸運を喜びつつ、相手から受けた屈辱に苦い顔をした。

「隊長、大丈夫ですか？」

「ああ……何とかな。状況の確認と、ケガ人の搬送を急いでくれ。」

「ハッ！」

地面に膝を付いたままの矢車を心配して部下の一人が彼に近づくと、彼は努めていつもと変わらない様子で指示を出しつつ加賀美に手を貸して立ち上がった。加賀美は矢車の助けを借りながら立ち上がると、真っ先に田所達の下へと向かう。そこには戦闘の最中怪我をして倒れていた岬の姿が。

加賀美は慌てて彼女を抱き起こし、同時に田所も心配した様子で近づいていく。だが、そんな彼に対して加賀美は懐疑的な目を向けた。

「田所さん、あんた一体何を知ってるんですか？」

「ッ!？」

「俺が……俺がZECTのトップの息子ってどついつ事です？」

「加賀美が……ZECTのトップの息子？」

加賀美から田所に対して行われる詰問。その内容は図らずも矢車の耳にも届いており、彼は知人の思わぬ秘密に驚愕の目を向ける。

その後も加賀美は次々と疑問を投げかけるのだが、田所はどれに対しても答えられずにいる。

そんな彼らを見かねてか、矢車がその場に近づいていった。

「気持ちは分かるが、落ち着け加賀美。」

「矢車さん？」

「お前の言いたいことも分かるが、今は……彼らを避難させ、ケガ人の治療をすることが第一だ。」

「……はい。」

矢車の言葉に加賀美は渋々頷き、岬を連れてそのままどこかへと歩いて行く。そして矢車は、一瞬田所に何事かを訊ねようかと考えるが、今の彼に訊いても何も得られることはないだろうと考えて部下と共に生き残ったネイティブの避難に取り掛かったのだった。



次の日、矢車は久賀達・影山と共にいつもの店に来ていた。そこで彼は食事を摂りつつ、先日あったことを二人に話していく。

「加賀美が？」

「矢車さん、それって本当ですか？」

明らかに疑った目をした久賀達と影山に対して、矢車は首を縦に振る事で答えた。

「少なくとも、田所さんはNOとは答えなかった。あの様子だと、どうも本当らしい。」

矢車はそう言いつつ、先日田所の様子を思い浮かべた。

沈黙は時として何よりも雄弁に物事を語る。田所がZECTのトップと加賀美の関係について何も知らないのであれば知らないと答えればいい。

だがあの場で田所は、険しい顔で黙りこくっただけだった。それはつまり、どういう繋がりからかは分からないが彼が加賀美と組織のトップとの関係を知っており、今の今までそれを黙っていたということを物語っていた。

「加賀美がZECTのトップのねえ……差し詰めあいつはあたしらにとって、御曹司ってところか？」

「そういう……事になりますか。」

久賀達がニヤけながら言うと、影山が若干顔を蒼褪めさせながらそう答えた。もし本当にそうだとすれば、彼もZECTにとっては重要人物のほずである。

今までなにか失礼なことはしなかっただろうか、そんなことを思い返してしまうあたり影山の生真面目さなどが伺えるかもしれない。

久賀達はそんな影山の表情をニヤニヤしながら眺め、矢車は彼女の様子に軽く溜息をつく。

「ま、別にいいんじゃないの？　なんていうか、今更って感じだし。」

一頻り顔を青くさせた影山の様子を見て楽しんだ後、唐突に久賀達が話題を変えた。

「それよりも、あたしはネイタイプとかいう連中のほうが気になるね。」

ネイタイプ・・・それは以前久賀達が護衛するように言われた立川と同じく角付のワームのことであり、矢車は彼らを守るように指示を受けていたのだ。少なくとも偶然で済ませられるようなことでは断じて無いだろう。

「角付のワーム、ネイタイプ・・・そしてZECTは彼らを守っている。」

「一体、ネイタイプって何者なんでしょう？」

矢車と影山は難しい顔になる。今までワームを倒すことを仕事としてきた彼らにとって、そのワームと非常に良く似た存在であるネイタイプを守るということはどうにも釈然としないものがあつたのだ。

「少なくとも、ワームとネイタイプは生物としては同じ存在だろう

な。どつちも人間に擬態するし。」

そんな二人とは対照的に、久賀達ははつきりと『ワーム』ネイティブである』と言い切ってみせた。恐らくそれは間違いではないだろう。彼らで違つところがあるとすれば、それは外見上見て分かる角の有無しかない。

「しかし、何故ワームはネイティブに攻撃を？」

「別に珍しいことじゃないだろ？ あたしら人間だつて長年お互いに戦つてきたんだ。ワームとネイティブだつて、もしかしたら日本人とアメリカ人程度の違いなのかもしれないぞ？」

それは確かにその通りである。人間だつてあまり他人のことを言えるほどお互い平和にやつてきた訳ではない。むしろ未だに大なり小なり争い合つているのが現状だ。

もつとも、他所の星にやつてきてその星の住人を巻き込んでまで争いあつというのは傍迷惑という外はないが。

「じゃあ、ZECTとネイティブの関係つて・・・」

「大方、ネイティブを守るのがZECTの本当の存在意義だったのかもしれないな。そうだとすれば昨日の任務も納得出来る。」

影山と矢車は、そう言つてある一つの結論にたどり着いた。それは現状用意できる材料からすれば、この上なく真実と言えるものだった。

そしてそんな二人を余所に、久賀達は左手のライダーブレスを一撫でする。

「このライダーシステム、どんな頭のいい奴が造ったのかと思っただけど・・・こいつもネイティブが造った物だったんだな。」

彼女が呟いたその言葉に、他の二人もハツとした顔になった。考えて見れば当然だが、マスクドライバーシステムに使われている技術はどれもオーバーテクノロジー過ぎる。装甲材ですら今の人類が手にしたことのないものなのだ。

「思えば、マスクドライバーシステムは人間を擬似的なワームにして対抗出来るようにするための物なのかもな。」

「はっ？」

矢車が無気なく呟いたその言葉に、今度は久賀達が首を傾げる。そんな彼女と同じく困惑した顔の影山に、矢車はどういう意味なのかを説明しだした。

「人間が、擬態するのに対して変身。脱皮して成虫体になるのに対して、キャストオフしてライダーフォームに。そして成虫体もライダーフォームも、クロックアップすることができる。」

矢車が次々と挙げていくワームとマスクドライバーシステムの共通点。言われてみれば確かに両者は非常に似通っている。その事実に加え、影山は戦慄した。

だが・・・

「へっ、上等だ。」

「・・・何？」

久賀達はその事実を知っても怯むことなく、むしろ好戦的とも言え

る顔でその事実を受け止めてみせた。

「こいつを造ったのが、ネイティブだったんならそれでも構わねえ。どの道あたしらのすることは変わらない。」

「でも、その……いいんですか？」

影山が恐る恐る訊ねると、久賀達は一気に顔から感情を無くして答える。

「どうせあたしは一度終わってるんだ。だったら、もう後はひたすら突き進むだけだよ。もつとも……」

久賀達はそこで一度言葉を区切ると、二人の顔を見てニヤリと笑う。

「連中がなにかおかしなことをすれば、あたしだって黙っちゃいな。せいぜい派手に暴れてやるさ。」

久賀達の言葉に影山はやや引きつった笑いを浮かべ、矢車は軽く笑いながらやれやれといった風に首を振った。

「お前は本当に……一つ言っておくが、黙ってないのはお前だけじゃないぞ。」

そう言つて矢車は笑い返して見せる。そんな彼の顔を見て、久賀達は何処か満足したような顔で頷くと席を立ち一足先に勘定を済ませていった。

矢車たちと別れた久賀達は、食後の散歩を兼ねて一人川の近くをぶらついていた。

先程は矢車たちに対して強気な発言をしてみせたが、実は彼女も内心でかなり困惑していたのだ。久賀達としても、少しは一人で今回のことに関してじっくり考えたいとも思っていた。

「加賀美がトップの息子……35年前の資料にガタツクの資格者として記されていた加賀美の名前……こいつは偶然か？　いくらなんでも流石に……」

久賀達がそんなことを考えながら歩いていると、不意に彼女の視線に廃車置場が見えてきた。見たところかなり錆びついた車まで置かれており、長い間放置されている様子が見て取れた。

彼女が何気なくその廃車に目をやっていると、その中に一つ奇妙なものを見つけた。何処か見慣れた白いスーツを着た、パツと見好青年に見える男性。

「あれって……神代か？」

近付いてみると、それは確かに神代 剣だった。廃車の一つの上に寝そべって何やらブツブツと呟いている。

（日向ぼっこ？　猫じゃあるまいし、いいとこの坊ちゃんがこんな所でんなことする訳ないか。）

日向ぼっこでないとするれば、彼はあんなところで何をしているのか？　それは彼の声が聞こえるくらい近づいた段階でようやく分かった。

「傷付き、捨てられたゴミの山……ブローケンハートの俺にぴったりだ。このまま錆びて朽ち果てよう。」

彼の口ぶりと言気から察するに、何かしらの理由で落ち込んでいるらしい。それにしたってたどり着いた場所が廃車置場というのはなんともおかしな話だが。

「よお、こんなところで何やってるんだ？」

「お前か……なんの用だ？」

久賀達は一先ず彼に話しかけてみることにしたが、返ってきたのは生気の抜けた気のない返事だった。彼女はそれにオイオイとなりつつも、もう少し話しかけてみる。

「一体何があった？　こんな所で腐ってるなんて、いつも前向きなお前らしくないな。」

神代にそう訊ねると、彼はなおもダラけた言気を放ちながら答えた。

曰く、加賀美と岬が付き合っていたと思ったらずでなくただの演技だった……

曰く、怪我をした岬を治療したが、何だかんだあって最終的に岬に嫌われてしまった……

とのこと。

それを聞いた久賀達は、いろいろと言いたいことがあったもののと

りあえずこの言葉を言うことにした。

「お前さ……アホだろ？」

女として羞恥心がどこか欠けている自分が言うのもなんだが、特に深い関わりがあるわけでもなく一緒のベッドで寝たり、何事も自分の価値観だけで考えるようでは同じ貴族が相手であればともかく岬のような一般市民では彼の考えについていけなくなる。

豆腐に砂糖をかけるのは……まあいいだろう。甘い豆腐というのも案外いけるかもしれない。

「だいたいお前岬のことミサキー又なんて呼んでるみたいだけどさ、呼ばれる側の気持ちも考えろよ。勝手に訳分かんない愛称つけられても迷惑だろうが。」

「フンッ、お前に失恋した男の気持ちなんて分かるわけがない。」

そんなこと別に分かりたくもない、そう久賀達が答えようとしたその時……

「いいじゃないですか、失恋で済んで。俺なんて……俺なんて……」

「うをつ？！ なんだお前風間か？」

突然背後からどんよりとした感じの音が聞こえてきて、流石の久賀達も驚いてその場から飛びのいた。急いで背後を見ると、そこにはここ最近目にしていなかった風間の姿が。

「何だお前は？」

「愛していた人が生きているならまだいい方ですよ。少なくとも、



見守り続けるという選択肢もあります。でも……麗奈さんともう……」

(ここにもいたよ、傷心男が……)

暗い雰囲気を放つ風間が現れたことで、あたりの空気は一気に重くなる。如何に久賀達と言えども、この空気には頭を抱えざるを得なかった。

「丁度いい、俺は八つ当たりにおいても頂点に立つ男だ。」

何が丁度いいのか分からないが、どうやら神代はこの場で久賀達らと戦う気満々らしい。彼女が頭をかかえている間に話が進んだようだが、失恋如きでサソードヤイバーを持ち出すのはどうなのだろうか。

「嫌な頂点だな、ったく。」

久賀達は渋々といった感じでザビーゼクターを呼び出し、風間もドレイクグリップを取り出していた。何だかんだでやる気らしい。まあ一人でウジウジしているよりは適度に動いてストレスを発散したほうが断然マシだろう。

(そっぴや何気にココにいるのって、全員第2世代のライダーシステムの資格者なんだよな。)

久賀達は頭の片隅でそんなことをボンヤリと考える。思えば最初にザビーゼクターと出会ってから、随分とライダーも増えたものである。

(あたし……何でこんなところで神代の八つ当たりに付き合

ってるんだろ?)

そんな今更な疑問を抱きつつ、久賀達はザビーに変身した。

(あつ、そういや今日エリアCでアンチミミック弾を使った作戦やるんだっけ？ 田所さんのチームが任務に当たってるって聞いたけど・・・)

サソードとドレイクに変身する神代と風間を見ながら、田所や加賀美達のことを考える。何事も起こっていなければいいのだが・・・と。

残念ながら彼女のそんな淡い願いは叶うことなく、事態はかなり深刻になるのだがその事を今の彼女が知るうはずがなかった。

## 第50話 ZECTとネイティブ（後書き）

という訳で第50話でした。

この作品では登場するライダーが原作よりも多いので、カッシステムの強さが原作以上になっています。第2形態なんてかなり苦戦するかもしれません。

矢車が口にした『マスクドライバーシステムは人間を擬似的なワームにする』というのは、ネット上の何処かで見かけた言葉です。何処で見たかは忘れましたが、なかなか言い得て妙だと思ってます。

傷心剣に近づいてきたのは、久賀達と風間。矢車達が地獄兄弟になつていない都合上ここで彼らを出す理由がなかったので、最近愛する女性を失った風間に来ていただきました。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

## 第51話 時間停止の脅威（前書き）

どうも、黒服です。

今回はいよいよカッシスワームと久賀達がついに激突。その勝負の行方は如何に？

ついでにいうと今回、かなり長くなってしまいました（汗）。ちょっと切り時に迷ってしまい・・・

何はともあれ、どうぞ。

## 第51話 時間停止の脅威

### 廃車置場

河川敷の廃車置場において、ザビー・ドレイクとサソードの3人のライダーの戦いが繰り広げられていた。と言っても……

「ハッ！」

「ぐう?! 貴様ツ！」

「うわっ!? このお！」

主にヒートアップしているのはドレイクとサソードのみで、ザビーは特にやる気もなかったので次第にただ観戦しているだけになっていった。

最初の内はそれでもザビーも何度かサソードに攻撃を仕掛けていたのだが、積極的に戦う気もなかった彼女は段々とサソードへの攻撃をやめていき、代わりにドレイクがサソードと積極的に戦いだした。

「貴様に分かるのか! ミサキー又にふられてブロークンしたこの俺の気持ちか!？」

「お前こそ、麗奈さんをこの手で殺めてしまったこの俺のなにが分かる!?!？」

しかも二人の会話を聞いてみると、どうにも不幸自慢をし合っているようにしか見えなかった。内容的にはそれなりにへビーな内容なのかもしれないが、事の起こりを最初から目撃し理解していたザビーにしてみれば下らない事この上ない。俄然やる気もなくなっていくというものだった。

そして・・・

「ライダースラッシュ！」

《Rider Slash》

「ライダーシューティング。」

《Rider Shooting》

サソードのライダースラッシュとドレイクのライダーシューティングが発動し、飛ぶ斬撃と強力なエネルギー弾がぶつかり合って二人を爆風が包み込んだ。

「うわあああああつ?!」

吹きつけてくる爆風にザビーが手を翳して顔を守っていると、不意にサソードの叫び声が聞こえてきた。手をどかして見てみると、サソードが飛ばされていきドレイクが地面に膝をついている様子が見取れる。どうやらドレイクの方が若干技の発動が早かったらしい、爆発がサソードよりの場所で起きたため強烈な爆風に吹き飛ばされてしまったようだ。

サソードが飛ばされていた先は積み重なった廃車の一つ、変身を解除されながら飛んでいったその先で、神代は窓から廃車の中に突っ込んでしまった。

「さ、最悪だ・・・」

失恋した上に八つ当たりをして振り返ちにあってしまったのだ。もう彼の精神は失意のどん底に堕ちてしまっていた。

「いい事だ。人間最悪の一つや二つ経験したほうが、豊かな人生経験積めるぞ。」

久賀達は窓から覗き込んで彼にそう言葉をかけた。風間はというと多少はすつきりとした顔で彼を捜しに来たゴンと共にその場から立ち去っていた。神代との戦いが良くも悪くも気分転換になったらしい。

代わりに神代はますます落ち込むことになってしまったのだが・・・

「とりあえずさ、これからはちゃんと岬の事を岬って呼ぶようにしてだな・・・」

久賀達が神代に岬との仲直りの仕方を教えようとするのだが、もう彼には彼女の言葉を聞くだけの余裕がなかった。

「もうダメだあつ!? もうミサキー又に合わせてる顔が無い〜  
〜ッ!?!?」

「つておい!? 聞けつて人の話、おい神代!」

久賀達の呼ぶ声も聞こえていないのか、泣きながらその場から走り去っていく神代。彼女はしばしそんな彼の背中を見送っていたのだが、いつまでもそうしていても仕方がないと自分もその場から立ち去ることにしたのだった。

翌日

久賀達は矢車・影山と共にエリアCに向かっていた。目的はエリア

Cの現状の確認。

先日のアンチミミック弾を使用した作戦はワーム側に筒抜けになっており、新たに現れた幹部クラスのワームの待ち伏せを受けて失敗してしまった。それ処かエリアCにいたネイティブ達がワームに捕らえられ、田所も奴らの人質になってしまったというのだ。

もつとも、田所に対して“人”質という言い方が当てはまるのかは少々疑問に思うところではあるが・・・

「聞いたか？ 田所さんがネイティブだったって話。」

「現地に向かっていた部隊から流れてきた噂だな。アンチミミック弾に反応して擬態が解けてしまったとか。」

「田所さん、ずっと俺たちを騙してたんですかね？」

田所がネイティブであった・・・その事実を知ったとき、久賀達は一瞬驚愕で頭の中が真っ白になった。彼女だけではない、矢車と影山もである。

この話を持ってきたのは大和なのだが、話す彼も半信半疑といった雰囲気だった。それだけこの事実は彼らにとって衝撃的だったのである。

田所がZECT本部とそれなりに関わりがあったこともあってか、久賀達も新兵時代は彼に世話になっていた。彼女たちにとっては恩師にも当たる。

影山はそんな田所がネイティブだったという話に、彼が自分たちを騙していたのかという疑念にかられてしまった。



「それは・・・」

そんな影山の言葉に、矢車はかけるべき言葉が見つからない。彼自身迷っていたからだ。

しかし久賀達だけは、そんな彼の言葉に控えめながらも否と答えた。

「あたしは・・・そうとは思わない。まあ、思いたくないだけかもしれないけど。」

「久賀達さん？」

「あの人が何を思ってZECTに参加して戦ったのかは分からない。単に同族を守りたかつただけなのか、それとも別の理由があるのかは分からない。でもま・・・」

久賀達は今までの間で田所に世話になった時のことを思い出しながら語っていく。

「どうにもあたしは、田所さんを疑おうって気にはなれないらしい。何でだろうな、やっぱり今まで受けてきた恩があるからかねえ？」

そう言いながら頭をかく。少なくとも今まで接してきた中で田所が自分たちに対して嘘を付いている風には見えなかった。加賀美たちに接している態度もだ。

「少なくともあの人は、どんな時でも部下を大事にしようとする行動してきた。加賀美が独断で本部に潜り込もうとした時も、責任を被るつもりだったらしいじゃないか。騙すつもりがあるなら、そんな事までするか？」

「それは、確かに・・・」

「・・・そうだな。バカを見たらその時はその時だ。せいぜい

キツイの一発、お見舞いするでしょう。」

久賀達の言葉に影山も納得し、矢車がそれに続く。彼の放った言葉に、久賀達も名案だと言つて笑みを浮かべた。

そんな話をしていると、ついにエリアCにたどり着く為の橋にやってきた。

此処から先はワームに占領されている、気を引き締めて行かねばと久賀達らが歩みを進めていたその時・・・

「困つた人達だ。」

「コッツ!?」「コッツ」

突然横合いから声をかけられた。咄嗟に声が聞こえてきた方を見ると、橋の途中にあるベンチに一人の男性がいた。

(こいつ・・・いつの間に?)

全く気配を感じなかった。一体いつからその場にいたのかは分からないが、矢車から聞いていた新たな幹部クラスのワームの特徴と合致するその男に、久賀達らは警戒心を顕にする。

「このエリアは我々ワームが・・・完全に制圧しているというのに。」

男は久賀達らの様子など歯牙にもかけずそう告げる。対する彼女たちは、なんとか落ち着きを取り戻して臨戦態勢に入る。相手はKホッパーとガタツクを一撃で破った相手なのだ、一瞬の油断が命取りになってしまう。

「お前か・・・噂の新しいワーム共のボスは。」  
「今度は負けない。二人とも、行くぞ。」

矢車の声と共に3人の手にそれぞれのゼクターが握られる。

《《Henshin》》

「変身！」

男が紫色のワームの姿になると同時に、3人もKホッパー・Pホッパー・ライダーフォームのザビーに変身する。

まず最初にザビーとPホッパーが跳びかかり、そのすぐ後にKホッパーが飛び蹴りを放った。だが相手は常識はずれの反射神経で彼らの攻撃をさばき、逆に右腕についたサーベル状の突起による斬撃と左手による殴打で反撃してきた。

「この、こいつ!？」

ザビーが素早いコンビネーションパンチによる攻撃を繰り返すが、ワームはすべての攻撃を右腕一本で受け止めてしまう。その間、PホッパーのラッシュとKホッパーのキックは左腕か足でさばいていた。

正直なところ、冗談にもほどがある。ウカワームの強さも大概だったが、このワームの強さはそれ以上だ。少なくとも常日頃訓練を積んだ3人を相手に一步も引かないどころか圧倒しているその強さは信じ難いものがあった。

『はぁあッー!』

「うわっ!?!」

「ぐっ?!」

「がっ!?!?!」

ワームの放った攻撃で、一斉に弾き飛ばされる3人。一方的すぎる戦いに、彼らの心に焦りが生まれ始めた。

「ヤバイな、こいつ尋常じゃないくらい強い。」

「俺達3人で、手も足も出ないなんて・・・」

相手の強さにザビーとPホッパーが脅威を感じていると、Kホッパーが二人にこの相手を倒す為の案を提示する。

「組んで掛かるぞ。俺と久賀達で相手の気を惹きつけるから、その間に影山があいつに何でもいいから一撃入れる。あいつが怯んだら、3方向から一斉に必殺技で仕留めるんだ。」

「よし・・・ノツた。」

二人がKホッパーの案に頷くと、即座に彼とザビーがワームに立ち向かっていった。

「ハアッ!」

「せやっ!」

ザビーの強烈な左ストレートとKホッパーの鋭いミドルキックがワームに放たれる。二人の攻撃をワームは先ほどと同じように防いでみせるが、彼らは微妙にタイミングをズラしたり合わせたりなどをして積極的に相手を翻弄しようとした。その甲斐あってか、ここに来てようやくワームの動きにも余裕がなくなってきた。

『クツ、案外やるようだな・・・だがっ!』

圧されつつも隙を伺っていたワームが二人の攻撃を弾いて反撃しようとした刹那・・・

「ハッ!」

『ッ!? くっ?!』

いつの間にか背後に回っていたPホッパーの放ったパンチがワームを捉えた。ギリギリで防御されたためダメージを与えるには至らないが、少なくとも相手を怯ませることは出来た。

「もらった!」

待ちに待ったそのタイミング、3人はすかさず自身の必殺技を放つ。

《Rider Kick》

《Rider Punch》

《Rider Stinging》

3方向からワームに襲いかかる3人の攻撃。彼らの攻撃がワームをに命中すると思われたその瞬間・・・

・・・世界が静止した・・・

ワームが左手を握った瞬間、3人は必殺技を放った状態で動きを止め、それだけでなく周囲のすべての物体が動きを止めた・・・  
・左手を握りしめたワーム以外は。

ワームは3人が止まった瞬間、攻撃の隙間を縫って悠々とその場か

ら離れていく。そしてある程度離れていったところで握っていた拳を開き……

世界は、再び動き出す。

「ッ!?!?」

その時、ザビーには何が起きたのか全く分からなかった。これで決まったと思ったその瞬間、目の前にいたはずのワームが忽然と姿を消したのだ。クロツクアップにしても消え方が唐突すぎる。

(って、ヤバッ!?)

瞬間、久賀達は今の状態で攻撃を放つたらどうなるかを考えてライダーステイングを放っている最中の左手を下げた。危機的状況において感覚が一気に研ぎ澄まされたことによる、電光石火の反射神経によるものだろう。そのおかげで少なくとも“彼女が”同士討ちをすることはなくなった。

だが、結果的に言えばこの判断は失敗だったかもしれない。何故ならザビーはともかく、空中にいる二人は攻撃を中断するところまで思考が回らなかったのだ。そして二人の攻撃はそのまま突き進んでいき……

「うああああああつ?!」

「久賀達(さん)ッ!?」

ザビーはライダーキックとライダーパンチをモロに喰らってしまった。ここでザビーが攻撃を中断していなければ、或いはお互いの攻撃でダメージが相殺されて被害も少なくて済んだかもしれない。だ

がそんなことを話してももう遅い、二人の攻撃で吹き飛ばされたがビーは変身が解除されてしまい、そのまま地面に叩き付けられてしまった。

「がつ!?　ぐ・・・あ・・・」

久賀達はボロボロの状態で地面に叩き付けられ、しばし呻き声を上げた後そのまま気を失ってしまった。気を失う直前彼女が目にした空は、嘗てのあの日を思い出させる憎たらしい程に快晴な空だった。

## ZECT本部

久賀達・矢車・影山の3人は新たな幹部クラスのワームに軽くあしらわれた後、久賀達を病院に搬送して本部に戻ってきていた。

幸いなことに久賀達は骨が折れたりなどはしていなかったものの、意識不明の重体で病院に運ばれていた。

「そうか、お前たち3人で掛かってもダメだったか。」

「はい。奴は今まで現れたワームとはレベルが違いすぎます、久賀達の怪我の原因の半分は俺と影山にもありますが・・・」

「いや、気にする必要はないだろう。今回の件はそのワームが全く予想し得なかった能力を持っていたことによるものだ。」

大和はそう言っただけで落ち込んだ様子の矢車を宥めた。

とはいえ当の矢車にしてみれば、事はそう簡単に割り切れるものではない。あの時久賀達はワームがいなくなったことに気付いて攻撃をキャンセルしていた。あそこで自分たちも攻撃を止めるなり逸ら

すなりしていれば、彼女があそこまでダメージを負うこともなかったのである。

それを思うと、矢車は彼女の足を引っ張ったと思わずにはいられなかった。

「それよりも、今は人質になった・・・ネイティブだったか？その救出の方が重要だ。」

苦虫を噛み潰したような顔の矢車を見て、大和は一先ず話題を変えることにした。何時までもその話をしていても仕方がないし、こちらの話も彼らにとっては重要だからだ。

「上層部はワームの要求を飲み、アンチミミック弾を人質と引換に渡すことに決定した。」

「いいんですか？ アレはワームとの戦いの切り札に・・・」

「上層部の決定だ、致し方無いだろう。どうせ残りは一発なんだ、使うに当たってアレ自体に攻撃力があるわけでもないことだし、使い時の難しさを考えればここで交渉に使うのも悪くはないだろう。」

「なお、この交渉には総帥の推薦で田所チームの加賀美が当たることになったらしい。」

それを聞いて矢車は一瞬彼が総帥の息子であることを思い出したが、それとこれの関連性が今一つハッキリしなかった為、今しがた思い出した内容を頭から早々に追い出すことにした。

「こちらが素直に交渉に応じたとして、ワームが素直に人質を解放するでしょうか？」



「難しいところだな。この手の腹芸は騙し騙されが基本だ、こちらがそう思っているように相手もそう思っただけなら策を練ってくるかもしれない。」

「何でしたら我々シャドウも・・・ん？」

矢車が大和に何事か発言しようとしたところで、シャドウのオフィスに何者かがいることに気付いて怪訝な顔をする。あそこを使用するのは基本的に隊長である彼らのみ、たまに副官がいたりすることもあるがそれでも利用者は非常に少ないのだ。

影山とはついさつき本部内で別れたが、彼が向かった先はオフィスとは真逆の方向だ。久賀達は病院にいるはずだし矢車であるはずもない。

となると、今あそこにいるのは誰なのか？

「一体・・・ツ！？ 久賀達?!」

「何っ!？」

室内を覗き込んで彼らは驚いた。そこにいたのは確かに久賀達本人だったのだ。

病院に運び込んだ時は未だ意識不明だった彼女、体のあちこちには治療のための絆創膏やガーゼが貼られており、左腕は肩からかけた布で吊るされている。

そんな満身創痍といった様子の久賀達は、現在自分の机に座りパソコンの画面を覗き込んでいた。

「お前、大丈夫なのか？」

「なに、コレくらい大したことないって。病院じゃ飯の量も制限されちまうし、骨が折れたわけじゃないなら別に此処に至って問題ないだろ。」

「そういう問題じゃ……はあ。ところでなにしてるんだ？」

あっけらかんとした様子の久賀達に、矢車は頭を押さえてため息を吐きながらパソコンの画面を見た。

そこに映っていたのは、先程の戦いの様子。画面の映り方から察するに、コレはどうやらザビーの視点から見た先ほどの戦いのようだ。

「こいつか、新手のワームってのは。」

「ああ、大した強さだったよ。おまけに訳分かんない能力持つてやるし。」

そう言っている間にも戦いは進んでいき、ついに最後の3人で必殺技を放った瞬間。

久賀達はそこで画像をスローにして徐々に動かしていく。3人のライダーの必殺技がゆっくりとワームに迫っていき、対するワームは徐々に左手を上げながら握っていった。そしてワームの左手が握られた直後、忽然とワームは姿を消す。

「消えた!？」

「そうです、コレが元で俺と影山の攻撃が久賀達に当たってしま……」

「ふむ……やっぱいきなり消えてるようにはしか見えないな。」

大和が驚き矢車が再び苦い顔をしている中、久賀達は再びワームが消える直前まで画像を戻した。今度はワームが手を握りしめる直前、

そこから先程よりもさらにゆっくりと画像を再生していく。

それを何度か繰り返した後、久賀達はこのワームの能力について大まかな予想を立て始めた。

「これを見る限り、このワームの能力は時間を停止させることだな。」

「時間の停止？ そんなことできるのか？」

「クロックアップのバージョンアップみたいなもんだろ。多分このワームだけが持つてる能力で、こいつで時間を止めてる間に攻撃の隙間を縫ってあたしらを同士討ちさせたんだろうな。」

タネが分かかってしまえばなんて事はないようだが、その内容はとんでもないものだ。

「時間を止める・・・とんでもないな。」

「時間を止めるっていうよりは、時間が止まってるほどの速さで動いてるって見るべきかもな。相手はワームだ。だったらワープとかそんなことを考えるよりも、クロックアップとかそっちの方を考えてみたほうがいいかもな。」

「ハイパークロックアップよりも早いのか？」

「さあ？ 流石にそこまではあたしにも分かんないよ。」

実は先日のアンチミミック弾を使用した作戦が失敗した日に、ハイパーカブトがハイパークロックアップを破られて敗北していたのがその事は報告が上がっていなかった。なので久賀達らは知らないことだった。

「なんにしても、時間を止めるなんてとんでもない奴だ。どうやってそんなの・・・」

「うんにゃ、戦うこと自体はなんとかなると思うんだよ。」  
「なに?」

どう考えても勝てなさそうな敵の能力に、矢車はらしくなく弱気な発言をする。だがそれとは対照的に、久賀達は割とどうにでもなると言いたげな表情をしていた。

「何か策でもあるのか?」

「策ってほどのもんじゃないけど、この能力にだって弱点はあるはずだ。」

「まあ確かに、何のリスクもなくこんな能力をパカパカ使えるのもおかしな話だ。案外一回の戦闘で使えるのは一回くらいなんじゃないか?」

大和の仮説はかなりの的を射ているかもしれない。もし多用できるのであれば、このワームは早々に時間を止めてザビー達を一方的に倒してしまえばいい。だが実際に能力を使ったのは、必殺技が使用された直後のギリギリの段階。

となると、この能力は一度使用したら次に使用するまで時間がかかると見たほうがいいのかもしれない。

「だが、そうだとしてどうやって戦うんだ?」

「あたしだったら・・・あえて必殺技を使って時間を止めさせてから、次にそれが使えるまでの間に手早く倒す・・・かな?」

それは謂わば肉を切らせて骨を断つ作戦だ。1対1での勝負となればまず相手は逃げることをせずに時間を止めた状態で攻撃してくるだろう。彼女はそれに耐えた上でこのワームを倒すと言っているのだ。

相手の強さを考えれば、あまり現実的とは言えない作戦かもしれない。

「もうちょつと他の奴にもできそうな作戦はないのか？」

「だったらあれだ。一人がこいつに時間を止めさせて、その直後に別の奴が改めてこいつに必殺技を喰らわせるとか。」

「……まあ、それが妥当なところか。」

二つ目の案はまだ現実的と言えるかもしれない。それでも多少のリスクは付いてくるが、今回の相手にこれ以上リスクの少ない方法が通用することは殆ど無いだろう。

いずれにしても、今は人質に取られているネイティブを救出するための交渉を成功させるほうが先決ではあるのだが……

とあるグラウンド

そこは多くの人々で賑わうグラウンド。今も休日を利用した親子だろうか、一人の男の子が少し離れたところに立っている男性とキャッチボールをしている。特におかしなところもない、平和な日常の風景だった。

そんな中、グラウンドの片隅で加賀美が憂鬱そうな表情で壁に向かってボールを投げては跳ね返ってきたボールをキャッチしていた。

「はあ……」

彼は内心で疲れ果てていた。短い間に大きな驚愕を2度も体験して

しまったのだ。

明かされた自身の父親の真の姿、そして田所の正体……

警視總監だと思っていた自分の父親がZECTのトップであり、その父親はネイティブに従う従順な存在。そしてあまつさえ、自分はその後を継ぐ存在だとまで言われた。生まれるよりも前から、運命を決定されていたと言いたげに……

田所の正体はネイティブだった。信頼できる上司だと、自分を信じてくれる上司だと思っていたのに、その正体はワームと非常に似通った姿を持つネイティブだったのだ。彼はその事実が大きく裏切られた気分だった。

「はぁ……」

加賀美はもう一度大きくため息をつくとき、自身の中に燻る憤りを吐き出すかのように力を込めてボールを投げた。

跳ね返ってきたボールを受け止めて再び投げようとしたとき、ふと彼の目にキャッチボールをしている親子の様子が入ってきた。

その時彼が思ったのは、自身の過去を想い懐かしむ感情か。

それとも、本来あるべき父と子の姿に対する羨ましさか。

しばしその様子を見つめた後、再び力を込めてボールを投げて……

いつの間にか現れた天道によって、そのボールは打ち返された。

自身に向かって打ち返されてくるボールを、加賀美は面食らいながらもキヤツチする。

「蓮華から聞いたぞ。何故父親の投げたボールを……息子の前が受け止めてやらない？」

ボールを受け止めた加賀美が呆然とした様子で天道を見ると、彼はややキツくした表情でそう言った。

加賀美は突然現れてそんなことを言ってくる天道に一瞬啞然としていたが、彼の言った言葉を完全に理解するとため息を吐きながらそれに答えた。

「あいつは、ネイティブに尻尾を振ってアンチミミック弾を渡そうとしてるんだぞ？……そんな奴の言うことが聞けるか！」

言うなり加賀美は天道に向かってボールを投げた。今度は打ち返したりせず、ボールを頭上に反射させて落ちてきたボールを天道はキヤツチする。

「……では何故その交渉役にお前を選んだ？」

ボールを見つめながら話す天道は、先日の陸との会話を思い返していた。

先日・ZECT本部・総帥室

「一つ聞きたい。ライダーに赤い靴を仕込んだのは誰だ？」

ZECTの中でも限られた人物しか入ることが許されないその室内で、天道は陸に背を向けながらそう訊ねる。背を向けているためその表情を窺い知ることはできないが、声の様子から察するに少なくとも怒りを覚えたりしているわけではないようだった。

「私は・・・惜しい友を失った。」

それに対して陸は、過去を悔やむかのように目を瞑りながらそう口にする。

「やはり俺の父親・・・日下部 総一か。」

半ば予想していただけに、天道は特に驚いた様子もなくそう口にする。しかし、陸から返ってきたのはやや予想外の答だった。

「計画を発案したのは彼だった。だが、実際に仕込んだのは・・・彼とは別の私の友だ。」

「なに？」

その答えは流石に予想外だったのか、思わず聞き返してしまう天道。

「もう一人の友の名は、久賀達 雪乃・・・実際に赤い靴を作り、ライダーに仕込んだのは彼女の方だよ。」

久賀達・・・その名前に天道は一人心当たりがあった。

「なるほど、あなたは俺の父親だけでなくあいつの母親とも繋がっていたわけだ。それで、あなたはその二人の意思を継いだ・・・と。」

「彼はまさに、天の道を往く人だった。彼がいなければ、私も雪乃



くんも赤い靴など考えもしなかっただろう。」

そう言った陸の表情には、心の底から天道の父・日下部 総一を尊敬しているのが手に取るように分かった。

「あんたもその道を往くというのなら・・・俺もあんたを信じよう。」

彼のその様子から信じるに価すると感じ取ったからか、天道は振り返りながら陸にそう告げた。

「私は・・・」

その言葉を聞いて、陸はようやく目を開いた。

「君に恨まれても仕方のない男だ。」

そう言いながら立ち上がる陸。そして真摯な表情で天道の方を見ると、懇願するかのように口を開いた。

「だが、私の息子だけは「大丈夫だ。」」

恨まないでほしい・・・そう陸が口にしようとしたところで、天道がその言葉を遮る。彼の顔は無表情だったが、怒りや恨みを押さえ込んでいるという様子でもなかった。

「俺は加賀美を恨んだりはいしない。」

それだけ言うと、天道は踵を返してその部屋から出ていくのだった。

グラウンド

天道はボールを見つめながらその時のことを思い返し、再び加賀美に視線を向けた。

「お前が行ってみすみす渡すと思うか？ お前をよく知る人物なら、そんな風には思わない。」

天道の言うことは尤もだ。加賀美自身、仮に自分が交渉に向かったとしてもワームの言うことを丸呑みにしたりはしないし、ワームの言いなりになるつもりもなかった。

「じゃあ・・・」

「父親の思い、お前が受け止めてやれ。」

そう言っただけで天道は加賀美に向かってボールを投げ、自分は手に持った豆腐の入ったボール・・・今夜は湯豆腐・・・を持ってその場から去っていった。

ZECT本部

「さっさと、これからどうしたもんかねえ・・・」

一方本部では、久賀達らが新たに出現したワームに対抗するための手段をあれこれと練っていた。

「とりあえず、お前は体を休めたほうがいいんじゃないのか？」

「変身はしないって。」

「変身以外もするな。」

久賀達を気遣う矢車が彼女とそんなやり取りをしている中、大和は新たに出現したワームを見て何事か考えていた。

「兜のような頭部・・・ふむ。」

「大和、なに一人で唸ってるんだ？」

「そうだな、こいつの名称はカッシスワームにしよう。」

「・・・は？」

不意に一人で考え事をしている彼に気付いた久賀達が話しかけると、大和は何かを思いついたような顔でそう言った。

久賀達はそれに一瞬首を傾げたが、それがなにを意味しているのかすぐに分かった。

「そいつの名前か、カッシス・・・カプトガニか？」

「ああ、見た感じこいつはモチーフがカプトガニのようだからな。」

ワームの名称は基本的に外見で決められる。

今回の場合だと、体の各所にある刺と兜を思わせる頭部が言葉のイメージとしてもカプトガニを連想させた。よく見てみれば右腕のサーベル状の突起もカプトガニの尻尾に見えなくもないし、腹部にはカプトガニの形をした甲羅が付いている。

新たに名付けられたワームの名称に久賀達なるほどと思いながら画面を見ていると、彼女の携帯に三島から連絡が入った。

『怪我をしたと聞いたが、出勤は出来るんだろうな？』

「指揮を採る分には問題ありません。流石に変身することはできませんが……」

「それで十分だ。今からお前の部隊はエリアCに向かい、そこで行われる交渉の結果を伝えろ。」

どうも聞くところによると、エリアCには本来ZECTが設置した監視カメラがあるらしいのだがそれらはワームによって全て破壊されてしまったらしい。それ故に交渉が成功したか否かを知るために、結果を見届ける者が必要なのだとか。

命令を久賀達が了解し早々に任務に向かおうとした矢先、彼女はあ  
ることを思いついて三島にあることを進言した。

「一つお願いしたいことがあるのですが……」  
「何だ？」

「いざという事態が起こった場合、こちらの判断で最後のアンチミ  
ミック弾を使用する許可を頂きたいのです。」

今回赴く場所は謂わばワームの巣窟のような場所。場合によっては  
ワームが擬態した人間が油断を誘うために近づいてくる可能性もある。そのような場合を考慮して、彼女は現場の判断でアンチミミック弾を使用できるようにしたかったのだ。

「……いいだろう、好きにしろ。」

三島はしばし考え込んだように間を置くと、二つ返事で許可を与えた。あまり渋る様子を見せなかったのは、彼自身偶発的に出来た兵器であるアンチミミック弾にあまり価値を見出していないからだろうか。

「久賀達、本当に大丈夫か？」

命令を受けて早速部下と共に向かおうとする久賀達の背に、心配する矢車の声がかげられた。

「お前は怪我してるんだし、無理に行くこともないだろう？ なんだったら俺が「矢車。」な、何だ？」

「気持ちは嬉しいが、こう見えてあたしは仕事熱心な方なんので、できる範囲内でやれと言われたら、他人任せにはできない性格なさ。」

対する久賀達は、矢車の申し出を断った。

「しかし・・・」

「大丈夫だって、心配性だな。今回はそんなまずい任務じゃないよ。」

なおも矢車は渋っていたが、久賀達は一向に引く気を見せない。そんな中、二人のやりとりを見ていた大和が肩を竦めながら二人の間に割って入った。

「お前は相変わらずだな。」

「自分をキープ出来るのはいいことだろ。」

「全く・・・無茶だけはするなよ？」

「了解、大和統括殿。」

久賀達の言葉に大和は苦笑し、やれやれと思いながらも彼女を送り出していった。

そして久賀達は、今度こそ任務に赴くためにその場から立ち去って

いった。

エリアC

「エリア内はワームだらけだ、危険過ぎる！」

「これまで、危険じゃなかったことなんて一度もないわ。」

久賀達の部隊がエリアCに赴くと、そこでは情報通り交渉に向かった加賀美が同じチームの岬・蓮華の二人と話をしていた。遠目に聞こえる会話から察するに、人質となった田所を救うためにやってきた二人を加賀美が止めようとしているらしい。

しかしそれはどうも無駄になりそうだ。岬達の決意も堅い、田所のチームはこれまでもリーダーの田所を含めて危険な目に会ってきた。何の因果か、彼らのチームは特にワームとの遭遇が激しかったのだ。

その修羅場を何度も潜ったことが、彼らの間に強い絆を作る結果となったのだろう。

一瞬久賀達は田所がネイティブであったことを思い返すが、加賀美を含めてどうやら多少なりとも吹っ切れたようだ。

「さて、あたしらも早速お仕事といくか。播磨。」

「了解、フライドローンを起動します。」

ある程度彼らの様子を見ていた久賀達だが、ある程度話がまとまってきたらしいことを見て取ると彼女たちも早速行動を開始する。

近くに控えていた播磨に合図を送ると、彼は手に持っていたラップトップパソコンのキーボードを入力していった。すると、彼らの下からかなり簡素な出来の機械的な羽虫が飛んでいった。

これは今回の任務に当たって技術部から送られてきた新機材である『フライドローン』と言われるものだ。マスクドライバーシステムの技術を応用して作られた小型の偵察機であり、戦闘力は皆無だが狭い隙間などから建物内に侵入したりして敵の情報をいち早く察知することを目的として作られている。

ゼクターのデータを基にして作られているため流石に完成度は高く今はまだ有効範囲が狭いものの遠隔操作と無線による情報の発信により敵側の細かな情報まで探ることができる。

現在はエリアC-3内にある建物の一つに入り込み、加賀美達の交渉の様子を監視していた。

「さて、加賀美達はうまくやってくれるか・・・」

交渉が失敗した場合、このエリアは空爆で吹き飛ばされてしまう。交渉の様子は三島の下にも送られているので、そうなれば同じエリア内にいる自分たちも木っ端微塵だ。

久賀達が固唾を飲んで見守っていると、田所達が動き出すと同時に加賀美達ワームの男に近づいていった。今のところは問題ないようだが、果たして・・・

「いよいよアンチミミック弾の引渡し・・・ん？」

最後の人質である田所が解放され、加賀美がワームが擬態したと思

われる女にシリンドーの入ったケースを渡した。女は何処か嫌味な笑みを浮かべて踵を返したのだが、どうにも様子がおかしい。画面をのぞき見ていた久賀達がよく目を凝らしていると、シリンドーの入ったケースが何かに引つ張られている。女もそれに気付いてケースをよく見てみると、透明なワイヤーの様なものが巻きつけられているのに気がついた。

「なるほど・・・」

久賀達がそうほくそ笑んでいる中、画面の中では蓮華が手を引くとケースが彼女の方に向かって引き寄せられていく。それと同時に加賀美がガタツクに変身した。

「考えたもんだ。これなら人質もアンチミミック弾もこつちのものだ。」

「隊長、どうします?」

「決まってるだろ、脱出の支援だよ。あいつらだって、いつまでも出し抜かれたままで居るはずがない。」

そう言うと久賀達らは車に乗り込んで加賀美が乗ってきていたトラックの方へ向かっていく。

途中久賀達が再びラップトップを覗き込むと、そこではガタツクがカッシスワーム相手に苦戦している様子が映し出されていた。

本当であれば久賀達も彼を助けに行きたいが、生憎と今は変身できないような状態ではない。やむを得ぬ事情があるとは分かっているが、悔しさを感じずにはいられなかった。

そうこうしている内に、彼女たちはトラックが止めてある所に近づ



いた。そこではすでに救出した人質を岬と蓮華がトラックに乗せていた。

「岬！」

「えっ？ 久賀達さん！？」

久賀達が声をかけると、岬はまさかの彼女の登場に驚いていた。

「ど、どうしてここに？」

「交渉がうまくいったかどうかの監視だよ。それより加賀美はともかく田所さんはどうした？」

カッシスワームと戦っている加賀美はともかく、救出された人質の一人である田所の姿が見えないことに久賀達は首を傾げた。

岬にその事を訊ねると、彼はどうやらガタツクのいる方に向かったらしい。

「分かった。あたしは田所さん達の所に行くから、お前らは人質連れてさっさと逃げろ。」

「でも久賀達さん、その怪我・・・」

「大丈夫だよ、加賀美達連れて逃げるだけだから。」

それだけ言うと、久賀達は播磨と檜和田と共に乗ってきた車の一つで田所達の下へ向かっていった。

それから少しして、フライドローンの反応がある方に向かっていくとそこでは地面に倒れた加賀美とカッシスワームに挑んでいる田所の姿があった。

「やべ、田所さんを援護だ！」

久賀達はそう言ってゼクトガンの引き金を引き、播磨たちもマシンガンブレードで銃撃を開始した。田所に近づきつつあったカッシスワームはその攻撃に一瞬動きを止めたが、すぐに何事もなかったかのように田所に近づいていく。

「チツ!? やっぱ成虫体相手にこれじゃあキツイか・・・」

しかも今度は田所とワームが取っ組み合いになってしまった。これでは下手をすると田所に攻撃があたってしまうため、迂闊に攻撃ができない。

どうすればいい・・・そう久賀達が悩みだしたその時、この場に誰かが近づいてくるのが見えた。

「あれは・・・天道？」

彼女の言う通り、天道が何をしに来たのか手にボウルを持ってこの場に近づいてきたのだ。

久賀達の視線があらぬ方に向いていることに気付いた加賀美が同じ方向を見て、彼も天道の存在に気がついた。

「天道・・・お前も来てくれたのか？」

「俺は・・・豆腐を買いに来ただけだ。」

加賀美の言葉に、天道は手に持っていたボウルを加賀美に向かって放りながらそう答える。そこでようやくカッシスワームも天道の方

に視線を向けた。

「滑稽だねえ、態々負けるために来るとは。」

「そう言えば、お前にも借りがあったな。」

どうやら両者の会話から察するに、天道はカッシスワームと一度戦ったことがあるらしい。そして彼の口ぶりから、その時は天道の敗北で終わったことも分かった。

天道も負けるような相手であるカッシスワームの存在に久賀達は背筋に冷たい物を感じたが、今この瞬間何をすべきか考えて急いで田所のもとに向かう。

「田所さん、大丈夫ですか？」

「久賀達？ お前の方こそ……」

「これくらい大したことはありません。ここは一先ず天道に任せてさっさと逃げましょう。」

久賀達は田所に手を貸して立ち上がらせると、彼を促しながらそう言った。

一瞬この場を天道に任せることに言いよのない感覚を覚えたが、この場で唯一カッシスワームと戦えるのが彼一人であることを考えてこの場は素直に引き下がることにした。一度は遅れをとつたらしいが、彼のことだ。そうそう何度も無様を晒すような真似はしないだろう。

久賀達は天道のことを気に入っただけではいなかったが、同時に彼が非常に優れた人物であることを認めてもいた。

途中田所が加賀美に手をさし出して、加賀美がその手をとって立ち上がると、久賀達らは即座に車に乗ってその場から去っていく。時間的に考えればすでに人質は全員トラックに乗せ終わり、今はエリアからの脱出を行っているはずだ。

来た道に戻って行くと、案の定トラックはすでに発車した後で少し離れた場所を久賀達のチームの車両と共に走っているのが見えた。彼女たちが乗っている車もそれに追いつくべくスピードを上げていくと、彼らの視界にあるものが写った。

「あれは・・・」

それは道を塞ぐように走ってくる多くの人々の姿だった。いつもなら即座に助けるが、この時ばかりは躊躇してしまう。ここはすでにワームが蔓延る地なのだ、確実にあの中にはワームが紛れ込んでいる。

「くそ、どうすれば「加賀美！」」

人とワームを必死に見分けようとする加賀美に向かって、久賀達が声をかけた。

「アンチミミック弾を使え、もう許可はとってある。」

「い、いいんですか!? 最後の一発ですよ!!!」

「どうせ大したことには使えやしないんだ。ならその一発、この場で使っちゃまえ!」

久賀達の言葉に加賀美は頷くと、車がトラックに近づいたタイミングで彼は蓮華にからアンチミミック弾を受け取った。

それを前方に向かって勢い良く投げると、地面に落ちて破裂したシリンドーから液体が飛び散りそれを吸い込んだ人々は咳き込み殆どの人がワームの姿になった。

ただし、最前列を走っていた3人の男女だけは咳き込んでいるだけで姿は変わらない。

播磨が車を止めると、加賀美は即座に車から降りて姿が変わらなかつた人をトラックに乗せていく。

「戸高！ やれえっ！！？」

「了解！」

同時に久賀達が部下に向かってワームを攻撃するよう命令した。

たちまちワームに向かって放たれる銃声。トラックもワームに向かって走りだしていき、トラックの突進とシャドウの銃撃で道を塞いでいたワーム達は次々と爆散していった。

それからしばらくして、エリアCから抜けだすと加賀美は三島に携帯で人質の救出と爆撃の中止を報告した。一先ずこれで一件落着だろつ。

「加賀美・・・なんで助けに来てくれた？」

ある程度安全になったあたりで、田所は加賀美にそう尋ねた。車内には田所と加賀美以外に久賀達らもいたのだが、彼女たちは努めて聞こえないふりをしている。

「田所さんが言ってくれたじゃないですか。正しいと思っただけです。すら前へ突っ走れ……それが俺だつて。」

そう言つて加賀美は薄らと笑い、田所もそれを見て何処かホツとしたよふな顔になるのだった。

### 夜・久賀達の自宅

「さて、出来たぞ。」

その日の夜、久賀達の自宅には矢車がやって来ていた。

最初久賀達はなぜ彼が来たのかと思つたが、どうやら片腕が使えない彼女のために態々料理を作りに来てくれたらしい。

正直な話、久賀達自身片腕では料理も何もなかった。この日は適当におにぎりでも買って済ませてしまおうと思つていたが、彼が来てくれた時は内心でかなり喜んだ。

「豆腐を使った五目スープだ。こういう寒い日にはこいつに限る。」

そう言つて井に波々と盛られたスープを矢車が差し出すと、久賀達は早速それにむしゃぶりついた。

流石は矢車の作った料理だ、文句なしに美味しいし体も暖まる。豆腐も彼が選んだだけあつて絶品だ。

「助かつたよ矢車。数日で治るって言われてたけど、さすがに片腕は辛いなやっぱ。」

「気にするな、長い付き合いだ。そう言えば、あのワームはどうなつたんだ？」

しばらくツープに舌鼓を打っていた久賀達が矢車に軽く礼を述べると、彼は手を軽く振りながらふと思いついたようにワームのことを口にした。

「ああ、あいつなら天道に倒されたらしい。」

彼の言葉に久賀達がそう答えると、彼女は事の経緯を矢車に話していった。

「なるほど、ハイパーシューティング……そんな技もあったのか。」

「実際あいつには有効だったらしいな。大和が睨んだ通り、時間停止は連続じゃ使えないらしい。」

天道が行った作戦は、誘導性を持ったハイパーシューティングによる不意打ちだった。時間停止でハイパーカブトの技を避けたと思つて油断したカツシスワームはこの技でダメージを受け、さらに止めのマキシマムハイパーサイクロンで倒されたらしい。

「脅威がなくなったのは喜ばしいことだが、雪辱が果たせなくなったのは悔しいな。」

「ま、その気を落とすなって。その雪辱とやらはまた新しく幹部クルスのワームが出たらそいつにぶつけてやれ。それより、お代わり。」

「

そう言つて久賀達は空になった器を矢車に差し出す。あつという間に平らげてしまった彼女に、彼は苦笑しつつも予め多めに作ってお

いたスープを器に盛っていった。



## 第51話 時間停止の脅威（後書き）

という訳で、第51話でした。

前書きでも書きましたが今回は長いです。今までの話の中で一番長いかもしれない、文字数一万超えて・・・もうちょっと短くまとめられたら良かったんですけども（^^;）

久賀達は第1形態のカッシスワームに事実上敗北です。まあ時間を止めるとかそんな事やられたら普通は勝てませんよね。

次はカッシスワームの第2形態の登場と、ワームに大攻勢が始まるわけですけども・・・その前にちょっとひと騒動起きる予定です。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第52話 久賀達大混乱（前書き）

どうも、黒服です。

今回は本編からちょっと離れたオリジナルの話です。一部を除いて全体的にギャグパートチックなノリになってると思います（笑）。

## 第52話 久賀達大混乱

その日、ZECT本部内の廊下を久賀達は信じられないといった顔で歩いていった。

（あり得ない。ある筈がない、絶対無い！）

こんなことをもう何度思っただろうか。本部に着くまでの道程と着いてから今までずっと同じことを考えていた。

だが、何度考えても先程見た光景が忘れられない。瞼の裏に鮮明に刻まれたその光景は未だに彼女の脳裏に思い出され、その度に久賀達は言い知れぬ悪寒に襲われていた。

（だって……だって天道があんな事……）

彼女は一体何を見たのか。それは数分前に遡る……

### 数分前・公園

久賀達が本部の廊下を歩く数分前、彼女は本部に向かう近道をするために公園を横切っていた。別段遅刻しそうとか言うわけではないのだが、たまには何時もより早くに仕事場に着くのも悪くはないかという考えから来た殊勝な心かげである。

いつもの如くその手には行きがけに買ったサンドイッチを持ち、時たま口に運びながら黙々と本部への道を歩いている。と、その時……

「ん？ あれって・・・天道か？」

久賀達の目に、芝生の上に寝転んだ天道の姿が写った。平日の朝っぱらから随分と呑気なものだと、久賀達は呆れながらその近くを通り抜けようとする。

だがそこで、彼女はあり得ないものを見た。

「わあ〜、フフツ。」

「・・・えっ？」

パツと聞いた感じ、女性か幼い子供が上げるような笑い声。それがあろうことか天道の方から聞こえてきた。その瞬間久賀達はサンドイッチを口に運ぼうとしていた手を止め、寝転がっている天道を凝視する。

（天道・・・だよな？ 今のって、こいつ？）

そこまで考えて、久賀達はあり得ないと首を振った。いくら個性の強い天道といえども、流石に子どもが上げるような笑い声を出すはずがない。そう考えていたのだ。

大方何処か遠くで笑った子供か何かの笑い声が、風に乗って聞こえてきたのだろう。そう考えて自分を納得させる久賀達。

だが・・・

「はあ〜、へへへっ。」

「ツ！?!?!?!」

再度聞こえてきた笑い声。久賀達がそちらを見ると、そこでは天道が俯せになって撫でるように花に触れている。

普段の天道なら決してやらない仕草、間違い無く聞こえてきた無邪気な子供のよらかな笑い声。朝早くということもあって周囲には久賀達と天道以外誰もおらず、否が応にも目の前の出来事が間違いではなく現実であるということ物語っていた。

それを確信したとき、力の抜けた久賀達の手から食べかけのサンドイッチが音もなく落ちていったのだった。

#### ZECT本部

時間は戻って、本部内を歩いている久賀達。そんな事があつた為に、彼女は半ば放心状態で公園からここまで歩いてきていた。

（あれって天道？ いやまさかそんな筈が・・・もしかしてワーム？ いや、擬態だったら性格まで同じになるはずだからそれはない。じゃあ、あれってやっぱり本物？ 無い！ それは天地がひっくり返つてもない！？）

あれからずっと考え込んでいた久賀達だが、未だに先程見た天道の行動に関する事が理解出来ていなかった。

ワームということはまず無いだろう。少なくとも、彼女が知る中で擬態の元となった人物と人格の異なるワームというのは存在しない。

だが、あの超が付くほどの俺様な性格の天道があのような子どもじ

みたことをすると考えられない。

( 待て待て、落ち着けあたし。まずこういう時は冷静になるんだ。冷静になるには、えっと……。そうだ！ 素数を数えればいいんだ。えっと、素数素数……。素数ってなんだっけ？ ヤバい！？ マジで落ち着けあたし！！？ )

必死になって混乱する頭を落ち着けようとするが、それが逆に冷静さを奪ってドツポにはまっていく。

( えく、えくくっつと……。こうなったら！ )

混乱する頭で必死に考え、微かに残った冷静な部分を総動員してこの状況を何とかしようとする久賀達。最終的に何かを思いついたのか、久賀達は一目散にある場所へと向かっていった。

本部内・シャドウ専用オフィス

「なに？ 夢と現実を区別するにはどうしたら良いか？」  
「うん……」

迷いに迷った末、久賀達は現状最も頼りになりそうな矢車のもとに足を運んでいた。一体何を基準に彼が頼りになると考えたのかは分からないが、久賀達にとって最善の手段が彼のもとに赴くことだったのだ。

( それにしても、何だっけいきなり……。 )

久賀たちとしてはかなり切迫した状況なのだが、対する矢車は内心

ほとほと呆れはてていた。そもそも夢かどうかを判断するなんてこと、別に誰かに教わるでもなく自然と覚えているものだ。なのに態々ここまで足を運んできている。

(相当焦ってるのか。それにしても一体何があっただ?)

少々気掛かりな事はあったが、このままほったらかしにしてなにか起こっても面倒になるだけである。矢車は軽くため息をつく、適当に彼女の質問に答えた。

「そんなの簡単だ、痛みを与えればいい。例えば頭を叩くとか、頬を抓るとか。」

「こうか？」

矢車の答えに、久賀達は手を伸ばし……そのまま矢車の頬を抓った。

「……………自分のでやれよ。」

至極尤もな言葉である。

その後矢車は適当に久賀達の相手をしてある程度落ち着かせると、自分の部隊の様子をみるためにその場をあとにするのだった。

街中

あの後久賀達は、落ち着いた気分では歩いていた。思い返せばあの時は天道の顔を見ていない。もしかしたら声が良く似ていただけで顔は全くの別人だったのかもしれない。

「そうだよな、あの天道があんな風になるわけがないって。」

そう言いつつ久賀達は自分の頬を抓ってみる。軽く抓った程度だが確かに痛みはあり、今の自分の目の前に広がっている光景が現実であることを示していた。

「うん、痛い。やっぱりあれはよく似た別「あはははは、あははははは！」……別、人……」

痛みを認識し、先程のが自身のみ間違いであると考えた矢先彼女の目の前を満面の笑みを浮かべた天道が、飛んでいく蝶を追いかけているのが目に入った。

久賀達は無言で頬を抓る手に力を込めるが、痛みが増しただけで何の変化も起きない。そのまま頬から手を離すと、近くにあった電柱に手をかけて今見たものを冷静に考え始める。

（今は……天道だよな？ 顔もバツチリ見たし、間違いない。じゃあ、その前に見たあれもマジだったってこと？）

もはや疑うべくもなく、久賀達には今と先程見た光景が現実であると認めるしかなかった。そう考えて、久賀達は遠い目になりながら黙って電柱を見上げた。

「はあ……あの天道がねえ。あいつも随分変わったもんだ……  
……って……」

そこで久賀達は思いつきり頭を仰け反らせると……



「んな訳ねえだろうがッ！！？」

渾身の力を込めて電柱に頭突きをした。

ZECT本部

久賀達と別れた矢車は、基礎訓練を欠かさずに行っている部下たちをしばし監督した後、報告書を提出する為に大和の下を訪れていた。その際、ふと気になったので先程の久賀達の様子のことも合わせて彼に話していた。

「何？ 久賀達の様子がおかしい？」

「はい、何か混乱してるというか・・・」

矢車の話に、大和は首を傾げる。あの久賀達が混乱している様子というのがイマイチ想像できないのだ。

良くも悪くも久賀達は個性が強い。食欲や味覚的な意味でもそうだが、それよりも神経がこれでもかというくらい凶太く、肝もどつしりと座っている。大和などは久賀達の神経はエレベーター用のワイヤー並の強度で、心臓にはびっしりと毛が生えているのではないかと思っていた。

大和の考えは少々行きすぎな面はあるが、少なくとも久賀達が（怒りで我を失うのはともかく）そう簡単にどうにかなくなってしまっことはないだろうという考えは矢車も持っていた。だからこそ先程の久賀達の様子は彼も信じられなかったのだ。

「あの感じから察するに、どうもなにかショッキングなものを見た

「ようです。」  
「シヨッキングなものねえ……あいつにとって何がシヨッキングなのか分からないからなんとも言えないな。」

大和はそう言っただけ息をつく。つい最近新たに現れた幹部級ワームを倒したと言っても、また新たな奴が出てこないとも限らない。ましてやそいつがカツスワーム以上に厄介な能力を持っていたとしたら、確実に驚異になる。

ワームとの戦いはまだ終わっていないのだ。それなのに久賀達に気を抜かれてもらっては困る。

大和がそう考えていると、突然何処からかザビーゼクターが飛んできた。

「ん？ ザビーゼクター？」

《……ッ!? ……ッ!!》

二人の目の前に現れたザビーゼクターはしきりに何かを訴えようとしているが、生憎とこの二人では久賀達ほどザビーゼクターの言わんとしていることを理解出来ない。せいぜいがなにか慌てているということだけである。

とは言えそこは矢車もそれなりの期間ライダーとして戦ってきた男。自分のゼクターと触れ合った経験からザビーゼクターの伝えようとしていることを理解できずとも察することはできる。

「久賀達になにかあったのか？」

《……ッ!!!?》

矢車が訊ねると、ザビーゼクターは肯定するかのように羽を大きく鳴らす。

矢車と大和は一瞬顔を見合わせると、急いでその場から走りだしていった。

街中

矢車と大和はザビーゼクターの後について街中を走っていた。しばらくは特に何が見えるというわけでもなかったが、ある角を曲がった時二人の目にうつ伏せの状態で倒れた久賀達の姿が映る。

「久賀達ツ！？」

急いで久賀達に駆け寄って彼女の安否を確認する矢車。一方の大和は久賀達の傍に駆け寄ると、周囲に何か異常がないか警戒した。久賀達ほどの実力者がやられたとなると、相応の相手を覚悟しなければならぬからだ。もしかすると、先日のカッスワーム並の戦闘力を持っているかもしれない。

辺りに注意深く目を向ける大和。その時、罫が入って凹んだ電柱を見つけた。

（やはり戦闘があったのか？ それにしては周囲の被害が少なすぎるような・・・）

凹んだ電柱の様子は戦闘か何かがあったことを思わせるが、逆に言えば戦闘を思わせる痕跡がそれしか見当たらない。はっきり言ってそれはあまりにも奇妙な状況であった。

「う、うう……くつ。」

「ッ！ 久賀達、大丈夫か？」

大和が周囲の状況に首を傾げていると、気絶していた久賀達がようやく目を覚ました。それに矢車は一瞬安心した顔になる。

大和も周囲への警戒もそこに久賀達の様子を見るが、どうも様子がおかしい。彼女らしくないキョトンとした顔で周囲を見渡し、矢車と大和の姿を見てやや不安そうな顔になったのだ。

もしや見えないどこかを怪我したのではないかと思い、矢車が再度久賀達に声をかける。すると彼女は依然として少し不安そうな顔をしながら――

「あの……どちら様ですか？」

彼女らしくない言葉遣いでそう口にした。

## 病院

あれから数時間後、久賀達は病院に連れてこられて精密検査を受けていた。彼女が矢車と大和を認識できないと知った当初、二人はザビーゼクターを見せたり彼女が知る人物を片っ端から述べていったが結果は全てに対して反応なし。ザビーゼクターでさえも、機械で出来た大きい蜂程度の認識しか持たなかった。

これはただ事ではないと考え、二人は急いで久賀達を病院に連れていく。その後、織田や影山といった面子も読んで今の状況を掻い摘

んで説明した。

「久賀達さんが、記憶喪失？」

「ああ、どうも状況から見てそうらしい。まだ詳しい結果が出たわけじゃないが……」

矢車がそう説明していると、医者が彼らのところにやってきた。

「どうでした、久賀達の様子は？」

「検査してみました、どうも頭部に強い衝撃を受けたようですね。この時のショックで記憶を失ったのでしょうか。」

「頭に、強い……衝撃？」

医者の言葉に、大和の脳裏にあるものが引つかかった。

思い起こすのはそう……久賀達が倒れていた場所の近くの電柱。あの凹み具合は思えば人の頭の形がびつたりはまりそうにも見えた。

「久賀達の記憶は、元に戻んのか？」

そんな大和の考えなど露知らず、織田は医者に久賀達の記憶がもどるのかどうかを訊ねた。他の二人もそれが気になるのか織田共々医者に詰め寄る。

「ショックによる一時的なものですので、時間が経てば恐らく記憶は元に戻るでしょう。どれほどの時間かは分かりかねますが……」

少々曖昧だが、医者は確かに久賀達の記憶が元通りになると言った。いつになるかは分からないが、彼女の記憶は元通りになる。それは彼らにとって、安心するに足る言葉であった。

医者言葉にほっと安心する矢車ら、そんな彼らの近くで一人大和はさらに考えを巡らせていた。

（久賀達の外傷は頭部の打撃痕のみ、となるとあいつは電柱に頭をぶつけて気を失ったのか？　しかし何でだ？　普通に転んだだけじゃ電柱が凹むはずがないし、仮にワームが後ろから久賀達を突き飛ばしたんだったら、頭以外にも傷が残りそうなものだが・・・）

大和が一人考え事していると、医者は彼らに頭を下げてその場を去っていく。その後、彼らが病室に入るとベッドに腰かけた久賀達を目にした。

「あの、久賀達・・・さん？」

「・・・えっ？　あ、はい。」

影山がおずおずと声をかけると、数秒遅れて久賀達が反応した。ただ自分の名前が分かっていないらしい。分かっていた事とはいえ、やはりその様子を目の当たりにすると落胆せずにはいられなかった。

「おい、大丈夫か久賀達？　俺だよ、織田だ。分かるか？」

織田が影山を押しつけて久賀達に話しかける。彼女はしばし顎に手を当てて考えるそぶりを見せると、ゆっくりと首を振った。

「ごめんなさい、まだ・・・何も思い出せていないので。」

小首を傾げながらそう言った久賀達の様子に、織田や影山は何か打ちのめされたようにのけ反った。

「ち、違う・・・こんな久賀達じゃねえ。」  
「とはいえ、これはこれで・・・」

普段の彼女が決して使わないだろう『ごめんなさい』という言葉と、絶対にしないだろう小首を傾げる仕草に、久賀達をよく知る彼らは大きなギャップを感じていた。どこか薄ら寒い物を感じる一方で、普段見れない彼女の様子にいろいろと思うところがあるのも事実だ。

「しかし、一体どうしたのか・・・」  
「矢車。」

とは言え何時までも彼女にこのままでいられては困る。なんとか元に戻って欲しいとは思っただが、どうすればいいのか矢車には検討もつかなかった。

そんな時、顎に手を当てた状態で大和が声をかけてきた。

「お前確か、久賀達の様子がおかしいって言ってたよな？」  
「はい。何があったのかは知りませんが、なにか強いショックを受けているようで・・・」  
「その時・・・お前あいつになんて言った？」  
「それは・・・」

大和の言葉に先程の久賀達との会話を思い出す矢車。すると段々と顔に汗が浮かび始め、なんとも言えない表情になっていった。

「・・・夢と現実の区別がどうたら言ってたので、とりあえず頬を抓ったり頭を叩いたりしてみると言っておきましたが・・・」

矢車がそう言うと、大和は得心が行った顔になる。普通は信じられ

ないが、相手が彼女であればあまり違和感はない。

「なるほどな。何でこうなったのか大体分かった。」

「あん？　どういう事だよ？」

大和の呟きに、織田が反応する。影山も彼の呟きが聞こえたのか、興味があるといった感じで矢車たちの方を見てきた。

二人の意識がこちらに向いたのを見て、大和は自身の考えを口にしていく。

「多分だが、久賀達がこんな風になったのは自分で電柱に頭をぶつけたからだろう。」

「はっ？」

久賀達が倒れていた場所の近くにあった電柱、あれにはちょうど人間の頭がはまりそうな凹みがあった。そのクセ周囲には他にどこかが壊れているということもなく、あの場所に着いた時はその光景が妙に印象に残っていた。最初はなんなのか全く分からなかったが、医者診断と先程の矢車との会話を思い出した結果、大和は一つの仮説を思いつく。

「矢車が言うには久賀達の奴何かにショックを受けていたらしい。で、矢車がそんな久賀達に頬を抓ったり頭叩いてみるとか言ったんだと。久賀達はそれを実践する為に電柱に頭を叩きつけたんだろう。」

「いや、それ……は……」

そんな事はないだろう、そう言おうとした影山だったが次第に自信なさ気に言葉を途切らせてしまった。



そう言えば、と彼らは思い出す。以前彼女が胡桃を持ってきた時に、あるところか殻を割るときに机の上に置いた胡桃に肘鉄を叩きつけたことを。結果としてその時は殻を割ることは出来たが、布も何も被せずたたき割った為割れた殻が勢い良く周囲に飛び散って近くにいた自分たちにいらぬ被害をもたらした。

結論として、大和の仮説は十分に想定できる内容であった。

「……やりそうですね。久賀達さんだったら。」

「フーか、久賀達がこんなになつた原因はお前かよ！」

「いや、俺が言ったのは自分で頭を叩くだけで、頭を叩きつけるじゃないからな!？」

織田が怒りを向けたくなる理由も分かるが、矢車にしてみれば理不尽極まりないだろう。夢と現実の区別をつけるためとは言え、何処の世界に電柱に頭を叩きつけるような者がいるというのか。

「あの……私の所為なんでしょうか？」

「ん？ ああ、別に気にするな。いつものコトだ。それよりどうしたのか……」

一人蚊帳の外に置き去りにされた久賀達が、雰囲気から自分に問題があるのではないかと考える。一方喧騒から少し離れていた大和は、そんな久賀達に軽く声をかけると彼女の記憶を元通りにするいい案がないものかと考えこんだ。

原因は大体分かった。後は彼女を元通りにするだけであるのだが、あまり下手な手をうって取り返しの付かない事態になってはたまらない。事は簡単にはいかないだろう……と、大和は考えてい

たのであるが……

「んなもん簡単じゃねえかよ。変身！」

《Henshin Change Beetle》

何を思ったのか突然織田がヘラク스에 変身した。周囲にいた者達は、彼が何をするつもりなのか全く理解できなかったため一気に不安になった。

「おい、お前一体どうするつもりだ？」

「要は頭をぶつけたシヨックで記憶なくしたんだろ？ だつたらまたシヨックを与えてやればなんとかなるだろう。」

そう言つて拳を振り上げたヘラクスを、矢車と影山が慌てて抑えつけた。

「馬鹿なことやめてください!？」

「お前正気か！ いくら久賀達でもライダーのパワーで殴られたらただじゃ済まないに決まつてるだろ!？」

「大丈夫だつて、ちゃんと加減はするから……」

「そういう問題かお前は?!」

《Henshin Change Beetle》

二人が抑えつけようとするも、ライダーのパワーを前に生身の人間では出来ることなどたかが知れている。彼を止めるために大和も慌ててケタロスに変身した。

「落ち着け織田！ そんな事してより悪くなつたりしたらどうするんだ!！」

「久賀達の奴自分で電柱凹むくらい強く頭叩きつけたんだろ？ だ

「つたらこれくらいなんともないって。」

「いやなんともなくないです、下手すると久賀達さんの頭吹っ飛びます!？」

ヘラクスを止めるために、矢車と影山、そしてケタロスが必死になつて彼に掴みかかる。一方事態の中心にいる久賀達はというと、状況についていけずに呆然としていた。

当然といえば当然か、今の彼女にとって人がライダーに変身するというのは理解しがたいことだったのだ。あまりの展開に脳の処理が追いつかないでいた。

しばし取っ組み合いを続ける4人。だが場所は狭い病室、そんなところで大の大人4人が暴れられるスペースがあるわけもなく……

「と、おわっ!？」

「織田! うおおっ?!」

ふとした瞬間に足を滑らせたヘラク스가前のめりに倒れ、それを受け止めようとしたケタロスも釣られて後ろにコケてしまった。ケタロスが倒れた先にあるのはベッド。突然自分に向かってくるケタロスの後頭部に久賀達は反応することが出来ず……

「い、っ?!」

「……あつ……」「」「」

ケタロスの後頭部が久賀達の頭に見事にクリーンヒット。目の前に星が飛び散ったかと思うと、彼女の意識はそのまま闇へと落ちていった。

???

「ここは・・・？」

全てが暗転した世界、久賀達はそこで一人立ち尽くしていた。周囲は全て闇で覆われ、自分が何処にいるのかも分からない状況だ。

「あたし・・・なんでこんな所、ん？」

しばし周囲を見て呆然としていたが、不意に彼女の耳に何かか聞こえてきた。水が滴るような、そんな音が・・・

久賀達は誘い出されるようにその音のする方へ向かって行った。今のところ自分には他に行くべき場所もなかったし、もし誰か居るのであればなにか話を聞けるかもしれない。

しばらく音のする方に歩いて行くと、何かの影が見えた。大きさ的に久賀達の腰程の大きさの何か。

(いや・・・違う。)

さらに近づいたときそれがなんなのか分かった。それは人だ、地面に蹲った一人の人間。久賀達に背を向ける用に蹲ったその人物は、暗いせいでシルエツトでしか認識することは出来なかった。

「なあ、あんた誰だ？　こんなところで何してる？」

久賀達は影に近付くと、当たり障りのない事を訪ねる。相手が混乱

している可能性もあったので、いきなり手をかけるといふことはせずにある程度離れたところに立つことにした。

彼女の声に対して、相手は何も答えない。蹲った状態で、ジツとして動かなかった。

「おい、聞こえてるか？ 大丈夫かあんた、おい！」

何の反応も示さない相手に、久賀達は少し語尾を強めて声をかけた。もしや死んでいるのでは……そんな嫌な予感が久賀達の頭に浮かんだその時――

「……何してるの？」

「ッ!？」

突然相手が言葉を発した。声の感じからして女性、それもどこか聞き覚えのある声だ。

「何してるの？」

相手は再び言葉を発した。突然話し始めたことで呆然としていた久賀達だが、我に返ると今度は相手の言葉の意味がわからず怪訝な顔になる。

「何してるって……どういう意味だ？」

「自分に嘘について……楽しい？」

久賀達が相手に聞き返すと、相手はそれに答えず新たな質問を投げかける。

ハッキリ言っただけの意味がわからなかった。質問の内容もそうだが、何よりも彼女の声に聞き覚えがありすぎる。それでいて思い出せないのだから、久賀達は内心苛立っていた。

「おい、一体どういう意味だ？ もうちょっとハッキリ言ってくれとありがたいんだけどな。」

「ハッキリ？ ハッキリするのはそっちの方でしょ？ 自分に嘘について自分も周りも騙して……嘘の世界で生きていくのってそんなに楽しい？」

彼女の言葉は妙に久賀達の心に響いており、否が応でも脳がその言葉の内容を理解しようとする。

「本当は気付いてるクセに……あえて知らないふりをしてる。」  
「やめろ……」

段々と気分が悪くなってきた。これ以上彼女に話させてはいけないと心が叫んでいる。

「口では終わったとか言っただけでカッコ付けてるけど、本当はそれを認めてない。」

「うるさい……」  
「まあ……分かってるけどね。認めたらもう自分は一人になるしか無い。それが嫌だから……」

「黙れえっ!!?」

彼女の言葉を聞いているうちに、自分が自分でなくなっていくような奇妙な感覚に陥っていく。それに耐え切れなくなった久賀達は後先考えずに目の前に影に向かって殴りかかった。

だがその拳は空を切り、久賀達は勢い余って倒れこんでしまう。即座に相手を探そうと顔を上げて・・・

「この・・・嘘付きの臆病者。」

血のように赤い一对の複眼が目の前にあった。

翌朝・病室

「う、ん・・・ん？」

目が覚めると、窓から朝日が差し込む病室の天井が目に写った。しばしぼんやりとしていた久賀達だが、昨日の出来事とついさっきまで見ていた夢を思い出して一気に頭が覚醒した。

特に先程の夢。今こうしていても鮮明に思い出せる、夢にしては随分と現実味がある感じだった。

（一体どういう意味だったんだ？ あたしが嘘をついてる？ いや、それ以前にあいつは・・・）

夢に出てきた人物の言葉と、その言葉を発していた人物自体の事を考えていたとき、唐突に部屋に影山が入ってきた。

「あつ！ 久賀達さん、目が覚めたんですね！！」  
「ん？」

久賀達が影山の声に反応してそちらを向いたのと同時に、その事に

気付いた矢車と織田も入ってきた。ただし大和の姿は見当たらない。彼だけはこの場のメンバーと違い組織の中でも重要な立場にいる人物だからだろうか。

「大丈夫か？」

「ああ、ちよつと頭が痛むけど他はなんともないよ。」

矢車の質問に対する久賀達の切り返し方を見て、他の3人は目を見開いた。今の対応の仕方、そして現在進行形で彼女が纏っている雰囲気は正しく彼らが知る久賀達 時雨のモノにほかならない。

「久賀達・・・お前、記憶が戻ったのか？」

「ああ、バツチリとな。」

恐る恐る織田が久賀達に記憶が戻ったのか訊ねると、彼女はいつもと変わらぬ様子でそれに答えた。それを見て他の面子の表情が喜色に染まる。

「やったぜおい！」

「良かった、いつもの久賀達さんだ。」

「一時はどうなることかと・・・」

久賀達の記憶が戻ったことに想い想いに喜ぶ3人。その傍らで久賀達は祈るように右手を左手で包むと・・・

力を込めて骨を鳴らした。

「くくくへっ?」「くく」

突然その場に似つかわしくない音が響いたことに一瞬呆然となる矢



車たち。それに対して久賀達は口だけを笑みの形にすると、織田だけを真っ直ぐに見つめた。

「ところで織田よ・・・昨日は随分と面白いコト考えてくれたよな？ 流石のあたしでもライダーのパワーで殴られたらただじゃ済まなかったかもしれないぞ。」

「えっ！？ お前、もしかして覚えて・・・」

「ああ・・・バ・ツ・チ・リ・と・な。」

凄みを利かせた笑みで答える久賀達。言い回しは先程と同じだが、言葉にかかっている力が先程の比ではない。

ヤバいと思って即座にその場を離れようとする織田だったが、それよりも久賀達の行動のほうの方が早かった。彼女は一瞬でベッドから出ると織田の背後に回りこみ、首に腕をかけて締め上げる。俗に言う『チヨークスリーパー』という奴だ。

「ぐえええええっ?! ちょ、ちよつと待った久賀達! タ、タン マタンマッ!？」

「うるせえこの馬鹿野郎! 何でお前はそう極端な考え方しかできないんだよ!？ あたしを殺す気か!！」

「いや、極端な考えについてはお互い様・・・って言うか、お前にぶつかったのは大和の方じゃ・・・」

「そもその原因はお前だろうか!？」

抵抗しようとする織田に対して、さらに締め上げる力を強くする久賀達。次第に織田の顔が青くなり始めたので、これ以上はマズイと思った矢車と影山が止めようとした瞬間、出し抜けに久賀達が織田の首から腕を放した。締め付けから解放されたことで織田は盛大にその場でむせ、一方の久賀達は何かを思い出したかのような顔にな

っていた。

「ど、どうしたんですか？」

「そうだ・・・こんな所で遊んでる場合じゃなかった。」

言うが早いか、久賀達は真っ先に病室から出て行った。幸いなことに昨日着ていた服のままだったので、着替えの必要性はない。

そんな彼女が目指すのは、言うまでもなく・・・

「あの野郎・・・もうこの際どっちでも構わねえ、一発ぶん殴る！」

天道の所だった。

## 第52話 久賀達大混乱（後書き）

という訳で第52話でした。

自分の中でのイメージですけど、擬態天道って根本的な性格が子供ですよね。多分彼の境遇がそうさせたのかもしれないですけど。原作でのひよりに対する執着とか、初めて加賀美達の前に姿を表したときの対応から見ると性格がまだ子供って感じてました。

全体的に軽い調子の今回ですが一部だけシリアス、久賀達の世界でのやり取り。このシーンで久賀達と会話していた相手……皆さん分かります？ この相手の正体については近い内に明らかになる予定ですので楽しみに。

それでは。

第53話 発動、エリアZ防衛戦（前編）（前書き）

どうも、黒服です。

ふと気がつけばこの小説が始まってからもう1年経っていました。ここまで続けることが出来たのもひとえに読者の皆様の御蔭です、本当にありがとうございます。

### 第53話 発動、エリアZ防衛戦（前編）

B i s t r o l l a S a l l e

久賀達が病院から飛び出してから数分後、そこではつい先程までいつもの如く穏やかな時間が流れていた。

蓮華が天道から出された課題料理を（ほとんど聞き間違いで）作り、それを剣が食して本来出された課題からさらにズレた感想を口にす。そんな最近はありふれた日常だったのだが……

「それを聞いてどうする？」

今、店内には不穏な空気が流れていた。その場にいるのは加賀美と剣、そして蓮華の3人……それに加えて、普段の様子からは想像できないほど純粹でにこやかな表情をした天道の計4人だ。

だが、今加賀美達の前にいる天道は恐らく本人ではなくワームが擬態した天道だろう。何故なら彼は先ほどこう言ってきたからだ……

『僕は今何処にいるの？』

と……

そして、ワームが擬態したと思われる天道は加賀美の質問に対し天道を消すと答えた。今までのワームの擬態にしては拳動が何処かおかしい気もするが、今の彼らにとっては些細なこと。目の前にいるのがワームの擬態ということだけで彼らには十分だった。

「でも知らないならいいや。」

しかし当の擬態天道はというと、本物の天道にしか興味はないのか子供のように手を振って店から出て行ってしまった。突然のことに一瞬頭が混乱していた加賀美だったが、状況を認識すると急いで彼の後を追って店を出て行く。

後には、蓮華と剣の二人だけが残されていた。

(ついに天道の擬態まで現れたか・・・それにしてもさっきの奴、何か・・・)

残された二人の内、剣は先程の擬態天道にどこか違和感を感じていた。それは、本来彼がワームであるからこそ感じた違和感なのかもしれない。

「俺も行く「天道ッ!?!」、つと?!!」

剣が先程の違和感を確かめる目的も含めて加賀美の後を追おうとすると、出し抜けに久賀達が店内に突撃してきた。「入って」来たのではなく「突撃」だ。

久賀達は一瞬店内を見渡して天道の姿がないことを確認すると、常々彼のことを師匠と読んでいた蓮華に掴みかかった。

「おい! 天道の野郎は何処だ、何処にいやがる!!?!」

「し、師匠に会ってどうするんですか?」

「一発ぶん殴りに行くに決まってるんだろ!?!」

今の久賀達の表情はまさに地獄の鬼も裸足で逃げ出すのではないか

というほど怒りで歪んでおり、掴みかかられて至近距離でその顔を向けられた蓮華は萎縮しまくりながらもなんとか久賀達の質問にかろうじて答えた。

「に、偽物の師匠ならさつきまで、ここに居ましたけど・・・」

「そいつ今何処だ！ さつさと言え!？」

「ひいう?! た、たった今どこかに行きました・・・」

凄まじい形相で睨みつけられた蓮華は、生まれて以来何度しただろ  
う半泣きの表情になりながら先程あつた出来事を久賀達に話して  
いた。そして久賀達は、自分が一歩で遅れていたことに気付く。

「あんの野郎・・・」

「ど、どうしたんだ? かなり苛立ってるみたいだが?」

蓮華を開放して悪態をつく久賀達に、剣が珍しく腰が引けた状態で  
久賀達に訊ねる。今の久賀達はそれ程に苛立っていた。

「あん? ああ、昨日な・・・」

そんな剣に対し、久賀達は多少苛立ちを抑えながらも昨日あつた出  
来事を口にしていく。

それを聞いた二人は・・・

「それは・・・」

「何と言つか・・・」

自業自得だろう・・・そう言ってしまうそうになるのを何とか堪え  
た。

一言で言ってしまったえば、ちょっとしたことでも混乱しすぎた久賀達が全て悪いのだろうが、今それを言ってしまったえば確実に火に油を注ぐ結果となるだろう。いや、ヘタをすると火薬庫にナパームをぶち込むくらい無謀な行為だったかもしれない。それをせずに済んだのは、一重に彼らが緊急時でも的確な判断を下すことができるだけの判断力を持っていたことにほかならないだろう。

「とりあえず天道の奴はもうここには居ないんだな？」

「は、はい。」

「そうか・・・それならあたしも・・・」

天道を追おう・・・そう思った時、突然久賀達の携帯から着信音が聞こえてきた。

「んだよ、たくこんな時に。はい？」

『久賀達か？ 俺だ、大和だ。』

電話の主は大和だった。久賀達は相手が彼だと知ると、苛立ちを隠そうともせず答える。

「なんだよいきなり、今こっちは取り込み中『緊急事態だ、急いで本部に来てくれ。大至急でな。』おい！？ ちょっと大和、おいつて?!」

久賀達は文句を言おうとするが、大和は伝えたい要件だけを口にしておき、さっさと切ってしまう。久賀達はしばし通話を切られた携帯を睨みつけていた。

「あんにやる・・・ったく、しょうがねえな。」



久賀達は悪態を付きつつも店を出ていこうとし、途中目に止まった蓮華の作った『チラリ寿司』なる料理を見つめた。

蓮華が天道から出された課題は『ちらし寿司』であるのだが、彼女は『し』と『り』を聞き間違えたのか普通の巻き寿司（と言っても巻かれているものは普通の寿司に入れないものがほとんどであるが）を食べる前にチラチラと見せるなんとも謎な料理となっていた。

そうとは知らない久賀達は、たまたま目に止まった蓮華の料理の中からエビフライの巻かれた巻き寿司を手にとつてそれを丸ごと口の中に放り込んだ。そしてそれを咀嚼しつつ久賀達は今度こそ店から出ていくのだった。

## ZECT本部

久賀達が本部に辿り着くと、彼女は大和の部下に本部内の司令室に案内された。本部に着くなり大和の部下なる者に案内されたこともそうだが、今まで一度も通されたことのない司令室に案内されたことで久賀達はやや困惑すると同時に自分を呼び出した内容がただ事ではないことを察する。

指令室内では多くの職員が慌ただしく動きまわっていた。室内にある大型のスクリーンには簡易的な地図が表示されている。久賀達も何度か見たことがあるその地図上では、無数のワームの存在を示すマーカーが移動していた。

「来たか、久賀達。」

久賀達がしばし室内を見渡ししていると、司令室の中心にいる大和に声をかけられた。その近くには矢車・影山・織田の3人の姿も。

「いきなり呼び出したかと思ったら、随分と慌ただしいな。一体何があつた？」

久賀達が彼らの方に向かいながら訊ねると、大和が画面を見ながら状況を説明した。その表情は若干曇っており、状況があまり良くはないことを暗に示していた。

「突然各地から夥しい数のワームが出現し、一箇所に向かって進行している。まだ何処に向かっているのかは不明だが、その統制の取れた動きから何らかの目的地があるのは確実だ。」

今は現地の部隊が応戦しているらしいが、この数が相手では戦況もあまり宜しくはないだろう。以下に対ワーム用に武装が強化されてきていると言っても所詮は人間が相手をしているのだ。数で優っているワームが相手となると苦戦は免れない。

そんな時、無数にいる通信士の一人が切羽詰った声を上げた。

「大和統括、田所チームから緊急入電です！」

「どうした？」

「ガタツクが幹部クラスのワームと交戦、敗退し現在撤退しているとのことです。」

通信士の報告に大和だけでなく矢車や久賀達らも苦い顔になる。ガタツクの敗北もそうだが、何よりも恐れていた新たな幹部クラスのワームの登場は彼らにとって悪い知らせにほかならない。

「ガタツクが負けたワームはどんな奴だ？」

久賀達は少しでも幹部クラスのワームに関する情報を集めようと通信士に声をかける。せめてガタツクがどのようなようにして敗れたのか聞き出せばある程度の作戦は立てられた。だが・・・

「ガタツクが交戦したワームは・・・ツ！？ 以前確認された力ツシスワームと同種のワームであると報告がありました！」  
「なっ？！」

カツシスワーム・・・それは久賀達らも苦戦を強いられた、全く別次元の強さを持ったワームである。その戦闘力は言うに及ばず、通常のクロックアップを遥かに凌ぐ超々高速移動は一瞬で戦況を覆してしまえるほどの脅威を持っていた。

だが、カツシスワーム自体は以前ハイパーカブトに倒されたと報告を受けていたのだが・・・

「ガタツクはどう負けたんだ？ 一瞬で負けたのか？」

まさかの強敵の復活に驚愕しながらも、矢車はなんとかその質問を口から出すことができた。もし本当に以前現れたカツシスワームと全く同じ奴が現れたのであれば、こちらも相応以上の覚悟を持って臨まねばならない。

「正確には不明ですが、ガタツクはライダーキックで倒されたと。」  
「ライダーキック？ どういう事だそれは、敵にライダーが居るってことか？」

ライダーキックはその名の通りライダーの必殺技である。使用でき

るのはカプト・ガタック・Kホッパー……あとは資格者の確認されていないダークカプト……のみであり、他のライダーやましてワームが使うことなど出来ないはずであった。

「進行ルートはどうなっている？ まだ予測できないのか？」

再び現れたカツシスワームの存在に久賀達らが戦慄する一方で、大和は別の通信士にワームの進行ルートについて訊ねた。カツシスワームの登場は確かに驚異だが、それ以上にこの数のワームが何処に向かうかも重要なことだ。

通信士はコンソールを操作して、ワームの予想される進行ルートを計算した。現在ワームは複数の地点から一箇所に向かって進行しており、そこが交わる地点が連中の目的地と考えられる。

「今算出します。ワーム達が向かう進路上、そこにあるのは……  
……あつ!?!？」

予測される進路を見て、通信士は驚愕に目を見開いた。何しろワームが向かおうとしている先にあるのは……

「ワームの予想される進路が出ました。場所はエリアZ、マスクドライダーシステム開発施設です!!」

## 第54話 発動、エリアZ防衛戦（後編）

ZECT本部

ワームの大群がエリアZのマスクドライダーシステム開発施設に向かっている。その情報が入った後、大和は急いで緊急会議を開いた。今までに見たこともないほどの数で侵攻するワーム、再び現れたカツシスワーム、狙われたマスクドライダーシステム開発施設とこれまでに類を見ない緊急事態である為、早急に現在の状況を把握する必要が出来たからだ。

現在大和は本部内の戦闘部隊専用会議室にて、エリアZ防衛の為の会議を開いている。そこには大和の他多くのエリア司令官、そして久賀達らシャドウの隊長と織田の姿も確認できた。

「現在の状況は、見ての通りだ。」

そうやって大和がレーザーポインターで示すのは、現在のエリアZ周辺の地域を表示したスクリーン。そこには地名を省かれた地図上を蠢く、ワームの存在を示す無数のマーカーが表示されていた。

「現在ワームはこの方面から侵攻している。これに対して我々は、エリアZの廃墟に部隊を展開しワーム共を待ち伏せる。」

「エリアZへの侵入を許すのですか？」

大和の提案に、室内にいたエリア司令官の一人が疑問の声を上げる。エリアZへの侵入を許してしまえば、最悪一気に施設への侵入も許してしまいかねないのだ。

「今からではエリアZに侵入する前にワームを食い止めることは非常に困難だろう。中途半端に防衛線を構築した状態で迎え撃つても下手をすれば食い破られてそのまま施設を失う可能性が高い。だったら、エリアZへの侵入阻止を諦めて、エリア内で防衛戦を構築して置いたほうが幾分か確実だ。」

尤も、今の確実の前には『恐らく』という言葉が付いてくる。言うまでもないことだがこのような状況は全員初めてのことなのだ。ワーム相手には対人戦の要領で立ち向かっても効果は薄いため、必然的にほとんど手探り状態で状況を打破するための策を練らねばならない。

「敵は恐らくこちら側から直進してくるだろうが、報告によると徐々に戦力が分散してきているらしい。そこからエリアZでの敵の侵攻ルートはこのようになると推測される。」

そうやって大和の近くにいた者がコンソールを操作すると、スクリーン上に3本の矢印が表示される。矢印はそれぞれ別のルートを進みながらも、最終的にはある一箇所に集まった。

「これが予測されるルートだ。このルートをそれぞれ . . . として、ルートにはシャドウの第1番隊、 には第2、 には第3を配置する。」

「特殊遊撃隊はどうなるんだ？」  
「当然、お前たちは敵戦力が一番集結しているところに行ってもらおう。尤も、状況によっては別の部隊に支援に行ってもらうことになるが構わないな？」

織田の率いる部隊は基本的にどの命令系統にも属さない。故にこの場での決定に完全に従う義理もなかったりするのである。

元来織田は他人に従うのを好としない人物である。その為自由に動ける特殊遊撃隊を組織して好きにやらせることで彼をZECTという組織に繋ぎ留めてきたのだ。

そんな訳で織田には今回も命令に従う義務はないのだが、彼は文句ひとつ言わず大和の言葉に頷く。彼も今が緊急事態であることを自覚しているのだろう。

「なお、今回の戦いには幹部クラスのワームが参加している。どのルートで来るのかはまだ不明だが、シャドウの3隊長はくれぐれも注意するように。」

「奴はどんな特殊能力を持っているんですか？」

大和が説明を終えると、矢車が質問する。彼自身カッスワームには煮え湯を飲まされているので、密かに雪辱を晴らす機会を狙っているのだ。

「どうやら、受けた技をコピーする能力を持っているらしい。現在ガタツクのライダーキックとサソードのライダースラッシュがコピーされたという情報が入っている。」

「対策はなにか無いのですか？」

「現在まだ対策はない。なにか対策を練ることが出来ればいいんだが、それをしているだけの時間も今は惜しい。残念だが・・・」

要は現場でなにか考え出せということだ。ハッキリ言って厳しい状況ではある。しかし同時にやらねばならないことも事実であった。

「それとフライドローンが偵察した結果、カッスワーム意外にも複数の成虫体の存在が確認できた。そいつらに対しても十分に警戒

するように。」

大和がそう言っつて、この会議は終了することになった。

## 次の日の夜

ZECTによるエリアZ防衛作戦が発動され今も尚動ける部隊が次々と集結している中で、今やZECTの一員でありエリア司令官でもある天道は加賀美と共に川の近くのテラスに暗い面持ちで佇んでいた。

「ひよりの奴・・・なんで天道の擬態なんかと一緒に？」

彼らが沈んだ表情になっているのは、ひよりが天道に擬態したワームについて時空の彼方へと行ってしまったからだ。

「あいつ、本当にこのまま帰って来ないつもりかな？」

「・・・ひよりが、その方が幸せだと思っっているなら・・・辛いが、しょうが無い。」

加賀美が天道の顔を見ると、彼の表情は辛さを抑えているのが丸分かりだった。本当は行って欲しくない、しかし兄としては妹を縛り付けておくこともしたくない。その葛藤が彼を苦しめているのだ。

「何やってんだよお前、こんな所で。」

天道の辛そうな顔を見て加賀美がなんとも言えない顔をしていると、突然その場に女性の声が響いた。久賀達である。



「久賀達さん？　なんでこんなところに？」

「なんでって、天道はエリア司令官だろう。今ZECTはエリアZに向かってくるワームを迎撃するために動き回ってるのに、エリア司令官のお前が何こんところで油売ってるんだよ。」

久賀達はい先程まで防衛作戦に参加するための準備に奔走していた。装備の手配、戦いを共にする部隊とのミーティング、その他様々だ。

そんな中、天道が動いていないことを知った彼女は彼にも動いてもらうためにこうして態々足を運んできた。曲がりなりにも彼はカッシスワームを倒した男だ、今回も彼の力が必要になるのは間違いないだろう。

彼女としてはあまり天道に頼ることもしたくはなかったのだが・・・

「えっと、実は「ししよーっ！！」」

一先ず加賀美が事情を説明しようとするが、狙ったかのようなタイミングでその場に蓮華が現れた。そして彼女は何かを天道に報告している。

一方の久賀達は、そんな二人を無視して加賀美に事情を聞くことにした。

「何?!　皆既日食を見ただと？」

「ふっん、なるほどね・・・」

天道は蓮華、久賀達は加賀美からそれぞれ話を聞き、どちらもその話に対して反応を示した。

特に天道は、ひよりの下に辿り着く手掛かりが皆既日食だったので、その食いつき具合が違う。

「やはりどこかに時空の彼方への出入口がある！」

天道の顔は一瞬喜びに染まるが、即座にまた影を落とす。

「だが、ひよりが帰りたくないなら・・・無駄なことだ。」

ひよりは天道を拒絶し、擬態天道と共にいった。彼女はこの世界ではなく時空の彼方、天道ではなく擬態天道を選んだのだ。ひよりを自由にしてやりたいと思っっている天道にしてみれば、もはやひよりの下に向かう理由がなかったのだ。

「・・・お前さ、兄妹喧嘩とかしたことないだろ？」

そんな暗く沈んだ様子の天道に、久賀達が声をかけた。その目は天道を見ておらず、何処か遠いところを見ているようだ。

「どういう事だ？」

「そのまんまの意味だよ。お前身内に結構甘いんだろ？ だから妹と喧嘩したことってないだろ。」

確かに天道は身内には甘い。義理とは言え妹の樹花の頼みは断れな  
いし、彼女が剣の所為で交通事故にあったりした時は彼の顔を殴り  
飛ばしたりしていた。

「あたしもお前のことと言えるほど身内に厳しかったわけじゃないけ  
どな、結構大事にしてたもんだよ。でも、向こうもあんまり世話焼  
かれ過ぎると迷惑に思う時があったんだろうな、変にへそを曲げる

時があっただよこれが。」

そう言つて久賀達は昔を思い出して笑みを浮かべる。思えば自分も十分姉バカだったかもしれない。特に妹の囊の恋愛関係の話で口論になったことも一度や二度ではなかった。

「まあ、何が言いたいかつて言うとなな・・・大事に思うのもいいが、守ることばっか考えてると意外と見えてこないもんだぞ。身内の考えてることつてのは。」

久賀達はそう言うが、天道はひよりの自主性も認めている。今回ひよりの下へ向かうのを諦めようかと考えているのも、ひより自身がワームとして生きて行くのを選んだからだ。

「守る・・・だが、ひよりが自分で選んだ道なのだとしたら「そこがもう見えてないってんだよ。」何だと？」

「分かんねえかな、そんなの強がつてるに決まってるんだろ。お前今までひよりの何を見てきたんだよ。」

強がつている・・・その言葉に、天道ではなく加賀美がハツとした顔になった。そして手に持っていた破かれたひよりの書いた絵に目を向ける。

「そうか・・・なんかおかしいと思つたら、強がつてるだけなのかもしれない。じゃなきゃ、こんな優しい絵描けるはずがない。」

「強がる？」

加賀美の言葉に、天道の表情から陰りが少なくなってきた。

「昔あたしの妹が一時期様子がおかしかった時があつてな。ところ

がどうしたのか聞いてみても何も言いやしねえ。で、こつそり調べ  
てみたらあいつ虐めに遭ってやがったんだよ。」

その時のことは今思い返しても腸が煮えくり返る思いだ。自分の妹  
を、世界でたった一人の妹をゴミのように扱い辛く当たった者達を  
見た時は、怒りで頭の中が真っ白になった。当然それを見た瞬間彼  
女は虐めを行っていた者達を全員のしている。

「そんで、なんで黙ってたのか聞いてみたらよ、あいつなんて答え  
たと思う？」 『姉ちゃんに頼ってばかりもいられないじゃん』だっ  
てよ。」

本当は辛かったたくせにと、当時のことを思い出して小さく笑う。も  
う妹もいなくなってしまうたが、それでも家族との思い出は今でも  
彼女の心を暖かくしてくれる。

「分かるか？ 人間ってのは案外自分だけが苦しくなったりしたと  
きは逆に強がるもんなんだ。特に身内に対してはな。」

勿論中には弱い人間というものも存在する。率先して他人に助けを  
求めたりする者も世の中にはいるが、少なくとも強がれる人間がい  
ることは事実だった。

「だから、お前ももうちょっと強引にいつてみたらどうだ？ 何時  
も俺様加減だよ。」

そこまで言ったところで、何故自分は天道に対してこんなことを言  
っているのだろうとふと疑問に思った。正直彼女は天道を嫌ってい  
たというのに……

「……阿呆らし、何でお前に態々こんな事言ってるあたし。」

自嘲してそう言うと、踵を返してその場を離れていく久賀達。その道中自分の行動を考えて、彼女はあつ一つの結論を見出した。

（ああ……そういう事か……）

そこに思い至つてしまえば後はなんてことはない。未だに天道は気に喰わない所もあるが、少なくともその一点に関しては手助けするのも悪くはないと思えた。

「家族に対する愛情に、罪はないよな……手放すなよ。」

そう呟いて久賀達は再び決戦の場へと向かっていった。

翌日・エリアZ

現在エリアZには続々と多くのゼクトルーパーが集結していた。目的は言わずもがな、現在エリアZに侵攻しているワームの大群を迎え撃つためである。

「隊長、全部隊配置完了とのことですよ。」

戸高が久賀達にそう報告する。周囲には久賀達が率いるシャドウ第2番隊の他にも様々な部隊が展開しており、否が応にも激戦を予感させた。

「補充兵つてのも来たのか？」

「はい。既に全員集まっています。」

なお今回の作戦を実行するに当たり、防衛の主力となるシャドウには人員の増強が行われていた。人数にして2小隊程度だが、皆各地の部隊から集められた精鋭である。

久賀達が増員された兵たちの前に行くと、全員背筋を伸ばして直立不動になっていた。久賀達を前にしてか、それともこれからの激戦を前にしてかは知らないが全員緊張した面持ちだ。

そんな彼らをしばし眺めると、久賀達は彼らに背を向けて呟いた。

「……枯れ木も山の賑わいつてか。」

「なにかお気に召しませんか？」

久賀達の呟きは近くにいた戸高にも聞こえていたため、彼女の言葉に不安を覚えた戸高は率直に聞いてみた。

「いや。ただ今になっていきなり人数を増やされても……なあ？」

「それは、隊長の仰りたいことも分かりますが……」

シャドウは自他共に認める精鋭部隊である。それ故に動きには統一性があり、一糸乱れぬ連携によってこれまでも多くのワームと戦ってきた。だがそれは一朝一夕で出来たものではなく、日頃の訓練の積み重ねと何度も実践を経験してきたからこそ培われたものなのだ。

そんな所にいきなり増員されたとしても、不完全な連携では敵に付け入る隙を与えて無駄に被害を広げる結果にしかない。彼女はそれを懸念しているのである。

「しかし、全員シャドウを志願していた者達です。細々としたものですが、全員それなりの戦闘経験は持っています。」

「らしいな。そこは分かるよ、連中を見れば。」

実際彼らは緊張しているようではあったが、何かしら覚悟してきたのか力のある目で久賀達に視線を向けている。

久賀達はそんな彼らを見て一瞬ため息をつく、体をそちらに向けて口を開いた。

「お前らに一つだけ、正直な気持ちを聞いておきたい。今この中で怖いって奴はいるか？」

誰も手を挙げない。当然だろう、戦いを前にして大勢の前で堂々と怖いと表現するのは勇気がいる。

「気にすることはないぞ？ こんな状況あたしだって初めてなんだ、今回はっかりは五体満足でいられるかどうかちょっと怪しいって思ってたりする。」

彼女のそんな言葉に、やや意外といった雰囲気がある場に漂っていた。まさか彼女の口から弱気とも取れる言葉が出てくるとは思いもよらなかったのだろう。戸高でさえも少し意外そうな顔をしている。

「もう一度聞くぞ、今怖いって奴はいるか？」

今度は数人が手を挙げた。やはり今の状況に対し少なからず恐怖しているものはいたのである。

「そうか、まあ当然だな。さつきも言ったがあたしも今回はかなり不安だ。あたし自身がどうにかなることもそうだし、お前らやウチの連中がどうにかなることもな。」

手を挙げた人物がいたことに久賀達は小さく頷くと、自身の心中を語っていく。

「それでも、あたしは絶対に逃げない。たとえ一人でも戦おうって気のある奴がいるならあたしは全力でそいつの面倒を見なきゃならない、隊長だからな。だが逃げたいって奴を止めるつもりもない。今回の敵は尋常じゃないくらい多いんだ、ライダーだって無事じゃ済まないかもな。」

そう言つて久賀達は苦笑する。他の者達はというと、皆神妙な面持ちで彼女の話しを聞いていた。

「だから怖くて逃げたいって奴がいるなら遠慮なく逃げる・・・止はしない。だが戦うつもりのある奴がいるんなら・・・安心しな、どこまで出来るか分からないがあたしが責任持つて全力で面倒みてやる。」

シニカルな笑みを浮かべながら久賀達はそう口にした。と同時に、戸高が彼女に声をかける。

「隊長、そろそろ・・・」

「ん？ ああ、それじゃ最後に・・・怖くて逃げたいって奴は今ここで逃げてもいいぞ。んで、逃げずに戦う気のある奴は・・・全員ヘルメットを被りな。」

久賀達がそう言った瞬間、全員一斉にヘルメットを頭に被った。そ



の様子を見て久賀達は苦笑しつつ彼らを見て - - -

「シャドウにようこそ。」

久賀達は、彼らを歓迎した。

## 第54話 発動、エリアZ防衛戦（後編）（後書き）

という訳で今回は2話連続でお送りしました。

ひよりの強がりとは原作より早めに気が付きました。久賀達にも妹がいましたから、そこから来る経験談でひよりの心境を察した感じですね。

ZECTは原作よりもしっかりと対策を立てて戦いに臨みます。この作品では戦闘部隊を統括する大和がいますし、シャドウもバッチリ存在していますので。

次回からは激戦が繰り広げられる予定です。どんな戦いになるかお楽しみに。

それでは。

第55話 激戦・エリアZ防衛戦（前書き）

どうも、黒服です。

今回はいよいよNECTとワームの真つ向勝負、迫力ある戦闘シーンが描けてると良いのですが・・・

## 第55話 激戦・エリアZ防衛戦

エリアZ・ワーム予想進行ルート・

もはや廃墟となり、今は人がほとんど住まなくなったエリアZ。7年前の渋谷隕石による影響が未だ残っており、人がいない為風が吹く音以外は不気味なほど静かなその地は今――

無数の異形が闊歩する足音が響きわたっていた。

エリアZへと向けひたすら進み続ける無数のワーム達。その数は大地を埋め尽くすほどで、もはや数えるのも馬鹿らしく思えるほどだった。彼らの目的はエリアZのあるマスクドライダーシステム開発施設、そこで彼らが何をするつもりなのかは分からない。もしかしたら自分達様にマスクドライダーシステムを作るつもりなのかもしれないし、或いはマスクドライダーシステムのデータを入手しシステムを無力化したりするつもりなのかもしれない。

しかし、ワーム達のそんな行動を黙って見過ごす程ZECTも馬鹿ではない。既に組織的な行動によってある程度の防衛線は構築されつつあった。

「織田隊長！ 来ました、ワーム共です！！」

ワームの進行ルート上を見渡す事が出来る陣地にいた一人の兵がワームの姿を確認して報告した。その兵士のシルエットは他のゼクトルーパーと変わらないが、配色が銀のボディアーマーに青いラインと通常のゼクトルーパーと異なっている。彼の視線の先には、同様のボディアーマーに身を包んだ一人の男性・織田 秀成の姿があっ

た。彼らこそ織田の率いる特殊遊撃隊である。

「うっし！ 来たぜ影山、気合入れてけよ。」

「了解です！」

織田は近くにいた影山に声をかけると、彼と共に近くの障害物に身を隠す。程なくして現れるワーム達、進行速度は速いとは言えないが確実に隠れる織田達に近付いていた。

(よし、来い来い来い！)

近付いてくるワーム達に、織田はほくそ笑みながら息を潜める。そしてワーム達がさらに彼らに近付いていったその時、出し抜けにワーム達があるいていた地面が陥没した。

『……っ？！?！?』

突然の事に混乱するワーム達。傍から見るとそこは半円形にくり抜かれた様に窪んでおり、その様子は落とし穴を彷彿とさせた。ワーム達は何とか穴から抜け出そうと奮闘するが、今度は穴の底が爆発を起こす。どうやら落とし穴の底に地雷を仕掛けるという二段構えのトラップだったらしい。

とはいえ相手はワーム。半数近くは今の爆発で消し飛んだがまだまだ何体も穴の中に残っている。そのワーム達があと少しで穴から抜け出そうになった時、今度は無数の銃弾が襲いかかってきた。

「撃て！ 後続が来る前にこいつ等を倒すんだ！」

影山は他の隊員に指示を出しつつPホッパーに変身、織田も続いて

ヘラクスに変身した。その間にもワームに対する銃撃は行われ続け、数分としない内に穴の中に落ちたワーム達は殲滅される。元より穴に落下した時と爆発でダメージを受けていた為、倒す事自体は容易になっていたのだ。

「さうで、先発は簡単に凌げたが、次どう来るか」隊長！ 来ましたぜ、ワームの増援です！」おっと、無駄口叩いてる暇はなかったか！

ヘラクスが一息ついている間もなく新たな敵の接近。激戦に備えルート上のゼクトルーパー達はワームが向かってくると思われる方に向け銃口を向けた。

同時刻・ ルート

「A・B小隊、射撃用意！ C小隊は牽制射撃、D・E小隊は周辺を警戒しろ！」

矢継ぎ早に命令を下していくKホッパーの視線の先には、今正に彼らに向かって歩みを進めるワームの大群が見えていた。既に他の部隊は攻撃を開始しており、辺りは無数の銃声が鳴り響いている。

「隊長、ワームの一部が正面に集中しています。」

「よし。A・B小隊、一斉射撃開始！！」

頃合いを見計らったKホッパーの命令を受け、シャドウ第1番隊の隊員達が一斉に攻撃を開始。それに呼応するように他の部隊も正面に集結したワーム達に対し銃撃を始め、たちまち正面は無数の銃弾が飛び交う弾丸の嵐になった。今回の作戦ではより確実に防衛を達

成できるようにとシャドウ以外にも多くの部隊にガトリングガンが急遽回されたので、正面に立っているワーム達は堪ったものではない。あつという間に先頭の集団が蜂の巣にされ、続くワーム達も次々と銃弾に倒れていった。

「現在の被害はどうなっている？」

「このルート上に展開しているシャドウには今のところ被害はありません。ただ戦線の一部ではワームに突破されたところもあり、そこでは少なくとも被害が出ていると・・・」

通信用のバックパックを背負った隊員に現在の状況を訊ねると、あまり芳しくない答えが返ってきた。

「もう突破されただと？・・・成虫体か。」

予めブリーフィングでカッスワーム以外に成虫体がいるという報告はされていた。だが現状その存在は確認されておらず、Kホッパーの担当する区域ではサナギ体のワームのみが確認されていた。

「今から突破された戦線の補強に向かう。先発はD小隊、A小隊は殿でついてこい。」

現在の状況からこの戦線は一旦他所の部隊に任せても大丈夫そうだし、そう判断したKホッパーは、部隊を率いて戦線の補強に向かうのだった。

## ルート

その一方、久賀達が率いる第2番隊が控えるルートでは他に比べ

てかなり大人しい戦いになっていた。銃声も響いてはいるが何処か散発的で、御世辞にも効果的とは言い難い弾膜が張られている。

(あと少し……)

それは久賀達率いるシャドウ第2番隊も例外ではなく、狙いは正確でも弾膜は薄く、攻撃の要たるガトリングガンに至っては構えられているだけで一発も発砲されてはいない。そんな状況であるにも拘らず久賀達は何の指示も出さずただジツと戦況を眺めていた。

「隊長、流石にワーム達との距離が危険な域に達しました。そろそろ……」

「まだだ、他の部隊にも今の攻撃を続けさせる。」

この状況に危機感を感じた戸高が久賀達に何事か進言しようとするが、久賀達はそれを突っ撥ねてひたすら今の攻撃を続けるように指示する。その間にもワームとの距離は徐々に近づいていき、次第に他の部隊の者達に戸惑いが生まれ始めた。

「隊長？」

先頭集団のワーム達が目の前に迫る。ここまで来るとそう間をおかず銃撃ではなく接近戦で対応しなくてはならなくなるだろう。それでも久賀達は微動だにしない。

「隊長！ そろそろ不味いですよ!？」

「……ッ!」

これ以上は危険だと感じた播磨が堪らず声を上げる。その瞬間、久賀達の表情が一変した。



「全員伏せる！！」

久賀達が発したのはその一言、非常に簡潔な言葉だったがそれを聞いた者達は一斉にその場に膝を折ってワーム達に背を向ける様にその場にしゃがみ込んだ。それとほぼ同時に、久賀達は手に持っていたスイッチを押し込む。

瞬間、ワームの集団のど真ん中で激しい炎が噴き上がって何体かのワームが吹き飛んだ。

「総員攻撃開始！ 爆心地を避けて目の前と後方の敵に狙いを定める！！」

「了解！」

久賀達の指示が飛ぶと同時に、それまでの弾膜が一変し凄まじい銃撃が行われ始める。それまで火を吹かなかったガトリングガンも加わって、その様子はさながら銃弾の壁を思わせた。瞬く間に銃撃に倒れていくワーム達、そんな中爆心地にいて未だに消し飛ばさず立ち往生している燃えたワームに何発が銃撃が当たり倒される。

「爆心地の奴らには攻撃するな！ 壁を減らす気か！！」

先程爆発したのはただの地雷ではなく、炎が多く吹き出る様に火薬を調整されたナパームの様な物だった。炎を撒き散らす事を目的としている為爆発による攻撃力は見た目ほど高くは無いが、吹きあがった炎が周囲や爆心地にいるワーム達を焼く。

相手はワームであるのでこの程度で倒れる者はほとんどいないが、その炎は爆心地周辺にいたワーム達を混乱させその場に立ち往生さ

せるには十分だった。

まず真つ先に先頭集団のワーム達が蜂の巣にされ一掃され、爆心地の後ろにいた集団は立ち往生するワーム達が邪魔をして前進できない。そうこうしていると先頭集団を始末し終えたゼクトルーパー達の銃撃が次の後方の集団を狙った。

今のところ戦況はZECTに優勢、組織的な行動が出来ている事もあるが最大の理由はこうして罨を張る事が出来た事にある。

俗に、『攻城には籠城側の3倍の戦力が必要』などと言われる。これは本来大群で城を囲んで短期戦に持ち込めばすぐに敵の兵糧が尽きるという日本の兵糧攻めに対する意識の低さを示したものであるが、見方を変えれば城を攻める時は相手側が罨を張っているから3倍の戦力を用意しておかなければならないとも言えた。

今の状況もまさにそれであり、ZECT側は地形を利用した布陣を敷いてワームを迎え撃っている。ゼクトルーパー達の士気も高く、このままいけば何とか防ぎきれる……そう多くの者が思っていた。

しかし、この場にいる者の中で久賀達だけは未だ険しい顔をしていた。

(初っ端は凌げたが……連中も馬鹿じゃねえからな。次はどう来るか……)

今まで最前線で何度もワームと戦ってきたからこそ分かる。ワームはこの程度で凌げるほど甘くは無い、必ず何らかの方法でこちらの防衛線を食い破ろうとする筈だ。

「隊長！？ 別の集団が3時の方向から接近してます！！」  
「ッ！？ やっぱ来たか！」

彼女が別動隊を警戒して何らかのアクションを起こそうとした矢先、ワームの方が先に行動を起こしてきた。地雷を設置した場所とは全く異なる方向からの接近。その報告を聞いた瞬間久賀達は内心で舌打ちしつつも即座にそちらに向かうべく部隊を率いていく。

一瞬この場を離れても大丈夫かと不安になったが、ワーム達は現状上手い具合に足止めされている。成虫体もとりあえず確認できてはいないので、ここは他の部隊に任せても大丈夫そうだと判断し改めてワーム側の増援に対処するべくそちらに向かって行った。

#### エリアZ・作戦指揮所

エリアZ防衛網の最終防衛ラインに設置された作戦指揮所、そこは銃弾こそ飛び交ってはいないモノのこちらもある種の戦場と化していた。

「ルート、第1防衛ラインを敵が進撃しつつあり！」

「ルートと ルートの間にワームの別動隊を確認！ 現在シャドウ第2番隊が迎撃しています！」

「ルートの側面から新たなワームの集団接近！ 側面を突かれたエリアCの部隊から救援要請！」

「織田の部隊を今すぐ向かわせる。全部隊にも徐々に後退し、防衛ラインを下げるよう通達を。」

戦闘が開始されてから早数十分、報告にやや芳しくないものが出る

ようになってきた。大和はその報告に努めて冷静に指示を下していくが、その内心では苦い顔をしている。

（見積もりが甘かったか、連中思ってた以上にここいらの地形を知っているな。）

先程から何度も報告が入っていたが、ワーム達は廃墟を上手い具合に利用してこちらの死角から突然現れては部隊に大なり小なり打撃を与えてくる。これが地味にこちらのペースを乱しており、戦線に乱れが生じ始めていた。

これ以上はマズイと大和は戦線を第2防衛ラインにまで下げる事を決意し、展開している全部隊に対し後退を指示。同時に体勢の立て直しをさせた。

大きな机の上に表示されたエリアZの勢力分布図、そこに描かれたZECTの部隊のマークが徐々に下がっていくのを見ながら大和はどのようにして凌いでいくかを考えていた。

## ルート

Pホッパー率いるシャドウ第3番隊がいる ルートでは、司令部からの命令通り後退が開始されていた。

戦いの序盤こそ罨を張ったりするなど対処できていたが、時間が経つにつれて戦線が拡大しシャドウも特殊遊撃隊も ルート周辺に引っ張りだこになってしまふ。そこへワームが群れをなして雪崩れ込んだり成虫体が戦線をかき乱すなどをしてかなりの打撃を受けてしまった。シャドウ第3番隊も決して無視できない被害を被り始め

ている。

さらに災難だったのは、このルート上にカッシスワームが現れた事だった。

「はっ！」

「ぐあああああっ?!」

また一人、ゼクトルーパーがカッシスワームが擬態した男の手にかかり宙を舞った。ワームの状態でもそうだがこいつは擬態した状態でもとんでもない戦闘能力を誇っており、サナギ体のワームに混じって現れては必死に応戦しているゼクトルーパー達に襲いかかる。

この辺りに展開した部隊を指揮している田所は当然ながら何度も救援を要請したが、予想以上に広がり過ぎた戦線のおかげでシャドウも特殊遊撃隊も到着に時間がかかっていた。

指揮を執る為に乗りこんだワゴン車のモニターには、着々とワームが防衛ラインを進んでいる様子が映し出されている。その様子に田所が苦い顔をしていると、作戦司令部から第2防衛ラインまで撤退するよう指示が来た。

「これ以上は厳しいか！ 撤退だ！？ 第2防衛ラインまで撤退しろ!」

田所の命令は前線指揮を取っている岬の耳にも即座に届き、周囲に展開しているゼクトルーパー達が続々と撤収していく。中には戦闘で負傷して他の隊員に肩を貸して貰いながら撤収する者もいるが、その数はあまり多くは無い。

これだけ聞くとこの辺りに展開していたゼクトルーパー達が優秀ともとれるが、実際は撤退出来ているのはワームと至近距離まで接近しなかった者たちばかりで肩を貸して貰っているのは運悪く接近戦をしてしまった者達の一部である。彼ら以外の接近戦をした者達がどうなったか、それは少し考えれば容易に想像が付くだろう。

それはともかく、結果として負傷者の数が少なかった事で撤退は滞りなく完了し岬の周囲には逃げ遅れた者などいない。後は彼女ただ一人である。

岬は周囲を確認し、もう誰も残っていない事を確認してその場を離れようとした。その時である。

「ッ!？」

「君は愚かな人間にはは見込みがある。」

突然目の前にカッシスワームが擬態した男が降ってきた。

「俺の餌に相応しい。」

そう言っって人間の擬態を解くカッシスワーム。逃げようにも撤退すべき方向はカッシスワームの向こう側、後ろに行けばサナギ体の群れが待っている。

万事休す、岬が後退りしながら諦めかけたその時何者かが岬とカッシスワームの間に割って入りワームの右腕のサーベル状の突起を弾き斬り付けた。

「剣君・・・!？」

「岬は俺を守る・・・」

《Stand by》

岬とワームの間に割って入った人物・・・神代 剣は岬を後ろに庇いながら、サソードゼクターを呼び出してヤイバーにセットする。

《Henshin》

神代の変身したサソード・マスクドフォームがカッシスワームの前に立ち塞がるが、カッシスワームは彼を脅威とは感じていない。何故ならつい先日サソードはカッシスワームに惨敗しているのだ。カッシスワームにしてみればサソードが敵になるなどありえなかった。

「どう守るといふのだ？」

「俺は・・・俺の全てを捧げる！」

嘲る様に言うカッシスワームに対して、サソードは徐にサソードヤイバーを投げ捨てて岬を抱きしめた。その彼の背に無情にもカッシスワームのブレード状の左手が振るわれる。

「ぐっ!? がはっ・・・がっ?!」

ただでさえ強力なカッシスワームの攻撃を無防備に喰らい続けて体が持つ訳がない。サソードは前のめりに倒れ込み、岬は彼に押し倒される様に後ろ向きに倒れてしまった。

「ほう、健気な態度だ・・・だが何処まで持つかな？」

サソードの様子に一瞬だけ感心したような素振りを見せるカッシスワーム。そしてそのまま倒れ込んだサソードの背に何度も左手のブレードを叩き付けた。

何度も振り下ろされるカツシスワームの攻撃に、サソードの口から苦痛の呻き声上がる。相当な強度を持つ筈のマスクドアーモ어도重なる攻撃に限界が近付いたのかボロボロの傷だらけとなり、マスクドフォームのサソード最大の特徴であるオレンジ色の管『ブラッドベセル』も何箇所か切断され内部を流れていた『ポイズンブラッド』が流れ出していた。

「もういい！？ やめてえ！！」

サソードの痛々しい様子に溜まらず悲鳴の様な声を上げる岬。だがサソードは構わず岬を庇い続けながら、精神力を総動員して言葉を紡いだ。

「俺は岬の言う通り、現実を受け止めなかった。今の俺はあいつには勝てない……だが！ 岬を守る事なら出来る！！」

「剣君……」

サソードの言葉に力無く彼の名を口にする岬。そんな彼らに構わずカツシスワームはサソードにトドメを刺すべく左手を掲げた。

「ライダースラッシュ。」

「ッ！ クッ！？ ぐわあああっ?!」

カツシスワームの放った『コピー・ライダースラッシュ』が炸裂する瞬間、サソードは残った体力を全て使って岬を守る様に覆いかぶさる。その甲斐あつてかカツシスワームの攻撃に二人一緒に吹き飛ばされた先でも岬はほとんど無傷の状態だった。その代わり、変身が解けた神代は満身創痍と言う状態だったが。



「剣君！？　しっかりして！」

神代の状態に必死に彼を揺さぶる岬、そんな彼女に対して神代は弱々しくも言葉を発する。

「い、いいんだ・・・もう行ってくれ。これまで岬の気持ちに、気付かずに、突き纏って悪かった。」

「・・・何で急にそんな事を？」

「俺は、現実を見る事においても・・・頂点に立つ男だ・・・」

こんな状況であるにも拘らず、何時もの決め台詞を口にする神代。それはいつも通りだったが何時もより弱々しく、そして何時もより気高く岬には感じられた。

「さ、さあ・・・行ってくれ、岬・・・」

「ミサキー又で・・・いいわ。」

そんな彼だからこそ、岬は彼にミサキー又と呼ぶ事を許したのだった。

その後やってきた救護班に神代は護送されていき、それを少し離れた所から天道と加賀美が見送っていた。

「剣の奴、強がりやがって・・・」

「強がり・・・そうか、そうだな。強がりだな、きっと・・・」

加賀美が神代の様子を見て何気なく呟いたその言葉に、天道は違うモノを感じていた。思い起こすのは最愛の妹と、彼にとっては何かと因縁めいたものがある一人の女性の言葉。

「ひよりの奴も、もしかしたら・・・」

「そうだよ、そうに決まってる！ ひよりもこの世界に帰りたいと思ってるんだよ！！！」

加賀美の興奮した様子の声を聞きながら、天道はひよりの描いた絵に目を向けた。最近描いたと思われるその絵は、この世界に絶望したとは思えない優しい描き方をされている。その絵に天道は希望を見出したいた。

(ひより・・・)

ひよりはまだこの世界を望んでいる・・・それは天道にとって、これ以上ないほどの希望の光だった。

ZECT本部

エリアZで激戦が繰り広げられている中、総帥たる加賀美 陸は一人本部の自室で1枚の報告書に目を通していた。

『久賀達 時雨の他隊員への暴行に関する報告』・・・報告書の一番上にはそう書かれていた。

『・・・日、ZECT本部直属精鋭部隊シャドウ第2番隊長・久賀達 時雨が一般隊員に対して重傷を負わせるほどの暴行を行った。

詳しい経緯は不明だが、たまたま近くを通りかかったシャドウ第1番隊長・矢車 想と同じくシャドウの第3番隊長・影山 瞬の証言によると暴行を受けた隊員達が何事かで久賀達 時雨を罵倒。矢車 想と影山 瞬がその場に割って入ろうとした瞬間それまで黙

つっていた久賀達 時雨が突然隊員達に襲いかかり、矢車・影山両名の制止も聞かず隊員達に暴行を続けたと言う。

暴行を受けた隊員達が身動きできないほどの重傷を負った辺りで漸く久賀達 時雨は暴行を止め、即座に取り押さえて事情聴取を行うも本人はその事に関して全く覚えがないと言っていた。念のため機材を使うなどして虚偽の報告をしていないか確認したが、結果は確かに彼女はこの件に関して何も覚えていないとのことだった。

今回の件で暴行を受けた隊員達はいずれも日常生活に支障をきたすほどではないモノの、もはや戦闘行為を行うのは不可能な状態になつてしまったのでZECTから脱退。この件で総帥側近の三島 正人から久賀達 時雨を追放するように命令が出たが総帥権限で即座にそれは取り消され、この件に関しては緘口令が敷かれることとなった。

それに合わせて本報告書も総帥のみへの提出に留め、データベースからもこの件に関しては削除された事をここに記す。』

陸はそこまで読むと、報告書を机の上において別の報告書に目を向ける。そこには2度に渡るザビー暴走に関する内容が記されていた。

「彼女の蒔いた種は順調に育ち、そして見事に芽吹いた……  
これでいい。」

そう呟くと陸は報告書から目を離し窓の外に目を向けた。

「私の息子が道を開き、雪乃君の娘が人々を導き、日下部君の息子が人々に希望を与える。これで……」

そんな事を口にしていく陸の様子は、何処か誇らしげであり同時に何処か懺悔している様でもあった。だが、その姿を目にする者は誰もいない……

エリアZ・ルート

現在 ルートは激戦となっていた。流石に敵味方が入り乱れる乱戦という最悪の事態にはなっていないが、ワームは戦力を集中し始めたのか倒しても倒しても敵が全く減らない。

「くそっ！？ 影山んところがヤベエって時に！！」

ルートにカツシスワームが現れ大打撃を受けたという報告は既にザビーの耳にも届いていた。その方面に展開している影山の部隊も複数の成虫体を含んだワームの群れに足止めされているので急遽そちらの救援に行こうとした矢先、突然ワーム達が大攻勢をかけて来たのである。

どうやら打撃を受けて出来た穴を埋めさせない為にここにまとまった戦力を集めて足止めしようと言う事なのだろう。もう一つのシャドウの部隊である第1番隊は ルートを挟んで ルートと正反対のルートに展開している。とてもではないが ルートに救援には行けない。

こうなると頼みの綱は織田の率いる特殊遊撃隊のみになるのだが、生憎と彼は穴埋めではなく影山の援護に向かってしまった。間が悪いとも言えるが影山の方には成虫体が4〜5体現れたのだ。彼一人でそれを捌ききるのは難しく、ここでの織田の判断は決して間違っではない。ただワーム達が巧妙に戦力を動かしたと言うだけの話

である。

「隊長！ エリアH所属の部隊から救援要請です！ それと作戦司令部から、動ける部隊は至急 ルートの補強に向かえと・・・」  
「今はこつちも手一杯だ！ エリアHの連中んところには他の部隊を行かせるー！」

ザビーは報告してきた通信士に半ば怒鳴る様にして指示を出す。この激戦で指揮官が居なくなってしまった部隊もいくつか存在しており、彼女はこの方面のシャドウと言う事で臨時に彼らに対しても指揮を執っていたのだ。この修羅場に流石の彼女も完全に余裕を無くしてしまった。

「ルートへは「行けると思ってたのか！？ 今は目の前の敵に集中しろ！！？」りよ、了かがっ？！」

「ッ！？ クロックアップ！」

《Clock up》

ザビーが通信士に指示を出すと、出し抜けにその隊員が叫び声を上げながら吹き飛ばされる。それを見た瞬間咄嗟にクロックアップを発動すると、彼女の目の前にちょうど目の前を通り過ぎたばかりの紫の外皮に巨大な鉤爪を持ったベルバーワームの姿が。

「コイツッ！？」

ザビーはそいつの姿を確認するなり一気に飛びかかり、次々と拳を叩きつけていく。ベルバーワームも反撃するがザビーには掠りもしない。

「ライダースティング！」

《Rider Sting》

ザビーの必殺技が決まるとベルバーワームが爆発し同時にクロックアップが解除、手で掴めそうな速度だった銃弾が一瞬で見えなくなり通常の数に帰っていく。

そして吹き飛ばされた隊員の方を見ると、彼の容体を確認していた隊員が首を横に振った。

「ちっ！ 檜和田、通信士を引き継げ！！」

「了解！」

ザビーはそちらを見て仮面の下で苦虫を噛み潰した顔になると、即座に檜和田に通信士を引き継がせて再び戦場に目を向ける。この一瞬一瞬で気が抜けない現状、周囲とコミュニケーションをとる手段である通信士の存在は無くしてはならないモノだ。

「これ以上は厳しいか、檜和田！ ここいらの連中に一時撤退を指示しろ、一度引いて体勢を立て直す！！」

「了解！ ルートに展開している各部隊は中間地点まで順次撤退。繰り返す、ルートに展開している各部隊は……」

「シャドウはそれまで殿で味方の撤退の支援だ！！」

周囲の部隊が防衛ラインの間の中間地点へ順次撤退していく中、ザビーは一目散に前面に出てひたすら敵を薙ぎ払って行く。サナギ体は瞬く間にザビーに蹴散らされ、その合間を縫うようにゼクトルーパー・シャドウからの援護射撃がワームを蜂の巣にしていた。

それでもワームの数は一向に減る気配を見せない。

「はっ、はっ、ここは・・・地獄だな・・・これ位じゃ生温  
いか。」

ザビーはふと口にした言葉に一瞬自嘲する様に笑みを浮かべるが、  
それがいけなかったのか生まれた隙を突いて一斉にサナギ体ワーム  
達が飛び掛かってきた。

「っ！ ヤバッ?!」

「隊長!？」

咄嗟に回避しようとするが、一瞬油断していた事で反応が間に合わ  
ない。目の前に何体ものワームが迫り、戸高達の声が耳に入る中 -  
-

ザビーの・・・久賀達の意識は闇に落ちた。

## 第55話 激戦・エリアZ防衛戦（後書き）

と言う訳で第55話でした。

剣が岬を守るシーンは特に手を加えませんでした。あそこは彼が一人身を呈して岬を守ることにこそ意味があると思ったので・・・  
戦いの序盤は行けそうな雰囲気でしたが、そこはやっぱり相手がワーム、そうそう上手いく筈がありません。徐々に圧されていきま  
す。

次回の更新も楽しみにしてください。それでは。



第56話 狂気との対話（前書き）

どうも、黒服です。

今回は久賀達らシャドウ第2番隊での描写がほとんどです。

## 第56話 狂気との対話

エリアZ・ルート

・ ルートが窮地に陥っている中、ここ ルートは比較的少ない被害で今のところ持ち堪えていた。この方面に展開しているシャドウの隊長・矢車の手腕は元より、他のルートに比べて攻撃が激しくない事が関係しているのかもしれない。

とはいえそれでも激戦は激戦であるのだが・・・

「ぐあぁっ?!」

ワームの集団に向かってガトリングを連射していたゼクトルーパー・シャドウの一人が出し抜けに叫び声を上げながら後ろに倒れた。近くにいた者がその兵の状態を見ると、胸部のボディーマーが常識外れの大きさの針で貫かれているのが見て取れる。恐らく成虫体のワームによるモノだろう。

倒れた者の安否を軽く確認して既に事切れているのを見ると、容体を確認していた兵士は倒れた者が取り落としたガトリングガンを拾ってワームの集団に向かって発砲した。依然としてワームはかなりの数が向かって来ていたが、心なしか先程より数が減っている気がする。他のルートに戦力を振り分けている事でそのしわ寄せが回ってきたのだろうか。

この状況を好機とみたのか、Kホッパーは一気に攻撃に打って出る。シャドウを率いて一気にワームの集団に突撃を敢行したのだ。

「A・B・C小隊、射撃開始と同時に前進！」

Kホッパーの号令と共に一斉に放たれる銃弾がワーム達に突き刺さり、それまでの攻防から受けていたダメージで次々とワームが爆発する。

しかしそれも先鋒の集団のみ、銃撃をまともに浴びていない後方のワーム達は多少マシンガンブレードの銃撃を受けても構わず前進してくる。

「前方伏せ。D・E小隊、グレネード！」

その様子にKホッパーは慌てることなく前方に展開している3つの小隊を伏せさせると、後方に展開している2つの小隊が装備しているマシンガングレネードに砲撃を行わせた。使用する弾はワーム専用強化された火力を持つ炸裂弾、一撃でワームを倒す事は出来なくとも大きなダメージを与える事は出来る。案の定放たれたグレネード弾は次々とワームに襲いかかり、その進行を止めさせた。

「前進、銃撃開始！」

そして再度行われる前進と銃撃に、さらに多くのワームが撃破されていく。一糸乱れぬシャドウの前進に、他の部隊も呼応する様に攻勢に出始めたその時・・・

「隊長、ワームが次々と後退していきます」

「何？」

Kホッパーが訝しげな声を上げる前で、先程まで視界を覆い尽くす様に存在していたワームの大群が次々と姿を消していく。もしや諦

めたのか、そんな考えが一瞬彼の脳裏に浮かぶ。

（いや、違うか・・・）

だがその考えを彼は即座に否定した。この場では戦況はZECT側に傾いていたが、エリアZ全体で見れば戦況はむしろワームの方に有利だったのだ。ここでワームが諦めて退くことはあり得ない。

「追撃しますか？」

「いや、こちらも一度退避して体勢を立て直す。全部隊に指定の場所まで退避する様に伝える」

「了解！」

しばしの思考の末、Kホッパーはこの撤退がワームの次の攻撃の予兆であると結論付けた。少なくとも体勢を立て直した状態で再び攻撃を仕掛けてくるのは確実だろう。となればこちらでも万全の状態にしておかなければならない。

「他のルートではどうなっている？ 久賀達と影山は？」

一息つける状況になった事で多少余裕が出来たのか、Kホッパーは一度変身を解いて通信士に他のルートの戦況を訊ねた。最後に聞いた報告では、ルートが危険な状況であり、ルートにも大攻勢がかけられているとのことだ。あれから事態が悪化している様であれば、場合によっては即座にそちらに援護に行かねばならない。

「その事ですが、つい先程新たな情報が・・・」

矢車の問い掛けに通信士はやや重苦しい声で言葉を紡ぐ。彼はそこで驚愕の情報を耳にする事になる。

「他のルートでもワームの撤退が見られたようですが、ル  
トはどちらも被害甚大。特に ルート上に展開していたシャドウ第  
2番隊の久賀達隊長が戦闘不能になったと」  
「何っ!？」

数十分前

矢車が驚愕の報告を耳にするよりも前、久賀達の意識は闇の中にあ  
った。

「……また、会ったね」

「お前は……」

そこで久賀達はまたしても謎の人影に出会っていた。相変わらず周  
囲は闇に包まれており相手の存在も薄らとしか確認できないが、ど  
うやらこちらに背を向けているらしい。

「お前が何なのかも気になるが、今はそれどころじゃない。ここは  
何なんだ？ どうすればここから出られる？」

ここに来る前の記憶ではまだ戦闘は終わっておらず、彼女の部下も  
奮闘していた筈である。自分だけこんな所で悠長に構えてはいろれ  
ない。

だが彼女の質問に相手は何も答えない。

「おい、聞こえてんだろ。一体何なんだここは？ あたしはさっさ  
と戻らないといけないんだ、どうすれば戻れるか教えて」

それでもしつこく質問を続けてみるが、相手は一向に答える気配がない。焦れた久賀達は最終的に怒鳴る様に声を掛けた。

「何とか言えよ！ どうすりゃここから出られるんだ、おい！！」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・あたしが誰かって？」

久賀達の怒鳴り声が消えてしばらく経ってから、漸く相手は反応を示した。以前シルエツトだけの存在だったが、相手はゆっくりと立ち上がる。立ち上がった相手はゆっくりと振り返り、久賀達の方に向かって歩いてきた。

「分からないフリなんかしちゃって・・・・・・・・本当は気付いてるくせに」

周囲は依然として闇に包まれているが、相手が近付いてくるにつれて臆気ながらその姿が見えて来た。だが――

「でもま、言ってほしいなら言ってあげる・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・ツ！？ ま、まさか、そんなんっ？！」

次第にはつきりと見えて来たその姿は、久賀達にとって驚愕以外の何物でもなかった。何しろその姿は他ならぬ――

「あたしは・・・・・・・・お前自身だよ」  
「ザビーッ!？」

久賀達が変身する、仮面ライダーザビーの姿に他ならなかったからだ。

ただ、普段の久賀達のザビーと違いその複眼は血の様に赤く染まっ  
て輝いていたが・・・

「何だお前・・・一体何なんだ!？」

「聞こえなかった？ あたしはお前、久賀達 時雨自身だって・・・  
言っただろ？」

あまりの事に冷静さを失っている久賀達に、ザビーは何処か虚ろな  
声でそう答えた。よくよく聞いてみれば、その声も久賀達のモノと  
全く同じだ。目の前に変身した自分がいる、その事は久賀達から冷  
静さを完全に奪い取っていた。

「ふざけるな!？ 何であたしが変身してて、目の前にいるってん  
だ？ 訳が分かんねえだろ!?!？」

「だって・・・お前ずっとあたしを閉じ込めてたんだぞ？ 4  
年もずっとこんな所に閉じ込められたら元の姿なんてなくしちまう  
よ」

喚き散らす様に怒鳴る久賀達に、不気味な笑い声を上げながら答え  
るザビー。まるで地獄の底から響いてくるかのようなその声に、久  
賀達は全身が粟立つ様な感覚を覚える。

「4年前・・・お前は家族を一気に失って地獄に叩き込まれた。  
頼れる奴は誰もいない、助けてくれる奴もいない・・・お前はそ  
んな世界に絶望した」

「だから・・・なんだってんだ？」

ザビーの言葉は嫌に久賀達の心に響いてくる。それはとても不快な  
感覚で、思わず吐き気が込み上げてくるほどだ。

これ以上話させてはいけない。これ以上奴の話聞いていたら、何かとんでもない事になってしまう。自分の中の大切な何か壊れてしまう、そんな思いさえ浮かんで来た。

だが久賀達は、どうしても力付くでザビーを止めようと言う気になれなかった。

「は、ははは・・・お前さ、そんな時こう思ったろ？ 『こんな世界無くなつちまえばいい、自分にとって生きる価値のない残酷な世界なんて壊れちまえ』・・・って」

「そんなこと」なのに「」

とんでもない事を言いだすザビーの言葉を否定しようとしたが、それはザビーに遮られる。

「なのに・・・変なところで助けが来ちまったから、お前は完全に絶望しきる前に希望を見出しちまった。おかげで世界に絶望しきった」『本当の久賀達 時雨』は心の奥底に押し込められて、代わりに『嘘の久賀達 時雨』を作りだして偽りの自分を演じて来た」

違う、そんな事は無い、確かに一度は絶望したが世界を壊そうなんて考えたりはしていない・・・そう言おうとした。

だが、それは出来なかった。代わりに口からは乱れた呼吸だけが出て、肝心の言葉は何一つ口から出てこない。

「・・・あたしは昔お前に追いやられた、『本当の久賀達 時雨』だ。ずっとここに閉じ込められてたけど、ザビーゼクターのおかげでこうしてお前の前になる事が出来た」

「何？ ザビー・・・ゼクターが？」



「この際だから教えてやるよ。ザビーゼクターが選んだのは嘘で出来たお前じゃない、このあたし自身さ。ザビーゼクターはあたしを求めてお前に近付いてきたんだよ」

もう久賀達は何も言えない。頭の中が真っ白になり、何かを考えようにも冬場に吐き出す吐息の様にあっという間に消えていつてしま

う。  
ザビーはそんな久賀達に向け、ゆっくりと近付いていった。

「さあ、お喋りはこれでお終いだ。『嘘』を演じ続けるのはこれでお終い、これからはあたしが表に出る。お前は……消えな

な」  
そう言ってザビーは久賀達の首に手を掛けてくる。久賀達はザビーのその手を振り払おうともせず、ただ視界が闇に覆われていくのを黙って見続けていた。

ルート

「撃て！ 隊長を援護しろ！！」

戸高は他の隊員に檄を飛ばして必死になってザビーに群がるワームに銃撃を叩き込んでいく。他の隊員も必死になって銃撃を加えていくが、砂糖に群がる蟻の様なワーム達を減らす事はなかなかできない。これ以上はザビーが危険だ、そう誰もが思っていたその時……

突然ザビーに群がっていたワーム達が一斉に爆ぜた。

「ッ!? 隊長!」

突然の事にシャドウもワームも一瞬動きを止めるが、ワーム達が爆ぜたその場所にザビーがしっかりと立っているのを見てシャドウからは歓声上がる。自分達の隊長は無事だった、これならもう大丈夫、と・・・

だがザビーが下に向けていた顔を上げた時、不意にそんな考えも吹き飛んだ。

「何だ? ザビーの目が・・・」

誰が言ったのかは分からないが、ザビーの目は普段と異なり真紅に輝いていた。それだけでなく、立ち上る雰囲気も普段のそれとは全く違う。まるで凶暴な肉食獣を目の前にしたような、そんな感覚を彼らは感じていた。

それはワームも同様だったのか、ザビーの周囲にいるワームは身じろぎもしない。ザビーはそんなワーム達に目を向けると・・・

「あ・・・ああ、ああああああああっ!!」

絶叫の様な雄叫びを上げながらワーム達に襲いかかった。まず最初に餌食になったのは不運にも手近にいたサナギ体のワーム。ザビーはそのワームの頭部を掴むと片手で振り回し地面に叩き付け、足で踏みつけるとその頭部を踏み砕いてしまった。

「うおおおおああああああああっ!!!?」

「おい、何か隊長おかしくねえか?」

突然のザビーの変化に彼女の部下が困惑する中、なおもザビーによる攻撃は続いていく。

いや、それはもはや攻撃などではない、虐殺だ。ザビーはワームの群れの中を駆け抜けながら手が届く範囲にワーム達を片っ端から殺して回っていた。

ある者は拳で貫かれ、ある者は鈍器の様に振り回され他のワームに叩きつけられる。

殴り、蹴り、貫き、刺し、抉り、引き裂き、踏みつけ、引き摺り回し、叩き付け、吹き飛ばす。正に全身を凶器としてザビーは周囲にいるワーム達を手当たり次第に攻撃していった。

そんなザビーの姿を見て、戸高は脳裏にこの作戦が行われる数分前の事を思い出す。

『いいか、戸高。もしあたしが・・・ザビーが何かおかしな行動をとったりしたら、構う事は無い、ザビーを倒せ』

『はっ?! 何を仰ってるんですか隊長!? そんな事出来る訳が・・・』

『そうしないと・・・あたしはお前達を殺しちまうかもしれない。だから・・・頼む』

「あれはまさか・・・この事を言っていたのか?」

「おい戸高よ、一体どうするんだ?」

ザビーの様子にその時の会話を思い出して戸高が戦慄していると、

播磨が不意に声を掛けてくる。現状ザビーがワームを攻撃しているのだから自分達も攻撃しなければと思うのだが、尋常ではないザビーの様子にそんな気も失せてしまう。

「……………撃て、ワームに対して攻撃開始！ 隊長を援護しろ！」

悩んだ末に戸高はザビーではなく、ワームに対して攻撃を指示。その言葉に周囲にいた隊員達は一斉にワームに対して攻撃を開始した。

（申し訳ありません隊長、やはり自分には隊長を撃つ事は出来ません！）

戸高が心の中で久賀達に謝罪する中、ザビーの奮闘もあり目に見える範囲にワームはいなくなっていた。

そして……………

「はあ、はあ……………」

周囲にワームの姿が見えなくなったと思ったら、今度はシャドウにザビーは標的を切り替えた。夥しい殺気を振りまいて近付いてくるザビーの様子に、流石の隊員達も只事ではない何かを感じ取っていた。

「おい、何か隊長の様子おかしくね？」

「隊長！ 一体どうしたんですか、しっかりしてください！！」

「ああああ……………ああああああああああ……………」

周囲の隊員が戸惑う中、戸高はザビーを正気に戻そうと必死に声をかける。ザビーはそんな彼の言葉を無視して駆けていき、戸高らにも襲いかかるうとした。

「うぐっ!? あ……が、うう……あ、あああ」

しかし、ザビーは途中で立ち止まりその場で苦悶の声を挙げ始める。そしてその場で滅茶苦茶に拳を振り回し始めた。

「うあ、あ、あああ、ぐううう、あがが、はあ、は……」

何かを振り払うように暴れるザビー、仮面の下では久賀達在必死に自分を抑えつけていた。

(やめる、やめる!! あたしは世界に絶望なんかしちゃいない、この世界にはちゃんと価値がある!? あたしはあたしだ、嘘だろうがなんだろうがあたしに変わりはない!! だからッ!!?)

「とまれええええっ!!!?」

ザビーがその声を張り上げると共に、変身が解除されて久賀達の姿に戻る。そして彼女は戸高達の方を見て彼らが無事だと分かると……

「何とか、無事、だったか……お前ら……」

そう言って笑みを浮かべながらその場に倒れてしまった。

「隊長!?!」

倒れた久賀達を見て急いで戸高達が彼女に近付いていく。そして彼女が気を失っているだけだと分かって一瞬安堵のため息をついたのだがそれも束の間、瓦礫の奥から再びワームがやってくるのが見えた。

「ッ!? 総員退避だ! 俺達もここから撤収するぞ!!」

戸高はもう一人の隊員と一緒に久賀達の肩を支えながらそう指示を出し、急いでその場から離れていく。その背後からは続々とワームが姿を現し、戸高達シャドウに襲いかかるうとしていた。

「クソが、この虫野郎ッ!」

葛西が戸高の退避を支援する為、前面に出てガトリングガンを乱射する。凄まじい速度で放たれる弾丸が次々とワームに襲いかかり、神田や播磨も彼と共に前面でワームを迎え撃つ。

「こちら ルート、久賀達隊長が倒れた! 救援を寄越してくれ!」

檜和田が通信機に向かって必死に声を掛ける中、戸高は何とか味方が居る所まで久賀達を引き摺っていく事が出来た。だが依然としてワームは迫ってきており、次第に彼らとの距離も近付いて来てしま

う。

「何体居やがるんだよこいつ等はッ?!」

「いいから撃ちまくれ!」

後ろに下がりつつも銃撃を行って行くシャドウ、そんな彼らの前でサナギ体のワームの一体がその体を膨れ上がらせる。

「ッ?! 戸高ヤバイッ! 一体脱皮し始めやがった!?!」

播磨がそう言いつつ脱皮寸前のワームに銃撃を行うがもう遅い。サナギ体の表皮がみるみる剥がれ落ちていき、その中から赤いからだともムカデの様な体を持ったジオフィリドワームが姿を露わした。

「くっ!?! A・B・C小隊、攻撃フォーメーションデルタで対応しろ!?!」

戸高の言葉と共に、3つの小隊が一斉にジオフィリドワームに攻撃を仕掛けた。A小隊は顔に、B小隊とC小隊は腋に向けて重点的な攻撃を仕掛けていく。苛烈な銃撃に流石の成虫体も怯んでしまい、顔を守るうと腕を上げた瞬間比較的防御力の弱い腋に次々と銃弾が突き刺さった。

「今だ! 全小隊、あのワームに攻撃を集中させる!?!」

その瞬間を見逃さず、過剰とも言えるほどの銃撃がジオフィリドワームに向けて放たれる。その攻撃に表皮をゴリゴリと削られていき、遂にその場に倒れて爆発してしまった。

「よし、やったぜ!」

「予断するな、まだ敵はいるんだ!」

成虫体を倒してことで一瞬歓声上がるが、次々と近付いてくるサナギ体のワームにそれもすぐに収まった。その後も撤退しながらワームを迎え撃っていくが、久賀達を守りながら退避しているのでどうしても速度が遅くなってしまふ。

「ええい、クソ弾切れだ!？」

「こつちもだ、畜生ッ!」

「誰か、誰か弾をくれ!？ ひっ、うわあああっ?!」

拳銃の果てに最後まで殿としていたツケが来たのか、弾切れを起こす者が続々と出始めた。それを狙っていたかのようにさらに激しさを増すワームの攻撃。シャドウの隊員にも徐々に倒れる者が出始め、あちこちで悲鳴が上がり始めた。

これ以上はもう駄目か、戸高がそんな諦めにも似た感情を思い始めたその時、突然マシンガンともガトリングとも異なる重さを持った銃声が辺りに響き渡り、次々とワームを撃ち抜いてった。

「ッ!? 救援か!」

「すまない、遅くなった! 早くこいつに乗れ!」

銃声が聞こえてきた方を見ると、そこには数台のバンが近付いて来ている。その内一台には車体上部に機銃が搭載されており、今もなおワーム達に銃撃を行っている。

戸高が近付いていくと、運転席に座っていたのは黒一色のボディアーマーを纏った一般兵がいた。何処の部隊かは分からないが、恐らくはシャドウが殿を務めている間に撤退していった部隊の者だろう。戦友達は彼らを見捨てなかったのだ。

車載機銃からの援護射撃を受ける中、次々とバンに乗りこんでいく隊員達。

「葛西、神田、播磨! 急げ!？」

「あいよ!」



「もう十分だ、行くぞ葛西!!」

「ああ、ちょうどコイツも弾切れだ!!」

そして最後まで残っていた播磨達が乗りこんで、急いでバンはその場を離れていく。

こうして彼らは、辛くもその場から離れていくのだった。

## 第56話 狂気との対話（後書き）

と言う訳で第56話でした。

以前久賀達が夢、と言うか精神の底で出会った人影の正体は、ザビーの姿をした久賀達本人でした。あのザビーが4年前の時点での久賀達本来の精神で、救出された直後に今の久賀達の精神が形成されたと言った感じですね。ただ今回の描写やこの言い方だと久賀達が2重人格の様ですが、決して2重人格とかそういうのとは少し違います。その所は今後明らかにしていきますのでお楽しみを。

ちなみに今回の話の終盤の描写はファンの間で名作と言われている『エイリアン2』の海兵隊とエイリアンとの戦いを元になっています。やっぱりエイリアンは最高だぁ・・・

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第57話 決着・エリアZ（前編）（前書き）

どうも、黒服です。

長らくお待たせしてしまい本当に申し訳ありません！！ 何分コラボとスランプが重なってしまったモノで、あと期末試験も（^^;）

## 第57話 決着・エリアZ（前編）

エリアZ・作戦司令部

突然のワームの撤退、この事態に大和は敵が一旦体勢を整えた後再び攻勢に打って出るつもりである事を見抜いて自身も残存している戦力に撤退を指示。残された戦力から防衛線の再編成に取り掛かった。

しかし撤収が完了し各地から受けた報告に、彼は頭を悩ませる事になる。残存している戦力は戦闘初期に比べて実に6割にまで減少していたからだ。一般部隊の損失は勿論大きかったが、それ以上に痛いのがシャドウ第2番隊長・久賀達 時雨の戦線離脱である。今回の作戦の要であるシャドウの一回が事実上崩れてしまったのは、大和にとっても頭の痛い事態であった。

（またザビーの暴走か・・・久賀達には悪いが、やはりザビーは封印した方がいいかもしれないな）

久賀達が戦闘不能になった経緯は、彼女の副官である戸高から既に聞いている。そして何があったのかを聞いた瞬間、大和は久賀達からどれだけ文句を言われようがザビーをこれ以上使わせないようにしようと考えていた。

「統括、田所チームリーダーが到着しました」  
「通せ」

大和が思慮に耽っていると、彼の補佐をしている人物から田所が司令部に到着した事を告げた。その報告を受けて、即座に彼を通すよ

う指示する大和。

許可が出ると同時に司令部の扉が開き、内部に田所が入って来た。

「失礼します。田所、ただ今到着しました」

「よく来た田所、まあこつちに来い」

室内に入って来た田所を手招きすると、大和は早速現在の状況を説明し始めた。

「現在の状況だが、ハッキリ言って厳しいモノになっている。戦力は4割減少、しかも久賀達が戦闘不能になって戦線離脱ときたもんだ」

「久賀達が戦線離脱？ 新たに幹部級のワームが現れたのですか？」

幹部級のワームとして報告されていたカッシスワームは田所達がいいたルートに出現していた。それに対して久賀達が担当していたのはルート。久賀達がただのワームに負けると思えなかったので、カッシスワームとは別の幹部級のワームが現れたのではないかと田所は考えたのだ。

「いや、そうではない。ただちょっとトラブルが起こってな」

しかし大和はこの件に関しては深く言及する事は止め、適当なことを言っただけで済ましてしまった。本来であればきちんと説明するべきなのだろうが、事が事だけに不安を煽るだけの可能性がある情報をこの場で明かす事は出来るだけ避けたかったのだ。特に田所の部下である加賀美のガタツクも、矢車の報告が確かなら久賀達のザビ―と同様暴走の可能性が無くもない。田所が事の詳細を知った場合、最悪加賀美を戦線から外してしまう可能性もあった。今は少しでも

戦力が欲しい現状、無駄な戦力の減少は得策ではないのだ。

「さて、それよりこれからどうしたものか・・・」

田所との会話を適当なところで切り上げ、大和は辺りの地形を映したスクリーンの目を向ける。ワームの方も現状大きな動きを見せていないが、そろそろ何かしらのアクションを起こしてくるだろう。そうなる前に防衛線を構築しようと、大和は頭を働かせるのだった。

数十分後・エリアZ最終防衛網

あれからしばらくして、ワームが再び動き出すと同時に最終防衛網の構築が完了した。ワームが撤退するより前の戦闘の段階でワーム側も少なくない被害を被っていた事を鑑みて、ZECTはワームが残りの戦力を一点に集めた正面突破をしてくると予想。それに備える為ワーム達が居る場所から見てエリアZの施設まで直線で結んだ所に残りの戦力の全てを結集させた。

恐らく次の戦闘でこの戦いにおける勝敗が決するであろう。そう誰もが考えていたその時、とんでもない報告が届いた。

「統括、大変です！？ 防衛網の側面を抜ける様に移動するワームの一団が確認されました！！」

「・・・やはり別動隊が動いたか」

この防衛網は少しでも長くワームの足止めをする為に、縦に長く陣を作っている。だがその半面、横にはどちらかと言うと狭い防衛網になっている為、側面を抜かれやすいと言う弱点があった。ワームが残りの戦力を一点に集めて攻撃してくるとZECTは予想して防

衛網を構築したのだが、相手の策を予想していたのはワーム側も同様だったらしい。

ワームがこちら側の策を読んでいない事を祈って防衛網を構築したが、どうやら賭けに負けたようだ。その事に大和は内心で歯噛みする。

「統括、今すぐ特殊遊撃隊を向かわせますか？」

現状一番柔軟に動ける織田の部隊を向かわせることを近くに居た者が提案するが、大和はこれに首を横に振った。

「織田の部隊はこのまま正面からくるワームを迎え撃つ戦力に加える。あいつの部隊が得意にしてるのはゲリラ戦、少しでも時間を稼ぎたい今は不可欠の戦い方だ」

織田の部隊は基本物資の補給を定期的に受けることなく今まで戦ってきた。独立部隊と言う悪く言えば根なし草状態が招いた結果でもあるが、それ故に彼の部隊は限られた戦力・物資で相手に最大限の打撃を与える戦法に長けていたのだ。

そう言ったことから大和は別動隊のワームに織田の部隊を向かわせることを渋ったのだが、こうなるとどこの部隊を向かわせるかで問題が出てくる。後頼りになりそうなのは矢車と影山の部隊、その内矢車の部隊が別動隊に近い位置に展開していた。

これを見た瞬間、大和は即座に決断した。

「側面を抜けようとしてるワームには矢車の部隊を向かわせる。他の部隊は現状を維持、正面からくるワームの集団を食い止めるんだ」

正直な話側面を抜けようとしているワームの中にカツシスワームが含まれている可能性は少なからずあったが、奴はこの戦いで率先して前線に出て戦ってきた。とすれば今も目の前から迫って来ている本体と共に行動している可能性が高いだろう。相手がカツシスワームでなければ、矢車の部隊が別動隊相手に取られる時間もそう多くはない。早々に始末してワームの本隊相手の戦闘に加わってくれらるだろう。

そうならば如何にカツシスワームが強敵とはいえ、Kホッパー、Pホッパー、ヘラクレス、そして戦線に加わったガタックで相手をすれば、倒せる可能性も少なからずあった。もしその時は自分も出ればいい。

大和はそう考えつつ、モニターに目を落とすのだった。

防衛網の構築がギリギリ完了して数分後

エリアZは再び銃声が幾重にも木霊する戦場になっていた。どちらもその場におけるほぼ全戦力を投入しての戦い、ZECTはとにかく苛烈な弾膜でワームの進行を妨げ、ワームは己の頑丈さを頼りに犠牲も厭わず突き進んでいく。

この場合プレッシャーを感じているのはZECTサイドの方だろう。何しろこれでもかと銃弾を浴びせているのに相手はそれを気にすることなく突き進んでくるのだ。終わる様子を見せないワームの進行に、言い様の無い圧力を感じて思わず尻込みしてしまう。

それがいけなかったのか、徐々にワームが進行の速度を上げてしま



った。ゼクトルーパー達も必死に銃撃で食い止めようとするが、一度付いた勢いはなかなか止まらない。さらに間の悪い事に、カッスワームが擬態した男まで出てきて、防衛線に穴を開け始めた。

「があああああつ?!」

また一人、ゼクトルーパーが人間に擬態したカッスワームの攻撃で蹴り飛ばされて来た。サナギ体の相手をするだけでも精一杯なのに、この上成虫体の中でも別格の強さを持ったカッスワームに來られてはゼクトルーパーだけでは足止めにもならない。

「くそ、増援!? いや、ライダーはまだなのか?!」

「ふふふ・・・」

そして次の獲物に襲いかかろうと他のゼクトルーパー達に彼が襲いかかろうとしたその時、擬態したワームとゼクトルーパーの間に青く輝くライダーが乱入して来た。

「うおおおおつ!!」

「ん? ほお、ガタツクか」

近づくガタツクの姿を確認すると、男はカッスワーム本来の姿に戻る。そのままガタツクが振り下ろしてくるダブルカリバーを、左手についでいるブレードで受け止めた。

『証拠にもなく、またやられに來たのかね・・・ガタツクくん?』  
「何度もやられると思うな!」

嘲るカッスワームの言葉に、ガタツクはダブルカリバーによる連撃で答える。ガタツクは次々と斬撃を繰り出すが、カッスワーム

は彼以上の腕を持っているのか全て受け止め、弾いてしまう。

さらに言えばガタツクのダブルカリバー自体、このワームにはあまり有利にならなかった。二刀流の最大の利点は左右別々に攻撃を繰り出せる手数ของ多さにあるが、カッシスワームは右手にサーベル、左手にブレードを持っている為ガタツクと同じく二刀流なのだ。しかもパワー面でガタツクを上回っているので必然的にほぼ同じ土俵のガタツクが不利になる。いや、必殺技がガタツクが封じられているのに対してカッシスワームは使いたい放題なのでカッシスワームの方が圧倒的に有利か。

それでも諦めることなくカッシスワームに立ち向かうガタツクだったが、戦況はやはり宜しくない。終いには武器であったガタツクダブルカリバーも弾き飛ばされ、無手で相手をしなければならなくなってしまった。

「ハアツ！」

『ふん・・・』

「ゲツ?!」

武器があつた状態でも圧倒されていたのだ、武器がなければもはや為すすべもない。まるで歯が立たない状況にガタツクが仮面の奥で苦虫を噛み潰したような顔をしていると・・・

「はあああつ!!」

『ツ!?!』

「影山さん!?!」

ガタツクとカッシスワームの間に割って入る様にPホッパーが現れ、そのままカッシスワームに素早いパンチのラッシュを叩き込んだ。

ふと彼が来た方を見ると、彼が率いるシャドウ第3番隊の姿も確認できる。Pホッパーが予め命令しておいたのか彼らは素早く展開すると、サナギ体の進行に苦戦しているゼクトルーパーの援護を始めた。

「ハッ、ハッ、セイツー！」

Pホッパーはジャブ、アッパー、コンビネーションパンチと目にもとまらぬラッシュを繰り出し、トドメとばかりに右ストレートをカッシスワームに叩き込む。不意を突かれた事と激しい連撃に、流石のカッシスワームも今は防御に回っている。その隙にガタツクは取り落としたガタツクダブルカリバーを拾った。

『小賢しい真似をッ！！』

「グッ?!」

Pホッパーの激しい攻撃に最初防御に回っていたカッシスワームだったが、体勢を整えるとお返しとばかりに右手のサーベルで強烈な刺突を繰り出して来た。今までが攻めだった事もあり咄嗟に反応しきれなかったPホッパーは、完全に防ぐ事が出来ずカッシスワームの刺突で突き飛ばされてしまう。

突き飛ばされた先で、Pホッパーは苦々しいと言った様子で口を開いた。

「くそ、強さは前の奴以上か!? だが必殺技は下手に使えないし・

・・・

「影山さん、俺と同時に技を！」

「何・・・ッ!? そうか、よしッ！」

苦々しく呟くPホッパーにガタツクは同時に技を出す事を提案。これは加賀美が天道と話している時に偶然思い当たった攻撃方法で、相手がこちらの技を吸収するのであれば同時に別々の技を吸収させて逆にパンクさせてやろうと言ったモノである。

ガタツクの意図に気付いたPホッパーは頷くと、即座にバックルのゼクターのレバーを上げた。

「ライダージャンプ！」

《R i d e r J u m p》

Pホッパーが高く飛び上がったと同時に、ガタツクは両手に持ったダブルカリバーを組み合わせてハサミの様な形にしつつカッシスワームに突撃していく。

「ライダーカッティング！」

《R i d e r C u t t i n g》

「ライダーパンチ！」

《R i d e r P u n c h》

上空から降下しながら必殺のパンチを放つPホッパーに合わせる形でタキオン粒子が充填されたハサミ状のダブルカリバーを突きだすガタツク。即席のコンビではあるがこれまでも何度か模擬戦をしてきたためそのタイミングはほぼ完璧で、これ以上ないタイミングで二つの技が同時にカッシスワームに襲いかかった。

『ゲアアアアアツ?!』

同時に二人の攻撃が決まった瞬間、苦悶の声を上げるカッシスワーム。その様子を見てガタツクは勝利を確信した。

「よし、やった！」

「いや、駄目だ?!」

「ウオオオオオオッ?!?!?」

だが彼の勝利の喜びは容易く打ち砕かれ、カッシスワームは全身から火花を撒き散らしながら二人に向かって突撃して来た。その両手には、奴がコピーした技を放つ時特有の放電現象が。

『ライダーパンチ！　ライダーカッティング！』

「うわあああああつ?!」

「がはあああああつ?!」

カッシスワームは、飛び上がりこそしなかったがPホッパーの技である『ライダーパンチ』をガタツクに、Pホッパーには両手のサーベルとブレードを交差させてガタツクの『ライダーカッティング』を放つ。自分達の技を自分達に返されて、大きく吹き飛ばされてしまった。

「そ、そんな・・・同時に命中したのに」

「威力が、威力が足らなかつたんだ。この方法で奴にダメージを与えるには、あと一人いないと・・・」

最高のタイミングで放った同時攻撃。それが威力不足だった事にガタツクは再びこの目の前のワームの強さを再認識する事になったのだった。

第57話 決着・エリアZ（前編）（後書き）

と言う訳で第57話でした。

今更ながらカツスワームを強くしすぎた感が自分でも否めません（^^;）。ライダー二人の必殺技に耐えきるとかどんだけ強いんだと。ただこの作品だとZECTに正式に所属してるライダーの数も多いですし、寧ろこれ位敵もサービスしないとバランスが難しいですね。

後編も大分書きあがってはいるので、近い内に更新出来ると思います。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第58話 決着・エリアZ（後編）（前書き）

どうも、黒服です。

今回で長々と続いていたエリアZ戦も決着です。あの技も登場しますよ。

第58話 決着・エリアZ（後編）

時空の彼方

通常の空とは明らかに違う色の空を持った、時空の彼方の草原。そこを擬態天道がひよりと手を繋いで上機嫌に歩いていった。

彼が上機嫌なのは、一重にひよりが彼を選んでくれたから。彼がハイパーカブトに追い詰められていた時に、ひよりが彼が変身したダークカブトとハイパーカブトの間に割って入り本物の天道を拒絶したのだ。

同じワームであるひよりが自分を選んで共にいてくれる、その事が彼はこれ以上ないくらい嬉しかった。

そう思ってスキップ混じりに草原を歩いていると、不意に目の前にこの場にはない筈の赤いカブトムシを模したバイクの姿が。そして、そのバイクに寄り掛かる男が一人。

その様子に、擬態天道は呆れ交じりに溜め息をついた。

「よお」

「お前……!？」

その男……天道 総司の姿を見て、ひよりは驚愕の表情になる。自分は彼の世界を拒絶したのに、何故？

「しつこいなあ、ひよりはもう帰らないって言っただろ!？ ひよりは僕と、世界の外で暮らすのが一番幸せなんだ」



目の前の天道に対し、擬態天道は子供が不満をぶちまける様に身勝手なひよりの幸せを口にする。

「僕は天の道なんか往かないよ？ ひよりの兄、日下部 総司としてひよりだけを守って生きていく……それが君に出来るの？」

擬態天道はさらに、天道のアイデンティティである天の道をも否定し、自分は日下部 総司としてひよりだけを守ると口にする。その後侮蔑する様な目を向けながら、天道に同じ事が出来るのかと問いかける。

その問いかけに、天道は顔を俯けながら答えた。

「俺は……ひよりの傍にずっといてやる事は出来ない」

天道がそう口にすると、どこか縋る様な目を向けていたひよりが視線を下に向ける。もしかしたら心の何処かで期待していたのかも知れない。或いは、天道にとって自分は特別でも何でもない存在だった事がショックだったのか……

そんな天道の言葉に、それ見たことかといった具合に捲し立てる擬態天道。

「ほら見ろッ！ あいつはひよりより世界とやらを守る方が大事なんだ！！」

その言葉にひよりはさらに顔を俯かせるが、天道は真っ直ぐ彼女を見つめると迷うことなく口を開いた。

「俺は世界を守る！ ひよりの帰るべき世界を・・・」  
「僕はワームだ、あの世界は僕がいちゃいけない世界だ……」

天道の言葉をひよりは聞き入れない。もしかしたら内心では天道の言葉を嬉しく思っている所もあるかもしれないが、己がワームと言う事がひよりに天道の下に向かう事を戸惑わせる。

それ故の世界に対する拒絶。だからこそその天道の拒絶だった。

「お前はたまたまワームとして生まれて来た・・・それだけの事だ」

「・・・ワームは人類の敵だろ・・・」

「違っツ!?!」

「ツ!?!?!」

尚も元の世界に変える事を拒否して、ワーム＝人類の敵である事を口にするひよりだったが、天道は力強い声でそれを一蹴する。その言葉にひよりはハツとした顔で天道を見た。

「俺はワームだから戦うんじゃない。人を殺め、小さな希望や夢さえも踏みにじる・・・そんな奴らを倒すだけだ・・・お前がどんな悪い事をした？」

天道が言う通り、ひよりは今まで人を手にかけて事はない。ある筈がないだろう、彼女はつい最近まで自身がワームである事など知りもしなかつたし、それ以前にごく普通の少女である。人付き合いが苦手だったりとか料理の腕が抜群に上手かったりするが、久賀達など特殊な者と比べれば普通の少女と言って何ら差し支えない。

「僕は、生きていてもいいの？」

「俺はひよりが産まれてきてくれた事が嬉しい。だから・・・お前とお前が生きる世界を守る。7年前、お前と初めて瓦礫の下で出会った時、そう決めただ」

ひよりの顔には驚きの中に嬉しさが混じっていた。それは天道にとつて自分がある種特別であると言う事を知った為か、はたまた元の世界に居る事が出来る理由を手に入れたからか・・・

「さあ、帰るぞ」

天道はひよりに向かって手を伸ばす。ひよりを見つめる彼の目には、一点の迷いも見受けられない。

そしてひよりは、歩み寄っていく・・・天道に向かつて。擬態天道が必死に手を伸ばすが、その手が届く事はもはやない。彼女が選んだのは、元の世界・・・彼女が生まれ、育ち、様々な人と出会って来た彼女がいるべき本来の世界だった。

「ひより・・・嘘だろ？ ひよりッ！！？」

ひよりが天道の手を取る。そしてカブトエクステンダーに天道と共に跨り、緑色の光を発しながら元の世界へと戻っていく。その背には擬態天道の悲痛な叫びがかけられるが、ひよりは一切振り向く事をせず、元の世界へと戻っていくのだった。

時は戻ってエリアZ・最終防衛網

ガタツクとPホッパーの渾身の同時攻撃が打ち破られた後、戦場は

勢いを付けたワーム側が圧倒的有利に事を進めていた。ガタツクとPホッパーが必死になってカッシスワームの相手をするが、先程のダメージもあつてかまともに攻撃を当てる事が出来ず逆に一方的に攻撃されていた。

おまけにサナギ体の方も進撃のスピードを上げてしまった為、防衛網は猛烈な勢いで後退を余儀なくされ既に第2防衛ラインまで突破されてしまった。

『ふふふ、君達がこれほど頑張っていると言うのに、肝心のカブトはまだ来ないのかね?』

「グツ、加賀美、天道はまだ来ないのか?」

「大丈夫です、必ず・・・あいつは必ず来ます。だから・・・」

ふら付きながら天道を信じ続けるガタツク。その彼の目に、危険な色を灯したカッシスワームの左手のブレードが目に入る。

『いい加減君らと遊ぶのも飽きて来たよ・・・消える』

「う、マズイ・・・」

『ライダースラッシュ・・・』

「加賀美ッ!!?」

ガタツクは何とか回避しようとするが、ダメージが足に来たの思うように動けない。そんな彼に向けてカッシスワームが輝くブレードを振り抜こうとした瞬間、Pホッパーが残った体力を総動員してガタツクを突きとばした。

「ぐああああああつ?!」

「影山さんッ!?!」

P ホッパーがガタツクを突き飛ばしたおかげでガタツクがカッシスワームの攻撃を受ける事は無かったが、代わりにP ホッパーがワームの攻撃を受けて大きく吹き飛ばされてしまう。カッシスワームに吹き飛ばされた先で倒れたP ホッパーは、そのまま変身を解除されてしまった。

「隊長?!」

倒れた彼の姿を見つけたのか、第3番隊の隊員が彼に近付く。

「く、くそ……ここまでか……う……」

「隊長!? 隊長しつかりしてください!!!?」

「救護だ、ブライトルーパーを呼べ!」

ダメージが限界に来たのか、影山はアツサリと意識を手放してしまった。その彼の様子に慌てて救護を呼ぶシャドウ第3番隊の兵士達。

一方、取り残される形となったガタツクは窮地に陥っていた。何しろカッシスワームの相手を一人でこなさなければならぬのだ。今までの状況と今のコンディションから言えば、それは非常に厳しい事と言えた。

「それでも何とか、せめて天道が来るまで持ちこたえないと!!」

ガタツクがそう意気込んでカッシスワームと相対した瞬間、無数の銃弾がカッシスワームの表皮で弾け飛んだ。よく見るとその中には光弾も混じっている。

『くつ、今度は何だ?』

「テメエか、幹部級のワームってのは……」

聞こえて来たその声にガタツクとカッシスワームが振り向くと、そこには銀色の装甲に左右非対称の姿をした赤い複眼のライダー・・・  
・仮面ライダーヘラクスの姿があった。

「修羅！ やっちまえ！！」

ガタツクが見ている中、ヘラクスはあらぬ方向に向かってそう叫んだ。すると何時の間に関開していたのか、彼の部下である特殊遊撃隊の面々が周囲の瓦礫となったビルの上から身を乗り出して進撃しているワームの大群に銃撃を加え始めた。突然の左右両翼からの一斉射撃に戸惑いを隠せないワーム達、しかも遊撃隊はおまけとばかりに手榴弾まで投げ込んで来て一気にワームの進行を足止めしてしまう。

「お、織田さん・・・」

「よお加賀美、俺が来てくれて嬉しいか？」

ヘラクスはそう言いながらガタツクに手を差し出してしつかりと立たせる。姿勢が安定した事で幾分か落ち着いたのか、ガタツクは肩で息をしながらカッシスワームに向かって身構えた。

「ありがとうございます。それより織田さん、あいつとんでもない強さです。気を付けてください」

「んなもん百も承知だ。矢車達3人が同時に相手にして勝てなかった相手とそっくりなんだ、半端な強さじゃねえだろうよ」

言いつつヘラクスはアックスモードにしたゼクトクナイガンを構える。そしてしばし身構えた後、一直線にカッシスワームに向かって突撃し一気にクナイガンを振り下ろした。

エリアZ・作戦司令部

同時刻、作戦司令部では大和が盛大に顔を顰めていた。理由は言うまでもなく影山の戦線離脱である。

「影山の容体は？」

「命に別状はないとのことですが、現状意識不明の状態なので戦線への復帰は無理だそうです」

「矢車の部隊は？ まだ片付かないのか？」

「想定以上に成虫体のワームが別動隊には存在していたそうです。現在キックホッパーは3体の成虫体と戦闘中」

オペレーターがそう言ってスクリーンにKホッパーの戦闘の様子を映し出した。そこにはサナギ体のワームと激しく戦うゼクトルーパー・シャドウを背に共通した白い表皮を持った3体のワーム、フォルミカルビュスワームと戦うKホッパーの姿があった。流石に指揮を出しながら3体の成虫体と戦うのは厳しいモノがあるのか、苦戦している訳ではないが少々手こずっている様子だ。

「統括、特殊遊撃隊の攻撃で足止めされていたワームが進行を再開しました。このままだと最終防衛ライン突破まであと僅かです！？」

さらに追い打ちをかけるかのように入って来た凶報に、大和は小さく舌打ちをしてしまう。どう考えてもこれ以上は持ち堪えられない。

「田所、こいつをお前に預ける」

「は……こ、これはッ?!」

大和は数瞬何かを考える仕草を見ると、田所にアタツシユケースの様な物を渡した。田所はそれが何を意味しているのか理解して驚愕する。

「最終防衛ラインを突破されそうになったら、こいつを使ってエリアZ毎施設を爆破しろ」

「しかし、宜しいので？」

「構わん。奴らにマスクドライダーシステムを奪われるくらいなら、ここで爆破した方がずっといい。俺は前線でケタロスに変身して戦線の援護に向かう。あとの事は任せた」

大和はそれだけ言うと急いで戦線の補強をするべく最前線に向かって走っていった。

エリアZ・最前線

無数の銃声が轟く中、エリアZの最前線ではカッシスワームがガタツク・ヘラクスの二人を相手に優位に戦っていた。ライダー達は2体1と言う状況であるにも拘らず、状況を押し返す事が出来ないでいた。

「んなるうつ！？ オラアッ！」

ヘラクスは一旦距離をとったかと思うと、思いっきり振りかぶったアックスモードのゼクトクナイガンを横薙ぎに一閃。だがカッシスワームは軽やかな身のこなしで躲してしまふ。

『フフフ、その程度かね？ ヘラクスクン？』



「チツ、いろいろと癪に障る野郎だぜ」

戦っている内に思った事だが、ヘラクスこと織田はカッシスワームと性格的に全くそりが合わなかった。何処となく飄々とした所もそうだが、何よりも他人を見下したその態度が彼には我慢できないのだ。彼は元来上から押さえつけられると言う事を嫌う。そんな彼がZECTの一員としてこれまでやってこれたのは、一重に単独行動が主な彼自身の立ち位置と周りの者が基本対等に接してくる者たちばかりである事に他ならなかった。

「お、織田さん・・・はあ、はあ、大丈夫ですか？」

「俺の事よりお前自分の事を心配してろ、ボロボロじゃねえか」

ヘラクスの言う通り、ガタツクはカッシスワームとの戦闘で大分ボロボロになっていた。既にダブルカリバーは取り落としてるし、装甲のあちこちにもカッシスワームの攻撃によって生じた切り傷が刻まれている。足取りも何処かふらついていた。

「でも、このままだと多分ジリ貧に・・・」

「まあ見てな！」

それでも現状カッシスワームに圧倒されているのには変わらない。ガタツクが難色を示すのも至極当然と言えた。そんなガタツクにヘラクスは軽く自身の胸を叩いてみせると、右腕のカブティックゼクターに手をかけながらカッシスワームへと突撃していく。

「ライダービート！！」

《Rider Beat》

「ッ！？」 お、織田さん待って・・・」

突然のヘラクスの行動に焦るガタツク。それも当然だ、相手はこちらの技をコピーしてしまう。そんな相手に必殺技を使うなんて自殺行為もいい所、しかしヘラクスはガタツクの制止を無視してカッシスワームに必殺技の『ライダービート』を叩き込んでしまった。

「おりゃああつー!!」

強化された腕力による斬撃がカッシスワームに襲いかかるが、相手は一切避ける事をせずその攻撃を無防備にもその身に受ける。攻撃が当たった瞬間カッシスワームの体からは一瞬光が放たれ、次の瞬間には傷一つない姿でその場に佇んでいた。

『馬鹿の一つ覚えか・・・君も私の能力については知っているだろう？　なのに態々技を私に放つとは・・・ふふつ、愚か過ぎて何も言えない』

「はっ、言ってるワーム野郎。俺が愚かかどうか、すぐに分からせてやる」

『ほお？　ならば見せてもらおうか』

カッシスワームは余裕綽々と言った雰囲気で言うと、その左手にコピーした技を放つ時の光を灯した。

『ライダービート……はあつー!!』

「貰った!!」

ヘラクスに向かって放たれるカッシスワームのライダービート。技としてはサソードからコピーしたライダースラッシュと非常に良く似ているのだが、こちらは斬り付けると言うよりはどちらかと言えば叩き斬ると言った方が正しいので攻撃を喰らった時のパンチ力が尋常ではない。

そんな技が放たれる中、ヘラクスは距離を取るところか逆にカッシスワームに向かって右肩を突き出した。その方にはよく見るとタキオン粒子が収束している時特有の光を宿している。

「オラアッ!！」

『グッ?!』

ヘラクスの右肩が当たった瞬間、カッシスワームから苦悶の聲が上がりそのまま突き飛ばされる。

ヘラクスが放ったのは技としては単純なシオルダータックルだ。ただタキオン粒子がチャージされている上に鋭いシオルダーブレードで放たれるのだからその威力は通常のモノより断然高い。

ちなみにこの技はヘラクスのみならず、同じ第4世代型ライダーであるケタロスは勿論第2世代型ライダーであるサソードも同様のシオルダーブレードを持っているのでこの技を使用する事は出来たりする。

なにはともあれ、ヘラクスはカッシスワームにカウンターで技を叩き込んだ。恐らく一つの技を出している最中であれば、或いはコピーされないかもしれないと考えたのだろう。現状明確な対処法が天道の考えだした同時攻撃（ただし技を出すのは3人以上に限る）以外に見当たらない所を考えると、小さくとも可能性のあるモノは何でも試してみるべきなのかもしれない。

しかし……

『フン……ライダーカッティング!』

「何っ!? ごおおっ?!」

残念ながらヘラクスの考えは失敗に終わったらしい。カッシスワームは何事もなかったかのように体勢を整えると、ガタツクのライダーカッティングを彼に喰らわせて大きく弾き飛ばしてしまった。

「こんな物が君の考えた秘策かね? 笑わせてくれる・・・」

「そうかよ、だったら・・・ライダービート!!」

《Rider Beat》

カッシスワームの攻撃で飛ばされた先で何とか立ち上がったヘラクスは、再度ライダービートを発動して突撃していった。それに対してカッシスワームは、同じライダービートで対応する。

「ライダービート・・・」

「おらあッ!!」

「ハアアッ!!」

全く同じような技が、同じタイミングでぶつかり合う。

「小手先の考えが通用しないなら真正面からぶつかるだけだ! 1  
回コピーしちまえば同じ技を2度吸収できねえだろうがッ!」

「なるほど、力比べと言う訳か。だが・・・」

一瞬せめぎ合っていた両者だったが、カッシスワームが少し力を込めるとヘラクスは踏ん張っているにもかかわらず後ろに押し出されていく。パワー面で圧倒的にカッシスワームの方が勝っていたのだ。

「な、なん・・・テメエッ!」

「この程度の力で渡しと張り合おうなど、身の程知らずだったな!

「グアアアアツ?!」

カッシスワームが渾身の力を込めて腕を振るうと、競り負けたヘラクスは斬られながら弾き飛ばされ、壁に叩きつけられるとその場で倒れたまま動かなくなってしまった。

「織田さんッ!?!」

「他人の心配をしている場合かね?」

倒れたヘラクスにガタツクが駆け寄ろうとするが、その前にカッシスワームが立ち上がり左手のブレードを一閃する。ガタツクは攻撃に怯むも、即座に戦いの構えをとった。とはいえ現状の彼は度重なる戦いで既にポロポロ、武器であるダブルカリバーも失ってしまった今カッシスワームの相手をするには少々どころではない不安が残るのもまた事実だ。

(それでも……それでも天道が来るまではッ!?)

戦力差は絶望的、そんな状況であってもガタツクは決して諦める素振りを見せずカッシスワームに向かって戦う姿勢を崩さずにいる。カッシスワームはそのガタツクを鼻で笑うと、情け容赦なく右手のサーベルを突き出していった。

その頃……

「ライダーキック!」

《R i d e r K i c k》

Kホッパーの放った必殺のライダーキックが次々と3体の成虫体ワームに襲い掛かる。カブトのそれを遙かに凌ぐ威力を誇るキックを喰らったワームは、為す術もなくその場で爆発してしまった。

成虫体を葬った彼は、一息吐くと即座に周囲の部下たちに目を向ける。

「状況は？」

「軽症を負った者が数人居ますが、大きな損害はありません」

部下の報告にKホッパーは軽く安堵のため息を吐く。正直な話成虫体のワームに掛かりつきりで部下に指示を出す余裕がなかった為、戦っている最中も気が気でなかったのだ。

「本隊の方はどうなっている？ 影山は？」

部下の安全を確認したのも束の間、本隊の状況が気になった彼は通信士にそう訊ねた。思っていた以上に時間がかかってしまった。小まめに状況を確認する暇もなかったため、今本隊がどうなっているのか想像も出来ない。

「先程本隊に問い合わせたところ、カッスワームの攻撃で影山隊長と織田隊長が戦闘不能になり、大和統括が出撃したとのことですよ」

Kホッパーはそれを聞いた瞬間仮面の奥で飛び切りの渋面を作った。何しろ久賀達に続いて影山と織田までもが戦線を離脱してしまったのだ。拳げ句大和までもが出撃したという事は、それだけ戦力に余裕が無いと言っていること。つまりZECTはワームに追い詰められていると言っていることだった。

「周囲に敵の姿は無いな？」

「はい、別動隊のワームは全て殲滅しました！」

「よし。ならば体勢を整えた後、早急に本隊の支援に向かう。準備を急がせる」

「ハッ！」

Kホッパーの命令に副官が敬礼し部隊を纏めに向かうと、彼もそれに続いて行った。

エリアZ・最終防衛ライン

現在、ガタツクは絶体絶命の状況に陥っていた。

『フッ！』

「ガハッ?!」

またもカッシスワームの斬撃がガタツクに襲い掛かる。ガタツクの装甲は全身に傷が付き、繰り出される攻撃には力が乗っていない。本当に立っているだけでやっとと言った状態だ。

おまけにワームの集団も最終防衛ラインを進撃しており、突破は時間の問題だった。

「このままでは……やむを得ん、」

その様子は指令部の田所も確認しており、彼はこれ以上の防衛は困難とみて施設を爆破するべく大和に渡されたケースを開ける。元より爆破の判断は大和から一任されていたし、施設を爆破すればその混乱に乗じてガタツクを救出できるかもしれない。しかし、

だが、それよりも早くに状況が動いた。

『フンツ、これがガタツク・・・戦いの神か。なんと弱い、弱すぎる』

「ハツ・・・ハツ・・・」

『この程度で戦いの神とは笑わせる、これからは俺がその名を名乗らせてもらおう』

カッシスワームはそう言うのと左手のブレードに光を宿して振り上げた。トドメのライダースラッシュを放つつもりだろう。しかし今のガタツクに奴の攻撃を避けるだけの体力も気力も残されてはいなかった。避けることは出来ないが、それでも睨む程度の事は出来る。せめてもの抵抗にガタツクは残された精神を総動員してカッシスワームを睨んでいた。

と、その時・・・突然横合いから赤いバイクが飛び出してカッシスワームに体当たりを喰らわせる。

『ツ！？』

突然の襲撃にカッシスワームも反応しきれず撥ね飛ばされる。そして飛ばされたカッシスワームが体当たりしてきた者に目を向けると、そこには・・・

「て、天道・・・」

赤い装甲に青い複眼のライダー、仮面ライダーカブトが跨がっていたバイク・カブトエクステンダーから降りていた。



「天道、ひよりは？」

「ああ、お前のおかげで助け出せた」

カブトは地に膝を突いているガタツクに手を貸して立たせながら礼を言つと、真つ直ぐカッシスワームを見据えながら口を開いた。

「後は奴を倒すだけだ。俺達が力を合わせれば、誰にも負けない！」  
「ククク、君達の言う絆か……」

カッシスワームは絆の力を口にするカブトを嘲笑する。奴にとって絆など取るに足らないもの、弱者が悪足掻きをする際の詭弁でしかなかった。

だがそれは間違いだ。人は確かに弱い、弱いからこそお互いに力を合わせて一人では出せない力を発揮する。そうして人は多くの困難を乗り越えてきたし、その絆は例え離れていても効果を発揮出来た。

「笑わせる……ん？」

カブトを嘲笑っていたカッシスワームは何者かが近付いてきたことに気付いた。奴がそちらをみると、そこには部下を背後に控えさせたKホッパーが。

「影山が随分と世話になつたらしいな」  
「矢車……」

Kホッパーは何も言わず黙ってカブトに近付いていく。その姿からは抑えきれない闘志が溢れ出ていた。

「前のお前には痛い目に遭わされたからな、ここでその時の雪辱・  
・晴らさせてもらう」

Kホッパーは以前、時間停止を使うカッシスワームに煮え湯を飲まされた。その時一番痛い目に遭ったのはこの場にいない久賀達なのだが、彼にとつて仲間の被害は自分の被害でもあった。

「同時攻撃だ」

『どんな技が来ようと返してあげよう！』

カプトが提案すると、カッシスワームが自身たっぷりにそういった。実際ガタツクとPホッパーの同時攻撃を凌いだカッシスワームには自信がある。さっき耐えきれたのだから今度も耐えきれると。

「行くぞ」

《《One Two Three》》

「ライダージャンプ」

《Rider Jump》

カプトとガタツクがスイッチを押していくと同時に、Kホッパーが天高く跳躍する。

「「ライダーキック!!」」

《《Rider Kick》》

「ライダーキック!!」

《Rider Kick》

三人は一系乱れぬタイミングで同時にライダーキックを発動し、完璧とも言えるタイミングで三人の攻撃がカッシスワームを捉える。彼らの攻撃を受けたカッシスワームは大きく蹴り飛ばされ、受け身

も取らずに地面に激突するとその場で苦し気に呻いていた。

『う、ううう、ぐううう……ッ!? な、何故だあッ!?!?』

カッシスワームは全身を駆け巡る激痛に苦しみながら、このような結果に今までに無いくらい困惑していた。

自分の能力は最強にして絶対である筈だ。例えどれだけ強力な攻撃を受けようと吸収し、自分の物とすることが出来る。それはカッシスワーム自身がよく知っていた。

しかし彼は少々己の力を過大評価し過ぎていた。確かに万全の状態であればカブト達のトリプルライダーキックにも耐えきれたかもしれない。だが先程のPホッパーとガタツクの同時攻撃とヘラク스가カウンターで放ったショルダータックルで、小さいものだが確実にダメージを受けていたのだ。

それによって、カッシスワームも知らない内に吸収できるダメージの上限が下がっていた。ガタツクの攻撃は無駄ではなかったのだ。

《Hyper Cast off Change Hyper  
Beetle》

そうこうしていると、カッシスワームにトドメを刺すべくカブトはハイパーゼクターを使用してハイパーカブトになる。次いでパーフェクトゼクターを呼び出すと、ザビー・サソード・ドレイクのゼクターを召喚してパーフェクトゼクターと合体させた。久賀達が既に戦闘不能だからか、ザビーゼクターもすんなり現れる。

《Kabut Thebee Drake Sasord pow

er All zecter combine  
『又オオオオオッ!!!?』

ハイパーカブトがガンモードにしたパーフェクトゼクターを腰だめに構える。それを見たカッシスワームがハイパーカブトに向かって突撃していくが、もう遅い。

《Maximum Hyper Cyclon》

ハイパーカブトが引き金を引くと同時に、凄まじいエネルギーの奔流が射線上にいたワームを薙ぎ払った。それはカッシスワームとて例外ではない。

『又ウウウウ、グアアアアアアッ?!』

何とか数秒間持ち堪えるカッシスワームだったが、そこが限界。徐々にだが体を削られたカッシスワームは、最期には断末魔の叫びと共に消し飛んでしまうのだった。

エリアZ内某所

「ライダービート！ クロックアップ！」

《Rider Beat Clock up》

ハイパーカブトがマキシマムハイパーサイクロンを放ったのとほぼ同時刻、ケタロスが複数体のサナギ体ワームに対してライダービートを繰り出していた。クロックアップで超高速移動しながらの攻撃なのでサナギ体に防ぐ事が出来る筈もなく、次々と切り裂かれるワーム達。

《Clock over》

ケタロスがクロックアップから戻ったときには、数体のサナギ体が同時に爆散。しかしまだ後方に敵が控えているので、気を抜くまいと彼がクナイモードのクナイガンを構えたとき、轟音と共に何らかのエネルギー波の様なものが。

「あれは……ハイパーカブトか？」

それが何なのかを予想したその時、突然ワームの集団が後退を始めた。ケタロスがその様子に怪訝な顔をしていると、近くに居た通信士が声を掛けてくる。

「統括、たった今田所チームリーダーから連絡が入りました。カッシスワームはハイパーカブトが撃破、同時に他のワームも後退を始めた様です」

「指揮官を失って撤退を選んだのか……流石にむやみやたらと突っ込む様なバカでもなかったからか、それとも緊急時の為の次席指揮官がいたのか……」

「追撃しますか？」

通信士の問い掛けにケタロスは首を横に振る。各部隊の消耗が激しい中、これ以上戦闘を続けようとすれば無駄に損害を出しかねない。何より今回の最大の目的はエリアZの施設を守る事なのだ。

「追撃は不要だ。欲を出して逆に痛い目を見るなんて御免だからな。それよりこちらも部隊を撤収させろ、作戦は成功した」

「ハッ！」

こうしてエリアZでの戦いは幕を閉じた。受けた被害は決して小さな物ではないが、それでもこの場での勝利は大きいものだったと言えるだろう。

ただ、作戦の成功に誰もが喜ぶ中、その裏である二つの問題が起こったことを知るものは……誰もいない。

## 第58話 決着・エリアZ（後編）（後書き）

と言うわけで第58話でした。

カッシスワームを相手にした影山、加賀美、織田はそれなりに善戦しました。

終盤ではトリプルライダーキックも登場。原作だと基本敵の立ち位置だった矢車さんが手を貸してくれたと言う熱いシチュエーションもあって、非常に印象に残っています。

次回は原作でのサソード最終編……ですが、オリジナルな展開が多くなると思います。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

第59話 開く距離（前書き）

どうも、黒服です。

いよいよこの物語も終盤に入りました。そしてこの土壇場で更なる問題が……



## 第59話 開く距離

ZECT本部

先日のエリアZにおける攻防戦に置いて、ZECTは辛くも勝利を収める事が出来た。それは前線に出ていたゼクトルーパー達に大きな喜びをもたらし、さらに死線をくぐった者の中には目に見えて技能が向上した者までいる。そこを考えると先の勝利はこの上ないほど意義があつたと言えるかもしれない。

だが現実には決して甘くはない。勝利の代償は戦闘部隊の半減と言うとなつて返つてきており、ワームに対して予断を許さない状況を作り出していた。

ついでに言えば民間人への緘口令にも四苦八苦している。あの戦いに置いて多大な数のワームが街中を移動していた。それは当然ながら多くの人々に目撃される事になり、無用な混乱を避ける為にZECTは国の諜報機関などに手回ししているのが現状だ。

しかし……

「統括！ 現在エリアC-2、C-3、E-2にワームが出現！」

「エリアB-1、B-8にもワームが出現しました！ 現在シャドウ第1番隊が出勤しています！」

ワーム達の行動は、彼らが思っていたよりも早くに起こってしまった。突如として至る所にワームが出現し、無差別に人々に襲いかかり始めたのだ。ZECTは必死になつて戦闘部隊を向かわせるが、如何せん先の戦いでダメージも抜けきつていない現状、回せる戦

力は非常に少なく結果負担は全てライダー達に掛かっていた。

「動ける部隊は全て動かせ、出し惜しみはするな！」

「シャドウ第3番隊が出動すると言っています」

「何？ 影山は大丈夫なのか？」

「影山隊長からは問題ないと」

大和は一瞬考え込む。先の戦いで影山が受けたダメージは決して軽いモノではなかった筈だ。多少傷は癒えているだろうが、それでも常時であれば許可は出せない。

しかし現在動けるシャドウは矢車率いる第1番隊のみ。3つのシャドウの部隊の中で被害が最も酷かった第2番隊は部隊の再編と久賀達の復帰が整わず出撃不可。矢車は別方面に向かつており、他に動かせる部隊もない。止むを得ず大和は苦渋の決断を下した。

「分かった。ただ無理はするなどだけ伝えておけ」

「はっ！」

指示を出した後になって、大和は重い溜息をついた。理由は勿論抜き差しならない今の状況もあるが、それ以外にも問題は山積みなのである。中でも彼の心を占めているのは、先日入手したある資料の事である。

（エリアZのゴタゴタに紛れて手に入れたは良いが、まさかな・・・

大和は再び溜め息を吐く。やはりザビーは封印するべきなのかもしれない、そう心の中で考えながら。

その時……

「何、久賀達が目を覚ました!？」

「はい、つい先程目を覚ましたとの事です。それで、医師の方から伝えたい事があるから早急に来てくれと」

タイミングが良いのか悪いのか、先日から眠り続けていた久賀達が漸く目を覚ましたらしい。医師からの伝えたい事と言うのが気になるが、大和はその場を近くに居た者達に任せると急いで病院へと向かっていった。

病院

ZECT本部を出て数分後、大和は組織の息が掛かった病院へと辿り着いていた。この病院は組織が負傷した兵士を優先して治療させる為に用意した物で、内部を普通にゼクトルーパーが歩き回っている。大和は時折ゼクトルーパーや医師、看護師とすれ違いつつ、指定された病室へと足を運ぶ。

病室の扉を開けるとそこには、一人の医師とベッドに腰掛けた久賀達の姿が確認できた。

「大丈夫そうだな久賀達、気分はどうだ？」

「あゝ、まあまあかな」

内心ホツとした大和の問い掛けに、久賀達は特別普段と変わらぬ様子で答えた。彼女の様子に胸を撫で下ろすと、大和は医師に目を向ける。先程言っていた伝えたい事と言うのを聞く為だ。

だが医師が口を開くより早く久賀達の手がそれを制し、代わりに彼女が口を開いた。

「大和・・・なんか面倒な事になっちまったよ」

「面倒？」

「ああ、ほれ」

言うが早いか久賀達は大和に向けてライダーブレスが装着された左腕を差し出した。彼女の行動を理解できない大和が首を傾げていると、久賀達は外して見ると言う。意味が分からない彼女の行動だが、一先ず言われたままにライダーブレスを外そうと久賀達の腕に手をかけた。

だが彼がブレスを外す事は叶わなかった。何故なら誰であろう久賀達の右手が万力のような力で大和の腕を締め上げたからである。

「ぐ、あつ！？ 久賀達、何を・・・」

信じられない力で自身の腕を握りしめてくる久賀達に大和が痛み顔を歪めながら問いかけるが、久賀達は何処か辛そうに顔を反らすだけで何も言わなかった。堪らず大和が手を引くと、久賀達の手もあっさりと彼の腕を手放す。大和はしばし締め上げられていた腕を揉みほぐしながら、一体どういう事なのかを久賀達に訊ねた。

「どういう事だ久賀達？」

「わかんねえ。どういふことかは知らねえけど、あたしの意思に反して体がライダーブレスを外させようとしななんだ」

「彼女が眠っている最中こちらも一度外そうとしたのですが、眠っ  
ていても抵抗されて結局外せず仕舞いに終わりました」

自嘲したように言う久賀達に続いて医師が口を開く。どうやら先程言っていた話の内容はこの事らしいが、これはなかなか由々しき事態だ。

実は久賀達が目覚めるよりも前にザビーを封印しようとした大和は、最初ザビーゼクターの方を封印しようとしたのである。だが通常本部に戻ってくる筈のザビーゼクターは、あの戦いの後戻ってこなかった。この事自体かなりの問題でもあるのだが、ともかくゼクターを封印できないならばブレスの方を封印しようと考えていた大和にとって久賀達が己の意思に関係なくライダーブレスを外す事を拒否すると言う事はイコール封印できないと言う事を示している。力尽くでライダーブレスを彼女から奪うと言う選択肢もあるが、下手をすると勝手にザビーゼクターが久賀達を変身させて暴走する危険すらある。それだけは何としても避けねばならない。

医師は大和に伝えるべき事を伝え終わると、他にも仕事があるからかその場から立ち去っていく。病室内に残された二人だったが、遂に久賀達が沈んだ声で言葉を紡いだ。

「何かあたし、ザビーゼクターの事が分からなくなってきた」

今まで心が通い合った相棒だと思っていたザビーゼクター。だがあの戦いの最中自身の闇と邂逅した際に告げられた事実と今の現状に久賀達はそれが思い込みだったのではないかという感覚に陥っていた。ザビーゼクターが本当は自分からずっと遠い場所に居たのではないかと言う、そんな感覚に……

（今の久賀達に、あの事は告げるべきじゃないな）

彼女の様子に、大和は先日手に入れた資料の内容を告げるべきでは

ないと考えた。その資料の内容とはザビーと大いに関係のある事なのだが、内容が内容だけに今話せばさらに彼女を追い詰めてしまう事になりかねない。

そんな事を考えていると、不意に思いだしたかのように久賀達が話しかけて来た。

「そっぴや今どうなってるんだ？　ワームは何か行動起こしたりしてるか？」

実にタイムリーな質問である。あまり気乗りはしないが彼女の思考を反らす意味でもここで今の状況を話しておいた方が良さだろう。

「何かどころじゃない。何を考えてるのか知らないがいきなりあちこちにワームが現れて暴れ始めた。こっちもあっちこっちに部隊を送り出しちゃいるが……」

「戦力が足りない……か」

大和の言葉に続ける様に久賀達が口にした言葉に彼は苦い顔で頷く。本当に無差別に攻撃しているのではないかと思うほどのワームの行動に、大和は精神的にも心底疲れていた。

それを見た久賀達はベッドから立ち上がるとハンガーにかけてあった上着を羽織って病室を後にする。大和も慌てて彼女に続いた。

「おい久賀達、出撃するつもりだろうが今第2番隊は再編成が完了してないんだ。分かっているのかそのところ？」

「そんなの百も承知だよ。今は戦力が欲しいんだろ、だったら動ける奴はとにかく出しきらないとな」

「だが足りない人員はどうする？」

久賀達の部隊は先日の戦いの最中、撤退する味方の時間を稼ぐため殿として残り結果多くの隊員を失っていた。特に痛いのが元から彼女の下に居た古参の多くが命を落としたことであり、この事により彼女の部隊は数以上に経験を積んだ隊員を失ってしまったのだ。これによる戦力の減少は馬鹿に出来ない。

「足りない戦力は………そうだな、ブライトルーパーで補わせてもらおうよ」

「訓練生を出すつもりか!？」

「言つたら、今は少しでも戦力が欲しいって。なら猫の手だろうが借りるしかないだろうが」

久賀達の言葉に大和は再び苦い顔になる。実際ワーム達が動き出してから戦力が足りない事態に行きついた時、訓練生の一部が戦闘に出してくれと志願して来た。その時は実戦経験がない者を出しても足手まといにしかならないと言って要請を却下したものだ。久賀達によって再び現実を突き付けられて彼の考えも揺れ動いていた。

「彼らを死なせないで、言い切れるのか？」

「今のあたしから言える言葉は、『YES』だけさ」

彼女の言葉に大和はこの日何度目になるか分からない重い溜息を吐いた。今この場所では自分よりも久賀達の方が組織の一員になっている。

恐らく久賀達自身本当は訓練生を出す様な事はしたくないのである。それは先程この事を言いだそうとした直前の彼女の沈黙と若干揺れている目が物語っていた。

つまり“一人の人間たる久賀達 時雨”は反対したいところだが“ZECTに所属するライダーであり隊長である久賀達”は訓練生でも戦力として扱う事を考えなければならぬのだ。それは大和自身も同様で、大和 鉄騎“個人”は納得できない所があっても“ZECT戦闘部隊統括”の大和は出せる戦力を全て出さねばならない。

久ぶりに感じた己の立場と考えの乖離に、大和は一瞬心に冷えた風が吹いた様な感覚を覚えた。

そして言葉にできないものを感じながら、大和は“ただの大和 鉄騎”から“大和統括”へと心を切り替えた。

「分かった、早急に彼らをお前の指揮下に入れさせる。生憎と装備は間に合いそうにないからブライトルーパーのままになるが」

「構わないよ、寧ろ見分けがついてちょうどいい」

久賀達はそう言うと、口の端を吊りあげてシニカルに微笑むのだった。

エリアE - 1

久賀達率いるシャドウ第2番隊が派遣されたのは無数に存在するワームが現れた地点の一つであるエリアE - 1。そこに前回の戦闘で生き残った隊員と急遽編入したブライトルーパーと共にやって来ていた。

「神田と檜和田は新米共の面倒を見てやれ。こいつ等はまだ戦いのイロハが分かってない、死なせない様に気を付けるよ」

「了解」



「覚悟しときなルーキー、あたしらは厳しいなんてもんじゃないからね」

神田の凄みを利かせた物言いに、白いボディアーマーを纏ったブライトルーパー達は身を固くする。

そんな遣り取りの後、久賀達の部隊はワームを包囲する形で展開していく。既に街中では悲鳴が上がっており前回ほどではないにしろ多くのワームが人々に襲いかかっていた。

「A小隊とB小隊はワームに対して威嚇射撃。C小隊は怯んだワームに銃撃を加えろ。D・E小隊は一般人を逃がせ」

久賀達の命令を受けて素早く動くシャドウ第2番隊。ちなみにD小隊とE小隊は神田と檜和田が率いるブライトルーパーの部隊である。流石の久賀達も、実戦を経験した事の無い新米にいきなりワームとの戦闘をさせるほど鬼ではない。

A・B小隊の攻撃を受けてワームの集団は咄嗟に動きを止める。その隙にD小隊とE小隊が逃げ遅れた人達を逃がしていき、動きの止まったワームに対してはC小隊とA・B小隊からの銃撃が開始された。幸いなことにこの場に居るのは全てサナギ体なので、久賀達が変わ身しなくても何とかなるだろう。ザビーになつてまた暴走してしまえば、流石に今度は周りに被害を出さない自信が無いので久賀達は心の中でホッと一息つく。

その時・・・

「ん？ ザビーゼクター？」

呼んでもいないのに突然ザビーゼクターが久賀達の下に現れた。一体どうしたのかとザビーゼクターの動きを見てみると、それは何の前触れもなく久賀達の左腕に装着されたライダーブレスに自分からセツトされた。

《Henshin》

「なっ!？」

久賀達の意味に反してのザビーへの変身。驚く彼女を余所にその身にはヒビロカネのアーマーが形成されていき、否が応にも彼女をマスクドフォームのザビーへと変化させてしまった。

(クソッ!? なんだっていきなり!!)

慌ててザビーゼクターを外して変身解除しようとする久賀達だが、ゼクターに手をかけた瞬間右手が自分のモノではないかのように動かなくなってしまう。必死に手に力を込めるも指は震えるだけでザビーゼクターを掴もうとはせず、さらには見えない手で締め上げられるかのように右手がザビーゼクターから引き離された。

「こ、これは・・・ッ!？」

自身の許容範囲を超えた現象にザビーは戦慄する。そんな彼女の目の前でザビーゼクターは羽を180°展開させた。それを見た瞬間ザビーは慌てて前方のワームの集団に突撃していく。

《Cast off Change Wasp》

ザビーがワームの集団に突入したと同時にザビーゼクターもその向きを前後逆にし、キャストオフしてマスクドアーマーを弾き飛ばし

た。自身の意思に反しての変身に続きライダーフォームへのキャストオフ、もしあの場に居たら間違はなく周りの隊員を巻き込んでいたに違いない。それを考えると彼女も思わず冷や汗を流していた。

「何なんだよ、一体何がどうなってんだよ!? あたしは変身する気なんて・・・クソッ!?!?」

訳の分からない現象にザビーは苛立ち、やり場の無い怒りを手近にいたワームにぶつける。渾身の力で殴られたワームは大きく弾き飛ばされ、地面に落下したと同時に近くに居たD小隊の一斉射撃を受けて無残にも蜂の巣にされてしまった。

「隊長!」

「こつなつたら仕方がない。戸高、怯んだ奴に対して攻撃を集中させる!」

ザビーは戸高に指示を出すと、手当たり次第にワームに攻撃を加えていく。彼女の攻撃を受けたワームは集団から弾き出され、隙が出来ると見るやそのワームの近くに居た小隊が一斉に攻撃を加えていった。

元々数自体はそこまで多くなかった為、この場に居たワームはあっという間に一掃されてしまう。そして戦いが終わると同時にザビーゼクターもライダープレスから離れ、久賀達を残して何処かへ飛び去ってしまった。

久賀達は暴走しなかった事に心の中で安心しつつ、何処かへと飛び去っていくザビーゼクターに、物理的な距離以上に大きなそれを感じていたのだった。

## 第59話 開く距離（後書き）

と言う訳で第59話でした。

ライダーブレスが外れなくなりました。久賀達の意味に反しての装着、風呂に入る時とか大変そうだ（笑）

とうとうザビーゼクターが独り歩きを始めてしまいました。久賀達の意味に反しての変身、若干オーズのプトテイヤに似通った部分が出てきましたね。とりあえず暴走する事はありませんでしたが、久賀達にとっては気の抜けない日々が続きます。

次回は遂にこの作品における剣の秘密が明かされます。何故ワームの自覚があるのに人間の味方をするのか？ そして彼の運命や如何に・・・

次回の更新もお楽しみに。それでは。

## 第60話 初めてののお洒落（前書き）

どうも、黒服です。

今回は前回と打って変わって大分緩い雰囲気の話になっています。

## 第60話 初めてののお洒落

とある公園

ZECT本部は依然としてあちこちに出現し無差別攻撃を繰り返すワームの動きに翻弄されていた。本部でも随時索敵を行いワームの動きから狙いを探ろうとしていたが、現状完全にランダムとしか思えない動きしかしていないのでその目的も何もかも分かっていない。

戦闘部隊は引つ切り無しに現れるワームへの対応に休む間もなく駆り出されるが、それでも戦力の絶対数が足りない為カバーしきれない所が出来てしまう。現状シャドウや特殊遊撃隊などに頑張ってもらっているが、このままでは体力的にも戦力的にも持たない事は明白である。

この事態に際し、大和は一度はZECTが手を切った人物である神代 剣とフリーで活動している風間 大介と接触を図りZECTの一員として戦ってもらうことを提案。この他にも訓練生動員としてブライトルーパーを前線に出すなど、ワーム側の戦力に対抗するため様々な行動に出ていた。

幸いなことに神代に関しては天道の方で話を付けZECTに協力してもらおう事になっている。とすれば残るライダーはただ一人・・・

「・・・で、私にZECTに協力してもらいたいと？」

風間 大介の勧誘である。

「そういう事だ、勿論報酬は払う。別にZECTのメンバーになれ

と言う訳ではなく、こちらがカバーしきれない所のワームを何とかしてくれるだけでいい」

訝しげな視線を向ける風間に、大和は可能な限り柔らかな対応で返した。今この場に居るのは風間と大和の他に久賀達と矢車、織田に影山とそうそうたるメンバーである。ワームの活動が活発になつて居る現在主戦力であるマスクライダーシステムの資格者が一か所に集まると言うのはあまり宜しくない状況であるのだが、今はワームの活動も沈静化しているのでこうして久賀達らZECT所属のライダーが集まっているのだ。見ようによっては脅している様に見えるなくもない。少なくとも風間には今の状況は脅している様に見えるだろう。

「私一人相手に随分と人を集めたもんですね。脅す気ですか？」

「こちらの最大限の誠意と取ってもらいたい。生憎と最高責任者を軽々と動かす訳にはいかないんでね、代わりと言っては何だがこうしてこちらの資格者全員で交渉に来たと言う訳だ」

実際には後二人ほど足りないのだが、時間的な問題もあり天道と加賀美はこの場にはいない。

そんな事情は知らない風間であつたが、彼はしばし考えると渋々と言つた感じで首を縦に振つた。

「いいでしょう。ですがあくまで協力するだけです。私をZECTの一員とは考えないでいただきたい」

「そこは誓つて」

「ああそれと、報酬とは別に条件があるんですが・・・」

話がまとまったと思つた矢先、風間がそんな事を大和に言つて来た。

咄嗟の事に大和は面食らっていたがすぐに気を取り直すと彼から詳しい話を聞く。

「内容如何による。とりあえず言ってみてくれ」

大和がそう言うとは何処となく満足そうな顔をして、風間は久賀達の方に体を向けた。

「……メイクさせてください！」

「……………はっ？」

突然の風間の言葉に大和を含めその場の全員が思考を停止させる。そしてたっぷり一分はかかった頃漸く久賀達が彼の言葉の内容を理解して素っ頓狂な声を上げた。

「いやあ、実は最初に見た時からあなたをメイクして見たいと思っていたんですよ。まあ色々あって出来ず仕舞いだったんですけど……」

何処となくテンションを上げてそう口にする風間。だが当の久賀達にしてみればそんなのは願ひ下げであった。

久賀達は基本着飾らない性質であるが、その理由は面倒臭いと言うのが半分。あとの半分は着飾ると言う事にむず痒さを感じていたからだだった。早い話がお洒落をする事が恥ずかしかったのである。

「ふざけんな、何であたしがメイクされなきゃならねえんだ」

案の定久賀達はベンチから立ち上がりその場を立ち去ろうとする。だがそれを許さない者が居た、矢車と織田である。二人は立ち上が



ろうとする久賀達の方を掴むと強引に彼女を再びベンチに座らせた。

「まあまあちよつと待て」

「ちよつ!?!? 何してんだお前ら!?!?」

「いいじゃねえか、減るもんじゃねえし。それにメイクしたお前の顔も興味あるぜ」

「ふざけんな! そんなくだらない事で……」

尚も抵抗しようとする久賀達だったが、突然手から感じた金属音と冷たい感触に身を固くする。恐る恐る背中側に回された手に視線を向けると、チラリとだが手錠の様な物が見えた。そしてその近くには影山の姿も……

「か、影山?」

「すみません、これも組織の為と思って諦めてください」

影山は申し訳なさそうにそう言うが、その表情には何処か期待したような色が含まれていた。それを見た瞬間彼もメイクした久賀達の姿に興味があるのが一目で分かった。彼の様子に久賀達は表情を引き攣らせる。

「影山の言う通りだ、諦める」

「安心しろ、この場には俺達しかいないから」

「カメラは何処だったか……」

「久賀達さん、ファイトです」

助けるどころか全員久賀達がメイクされるのを楽しんでいる節があった。状況はまさに四面楚歌、逃げる事も叶わない。そして風間はギターケースから商売道具のメイク器具を取り出して久賀達に近付いていった。

「それじゃ行きますよ。風間流奥義……アルティメット・メイクアップ」

「お、お前ら……後で覚えてるよおおおっ!!!??」

青々と広がる空の下、久賀達の無残な叫び声が響き渡った。

それから数分後……

「おお……」

「これはなかなか……」

「はあ……」

「スツゲエ……」

公園には満足そうな顔をした風間と、一点に視線を向けた矢車・影山・大和・織田の姿があった。そして彼らの視線の先には、見違えるようなメイクを施された久賀達……

「~~~~~ツ!? だあっ!! 見んな見んなお前ら、あたしは見世物じゃないぞ!!!??」

そうは言うが、誰も久賀達からは目を離さない。元々すっぴんの状態でも美人と言いきれる顔の造形をしていた久賀達である。それが風間の手によって見事にメイクされ今まで以上に彼女を美しくしていた。

ついでに言うとはんわり久賀達の頬が赤いのも彼女から迫力を失わせている一因かもしれない。

「いやあ、まさかここまでとは・・・女は磨けば輝くと言うが」

「久賀達さん、メツチャ綺麗です!？」

「うるせえっ! 下らねえ事言ってる暇あったらさっさとこの手錠  
- - -」

賞賛の言葉を送ってくる矢車と影山にさらに赤くなると、久賀達は必死に手錠を外そうとする。その時織田が久賀達の顔をカメラに収めた。

「あっ!? 織田お前なに撮ってた!?!」

「よっしゃ!! こりゃいい値で売れるぞ!!」

「ふざけんな! 売るって何処売る気だ、おい!?!」

久賀達の抗議を余所に織田は一目散に公園から出ていく。久賀達も手錠を外させた後大慌てで彼を追いかけていった。

「それじゃあ、必要があればこちらから要請をする。よろしく頼んだぞ」

「分かりました。良い仕事もさせてもらいましたし、それ相応の働きはしますよ」

そしてそんな二人を余所に、大和と風間は何食わぬ顔で握手を交わしていた。

河川敷

織田は久賀達を振り切る為に無我夢中で走っていた。幸い彼女は出だしが大きく遅れたので、追いつくまでにはまだ時間がある。その間にデジカメの中のデータを何とかしなければ・・・

そんな事を考えている彼の目に、数名のゼクトルーパーが見えた。一瞬ワーム討伐から帰還するのだろうかと考えていたが、どうも様子がおかしい。全員が何処か疲れた様子なのは良いとして、その手には木の棒や虫取り網を持っている。どう考えてもワームとの戦闘をした格好ではない。

「何してんだお前ら、そんなもん持って？」

「お、織田隊長！？ 何故こんな所に？」

「まあちよつとな。それよりお前らこそこんな所で何やってんだよ、虫取り網なんか持って」

織田が若干驚いた様子のゼクトルーパーにそう聞くと、彼は説明するのも疲れたと言った様子で親指で後方の川を指差した。一体何なのかと彼がそちらを見ると、川の中に入った神代の姿が映る。橋の上には岬の姿まで……

「何やってんだあいつ？」

「靴探しだそうです。橋の上に居る岬の……」

言われてみて見れば確かに神代の様子は川の中の何かを探しているようにも見える。織田の居る場所からは岬の足の様子までは見れないが、恐らく靴探しと言うのは本当だろう。

そして彼らは、それに付き合わされてしまった……と。

「まあ何と言うか、災難だったな」

同情の目と共に紡がれた織田の言葉に、先頭にいるゼクトルーパーは心底うんざりしたような様子で頷いた。

その時、遠くから久賀達の声が響いてくる。どうやら大分近くまで来たらしい。

「やつべ、忘れてた!? じゃあな!」

言うなりあつという間にその場から走り去っていく織田。数分と経たないうちに彼の後を追いかけて来た久賀達に同じ質問を彼らがされたのは、言うまでもない事である。

夕方・街中

あの後久賀達は結局織田を見失っていた。かなり長い事探し回っていたのだが、途中再び出勤命令が入り已む無く中断。結果織田にはまんまと逃げられてしまったのである。

「畜生、織田の奴……後で覚えてろよ」

愚痴りながら久賀達は何気なく歩いていると、視線の先に神代の姿を確認した。その手には、何か玉の様な物が入った袋を持っている。さらに言えば彼は何処か上機嫌なようで、時折スキップをしていた。普段から彼にどこか能天気な雰囲気を感じていた久賀達だが、明らかに今までとは違う彼の様子に首を傾げる。

あまりにも奇妙だったので、彼女は思い切って声をかけて見る事にした。

「おいどうした神代、随分と上機嫌みたいけど?」

「ん？ おお、お前か！ 聞いて驚け、何とクリスマスにミサキー  
又とデートする事になったんだ！！」

彼の口にした言葉に、久賀達は目を点にした。彼女が知る限り、岬  
は彼の過剰なアタックに辟易していた筈である。寧ろ煩わしくさえ  
思っていた筈だ。そんな彼女が神代とのデートにOKを出す・・・  
・俄かには信じがたい話であった。

「・・・強引に詰め寄ったんじゃないだろうな？」

「馬鹿を言つな！ そんな事する訳がないだろう。俺が頼んだらミ  
サキー又は快く応じてくれたんだ！！」

そう言った彼の表情は、正に天にも昇るかのような物だった。久賀  
達の目には一瞬彼の頭と背中に天使の輪と翼が存在している様な幻  
覚が見えた。

「はっ！？ こうしてる場合じゃない、俺はミサキー又にプレゼン  
トするマフラーを編まねばならないんだ！」

そう言うと彼は一目散にその場から駆けだしていく。久賀達は呆然  
とその後ろ姿を見送っていた。

次の日

今日も今日とてワーム討伐にあちこちに駆り出される久賀達率いる  
シャドウ第2番隊。しかし状況は依然として宜しくはなく、場合に  
よっては対応しきれない所もあった。

そして例によってワームの近くに行くと、ザビーゼクターは勝手に

久賀達を変身させてしまう。その度に彼女は暴走しないかと肝を冷やしていた。

幸い今回の戦いでも暴走の前兆の様なモノは現れなかったが、最早いつなつてもおかしくないと考えている久賀達は絶えず神経をとがらせていた。

その時、移動車両の窓から外を見ていた彼女の目に見知った老人の姿が映る。それを見た瞬間久賀達は咄嗟に運転していた播磨に車を止めさせた。

「停めるって、どうしてですか？」

「ちよつとした野暮用だよ。お前らは先に本部に戻ってる」

彼女の言葉に播磨は首を傾げつつも頷き、後方の車両に乗っていた戸高も不思議そうな顔をしつつ彼女の指示に従って先に本部に戻っていった。そして車から降りた久賀達はと言うと、視線の先に居る人物、神代の執事をしている老人の所に向かっていく。

「なああなた！ ちよつと聞きたい事があるんだけど・・・」

「？ はあ、何でしょう？」

久賀達の登場に神代の執事はキョトンとした顔をしているが、それに構わず彼女は本題を口にした。

「あなた、確か神代がワームだって事を知ってたんだよね？ なんだってあいつは、人間を守ってワームと戦ってたんだ？」

以前加賀美から聞いていたのだが、この執事は神代がワームである事を知っているらしい。そして岬とのデートを嬉しそうに語ってい

た辺り、神代は本当に人間を愛しているのだろう。だがそうなる経緯が未だに彼女には分かっていないのだ。この執事は長い事あの屋敷で働いていた、となればもしかしたら彼が人間を愛する理由も知っているかもしれない。

「……私から言える事は、坊ちやまは坊ちやまであると言う事だけです」

「ワームとの戦いも正念場に入って来た。このまま人間が勝つ事になれば、いずれワームである神代も討伐しなきゃならなくなる……。あたしはあいつの事を馬鹿だと思っちゃいるが、嫌いだとまでは思っちゃいない。あいつを討伐対象から除外する為には、何かしらの証拠が欲しいんだ」

神代の詳しい事を口にしようとしない執事に、久賀達は彼が討伐対象になりえる事を口にした。実際ワームは先の戦いで恐らく戦力の大半を失ったであろう。となれば、近い内に必ず何か大きな行動に出る筈。

それがZECTの出した結論であり、今の状況はその為の前準備ではないかと言う見方が強まっている。

そしてそれがどのような結果になるにせよ、人間側が勝つ様な事になれば残ったワームも掃討される可能性が高い。その中には当然ワームである神代も含まれるであろう。現状人間に擬態したワームを即座に探知する手段はないが、近い内に生き残ったワームを補足する為の探知機が開発される可能性はあった。そうなれば当然、ワームである神代も……。

久賀達にそう言われると、執事は辛そうに目を伏せながらポツリポツリと口にしていった。



「もう、3年近く前になりますか。坊ちやまが事故に遭われたのは・・・」

「事故？」

「左様でございます。3年前、坊ちやまは当時もう一人いた執事の運転する車に乗っておられました。ですがその車が事故に遭い・・・」

「」

彼の話をもとめるところだ。3年前本当の神代は今いる老人の執事とは別にもう一人いた執事の運転する車で海岸近くを走っていたらしい。しかしその車が事故に遭い、運転していた執事は死亡。人間の神代も虫の息の状態だったと言う。

「その時です、今の坊ちやまが現れたのは」

瀕死の重症だった人間の神代は、朦朧とした意識の中でワームが擬態した自分自身を目にした。その時彼が何を思ったのかは今となっては分からない。だがそれを見た人間の神代 剣は、今のワームの神代 剣にこう言ったのだそうだ。

「・・・姉さんを、頼む・・・」

「で、それ以来ワームの神代は神代 剣として生きている・・・と？」

「はい。最初は、坊ちやまの姿を利用して人間を手につけようとしていたそうでございます。ですが・・・」

ワームの神代の中には姉に対する深い愛情が存在していた。そして直に受ける姉からの愛情と記憶の中の姉への愛情に、彼の心が変化して行ったらしい。何度か人間を襲おう考えるも、姉への愛情と姉

からの愛情がその考えに待ったをかけてしまう。そして次第に、人間を襲おうと言う考えそのものが彼の中から消えてしまったと言うのだ。

「それ、本当か？」

久賀達は表面上は訝しげな視線を向けるが、逆の心のどこかではそれに納得もしていた。何を隠そう彼女自身、人間に愛を向けたワームをその目で見た事があるからだ。

一方執事は彼女の質問にハッキリと頷くと、懐かしむ様に口を開く。

「それから、以前と全くお変わりない関係でおられました。坊ちやまも坊ちやまの姉君も、それはそれは幸せそうにしておられました。ですが、あの日……」

ある日偶然遭遇したワームに、神代の姉は殺されてしまった。その瞬間神代は姉を殺したワームを始末し、姉を奪ったワームに復讐しようと考えたらしい。

「ちょうどその時です、坊ちやまが私に自身の秘密を明かしてくださいましたの」

「あんたはそれを聞いて、何とも思わなかったのか？」

久賀達の質問に執事は微笑みながら彼女に背を向ける。その状態では久賀達に彼の表情を見る事は出来ないが、声の様子から彼が優しい顔をしているだろう事だけは分かった。

「薄々、気付いてはありました。事故に遭われた後から坊ちやまの様子がどこかおかしかった事に。坊ちやまが正体を明かされた時に

は確かに驚きはしましたが、それだけでした」

「あなたは良いのか？ 慕ってた主人が偽物だったんだぞ？」

言ってから久賀達はかなり意地の悪い質問をしてしまったと後悔した。だが執事はそれを気にすることなく答える。

「坊ちやまは、ワームになられた後も私の知る坊ちやまであり続け  
てくださいました。ならば、坊ちやまが坊ちやまである限り、私に  
とって坊ちやまは坊ちやまです」

そう言っただけ振り向いた執事の様子は、これ以上ないほど輝いていた。  
久賀達は彼の様子を見て、まるで眩しさを遮る様に目を瞑りつつ顔を  
少しだけ反らすのだった。

## 第60話 初めてののお洒落（後書き）

と言う訳で第60話でした。

久賀達、初めてのお化粧をするの巻（笑）。久賀達の化粧した顔が見たい為に矢車達が久賀達を押さえる場面は、この小説を書いて少ししてから考えていたネタです。

そして遂に剣の過去が明かされました。この作品では原作よりも早くに剣はワームと入れ替わってます。正直ちょっとやっちゃった間もなくはないですが・・・

次回の更新もお楽しみに。それでは。

**第61話 発覚・明かされる正体（前書き）**

どうも、黒服です。

今回ついに神代の正体が明かされる話になります。

## 第61話 発覚・明かされる正体

ZECT本部

大和は指令室で戦闘部隊に次々と指示を出しつつ、スクリーンに映し出されている現在の各エリアの状況をまじまじと見つめていた。動ける部隊は全て総動員させ、さらに神代と風間にも協力を仰いでいるにもかかわらず依然として状況は良くない。幸いにして成虫体が現れないので、ワームの出現頻度に反して損耗率は低いのだが。

(しかし、一体ワーム達は何がしたいんだ？ やけに散発的な行動が目立つ様な気がするが・・・)

損耗率自体は低いけど、大和は逆にその低さに不気味さを感じていた。確かに戦闘部隊も全体的に技量を上げてきているので損耗率が下がる事自体は構わないのだが、どうしても順調さが気になる。これが単なる思い込みであればいいけど、もし何かを見逃していたとしたら・・・

「統括、矢車隊長からの通信です」

「ん？ ああ、回せ」

大和が考えに耽っていると、唐突に矢車から通信が入ってくる。通信士からの報告に思考を引き戻された大和は、頭を切り替えると手近の通信機を耳にあてた。

「どうした、矢車？」

『大和さん、現在ワームの動きはどうなっています？』

「相変わらずだな。法則性もなく目的が全く読めない。一体何をするつもりなんだか」

矢車と通信しながら大和は肩を竦める。一応様々な方面からワームの行動に法則性がないか探ってはいるが、何も分かつてはいないのが現状だ。これまでだと何かしらの法則性や目的が見出せていたのだが、今回は全くと言っていいほどそれが見られない。

「大和さん、全体的なワームの動きはどうなってます？ 何処かに向かおうとしているとか・・・」

「それも特には・・・？」

全体的に見ても何か目的があるとは思えない。その事をハッキリ矢車に告げようとした大和だったが、その言葉が唐突に止まる。その目はジツとスクリーンに向いていた。

「？ 大和さん？」

突然言葉を止めた大和に矢車は通信機の奥で怪訝な声を上げる。各エリアの状況に目を向けている内に、大和はある事が気になったのだ。戦闘自体は全体的にZECTの方が押している。しかし、彼はそこに奇妙な動きが見えた様な気がした。

「・・・矢車、今すぐ戻ってこい」

「はっ？ それは・・・」

大和からの突然の帰還命令、それに矢車は疑問の声を上げる。いきなり話題を変えられては流石の彼も反応に困る。しかし流れるにワームの動きに何処か不審な点があったのだから事は何となく理解出来た。

『久賀達と影山にも声を掛けておきますか？』

「それは・・・そうだな。とりあえず影山だけでいい、頼んだぞ」

そう言うと大和は通信を切った。通信機を近くに居た者に渡すと、彼は再びスクリーンに目を向ける。

(考え過ぎであればいいんだが・・・)

気付いてしまった違和感に、大和は内心で胸騒ぎを感じながら再び各部隊に指示を出す作業に戻るのだった。

街中

その日、神代はこれ以上ないほどの上機嫌で街中を歩いていた。今日は待ちに待った岬とのデートの日、今はこの日の為に編んだマフラー（本当は途中で眠ってしまった神代に代わって、執事のじいやが完成させた）を携え約束の場所へ向かっている最中である。

待ち合わせの時間も着々と迫り、少し急ごうかと神代が走る速度を上げた。目的の場所までもう少し、岬とのデートに神代が心を躍らせていると・・・

「やあまた会ったね、神代 剣。いや・・・サソード」

剣の目の前に天道に倒された筈のカツスワーム、乃木 怜治が現れた。剣は知らない事だが、乃木はこれで2回復活した事になる。

一方の神代はと言うと、目の前に現れた乃木に驚愕の表情を浮かべ



た。彼も後になってカツシスワームが天道に倒された事を聞いていただけに、乃木が再び現れた事が信じられなかったのだ。

「貴様、天道に倒された筈じゃ?!」

「ふふ、あの程度で死ぬものか」

驚愕する神代に乃木は余裕を見せつつそう言った。彼の様子に神代は咄嗟にサソードに変身しようとするが、それよりも乃木が行動を起こす方が早い。乃木はワームに姿を変えることなく、掌から紫色の波動を放って神代を歩道橋から吹き飛ばした。

「うわああああっ?!」

神代は乃木の攻撃をかわす事が出来ず今居た歩道橋から押し出され、その下にある別の歩道橋に落下する。神代を叩き落とした乃木はと言うと、特に追撃する気もないのか上から彼を見下ろすだけに留めた。今回はどうやら単に嫌がらせのつもりだったらしい。

だがここで彼は、予想外の事実を目にする事になる。

「ッ!? アレは……」

乃木が見つめる先、そこには別の歩道橋の上に倒れて呻き声を上げている神代が居た。しかし倒れている彼からは、人間が放つ事は決していないオーラが放たれている。それは乃木自身と同じく、ワームが発する物に他ならなかった。

「あの男、まさか……」

乃木はその様子をしばし眺めると、嫌らしい笑みを浮かべてその場

を離れていった。

それから数分と経たない内に体勢を立て直した神代が先程まで乃木が居た所に目を向けるが、そこには乃木どころか人の気配すらない。その事に神代は首を傾げるのだが、岬との約束があるのを思い出すと疑問を振り払って急いでその場から走り去っていくのだった。

公道・ZECT移動用車両内

影山は突然の矢車からの呼び出しを受け、現在本部に向けて車を走らせている最中だった。呼び出された時の矢車の言葉は実に簡潔、『今の仕事を切り上げてすぐに本部に向かえ』と言うモノだ。

正直もう少し理由の様な物を話してほしくもあるのだが、それを問い質す前に矢車が携帯の通話を切ってしまったので仕方なしに影山は次の目標に定めていたポイントのワームの討伐を久賀達に引き継いでもらう。久賀達の方も事情を聞くと快く了解してくれたので、影山は即座に本部に向けて部隊を動かす事が出来た。

「それにしても、矢車隊長は何故いきなり影山隊長を呼び出したんでしょう？ 久賀達隊長は呼び出されなかつたんですよね？」

助手席に座って何気なく街の様子を見ていた影山に、運転をしていた隊員が声を掛けてくる。彼の言う通り呼び出されたのは影山のみで、久賀達には声が掛かっていない。これは影山の仕事を引き継いだ久賀達からキャンセルの話が入ってこないことから見ても明らかだ。

これは大和が念の為に久賀達の部隊だけは本部の外で行動させよう

と考へての事であるのだが、彼らはそんな事情を知る由もない。

「さあな。ただ矢車さんの様子から察するに、厄介な理由がある事は間違いないだろう」

影山は視線を正面に移しながら、運転をしている隊員に言葉を返す。実際先程の話はかなり一方的だったが、彼がそう言った言い方をしてくる時は大抵が緊急と言うほどではない物の面倒がある可能性のある場合が多い事を経験から影山は心得ていた。

故に、影山は今回も何かしら厄介な事態が迫っていると予想していたりする。

(何事もない……事はないだろうなあ)

影山は内心で溜め息を吐く。ZECTのメンバーになって彼も十分ベテランの域に入ったが、未だにこの仕事に対する飽きと言うモノが来ない。裏を返せば飽きている暇がないとも言えるが、最近は特にそれが顕著だ。こここのところ傷の療養以外で全く休んだ記憶がない。これでは如何に仕事熱心な影山と言えど、疲れが溜め息となって出ると言うモノだ。

この山場を越えたら休暇でもとろうか、そんな事をぼんやりと考へたその時、運転をしていた隊員が唐突に焦りの声を上げた。

「た、隊長ツ！ あれをツ！？」

「ん？ どうし、あいつはツ！？」

運転をしていた隊員の視線の先、そこには先日 of 戦いで天道に倒された筈の乃木の姿が――

「また復活したのか、一体何回ッ！！ くそ、車を止める！」

影山は部下に車を止めさせると、急いで乃木の前に走り出る。また乃木が復活したとなれば、確実に何か行動を起こす筈だからだ。もしかすると、今の状況も乃木が何か仕組んだものであるかもしれない。

「待てッ！！」

「お・・・っと、おやおや君か、影山 瞬君？」

乃木は突然現れた影山に一瞬驚いた様な仕草を見せるも、すぐに何時もの調子で余裕な態度を見せた。対する影山は、ホッパーゼクタイを呼び出して何時でも変身できる体勢を取る。

「貴様、性懲りもなくまた復活して・・・今度は何を企んでいるッ！？」

「ふふふ、それはすぐに分かる事だ。それより私は今忙しいのでね、出来ればそこを通して貰えると嬉しいのだが・・・」

「通すと思ってるのか・・・変身ッ！」

《Henshin Change Punch-Hopper》

影山は乃木がワームの姿になる前にPホッパーに変身し、先手必勝とばかりに彼に殴りかかる。だが当然の事ながら乃木はその攻撃を易々と回避し、振り向き様にワームの姿 - - 以前の姿から進化し右手に盾が付いたカッシスワーム・クリペウス - - に変化した。

『やれやれ、困ったものだ』

「今度は一体どんな能力を持ったか・・・見せてもらおうぞ！」

左手のブレードを向けてくるカッシスワームに対し、P ホッパーは拳を握りしめて殴りかかるのだった。

#### 公園・噴水前

のどかな雰囲気の流れる公園の噴水の前、そこには少しお洒落をして紙袋を持った岬の姿があった。彼女はこの日、神代との約束であるデートをする為にやって来ていたのだ。出会った当初や少し前は勝手に付き纏ってくる彼に正直煩わしいモノを感じていたのだが、エリアZでの一件を境に彼女の中で神代のイメージが変わって来た。一言で言ってしまうと、男らしいの一言に尽きる。真正面から自分だけを見てくれる誠実な姿勢を見せられた事で、神代は彼女の心を動かす事が出来たのだ。

岬は神代が来るのを今か今かと待っている。そんな彼女を、物陰からこっそり覗いている人影があった。神代の正体を知る数少ない人物である、加賀美 新だ。彼は神代の正体がサソリのワームである事を知っているのだ、二人が付き合う事になったと聞いて心配で仕方なかったのだ。

(大丈夫かなあ、岬さん……)

今も加賀美は不安そうな表情で岬の姿を見ている。正直な話、神代がワームなどではなくただの人間であればここまで心配はしなかっただろう。寧ろ岬と神代の仲を応援したりしたかもしれない。しかし神代 剣の正体はワームである。彼自身神代が岬を襲うとまでは思っていなかったが、それでも心配なモノは心配だった。本当なら二人が付き合うのは断固として止めたい。

しかしいざ神代の正体を岬に告げようとすると、どうしても口が動いてくれなかったのだ。それは神代が悪い人物ではないことを理解しているからか、それとも岬の楽しげな様子に後ろ髪を引かれたからか……

そうこうしていると、遂に神代が岬の下にやって来た。ただ奇妙な事に、彼の姿は何処か薄汚れている様な気がする。

(何だ……?)

もつと良く見てみようと思ふと加賀美が身を乗り出そうとした………その時である。

「ぐあああああつ?!」

「くっつ!?!」

突然何処からかPホッパーが叫び声を上げながら飛ばされて来た。

その様子に一瞬思考が停止しPホッパーを凝視する3人。

そこへ、彼を吹き飛ばした相手であるカッシスワーム・クリペウスが悠々と現れる。

『こんな物かね、先程までの威勢は何処へ行つた?』

「く、くそっ!?!」

現れたカッシスワームにPホッパーは何とか体勢を立て直す。彼は内心で焦っていた。この戦いの中でカッシスワームはまだ何の能力も使った様子がないのだ。少なくとも時間を停止させたりした様子はない。であるにも拘らず、彼はカッシスワームに一方的に圧されていた。

(くそ、こいつの能力は何だ？ また時間停止か、それともコピーか・・・まさか両方？)

新たに異なる能力を持っている可能性もあるが、場合によっては過去に持っていた能力を両方とも持っている可能性もないと言い切れない。これまで使ってこなかったのは、切り札として取ってあるから単純に使う必要がないと考えているからなのか・・・

少し離れたところでは彼の部下がカメラを構えて戦いの様子を余すことなく撮影している。この映像は逐次本部に居る大和に送信され、カッシスワーム・クリペウスの特徴などを伝えていた。

「か、影山さんツ！？ と・・・お前はツ?!」

「ん?」

気を取り直した加賀美がPホッパーと、三度現れたカッシスワームに驚愕の声を上げる。その声に気付いたカッシスワーム・クリペウスは漸く彼らの方に目を向けた。その視線の先には、神代の姿もある。

『おやおや、これはこれは・・・探す手間が省けたね』

「何?」

相手の言葉の意味が分からず、首を傾げる加賀美。カッシスワームはそんな彼の事を無視して神代の声を掛けた。

『しかし何とも奇妙な事だ・・・まさかワームがライダーをして、さらに我々ワームに牙を剥くとはね』

「ッ!?!?!?」

カッシスワームの言葉に神代は体を強張らせる。まさかバレるとは思っていなかっただけに彼の感じた衝撃は相当なものだった。しかもそれがあるうことか岬の目の前で行われるとは……

「ワーム？」

「……出鱈目を言うなッ!？」

訳が分からないと言った顔を神代に向ける岬の様子に、神代は内心の動揺を隠しきれない様子でサソードバイバーを取り出す。しかし、彼が変身するよりも早くにカッシスワームの放った波動が神代を捉えた。

「う、ぐあああつ?!」

「剣ッ!！」

「剣君ッ!？」

カッシスワームの攻撃をまともに喰らった神代に、悲鳴の様な声を上げる岬と加賀美。だが次の瞬間、岬とPホッパーはとんでもない光景を目にする事になる。

カッシスワームの放った波動に苦しむ神代、その姿が唐突に揺らいだかと思うと、次の瞬間には彼の姿は人間のそれではなくサソリの様なワーム……スコルピオワームの物に変化してしまった。

「は……えっ?」

「な、何っ!？」

神代の姿がスコルピオワームの姿に変わったのを見て、信じられないと言った顔になる岬と驚愕するPホッパー。カッシスワームが波



動を出すのを止めると、彼は元の人間の姿に戻った。神代がワームの姿になっていたのは僅か数秒の間であったが、その間に周りに居た者たちが受けた衝撃は凄まじい物だったであろう。現に岬は手に持っていた紙袋を落として放心状態になっている。

『フッフ、まだ白を切るつもりかね？』

「う、あ・・・ああ・・・」

「くっ、変身ッ！」

《Henshin》

岬にワームである事がバレた事実には、様々な思考が絡まり合って身動きできなくなる神代。そんな彼の様子にカッシスワームに対して憤りを覚えた加賀美はゼクターをベルトにセットしてガタツクに変身し、カッシスワームに一気に飛び掛かった。

マスクドフォームのパワーはライダーフォーム時のそれを上回る。ガタツクは渾身の力を込めて神代に視線を向けて無防備になっているカッシスワームを殴り飛ばそうとするが、その拳はカッシスワームを捉える事はなかった。何故ならば、彼の拳はカッシスワームに当たる直前目の前に現れた盾に防がれてしまったからだ。

「ッ！ 何っ!？」

突然目の前に現れた盾に驚愕し、動きを止めてしまったガタツク。その隙を見逃さず、盾を構えていた相手は強力な斬撃をガタツクに喰らわせた。

「グアッ?! い、一体・・・なッ!?!？」

「何っ!?!」

盾を構えていた相手を目にして、ガタツクとPホッパーは仮面の奥で目を見開く。そこには神代に目を向けるカッシスワームを守る様に立つ、もう一体のカッシスワームの姿があった。ただし先に現れていたカッシスワームには頭部に灰色の兜の様な物を付けているのに対して、後から現れたカッシスワームは右手に盾が付いた以外はこれといった変化はない。

「に、2体？ 2体もいるのか!？」

『そう言う事だ』

『目的は果たした、今日はこれで失礼するとしよう』

2体のカッシスワームはそう言うと、クロックアップであつという間にその場から居なくなってしまう。後に残されたのは、ガタツクとPホッパー率いるシャドウ、そして放心状態の岬と神代だった。

数十分後・ZECT本部

あれからしばらくして、影山は本部の司令室にやって来ていた。

あの後彼は神代を詰問しようとしたのだが、加賀美の妨害と神代本人がその場から逃げだしてしまった為それは叶わぬ事となっている。

「しかし、まさか神代 剣がワームだったとはな」

大和は椅子に腰かけながらそう呟いた。あの戦闘での様子は影山の部下が逐次撮影し送っていた映像から大和も知る所となっており、既にZECTには神代の正体がワームである事が明らかとなっている。

「久賀達、お前この事知ってたな？」

影山と同じく本部に到着した矢車は、近くのコンソールに映った久賀達にそう問いかけた。彼は以前彼女がスコルピオワームを庇った事に関して問いかけたが、その時は久賀達が答えをはぐらかしてしまったので何故彼女がワームを庇ったのか理解できなかった。だがまさかその理由がこの様な物だったとは、思いもよらなかっただろう。

「まあな。ただあの時はあたしも詳しい事が分かって無かったんだ。だから変に混乱させたりしないようにと思って・・・」

「いい訳はいい。せめて一言くらいは相談なり報告なりはして欲しかったな」

大和は久賀達の言葉をバツサリと切り捨てた。今回の事に関しては事が事であるだけにすんなりと久賀達を許すわけにもいかない。何しろ切り札であるマスクドライバーシステムを、あるうことかワームが使用していたのだ。幸いこの事はこの場に居る3人と久賀達しか知らない事であるが、これが上層部にバレたら大変な事になる。

「それは本当に悪かった。でも混乱とかそう言うのは本当だ・・・まあ、だからどうだって訳じゃないのは分かるけど・・・」

画面の向こうの久賀達は申し訳なさそうな顔で頭を下げた。彼女自身今までこの事に関する結論を先送りしていた事を悔やんでいるのだろう。それは司令室にいる大和達にも伝わって来た。

彼女の様子に、大和は小さく溜息を吐く。

「はあ、まあいい。それでだ、この事に関してだが・・・」

「ど、どうなるんですか？ 神代 剣は・・・？」

いよいよ神代への処遇が決まるうかという時、影山が不安そうな顔で大和に問いかけた。先程は確かに驚いたし、彼自身神代に特別友情を抱いている訳ではない。だが彼が決して悪い人物でないのは良く分かるつもりだった。

何時だったか、工場内のワームの巣を襲撃する際に戦力として協力を仰ごうとした時は誕生パーティーの歌を歌わされた事もある。当時はかなり腹も立つたし、今も思い出すと思わず苦い顔になってしまいが・・・少なくとも酒の席などであれば笑い話にはなるだろうと思っていた。

最近で言えば、その身を呈して岬を守った事もある。その事からも神代が決して敵ではない事が伺えるだろう。そこを考えると、出来れば穏便に済ませたいとも思ってしまった。

「・・・当然、サソードゼクターとサソードヤイバーは回収する。  
神代 剣、いやワームは・・・倒す」

しかしそんな影山の願いとは裏腹に、大和が出したのは非情な決断だった。一瞬何かを言おうとして影山が口を開きかけるが、立場上の事も考えて結局何も言えずに終わる。

「全員、分かってるな？ 今は有事であるが故に即座にサソード討伐には向かわない。だが事が終わるか作戦行動中にサソードを見つけたら・・・その時は確実にサソードを撃破し、ゼクターを回収しろ」

「了解」

「はい・・・」

大和の言葉に矢車は即答で返事をし、影山も肩を落としながら返事をする。そして彼の視線は、そのまま画面の奥の久賀達に向けられた。

「久賀達……分かったな？」

大和は珍しく刺す様な視線を久賀達に向ける。それに対して久賀達はしばし瞑目すると、ゆっくりと頷き口を開く。

「ああ、分かってる。次にサソードを見つけたら………」

実を言うとシャドウは本部直轄である為、一般部隊の戦闘部隊統括である大和の命令を聞く必要性はあまりない。なのでここで彼女が大和の言葉を拒絶する事も十分に可能である。

しかし………

「あたしが……あたしがゼクターを回収する。サソードを倒してな」

久賀達も大和の命令に従うのか、素直に首を縦に振るのだった。

## 第61話 発覚・明かされる正体（後書き）

と言う訳で第61話でした。

正体がバレた時の神代の反応が、この作品では若干違います。この作品内では彼は自分がワームであるという自覚があったので、感じる絶望の方向性が原作のそれとは異なっています。

さらに言えば神代の正体は大和の下にもあっさりと伝わる事になりました。大和は神代を倒す気満々で、久賀達もそれに従うような素振りを見せていますが・・・

次回の更新もお楽しみに。それでは。

**第62話 奇襲・ワームの逆襲(前書き)**

どうも、黒服です。

今回はほぼオリジナルの展開です。

## 第62話 奇襲・ワームの逆襲

神代邸

高級住宅街の一角にある、神代の邸宅。そこでは彼の執事であるじいやが作ったクリスマス用の料理とケーキをテーブルに並べた、やさやかなクリスマス会が開かれていた。

何時もより少しだけ雰囲気の違い、しかしその違いは単に料理の違いだけではない。神代が纏っている雰囲気その物が何時もと違っていた。

「とうとう……バれてしまったよ、じいや。それも、ミサキー  
又にまで……」

神代 剣がワームである。その事が遂に周囲の物にバレってしまったのだ。しかもよりにもよって彼が思いを寄せている岬に真っ先に知られてしまった。彼女の様子を見る限り、同じく正体を知っていた久賀達と加賀美はこの事を口外してはいなかったらしい。今の今まで黙ってくれていた事に、神代は心から感謝したい気分だった。

「坊ちやま……」

そんな神代の様子を、じいやは暗い面持ちで見つめていた。彼もまた神代の正体を知る人物の一人であるが、彼にとっては神代は神代である。故に、周囲から敵と神代が判断されてしまう事が悲しかった。

しかも神代がワームである事がZECTの知る所となってしまうた



事で、近い内に何が起ころかは考えるまでもない。何とかしたいとは思いますが、力の無い老いぼれの身で一体何が出来ると言うのか・・・

「さあ、坊ちやま。お料理が冷めてしまいます」

「……………そうだな、じいや……………」

せめて今は少しでも神代に満足してもらおうと、その思いを込めて彼に料理を振る舞うのだった。

渋谷・とある廃墟

つい先日エリアZで激戦が行われたエリアZ。その戦いではZECTが重火器や爆発物を多用した為、エリアZ以外にも戦いの爪痕を残していた。

そんな渋谷にある廃墟の一つに、生き残りのワームの多くが集まっている。ほとんどはサナギ体のワームに変わりはないが、中には白いサナギ体の姿や成虫体の姿も確認できた。

そして、その中心にはさらに二体に分裂したカッシスワームの擬態した人間、二人の乃木 怜治の姿が。

「そろそろだな……………」

二人いる乃木の内片方がそう口にした。それと同時にもう片方も口元を吊りあげて笑みを浮かべる。

「ああ、ZECTの連中は上手い具合に俺達の策に嵌ってくれたようだ。連中は今の我々の行動を、この間の戦いの残党掃討位にしか

思っていないらしい」

「好都合だがな。今が好機、ZECTを壊滅させ、マスクドライダー共を根絶やしにする！」

乃木達がそう言うと同時に、周囲に居たワーム達が一斉に動き出した。夜の闇が支配する渋谷廃墟の中を、魑魅魍魎が如く無数のワームが進んでいく。その様子を、乃木達は満足そうに眺めるのだった。

翌日・ZECT本部

神代の正体が明らかになった次の日、依然としてワームの散発的な攻撃が続く中大和は内心で大きな不安を抱えていた。

彼が懸念しているのは戦線が広がり過ぎた現状である。突然のワームの多発出現に当初は焦りを見せていた彼も、それが続くに従って冷静に現状を分析できるようになっていた。そんな時である、彼はある事に気付いたのだ。

（戦闘部隊が大分本部から引き離されているな・・・）

そう、戦いが進むにつれて多くの戦闘部隊が本部のある場所から引き離されていったのである。現在ZECTはエリアZでの戦いの消耗から全ての部隊を出払っている状況であり、本部は実質から空き状態であった。

勿論守備目的のゼクトルーパーは本部に控えていたが、ハツキリ言うてしまえば微々たる戦力である。大和もそれは理解していたので最初の内は守備隊以外の部隊を出す事には抵抗を感じていた。だが本部の場所はシャドウなど一部の者以外の知らない事でもあったの

で、直接本部に攻撃が仕掛けられる事はないであろうと判断し全ての部隊をワームとの戦いに駆り出してしまった。

おかげでほとんどのエリアで戦いに局地的な勝利を収める事が出来てはいるのだが、ここにきて大和は本部のから空き加減が心配になって来た。念の為に矢車と影山の部隊を本部に呼び戻しはしたが・

「大分ワームの攻勢も収まってきましたね」

大和が思慮に耽っていると、影山がそう口にする。実際各エリアでの戦闘も大分沈静化しつつあり、いよいよもってこの戦いにも終わりが来るかと思われていた。

その時である。本部内に警報が響き渡ったのは。

「ッ!? これはッ!!」

突然の警報に矢車と影山は辺りを見渡す。大和も一瞬面食らったが即座に気を取り戻すと、何が起こっているのかを確かめる為手元の通信端末の画面に目を向ける。どうやら問題は地下で起こっているらしい。詳細を聞き出す為に彼は通信機に手を伸ばして、地下に居る者に連絡をとった。

「どうした、何があった？」

『と、統括ッ!? ワームです、ワームがいきなり現れましたッ？

』!

通信機の向こう側からは、半ば恐慌状態となった声と複数の銃声が聞こえて来た。

「いきなり現れたとはどういう事だ？ 成虫体がクロックアップで現れたのか？」

『いえ違います、地下からです！ いきなり下からワームが現れて・・・う、うわあああああつ?!』

「どうした、応答しろ。おい、聞こえるか？」

大和は何度か呼び掛けるも、通信機からは何の応答も返っては来ない。それは大和に否応なく今の状況を理解させるものであった。

「大和さん、まさか・・・」

「そのまさかだ。ワームが本部に攻めて来たらしい」

直接通信しなくとも今の様子を見れば何が起こっているかなどはすぐに分かる。しかし一つ分からない事があった。ワームはどうやって本部の場所を突き止めたのか？

「恐らく、エリアZでの戦いが起きた際こちらの動きを偵察していたワームが居たんじゃないですか？ 本部の場所が直接分からなくても、こちらの動きから逆算して本部の大まかな場所を探ったり・・・」

「それが一番妥当だろうな。とにかく今はこんな所でジツとしてる暇はない、早急にこの事態を鎮圧しなければ」

矢車が口にした予想に大和が頷く。恐らく先日の戦いにはエリアZの制圧とは別に、ZECT本部の割り出しが目的だったのだろう。あれだけ大きく部隊を動かせば、どんなに頑張っても足取りがバレてしまう。例え完全ではなくとも、大体の見当くらいは付けられる。そうなれば後は簡単だ、防備が薄くなつた所を一気に叩けばいい。

あの戦いでワーム達は妙に退き際が良かった。あれは単純に次席指揮官に当たるワームが不利を悟ったからではなく、これ以上攻める必要が無くなったから退いたのだらう。例えばエリアZを攻略できなくても、本部を攻略してしまえば同じ事だから。

「司令室、聞こえるか？」

『や、大和統括！？ 我々は、どうすれば・・・』

「落ち着け、まずは他の部隊に本部に来るよう連絡しろ。特に久賀達と織田の部隊には早急に戻るよう伝えるんだ」

『りよ、了解ッ！』

大和は通信機で指示を出し、出払っている部隊に緊急招集をかける。本来であれば本部の場所は極秘なのだが、そんな事に拘ってはいけない。今はとにかく本部を守るための戦力を整えなければならぬのだ。

「矢車、影山、今すぐ部隊を率いて迎撃に向かってくれ」

「分かりました」

「はいっ！」

二人はすぐさまその場を後にして部隊の下へ向かい、大和も司令室へと足を運んだ。

エリアB・特殊遊撃隊戦闘地域

ワームとの戦闘中に本部から連絡を受けた時、ヘラクスに変身していた織田は面食らった。

「あぁっ?! 本部にワームが攻めて来ただ!？」

「ええ、本部はすぐに戻って来いって言うてきてます」

「んなこと言ったって、この状況でどうやって戻れってんだよ!？」

今現在織田の部隊は多数のワームの集団に釘付けにされており、まるで身動きできない状態であった。恐らく本部攻撃に連動して、出払っている部隊を戻さない為にしようと言う考えなのだろう。

織田のヘラクスも必死にワームを始末しようとするが、かなり本気で足止めをするつもりなのか成虫体のワームまでがヘラクスを足止めしようと挑んでくる。

「隊長、大丈夫っスカ!？」

「だあ、畜生ッ！ とにかく急いで帰るぞ!！」

「織田あッ！ 帰るつつたつたってこいつ等……」

「全部ぶっ潰すんだよッ!？ 気合入れるお前らっ!！」

ヘラクスの怒声が響く中、周囲には無数の銃声と銃弾が飛び交うのだった。

エリアR・シャドウ第2番隊

一方、シャドウ第2番隊もワームとの戦闘で足止めを喰らっていた。

「くそ、状況はどうなってるッ!？」

ザビーは本部から呼び出されたにもかかわらず一向に後退できない状況に焦りを見せながら戸高に現状を訊ねた。

「一言で言ってしまうえば完全に釘付けにされています。連中、上手

い具合に障害物を盾にしてこちらの銃撃を防いでいるので、効果的な打撃が与えられません」

「チツ！」

戸高の報告にザビーは舌打ちする。この場所は稼働停止した古い工場で、内部には放置された機材が視界や射線を遮って銃撃がメインの彼らでは上手い具合に有効打が与えられない。それでも接近を許さない辺り流石シャドウと言った所だが、遅々として戦況が変化しなければいずれはじり貧になってしまう。

それでもザビーには時間を掛けつつワームとの戦いを終わらせる作戦が無い訳ではなかった。と言うか通信が入る直前まではそれで何とかしようと考えていたほどである。だがそれも本部からの緊急の撤収命令によってそうはいかなくなつた。

こうなつた以上時間は掛けていられない。出来ればザビーで突撃して一気にワームを殲滅して、そのまま即座に本部に戻りたいのだが、  
・・・

(くそ、この感覚・・・嫌な感じだ、また来そうだな・・・)

自身の中で燻ぶる言いよの無い感覚に、久賀達は仮面の奥で顔を顰めた。言葉で口にする事は出来ないが確かに感じるこの感覚、彼女は本能的にそれが暴走の可能性を示唆しているモノである事を見抜く。何が原因で暴走が起るのか分からない以上、下手に刺激を受けない為にも積極的の前に出る事を避けて来たザビーだが、時間を掛けてしまえばそれはそれで暴走を引き起こす可能性があつた。

(一か八か・・・賭けに出るか！)

ザビーは思い切って勝負に出た。どの道このような閉鎖された空間ではチームワームを発揮するには適さない。ならばいつその事、ザビーで一気にケリを付けてしまえばいい、その為の装備はあるのだ。

「クロックアップ！」

《Clock up》

クロックアップしたザビーが一気にワーム達に肉薄する。幸いこの場に成虫体は存在していないので、邪魔が入ることはあり得ない。さつさと戦いを終わらせる為、ザビーは左腕のゼクターに手を伸ばした。

「ライダーステイング！」

《Rider Stinging》

「はっ！！」

銃弾が周囲に浮かび上がった空間で、動きの鈍いサナギ体ワームにザビーの毒針が次々と突き刺さっていく。クロックアップの限界時間ぎりぎりまで粘った甲斐あって、クロックオーバーする頃には全てのサナギ体ワームが殲滅されていた。

《Clock over》

「よし、何とかなつた・・・か「隊長ツ?!」ツ!!?」

全てのワームを倒し終えて一息つくザビー。暴走する事もなく、最悪の事態は免れたと思ったその時である。唐突の葛西の声にハッと なった次の瞬間、ザビーは真上から降ってくる成虫体ワーム・・・タランテスワーム・パープラ・・・の存在に気付く。

(しまっ・・・!?)



咄嗟に回避しようとするが、体の動きが追いつかない。ワームの手に生えた鋭い爪がザビーに振り下ろされ、彼女が切り裂かれそうになる。

刹那……ザビーの目が真紅に染まった。

「ッ!」

そこからは一瞬の出来事であった。ザビーは必要最小限の動きでワームの攻撃を避けながら、再びゼクターに手を伸ばしライダースティングを発動、空振りしたワームの腹部にカウンターで必殺技を叩き込んだ。

「……ッ!?!?」

ワームの方も決まったと思っていたからか、このカウンターに苦痛と困惑の混じり合った声を上げる。だがそれも一瞬の事で、次の瞬間にはワームは白い炎を上げて消し飛んでしまった。

そしてワームが居なくなるや、ザビーの目は何時もの暗い色を取り戻しザビーゼクターも用は済んだとばかりにブレスレットから離れて何処かへ行ってしまった。

「あっ……はっ……はっ……」

変身が解除されて一瞬間を置いてから我に返った久賀達。そして彼女は今しがた自分の身に起こった事を思い返して戦慄した。

（今のは……暴走ッ!? でも一瞬だけだった。ワームが居な

くなつたからか？」

「隊長、大丈夫ですか？」

「ん？ あ、ああ・・・何とかな」

先程の現象は間違いなく暴走のそれである。しかし今回は今までほど派手な行動は起こさないうで済んだ。それはある意味で喜ばしい事であつたのだが、妙に大人しい暴走具合だつた事に久賀達は不気味さを感じていた。

が、なにはともあれこうしてワームは殲滅できた訳である。ならば彼女達が次に起こすべき行動は、たつた一つ・・・

「…………よし、戸高。すぐに部隊の連中を集めて本部に戻るぞ」

「ハッ！」

神代邸

正体がバレた次の日、神代は特に何をするでもなく椅子に腰かけていた。ただしその足元では、サソードゼクターが何かを急かす様に彼の足を突いている。

「ワームが出たか・・・じいや、行つてくる」

「坊ちやま・・・」

いつもと変わらずにワーム討伐に向かおうとする神代。そんな彼をじいやは悲しそうな眼で見つめていた。何しろ彼の正体は昨日の時点でバレている。そんな彼がZECTの前に姿を現すような真似をすれば、どうなるかなど考えるまでもない。

それでも彼は神代を止める様な事はしない。止めて言う事を聞いてくれるような人物でもないし、止める訳にはいかなかった。何しろ全てのワームを倒す事、それこそが神代 剣の目的なのだから。

「坊ちやま、お気をつけて行ってらっしゃいませ。じいやは坊ちやまのお帰りを、お待ちしております故・・・」

「ああ、分かっている」

だから彼も、いつも通り神代を送り出す。彼がいつも通り気持ちよく出かけられるように。

そして……………彼がいつも通り帰って来てくれるように……………

## 第62話 奇襲・ワームの逆襲（後書き）

という訳で第62話でした。

原作とは異なりワームがZECT本部を直接攻撃してきました。ここ最近の攻撃は陽動で、本当の目的は本部への直接攻撃だったという訳ですね。運悪くほとんどの部隊を出払っていた為に、本部は手薄で実質呼び戻しておいた矢車と影山の部隊しか頼りにできない状況に。やっというてなんですけど、この作品だとZECTが後手後手ですね（^^;）。皮肉にも明確に指示を出す人物が居る状況で後手に回ると言う・・・そう言えば原作だと誰が指示を出してるんですかね？ やっぱ総帥の陸ですかね？ でもまあ矢車と影山の部隊を呼び戻しておいた辺り、大和も確かな目は持っている筈です。

次回の更新もお楽しみに。それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0300/>

---

仮面ライダーカブト 狂気宿す蜂

2011年10月30日02時09分発行